

百濟仏教寺院の特性形成と周辺国家に及ぼした影響

―瓦当・塑像・伽藍配置を中心に―

李炳鎬

目次

序論	1
一 問題の設定と研究の方法	1
（一）研究動向と問題点	2
（二）研究方法と観点	8
二 本文の構成	10
第一部 百濟式寺院の成立と展開	20
第一章 百濟の仏教受容と初期寺院	21
はじめに	21
第一節 漢城期百濟の仏教受容	21
（一）枕流王代の仏教受容と仏寺の建立	21
（二）漢城期の仏教関連資料	27
第二節 熊津期の瓦当と寺院	33
まとめ	39
第二章 泗泚遷都と百濟式寺院の成立―定林寺址―	51

はじめに	5
第一節 定林寺址出土塑像と伽藍配置の特徴	5
(一) 塑像の奉安場所と製作時期・系統	3
(二) 定林寺式伽藍配置の成立	5
第二節 都城におけるランドマークとしての定林寺址	2
(一) 定林寺址の創建目的とその背景	2
(二) 泗泚都城内における定林寺址の位相	8
まとめ	9
<b>第三章 祠廟から陵寺へ―陵山里寺址―</b>	<b>1</b>
はじめに	1
第一節 陵山里出土木簡の性格	1
(一) 木簡の出土状況と出土位置	1
(二) 排水施設と主要建物の整備過程	1
(三) 木簡の廃棄時期と性格	2
(四) 二〇〇二―一四号四面木簡の分析	3
第二節 陵山里寺址出土瓦当の分類と需給体系	3
(一) 出土瓦当の再検討	3
(二) 出土瓦当の型式分類	4

(三) 出土瓦当の相对編年と需給体系	1	4	8
第三節 陵山里寺址の伽藍中心部の変遷とその意味	1	5	6
(一) 瓦当の分布様相と建物の建立順序	1	5	6
(二) 初期建物址群の性格	1	6	2
(三) 寺院の変遷過程とその意義	1	7	1
まとめ	1	7	5
<b>第四章 泗泚期における百濟寺院の諸相</b>	2	0	3
はじめに	2	0	3
第一節 定林寺式伽藍配置の展開過程	2	0	3
(一) 主要寺院の伽藍配置に関する調査内容	2	0	3
(二) 定林寺式伽藍配置の変遷	2	1	4
第二節 泗泚期塑像の展開過程	2	2	1
(一) 塑像の出土状況	2	2	1
(二) 塑像の変遷と特徴	2	3	1
(三) 周辺国家の塑像との関係	2	4	0
まとめ	2	4	4



第二部 百濟寺院が周辺国家に及ぼした影響	260
第五章 新羅の初期寺院に見える百濟の影響	261
はじめに	261
第一節 伝興輪寺址出土瓦の分析	264
(一) 出土瓦の型式分類	264
(二) 相對編年と創建瓦の設定	269
第二節 百濟系造瓦術の導入過程とその意義	274
(一) 百濟系造瓦術の導入過程	274
(二) 百濟系技術導入の意義	279
まとめ	285
第六章 百濟寺院が日本の初期寺院に及ぼした影響	299
はじめに	299
第一節 飛鳥寺三金堂と日本の初期寺院の源流	304
(一) 六世紀代百濟における高句麗系文化	304
(二) 百濟寺院の新要素と出現背景	308
(三) 百濟寺院と飛鳥寺の三金堂	318
(四) 四天王寺式伽藍配置の成立	327

第二節 飛鳥寺に派遣された瓦博士の性格	332
(一) 泗泚遷都以後の百済の寺院と王宮の瓦当	332
(二) 飛鳥寺創建瓦と百済の瓦博士	343
まとめ	348
結論	371
補論 植民地期の百済故地に対する古蹟調査	383
付録 扶余陵山里寺址出土瓦当の型式別出土位置	416
参考文献	426
図面・図版	460

表の目次

表二―一	百済泗泚期における塑像の出土遺跡と出土品
表三―一	扶余陵山里木簡の現況と出土位置
表三―二	金鍾萬の型式分類案と年代観
表三―三	陵山里寺址出土補修用瓦当の建物址別分布様相
表三―四	陵山里寺址における瓦当の出土位置と数量
表七―一	第一期の古蹟調査の内容と活動
表七―二	第二期の古蹟調査の内容と活動
表七―三	第三期の古蹟調査の内容と活動
表七―四	第四期の古蹟調査の内容と活動

## 序論

### 一．問題の設定と研究の方法

インドに起源をもつ仏教は、中国へ伝来した後、儒教や道教などの中国思想を摂取し、また東アジア最大の先進文明である中国の漢字、絵画、彫刻、工芸、建築、土木、鑄造技術などと融合し、インド仏教とは異なる独自の中国的変容をとげる。このような中国の仏教は一つの大きな文明であった。したがって、古代韓半島の国々と日本が中国の仏教を導入することは、当時の東アジアの先進文明を受容することを意味した<sup>1)</sup>。しかし、中国の先進文化は自然に周辺国家へと拡散したのではなく、周辺国家の置かれた状況と必要性によって選択的に、また形を変えて受容された<sup>2)</sup>。仏教という新たな思想体系とそれに随伴した多様な技術文明の拡散過程はさらにそのような変化を見せるであろう。

本稿では古代東アジアの仏教伝播過程において一つの基軸となった百済を中心にして、特に仏教寺院の成立と展開過程、その文化系統に対する検討を通じて、百済的な仏教寺院の特性を抽出し、そのような百済的仏教寺院の造営技術の伝播過程を把握する。四世紀後半に仏教を受容した百済では、六世紀になると本格的な寺院が建立され、仏教教学に関する研究が本格化するなど仏教が急速に発展する。六世紀前半と後半にそれぞれ仏教を公認した新羅と日本では、その後仏教が急速に普及し、社会思潮の主流となった。このような六世紀代の東アジアをめぐる仏教の拡散過程において、中国南朝、特に梁武帝の役割は非常に重要である<sup>3)</sup>。熊津期末と泗泚期初に百済は梁武帝との交流を通して国家を発展させたが、その過程において仏教は重要な媒介として機能した。六世紀代、百済が積極的に新羅や日本へ仏教を紹介したり公伝したことは高度の思想体系を持った宗教としての仏教を伝達しただけに止まらない。梁武帝の歓心を買うための外交上の戦略として「仏教的朝貢」という側面を有していたという指摘は、そのような点で吟味する必要がある<sup>4)</sup>。

しかし、百済では武寧王代と聖王代に梁武帝の支援と協力のもと積極的に文物を輸入するなど緊密な関係を維持しながら、政治的安定

と文化的発展を成し遂げた。さらに百済は習得した先進文物を周辺の新羅や日本との外交関係を強化し、彼らの協力を引き出すための資産として活用した。この点で六〜七世紀代の新羅と日本の仏教受容および定着過程において百済が果たした主体的役割は非常に重要であり、百済的な仏教文化を周辺国家に伝えたという側面から再検討する必要がある<sup>5)</sup>。なぜならば、百済は単に中国文化の伝達者や経由地ではなく、新羅や日本の初期寺院を建設するうえで技術者を派遣して支援するなど東アジア仏教文化の拡散を実質的に主導していたためである。

## (一) 研究動向と問題点

百済の仏教や仏教寺院に関する研究は、発掘調査の進展や研究動向から大きく四つの時期に区分できる。その中で第一期は植民地期に日本人研究者によって百済故地の廃寺址に関する地表調査や発掘が初めて行われた時期、第二期は一九四五年から一九七〇年代後半まで韓国研究者を中心に地表調査や部分的な発掘が行われたものの若干沈滞した時期、第三期は一九七〇年代末から一九九〇年代初期に該当し、扶余や公州、益山地域の廃寺址に関する広範囲な調査が行われた時期、第四期は一九九〇年代中半から現在に該当し、扶余と益山地域の廃寺址発掘で以前に発掘された廃寺址の再発掘が行われるとともに研究が本格化した時期である。各段階別の主な研究成果と問題点を提示すると次のとおりである。

第一期は植民地期に扶余と益山地域に対する廃寺址の地表調査と発掘調査が行われた時期である。百済故地に対する古蹟調査活動は一九〇九年から一九一五年まで行われた関野貞一行の古蹟調査を嚆矢とする(本稿の補論参照)。初期には百済の都城址に比定されるソウル(当時は広州郡)・扶余・公州・益山などに対する地表調査が中心で、そのなかでも特に古墳に対する関心が高かった。このような古蹟調査事業を主導した関野貞はその後「飛鳥寺・法隆寺などの境内より朝鮮の扶余より出土せる者と形式手法全く一致せる者を発見」したとし、百済と日本の初期瓦の関係を初めて指摘した<sup>6)</sup>。この時期には、朝鮮総督府の古蹟調査活動とは別途に藤島亥治郎が、益山弥勒寺址の地表調査を実施し、西塔院と東塔院の後方に大規模な伽藍(中塔院)が位置する品字形伽藍配置案を提示している<sup>7)</sup>。

その後、石田茂作たちは朝鮮古蹟研究会の財政的な支援を受けて一九三五年から扶余軍守里寺址・外里寺址・東南里寺址など扶余地域のおもな廃寺址の本格的な発掘を実施する。扶余軍守里寺址の調査は韓半島の「廃寺址」に対する最初の発掘調査であり、それ以前の慶州や平壤の「古墳」を中心にした発掘とは若干性格を異にする。調査の結果、百済の伽藍配置が日本の四天王寺式伽藍配置と一致する点と、出土遺物が飛鳥文化と直接関連する点が確認されたことは、大きな成果であった<sup>8)</sup>。しかし、扶余地域の廃寺址に対する発掘は、当時日本の学界における関心事であった飛鳥文化の源流に関する解明や「法隆寺再建非再建」論争を解決するための手段になり、扶余と飛鳥、両地域の寺院の共通性のみが過度に強調されたため、朝鮮総督府の植民地支配の論理を正当化するという問題を有している(本稿の補論参照のこと)。

一方、関野貞をはじめとする日本の官学者は飛鳥―百済―梁の交渉に注目しながらも百済において内在化した南朝の文化が日本に伝えられたのではなく、南朝の文化が百済を経由してそのまま日本に伝えられたものと理解した<sup>9)</sup>。当時、扶余地域の古蹟調査に直接参加した藤澤一夫は、戦後飛鳥時代の瓦当が南梁百済様式、高句麗百済様式という二つの系統からなるとし、百済様式自体も中国南梁や高句麗との文化交流の中で成立したという見解を提示した<sup>10)</sup>。百済の仏教文化を東アジア交流史の中で把握しようと試みた点で評価できるが、百済文化の実体を否定し、飛鳥文化が南朝文化を直接受容して形成されたかのように誤解する恐れがある。このように植民地期の扶余地域に対する廃寺址の調査や出土遺物に関する研究はあくまでも他者の視角から実施されたため問題があると言える。

第二期は一九四五年から一九七〇年代後半までで、百済の廃寺址に関する小規模発掘やそれまで知られていなかった遺物が紹介される時期である。特に一九五〇年代末の瑞山磨崖三尊仏像と泰安磨崖三尊仏像の発見、一九六四年の扶余恩山金剛寺址と扶余臨江寺址の発掘そして一九七〇年代の公州西穴寺址と益山弥勒寺址東塔址、保寧聖住寺址の発掘調査が注目に値する<sup>11)</sup>。一九七〇年代までの百済寺院址に関する調査内容は秦弘燮と金正基、大川清、北野耕平などにより整理されているが、植民地期に発掘されたものの、それまで知られていなかった百済寺院に対する調査内容も藤澤一夫によってこの時初めて公刊された<sup>12)</sup>。

秦弘燮は百済寺院が山の中腹の傾斜面に石窟を伴って建立された寺院、平地に南北あるいは東西を主軸とする一塔式伽藍の寺院、南北

を主軸に伽藍を配置するものの塔を建立しない寺院の三形式に区分できるとした。百済寺院の中で石窟を伴う寺院が建立されたと考えたのは、公州西穴寺址など公州地域の「穴寺」という名前を持つ寺院址が念頭にあったためである。しかし、公州地域でこれまで百済の廃寺址として知られた遺跡では少数の地表収集品以外に、百済のものと考えられる遺物が発掘によって発見されておらず、統一新羅時代に造営された寺刹と見なければならぬという見解がある<sup>13</sup>。また藤島亥治郎以来、韓国の学界で踏襲されていた堂塔中心の配置形式論から抜け出すことが出来なかつた限界がある。ただし、堂塔の配置形式論の立場から古代寺院遺跡を整理し、軍守里寺址や定林寺址のように講堂の左右に別途の建物址があるのは百済寺院の変形ではないかという金正基の指摘<sup>14</sup>は、その性格をめぐってさまざまな議論が繰り返り広げられているという近年の斯界の状況を鑑みれば、極めて先駆的な見解といえよう。

北野耕平は、一九七〇年代まで知られていた扶余・公州・益山地域の寺院はもちろん百済時代の仏像や蓮華文瓦当が收拾された地域まで含めて全五四箇所の寺院址の分布図を作成し、百済寺院址の分布と立地的な特性を整理した。彼は扶余とその周辺の寺院址を三個群に分類し、地方の寺院は重要な交通路上に立地しており、百済中央の影響力が次第に地方に拡大する過程を物語っていると見た。このような見解は堂塔を中心にした配置形式論を越えて、古代寺院の立地や景観に基づいてその性格を理解しようとした点で重要な意義がある。しかし、百済故地の廃寺址をすべて百済当時のものと把握した点に研究の限界がある。ただし、これは当時の研究資料が抱えていた根本的な問題でもある。

一方、この時期には百済地域で出土した瓦当を集大成して分類を試みた作業<sup>15</sup>と、扶余佳塔里出土一光三尊仏や益山蓮洞里石造如来坐像などに関する図像分析も行われている<sup>16</sup>。その他に一九七一年公州武寧王陵から出土した王妃の頭枕表面に描写された図像が南朝系の天人誕生図に該当するため、少なくとも武寧王陵を築造する段階には南朝で創案された仏教図像が直接百済に伝えられたという重要な研究が発表されている<sup>17</sup>。

第三期は、一九七〇年代末から一九九〇年代初半までに扶余や公州、益山地域に関する発掘調査が急増して、新たな資料が確保された時期である。慶州地域の主要古墳と寺院の整備事業の影響を受けて一九七〇年代後半にはソウル・公州・扶余・益山地域に対する百済文

化圏開發事業が立案され<sup>18</sup>、百済の古都に関する発掘が本格的に実施された。この時期には一九七九年、扶余定林寺址を皮切りに扶蘇山城と官北里推定王宮址、扶蘇山廢寺址や公州の公山城、益山の弥勒寺址、王宮里遺跡などの長期におよぶ発掘が始まった。

このうち益山弥勒寺址と扶余定林寺址の発掘は最も重要な成果の一つである。これを契機にして益山弥勒寺址の三院並列式伽藍配置が初めて明らかになり、扶余定林寺址についても伽藍配置や出土遺物に関する多くの新たな情報が得られた<sup>19</sup>。ところで、当時の学界では異例なことであるが、発掘調査の結果に関する論争が起きた。それは弥勒寺址石塔と定林寺址石塔の時期的な前後問題に関するものである。一九七九年から定林寺址の発掘を担当した尹武炳は定林寺址五層石塔の基壇部に対する調査に基づいて、ここに創建期から石塔が立てられていたと主張した<sup>20</sup>。これに対して建築史家である金正基は、弥勒寺址石塔が定林寺址石塔より木塔の様式に忠実に沿っており、特に石塔の基壇部に見られる版築土層の存在はここに本来木塔があったということを示すことができなかつた。その後、韓国の学界では研究者ごとに多様な見解が披瀝されたが明確な結論を出すことはできなかつた。

最近、筆者はここから出土した塑像が創建期の木塔に奉安された塔内塑像と考えられるという新見解を提起した(本稿第二章第一節)<sup>22</sup>。これはそれまでの論争が、石塔自体の様式的な問題に終始し、同遺跡から出土した共伴遺物を等閑視し、遺跡全体でこの問題を考究することがなかつた点に反省を逼つたものであった。この時期には扶余扶蘇山廢寺址をはじめとして礼山四面石仏とその周辺遺跡、井邑普化里石仏立像と周辺遺跡、扶余錦城山瓦積基壇建物址、龍井里寺址、旧衙里寺址、保寧聖住寺址、青陽本義里陶製仏像台座、扶余亭岩里窯址などに対する発掘調査が持続的に実施され、百済の仏教寺院やそれと関連した資料が多数確認された<sup>23</sup>。しかし、このような新資料の増加にもかかわらず、この時期の百済寺院に関する注目すべき研究成果はさほど見られない。これは発掘報告書が刊行される以前には重要な発掘成果を学術大会で発表したり学術誌に掲載したりするが、本報告書の刊行後にそれ以上の再検討を行わない韓国学界の特異な風土と関連するのもかも知れない。いずれにせよ、この時期に発掘された遺跡は現段階の百済寺院や関連遺物を研究する際重要な分析対象なのであり、それらもふまえて巨視的な観点から検討する必要があるだろう。

このうち国立扶余博物館などに収集・保管されている百済の瓦当を集大成し瓦当の型式分類と相對編年、製作技法などを明らかにした



亀田修一の研究と、平瓦・丸瓦の文様ならびに銘文の内容、製作技法などを通史的に整理した徐五善の研究が発表され、その後この分野における重要な指標となった<sup>24</sup>。また、仏教彫刻の分野では扶余地域で多数発見された捧宝珠菩薩像の画像研究を通して南朝―百濟―日本の仏教文化の伝播過程を解明しようとした論考と半跏思惟像などに関する研究も注視する必要があるだろう<sup>25</sup>。

第四期は一九九〇年代半ばから現在に該当し、扶余陵山里寺址の発掘が重要な転換点となった。扶余陵山里寺址の調査は本来陵山里古墳群の駐車場を建設するための行政発掘であったが、ここで出土した百濟金銅大香炉や昌王銘石造舍利龕、木簡などの遺物は百濟仏教に関する既存の認識を改める重要な契機となった。その後、国立扶余文化財研究所の調査は、既存の城郭や古墳中心の発掘から次第に都城や寺院に対する発掘へと方向転換するようになった。この時期に調査された代表的な遺跡としては扶余官北里推定王宮址をはじめとして陵山里寺址、東南里寺址、軍守里寺址、定林寺址、王興寺址と益山王宮里遺跡、弥勒寺址、帝釈寺址などがあげられる<sup>26</sup>。特に最近発掘された王興寺址と弥勒寺址の舍利器は、これまでわずかな文献史料によってのみその存在が知られ、詳細が不明であった百濟仏教文化の優秀性を実際の遺物・遺跡を通して明らかにし、一般人だけでなく国内外の学界の意識を改める重要な契機となった。

これによって多様な分野で百濟仏教や寺院を再検証する作業が進められている。その中でも考古学や建築史分野では研究テーマが、建築基壇や礎石、建築道具、造営技術など拡大・深化している<sup>27</sup>。特に扶余定林寺址の再発掘を契機に既存の堂塔を主とした伽藍配置論から、次第に寺院の附属施設や空間構成についても関心が寄せられるようになった<sup>28</sup>。しかし、植民地期に調査された遺構図面や出土遺物が全く公開されていない状態で、新たに発掘された資料のみに依拠して自身の論旨を展開していることは非常に憂慮すべきである。定林寺址や軍守里寺址など扶余地域の重要寺院は植民地期にすでに発掘された遺跡であるため現在、国立博物館や日本の様々な機関に散在する遺物や関連情報を総合的に収集し整理する必要があるだろう。

美術史の分野では、近年の発掘調査で出土した扶余官北里金銅光背や双北里金銅菩薩立像の製作時期や系統に関する研究がある<sup>29</sup>。しかし、百濟仏像の数がきわめて少なく、国籍もまた明確ではないため、様式や系統、編年さえ依然として容易ではないのが実状である。陵山里寺址や王興寺址の木塔址から出土した舍利器と金属工芸品、また益山弥勒寺址西石塔から発見された舍利奉安記をはじめとする

華麗な金属工芸品、そして益山王宮里遺跡の工房遺跡から出土した多様な工房廃棄物は金属工芸やガラスなどの研究の活力源となっている<sup>300</sup>。しかし、これまでの金属工芸品に関する研究が、出土品自体に対する現状把握や銘文の釈読と解釈、舍利の安置方式などに限定されていた嫌いがあるのは否めない。古墳や工房出土遺物との比較、瓦当をはじめとする共伴遺物との関係、中国や日本との比較研究など、もう少し巨視的かつ総合的な検討が行わなければならないだろう。

百済の仏教思想や信仰に関する研究も深化した。百済の仏教信仰において重要な法華信仰と弥勒信仰、観音信仰などに対する研究とともに仏教と政治的動向についても研究が進められている<sup>301</sup>。最近では聖王代から武王代にいたる時期の仏教教学思想と弥勒信仰の検討を通して梁の仏教学の主流の流れであった成実涅槃学が百済後期仏教学の基礎をなし、五七〇年頃中国に留学した玄光によって慧思の弥勒信仰が受容されるとともにより一層活発になり、七世紀に再び三論学が受容され、弥勒信仰を三論学の立場から哲学的に解釈しようとする流れがあらわれ、三論学と弥勒信仰が結合した百済の独特な弥勒思想を形成するようになったという指摘もある<sup>302</sup>。特に『大乘四論玄義記』という三論学の文献が、七世紀初め頃に百済で撰述されたものと確認され、これを通じて三論学をはじめとする当時の百済仏教界の教学の状況もある程度の理解できるようになった<sup>303</sup>。しかし、問題は、仏教思想や信仰が、新たに発見された発掘成果や出土遺物といかなる関連性を持つのかである。この点についても今後より積極的に解析する必要があるだろう。

最近では百済泗泚期の瓦当だけでなく平瓦に関する研究も相当進展した。それによって瓦当の文様だけでなく製作技法に関する研究、同范品の推定を通じた生産と流通の問題、瓦製作の系統に関する問題、個別寺院の事例分析などに議論が拡大している<sup>304</sup>。その中で清水昭博は公州大通寺址から出土した瓦当の文様と製作技法に注目し、それが南朝に淵源をもち、泗泚期初半と日本最初の寺院である飛鳥寺の星組系統の瓦当の源流となったことを論証し、さらに百済の造瓦技術だけでなく瓦生産体制までも日本に影響を及ぼしたことを明らかにするなどこの分野の研究を一層深化させた<sup>305</sup>。こうした研究は韓国の学界にも影響を与え、扶余地域のどの遺跡で製作・使用された瓦が飛鳥寺創建瓦の源流に該当するのかわかるということも注視されるようになった<sup>306</sup>。しかし、このような視角は日本における初期寺院の造瓦術の源流や系統を明らかにする点では重要であるが、そういう造瓦術の伝播が百済社会内部においていかなる意味を持つのか

ては関心の対象外であった。飛鳥寺の創建瓦の出現過程を、百済地域の瓦の展開過程の中に位置づけながら考究する視角が共に必要となるであろう。

## (二) 研究方法と観点

植民地期の日本人研究者によって触発された百済寺院に関する研究は一九四五年以後しばらく沈滞期を経て、一九九〇年代に発掘調査が増加したことにより再度活発になっている。その重要な背景には扶余陵山里寺址をはじめとする、王興寺址や益山弥勒寺址などの廃寺址に対する発掘が重要な転機となったことは間違いないだろう。一九三〇年代に扶余軍守里寺址の発掘を通して扶余地域の廃寺址が世間の耳目を集めたことも同様である。考古学的発掘による新資料がこの分野の研究を推進させる起爆剤となったのである。

したがって本稿では一次的に発掘調査を通して新たに知られた遺構や遺物にまず注目したい。しかし、廃寺址に対する発掘調査の内容は考古学的な視角や方法論のみでは解決できない。なぜなら古代東アジア仏教寺院に関する研究は、仏教の教理や思想の伝播に伴う多様な人的・物的資源の交流を含むので、歴史学や建築史、美術史、仏教史など多方面の協力なしでは不可能だからである。これに対し、本稿では百済寺院の特性やその影響を如実に示すと考えられる素材を選んでこれをより積極的に利用して新たな歴史資料として活用し、これを百済寺院や百済史のなかに位置づけ考究した。

既存の古代寺院研究では、具体的な資料や根拠を提示しないまま研究されてきた傾向がある。したがって本稿では学問的パラダイムによって分析する素材が制限されるという先入観を排除し、これまでさほど注目されることがなかった遺物や遺跡と遺物の関係、遺跡相互間の関係などをより一層重要視している。例えば、美術史研究でこれまで度外視されてきた破片となり形態さえ分からない塑像についてその製作技法を再検討し、他の遺跡の事例と比較してそれらが奉安された場所を推定した。また、判読問題のみにこだわって来た木簡とといった文字資料についても、それが発見された出土した状況を重視した。木簡の記載内容のみならず共に出土した遺物の様相や遺跡全体の状況を総合的に考慮する。特にこれまで文様の型式分類にのみ拘泥していた瓦当について製作技法や建物址ごとの分布様相、需給関係、

系統関係などに注目し、新たな歴史資料としての活用の可能性を摸索した。

それと共に百済寺院の伽藍配置についても東アジア各国の資料を幅広く活用して寺院の景観や各建物の機能についても新たに再検討してみた。都城の内外部に散在する重要な寺院は、国王が居住する都城を荘厳する重要な施設物の一つであったため、都城プランや景観という側面から注目する必要がある。大型高塚古墳の消滅と仏教寺院の始まりを同等に考える訳にはいかないが<sup>37</sup>、両者が一定期間共存し次第に寺院が古墳の代わりをなす象徴となっていくことは東アジア三国ではほぼ共通した流れである<sup>38</sup>。したがって、寺院建築の部材である瓦を分析しつつ、それが葺かれた建物の建立順序や各建物の性格、そのような寺院が都城内で占める位相や象徴性についても注目した。国王が居住する都城で瓦葺きの大形建物が整然と配置された寺院は王宮や官庁とともに王権を象徴する最も重要な記念碑的施設物の一つであったためである。

百済仏教寺院の展開過程や特性を把握することは、東アジアの文化交流史という大きな流れの中で十分に照明できる。したがって、百済仏教の受容や展開、新たな文化要素の登場、その伝播過程について中国のみならず高句麗や新羅、日本の比較資料を積極的に活用した。9  
ただし、仏教や仏教寺院の交流というものが単純な「モノ」の移動でなく「ヒト」や「情報」の移動を伴い、かつ互恵的であるため、それを授受する人々の政治的な立場や技術的な水準の差異によって受容過程に変化が生じる点にも注意した。

本稿では公州大通寺址や扶余定林寺址、陵山里寺址といった事例分析を重要視し、新羅の興輪寺や日本の飛鳥寺などの初期の寺院に、具体的にいかなる技術的な要素が百済から伝授されたかを探索する。ただし、百済のいかなる技術が周辺国家の寺院にどのように反映されるのかという側面に注目したのみならず、そのような技術の伝授が可能であった百済社会内部の問題にも注目している。つまり、百済の仏教寺院が周辺国家に与えた影響に論及しながらも、それが百済史や百済仏教寺院史のなかでどのように理解できるのかどうかを重要視したのである。寺院の造営は古墳の築造とは異なり、各部門別の技術の相互依存度や提携度が高い。そのため、造営の技術を伝授するためには百済社会内部でそれに関する技術が成熟していなければならず、組織的にかつ体系化されていなければならない<sup>39</sup>。そのため、百済から新羅や日本に寺院造営技術を伝授する過程を検討するのみならず百済内部の官営工房システムや中央行政組織の整備過程の

問題も共に検討した。

本稿では古代寺院に関する文献史料だけでなく発掘を通して出土した資料もあわせて分析し、百済仏教寺院の展開過程における百済的な寺院の特性と形成、そしてそれが周辺国家に与えた影響について検討する。時期的には百済で最初に仏教が受容された漢城期から百済滅亡期までを検討の対象としているが、五三八年の泗泚遷都を前後に展開した仏教寺院の様相とその後の変化の過程を中心に考察する。六世紀代の東アジア地域における仏教拡散過程で百済は非常に重要な役割を担った。本稿では百済の仏教寺院の展開過程に対する検討を通して、百済寺院の特性を把握し、それが新羅や日本など周辺国家にどのように波及したかを推定することによって、その役割と位相を照明することに最も重要な目的がある。つまり、南朝と百済、百済と新羅、百済と日本という仏教文化の伝播ルートやパターンを歴史考古学的な観点から新たに眺望しつつ、その中で百済寺院の内在的な発展過程や固有の特性を見出し、百済の主導的な役割を示していく。このような議論を通して、古代東アジアの対外交渉において百済が有した位相と百済の対外交渉において仏教が果たした役割についてもある程度説明することができるだろう。

## 二．本文の構成

本稿は二部六章と、補論からなる。

第一部では漢城期の仏教受容から百済滅亡期までの百済寺院の展開過程を検討し、百済的な仏教寺院の特性の形成過程を整理する。

第一章では漢城期と熊津期の仏教受容過程と仏教関連遺物を検討し初期寺院の様子を明らかにする。第一節では漢城期の仏教受容関連の文献史料と仏教関連遺物を検討し、漢城期の仏教伝来説が史実を反映したものであることを指摘する。第二節では寺院の重要な建築部材の一つである瓦当の分析を通して、熊津期の寺院の諸相を明らかにし、その系統問題を検討した。百済の本格的な伽藍といえる大通寺の建設を通じて製作したいわゆる大通寺式瓦当は、梁の影響を受けて成立し、泗泚遷都（五三八年）以後最も重要な範型となる。このような大通寺式瓦当の成立には百済の官营造瓦工場の成立過程という問題も関連していることを共に検討した。

第二章では泗泚都城の中心部に建立された定林寺址から出土した遺物と伽藍配置の特徴を分析し、百濟式寺院の成立過程と泗泚都城において定林寺址が持つ位相を考察した。第一節ではそこから出土した多量の塑像について、塑像自体に対する分析のみならず、共伴遺物や文献記録、他国の類似事例との比較を通じて、製作技法と製作時期、奉安場所、系統の問題を考察した。また、近年の発掘調査を通して新たに分かった建物址の遺構配置状況を再検討した。その中でも泗泚遷都以後、最初に建立された定林寺址の伽藍配置が持つ特徴を明らかにし、百濟式寺院の成立過程を説明した。第二節では、泗泚都城内部で発見された道路遺跡の開設時期と木簡や文字瓦、地籍図などの分析を通して泗泚期の王宮区域を設定した後、泗泚期の王宮と定林寺址が非常に有機的な関係を持って意図的に配置された可能性があることを提示した。さらにそこから都城内の中心的な寺院として定林寺址の地位を再確認し、泗泚遷都以降、定林寺址が新都のランドマークとなったことを指摘した。

第三章では泗泚期の王陵群である扶余陵山里古墳群に接続して建立された陵山里寺址の性格について分析した。陵山里寺址の中門址南側では多量の木簡が出土したが、その性格については未だ定説に至っていない部分も少なくない。そこで、第一節では木簡の記載内容のみならず出土状況を再検討して陵山里木簡の使用および廃棄時点を把握し、その性格についても新たに検証した。これを通して陵山里木簡は北側にあった寺院の造営や運営と密接な関連を有したことを確認した。第二節と第三節では伽藍中心部から出土した五〇〇点余りの瓦当の型式分類と相對編年、分布様相を分析して主要建物の建立順序をより詳細に推定した。陵山里寺址の初期の段階では、講堂を中心にした初期建物址群が、若干木塔や金堂に先んじて建立される特異な現状を確認できる。このような伽藍中心部の変遷過程を第一節で分析した陵山里木簡の記載内容と関連づけると、初期の建物址群が機能した段階と木塔などが建立され寺院として機能した段階の性格が、若干異なる可能性がみえてくる。中国や高句麗の事例を参考にその性格や機能の問題についてもあわせて検討した。

第四章では泗泚遷都以後に展開した百濟寺院の様々な様相について伽藍配置と塑像を中心に検討した。第一節では泗泚遷都以後最初に造営された定林寺式伽藍配置が六世紀後半の軍守里寺址や王興寺址、七世紀前半の弥勒寺址を建立しつつ、具体的にどのようなように変化していったのかを把握し、変化の様相や影響関係について論じた。第二節では百濟故地の寺院や窠址で出土した塑像を集大成し、その製作技

法と奉安場所、技術系統を分析し、それが高句麗や新羅、日本で出土した塑像といかなる関連性を持つのかについて調べた。

第二部は百済の仏教寺院や技術が新羅や日本に与えた影響について検討した。

第五章では新羅最初の寺院である興輪寺址で出土した瓦を中心にそこに見られる百済の造瓦術の内容について検討した。新羅では六世紀前半に百済系造瓦術の影響を受けて瓦を生産したことが早くから指摘されてきたが、百済系造瓦術の段階別導入過程については適切な編年資料がなく不明確な点が多かった。そこで、興輪寺址から出土した瓦当や平瓦の分析を通してそれが南朝―百済系、特に熊津期の百済瓦が直接的なモデルというものを確認した。いわゆる興輪寺式瓦当と呼ばれるこの瓦は新羅の初期仏教受容過程において、これまで知られていなかった百済の影響を、実物から確認できたという点で一定の意義を持つものと思われる。

第六章では百済の仏教寺院や造瓦術が飛鳥寺をはじめとする日本の初期寺院に与えた影響について考察した。第一章では飛鳥寺三金堂の高句麗起源説を否定して百済起源説を提示した。六世紀代の百済では、多方面において高句麗系の文化要素が確認され、特に王陵群である陵山里古墳群には高句麗系の古墳壁画が残っている。このことから高句麗の寺院文化が日本の飛鳥寺に直接伝来したのではなく、百済を経由して、百済文化の一部として伝播した可能性を示唆する。六世紀中後半の軍守里寺址や王興寺址では回廊の外郭に新たな性格の建物を築造するなど、定林寺式伽藍配置というプロトタイプとは異なる新要素が確認されている。本稿では、そのような変化の出現背景として、中国の多院式寺院や高句麗寺院の影響に注目し、上記の分析と当時の文献記録を総合し、飛鳥寺の三金堂をはじめとした寺院の造営は百済において組織・派遣された臨時的なプロジェクトチームによって総合的に企画・実施された可能性を提起した。一方、日本の初期寺院は定林寺式伽藍配置と類似する四天王寺式伽藍配置をしているが、これまで知られていた四天王寺式伽藍配置と百済のそれとは、若干の違いがある。しかし、既存の発掘図面を再検討し、大阪の四天王寺や新堂廃寺の事例を通して、日本の四天王寺式伽藍配置も百済寺院の伽藍配置と非常に類似する形態であった可能性が高いことを指摘した。

第二節では飛鳥寺の創建瓦の製作のために百済から派遣された瓦博士の性格を検討した。飛鳥寺の創建瓦は花組系列と星組系列に大別されるが、従来の研究ではそのような范型が百済のどこに淵源を求めることができるのかが主な関心の対象であった。しかし、本稿では

百済泗泚期の瓦当を寺院から出土した瓦当と王宮区域から出土した瓦当に大別した後、その展開過程の違いを明らかにしようとした。泗泚期の瓦当は新しい寺院が創建される時に必ず新しい創建瓦を製作することが確認されているが、王宮の場合は特定文様の瓦当が持続的に使用されていることを確認できる。このような状況から飛鳥寺の花組や星組といった文様が選択された背景をある程度推定した。また、飛鳥寺に派遣された百済の瓦博士は王宮や寺院の瓦を供給した技術系官僚であり実務責任者として国家が組織したプロジェクトの一員ということもあわせて説明した。

補論では植民地期に行なわれた百済故地に対する古蹟調査事業の展開過程を論じた。百済寺院の研究は、植民地期に始まるが、重要な遺跡の大部分がこの時期に初めて発掘され、その後の研究に多大な影響を与えており、現在でもこの分野を研究する一次資料となっている。植民地期に百済故地で行われた古蹟調査事業は大きく四時期に区分できるが、このうち第四期の扶余軍守里寺址を嚆矢とする廢寺址調査が実施された背景に注目した。この時期に慶州や平壤の古墳を中心とした古蹟調査事業が扶余の廢寺址に対する調査に転換した背景として、飛鳥文化の源流の解明という日本学界の要求があったと考えられるが、このように百済寺院に対する他者化した視角(外在的課題意識)が戦後も続いていたことを批判的に検討した。

百済の仏教寺院は中国の南朝や北朝だけでなく高句麗の影響も受けており、百済はそれを日本だけでなく新羅にも伝授した。新羅では百済のみならず高句麗を通して仏教を積極的に受容していた。このように六世紀代の韓半島は「仏教」を媒介として一つの文化共同体が形成されていったといえる。高句麗と百済、新羅は政治・軍事的な対決構図の中でも多様な方面の文化交流を通して中国や日本とは異なるアイデンティティを確立していった。その過程で仏教や仏教寺院は思想体系だけでなく、技術文明の共有という側面でも大きく寄与したといえる<sup>40</sup>。さらに百済滅亡後には大多数の住民たちが統一新羅の体制内に吸収されて統一新羅の文化を形成するのに貢献した。したがって、百済の仏教寺院の研究は東アジアの交流史という側面だけでなく、それ自体が韓国古代史の研究においても重要な意義を持つ。

日本の初期寺院は百済寺院と密接に関わりながら展開し、この分野の研究は植民地期の日本人研究者によってまず始められた。一九四



五年以後にも日本人研究者によって重要な視角や方法論が提示された。筆者をはじめとする韓国の研究者が、このような研究成果を通して多くの学術的成果を得たり問題意識が触発されたことも事実である。本稿は韓国人研究者の立場から百濟史における百濟寺院の展開過程とその影響について叙述したものであるが、一方では日本人研究者を重要な読者と考えている。百濟仏教文化の特性や飛鳥寺をはじめとする日本の初期寺院の問題は、東アジア史という大きな視角から両国の研究者が共に討論し、意志疎通を図ることによって、より正確に理解できると考えるためである。本稿がこの分野を研究する両国の研究者と問題意識を共有し、学際的研究や比較史的研究を遂行するうえで少しでも寄与できればと考える。

1 大橋一章「中国仏教美術の受容」(『奈良美術成立史論』、中央公論美術出版、二〇〇九年)。

2 李成市『東アジア文化圏の形成』(山川出版社、二〇〇〇年)。

3 梁武帝の崇仏活動については次の論考が参考となる。

森三樹三郎『梁武帝―仏教王朝の悲劇』(平楽寺書店、一九五六年)。

諏訪義純『中国南朝仏教史の研究』(法蔵館、一九九七年)。

梁銀景「梁武帝時期仏教寺刹、仏教彫刻と社会変化」(『美術史学』二三、二〇〇九年)。

蘇賢淑「梁武帝の仏教政策」(『仏教学報』五四、二〇一〇年)。

4 河上麻由子『古代アジア世界の対外交渉と仏教』(山川出版社、二〇一一年)。

5 百濟が日本のみならず、新羅の初期仏教に大きな影響を与えたという研究としては、次の論文が注目される。

藪田香融「東アジアにおける仏教の伝来と受容」(『関西大学東西学術研究所紀要』二三、一九八九年)。

崔鉉植「六世紀東アジア地域の仏教拡散過程に対する再検討」(『忠清学と忠清文化』一三、二〇一一年)。

- 6 関野貞『瓦考古学講座』（雄山閣、一九二八年）。
- 7 藤島亥治郎「朝鮮建築史論」其三（『建築雑誌』二、一九三〇年）…『朝鮮建築史論』（一九六九年）。
- 8 石田茂作「百済寺院と法隆寺」（『朝鮮学報』五、一九五三年）…『法隆寺雜記帖』（学生社、一九六九年）。
- 9 関野貞「博から見たる百済と支那南北朝特に梁との文化關係」（『宝雲』一〇、一九三四年九月）…『朝鮮の建築と芸術』（岩波書店、一九四一年、四八九〜四九〇頁）。
- 10 藤澤一夫「日鮮古代屋瓦の系譜」（『世界美術全集』二、角川書店、一九六一年）。
- 11 一九九〇年代以前の韓半島の寺院址に関する発掘年表は次に整理されているものが参考となる。
- 張慶浩「韓国古代寺院跡の発掘」（『仏教芸術』二〇七、一九九三年、三一〜四二頁）。
- 12 秦弘燮「百済寺院の伽藍制度」（『百済研究』二、一九七一年）…『古代を考える五—古代の日本と朝鮮』（古代を考える会、一九七六年）。
- 藤澤一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の關係」（『アジア文化』八二、一九七一年）。
- 金正基「韓国の寺院遺跡について」（『仏教芸術』八三、一九七一年）。
- 大川清編『百済の考古学』（雄山閣、一九七二年）。
- 北野耕平「百済時代寺院址の分布と立地」（『百済文化と飛鳥文化』、黄寿永・田村圓澄編、吉川弘文館、一九七八年）。
- 13 これまで百済の廃寺址として知られている公州地域の主要寺院は全て統一新羅時代に属するという。
- 趙源昌「公州地域寺址研究」伝百済寺址を中心に（『百済文化』二八、一九九九年）。
- 14 金正基「韓国の寺院遺跡について」（『仏教芸術』八三、一九七一年、八四頁）。
- 15 朴容埴「百済瓦当の体系的分類」軒丸瓦を中心に（『百済文化』九、一九七六年）…『百済文化と飛鳥文化』（前掲書）。
- 16 大西修也「百済の石仏坐像—蓮洞里石造如来像をめぐって—」（『仏教芸術』一〇七、一九七六年）。
- 大西修也「百済仏立像と一光三尊形式」（『MUSEUM』三一五、一九七七年）。二編とも『日韓古代彫刻史論』（中国書店、二〇〇二年）。

に再収録)。

17 吉村怜「百済武寧王妃木枕に画かれた仏教図像について」(『美術史研究』一四、一九七七年)・『中国仏教図像の研究』(東方書店、一九八三年)。

18 文化財管理局『百済古都文化圏文化遺跡整備計画(案)』(一九七九年)。

19 当時の調査成果は一九九〇年代初めに次の論考を通して日本に紹介された。

張慶浩「弥勒寺跡の発掘」(『仏教芸術』二〇七、一九九三年)。

申光燮・洪性彬「扶蘇山廢寺跡の発掘」(『仏教芸術』二〇七、一九九三年)。

崔孟植・尹根一「王宮里廢寺跡の発掘」(『仏教芸術』二〇七、一九九三年)。

金正基「韓国から見た日本古代寺院跡」(『仏教芸術』二〇九、一九九三年)。

20 尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』(忠南大学校博物館、一九八一年、六八頁)。

21 金正基「弥勒寺塔と定林寺塔―建立時期の先後に関して―」(『考古美術』一六四、一九八四年、二二―八頁)。

22 李炳鎬「扶余定林寺址出土塑像の製作技法と奉安場所」(『美術資料』七二・七三合集、二〇〇五年)。

李炳鎬「扶余定林寺址出土塑像の製作時期と系統」(『美術資料』七四、二〇〇六年)。

23 国立文化財研究所『全国文化遺跡発掘調査年表―増補版Ⅱ』(二〇〇一年)。

24 亀田修一「百済古瓦考」(『百済研究』一一二、一九八一年)・『日韓古代瓦の研究』(吉川弘文館、二〇〇六年)。

徐五善「韓国平瓦文様の時代的変遷に対する研究」(忠南大学碩士学位論文、一九八五年)。

25 金理那「三国時代の捧持宝珠形菩薩立像研究」(『美術資料』三七、一九八五年)・『韓国古代仏教彫刻史研究』(一潮閣、一九八九年)。

大西修也「百済半跏像の系譜について」(『仏教芸術』一五八、一九八五年)・『日韓古代彫刻史論』(前掲書)。

26 扶余地域を中心にした百済廢寺址に関する基礎資料として整理されたものとしては次の文献が参考となる。

- 国立扶余文化財研究所『百濟廢寺址―學術調査報告書』（二〇〇八年）。
- 国立扶余文化財研究所『韓中日古代寺址比較研究（一）―木塔址編』（二〇〇九年）。
- 国立扶余文化財研究所『韓中日古代寺址比較研究（二）―金堂址編』（二〇一〇年）。
- 李王基『百濟寺刹建築の造形と技術』（周留城、二〇〇六年）。
- 韓郁「遺構を通した六・七世紀百濟伽藍建物の復原的研究」（弘益大学博士学位論文、二〇〇八年）。
- 卓京柏「百濟泗泚期仏塔の造形技術研究」（明知大学博士学位論文、二〇一〇年）。
- 趙恩慶「弥勒寺址石塔の構造体系と築造解釈」（弘益大学博士学位論文、二〇一一年）。
- 鄭子英「六〜七世紀百濟寺刹内講堂左右建物址の変遷過程考察」（『建築歴史研究』七三、二〇一〇年）。
- 金洛中「百濟泗泚期寺刹の伽藍配置と造営の特徴」（『韓国上古史学報』七四、二〇一一年）。
- 閔庚仙「百濟泗泚期寺刹の伽藍配置変化様相に対する一考察」（『古文化』七八、二〇一一年）。
- 鄭子英「扶余定林寺址伽藍配置と編年的検討」（『韓国上古史学報』七六、二〇一二年）。
- 金洛中「百濟定林寺の創建年代」（『文化財』四五―四、二〇一二年）。
- 郭東錫「百濟泗泚期仏像の特徴と日本の飛鳥彫刻との関係」（『百濟泗泚期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年）。
- 金理那「七世紀百濟の仏教彫刻」（『百濟の美術』、百濟文化史大系一四、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇七年）。
- 国立扶余文化財研究所『扶余王興寺址出土舍利器の意味』（二〇〇八年）。
- 国立扶余博物館『古代東アジア上の百濟金属工芸』（香炉発掘一五周年記念国際學術シンポジウム、二〇〇八年）。
- 鈴木靜民編『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』（勉誠出版、二〇一〇年）。
- 国立文化財研究所『百濟仏教文化の宝庫、弥勒寺』（国際學術シンポジウム論文集、二〇一〇年）。
- 趙景徹「百濟仏教史の展開と政治變動」（韓国学中央研究院博士学位論文、二〇〇六年）。

- 吉基泰『百濟泗泚時代の仏教信仰研究』（書景、二〇〇六年）。
- 忠清南道歴史文化研究院編『百濟の祭儀と宗教』（百濟文化史大系一三、二〇〇七年）。
- <sup>32</sup> 崔鉉植「百濟後期弥勒思想の展開過程と特性」（『韓国思想史学』三七、二〇一二年）。
- <sup>33</sup> 崔鉉植「百濟撰述文献としての『大乘四論玄義記』」（『韓国史研究』一三六、二〇〇七年）。
- <sup>34</sup> 崔鉉植「『大乘四論玄義記』百濟撰述再論」（『韓国史研究』一三八、二〇〇七年）。
- 成正鏞「瓦」（『聖住寺』、忠南大博物館、一九九八年）。
- 崔孟植『百濟平瓦新研究』（学研文化社、一九九九年）。
- 金鍾萬「扶余陵山里寺址出土瓦当文様の形式と年代観」（『帝塚山大学考古学研究所研究報告』四、二〇〇〇年）。
- 龜田修一『日韓古代瓦の研究』（吉川弘文館、二〇〇六年）。
- <sup>35</sup> 清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』（清文堂、二〇一二年）。
- <sup>36</sup> 趙源昌『百濟建築技術の対日伝播』（書景、二〇〇四年）。
- 李タウン「百濟瓦博士考」（『湖南考古学報』二十、二〇〇四年）。
- <sup>37</sup> 白石太一郎「古墳の終末と寺院造営の始まり」（『河内古代寺院巡礼』、大阪府立近つ飛鳥博物館、二〇〇七年、八四〜九一頁）。
- <sup>38</sup> その中でもモニュメントとしての塔を重視し、日本の初期寺院の感覺的側面を強調した見解があり参考となる。
- 本郷真紹「古代寺院の機能」（『律令国家仏教の研究』、法蔵館、二〇〇五年、五〜十三頁）。
- <sup>39</sup> 東アジア三国における仏教の伝来過程を現代の原子力の発展で比喩した石井公成の見解は傾聴するに値する（石井公成「仏教受容期の国家と仏教」（『東アジア社会と仏教文化』、春秋社、一九九六年、六八〜七一頁）。原子力発電は先進国のみが持つ先進技術であり、国家の発展を約束するものであるが、それを受容するの可否かを巡って多くの衝突と論争が引き起こされ、それを受容した後にも多様な問題が生じることになる。仏教を公伝することは当時においてそのような先進技術を供与することを意味し、ある一つの国家から他の国家に

仏像や経典、僧侶などを送る場合、それを維持・持続させなければならぬため、それは極めて政治的な行為であるといえる。また、仏教を正式に伝えたとすれば、少なくとも一つの寺院が建立され、活動できる時まで僧侶の派遣や留学僧の受容などその他の方面の協力を約束することであったため、仏教と関連した援助を通して相互持続的な友好関係が維持され、周辺国にもこれを表明することができた。このように仏教公伝や仏教寺院の建立はそれを伝授した側や受け手ともに複雑な事情が内包された極めて複合的な政治的・外交的行為といえるのである。

40

七世紀代の中国の史書では三国を三韓と称しているが、これは韓半島の三国が中国や日本とは異なるという認識を反影したものである。六〇七世紀代の高句麗と百濟、新羅の仏教を通じた文化交流はそうした点で韓半島の古代国家が中国や日本と異なる共同体であるという認識を共有し、認識させるうえで大きな意味を持っている。このような問題意識は次の論考によく整理されている。

盧泰敦「三韓に対する認識の変遷」(『韓国史研究』三八、一九八二年)・『韓国史を通して見た我々と世界に対する認識』(ブルビツ、一九九八年に再収録)。

第一部 百濟式寺院の成立と展開

## 第一章 百済の仏教受容と初期寺院

### はじめに

百済の仏教寺院に関する研究は、泗泚期の遺跡が最も重要視されている。漢城・熊津期の仏教寺院の存在については、文献史料からその存在が知られているものの、これまで実際に確認された遺跡が皆無であったため、その実態については必ずしも明らかではなかった。そのため、枕流王代の百済仏教伝来説に否定的な見解が提起されたこともある。しかし、最近の韓国の学界では、仏教寺院の存在を史実として認める見解がより優勢である。本稿もこの立場から枕流王代の仏教受容の様相とそれ以後の推移について検討する。

まず第一節では、枕流王代の仏教受容と仏寺の建立に対する文献記録、また漢城期の百済地域から出土した仏教的要素が見られる遺物を整理する。第二節では熊津期の寺院のうち、本格的な仏教寺院といえる公州大通寺址を中心に、創建前後の時期における瓦当の様相とその系統について検討することで、熊津期の寺院の一側面を明らかにしたい。

### 第一節 漢城期百済の仏教受容

#### (一) 枕流王代の仏教受容と仏寺の建立

百済に仏教が初めて伝わったのは枕流王元年(三八四)であり、関連記録を見ると次の通りである。

史料一〇一 秋七月、遣使入晋朝貢。九月、胡僧摩羅難陀自晋至、王迎致宮内礼敬焉、仏法始於次。(『三国史記』卷二四 百済本紀 第二 枕流王 即位年条)

史料一〇二 二年 春二月、創仏寺於漢山、度僧十人。(『三国史記』卷二四 百済本紀 第二 枕流王 二年条)



史料一三三 百濟本記云、第十五(僧伝云十四誤)枕流王即位甲申(東晋孝武帝大元九年)、胡僧摩羅難陀至自晋、迎置宮中礼敬。明年乙酉、創  
仏寺於新都漢山州、度僧十人、此百濟佛法之始。又阿莘王即位大元十七年二月、下教崇信佛法求福。摩羅難陀、訳云童学。(其異迹詳見僧  
伝)(『三国遺事』卷三 興法 摩羅難陀条)

百濟からは三八四年七月に東晋に使臣を送り、二ヶ月後に東晋からは胡僧摩羅難陀を送っている。彼は、東晋から百濟に帰国する使臣  
とともに同行したものと推測される。百濟王は彼を宮殿に迎えて礼遇・敬拜し、このときから百濟の仏教が始まった。この記録について  
は、『日本書紀』推古天皇三二年(六二四)条の百濟僧觀勒の上表文に、百濟に仏教が伝来したのはそれより「一〇〇年前」の五二四年  
頃に該当すると記録されているため、『三国史記』に伝わる仏教伝来の年次は信じがたいという主張が早くから提起され、一部の支持を  
得てきた<sup>20</sup>。これは、三八四年以後、聖王一九年(五四一)まで百濟の仏教に関する記録と、漢城期の仏教遺跡や遺物が皆無であることが  
ひとつの重要な根拠となっていた。しかし今日の韓国の学界では、史料批判の深化と考古学的な資料の増加によって、このような主張は  
もはや認めがたい状況となっている<sup>21</sup>。

史料一三三の百濟仏教初伝記録には三宝のうち、僧宝のみが言及され、残りの仏像と經典は見られない。しかし、史料一三二に摩羅難陀  
が百濟に着いた翌年の三八五年、漢山に仏寺を創建した事実が注目される。寺院とは僧侶たちが集まる礼拝空間であると同時に、經典を  
読誦し、また学ぶ講經空間である。そのような点で史料一三二を通して百濟における仏教受容当時、僧宝以外のものも備わったと見なけ  
ればならないだろう。さらに注目すべきことは史料一三二と三の度僧一〇人である。仏教において正式に僧侶となるためには、具足戒を  
受けなければならない。この具足戒を与えることのできる最小限の構成人員が一〇名である。仏教を受容した翌年の三八五年に仏寺を建  
て一〇人を度僧したことは、その後百濟仏教が僧侶を輩出しつづけたことを意味しており、そのような点から枕流王代の仏教伝来記録は  
仏教が初めて百濟へ伝来した記録として信頼しうると考える。

このような理解をふまえて、三八四年、百濟に仏教が初伝した国内外的な背景について検討しよう。百濟と高句麗における仏教の受容

過程は、新羅の場合と異なり公伝の是非を巡る内部的な対立が見られない。これについて田村圓澄は三国と日本の仏教を下賜説と贈与説の立場から検討している<sup>4</sup>。しかし、百済と高句麗の仏教伝来は「宗主国から朝貢国へ下賜された」ものであるため両者択一的に選択する余地がなく、ただ受容せざるを得なかったとするが<sup>5</sup>、この見解もまた受け入れがたい<sup>6</sup>。このような視角は六世紀代の東アジア仏教史に関する見解が投影されたものであり、ある時代や国家の王権の強弱および国家の発展段階の違いを無視するものであり、仏教受容の内在的要因や政治・外交的側面を度外視したものである。

百済と高句麗における仏教の受容過程は相互に連動している。まず、百済と東晋の関係をみると、百済は近肖古王二七年(三七二)東晋に初めて使臣を派遣し、その翌年の三七三年にも使臣を派遣している。百済の使臣派遣は『晋書』簡文帝紀でも確認され、最初の遣使に対する答礼として鎮東將軍領樂浪太守という爵号を受ける<sup>7</sup>。近仇首王五年(三七九)にも東晋に使臣を派遣するが、海上で暴風に会い到達できなかった。しかし、『梁書』には晋太元年間(二七六～二九六)に百済王須が生口を奉じたという記録が残っている<sup>8</sup>。それゆえ枕流王元年(二八四)の百済の使臣派遣は三七二年から始まった朝貢の延長線上にあり、東晋の摩羅難陀派遣はそれに対する答礼的な性格があるとおもわれる。

百済に仏教を伝えた東晋の皇帝は孝武帝(在位三七三～二九六)であった。彼は太元六年(二八二)春正月に

史料一四…帝初奉仏法、立精舎於殿内、引諸沙門以居之。(『晋書』卷九 帝紀 第九 孝武帝 六年春正月条)

という『晋書』の記録から分かるように、東晋の皇帝たちの中で最初の公式的な仏教信者と評価され、その後江南地方では、仏教が大きな勢力を持つようになった。このような東晋の孝武帝が公式的に摩羅難陀を送った時、百済の枕流王は彼を「宮に迎えて礼敬した」という(史料一一)。百済王が彼を宮闕で礼遇したことは単純に彼を歓迎するという意味もあるが、東晋皇室の雰囲気ですでに把握していたために取られた措置と考えることもできるであろう。

次に百済と高句麗の関係をみると、近肖古王は二六年(三七二)、高句麗の平壤城を攻撃して故国原王を戦死させた。高句麗はその翌年の小猷林王二年(三七二)六月に前秦から仏教を受け入れている。先に述べたようにその時百済は三七二年正月に東晋に初めて使臣を派遣し、同年六月に鎮東將軍領樂浪太守という爵号を受けた。高句麗が前秦から仏教を受容した時期と百済が東晋から爵号を受けた時期は三七二年六月で一致している。これは百済と高句麗が戦争を通じてあるいは、外交を通じて熾烈に対立していたことを物語っている<sup>10</sup>。

小猷林王二年の高句麗における仏教伝来と受容の問題はより複雑な問題を内包しているが<sup>11</sup>、その背景には前秦との外交的な問題も関係している。つまり、丸都城を陥落させるなど高句麗に圧力を加えた前燕は三七〇年に前秦王符堅によって滅亡するが、この時、高句麗は自国に亡命してきた前燕の太傅慕容評を捕らえ符堅に押送することで平和的關係を標榜した。慕容評は四〇万の大軍を率いて符堅と戦い惨敗した主将であった。慕容評を押し送った背景には、慕容伏のかつての怨恨に対する報復とともに、前秦の南下を外交的に防ごうという高句麗の意図もあったと考える<sup>12</sup>。華北の新たな覇者となった符堅は、高句麗に対する答礼として仏像・経文とともに順道を送ったのである。このように高句麗の仏教受容とは、対前秦関係との友好と密接な関わりをもつものであった。

また、百済の立場から高句麗における仏教公認の対外的な流れを再度整理してみると、高句麗と前秦の外交的な接近には、三七一年の百済と高句麗の衝突による故国原王の戦死問題が関与していたといえる。それゆえ、三七二年六月の前秦の仏教伝授と東晋の爵号授与の問題は相互に関連していると理解できるかもしれない。三七〇年に前燕を滅ぼし華北の新たな覇者となった前秦と高句麗の外交的接近は、東晋にとつても負担になったであろうし、また三七一年に高句麗の故国原王を戦死させた百済という存在を決して無視できなかったであろう<sup>13</sup>。その後、百済と東晋は持続的な交流を通して親密な紐帯關係を維持し、仏法を信奉して宮殿内に寺院を建てた孝武帝代になると、百済にも仏教を伝授するようになったと理解できるのではないだろうか。

史料一―三を改めて見ると、百済の枕流王は胡僧摩羅難陀を歓待して宮闕内に迎えて礼遇する一方で、翌年二月には漢山に仏寺を建てて一〇人の度僧を許諾している。仏教に対する識見がない状態で彼を宮闕に迎えて礼遇し、その翌年すぐに漢山に仏寺を建てたと考えがたい。また、東晋から僧侶が到来してからわずか半年で一〇名の百済僧侶を輩出することは難しいと考える。それゆえ枕流王代以前

にすでに百済に仏教が伝わっていたと考えられ、初伝記録は公認や公伝に該当するという見解<sup>14</sup>も再検討する必要があると考える。

実際、百済は内部的にも仏教を受容できる力量を備えていた。高句麗や新羅の場合、仏教の受容と前後して律令の制定、教育機関の設立、国史編纂、対外関係の発展という共通点が確認される。百済の場合も近肖古王代に高興が『書記』を編纂したことや高興が博士であったことは、この共通点と関連するものと理解できる<sup>15</sup>。独特な思想体系と宇宙観を体系化する仏教を理解するためには、それに相応しい知的水準が必要である。百済で受容した仏教は漢字に翻訳された漢訳経典をテキストにしたものであるため、特に漢字や漢文に対する素養が前提とならなければならない。近肖古王代の博士高興の歴史書編纂および三七二年以後の持続的な使臣の派遣は、当時の百済人の文字解読能力や知的水準、そして中国に関する理解がかなりの水準に達していたことを示している。

特に、百済の漢字や漢文に対する理解は楽浪郡の廃置と関連がある。四世紀初以後、帶方郡と楽浪郡が段階的に消滅することによって、そこに居住していた漢人の一部は高句麗や百済に吸収されたと推測される。後代の記録ではあるが、百済にも中国人が多かったとする『隋書』百済伝の記事<sup>16</sup>は、このような事情と関連があると考えられる。のみならず、日本の七支刀銘文が楽浪・帶方の遺民と関係があるという推定や<sup>17</sup>、江田船山古墳出土銘文大刀の作成者である「渡来人」張安が、百済系楽浪遺民であるという推定<sup>18</sup>もこれと関連しているのだろう。

百済における楽浪系遺民が、漢文に習熟していたため、外交の方面で一層活発に活動したことは容易に推定できる<sup>19</sup>。景平二年(四二四)に百済王余映が宋に派遣した長史張威、元嘉二七年(四五〇)に派遣された馮野夫、そして蓋鹵王代と東城王代に官爵賜与を要求する百済官吏として登場する高達、楊茂、王茂などは中国系百済官僚と考えられる。これらの姓氏は楽浪地域で出土する瓦磚銘からすべて確認できるので、楽浪系遺民である可能性が濃厚である。『南齊書』百済伝には東城王十二年(四九〇)、牟大が再度表文を奉り、高達、楊茂、會邁たち三人は「去る泰始年間(四六五、四七一)に共に宋朝へ使臣として赴き、今は臣(東城王)の使臣の任務を受け、険しい波を押しきって海を渡りました」という記録<sup>20</sup>から、彼らが長期間中国との使節として活動していたことを推測できる<sup>21</sup>。このように百済では仏教を受容する以前、すでに中国系遺民の包摂を通して漢字や漢文、中国に関する理解が相当な水準に達していたといえる。

一方、四世紀後半という時期それ自体が、対外関係の側面において非常に重要であった。対中関係については、前述したように百済が近肖古王代に二回(三七二・三七三年)、近仇首王代に一回(三七九年)東晋へ遣使しており、日本とも外交交渉が成立したためである<sup>22</sup>。ソウル夢村土城と華城社倉里で出土した晋式帯金具や<sup>23</sup>、風納土城と夢村土城、石村洞古墳群をはじめとして洪城神衿城、原州法泉里古墳群、天安花城里古墳群・龍院里古墳群、公州水村里古墳群、益山笠店里古墳群、扶安竹幕洞祭祀遺跡などから出土した多量の中国製青磁はこのような活発な対中交流を証明している<sup>24</sup>。

ところで、西晋代の中国製青磁は銭文がある施釉陶器など大形器種であり、生活遺跡からおもに出土しているが、東晋代には青磁および黒磁鶏首壺・盤口壺・罐・硯・羊形器など精製された器形に多様な器種が大挙流入し、中央と地方の古墳に副葬されるようになっていく。このような展開様相は四世紀中半を重要な画期としているが、百済の成長と地方支配方式の変化とともに、樂浪郡・帶方郡の廃置によって中国系遺移民が百済地域に大挙流入した結果、中国文物に対する理解が百済の支配層に深く浸透したためであろう<sup>25</sup>。このように百済では四世紀中後半の近肖古王代を経て、内部的に仏教を受容できる十分な力量を持つようになったといえる。

さて、仏教初伝関連史料に戻ると、百済は仏教が伝来した翌年の三八五年、漢山に仏寺を建て一〇人を度僧した。これは高句麗で小獸林王二年(三七二)に仏教を公認した後、同王五年(三七五)に省門寺と伊弗蘭寺を建て順道と阿道を住まわせたという内容と対比される。漢山における仏寺建立は、より積極的な意味づけが可能である。まず、漢山の位置について、近肖古王二六年(三七二)の「移都漢山」という記録が注目される<sup>26</sup>。この時の漢山は四七五年以後、高句麗が軍士駐屯地として活用しつづけた南城つまり現在の夢村土城に比定されている(図一〇一)。また、枕流王の長子である阿莘王は「漢城別宮」で誕生したとする<sup>27</sup>。この時、漢城の「別宮」は漢山移都と関連づけてみると、漢山である夢村土城を指す可能性がある<sup>28</sup>。したがって、枕流王の王子が「漢城別宮」である漢山で生まれ、仏寺が最初に建立された漢山が別宮のように機能していたと推測できる。

それゆえに史料一〇一の漢山に仏寺を創建したことを「高句麗との対決が容易く終わらず、三八〇年以後にはむしろ守勢にまわり、王都を莊嚴なものとするための核心建築物の一つである寺刹を漢山に創建したもの」と理解する見解は説得力を持つ<sup>29</sup>。つまり、百済で

は仏教を受容した当時すでに仏教寺院は漢山を象徴する記念碑的な建築物としての機能を担っていたと把握できるだろう<sup>30</sup>。ただし、後述するが、漢城期には四世紀中後半段階に図一七の一の南朝系獸面文瓦当が使用され、図一七の二・図一八のような蓮華文瓦当は、五世紀中後半頃になって導入されるため、漢山の仏寺に葺かれた瓦当は蓮華文ではなく錢文や獸面文瓦当が使用された可能性が高いという点に留意する必要があるだろう<sup>31</sup>。

このように東アジアの他の国と同様に、百済の場合も仏教の受容と寺院の建立は単純な外来宗教の教理や思想の伝播以上の意味を持っていた。史料一の百済への仏教伝来記録は仏教を通じた交流に伴う人とモノ、情報の総体的な伝来を意味するものとして理解する必要があるのである。当時、漢山に創建された仏寺は、東晋の建康に建てられた仏教寺院と類似したものとみられるため、『三国史記』には仏僧の派遣以外の記録はないが、東晋の造寺工や造仏工も派遣された可能性を考慮する必要がある。

## (二) 漢城期の仏教関連資料

漢城期百済仏教の関連史料については、枕流王代の仏教関連記録と阿莘王即位年の仏教弘布の教書以外に、五二七年の大通寺創建時までに記録や遺跡・遺物がほぼみあたらない。こうした状況下において、三九六年に高句麗の廣開土王が阿利水を渡り百済の国城を攻撃した後、百済は再度平常時の居城である王城つまり北城に還都し、その結果南城である漢城は非常時の軍事防禦城としてのみ活用されたという点が注目される<sup>32</sup>。つまり、二七一年の漢山移都以後、漢城の別宮のように機能した期間は二五年に過ぎないため、三八五年に創建された漢山の仏寺もまた、その象徴性が相対的に減少したのではないかと考えられるからである。

しかしながら、現時点で仏教関連遺跡・遺物が発見されていないことを挙げて、漢城期の百済で仏教が受容されていなかったと評価するのは早急である。阿莘王即位年条の「下教崇信仏法求福」という記録以外にも<sup>33</sup>、断片的であるが仏教と関連する記録が残っているためである。そのうちの一つが高句麗の僧侶道琳に関する記録であり、もう一つが百済の僧侶発正に関する記録である。

まず、道琳についてみると、彼は囲碁を好んだ蓋鹵王に近づいて王の心を捉えた後、彼を誘って城を築かせ、宮殿を修理するなど

の工事を行わせた。その結果、国の倉庫がみな空となり人民が困窮した。その隙に乗じて長寿王は四七五年に漢城を攻撃して王を殺し、男女八千名を捕えていった。道琳の建議内容は、蓋鹵王の土木工事にほぼそのまま反映されているため、『三国史記』の記録を単純な失政とみなすよりは、対内的な体制整備とも関連付けて考察する必要がある<sup>34</sup>。

道琳の建議内容は城郭と宮室の修理、墓制・百姓の住居と関連するものなど多方面にわたる。その中で「蒸土」工法を利用して城郭を堅固に築造したという記録は注目されるが、北朝との交流から工法の淵源を求める見解が提示されている<sup>35</sup>。しかし、初期の仏教僧侶たちが仏教の教理のみならず医療や各種の技術を所持する事例があることを考慮すると、道琳もまた単純に土木事業を建議するだけにとどまらず技術的な側面から一定の寄与をした可能性が高い。高句麗の僧侶である道琳の事例は、極めて例外的なものではあるが、彼に関連した記録を通して枕流王代の仏教伝来以後にも百済では綿々と仏教を崇尚しており、僧侶たちが王宮を出入りできるほどの身分と国政運営にも一定の関与が可能であったことを示唆するものとして注目される。

次に百済で最初の中国留学僧である発正についてみていく。彼は天監年間(五〇一〜五三三)に梁に渡り師匠を求めて仏道を学び、三〇余年ぶりに帰国した。彼が百済に帰国したのは、おおよそ聖王二五年(五三七)から威徳王一年(五五四)にいたる間と推定されている<sup>36</sup>。彼は高句麗の僧侶僧朗を除くと中国で名を広め再度帰国した最初の三国時代の僧侶である。注目すべき点は、発正が天監年間に中国に留学できた仏教史的背景に関する点である。六世紀初めに発正が留学できたということは、それ以前から百済内部で仏教に対する理解がある程度成熟していたと推定できる。武寧王二二年(五一二)に百済を発ち聖王二〇年(五四二)に帰国したという謙益の印度求法活動と訳経事業を認定しなくとも<sup>37</sup>、それ以前の漢城期末から熊津期初の百済仏教寺院の運営と僧侶の活動を認めざるを得ないであろう。

文献記録と考古学的な側面から百済仏教、特に仏教寺院の実体が明確にあらわれるのは公州大通寺であるが、それより若干先行する公州武寧王陵の段階ですでに仏教的性格が強い遺物が多数確認されている。武寧王陵から出土した冠飾と飾履、頭枕と足座、銅托銀盞、蓮花文博などは全て中国南朝の仏教文化の影響を考慮せずに説明しがたい。その中でも特に王妃の頭枕表面に描写された図像が注目される(図一〇二)。この頭枕は表面に朱漆を施し金箔で輪廓を描いた後、その内側を亀甲文で区画した。表面に描かれた亀甲文の中には、鳳凰

や飛龍などとともに天の蓮華や變化生、雲に乗って飛ぶ天人などが描写されているが、これは南朝系天人誕生図に該当する<sup>38</sup>。つまり、武寧王陵築造段階には南朝で創案された仏教図像が直接百済に伝わっていたのである<sup>39</sup>。

しかし、武寧王陵以前の段階に仏像や仏教的モチーフを持つている事例としては、次のようなものがある。まず仏像の場合、ソウルトウクソム出土金銅如来坐像(図一三)と扶余新里出土銅如来坐像、瑞山普願寺址出土金銅如来立像などが初期の事例に該当する<sup>40</sup>。ただし、小型金銅仏がどの国のものであるかが依然として議論となっており、少数の事例しかないため積極的な意味付けが難しい。だが、たとえそれが伝世品であるとしても、百済の故地にて五世紀から六世紀初めに該当する様式的な特性を見出しうるので、この時期すでに百済地域において仏教活動が行われていたことを示していると考えられる。

四世紀末～五世紀代の百済地域の古墳から出土する遺物を見ると、まだ仏教が公認されていなかった新羅と比較してもその数が制限的である<sup>41</sup>。その中で原州法泉里四号墳出土青銅蓋と羅州新村里九号墳出土金銅冠、天安龍院里C地区から出土した青磁蓮花文碗、ソウル風納土城出土青磁蓮花文碗などは仏教的なモチーフとしての蓮華文が裝飾された代表的な事例といえよう。

原州法泉里四号墳の場合、横口式石室墳から金銅飾履片とコップ形漆器、漆耳杯、管玉、ガラス玉、魚骨、棺釘と鏝などが出土しているが、古墳の中心年代は四世紀末から五世紀初めに比定されている<sup>42</sup>。図一四の蓮華文が裝飾された青銅蓋は後代に追加されたものであるため、百済・新羅地域から出土する蓮華文瓦当と比較すると六世紀第4四半期に編年できるといいう見解が提起されている<sup>43</sup>。しかし、発掘報告書によると、法泉里四号墳は追加葬の痕跡が見られないという。法泉里古墳群一帯で確認される新羅古墳は、それまでの百済古墳とは異なる墓域に造営されている。特に規模が小さく副葬品が極めて貧弱である法泉里四号墳は、その次の段階である法泉里一号墳と遺物の副葬様相が類似しており、青銅蓋の蓮華文もまた南朝の都城である建康城一帯で出土する蓮華文瓦当の展開様相を見ても<sup>44</sup>、年代的に十分に想定できる。法泉里四号墳から出土した青銅蓋は共伴した遺物の年代と近い四世紀末から五世紀前半に編年でき、そのような点から四世紀後半の仏教伝来以後、百済の地方社会でも仏教的なモチーフあるいは仏教に対する理解が始まっていた可能性がある。



羅州新村里九号墳乙号甕棺からは金銅冠と金銅飾履、環頭大刀、漆器、鉄器をはじめとして多量の曲玉が出土した。その中で金銅冠は帯冠と冠帽を全て備えている(図一・一五)。冠帽の表面には大きな蓮華文が打出されており、台輪にも六葉または七葉の蓮華文が打出されているが、三つの草花形立飾は宝珠形蕾裝飾で仕上がっている。羅州新村里出土金銅冠の年代については多様な見解が提示されているが<sup>45</sup>、武寧王陵出土金銅冠および金銅飾履と比較すると、それより若干古い五世紀後半頃に編年されるであろう<sup>46</sup>。そうであるなら、漢城期の末期から熊津期の初期にも百済の地方社会では仏教的なモチーフが出現し普及していたといえるであろう<sup>47</sup>。

天安龍院里C地区から出土した青磁蓮花文碗とソウル風納土城から出土した青磁蓮花文碗も注目される<sup>48</sup>。図一・一六のように二点とも陽刻で蓮華文を表現しているが、蓮弁の端が尖り、蓮弁と蓮弁の間には間弁がともに表現されている。これらの青磁は宋の永初元年(四二〇)(出土品や元徽二年(四七四)出土品と類似していることからおおそ五世紀後半頃の越州窯で生産された製品と考えられる。天安龍院里出土品の場合、考ええられる横穴式石室の構造と共伴遺物からみて五世紀末から六世紀初に埋納されたものと推定できる。青磁碗はその用途が酒や茶といった飲料を入れて飲む実用器としての性格が強いため<sup>49</sup>、威信財としての機能のみならず、実用器としての性格も有していたといえよう。そのような意味で青磁碗に裝飾された蓮華文もまた当時の百済人の仏教理解に対する小さな端緒になるのではないかと考える。

公州大通寺址創建以前の仏教寺院に関して、各建物址から出土した瓦当が注目される。漢城期の瓦当を中心にした瓦研究は、資料の制約によって制限的に進めざるを得なかった<sup>50</sup>。その中で漢城期の百済瓦当研究の論点は、瓦製作の開始された時期と製作技術の系統という二点にある。特に、百済瓦の製作技術の系統については楽浪系統なのか、高句麗系統なのか、そうでなければ第三のルートがあったのかについて多様な意見が提示された。この問題については最近、風納土城から出土した獣面文瓦当と蓮花文瓦当が注目される(図一・七)<sup>51</sup>。

図一・七の一の獣面文瓦当の場合、南京地域で出土する東晋時期の獣面文瓦当に最も類似した事例を見出すことができる。今まで紹介された資料を参考にすると、まだ同じ文様や同范品と断定できるようなものは発見されていないが、賀云翹が分類した獣面文瓦当のなか

でA型一式とA型Ⅱ式、B a型が最も類似するものと考えられる<sup>52</sup>。これらの型式は東晋時代早期から中晩期、南朝時期にかかるものであるため、今後より緻密な比較・検討を要するが、楽浪や高句麗と全く異なる南朝系統の造瓦技術が漢城期にすでに流入していたことを物語るものである<sup>53</sup>。

本稿では東晋からの仏教伝来が単純な仏教教理の伝播にとどまらず、仏寺建立に必要な人材と物資、情報を含んだものと推定した。したがって、この瓦当が三八四年以前であるとすれば、それ以前の時期の東晋との技術交流を直接的に証明する資料となるものであり、直後のものであれば筆者の推定を証明する決定的な資料となり、一・二段階新しい時期のものであるとしても南朝との持続的な技術交流を示す資料となるであろう。今後、風納土城から共伴した出土遺物との相對編年と、夢村土城や石村洞古墳群などから出土した瓦当との比較を通して、技術者の流入や技術伝授の問題などについてより具体的な検討が可能になるものと考えられる<sup>54</sup>。いずれにせよ、東晋から仏教を受容した後、漢山に仏寺を建立した百濟で東晋代に流行した獸面文瓦当が出土したことは、当時東晋代の造瓦術や造寺術が百濟に一定の影響を与えたということを示すという点で重要な意味をもっている。

図一七の二の蓮花文瓦当は、漢城期のものとしてはじめて発掘を通してその存在が確認された資料であり、熊津遷都以前の百濟でも蓮華文瓦当を使用していたことを確認できるようになった。風納土城から出土した蓮華文瓦当は、共通して中房が円形であり、内部に蓮子は表現されていない。六葉の蓮弁文は陽刻の線で表現されており、各蓮弁は稜線がある単弁蓮花文であり、若干のボリューム感が残っている。これと類似した事例として、大同方山の思遠仏寺と推定される白仏台遺跡および草堂山遺跡から出土した八葉の複弁蓮花文瓦当と北魏洛陽城内城の建春門遺跡から出土した五葉の複弁蓮花文瓦当を挙げることができる<sup>55</sup>。したがって、これらの瓦当の文様形態は北朝系蓮華文瓦当の影響といえる<sup>56</sup>。しかし、その製作技法は瓦当が非常に薄く、周縁部が瓦当面より顕著に高いため、その前に導入された南朝の製作技法であった可能性がある。つまり、この瓦当は北朝的な文様要素と南朝的な製作技術が混在しているといえ、その製作時期は熊津遷都以前の五世紀中後半とみても無理はないであろう。

風納土城から出土した蓮華文瓦当のみならず夢村土城から出土した蓮花文瓦当についても新たな検討を必要とする(図一八)。夢村土

城東北地区八七一号住居址の東側約一五メートルの傾斜面から出土したこの瓦当は単弁六葉蓮花文瓦当である。亀田修一は中房と蓮弁の形態、六葉という点などから高句麗の瓦当製作技術の影響とともに、石村洞四号墳出土銭文瓦当の技術的な属性も見られるとした。また、年代的には集安太王陵などで出土する蓮蕾文瓦当の出現期である四世紀中半以後と推定した<sup>57</sup>。ところで、風納土城と夢村土城から出土した蓮華文瓦当を互いに比較してみると中房に蓮子がなく圏線で中房を表現した点、圏線で六葉の蓮華文を表現した点、蓮弁の中央に稜線を置いた点などの共通性を持つ。復元直径は一二センチ前後と類似し、残存している周縁の形態もまた似ている。蓮弁文様や蓮弁の形態、大きさなどは高句麗や北魏の蓮華文瓦当と類似するといえよう。しかし、製作技法や瓦当と丸瓦の接合方式は、石村洞四号墳をはじめとした漢城期のソウル地域で出土する瓦当と類似性を持っている。つまり、文様のモチーフは高句麗や北魏系統の新たな要素であるが製作技法は既存の在地的な特性を持っているといえる。

このように熊津遷都以前のソウル地域では、中国南・北朝や高句麗の瓦当と区別される独特な蓮華文瓦当を製作・使用した可能性がある。これは、枕流王代の仏教伝来以後にも、百済地域に断続的ではあるが外部から新たな造瓦術が導入されたことを示すものである。したがって、漢城期には枕流王代の仏寺建立以後も、持続的に仏教と関連した活動が行われていたといえよう。

## 第二節 熊津期の瓦当と寺院

枕流王代の仏教伝来記事と阿莘王代の教書以後、百済の仏教について最も信頼できる記録は大通寺に関するものである。すなわち大通寺址は百済仏教史の展開において非常に重要な位置を占めている。大通寺に関する記録は『三国遺事』に簡略に残っている。

史料一―五…又於大通元年丁未、爲梁帝創寺於熊川州、名大通寺。熊川卽公州也。時屬新羅故也。然恐非丁未也。乃中大通元年己酉歲所創也。始創輿輪之丁未、未可及於他郡立寺也。（『三国遺事』卷三 興法 原宗興法厭觸滅身条）

この記録によると、大通寺は大通元年の五二七年に建てられた寺である。大通は梁武帝が使用した三番目の年号で五二七年三月から五二九年一〇月まで使用された。ところで、史料一―五で一然は分註を付けて大通寺の創建年代について異なる見解を共に提示している。そこでは、本文で言及した五二七年は新羅の法興王が輿輪寺を創建した五二七年と重複しているために同時に二カ所の寺を建てることのできないとする。それゆえ、大通と年号が同じ中大通元年である五二九年に大通寺が建てられたものと見ている。このように『三国遺事』には大通寺の創建年代について五二七年と五二九年を提示しているが、大部分の研究者たちは本文の五二七年と考えている。

ところで近年、大通元年（五二七）に百済から梁武帝のためその年号を取って寺を建てたということに対する反論が提起されている。「大通」という言葉は梁武帝の年号（五二七～五二九）以外に五二三年に発行された「大通銭」などがあるので、これを必ずしも年号からとったと見ることはできない。むしろ『法華経』化城喩品に登場する大通仏（大通智勝如来）からとったものであり、大通寺は聖王が五二五年に亡き父武寧王の冥福を祈り、次の王位を継ぐ余昌（威徳王）のため建てたものである<sup>50</sup>。

しかし、このような見解に対する再反論もある。大通寺の大通が梁の年号ではなくとも、『法華経』の一節と断定する根拠は不足している。また、百済王が他国の皇帝のため寺院を創建したということ信じることができないとするにも、これといった根拠がない。その

ため、記録をそのまま受け入れなければならない、梁武帝のための寺院創建も、梁の文化伝授に対する敬意を表現したものと考えられるというものである<sup>590</sup>。

公州大通寺址がいつ、いかなる背景で建立されたのかについては議論があるが、図一一九の「大通」銘文字瓦は、梁の年号と関連している可能性は高いため、その創建期の瓦当は五二〇年代中後半に製作・使用されたものと予想される<sup>600</sup>。この寺址は公州市班竹洞に位置し、付近から講堂址と推定される石築基壇(五三×二五メートル)の遺構が確認されている。これに基づいて、その南側に金堂と塔が配置された一塔一金堂式の伽藍配置が行われたという図一〇〇のような推定案が提示されているが<sup>601</sup>、建物址が確認されている訳ではない。現在、統一新羅時代の幢竿支柱が残っており、国立公州博物館には講堂址横にあった石槽が展示されている。これについての発掘調査では百済関連の遺跡や遺物は検出されなかったが、出土瓦当を通してみた場合、近隣の地域に百済熊津期から高麗時代にかけて寺院が存在したことは明らかである<sup>602</sup>。よって公州大通寺址は百済の寺院の中で寺名が知られた最初の寺院として、蓮華文瓦当を使用した瓦葺き建物が整然と配置された本格的な寺院であった可能性が高い。『日本書紀』推古紀三二年の百済僧觀勒が、仏教が百済に伝来してまだ一〇〇年に過ぎないというのも、大通寺のような本格的な伽藍がこの頃に造営されたことを示すのかもしれない。

一方、清水昭博は日本最初の本格的な寺院である飛鳥寺が造営された時、百済から日本に造寺技術者を派遣したように南朝梁から技術者を派遣して造営したのではないかと推定した<sup>603</sup>。大通寺址の創建期と推定される瓦当の中で蓮華文瓦当は、その製作技法や文様モチーフが南朝の梁から始まるものと考えられるため、南朝の造瓦技術が導入された可能性が非常に高い。これらの瓦当は素弁蓮華文中房が蓮弁より低く、一十六顆の蓮子が配置されている。また蓮弁の端が反転しながら突起形態となっている(図一三三の六)。瓦当裏面に回転ナデを施して成形し、瓦当部と丸瓦部を結合させる際に瓦当裏面の一部と丸瓦の先端部の一部を傾けて切った後、接合させた(図一一一のH2a技法、所謂「片ほぞ形」<sup>604</sup>)。大通寺址ではこのような様式の蓮華文瓦当が最も多く確認され、公州市中洞、班竹洞など大通寺址の周辺地域と扶余旧衙里寺址、東南里遺跡でも同范品が発見されている。また、公州艇止山遺跡、扶余扶蘇山城、東南里遺跡、金德里窰址、陵山里寺址、軍守里寺址、官北里遺跡、錦城山瓦積基壇建物址、佳塔里寺址などで同范・同系品が発見されている。

したがって、公州大通寺址から出土した軒丸瓦を祖形とし、これを同範・同系関係および同じ製作技術を持った瓦当を「大通寺式瓦当」と呼ぶことができるであろう<sup>65</sup>。このような大通寺式瓦当は蓮弁文様や製作技法などの観察を通して確認される諸々の属性が南朝地域の瓦当と非常に類似しているため、南朝系造瓦集団の直接的な影響があったものと考えられる<sup>66</sup>。したがって、そのような瓦を葺いた建築物にも南朝系の寺院造営技術が反映された可能性があるといえる。

一方、公州地域で発掘された廃寺址はそのほとんどが統一新羅時代以後に属している<sup>67</sup>。熊津期の百済瓦当が出土したのは公山城、艇止山遺跡、五仁里山城、西穴寺址、大通寺址、新元寺址と扶余龍井里寺址など少数に過ぎない(図一―二二)。このうち西穴寺址、大通寺址、扶余龍井里寺址は発掘調査が実施されたものの、百済時代の遺構はほとんど検出されなかった。そこで、次に熊津期の寺院について、大通寺式瓦当が製作・使用された前後の瓦当に見られる技術的な系統や生産体制に関する検討を通して、熊津期の百済寺院の一側面について検討したい。

百済の瓦製作・使用にはいくつかの画期があった。その中で最大の画期は漢城期の草花文や銭文、獣面文など多様な瓦当文様を使用した点であり、その後、蓮華文瓦当として統一された点を指摘できる。近年、ソウル風納土城や夢村土城から少数の蓮華文瓦当が出土しているが(図一―一七の二と図一―一八)、熊津期の瓦当とは文様や製作技法が断絶する。したがって、熊津期の瓦当の画期と系統を求めることが非常に重要な課題となる。

熊津期の瓦当のうち、公山城推定王宮址の出土品が最も古い(図一―一三の一〜四)。この瓦当について、文周王三年(四七七)の重修宮室記録に注目して、劉宋・南斉の影響を受けて成立したものであり、その後寺址から出土するものは梁の影響を受けたものとする見解がある<sup>68</sup>。しかし、四七七年二月の重修宮室記録を劉宋(四二〇〜四七九)と関連付けるには無理がある。なぜならば、四七五年の漢城陥落以後、百済と劉宋・南斉の交流は、非常に制限的に行われなかったためである<sup>69</sup>。また、百済と劉宋は漢城期から活発に交流していたが、風納土城と夢村土城から出土した蓮華文瓦当の場合、文様は北朝系統であるが製作技法は「<sub>1</sub>」式で南朝の劉宋と関連付けられる<sup>70</sup>。そのため、文様と製作技法が異なる公山城出土瓦当の成立には、それ以前とは異なる系統の影響があったと見なければならぬ。

公山城出土の創建期瓦当の場合、直径が約一八〜一九センチと大きく、色調は赤色と灰色系統が混在している<sup>71</sup>。瓦当と丸瓦の接合手法は先端を加工しない丸瓦を接合させるⅢ技法(丸瓦被覆接合法)であるが(図一―一三の一―三)、これを「公山城式瓦当」と呼ぶことにする<sup>72</sup>。このような様式の瓦当の出現と関連して注目されるのは、『三国史記』東城王八年条(四八六)に見られる一連の記録である

<sup>73</sup>。東城王は四八六年二月、漢城から下ってきた旧貴族(真氏)勢力を牽制するため苜加を衛士佐平に任命するなど政治的安定を図った。同年三月、南斉に使臣を送り、七月には宮室を重修し、一〇月には大闕の南側で軍隊を査閲している。このうち、三月の南斉への使臣派遣は、七月の王宮重修に必要な技術と関連する可能性があり、一〇月に大闕南側で閲兵したことは王宮の重修工事が終わったことを意味するものであると考えられる。そこで本稿では、公山城式瓦当を四八六年に南斉の技術支援を受けて成立したものと推定したい。その後、公山城式瓦当は、大通寺式瓦当とは異なり主流を占めることはなかったがⅢ技法は七世紀代まで使用され続けた。

熊津遷都後、最初に宮室を重修した文周王三年(四七七)は、漢城陥落直後の急迫した状況であったため、外部から新たな技術を受け入れて王宮を造営したというよりは、漢城期の製瓦術や技術をそのまま利用して急造したものと考えられる。公山城内部からはまだ漢城期と関連づけられるような瓦が発見されていないが、図一―一三の五の西穴寺址出土瓦当の場合、漢城期に見られるⅡ技法(泥条盤築技法)の痕跡が確認される<sup>74</sup>。これを見ると、熊津遷都以後にも一定期間漢城期の主流的技術であるⅡ技法がしばらく維持されたと見なければならぬだろう。

熊津期の瓦製作のもうひとつの画期として大通寺址瓦当の出現を挙げることができる。先に説明したようにこの瓦当は図一―一三の六のように八葉素弁で弁端を反転する突起で表現し、小さくて低い中房、回転ナゲを利用した成形と先端部の凹面を斜めに切り出した丸瓦を瓦当と接合させるⅡ<sub>2</sub>技法を特徴とする。このような文様と製作技法は、大通寺の建立を契機に南朝梁の造瓦技術が導入されながら成立したもので、泗泚遷都以後には主流的な瓦范型となり、飛鳥寺創建瓦の一つである星組の原型となる<sup>75</sup>。

百済で最初の本格的寺院といえる大通寺址の場合、南朝梁から造瓦技術が導入されたものと見ることができ、現在まで知られている南朝の瓦当の中には類似したものがあつたものと同じではないため、直接的な祖形を探することは容易ではない。日本の飛鳥寺の瓦当文様

が百済と共通するとはいえず、完全には一致しないという点を参考にすると、百済で一定の変形が起こった可能性も想定できるだろう。ところで、王宮で使用された公山城式ではなく、大通寺式が主流的位置を占めるようになった背景はどこに求められるであろうか。筆者は大通寺式瓦当が官营造瓦工房で製作された瓦当であったためと考える<sup>76</sup>。つまり、泗泚遷都以前から大通寺式瓦当を生産した造瓦集団が新都の造営を担当した行政組織の一部で活動したため、その後主流的位置を占めるようになったのではないだろうか。

泗泚期の中央行政機関である二部司は蓋鹵王、武寧王代を経ながら順次成立したものと理解されており、家政的である内官と国政的である外官に区別される<sup>77</sup>。それらのうち、官营造瓦工房は、名称からみると内官二部の功德部や、外官一〇部の司空部の部署に所属していたものと予想されるが、その成立時期や過程についてはまだ研究されていない。

しかし、公州宋山里六号墳出土「梁官瓦為師矣」銘埴を見ると、少なくともその前後の時期に一定の変化があったことを推察できる<sup>78</sup>。この銘文でさらに注目したいことは「師」という文字である。これまでその前後の字と連結させ「師匠とする」、「模範とする」と解釈されてきたが、「実際にそれを製作した技術者」に付ける接尾辞と見る余地がある<sup>79</sup>。中国の事例を参考にすると、この銘文埴は、梁の官营造瓦工房所属の技術者である「師」が参与し、指導したと推測できる<sup>80</sup>。

宋山里六号墳や武寧王陵の文様埴は、扶余井洞里窯址（A地区）で生産されたものと考えられている<sup>81</sup>。井洞里窯址では土器と瓦埴を共に生産しているが、大通寺式瓦当は出土しない。この窯址は地表調査のみ実施されており、今後、大通寺址所用瓦を生産した可能性は残っているが、現在までの資料からは、大通寺式瓦当は不明窯A1で生産されたと思わなければならないだろう。井洞里窯址の場合、王陵の築造と関連する窯址であるため官营造瓦工房と見ることができると、将作大匠のような臨時機構で運営されていた可能性もある。埴築埴の築造に必要な埴を生産することが主な目的であったことから、それがまさに官营造瓦工房であったと断定し難い側面がある<sup>82</sup>。

五二三年の武寧王の後を継いで即位した聖王は武寧王陵を築造した当事者であった。彼は五二六年一〇月、熊津城を修葺し本格的な寺院である大通寺を五二七年に建立する。王陵の築造と王宮である熊津城の修理、大通寺の創建は聖王によって一貫して推進されたが、これは官营造瓦工場の成立という側面から非常に重要であると考えられる。なぜならば、大通寺式瓦当は梁の直接的な技術支援を受けて王陵を



築造した後、王宮を再び修理する過程を経ながら順次製作されたものと推定できるためである。井洞里窯址は、瓦搏を共に生産した遺跡であり、そこで製作・供給された武寧王陵蓮華文搏は大通寺址瓦当と文様が相通ずる点がある。また、公山城から出土した瓦当の中には、文様は既存の公山城式に従いながらも、接合技法は大通寺式のⅡ型技法に従った事例が確認される(李南奭分類のⅡ型式、図一―一三の四)<sup>83</sup>。これを見ると、大通寺式瓦当は王陵の築造や王宮の修理といった梁の技術導入過程で成立したものと考えられる。そういった土木工事が聖王代の初期に連続したことを見ると百済では博築墳を築造することで梁の技術者である「師」から技術を伝受され、その後、王宮の修理や寺院の造営を経ながら官營造瓦工房が成立したといえるだろう。

一方、慶州で発見されたいわゆる興輪寺式瓦当は、最近の調査の結果から大通寺式瓦当をモデルにしたことが明らかになった(本稿の第五章参照)。図一―一三の九の瓦当は、文様と製作技法だけでなく平瓦・丸瓦の製作技法が大通寺式瓦当や公州艇止山遺跡などで発見されるものと同じである。したがって、百済の造瓦工が派遣されて製作したものといえ、その源流となる大通寺式瓦当が南朝の影響を受けて成立したものであることから南朝―百済系瓦製作技術の範疇に属しているといえる。『三国史記』や『三国遺事』には興輪寺の創建過程において百済や南朝の影響についてなんら言及がない。そのため、中古期新羅の仏教は高句麗北朝系統の影響が強調された。しかし、百済―南朝系、特に百済の直接的支援によって製作された興輪寺式瓦当は、新羅の仏教受容過程で見過ごされてきた百済の影響を実物資料として示し、南朝仏教の影響を再認識させる契機となっている<sup>84</sup>。

百済から新羅最初の寺院である興輪寺の建立に瓦工などの技術者を派遣するためには、その内部で官營造瓦工房のようなものが成立していなければならないだろう。ところで、その技術系統が大通寺式であったということは、大通寺式瓦当を製作した工人集団が官営工房所属の工人であったということを証明するのではないだろうか。百済では泗泚遷都以前にこのような官營造瓦工房が成立していたため、新都造営に必要な大量の瓦を安定的に供給できたのであろう。その過程で大通寺式瓦当が主流的位置を占めたことは、それがまさに官營造瓦工房で生産された製品であることを示すのではないかと考えられる。

一方、大通寺式瓦当の成立以後、艇止山遺跡や龍井里寺址でこれとは若干異なる瓦当が製作・使用された。図一―一三の七の艇止山遺

跡出土品は大通寺式瓦当の文様を使用し、裏面に回転ナデの痕迹が観察できるが、接合技法は先端無加工の丸瓦を接合させるⅢ技法である。艇止山遺跡は殯殿と推定される場所で王陵の築造と深い関連を持つ<sup>33)</sup>。したがって、熊津期末期の官営造瓦工房では典型的な大通寺式瓦当だけでなく、Ⅲ技法を持つ瓦当も生産していた可能性が高い。

図一―二三の八の扶余龍井里寺址の場合、文様だけでなく瓦当と丸瓦の接合手法が、Ⅱ技法で大通寺式瓦当とは全く異なる高句麗系瓦当である。これは少数派といえるが、熊津期末や泗泚期初に高句麗の影響があったことを証明する資料で、大通寺式を作る官営工房以外の造瓦集団が別途に活動していたことを示すものといえる。龍井里寺址は、扶余地域に位置する寺院であるものの、五三八年の泗泚遷都以前か以後かを判断するのは容易でない<sup>34)</sup>。しかし、扶余官北里、双北里一帯でも高句麗系瓦当が出土していることから、熊津期末や泗泚期初に高句麗系統の影響があったことは否定し難いだろう。泗泚遷都以後、最初に建立された定林寺址で南朝系の技術だけでなく高句麗系の文化要素が共に確認されているのは、このような雰囲気と関連があるかもしれない(本稿の第六章第一節参照)。

熊津期の蓮華文瓦当は漢城期末の劉宋の影響とともに新たに南斉の影響を受けて出現するが、大通寺の建立を契機に梁の影響を受けて本格的に生産・使用される。大通寺式瓦当が泗泚遷都以後主流となって、新羅の興輪寺式瓦当の成立に影響を与えるようになったのは、それが官営造瓦工房で生産されたためであると考えられる。しかし、その前に成立した公山城式瓦当の影響が持続し、少数派であるが高句麗の影響を受けた瓦当も共存していたといえる。したがって、熊津期の寺院は大通寺を創建しながら南朝梁の寺院造営技術を積極的に導入しながらも、その後は次第に高句麗の影響も受けた可能性があると見えよう。

## まとめ

百濟は四世紀後半、枕流王代に東晋から仏教を初めて受容した。当時、百濟国内では、歴史書を編纂し、また中国と使臣が往来するなど漢字や漢文に関する理解が相当な水準にあった。これは樂浪郡の廃置に伴う多数の中国系遺民の移住と関連があるものと考えられる。百濟の仏教受容は、対外的には高句麗が仏教を通して前秦との協力を強化したことに対応し、仏教を信奉した東晋の孝文帝との紐帯強化

のために受容した可能性もある。仏教伝来以後、百済は新都である漢山に仏寺を建立したが、これは高句麗との対決構図の中で都城を莊嚴にするための象徴物のような役割を担ったのであろう。

漢城期の仏教と関連する遺物は蓮華文をモチーフにする金属器や磁器、瓦当以外には残っていないが、熊津期初期に活躍した発正の事例を見ると、漢城期末期や熊津期初期における百済の仏教活動を認められる。ソウル風納土城から出土した獣面文瓦当や蓮華文瓦当は、百済が楽浪や高句麗以外にも中国南北朝の諸国家と幅広く交流していたことを示すものであり、またその交流を通して仏教文化を輸入した可能性を示唆している。それゆえ、この時期、百済において仏教活動が認められる可能性は一層高くなる。

熊津期になると、武寧王陵から出土した多様な遺物の中で南朝仏教の要素を具体的に確認できる。武寧王陵を完成させた聖王によって建立された大通寺は百済の本格的な仏教寺院といえるが、それと関連した遺構が全く発見されていないため、出土瓦当を中心にその技術的な系統を推定するしかなかった。ここから出土した瓦当には、中国南京地域で見られる特徴的な瓦製作技術がみられ、さらに「梁官瓦為師矣」銘磚を通して、南朝梁の影響を明瞭に確認できる。大通寺址より古い段階の瓦当、特に王宮である公山城で発見された瓦当の場合、文献記録を検討してみると、南斉との関連性を類推できる。しかし、泗泚都城や慶州興輪寺址から大通寺式瓦当と同じ文様と製作技術が多数確認されるため、百済では大通寺を造営する過程で、官営造瓦工房のような官営手工業体制が成立した可能性が高い。ただ、百済では大通寺式瓦当とは異なる公山城式瓦当が持続して生産され、少数とはいえ高句麗の影響を受けた瓦当も生産されていたことを考慮すると、高句麗の造瓦術の影響もあつたものと考えられる。

<sup>1</sup> 於是百済觀勒僧、上表以言、夫仏法自西国至于漢、經三百歲、乃伝之至於百済国、而僅一百年矣。（『日本書紀』卷三十一推古天皇三二年条）  
<sup>2</sup> 末松保和「新羅仏教伝来伝説考」（『新羅史の諸問題』、東洋文庫、一九五四年）。

田村圓澄「百済仏教史序説」（『百済文化と日本文化』、吉川弘文館、一九七八年）。

- 3 李基白「百濟仏教受容年代の検討」(『震檀学報』七一・七二合集、一九九一年)…。『韓国古代政治社会史研究』、一潮閣、一九九六年)。
- 辛鍾遠「百濟仏教美術の思想的背景」(『百濟の彫刻と美術』、公州大、一九九一年)。
- 4 高句麗の場合、三七二年に前秦の符堅が仏教を下賜したことは、前燕の滅亡に協力したことに対する恩賞の意味が含まれていたため、小獸林王をはじめとする貴族たちは積極的に反対できなかったものと理解した。百濟の場合も三七二年に東晋の冊封体制に編入されたため、三八四年の仏教伝来は単に政治次元の下賜であり、百濟王とその貴族たちは仏教の受容に異議を提起できなかったのである。
- 田村圓澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』(吉川弘文館、一九八〇年)。
- 5 田村圓澄「漢訳仏教圏の仏教伝来」(『古代朝鮮仏教と日本仏教』(前掲書))。
- 6 李基白「三国時代仏教受容の実際―仏教「下賜説」批判」(『百濟研究』二九、一九九九年)。
- 7 咸安二年春正月辛丑、百濟林邑王、各遣使貢方物。(『晋書』卷九 本紀簡文帝)
- 咸安二年六月、遣使拜百濟王余旬、為鎮東將軍領樂浪太守。(『晋書』卷九 本紀簡文帝)
- 8 晋太元中、王須、義熙中、王余映。宋元嘉中、王余毗、並遣獻生口。(『梁書』卷五四 諸夷伝 百濟条)
- 9 鎌田茂雄『中国仏教史二―受容期の仏教』(東京大学出版会、一九八三年)。
- 10 趙景徹「百濟仏教史の展開と政治變動」(韓国学中央研究院博士論文、二〇〇六年、九〇―一〇頁)。
- 11 高句麗の仏教受容については次の論考が参考となる。
- 木村宣彰「曇始と高句麗仏教」(『仏教学百セミナ』三一、一九八〇年)。
- 金相鉉「中国文献所載高句麗仏教史記録の検討」(『高句麗の思想と文化』、高句麗研究財団、二〇〇五年)。
- 辛鍾遠「三国の仏教初伝者と初期仏教の性格」(『韓国古代史研究』四四、二〇〇六年)。
- 12 鄭珧鎬「高句麗仏教受容の国際社会的背景」(『人文研究』九、仁荷大人文学研究所、一九八三年)。
- 李龍範「北朝前・後期仏教の高句麗伝来」(『論文集』二二、東国大、一九七三年)…。『韓滿交流史研究』(同和出版社、一九八九年)。

余昊奎「四世紀東アジア国際秩序と高句麗対外政策の変化」(『歴史と現実』三六、二〇〇〇年)。

<sup>13</sup> この時期の東アジアの力関係は前秦、高句麗と高句麗の勢力圏にあった新羅が連盟状態をなし、これに対抗するため百済は東晋(後に南朝)と連結し、百済の勢力下にあった倭を引き入れ対抗させることで自ずから南北両勢力の対立関係を出現させることになる(金哲坡『韓国古代社会研究』(ソウル大出版部、一九九〇、九八頁))。

<sup>14</sup> 睦楨培『三国時代の仏教』(東国大出版部、一九八九年、三九〜四〇頁)。

<sup>15</sup> 李基白「三国時代仏教受容の実際」(『下賜説』批判)(前掲誌、七六〜七九頁)。

<sup>16</sup> 其人雜有新羅 高麗 倭等 亦有中国人。(『隋書』東夷伝 百济条)

<sup>17</sup> 鈴木靖民「石上神宮七支刀銘についての一試論」(『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上、吉川弘文館、一九八三年)。

<sup>18</sup> 李成珪「韓国古代国家の形成と漢字受容」(『韓国古代史研究』三二、二〇〇三年)。

<sup>19</sup> 李成市「東アジアの諸国と人口移動」(『古代東アジアの民族と国家』、岩波書店、一九九八年)。

尹龍九「中国系官僚とその活動」(『百済の対外交渉』、百済文化史大系九、二〇〇七年)。

<sup>20</sup> 牟大又表曰(牟大又表曰、按牟大通志及元龜並作牟太。又元龜九百六十三、齋武帝、永明八年正月、百済王牟太遣使上表、遣謁僕射孫副策命、知上此表在永明八年正月也。)臣所遣行建威將軍広陽太守兼長史臣高達、行建威將軍朝鮮太守兼司馬臣楊茂、行宣威將軍兼參軍臣会邁等三人、志行清亮、忠款夙著。往泰始中(往泰始中、泰始原譌太始、各本並譌、今改正)。比使宋朝、今任臣使、冒涉波險、尋其至効、宜在進爵、謹依先例、各假行職。(『南齊書』卷五八 東南夷列伝 第三九 伝東夷伝 百济国条)

<sup>21</sup> 一方、楽浪郡の段階に仏教が導入されたのかについては、現段階において資料が不足しているため判断しがたいが、中国漢代の仏教史の展開過程を参考にすると、その可能性は残しておくべきであろうと考える。

<sup>22</sup> 百済と倭の対外交渉については、『日本書紀』神功皇后 四四年(三六四)から五二年(三七二)条が伝える記録自体について多くの議論があるが、七支刀の存在を通してみると、この時期に両国の外交交渉においてかなりの進展があったものと見る事ができるだろう。

- 23 朴淳発「漢城期百済対中交渉の一例―夢村土城出土金銅鍔帯金具推考」(『湖西考古学』一一、二〇〇四年)。
- 権五栄・権度希「社倉里山一〇―一番地出土遺物の紹介」(『吉城里土城』、韓神大学校博物館、二〇〇三年)。
- 24 権五栄「考古資料を通してみた百済と中国の文物交渉」(『震檀学報』六六、一九九八年)。
- 成正鏞「百済と中国の貿易陶磁」(『百済研究』三八、二〇〇三年)。
- 韓芝守「百済風納土城出土施釉陶器研究」(『百済研究』五一、二〇一〇年)。
- 林永珍「中国六朝磁器の百済導入背景」(『韓国考古学報』八三、二〇一二年)。
- 25 成正鏞「百済と中国の貿易陶磁」(『百済研究』三八、二〇〇三年、二七―三〇頁)。
- 李漢祥『裝身具賜与体制からみた百済の地方支配』(書景文化社、二〇〇九年、一二七―一三四頁)。
- 26 『三国史記』卷二四 百済本紀二 近肖古王 二六年条。
- 27 阿莘王、枕流王之元子、初生於漢城別宮。(『三国史記』卷二五 百済本紀 第三 阿莘王即位年条)
- 28 田中俊明「百済漢城時代における王都の変遷」(『朝鮮古代研究』一、一九九七年、三四頁)。
- 29 余昊圭「漢城時期百済の都城制と防御体系」(『百済研究』三六、二〇〇二年、一五―一六頁)。
- 30 ただし、漢山の仏寺が瓦葺建物が整然と配置された泗泚時期の寺院とは異なる形態であったと思われる。具体的な形態は不明であるが、高句麗長川一号墳の壁画を参考にすると、百済の場合も仏教尊像を礼拝する新たな形式の建物が建立された可能性は排除しがたいだろう。
- 31 漢山の仏寺全体が瓦が葺かれた建物なのか、部分的にのみ葺かれた建物なのか、または草屋なのかは不明である。しかし、漢城時期の瓦出土事例を見ると、少なくとも部分的な瓦葺きは行われていた可能性が高いと考えられる。その場合、過去に使用された瓦当は時期的に蓮華文瓦当が使用される以前であるため、蓮華文以外の別の文様が使用されたものと見なければならぬ。
- 32 余昊圭「漢城時期百済の都城制と防御体系」(前掲誌、一六―一七頁)。
- 33 趙景徹は、阿莘王の教書が下されたことは辰斯王の即位が仏教の受容に反対する勢力と関連があるかも知れないという見解を提起している。

趙景徹「百濟仏教史の展開と政治変動」(前掲誌、四七頁)。

<sup>34</sup> 李道学「漢城末熊津時代百濟王位継承と王権の性格」(『韓国史研究』五〇・五一合集、一九八五年、六〇七頁)。

<sup>35</sup> 悉土という用語は『魏書』や『水経注』など中国の史料の中で五胡十六国のひとつであった大夏の築城に関する事例が見られ、大夏の赫連勃勃が築いた統万城遺跡の調査で確認されたという。悉土は石灰を主材料とし、粘土と石を混ぜて堅固にする方法で日本では三和土と呼ばれる。また、蓋鹵王代に蒸土築城した背景には北魏や五胡十六国との交流があったとした。

門田誠一「三国史記百濟本紀所載の築城用語考」(『古代東アジア地域相の考古学的研究』、学生社、二〇〇六年)。

<sup>36</sup> 安啓賢「百濟仏教に関する諸問題」(『百濟仏教文化の研究』、一九九四年、一八八〜一八九頁)。

<sup>37</sup> 謙益の求法活動を信頼できるという見解(小玉大圓「求法僧謙益とその周辺(上・下)」(『馬韓百濟文化』八・一〇、一九八五・一九八七年)もあるが、根拠となる「弥勒仏光寺事蹟」に後代の用語が含まれているため、信頼できないという反論もある。

<sup>38</sup> 吉村怜「百濟武寧王妃木枕に画かれた仏教圖像について」(『美術史研究』一四、一九七七年)…。『中国仏教圖像の研究』(東方書店、一九八三年)。

姜友邦「武寧王妃頭枕と足座の靈気化生の造形解釈と圖像解釈」(『武寧王陵を格物する―武寧王陵発掘四〇周年記念特別展』、国立公州博物館、二〇一一年)。

<sup>39</sup> 武寧王陵の墓誌石や蓮華文磚など出土遺物を通して、それらが南朝の影響を受けたものであることは明らかである。これを根拠にして吉村怜は聖王代に日本へ伝られた日本最初の仏教は南朝系の仏教であったと見ている。

吉村怜「仏教美術の東アジアへの伝播」(『東アジア社会と仏教文化』、春秋社、一九九六年、一八三〜一八六頁)。

<sup>40</sup> 金理那「百濟初期仏像様式の成立と中国の仏像」(『百濟史の比較研究』、一九九三年)…。『韓国古代仏教彫刻比較研究』(文芸出版社、二〇〇三年)。

<sup>41</sup> 新羅地域で出土した仏教関連遺物に対する検討は次の文献が参考となる。

- 朴光烈「新羅瑞鳳冢と壺杆塚の絶対年代考」(『仏教考古学』二、二〇〇二年)。
- 朴光烈「新羅積石木槨墳出土黄金遺物と初伝仏教」(『文化史学』二七、二〇〇七年)。
- <sup>42</sup> 宋義政・尹炯元『法泉里』(国立中央博物館、二〇〇〇年)。
- <sup>43</sup> 趙源昌「法泉里四号墳出土青銅蓋蓮花突帯文の意味」(『百済文化』三三、二〇〇三年)。
- <sup>44</sup> 賀云翱「南朝時代建康地域蓮花文瓦当の変遷過程および関連問題の研究」(『漢城期百済の物流システムと対外交渉』、韓神大学術院、二〇〇三年)。
- <sup>45</sup> 穴澤 光・馬目順一「羅州潘南面古墳群」(『古代学研究』七〇、一九七三年)。
- 朴普鉉「金銅冠からみた羅州新村里九号墳乙棺の年代」(『百済研究』二八、一九九八年)。
- 毛利光俊彦「古代朝鮮冠(百済)」(『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集』、一九九九年)。
- <sup>46</sup> 李漢祥『装身具賜与体制からみた百済の地方支配』(書景文化社、二〇〇九年)。
- <sup>47</sup> その他にも栄山江流域では羅州伏岩里三号墳から朱漆で「卍」が書かれた土器が発見されている。
- <sup>48</sup> ソウル大博物館『龍院里遺跡C地区発掘調査報告書』(ソウル大人文学研究所、二〇〇一年)。
- <sup>49</sup> 韓芝仙「風納土城慶堂地区再発掘調査成果」(『様式の考古学』、韓国考古学会、二〇〇八年)。
- <sup>49</sup> 文東錫「漢城百済の茶文化と茶確」(『百済研究』五六、二〇一二年)。
- <sup>50</sup> 漢城時期の瓦に関する研究については以下の論考が参考となる。
- 権五栄「漢城期百済瓦の製作伝統と発展の画期」(『百済研究』三八、二〇〇三年)。
- 鄭治泳「漢城期百済瓦製作技術の展開様相」(『韓国考古学報』六三、二〇〇七年)。
- 鄭治泳「百済漢城期瓦当の形成と系統」(『韓国上古史学報』六四、二〇〇九年)。
- 亀田修一『日韓古代瓦の研究』(吉川弘文館、二〇〇六年)。



山崎信二「百済の瓦生産」(『古代造瓦史―東アジアと日本』、雄山閣、二〇一一年)。

<sup>51</sup> 蘇哉潤「百済軒丸瓦製作技法と生産体制の変化―風納土城出土品を中心に」(『百済学報』四、二〇一〇年)。

<sup>52</sup> 賀云翱『六朝瓦当与六朝都城』(文物出版社、二〇〇五年、二一〜三二頁)。

<sup>53</sup> 鄭治泳は四世紀中盤前後と推定している(鄭治泳「百済漢城期瓦当の形成と系統」(前掲誌、一一〇頁)。

<sup>54</sup> ただ、筆者は獣面文瓦当が出土した慶堂地区二〇六号遺構、つまり井戸址出土土器の中心年代(権五栄「聖なる井戸の祭祀」(『地方史と地方文化』一一卷二号、二〇〇八年)と旧ミレ集落敷地の地貯蔵用竪穴から出土した青磁碗などを通してみると、獣面文瓦当の年代は三八四  
<sup>55</sup> 年より若干古い四世紀中後半段階に該当するのではないかと推定している。

<sup>55</sup> 岡村秀典・向井佑介編「北魏方山永固陵の研究」(『東方学報』八〇、二〇〇七年、一三八〜一三九頁(図七七八、図八一二五))。

<sup>56</sup> 申云艶『中国古代瓦当研究』(文物出版社、二〇〇六年、一六八頁(図一一一一))。

<sup>56</sup> 中国における蓮華文瓦当の出現は南朝の場合、東晋晚期、北朝の場合は北魏時代と考えられている。

銭国祥「漢魏洛陽城出土瓦当的分期与研究」(『考古』一九九六一〇期、一九九六年)。

銭国祥「中国魏晋南北朝時代の瓦当」(『古代東アジア三国の対外交渉』、国立慶州博物館、二〇〇〇年)。

賀云翱「南朝時代建康地域蓮花文瓦当の変遷過程および関連問題の研究」(前掲書)。

賀云翱「蓮花文瓦当」『六朝瓦当与六朝都城』(前掲書)。

<sup>57</sup> 亀田修一「漢城時代の瓦」『日韓古代瓦の研究』(前掲書、三一頁)。

ただし、趙源昌は百済の漢城陥落以後である五世紀後半から六世紀前半に編年しつつ、高句麗のものと把握している(趙源昌「夢村土城出土伝百済瓦当の製作主体検討」(『先史と古代』二九、二〇〇八年、二四二頁)。

<sup>58</sup> 趙景徹「百済聖王代大通寺創建の思想的背景」(『国史館論叢』九八、二〇〇二年)。

文東錫「梁武帝の仏教政策について―百済と関連性を中心に」(『東亞考古論壇』二、二〇〇六年)。

<sup>5</sup> 9 近藤浩一「百済時期の孝思想受容とその意義」(『百済研究』四二、二〇〇五年)。

<sup>6</sup> 0 図一―九の「大通」銘文字瓦は公州大通寺址と扶余の扶蘇山城から同範の文字瓦が出土した。共伴した瓦当や他の遺物との相対年代を考慮すると、五二〇年代後半と見ても無理はないと考える。

<sup>6</sup> 1 軽部慈恩『百済美術』(宝雲舎、一九四六年)。

<sup>6</sup> 2 朴容墳「公州大通寺址出土瓦当研究」(『考古美術』一一一・一二二合集、一九七四)。

李南奭・徐程錫『大通寺址』(公州大博物館、二〇〇一年)。

<sup>6</sup> 3 清水昭博「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開」(『日本考古学』一七、二〇〇四年)…。『古代日韓造瓦技術の交流史』(清文堂、二〇一二年)。

<sup>6</sup> 4 本稿では瓦当の接合技法について、第三章第二節を除くと、全て図一―一の模式図を使用した。Ⅰ技法：円筒接合後分割法は瓦当背面に円筒形の丸瓦を接合した後、不必要な丸瓦の下部を切削する方式で、泥条盤築技法、背面接合法とも呼ばれる。Ⅱ技法：丸瓦加工接合法は瓦当と連結する丸瓦の先端部を一度または二度調整して付着させる方式で、百済瓦当の事例を参考にすると、丸瓦先端部の形態は今後、より細分化できる余地がある。Ⅲ技法：丸瓦被覆接合法は瓦当背面に無加工の丸瓦を連結させたものであるが、丸瓦先端部が瓦当上部の周縁部をなす方式で、SR(Side Round Tile)技法、周縁接合法ともいう。

<sup>6</sup> 5 朴容墳「百済瓦当の体系的分類―軒丸瓦を中心として」(『百済文化と飛鳥文化』、吉川弘文館、一九七八年)。

<sup>6</sup> 6 北朝と対比される南朝瓦当の特徴としては、瓦当裏面の回転ナゲ調整、丸瓦接合時に瓦当裏面に刻み目が無い、瓦当の外縁高が高い、蓮華文が平たく外区内縁に珠文が無い点など指摘されている。

佐川正敏「南北朝時代から明時代まで造瓦技術の変遷と変革」(『古代』一二九・一三〇合併号、二〇一一年、五―八頁)。

<sup>6</sup> 7 これまで百済の廃寺址として知られてきた公州地域の主要寺院は全て統一新羅時代に属するという。

趙源昌「公州地域寺址研究―伝百済寺址を中心に」(『百済文化』二八、一九九九年)。

<sup>6</sup> 李タウン「百済の瓦生産―熊津時代・泗泚時代を中心として」（『韓半島考古学論叢』、西谷正編、すずさわ書店、二〇〇二年）。

<sup>6</sup> 四七五年の漢城陥落後、百済は四七七年三月、劉宋に使臣を派遣したが、高句麗が道を塞ぎ戻らなければならず、南斉（四七九〜五〇二）建立

以後の四八四年七月にも南斉に使臣を派遣したが、西海で高句麗の軍師と出会い、行くことができなかつたという記録があるためである。

<sup>7</sup> 鄭治泳「百済漢城期瓦当の形成と系統」（前掲誌）。

<sup>7</sup> 公州師範大学博物館『公山城百済推定王宮址発掘調査報告書』（一九八七年）。

李南奭「百済蓮華文瓦当の一研究―公山城王宮址出土品を中心に」（『古文化』三二、一九八八年）。

<sup>7</sup> 戸田有二「百済の鏡瓦製作技法について（一）」（『百済文化』三〇、二〇〇一年）。

<sup>7</sup> 八年春二月、拜苜加為衛士佐平。三月、遣使南斉朝貢。秋七月、重修宮室築牛頭城。冬十月、大闕於宮南。（『三国史記』卷二四 百済本

紀第三 東城王 八年条）

<sup>7</sup> 戸田有二「百済の鏡瓦製作技法について（Ⅱ）」（『百済文化』三七、二〇〇七年）。一方、慶州月城垓字から出土した百済系瓦当（六世紀前

半）でも「一技法が確認されている（本稿の第五章参照）。

<sup>7</sup> 清水昭博「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開」（前掲誌）。

<sup>7</sup> 公山城式の接合技法（目「技法」）は泗泚時期にも継続して使用され、慶州地域から出土した瓦当の中にも公山城式の接合技法を持つ事例が確認されることを見ると（本稿の第五章参照）、公山城式も継続して命脈を維持したことは明らかである。しかし、泗泚遷都以後に建立された建物址の大部分から大通寺式瓦当が例外なく出土している状況を見ると、公山城式より最新の技術が反映された大通寺式が、その後より主流になっていったといえる。これは泗泚遷都前後、中央行政官署の整備過程において、大通寺式が官営工房の成立過程でより中心的な位置を占めていたためではないかと考える。ただ、泗泚時期の造瓦工房が内官一二部のうち功德部や外官一〇部の中の司空部など二元的な体制を維持していたとすれば、公山城式瓦当も官営工房で生産された可能性自体は残る。泗泚遷都以後、王宮区域で使用された瓦当の型式と製作技法がどのようなものであるか、明らかになれば、この部分についてより明確に言及できるであろう。

<sup>77</sup> 武田幸男「六世紀における朝鮮三国の国家体制」(『東アジア世界における日本古代史講座』四、学生社、一九八〇年)。

<sup>78</sup> この銘文磚について「梁宜以為師矣」と判読し、「梁人宜が塚師として墳墓の築造を監制した」と解釈する見解もある(趙胤宰「公州宋山里六号墳銘文磚判読に対する管見」(『湖西考古学報』一九、二〇〇八年)。「梁」と「為師矣」という文字については異見がないが、他の二文字は「官品」や「良瓦」と判読されている。

<sup>79</sup> 漢魏洛陽城から「吏」「師」という文字瓦が多く出土しているが、「吏」は監督の役割をした監作吏であり、「師」は実際に瓦を製作した工人で、少府や将作大匠に所属したものと推定した見解がある(向井佑介「魏の洛陽城建設と文字瓦」(『待兼山考古学論集』四、大阪大学考古学研究室編、二〇一〇年)。また、南京出土「張承世師」銘磚を磚製作匠師の職級と理解する見解があり(趙胤宰「公州宋山里六号墳銘文磚判読に対する管見」(前掲誌)、最近南京では「官瓦」や「官窯」、「官」が押捺された文字瓦が発見されていることを考慮すると(鎮江古城考古所・鎮江博物館「鎮江鐵甕城南門遺址発掘報告」(『考古学報』四期、二〇一〇年)、宋山里出土銘文磚の「師」も古墳築造の監督者である塚師ではなく、磚の製作者を指すものと限定する必要があるだろう)。

<sup>80</sup> この銘文を「梁官以為師矣」と釈読すると、「梁官が師となった」。つまり、梁の官営工房にいた技術工人が磚を作る「師」であったと解釈できるだろう。ただ、「以」を「品」とみることもできるため確実ではない。

<sup>81</sup> 金誠龜「扶余の百濟窯址と出土遺物について」(『百濟研究』二二、一九九一年)。

<sup>82</sup> 南朝において国家的な造営事業に関与した官署としては少府と将作大匠があった。その中で少府傘下の甄官署で瓦磚の製作を担当したが、将作大匠の場合、「有事即置 無事即罷」する臨時的性格があり、宮殿や宗廟、皇帝陵など大規模事業時に置かれた。梁では天監七年(五〇八)に少府を少府卿、将作卿に改称した。一方、本稿で述べる官営造瓦工房とは、中央行政機関である二部司傘下に常設されていた官署を指す。百濟の場合、瓦博士の存在を通して見ると、それ以前から官営造瓦工房があったといえるであろう。

<sup>83</sup> 李南奭「百濟蓮華文瓦当の一研究—公山城王宮址出土品を中心に」(前掲誌)。

<sup>84</sup> 新羅の仏教受容過程における梁と百濟の影響を強調した見解があったが(藺田香融「東アジアにおける仏教の伝来と受容」(『関西大学東西

『學術研究所紀要』二二六、一九八九年、一七頁）、比較対象が適切でなかった（本稿の第五章参照）。

<sup>85</sup> 李漢祥「百済の葬礼風習」（『百済の生活と文化』、百済文化史大系二二、二〇〇七年）。

<sup>86</sup> 扶余文化財研究所『龍井里寺址』（一九九三年）。

## 第二章 泗泚遷都と百濟式寺院の成立―定林寺址―

### はじめに

現在の忠清南道扶余邑一円には、百濟時代の寺院址が二五ヶ所ほど知られている(図二一)。<sup>1)</sup> そのうち定林寺址は扶余の中心部に位置する百濟泗泚期の代表的な寺址である。この時の中心部という概念は扶余郡や扶余邑といった現在の行政区域を念頭に置いたものでなく、羅城と白馬江を境界にするその内部地域の中心という意味である。五三八年の遷都当時の泗泚都城は羅城と白馬江を境界にして、その内側に主要施設が位置したことが確實視されるため、定林寺址がその地理的な中心部に位置するといえるだろう。定林寺址のこのような立地的特性はこの寺址が都城内部で非常に重要な地位と役割を担ったことを示唆するものであることから注目される。

定林寺址については朝鮮後期の地理書である『輿地圖書』や『大東地志』に平濟塔(五層石塔)に関する記録が見られ、呉慶錫の『三韓金石録』(一八五八年刊行)に「大唐平百濟国碑銘」が収録されるなど比較的早くから百濟の廢寺址として知られてきた。<sup>2)</sup> 二〇世紀前半には喜田貞吉・杉山信三・米田美代治など日本人の学者によって五層石塔に刻まれた銘文と石塔に対する調査が行われた。<sup>3)</sup> 一九四二～四三年には藤澤一夫によって講堂址と金堂址と金堂址一帯に対する試掘調査も実施された。<sup>4)</sup> 一九四五年以後、五層石塔の年代や伽藍配置などに対する部分的な議論があつたが、この遺跡に対する本格的な研究は一九七九年の忠南大学校博物館による発掘調査からであるといえる。

忠南大学校博物館による調査の結果は尹武炳によつてただちに報告書として刊行された。ここでは伽藍配置と建物の平面計画、基壇の構造をはじめとして仏像と塑像、瓦、土器などに対する貴重な資料が紹介されている。<sup>5)</sup> その後、定林寺址周辺の遺跡整備のために発掘調査が行われ、方形蓮池が新たに確認された。<sup>6)</sup> 一連の発掘調査を担当した尹武炳は、定林寺址五層石塔の基壇部に対する調査を根拠にして、この寺址には創建期から石塔が立てられていたと主張した。<sup>7)</sup> 彼の主張は弥勒寺址石塔と定林寺址石塔の前後問題、つまり「百濟石塔の前後問題」に関する論争の端緒になつた。その後、金正基の反論と他の学者の再反論が続くなどこれ以降、定林寺址に関する研究は五層石塔の編年問題が議論の中心となつた。<sup>8)</sup>

五層石塔以外にも定林寺址出土遺物と遺跡についての部分的な検討があった。美術分野において文明大は陶俑と仏像など出土遺物を簡略に紹介した。彼はここから出土した仏・菩薩像と陶俑が北魏時代のものと同様であるため、少なくとも六世紀中半に製作された北朝系統の彫刻品であるとした。金理那は三国時代の捧持宝珠形菩薩立像(以下、捧宝珠菩薩像)に対する研究の中で蠟石製三尊仏片と塑造菩薩像片を六世紀後半と比定し、中国・日本の捧宝珠菩薩像と比較している<sup>10</sup>。

出土量が最も多い瓦については、蓮華文瓦当の蓮弁文様と製作技法を中心に泗泚期における瓦当の分類と編年、同范・同文関係を把握した亀田修一の研究がある<sup>11</sup>。平瓦と丸瓦の文様と銘文の内容、製作技法などを通時的に整理した徐五善の研究も特筆されるものである<sup>12</sup>。その他に「大唐平百濟国碑銘」の訳註および銘文の作成背景に対する文献史的研究<sup>13</sup>と籠冠をかぶった陶俑を中心に南北朝時代の服飾や冠飾と比較した服飾史分野の研究もある<sup>14</sup>。

定林寺址についての既存の研究は、三国や泗泚期全体を扱いながら部分的に定林寺址出土遺物を言及する水準であった。また、研究者が関心を持つ資料を取捨選択して利用したため全体的な脈絡を度外視していた。最も多くの研究論文が発表された五層石塔の編年問題についても様式的な側面と遺構の層位問題にのみ関心が集中し、遺跡全体における遺物の組合せや遺構と遺物の関係については無関心であった。すなわち定林寺址の発掘過程で確認された遺跡と遺物の関係を共に考慮できなかったのである。また、近年、重要視されている伽藍配置についても東西回廊址北側のいわゆる付属建物址の存在を浮き彫りにすることに成功したが<sup>15</sup>、以前に発掘された資料と新たな遺構をどのように合理的に解釈するのかについてより綿密な検討が必要であると考える。

そこで本章では定林寺址出土遺物と遺構の関係を新たに把握し、定林寺址が泗泚遷都以後、最初に完成した百濟式寺院であるという点を明らかにしたい。そのために第一節では定林寺址から出土した塑像を中心にその製作技法と奉安場所、製作時期と系統をはじめとして定林寺址の創建期に見られる伽藍配置の特徴について整理する。なぜなら、塑像は、塔の建立時期だけでなく、この寺院の創建時期を推定できる最も有用な資料だからである。第二節では定林寺址出土塑像と『日本書紀』の丈六尊像造成記録が一定の関連性を有していることを推論し、これを基に創建の背景と目的、泗泚都城内で定林寺址が持つ地位と役割について推定する。

## 第一節 定林寺址出土塑像と伽藍配置の特徴

### (一) 塑像の奉安場所と製作時期・系統

一九七九年に実施された定林寺址の再調査では西回廊址南西側の瓦廃棄竪穴と金堂址外郭から一〇〇点を越える塑像片が出土した。最初の発掘報告書で報告者は土で作られた人物の頭部像や上半身、下半身など多様な形態の泥像を「陶俑」と呼んだ<sup>16</sup>。しかし、俑とは本来葬送儀礼に用いる明器を指す<sup>17</sup>。定林寺址は廃寺址であるため、そこから出土した小型の塑像を陶俑と呼ぶことは適切でない。したがって本稿ではそれよりさらに包括的な用語である「塑像」あるいは「塑造人物像」と呼ぶことにする。定林寺址のように塑像あるいは塑造人物像が出土した事例としては洛陽永寧寺や日本の法隆寺五重塔、平城薬師寺木塔址などが参考となり、日本ではこれを影塑像あるいは塔本塑像、塑壁などと呼んでいる<sup>18</sup>。これまで泗泚期の百濟古墳では陶俑や塑造人物像が一点も出土していない。そうした点から定林寺址から出土した塑像は古墳の副葬品でなく、寺院を荘厳した彫刻の一部である可能性が高い。遺物の名称を新たに命名することによって、その性格や奉安場所といった全く異なる次元の主題を検討する余地が生まれるのである。

定林寺址から出土した塑像はその大部分が西回廊址と南回廊址が接する南隅の大型竪穴から赤色の焼土、瓦片と共に出土した(図二一)。瓦廃棄竪穴は南北九・五メートル、幅二・八メートル、深さ約一・二メートルの不定形を呈し、北側にいくほど幅が広くなり深さも深くなる。一九八一年に刊行された発掘報告書で紹介された九〇点余りの塑像片と報告から漏れた五〇点余りの塑像片、そして最近再調査された塑像は大部分がここから出土した<sup>19</sup>。ただし、報告書で瓦製仏耳破片、瓦製仏身破片A・Bと紹介されている大型塑像の場合、金堂址の東北隅外郭、金堂址の西側と東回廊址の南側で発見された。

ここから出土した塑像は大きさによって基本的な分類が可能であり、大型塑像の場合、瓦製仏耳破片と瓦製仏身破片AとBがある(図二二)。ところで、瓦製仏身破片AとBは金堂址の東西から直線距離で四〇メートル以上離れた場所から出土しているが、現在は図二二三の二のように二点が互いに接合したまま保管されていた。大型塑像の場合、少数しか出土しておらず、色調や製作技法が瓦廃棄竪穴か



ら出土した塑像と違うため、その奉安場所もそれぞれ異なった可能性があると考える。

定林寺址の瓦廃棄竪穴から出土した塑像には大型のものではなく、中型塑像、小型塑像、情景塑像（影塑像）の破片がある<sup>20</sup>。等身大より小さい一メートル前後の中型塑像の場合、捧宝珠菩薩像片と螺髪、仏手・仏足片、衣褶片などがある（図二二四）。その中で捧宝珠菩薩像片の場合、残存高二五センチで左手を上にして宝珠を捧げているが、金堂址と西回廊址の間から出土した蠟石製三尊仏片の左側脇侍菩薩像でも捧宝珠菩薩像が確認されており注目される（図二二五）。中型塑像には未報告資料が多数含まれているが、仏足片と衣褶片が代表的である（図二二四の四）。仏足片の場合、正面中央に〇・五センチ大の穴があげられており、右側には二条の衣文が陰刻されている。衣褶片の場合、流麗な曲線によって表現された天衣と考えられるが、端部には黒色の漆痕が残っている。中型塑像の場合、芯木を使用して骨組を作った後、粘土を付け加えて形作り、彫刻刀で衣文などを施したものと考えられる。焼成後には白色や黒色の彩色を施した。このような製作工程は洛陽永寧寺の手捏法による成形方式と同じである<sup>21</sup>。

小型塑像は大きさが五〇センチ前後で仏頭や頭冠が大部分である（図二二六）。その中で仏頭AとB、D+Eは同じ胎土と形態、製作技法で作られた同范品と考えられる。この仏頭の頭部には小さな穴があげられているが、宝冠などの装飾を結合した痕跡と考えられる。したがって、この仏頭は如来像というよりは菩薩像や天部像の頭像であったと考えられる。一方、仏頭Cは顔の右側部分の一部のみ残っているが、仏頭Aより大きく写実的である（図二二六の四）。裏面は平らであるが右耳部分に仏頭Aの左耳が結合して配置されていたものと考えられる痕跡が見られる。小型塑像の場合、同范関係の仏頭が確認される点から范型を利用したものと考えられる。范抜の場合、背面が平らであったり、その形態が少しづつ異なることから片面范を利用した単模製と考えられる。小型塑像の製作技法において注目されるのは、仏頭Aの同范品において黄褐色の釉薬が施釉された痕跡が観察される点である。このような施釉工程は他の塑像の彩色過程と同じものと考えられ、小型塑像の製作過程において焼成が行われたことを明確に示すものといえる。

情景塑像は大きさが二〇センチ前後で頭像と身像（上半身と下半身）に区分できる（図二二七）。頭像の場合、籠冠のような冠をかぶっているものと巻髪、剃髪をしたものが混ざっている。上半身の場合、合掌したり拱手の姿勢をしたもの、仏子のようなものを持ったもの、

腕に布をかけているもの、盾を持っているものなどがある。下半身の場合、多様な形態の衣文と履き物が確認され、盾を持った武人像と文官の下半身と推定されるものがある<sup>22)</sup>。また、下半身Qのように半跏像片や浄瓶を持っている胴体片も混ざっている(図二一八)。その他の塑像としては動物と植物装飾があるが、動物像の場合、獣足・獣眼片などが残っているだけで、植物像の場合、二種以上の木葉装飾が精巧に表現されている(図二一八の三)。

情景塑像は精選された胎土を使用し、片面范を用いた単模製で作られており、黒色と白色、紫色など彩色の痕跡が見られる。大部分、半損したり切断した状態で出土しているため製作技法の観察は容易であり、頭部と胴部を別に作った後で接合する頭体別製式で製作され、その内部には芯木を使用していたことが分かる。頭像の場合、頸部が円筒形をなすが、上半身の場合、胸部上側に窪みを作って差し込むことができる(図二一九)。このような製作方式は小型塑像や中型塑像の場合も同じであったと考えられる。芯木は頭部と胴部の連結だけでなく、上半身と下半身を連結する場合にも使用された。芯木の材料は大部分円形の木材を用いるが、小型・中型塑像には角材を用いた。前述したようにここから出土した塑像は完形ではなかったため、これまで関心を引くことがなかった。しかし、破片の状態が残っていることから容易に製作技法を観察することができる<sup>23)</sup>。その塑像の製作技法を整理してみると以下のようなようになる。まず、塑像には、不純物がほとんど混ざっていない精選された胎土を利用しており、その大部分が頭部と身体を別途に製作して接合する頭体別製式によって作られている。また、小型塑像や情景塑像は木質の芯木を使用した痕跡が見られるが、中型塑像は葦や藁を束ねるか、木材に藁縄を巻きつけたものを骨組にして粘土を付け加える方式を取っている。塑像の大部分は黒色や白色、紫色など彩色の痕跡が見られ、一部の仏頭では黄褐色の釉薬が施されていることが明確に観察できる(図二二六の一)。

塑像の成形方式を見ると、大型や中型塑像は手捏法を使用しているが、小型・情景塑像には范型を活用している。范型を利用する成形は正面と背面を前後に接合させた合模製は見られず、片面の范型を利用する単模製が主流をなす。正面観を重視した傾向を読みとることができる。

塑像の製作地も推定しうる。まず、硬度が低く破損しやすいという特性、次に、中国製陶俑や塑像と比較すると細部の表現に見られる

質的な違い、そして瓦陶兼業窯である青陽汪津里窯址や本義里窯址から塑像片と台座片が出土した点など（本稿の第四章第二節参照）を考慮すると、塑像は泗泚都城隣近の窯址や瓦工房で製作されたものと考えられる。ただ、塑像という新たな技術と様式の紹介は外部からそれを専門的に製作できる技術者集団の移住を想定することが適切だともおられるが、技術的には瓦工のような現地の工人を動員した可能性もなくはない<sup>24</sup>。

では、このような塑像はどこに安置されたのであうか。定林寺址出土塑像の奉安場所として最も有力な場所は木塔である。北魏の洛陽永寧寺や日本の法隆寺五重塔初層の塔本塑像の事例をはじめとして、泗泚期の木塔関連遺跡で塑像片が共伴している点が最も重要な根拠である。つまり、これまで中国南北朝地域で出土した塑像は、ほぼ例外なく木塔址から出土している。大同市方山思遠仏寺遺跡や朝陽市北塔下層遺跡、内蒙古固陽県北魏城址、河南省洛陽永寧寺址、河北省趙彭城廢寺址など現存する北朝の仏教寺院遺跡では、遺構が不明な内蒙古固陽県北魏城址を除くと、全て木塔と塑像という組合せ関係が確認される<sup>25</sup>。

このように仏塔の内部に塑像を安置する方式は、中国南北朝時代から始まったものである。『法苑珠林』には「江陵長沙寺殿前の塔内には劉宋の譙王義季（元嘉二四年、四四七年卒）が作ったと伝えられる塑像が安置されている」という記録が残っており<sup>26</sup>、その起源が五世紀前半以前に遡る。特に最近、南朝地域では鍾山二号寺址（伝上定林寺）をはじめとして<sup>27</sup>、南京市内の紅頭橋付近の寺址（伝延興寺）<sup>28</sup>、その他に秦淮河一帯の推定寺址でも塑造仏頭片と身体片が新たに確認された（図二一〇）。このように少数の事例ではあるが南京地域で塑像が出土していることは、定林寺址出土塑像の系統や奉安場所を考慮するうえで非常に重要な意味を持つと考える<sup>29</sup>。

また、泗泚期における仏教寺院の木塔址付近から塑像を共伴する事例が多数確認されている点も注目される（表二一）および本稿の第四章第二節参照）。その中で六世紀中後半に建立された陵山里寺址や旧衙里寺址の木塔址付近から出土した事例は、定林寺址や洛陽永寧寺出土品と非常に類似する。これを通して定林寺址創建期に塔内塑像で荘嚴された木塔があり、そのような技術が百濟滅亡期まで続いたことを推定できる。つまり、定林寺址から出土した塑像は法隆寺五重塔の塔本塑像と類似する形態で、木塔の初層塔身を装飾していたものである。

〈表二一〉 百濟泗泚期における塑像の出土遺跡と出土品

遺跡名	出土塑像の内訳	関連遺構	中心時期	参考文献
扶余陵山里寺址	塑造仏坐像(二点)、塑造頭像片、塑造人物像片(身像、二点)、塑造人物像片(頭像)、木葉裝飾(六点)、不明塑像片	木塔址および中門址、北側排水路	567年前後	8・9
扶余旧衙里遺跡	塑造人物像片(頭部欠失)、羅漢像片(二点)、塑造動物像(熊?)	遺構未詳(木塔心礎石発見)	六C後半	7・11
扶余臨江寺址	塑造人物像片一(頭部欠失)、塑造人物像片二(頭部欠失)、塑造動物像片、仏足片、蓮花文裝飾片	收拾調査	六C後半	12
青陽汪津里窯址	塑造人物像片(身像片、手印片)	四号平窯	六C後半~七C前半	13
青陽本義里窯址	陶製仏像台座	登窯	七C前半	5
扶余扶蘇山廢寺址	塑造人物像片(頭像)、塑造動物像片、壁画片(二点)	金堂址・木塔址近隣	七C前半	6・7
扶余旧橋里遺跡	塑造仏頭片(如来像)	未詳	七C前半	7
恩山金剛寺址	螺髮片、足片、下半身片(未報告)	金堂址、収集品	七C前半	1
益山帝釈寺址 廢棄場	塑造天部像片(頭像)、塑造悪鬼像片(頭像)、塑造動物像片(頭像)、衣文片、耳部片、壁板類	廢棄場(金堂址・木塔址)	七C前半(639年以前)	9
益山弥勒寺址	塑造仏身(胴体片)、塑造仏像片(膝状片)、塑像片(彩色片 三点)、埴仏片、螺髮(八〇余点)、壁画片	中金堂、西院金堂址、木塔、西塔址、西石塔の下部	七C中葉	2・3 4・14

1. 尹武炳『金剛寺－扶余郡恩山面琴公里百濟寺址発掘報告』(国立博物館、一九六九年)
2. 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(飛鳥資料館図録第一四冊、一九八五年)
3. 文化財管理局文化財研究所『弥勒寺址－発掘調査中間略報告』(一九八二年)
4. 文化財管理局文化財研究所『弥勒寺－発掘発掘調査報告書』I(図版編、一九八七年)
5. 朴永福「青陽陶製仏像台座調査報告」『美術資料』四九(国立中央博物館、一九九二年)
6. 申光燮「扶蘇山城－廢寺址発掘調査報告」(『扶蘇山城－発掘調査報告書』、一九九六年)
7. 国立扶余博物館『国立扶余博物館』(図録、一九九七年)
8. 国立扶余博物館『陵寺－扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(二〇〇〇年)
9. 円光大博物館『益山王宮里伝瓦窯址－帝釈寺廢棄場』(博物館学術叢書二三、二〇〇六年)
10. 韓国伝統文化学校『扶余陵山里寺址-第九次発掘調査報告書』(二〇一〇年)
11. 李炳鎬「扶余旧衙里出土塑像とその遺跡の性格」(『百濟文化』三六、二〇〇七年)
12. 李炳鎬「扶余臨江寺址出土塑像について」(『扶余臨江寺址』、扶余郡、二〇〇七年)
13. 国立扶余博物館『青陽汪津里窯址』(二〇〇八年)
14. 国立文化財研究所『弥勒寺址石塔-基壇部発掘調査報告書』(二〇一二年)

定林寺址の木塔内部を荘嚴する塔内塑像は本来どのような姿であったのか。木塔に奉安された塔内塑像の大部分が破片で出土しているため、完全に復元することは極めて難しい。しかし、中国や日本、韓国の木塔関連資料を検討してみると、塔内塑像は木塔の心柱や四天柱の周囲に位置したものと考えられる。そして、その具体的な姿は数的に最も多く出土している情景塑像を通して少しではあるが推定できるであろう。籠冠や小冠をかぶった人物像、僧祇支を着て合掌する人物像、盾を持っている武人像、木葉裝飾片などはストーリーがあるなんらかの場面が演出されたことを示唆する。

そこで南朝の伝顧愷之作「洛神賦図」や南朝の墳墓で確認される博画、四川省綿陽市平楊府君闕上の闕身造像（図二一〇一）<sup>30</sup>をはじめとして北朝の龍門石窟賓陽中洞前壁浮彫や鞏県石窟第一・三・四窟の礼仏図（図二一一二）、北朝の墳墓の壁画などに見られる出行図や礼仏図が注目される。周知のとおり中国の南北朝時代には多様な種類と主題を持つ出行図が流行する。一般的に主人公を中心に左右に仕える人と護衛武人を一定の基準に沿って配置させている。したがって、定林寺址の情景塑像もこのような行列図や礼仏図を構成する場面の一部を演出したのではないかと推定できる。

最近、定林寺址から出土した塑像は、筆者の論旨を補完する資料があり注目される。図二一三は国立扶余文化財研究所によって発掘されたもので、一九七九年に発掘された西回廊址付近の瓦廢棄堅穴と同じ場所から追加で収拾されたものである<sup>31</sup>。残存高一七・六センチで中央の人物像が両腕を広げていて、その左右に侍衛する人物が配置されている。この塑像は、これまで紹介されていた塑像と胎土や焼成度が同じであり、頭部と胴部を別途に製作した後で接合する頭体別製式、裏面が平らな片面范を使用した単模製など製作技法もまた同じである。ただし、三人の人物を一つの范を用いて製作したものはこれが唯一である。

一方、図二一四は一九七九年に実施された発掘調査で発見された塑像片で、発掘報告書には未掲載のものである。残存高一・六センチのこの塑像は人物像の下半身片で、下半身の服飾と右脚部分のみ残っている。この塑像は他の情景塑像と異なり、衣文の一部を陰刻して処理し、手捏法で製作したような若干粗い印象を与えるが、服飾が他の情景塑像と違いを見せる。

このような人物像片が本来どのような形態であったのか不明であるが、共に発見された僧侶像や侍衛像、武人像、木葉裝飾の破片など

の情景塑像を参考にすると、先に述べた中国鞏県石窟や敦煌石窟に見られる皇帝・皇后礼仏図の場面が連想される(図二二二)。特に図二二三の場合、中央の人物は両腕を広げて堂々と立っており、両腕から長く伸ばした裾が印象的である。顔や冠が残っておらず断定できないが、非常に高位の人物であったことは明らかである。ところで、図二二三のこのような姿勢と服飾は図二一五の一の唐閻立本の『王会図』に見える人物像の形態ときわめて類似している。

図二一五の一は『梁職貢図』に描写された人物の中で一番前に登場し、五代南唐顧德謙模の『梁元帝番客入朝図』には「魯国」の使臣として記録されている(図二一五の二)。この「魯国」は東ローマ、北魏、東魏とする見解が提示されているが、最近では北魏を指すものと理解されている<sup>32</sup>。この人物は北魏(魯国)の使臣であるが、漢族の服装をしており、図二一三の人物と服飾、図像がそれと非常に類似するのである。

図二二三のこのような図像は閻立本の伝称作であるボストン美術館所蔵の『帝王図巻』に表現された皇帝の姿勢、服装、侍従を両側に率いている姿とも関連付けてみることもできるかもしれない<sup>33</sup>。特に図二二三はこれまで紹介された情景塑像より大きく服飾が異なる。このような点を総合してみると、定林寺址塔内塑像には武人像や侍衛像、僧侶像や文人像以外にもより格の高い人物像が含まれていたといえる。その原型を完全に復原できないが、定林寺址塔内塑像の四天柱の壁面には図二一一・一二・一五のような行列図の場面のよくなものが立体的(半浮彫)に表現されていたと見ても大きな無理はないと考える。さらに図二二三の塑像片がそれに該当するのかは断定できないが、中国の事例を参考すると、その行列図や礼仏図の場面には発願者である聖王の姿がなんらかの方式で表現されていたものと推測できる。定林寺址より新しく製作されたものであるが、扶余陵山里寺址や旧衙里寺址から出土した塑像の中にもこのような礼仏図の場面を連想させる人物像片が混ざっていることが参考となる(図二一六)。このように定林寺址の塔内塑像に礼仏図の場面のようなものが演出されたことは発願者である聖王自身が仏教に帰依することを表わすと同時に多様な人間群像を率いる姿を具体化して、自身の権威を誇示しようとしたものと見ることもできるのではないかと考えられる。

一方、定林寺址からは、中型塑像で捧宝珠菩薩像片が出土した(図二一四の一)。捧宝珠菩薩像は南朝梁代と百濟泗泚期、日本の飛鳥時

代に流行した仏教造像の様式であり、観音菩薩である可能性が早くから提示され<sup>34</sup>、最近では捧宝珠菩薩像が本来は舍利供養の図像をあらわしたという見解も共に提起されている<sup>35</sup>。つまり、南朝や百済地域で発見された捧宝珠菩薩像の中には当初宝珠とされていたが実際には舍利壺や舍利盒である可能性が高く、これが次第に宝珠に変化していったのである。定林寺址出土捧宝珠菩薩像片や舍利盒のような持物を持っている陵山里寺址出土塑造仏坐像は全て木塔を壮厳した塔内塑像である。仏の真身舍利を奉安した塔に舍利を供養する図像を表現したことは一見妥当性を持つように見える。しかし、舎利の地位がそのように補助的なものに過ぎなかったかどうかという点を考慮すると同意しがたい部分も少なくはない<sup>36</sup>。

捧宝珠菩薩像の持物が舍利と関連するのかどうかは分からないが、定林寺址木塔の一面に捧宝珠菩薩像と関連したなんらかの図像が表現されていた可能性はある。図二一五の蠟石製三尊仏片にも捧宝珠菩薩像が表現されていることを見ると、定林寺址の塑像は南朝の仏教造像と密接な関連を有していることが明らかである。さらに中型塑像の一つである捧宝珠菩薩像片を通して四川省成都地域で出土する群像型式の仏教造像や変相図のような場面も含まれた可能性を検討できる(図二一七)<sup>37</sup>。つまり、定林寺址の瓦廃棄堅穴から出土した塑像は法隆寺五重塔と類似した形態で初層塔身を装飾し、そのうち他の一方の壁面には四川省成都地域から発見された南朝系統の仏教造像と類似する場面が立体的に視覚化されて表現されていた可能性があるのである。

定林寺址の塑像が木塔の塔内塑像であるとすると、現存する五層石塔との関係が問題視される<sup>38</sup>。金正基は定林寺址創建時に本来木塔があったが焼失して木塔がなくなり、その場所に現在の石塔が建立されたと考えた<sup>39</sup>。彼はもし創建時から石塔があったとすれば、それほど広い面積を版築する必要がなく、石塔の基壇は石材や土石混築を利用することが一般的であった。つまり、石塔下部から発見された版築土層は地表上に隆起した版築部分を石塔建立時に削平した結果であると解釈した。金堂址や講堂址付近から焼土層が幅広く確認されていることを見ると、これは十分に納得できると考える<sup>40</sup>。

梁武帝の長干寺舍利収拾過程と双塔建立経緯から分かるように、仏塔の毀損によってその場所に新たに仏塔を再建することは当時決して特別なことではなかった<sup>41</sup>。北朝系統の木塔は夯土積心を利用して建立されたため、火災時に多量の建築廃棄物が発生するが、南朝

では木造架構が主流であるため、より簡単にそれまでの跡地を再利用できたものと考えられる。益山帝釈寺址廃棄場遺跡<sup>42</sup>や日本の川原寺裏山遺跡の事例もこれと関連があるだろう<sup>43</sup>。

そうした点から現存する五層石塔は弥勒寺址石塔より若干新しい時期に建立されたものと考えられる。つまり、最近発掘された弥勒寺址西石塔出土の舍利奉安記の六三九年より若干新しい武王代後半や義慈王代初半のある時期であつただろう。定林寺址では七世紀前半の中半に編年される単弁七葉蓮華文瓦当が多量に収拾されており、これを裏付ける(図二一八)。

定林寺址出土塑像の製作時期は版築土層から出土した三足土器や中国製青磁壺片といった共伴遺物を見ると、その上限が泗泚遷都(五三八年)以前まで遡る。それらのうち、講堂址周辺から出土した青磁壺片は、胴体片であり、残存高八・八センチ、最大幅一一・一センチ、厚さ〇・八〜一・〇センチで胎土は灰白色を呈し、光沢のある黄緑色の釉薬が施されている(図二一九)。この遺物は武寧王陵出土青磁六耳壺と類似するが、蓮華文が上下に向かい合つて配置されており、蓮弁の形態が若干異なる。これと最も類似する事例として南京対文山南朝墓出土の青磁蓮華文壺を挙げることができる(図二一九の二)<sup>44</sup>。対文山南朝墓出土品は上腹と下腹を区分する浅い線が巡っており、一一弁の覆蓮と仰蓮が蓮弁の端を向き合つていて、黄褐色の釉薬がかかっている。ただし、蓮弁の間に間弁があつて、蓮花が上下に長く線刻されている点は定林寺址出土品と違いが見られる。この墓の年代について報告者は南京燕子磯梁普通二年墓(五二二年)と墓の構造、平面形態や結構手法が非常に類似しているため、これと同時期と推定した<sup>45</sup>。

そうした点から定林寺址の上限を五二〇年代まで遡らせることができるが、この年代がそのまま塑像の製作時期や定林寺址の創建を意味しないと考える。なぜならば、これらの青磁片は生活容器としての性格が強く伝世した可能性が高いためである。定林寺址で教的にも多く出土している瓦当と土器には泗泚遷都(五三八年)以前に遡る遺物がほとんどない。また、五二〇〜五三〇年代の熊津都城には大通寺が建立されていたため、そのような雰囲気でも泗泚地域において寺院の建立が始まったとは考えられない。泗泚遷都当時、都城内部は扶蘇山城と羅城をはじめとする防御施設と王宮や官衙といった主要施設だけが備わつた状態であり、寺院や貴族の邸宅などは遷都以後に徐々に整備されていったものと理解できる点も参考にする必要がある<sup>46</sup>。石塔下部の版築土層から発見された三足土器と講堂址周辺か



ら発見された青磁片は、定林寺址の創建が泗泚遷都以前まで遡る可能性を示す資料と評価できるだろう。

定林寺址の建立時期を議論する際、最も多く活用された資料は塑造人物像、その中でも特に籠冠をかぶった人物像である。初期の研究者はここから出土した籠冠をかぶった頭像が北魏の陶俑(特に元邵墓)と類似する点から、定林寺址が泗泚遷都直後に建立され、北魏系統と理解した<sup>47</sup>。しかし、籠冠をかぶった陶俑のみで製作時期と系統を断定できるのであるか。北魏や東魏墓から出土した籠冠をかぶった陶俑の頭像と身像の形態は時期が新しくなるほど次第に豊満になる傾向が見られ<sup>48</sup>、全て両面范を用いた合模製で製作されたという。南朝地域でも蕭齊時期(四七九〜五〇二)と推定される丹陽県胡橋吳家村墓で籠冠をかぶった石俑が出土しており<sup>49</sup>、最近、南京靈山墓からは籠冠をかぶった陶俑が新たに紹介されている(図二二二〇)<sup>50</sup>。現在までの資料のみを見ると、定林寺址の塑造人物像は、北魏末期から東魏の陶俑、または梁末から陳初の陶俑と類似すると言える<sup>51</sup>。したがって、定林寺址の塑造人物像は五三八年の泗泚遷都前後のある時期に製作された可能性が高く、その系統も単純に北朝系統の遺物であるとは断定しがたい。

以上、定林寺址から出土した塑像と共伴遺物に対する検討を通して、その製作時期が泗泚遷都直前・直後のある時期であったと推定した。そこで、『梁書』などに記録された次の史料が注目される。

史料二二一…中大通六年、大同七年、累遣使献方物。并請涅盤等経義、毛詩博士并工匠画師等、勅並給之。(『梁書』列伝卷五四百済条)<sup>52</sup>

この記録は百済聖王一九年(五四一年)に梁武帝が百済の要請によって涅盤経などの経義と毛詩博士、工匠・画師などを送ったことを示している。まず、百済から梁に五四一年に使節を派遣したことは泗泚遷都以後、最初の朝貢記録であるという点に注目する必要がある。五三八年の泗泚遷都を断行した聖王はある程度都城の整備が進むとすぐに梁に公式の遷都の事実を知らせた可能性がある<sup>53</sup>。五四一年には任那復興会議が泗泚の王庭で開催された点を見てもこの時期には泗泚都城内部の主要施設がある程度整備されていたと考えられるためである<sup>54</sup>。

ところで、この史料を通してみると、百済では梁に遷都の事実を知らせるとともに新たな都城の運営に必要な制度や技術・文物を具体的に要請したものと考えられる。この時、梁武帝が送った工匠と画師は百済から日本に派遣した諸博士のように<sup>55</sup>、高度の専門技術者や知識人であったろう。百済では泗泚遷都以後、都城の整備、例えば国家的な象徴物を建立するうえで必要な専門技術者を要請し、仏教經典と毛詩博士、工匠・画師はこれに必要な専門知識と技術諮問、伝受者の役割を果たしたものと考えられる。そして、この時に梁から渡ってきた工匠・画師の活動の結果が定林寺址の建立としてあらわれ、特に木塔の建立と塔内塑像の製作は彼らの指導と百済工人の協力によって完成されたものと考えられる<sup>56</sup>。

これまで定林寺址塑像の系統については北朝の陶俑や洛陽永寧寺出土塑像との類似性から北朝系統と把握されてきた。しかし、『梁書』などの記録が扶余定林寺址の創建と関連するという推定が妥当であれば、その系統は北朝でなく南朝に求めねばならないだろう。五世紀後半から五六七年まで百済と北朝の国家間に公式的な使臣の往来が皆無であった点や定林寺址に捧宝珠菩薩像といった南朝特有の仏教造像が共に発見された点も注目しなければならないだろう。

南京の上定林寺は扶余の定林寺址のモデルと推定されている<sup>57</sup>。ところで、上定林寺と推定される鍾山二号寺址から出土した図二二一〇の一の塑像片は、片面范を用いた頭体別製式の製作方式、手に胎土がつくほど低い焼成度、彩色の痕跡と色彩、一部の頭像に黄褐色の釉薬が使用された点、立像の場合、立てられるように底部に小さな穴をあけた点など、その製作技法が定林寺址塑像と一致している。これは扶余定林寺址の塑像製作に南朝系技術工人が参加した可能性をさらに高める。そうした点から、扶余定林寺址から発見された奉宝珠菩薩像をはじめとする多様な型式の塑像は、現在空白として残っている南朝の仏教美術を解明し、さらに東アジアにおける南朝仏教文化の位相を定立するうえで重要な資料として活用できるものと期待される。

一方、五四一年の文物交流は塑像のみならず蓮華文瓦当の製作や緑釉製品の生産のような場合にも一定の影響を与えたものと考えられる。まず、蓮華文瓦当について見ていく。定林寺址では大きく三つの型式の素弁八葉蓮華文瓦当が出土したと報告されている(図二二二一の一～三)<sup>58</sup>。この中で最も多く出土したA類型(亀田修一分類「B類型」とC類型(亀田修一分類「A類型」)の場合、蓮弁の形態や中房に

圏線がある点、蓮弁と周縁の間が広い点から六世紀後半から七世紀前半と考えられる<sup>60</sup>。しかし、B類型については若干の検討が必要である。この蓮華文瓦当は中房が小さく、蓮弁が浅く彫刻されており、端部には細い稜線の痕跡がある。間弁はT字形を呈し連続するような印象を与え、裏面には回転ナデの痕跡が見られる。

ところで南京の梁南平王蕭偉墓闕と南京鍾山二号寺院遺跡でもこれと類似した蓮華文瓦当が出土している(図二二二の四・五)<sup>61</sup>。定林寺址のB類型は南朝瓦当の特徴と指摘されている瓦当部裏面の回転ナデ技法が確認され、大通寺址から出土した瓦当と同じく瓦当部と丸瓦部を接合する際、端部を斜めに切り出した後に接合させる<sup>62</sup>製作技法が確認される<sup>61</sup>。南朝早期の蓮華文瓦当の特徴である端部が尖った蓮弁と蓮弁に稜線のようなものが残っているものはB類型でのみ確認される<sup>62</sup>。B類型瓦当は熊津期に流行する、いわゆる大通寺式(図二二二の六)蓮華文瓦当と製作技法の上では繋がるが、蓮弁の型式は全く異なる姿を見せるものである。したがって、筆者はB類型が定林寺址創建期の瓦として五四一年の南朝系工人が新たに導入した瓦当文様と推測する。

定林寺址出土塑像の中には仏頭AやFのように黄褐色系統の釉薬が施釉された塑像が多数発見される(図二二六の一と二)。小型塑像の仏頭類は部分的に釉薬が剥がれているが、黄褐色の鉛釉がよく残っており、泗泚期に成立したいわゆる百済鉛釉の先駆的な姿を見せている。百済鉛釉製品は定林寺址の仏頭類以外にも陵山里寺址出土緑釉瓶片や扶余錦城山出土緑釉器台片、扶余東南里遺跡出土緑釉瓶片と緑釉碗片、羅州伏岩里一号墳出土緑釉托蓋、順天劍丹山城出土緑釉陶硯片と緑釉瓶片、麗水鼓楽山城出土緑釉碗、弥勒寺址出土緑釉瓦当のように多様な種類が製作され流通した(図二二二)<sup>63</sup>。泗泚遷都以後の六世紀中半から出現して七世紀代からはその種類が多様化して地域的にも拡大する傾向を見せる。

その中で扶余錦城山出土緑釉器台片の場合、公州宋山里出土の鼓腹型器台と類似する蕨手文が裝飾されており、熊津期まで遡る余地はないのか検討する必要がある(図二二二の一と二)<sup>64</sup>。前者は後者に比べて蕨手裝飾がより退化した型式であり、首部分の円形透窓や器を支える部分の形態が変わるなど扶余新里出土器台との類似性が高い<sup>65</sup>。緑釉の発色が柔らかく精製されていることを見ると、定林寺址塑造仏頭より新しい六世紀中半以後に製作されたものと考えられる。そうした点から定林寺址塑像の中に見られる緑釉製品は現在まで

百済地域で発見された最も古い時期の事例といえる。定林寺址の塑像は大部分整形以後に彩色工程を経るが、そのような工程が施釉・焼成する方式と共に使用されたのであろう<sup>66</sup>。したがって、塑像の施釉を含んだ百済鉛釉の出現背景にも五四一年に南朝から渡ってきた工人による技術伝授があった可能性は充分ある。五四一年に百済に渡ってきた工匠・画師は定林寺址塑像の製作だけでなく、蓮華文瓦当と緑釉製作技術を含んだ多様な方面において新たな技術を伝えたのである。

史料二一の五四一年の梁武帝による技術者派遣は国家と国家間の公式的な交流の過程であった。それゆえ当時、百済に派遣された工匠・画師は梁の中央行政官署に所属した技術工人であった可能性が高い<sup>67</sup>。公州武寧王陵から出土した方格規矩四神鏡には「尚方作鏡」という銘文が残っており、尚方で製作された青銅鏡が百済に伝来したことが分かる<sup>68</sup>。尚方は漢代に設置された官名であり、少府という中央行政官署の属官であった。本来、天子の御物を製作し保管することを担当したが、魏晋代になると左・右・中尚方に分化する<sup>69</sup>。梁代にもそのような伝統が続いており、少府には尚方と甄官署などが配属されていた。少府とともに重要な中央官営手工業官署として将作大匠がある。将作大匠では主に土木工事と関連した業務を担ったが、建築材料や磚瓦の製造と造船などを管理した<sup>70</sup>。このような点から、五四一年に百済に渡ってきた工匠・画師には梁の少府や将作大匠に所属した技術者が含まれていた可能性がある。百済に渡ってきた梁の官営手工業所屬の技術者は、瓦工のような百済の在地工人を幅広く動員して任務を遂行したのであろう。その過程で様々な部門の技術の伝授が行われ、彼らが次第に百済内部において瓦博士や寺工、画師といった技術系官僚に成長したものと考えられる。

## (二) 定林寺式伽藍配置の成立

前節で検討したように扶余定林寺址は泗泚遷都以後に最も早い段階に建立された寺址であるといえる。そうした点から泗泚期の百済の伽藍配置は基本的に定林寺址が重要なモデルになったことは容易に推測できるであろう。これについて本稿では「定林寺式伽藍配置」という概念を設定して、百済伽藍配置の特徴と変遷を説明する。この用語は日本の飛鳥寺式伽藍配置や四天王寺式伽藍配置、法隆寺式伽藍配置などを参考にして作った造語である。このような様式の伽藍配置は第四章第一節で述べるように泗泚遷都以後、定林寺址で成立して

以後、百済滅亡期まで持続したため、その成立過程や特徴、展開過程は百済式寺院の成立および展開過程を代弁するものといえるだろう。これまで定林寺址の伽藍配置については藤澤一夫が発掘した図二二三の二一<sup>71</sup>。定林寺址に対するこれまでの発掘調査では中門と石塔、金堂、講堂が南北一直線上に位置し、周囲を回廊で区画しているものと理解されてきた。ところで、尹武炳は伽藍中心部を囲む回廊の形態について若干の疑問を提起している。つまり、「伽藍中心部を囲む回廊の全形が長方形をなさず、北に行くほど東・西両回廊間の間隔が広がる、言い換えると非常に軽微な程度であるが、その平面形が梯形をなしていた」とし、一九七九年の発掘調査でも北回廊の痕跡は確認できなかったと述べている<sup>72</sup>。

このような疑問については、二〇〇八年度の国立扶余文化財研究所の再調査で新たな遺構が確認されたことによって、新たな局面を迎えることになる<sup>73</sup>。国立扶余文化財研究所の三度目の発掘調査では東西回廊の北側が北回廊を通して講堂で直接連結するのではなく、別の「付属建物」によって連結していることが新たに確認されたのである(図二二三の三)。また、講堂と東西回廊が、北回廊のようなもので直接連結のではなく、講堂の東西に独立した別途建物があった可能性についても推定できるようになった。

定林寺址の再調査で新たにあらわれた、いわゆる付属建物に関しては、植民地期に発掘された軍守里寺址と東南里寺址をはじめとして一九九〇年代に調査された陵山里寺址、二〇〇〇年代に発掘された王興寺址と帝釈寺址でもこれと類似した建物が存在することを再認識あるいは再確認する契機となった<sup>74</sup>。この建物址はこれまで高句麗や新羅、日本の古代寺院では実体が確認されていない非常に特徴的なものであった。

それでは、百済寺院の回廊北端のいわゆる「付属建物」はどのような性格の建物であったのか。これについて最初に見解を提示したのは佐川正敏である。彼は六〜七世紀前半の日本では回廊に僧房が配置された例がなく、僧房は別途に設けられていたため、この建物が日本の飛鳥寺では東・西金堂に変形した可能性があった<sup>75</sup>。この見解は日本最初の本格的な寺院である飛鳥寺三金堂の源流について、これまで高句麗から求めようとした学説を批判しながら飛鳥寺の伽藍配置はやはり百済に根源を持つ可能性を提示した点で評価される。

しかし、百濟寺院の付属建物址は細長い形態を呈しながらいくつかの室で構成されており、伽藍の中心軸から外れて東西に互いに対称となるように配置された点から金堂のような中心的な殿閣と見ることは難しい。

扶余地域の廃寺址の中で付属建物の性格を把握できるのは陵山里寺址のみである。この遺跡は伽藍中心部だけでなく周辺部について調査されており、その内部から昌王銘石造舍利龕をはじめとする多量の遺物、特に多量の木簡が出土しており、各建物址の性格をある程度類推できる(図三二二)。具体的には、陵山里寺址の中門址南側の初期自然排水路から多量の木簡が出土した<sup>76</sup>。それらの木簡は五六七年に木塔が建立された段階を前後して使用された後に廃棄されたもので、その北側の建物群で使用されたものが流れ込んだものと考えられる。陵山里寺址に対する土層調査の結果、ここは本来北高南低の地形であり、それを補完するために大規模な盛土作業を実施したことが確認された。また、谷間から水が湧き続けるため、二重の大型排水路と多数の暗渠が設置されていた。ところで、このような人工的な排水施設が設置される以前、初期の自然排水路のみ機能していた段階にその北側に何らかの施設があり、そこで使用された木簡と木簡の削屑がここで発見されたのである(本稿の第二章第一節参照)。

後述するように、ここから出土した木簡は記載内容と出土様相から見ると、五五四年の管山城の戦いで聖王が戦死した後、この一帯で行われた各種の儀礼や物品の移動、行政行為と関連があると考えられる。ほとんどの木簡は五六七年の木塔建立の前後に廃棄されたものと考えられるが、一部、六世紀後半に廃棄されたものも含まれている。したがって、陵山里出土木簡は「陵山里寺址の造営・整備過程」において使用された後に廃棄されたものといえる<sup>77</sup>。一方、陵山里寺址から出土した瓦当に対する分析の結果、この寺院の伽藍中心部は他の寺院とは異なり、講堂址をはじめとするその左右側の別途建物址(工房址Ⅱ・不明建物址Ⅰ)と回廊址北端の付属建物址(工房址Ⅰ・不明建物址Ⅱ)がまず建立され、その後に木塔と金堂、中門、回廊などが次々と建立されていったものと推定される<sup>78</sup>。講堂址を中心にした初期建物址群は建物の構造と配置、仏教関連内容はもちろん各種祭祀関連記録が共に見られる木簡の記載内容などを総合的に考慮すると、陵山里古墳群、特に聖王陵の祠廟あるいは祠堂といった施設であったと考えられる<sup>79</sup>。

第三章第一節の図三二二のようにここから出土した木簡の大部分は中門址を基準にして南西側の自然排水路から発見された。しかし、

中門址東南側の自然排水路から二点の木簡が発見されている(二一九九号・二〇〇一八号)。それらの木簡は出土した脈絡からみると、その北側にあった不明建物址□で使用された後に廃棄されたものと考えられる。二一九九号の場合、祭祀儀礼と関連があり、二〇〇一八号は仏教と関連する木簡と考えられる<sup>80)</sup>。したがって、それを書写した空間である不明建物址□はそうした儀礼を準備した場所や儀礼の担当者が滞在した建物と推定できる<sup>81)</sup>。

一方、付属建物という名称は主建物に付属した建物を意味するため、回廊の北側に独立的に配置されたこの建物を指し示すには適切な用語ではない。この建物は配置上東西に対称にあらわれ、礎石の配置上いくつかの室で構成されたものと考えられる。寺院の重要な殿閣は南北一直線上に配置され、付随的な建物は東西に配置されることが一般的である点を勘案すると、金堂や木塔よりその格が低かったと考えられ、中国の寺院の「配殿」のようなものと見ることができる。このような点を考慮すると、百済寺院の付属建物は現在までの伽藍配置に関する議論では「僧房」と命名された建物址と最も類似すると言える。ただし、講堂址北側の僧房(二建物址)と区分する必要がある、建物の構造や配置から見て「東堂・西堂」(または「東室・西室」と呼ぶことが最も適切であると考えられる)。

筆者が付属建物である「東堂と西堂」を仏教儀式や各種儀礼の準備、事務処理といったことが執り行われた公的な性格が強い僧房と推定するのは、益山弥勒寺址や日本の川原寺址に類似する事例があるためである。益山弥勒寺址の場合、講堂址北側に僧房があるが、講堂南側の東西にも僧房状建物址が配置されている(図四一九の二)。第四章第一節で再び検討するが、この建物址は弥勒寺址以前に百済寺院に見られる講堂址北端の付属建物に変化したものと考えられる。日本の川原寺址には講堂址南側の東西に僧房が位置するが、これは興福寺・東大寺など大寺に見られる三面僧房の源流と理解されている。このような三面僧房の配置もやはり百済寺院の付属建物と類似する配置と構造を有していると言える。したがって、これまでの伽藍配置に関する事例を参考にすると、東堂と西堂は僧房のようなものと推定することが最も合理的であるといえる。

それでは、東堂と西堂は百済寺院の独創的な要素であろうか。先に筆者は定林寺址が五四一年に梁武帝によって派遣された工匠・画師の直接的な支援の下で建立されたものと見た。当時、梁から派遣された工匠・画師などの技術者は塔内塑像や木塔の建立以外にも伽藍配

置や緑釉製作技術といった多様な方面において百済に影響を与えたものと考えられる。したがって、まだ南朝寺院の伽藍配置に対する発掘資料は皆無であるが、定林寺址の伽藍配置は南朝の影響を受けた可能性があり、北朝寺院には見られない東堂と西堂はそうした南朝の影響である可能性が高いと考える。

しかし、定林寺址の全てのものが南朝に淵源を持つとは考えない。この点については第六章第一節で詳述するが、例えば定林寺址金堂址から発見された二重基壇を見てみたい(図六一四参照)。二重基壇は五〜七世紀の寺院の金堂や木塔に主に利用される基壇型式であるが、初期の二重基壇には下成部に礎石(いわゆる下成礎石)が見られる。下成礎石は高句麗の清岩里寺址の八角建物址(木塔と推定)をはじめ、百済の定林寺址金堂址、軍守里寺址金堂址、新羅の黄龍寺址三金堂址、飛鳥寺東西金堂址などで確認されている<sup>33)</sup>。百済寺院で発見される下成礎石の場合、時期的に最も古い高句麗の影響によって出現したとみられる。下成礎石は定林寺址の金堂址でも明確に確認されたため定林寺址の伽藍配置や寺院造営の技術には南朝だけでなく高句麗の影響もあったと考えなければならぬだろう。

講堂址の東西に配置された別途建物址の場合も同様である。この建物址は百済寺院のみならず平壤清岩里寺址、慶州皇龍寺址重建伽藍、四天王寺址、感恩寺址、千軍里寺址などでも確認されている。その中で最も古い時期に建立された清岩里寺址の場合、中金堂址の後方から四基の建物址群が発見されたが<sup>34)</sup>、これまで高麗時代のものとしてされてきた(図六一五)。しかし、同寺院の八角建物址や中金堂址でも高麗時代の瓦片が混ざって出土し、定陵寺址でも敷博建物址が確認されているため、これのみで後代のものと見ることはできない。この建物址群は百済や新羅寺院に見られる講堂とその東西の別途建物および僧房に該当するといえる。図六一五のように高句麗寺院の講堂址は古い段階からその東西に別途建物址があったと考えられ、定林寺址をはじめとする百済寺院はその影響を受けた可能性が高い。

扶余定林寺址は塔内塑像の製作や製瓦術、緑釉製作技術、木塔の建立をはじめとして東堂と西堂といった伽藍配置に至るまで南朝の影響をより多く受けたといえる。史料二一はこのような事実を最も端的に示しており、ここで出土した各種遺物と遺構はこれを裏付けている。しかし、定林寺址は南朝的な文化要素以外にも部分的に高句麗の影響も受けていた。二重基壇の下成礎石や講堂址の東西にある別途建物といった要素はこれを裏付けるものである。このような点から見ると、定林寺址は南朝文化を主としながらも高句麗文化を付随的



に吸収しながら成立したといえるだろう。

最後に定林寺という寺名について検討してみよう。現在の定林寺という名称は「大平八年戊辰定林寺大蔵当草」という高麗時代の銘文瓦に基づく(図二二四)。大平は遼の年号であり、大平八年は高麗顕宗十九年(二〇二八)で戊辰年に該当する。「大蔵当草」については「大蔵堂草の誤りと考えられて、草は「새(セ)」と呼ぶべきであるが、韓国では瓦を意味する文字として使用されてきた」という見解が注目される<sup>84</sup>。高麗時代の文字瓦の中には武珍古城や竹州山城、奉業寺址、安国寺址、永同稽山里遺跡などで「草」、「瓦草匠」、「草匠」などの文字瓦がしばしば出土している<sup>85</sup>。この時の「草」を「始める」という意味で解釈した見解もあるが<sup>86</sup>、中世国語では草を「새(セ)」と刻む用例が確認されている<sup>87</sup>。したがって、瓦の銘文に使用された草は草屋に対比される瓦屋に使用された屋根の材料を意味する接尾語といえ、軒平瓦(금판새)や瓦当(수막새)、鬼瓦(망새)の「새(セ)」のように活用されたと考えられる。つまり、この時の草は「새(セ)」と読んで、「瓦」を意味しているといえる。一方、当は聖住寺址千仏殿址から出土した「聖住千仏当草」の事例から分かるように「堂」の誤字である可能性が高い。したがって、銘文の「大蔵当草」は大蔵堂、つまり大蔵殿という殿閣に使用された瓦を意味すると考えられるため、この銘文は「大平八年戊辰年に作られた定林寺の大蔵殿(堂)に使用する瓦」と解釈できるだろう。この銘文は需要者や需要先を考慮したもので高麗時代にこの廃寺址が定林寺と呼ばれ、大蔵殿という殿閣があったことを物語るものといえよう<sup>88</sup>。

それでは、高麗時代の定林寺は泗泚期にも同じように呼ばれたのだろうか。扶余王興寺址や益山弥勒寺址、帝釈寺址などの事例を見ると、定林寺址の場合も高麗時代の寺名が百済まで遡る可能性を排除しがたい。特に、同時期に中国南朝と日本にも定林寺という寺名があった点を考慮すると、その可能性はより一層高い。定林寺の「定林」は「禪定之林」からとった用語で、南京の鍾山には上定林寺と下定林寺があった<sup>89</sup>。この寺には僧祐(四三五〜五一八)などの高僧が主席し、『文心雕龍』の著者である劉勰(四六五〜五二二)が滞在して当代の一流の文士たちと交流した。一方、元嘉元年(四二四)に創建された定林寺は元嘉十二年(四三五)に上定林寺が創建されるとともに下定林寺と呼ばれるようになる。下定林寺の場合、地勢が低い溪谷の間に位置し、劉宋末期、特に梁代にはほぼ廃棄される。これを通し

て見ると、六世紀前半の建康の定林寺は上定林寺を称する場合が多く、そうした点から泗泚都城の定林寺址も上定林寺を意識した名称である可能性を排除し難い<sup>900</sup>。

飛鳥の西南部にも定林寺という廃寺址が残っている。この寺址は聖徳太子が建立したと伝えられ、塔址などに対する小規模の発掘が行われ、木塔址心礎石の周囲から塑造菩薩像の頭像片が收拾されている<sup>901</sup>。このような事実から、現在の定林寺址が建立・運営された時期に中国の建康や日本の飛鳥には「定林寺」という寺名を持つ寺が存在した可能性が高い。したがって、高麗時代の銘文瓦に見られる定林寺という寺名は泗泚期まで遡って適用できると考えられる。また、定林寺址出土の塑造像が五四一年に南朝から渡ってきた工匠・画師と関連して南朝系統であったと推定した本稿の推論が妥当ならば、定林寺という寺名も建康の定林寺址、特に上定林寺を意識して付けられた名前であると考えることができよう<sup>902</sup>。

## 第二節 都城におけるランドマークとしての定林寺址

### (一) 定林寺址の創建目的とその背景

五三八年に泗泚へ遷都した時の都城は、羅城と白馬江を境界にして、その内部に国家の主要施設を配置していたと考えられ、現在の定林寺址はその中心部に位置している。定林寺址のこのような立地的特性は、この寺院が都城内部で非常に重要な位相と役割を担っていたことを示唆するものである。前節ではこれまで陶俑と呼ばれてきた塑像が本来木塔の初層塔身を荘厳した塔内塑像であると推定した。史料二一を見ると、泗泚遷都以後に百済において国家的な象徴物を建立するうえで必要な専門技術者集団を梁に要請し、梁の武帝がこれを派遣することで成立し、いわゆる「定林寺式伽藍配置」には南朝のみならず高句麗の影響も受けて造営されたと見た。それでは、百済の聖王はなにゆえに泗泚遷都直後に都城の中心部に定林寺址を創建し、都城内で定林寺址が占める位相はいかなるものであったのだろうか。本節では、定林寺址の発掘調査を通して確認された出土遺物と文献史料を総合し、植民地期に作成された地図類、泗泚都城内部に対する発掘の成果を参考にして王宮区域を設定した後、王宮と定林寺址の関係を把握することで、この問題に接近する。

前節で説明したように史料二一を通してみると、定林寺址が造営され塔内塑像などの新たな施設物が作られたことには、梁と百済王室の公式的な政治・外交行為があったことが関わっており、これは定林寺址の創建に百済王室の絶対的な支援があったことを意味すると理解できる。また、図二一三の人物像片を通して、この塔内塑像に梁職貢図や龍門石窟と鞏鼎石窟の礼仏図の場面と類似するものが演出されたことは、発願者である百済聖王が自ら仏教に帰依することを表わすと同時に、多様な人間群像を率いる姿を具体化して、発願者自身の権威と威厳を誇示しようとしたものと推定できる。したがって定林寺址の建立には泗泚遷都を断行した聖王が王権の権威を高め、それを象徴する記念碑的施設という意味が含まれていたといえよう。

ところで、史料二一を見ると、五四一年に梁武帝は工匠・画師といった技術者のみならず、「涅槃経等義疏」と毛詩博士を共に送っている。梁の武帝代には多くの仏教経典の註釈書と仏教論書が編纂されたが、当時の仏教学の内容を最もよく示すものの一つが『涅槃

『経』に対する註釈書であるといえる。梁の武帝は五二九年に第二回の捨身の際に同泰寺で自ら『涅槃経』を講じた<sup>93</sup>。また、後述する史料二二二を見ると、吐谷渾に梁武帝自身が直接著述した註釈書である『制旨涅槃経講疏』を送っている。したがって、五四一年に百済に入ってきた経疏には『制旨涅槃経講疏』が含まれていたものと考えられる<sup>94</sup>。当時、百済では梁の仏教界の主要な思想的動向について相当な情報を有していたため、それに基づいて梁の仏教学を理解できる重要な文献を具体的に要請したものといえる<sup>95</sup>。

これと共に『詩経』研究の専門家である毛詩博士を要請したことを見ると、儒教を通じた制度の整備に対する欲求も非常に大きかったことが推測できる。その後、百済から講礼博士を願ひ出て、礼学に造詣が深い陸詡が梁の武帝の命によって五四〇年代から五五〇年代前半のある時期に派遣されている<sup>96</sup>。そうした点から五四一年に工匠・画師といった技術者が仏教經典に対する註釈書や儒教の専門家とともに渡ってきたことは、泗泚遷都以後、国家体制を整備する過程において一つの重要な画期になったものと考えられる。その産物は、新都や王権の重要な象徴物になったという点も類推できるだろう。

五四一年段階に百済が見せたこのような行動は、一部で一年前の吐谷渾の河南王と類似している。

史料二二二…河南王遣使朝、献馬及方物、求釈迦像并経論十四條。勅付像并制旨涅槃般若金光明講疏一百三卷。（『南史』卷七 梁武帝 大同六年五月条）

五世紀半ば頃から仏教を受容しはじめた吐谷渾は、五四〇年には梁に釈迦像と経論を求めた。これに対し、武帝は『制旨涅槃・般若・金光明講疏』を送った。したがって、五四一年に百済が梁の武帝に遣使して方物を捧げるとともに仏教經典を要請している様子は、五四〇年の吐谷渾の態度と共通する<sup>97</sup>。しかし、当時の百済では泗泚遷都以後の国家体制改革のためには仏教だけでは充分でなかったようである。史料二二二に毛詩博士や工匠・画師が共に記録されたのはそのためであろう。百済では四五〇年に劉宋に上表して易林・式占・腰弩を求めたことがあり<sup>98</sup>、高昌国の場合も北魏末の五二〇年に自分たちに不足している典籍を補充して統治に活用したことがある<sup>99</sup>。

したがって、史料二一は百済で仏教寺院のみならず国家体制の整備という自らの目的を達成するため、国際関係において仏教を積極的に活用した具体的事例といえるだろう<sup>100</sup>。

一方、『日本書紀』欽明紀六年(五四五)九月条の記録は定林寺址の創建と関連して新たに検討する必要がある。

史料二二三…秋九月、百済遣中部護德菩提等、使于任那。贈吳財於日本府臣及諸早岐、各有差。

史料二二四…是月、百済造丈六仏像。製願文曰、蓋聞、造丈六仏、功德甚大。今敬造。以此功德、願天皇獲勝善之德。天皇所用、弥移居国、俱蒙福祐。又願、普天之下一切衆生、皆蒙解脱。故造之矣。(『日本書紀』欽明天皇六年九月および是月条)

これらの史料は欽明紀六年(五四五)九月条と同じ月の是月条に続く記録であるが、これまで同じレベルで取り扱われたことがなかった。しかし、前後の脈絡をみて、二つの史料はともに史料二二一の五四一年の百済と中国の交流と関連する可能性が高い。まず、史料二二三を見ると、「吳財」の吳は江南を示すため、南朝から入手した財物といえるだろう<sup>101</sup>。史料二二一によると、百済は四年前の五四一年に梁の武帝から経義や博士・工人などを譲り受けた。したがって、百済は五四一年に南朝から入手したものを加耶の王族や群臣に贈与・分配し、そこには技術者も含まれていた可能性が高いという見解がある<sup>102</sup>。しかし、史料二二四もまた史料二二一と関連するものと考えるとき、この問題はさほど単純ではない。

『日本書紀』欽明紀六年三月条には倭から膳臣巴提便を百済に使臣として送り、彼は同年十一月に帰国したと記されている。そして、同年五月と九月に百済は倭や任那に使臣を派遣している。史料二二三の九月条に続いて記録された史料二二四の「是月条」は、百済に派遣された倭の使臣が百済現地で直接見聞した内容を復命したものであり、信憑性が高い史料と考えられる<sup>103</sup>。したがって、史料二二四から、五四五年九月に百済で丈六尊像を作ったことは、史実と見ても無理がないと思われる。百済で丈六尊像のような巨大な仏像を製作したのはこの時が最初であった。したがって、これを順調に完成させるためには外部からの先進技術が流入したと見るのが自然であろう。

つまり、史料二二一の南朝系技術工人の活動結果が、史料二二四の丈六尊像の製作にあらわれた可能性が提起できるのである。そうした点から史料二二一の梁の武帝による工匠・画師派遣記録は史料二二四ともつながる可能性が高いと考える。

前節で述べたように、筆者は史料二二一を根拠にして五四一年に梁から渡ってきた工匠・画師が定林寺址の木塔や塔内塑像の製作に関与したものと理解される。これについてさらに一歩進んで五四五年九月の丈六尊像造成記録もまた定林寺址と関連したものと推定してみよう。史料二二一と史料二二四を定林寺址の建立と関連づけることができるもう一つの根拠はこれまで発掘された泗泚都城内の仏教遺跡の中で遷都直後に遡らせることのできる遺跡を定林寺址以外に探すことが難しいためであり、さらにこの寺址で丈六尊像の一部と考えられる瓦質の大型塑像片が小数ではあるが出土しているためである。

定林寺址出土塑像は大部分西回廊址付近の瓦廃棄竅穴で出土したが、大型塑像である瓦製仏耳片と衣褶片は金堂址附近から出土した(図二二三)。これらの大型塑像は大きさだけでなく色調、胎土、製作技法において中型や小型の塑像とは違いが見られる。このように出土位置と製作技法の違いはその奉安場所の違いを物語るといえよう。その中で図二二三の一の仏耳片は大型仏像の左耳と考えられる。残存高二七・五センチで、耳殻の輪郭が残っているが大きさは一八センチ程度と考えられる。図二二三の二の瓦製仏身片AとBは金堂址の東西から四〇メートル程度離れて発見されており、発掘調査報告書では別個の遺物として報告されているが、現在は接合したまま保管されている。したがって、これら大型塑像は木塔の塔内塑像でなく、金堂に奉安された可能性があり、これがまた史料二二四の丈六尊像と関連する可能性があると考えられる。現在の定林寺址にたとえ高麗時代のものとはいえ丈六尊の石仏座像が残っているのもこのような脈絡から理解できるだろう。そうした点から史料二二四の丈六尊像関連記録や発願文は定林寺址の創建目的や背景を理解する史料として新たに検討する必要があるだろう。

史料二二四の丈六尊像発願文にはその造成目的を「天皇が立派な徳を得て、天皇が治める弥移居の国が皆同じく福と助けを得ることを願ひ、一切衆生が全て解脱することを願う」とことと明記している。ところで、この発願文の「功德甚大」以下は『金光明最勝王経』の十方菩薩讚歎品の文章を引用したものであるため、『日本書紀』編纂者の潤色と考えられてきた<sup>104</sup>。しかし、文中にある「弥移居」とい

う用字に注目して『百濟本記』の文章を転載したものと考えることができるという指摘<sup>105</sup>があるため、簡単に否定することは難しいようである<sup>106</sup>。また、「願わくは天下の一切衆生が全て解脱することを願う」というのは常套的な表現ではあるが、五四一年に註釈書が伝来した『涅槃經』の根本思想である「仏身の常住と一切衆生の悉有仏性」を翻案したものともし理解できるだろう。また、発願者として出てくる「天皇」は日本王を指すというよりは百濟王に読み直さなければならぬもので、それはまさに聖王に該当すると考えられる<sup>107</sup>。このように見ると、丈六尊像の造成、つまり定林寺址の創建には百濟王(聖王)が徳を得ることと加耶諸国などのミヤケが百濟王に頼ること、すべての百姓が解脱を得ることという二つの目的があったといえるだろう。

史料二一四でさらに注目されるのは加耶諸国などのミヤケが皆共に福と助けを得ることを願うという内容、つまりミヤケが百濟王に頼ることを祈願している一節である。なぜならば、これは定林寺址の創建背景を明らかにする端緒としても活用できるためである。五四五年以前に新たな都城である泗泚の王庭では五四一年と五四四年、二度にわたって聖王が主宰するいわゆる任那復興會議が開催されている。聖王の泗泚遷都は高句麗の脅威に対処するための軍事的な側面や政治・経済的な側面が考慮されたであろう。しかし、泗泚への遷都は百濟の加耶地域に対する積極的な進出意志とも見ることができ、五三八年前後の百濟-加耶の関係をみていく必要がある。

六世紀前半の百濟と加耶の関係についてはすでに多様な議論が行われている。これを百濟の立場から単純化させると、六世紀初半の蟾津江流域の占領(いわゆる任那四県と己汶・帶沙の進出)、五三〇年代の加耶南部地域への軍隊駐屯(郡令・城主の設置)、五四〇年代の加耶全地域の付庸化などに整理できよう<sup>108</sup>。特に、五四一年四月と五四四年一月に百濟の聖王は安羅など加耶小国の代表たちと安羅倭臣館の官人たちを泗泚に呼んで任那復興會議を主宰したが、この国際會議の主な目的は加耶全域を一括的に附庸化させる合意を試みることにあったのである。

百濟の聖王が加耶問題に積極的に関与した目的は、韓半島南部にいる郡令・城主を出ていかせることができない理由を説明する部分に如実にあらわれている。つまり、百濟が下韓(韓半島南部)に郡令・城主を維持しなければならない理由について「北敵(高句麗)は強大であるが百濟は微弱で南韓に郡令・城主を置いて防護しなければ、この強敵を防ぐことができず、新羅を制御することもできないだろう。

したがって、今は郡令と城主を置いて新羅を打って任那を保存しようとするのである」と告白している<sup>109</sup>。しかし、任那復興会議は最終的に決裂した。以後、百済は五四五年から三年にわたり加耶諸国と倭国に文物を贈与するなど百済文物の優秀性を立証させることによって、それまでの三つの計画を貫徹しようとした。その結果、五四九年頃にはついに加耶聯盟に対する附庸化を終え、倭国にも先進文物を媒介にして一定の影響力を与える大盟主の位置に立つことになる<sup>110</sup>。

したがって、史料二一四の丈六尊像発願文に出てくる「百済王が治める弥移居国が皆共に福と助けを得ることを願う」という内容は当時の歴史的状況と符合するものといえる。そして、丈六尊像が定林寺址に奉安されたであろうという筆者の推定が妥当であれば、史料二一四を通して定林寺址の創建背景と目的をより確実に推定できるようになる。そうであれば、定林寺址は百済の聖王が対内的な政治的安定を通して立派な徳を得て、加耶諸国をはじめとするミヤケにもその徳が及んで彼らが附庸化されることを願い、これを通して百姓たちが安らかに生活して解脱することを願うという目的から創建されたと言い換えることができるだろう。つまり、史料二一四の丈六尊像の発願文は百済の聖王の造仏功德にほかならないのである<sup>111</sup>。

これは定林寺址木塔の塔内塑像に表現された礼仏図の場面が、俗世の支配者である聖王が仏教界の支配者を夢見た姿を象徴的に表現したという推論ともよく符合している。また、五四一年の梁への使臣派遣には、遷都以後ある程度都城の整備が完備していたことを知らせる目的があり、その後すぐに新都である泗泚の王庭で任那復興会議を開催する一連の事件とも脈絡を共にしている。そうした点で丈六尊像と塔内塑像で荘厳した木塔が建立された定林寺址は以後、泗泚都城の最も重要な景観であり象徴物になったものと考えられる。

史料二一四の五四一年に梁から渡ってきた技術工人たちは史料二一四に出てくる丈六尊像を完成させた技術者の一部であった可能性が高いと考えられ、それは具体的に現在残っている定林寺址の大型塑像から見出すことができると思われる。そうであるならば、史料二一三の「呉財」は五四一年に入手したものをそのまま伝達したとするよりは、それから五四五年九月の間に百済で製作された物品も含んだ「呉財」と表現して伝えた可能性も排除し難い。五四五年九月に丈六尊像が完成したとすれば、それに伴う盛大な行事があったはずであり、その過程で珍しく貴重な宝物が製作され贈与された可能性があるためである。したがって、史料二一三は史料二一一と史料二一四の関



連性の中でより明確に解釈できると考えられる。史料二一四の弥移居国は史料二一三で呉財を受ける主体である「日本府の臣および任那の諸早岐」に該当すると見ることができ、両者は史料二一の結果の一部を別途に記録したと見ることができであろう<sup>112</sup>。

## (二) 泗泚都城内における定林寺址の位相

### 一 都城内道路遺跡に対する再検討

泗泚都城において定林寺址は、どのような位相にあったのだろうか。これを明らかにするためには、泗泚都城内部で発見された道路遺跡と定林寺址の関係に注目する必要がある。現在、羅城内部で確認された百済の遺跡は、遷都当時のものもあるが、遷都以後に整備されたり増改築されたりしたものも多数含まれているだろう<sup>113</sup>。筆者は、泗泚遷都当時の都城は、扶蘇山城や羅城など防御施設の築造と、王宮と行政官署の一部のみが整備された状態であり、五四一年に梁へ使臣を派遣して任那復興会議を開催した時点では都城整備事業が一段落したものと考えている。ところで、泗泚都城の内部構造に関する問題で最も議論となるのは、中心地域が条坊制のような整然とした街路区画によって整備されていたか、そして、そうした道路網が遷都前後にすでに完備されていたかどうかであるといえる。

遷都当時、泗泚都城が整然とした街路区画で整備されたとみる研究者は、次の三つの事実に着目している。第一に、扶余官北里遺跡から南北大路と南北小路、東西小路などで区画された長方形の区画が確認された点である。第二に、扶余官北里の長方形区画で確認された南北大路が、延長すると現在の定林寺址の西側塀と一致するという点である。第三に、扶余の宮南池、軍守里、陵山里、佳塔里地点、双北里北浦・ヒョンネドウル遺跡など羅城内部で発見された道路遺跡が、官北里遺跡で確認された道路の大きさや方向と相関性を持つという点などである。この場合、道路の開設時期はおおよそ泗泚遷都の前後と把握されている<sup>114</sup>。

それでは、このような根拠は、どの程度妥当性を持つのであろうか。まず、官北里の長方形区画について検討してみたい。官北里一帯で確認された長方形区画の大きさについて、発掘報告書には全体平面図が提示されていない。そこで、朴淳発はこの一帯で確認された遺構平面図を組み合わせ、東西八六メートル、南北二〇三メートルの長方形平面を図上復元した<sup>115</sup>。この数値はGPS測量の結果、東

西九五・五メートル、南北一一三・一メートルに修正された<sup>116</sup>。申鍾国が作成した官北里「ナ」地区現況図をみると、こうした数値がどのように算定されたかを推定できる(図二二五)<sup>117</sup>。ところで図二二五をみると、南北大路の大きさとして想定した線と、実際の発掘調査で確認された南北大路の幅が一致しないことが分かる。特に、図二二五の北側で発見された二ヶ所の石築をどのように処理するかについては議論があるため<sup>118</sup>、GPS測量を通して算定された数値は非常に不安定で作為的なものといえよう。

発掘調査を通して確認された唯一の区画といえる官北里の長方形区画は、泗泚遷都当時から存在したのだろうか。図二二五の扶蘇山石築から南北小路が繋がる地域では、泗泚期の瓦窯址と鉄器製作所と推定される遺構が確認されている<sup>119</sup>。また、官北里ナ地区の内部からは、鉄器製作所に関わる小型の炉施設と、炭、灰、柑塙などの工房関連施設が確認された。南北小路と工房関連施設は重複しているが、南北小路と推定される道路の下層面に工房関連施設があることが分かった。この工房関連遺構では、深鉢形土器、三足土器、高杯、蓋杯など、扶余地域ではほとんど出土しない比較的古い時期の遺物が確認された<sup>120</sup>。したがって、ナ地区東側の南北小路は、鉄器製作所や工房施設より新しい時期に作られたものであり、泗泚遷都前後には存在しなかった可能性が高い<sup>121</sup>。一方、官北里の工房関連施設で出土した埴塙の中には、「官」という文字が押された甜塙とその蓋が出土している(図二二六)<sup>122</sup>。これは、遷都当時、この一帯に官営工房があったことを直接的に証明するものといえよう。

官北里の長方形区画の道路開設時期は、こうした官営工房の廃棄時点と関連して遺跡全体の変化過程を考慮すると、盛土敷地の造成時点と深い関連があるといえる。官北里一帯に対する一二次に及ぶ調査の結果、以前に国立扶余文化財研究所があった場所の南側のカーラ地区では、金や銀、青銅、鉄を生産した工房施設と、木槨・石槨の貯蔵施設、竪穴遺構などが最初に形成された後、遺跡全体に対して盛土による敷地造成工事が実施され、その後、東西―南北の道路、築台と排水路、瓦積基壇建物と蓮池などが配置されたという<sup>123</sup>。このうち、ラ地区の大型殿閣建物の下層で発見された蓮華文瓦当が注目される。この遺物は、大型殿閣建物の盛土敷地層から発見されていることから、官北里一帯の盛土層の年代を推定する端緒として活用できるためである(図二二七)。

ここでは、大きく分けて三種類の瓦当が出土している。図二二七の一は大通寺址出土品と同範品であり、図二二七の二は官北里と王

宮里一帯で多数発見されるハート形蓮弁の瓦当で、日本の飛鳥寺の花組系と関連し、図二二二七の三は、亭岩里窯址A地区一号瓦窯出土品と同范品である。これら瓦当の中心年代は、図二二二七の一と図二二二七の三の場合、おおよそ六世紀半ばから後半と考えられる。図二二二七の二は、五八八年に瓦博士が派遣される以前に製作されたものと考えられているが<sup>124</sup>、五六七年頃に建立された陵山里寺址では発見されないため、それよりも若干新しい六世紀半ばから後半に使用されたといえよう。したがって、この場所の盛土作業は、図二二二七の二が廃棄された六世紀半ばから後半頃には始まったと考えられる。

一方、二〇〇八年度の官北里遺跡の北西側一帯に対する調査(バ地区)では、敷地造成の時期を推定できる中国製青磁片が出土しており注目される(図二二二八)。この遺物は、青磁缶片であり、中国の陳代や隋代に類似する器形と文様の青磁が出土している<sup>125</sup>。図二二二八の場合、蓮弁の端が整えられておらず散漫なため、器形と文様から両者の中間段階である六世紀第2四半期に比定できる。そうすると、官北里一帯の盛土作業は六世紀中後半、特に六世紀第4四半期以降になされたものとみられ、道路はそれと同時期もしくは直後の六世紀後半頃に開設されたといえよう<sup>126</sup>。こうした状況を勘案すると、官北里の長方形区画は、その形態が非常に不完全だけでなく、遷都当時には存在していなかったことがほぼ明らかになったといえよう。

次に、官北里の長方形区画で確認された南北大路が、定林寺址と関連があるという仮説について検討してみたい。これを最初に提起した尹武炳は、官北里遺跡(ナ地区)で確認された南北大路を延長すると現在の定林寺址の西側塀とほぼ一致するため、少なくともその一帯までは整然とした道路網によって区画されたであろうとする<sup>127</sup>。しかし、植民地期をはじめ、一九七九年から数次にわたり調査された定林寺址に対する発掘では、寺域を確認するための調査は一度も実施されていない。尹武炳がいう定林寺址の西側塀は、現在の扶余市街地に設置された定林寺址の西側塀を指すものであるが、泗泚都城のGPS探索によって、官北里遺跡の南北大路は、定林寺址の西回廊や石塔と一致する可能性のほうが高いという結果が出た。したがって、そうした主張の妥当性についても再検討する必要がある。

現在、官北里遺跡の南北大路と定林寺址の外郭の関係を検証できる資料としては、地籍図(図二二二九)と扶余市街地計画平面図(図二二三〇)を挙げることができる。扶余地域に対する地籍調査は、一九一四年に初めて実施され、これに基づいて以後広く活用されている五

万分の一地形図が作成されたとみられる。そうした点で、図二二二九の一二二〇〇分の一地籍図は、一九一〇年代の扶余市街地の状況をもっともよく反映する資料といえよう。図二二三〇は、扶余地域に対する最初の近代的都市計画案を含む都市計画図であり、一九三九年に作成されたものである。当時、朝鮮総督府では内鮮一体の象徴物である扶余神宮の建立のためにこうした都市計画案を作成することになった<sup>128</sup>。ところで図二二三〇と現在の扶余邑地図を比較してみると、幹線道路がほとんど一致するため<sup>129</sup>、図二二二九との比較を通して前近代の扶余市街地の道路網がどのように変化したかを理解することが可能になる。

図二二二九をみると、官北里の長方形区画で確認された南北大路が、後述する旧衙里の正方形区画の東側を通ってまっすぐ南に下りてから、定林寺址の北側一帯で若干曲がって南西側に折れた後、現在の定林寺址の寺域北側で再び真南に繋がっている。つまり、一九一〇年代の地籍図から確認されるこうした事実は、官北里遺跡の南北大路と定林寺址西側塀が、なんら関連がないことを示唆している。ところで、図二二二九をみると、現在の定林寺址西側塀の横を通る南北道路は、一九三九年の都市計画によって新設された道路であることが明らかで、それ以前には存在しなかったことが確認される。したがって、官北里の長方形区画の南北大路が定林寺址の寺域と関係するという仮説は根拠がないといえよう。

次に、扶余宮南池、軍守里地点、陵山里・佳塔里地点、双北里ヒョンネドウル・北浦遺跡など扶余市街地で発見された道路遺跡が、官北里遺跡で確認された幅八・九メートルの南北大路や幅三・九メートルの南北小路および東西小路と、その大きさと方向において一定の相関性を持つということについて、どのように理解できるかを検討する。

まず、宮南池の東西道路の場合、幅八・九メートルほどの道路が約四五メートル確認されている(図二二二二)。この道路の幅は、それよりも後に造成された東西水路Ⅱの幅を勘案すると、本来は一〇メートルほどであったと推定され、その方向が官北里の東西道路と一致するためこれと関連すると推定されている<sup>130</sup>。宮南池の道路遺構で留意しなければならないことは、発掘調査で確認された道路の幅は、あくまでも推定値に過ぎず、数値にも差があり、特にその開設時期が明確でないため、これを泗泚遷都当時のものと遡らせて理解することは無理があるという点である。

軍守里地点では、長さ二〇メートルの東西道路が確認されており、側溝を含む道路の幅が四・六メートルに達するという<sup>131</sup>。ところで、ここで確認された東西道路と二基の大壁建物(壁柱建物)、四基の掘立柱建物、工房施設、埋納遺構などは、区画中軸線に沿って非常に整然とした配置をみせている(図二一三二)。軍守里地点の建物址群は、水田と隣接する東側部分のみ木柵列で区分して、残りの西・南・北側は、全て道路によって整然と区画された単位空間として構成されたものと考えられる。その推定規模は、建物区画が南北一九・六メートル、東西一七・二メートルである。また、側溝を含む幅四・六メートルの道路中心線からの単位区画は、南北二八・三メートル、東西二五・八メートルになるため、これを官北里一帯で確認された南北一一三・一メートル、東西九五・五メートルの長方形区画と比較すると約一六分の一になる。そうした点から軍守里地点で確認された単位区画は泗沘都城の最小単位区画である可能性があるという<sup>132</sup>。

しかし、筆者は、こうした最小単位区画が新羅王京の最小単位区画である一坊の大きさ(東西一六七・五メートル、南北一七二・五メートル)と比較するとあまりにも狭いため、これを泗沘都城全体に適用できるかについては疑問を持っている<sup>133</sup>。したがって、軍守里地点で想定した単位区画も、官北里の長方形区画を意識して算出された理想的なものに過ぎないと判断される。もし、軍守里地点の単位区画を想定するとしても、前述したように官北里の長方形区画が遷都当時のものではないため、この地点の単位区画を遷都前後の時期のものとする断定することはできない。そうした点から軍守里地点で確認された建物址は、あたかも中枢伽藍に様々な建物が整然と配置されているかのように、それ自体で完結した性格をもつ建物群が計画的に配置された事例という程度に評価しなければならないだろう。

扶余陵山里・佳塔里地点でも道路遺跡が確認されている。この遺跡の場合、五ヶ所で道路の痕跡が確認されており、そのうち第二地点では南北四〇メートル、東西一五〇メートルほどの道路交差点が確認されている(図二一三三)<sup>134</sup>。道路網の開設時点は、第二生活面から隋代の五銖銭が出土しているため、六世紀末から七世紀初め以後に比定できる<sup>135</sup>。また、双北里ヒョンネドウルと北浦遺跡からも道路遺跡が確認されている<sup>136</sup>。ヒョンネドウル遺跡の場合、全部で六ヶ所の道路遺跡があり、東西方向と南北方向の道路がすべて確認され、時期によって道路の幅や方向に違いがある。道路の開設時期を推定しうる資料としては、ヒョンネドウル遺跡二区域の堤防施設で出土した北齊の上平五銖銭と、四区域で出土した木簡がある。上平五銖銭は、図二一三四のように堤防施設の北端で確認された。五五三年

から北斉で発行しはじめた上平五銖銭は、五七七年に埋められた王興寺の木塔址からも確認されているが、百済と北斉は五六七年以後、使臣の往来があつたため、これらの上平五銖銭もそれ以降に伝来したものと考えられる<sup>137</sup>。また、後述するように四区域で出土した木簡の場合、近隣で出土した戊寅年(六一八)の「佐官貸食記」木簡と出土の脈絡や共伴遺物の性格が非常に類似しているため、六世紀末や七世紀初めのものと考えられる。したがって、この地域で発見された道路遺跡の開設時期も、遷都前後ではなく、六世紀半ばから後半以降と考えられる。特に、北浦遺跡の場合、道路の側溝から出土した印花文土器や巴文・素文瓦当、「官」「斯」「辰」などの文字が刻印された文字瓦を参考にすると、道路の開設時期は七世紀前半を遡りたいと思われる。

以上、扶余地域で確認された道路遺跡の検討を通して、それが遷都以後、一定期間が過ぎだ後に開設され、羅城内部が整然とした街路区画によって整備されていなかったことを確認した<sup>138</sup>。これを官北里遺跡の盛土敷地造成および道路の開設時点が六世紀後半であるという検討結果と対比させてみると、それと同時期であるか、一・二段階遅れて開設された道路も含まれていたことが分かる。そうした点から、こうした道路遺跡は泗泚都城造営の計画性と、段階的な整備過程を示す資料として評価すべきであり、羅城内部全体が遷都前後から整然とした道路網によって整備されていたことを証明する資料として活用することは適切ではない。ただ、官北里の長方形区画以外の異なる区画案が提示された場合、これを検証する手段として活用することはできるであろうし、都城内部に対する基本企画案と実際の実行案の違いを説明する資料としては活用しうるであろう。

## 二) 泗泚期の王宮区域と定林寺址

これまで、泗泚都城の内部構造を推定しうるもつとも重要な根拠は、官北里遺跡で確認された長方形区画であつた。しかし、前述したように、この区画は泗泚遷都前後のものではなく、少なくとも六世紀後半以降に造成されたものである。そうした点で、王宮の位置を含む内部区画に対する新たな模索が必要である。そこで、地籍図、滅亡期の考古資料、木簡の三つの側面からこの問題に迫っていく。

まず、植民地期に製作された地籍図を検討する。図二二一九の地籍図をみると、官北里遺跡のカ地区の下層から正方形に近い四つの区

画が確認されている。この区画は、旧衙里と官北里にかけて分布しているが、官北里遺跡の長方形単位区画と区分するため、「旧衙里正  
方形区画」と呼ぶことにする<sup>139</sup>。旧衙里の正方形区画の規模は右側下段の方形区画を地籍図から算定してみると、一辺の内側の広さは、  
八二・二〇八二・八メートルで、平均八二・五メートルになり、道路と道路間の中心間の距離は、八八・二メートル、各道路の幅は、五・  
七メートルという数値を得られる。一辺の長さは官北里の長方形区画に比べて縮小したが、平面区画の形態が正方形になっている点や、  
道路の幅が五・七メートルであることは、官北里ナ地区で確認された東西小路および南北小路の五・三〇五・六メートルと類似する。特  
に、地籍図から算出された八八・二メートルは、南朝尺を適用すると三六〇尺という完数をえられる<sup>140</sup>。三六〇南朝尺は、六十歩とい  
うまた別の完数を得られるため、非常に意味のある数値であり、泗泚都城の内部構造を理解するうえで無視してはならないだろう。また、  
この大きさが全体の四分の一であったことを考慮すると、一辺一六六・四メートル、七二〇南朝尺、一二〇歩という数値が算出され、こ  
の数値が泗泚都城の最も基本的な単位区画の大きさであった可能性も提起しうる。そして、この数値は慶州皇龍寺址東側王宮区画の一區  
域の大きさである東西道路の中心軸の距離一六七・五メートル、南北道路の中心軸間距離一七二・五メートルとも類似する<sup>141</sup>。そうした  
点で旧衙里の正方形区画は、この一帯が泗泚期の王宮址であった可能性を新たに提示している。

次に、百濟滅亡期の唐軍の進駐と関連する遺物として、「大唐」銘瓦当の存在が注目される(図二二三五)。「大唐」銘瓦当は扶蘇山城  
と双北里で出土しており、文様や製作技法が在来の百濟瓦や新羅瓦とは全く異なる。したがって、この遺物が出土した扶蘇山城や双北里  
には、唐の百濟占領のための中心的な建物があったと推測でき、さらには泗泚期の王宮の中心的な建物があったと推定できる<sup>142</sup>。双北  
里遺跡の場合、発掘調査では三つの礎石が出土しているにも関わらず、赤く焼けた焼土塊が多数出土していることから瓦窯址と推定され  
た<sup>143</sup>。しかし、その付近には大型礎石が散在し、図二二二七の三の同范瓦や緑釉片が共に発見されている。したがって、「大唐」銘瓦  
当を参考にすると、王宮区域の一部とみて無理がないと思われる。ただ、年代的に六世紀半ばに該当する遺物がなく、近隣地域で七世紀  
前半代の遺物が集中することから、官北里一帯より若干遅れて開発され、王宮の東側区域に当たるとはならないかと推定される。

官北里遺跡のラ地区東側からは、百濟滅亡直後に唐軍の使用した瓦窯址が発見されている<sup>144</sup>。内部から発見された瓦当の場合、低い

周縁のなかに連珠文が施されているが、瓦当の接合方式は「大唐」銘瓦当と共通する。したがって、百済の王宮区域は、唐式瓦窯が発見された地点より南側あるいは東側に位置したものと推定される。

一方、木簡などの文字資料を通して、王宮の範囲をある程度推定できると考えられる。現在まで羅城内部で木簡が発見された地点をみると、官北里(忠南大学校博物館・国立扶余文化財研究所)、官南池(国立扶余文化財研究所)、旧衙里(中央聖潔教会遺跡、扶余郡文化財保存センター)、双北里一円である。このうち、双北里一円では、一〇二番地(住公アパート、忠南大博物館、図二二三五の双北里一)、二八〇一五番地(新星電気倉庫敷地、百済文化財研究院、図二二三五の双北里二)、ヒョンネドウル遺跡(忠清文化財研究院、図二二三五の双北里三)、一七三七八番地(一一九センター新築敷地、東方文化財研究院、図二二三五の双北里四)、ティツケ遺跡(扶余郡文化財保存センター、図二二三五の双北里五)で木簡が出土している。

このうち、官北里の木簡は、すべて力地区の蓮池から出土した。蓮池は、六世紀末や七世紀前半に造成されたものとみられるが、四面の石壁は二度にわたって造成されたものと考えられている<sup>145</sup>。蓮池の内部から開元通宝が発見され、木簡が出土した層位と対照してみると、おおよそ七世紀前半から半ばに使用されたものと考えられ、一部滅亡期に使用されたものも含まれているとみられる。八三三号の「兵与記」「中方向」と書かれた木簡などをみると、近隣に国王の命令を遂行する中央行政官署が配置されていた可能性も排除できない。旧衙里の中央聖潔教会遺跡の場合、遺跡の性格は明らかでないが、都城の行政区域名称(下部、中部、前部)と官位(奈率)、人名(得進)、物品(赤米)などの記された木簡とともに、隋代の青磁多足硯が確認された<sup>146</sup>。したがって、この遺跡の付近にも中央行政官署のような主要施設が配置されていた可能性があると考えられる。

双北里一円では、六ヶ所の遺跡で木簡が出土している。双北アパート敷地に対する発掘では、唐尺と推定される尺とともに、倭国の調度品などに付けられた付札と考えられる「那尔波連公」木簡が出土した<sup>147</sup>。双北里二八〇一五番地遺跡からは出挙に関連する帳簿と中央行政機関である「外椋」<sup>148</sup>と記された木簡、そして題籤軸が発見されている<sup>148</sup>。また、双北里ヒョンネドウル遺跡の場合、成人男性で



ある「丁」の数を記した木簡と、「上戸」と記した付札が出土した<sup>149</sup>。その他に双北里一七三―八番地・一一九センター新築敷地の木簡からは、「五石」や「部」字が確認され<sup>150</sup>、双北里ディッケ遺跡からは未詳の木簡一点が出土している<sup>151</sup>。

双北里一帯で木簡が発見された地点は、扶蘇山を基準にすると、その東側や東南側一帯に当たる。その中心時期は、戊寅年(六一八)と記された「佐官貸食記」木簡や共伴遺物から、おおよそ七世紀前半から半ばであったと考えられる。それでは、双北里一帯でこれほど木簡の出土頻度が高いのはなぜだろうか。これと関連して注目されるのは、双北里二八〇―五番地遺跡で出土した三点の木簡である。特に、出挙と関連する「佐官貸食記」とともに、題籤軸と「外椋戸」という中央行政機関の名称が確認されたことは非常に重要である。なぜならば、少数ではあるがこうした木簡を通して、この付近で一連の文書行政が行われていたと推測できるためである。

もうひとつ注目されることは、双北里二八〇―五番地一帯の「佐官貸食記」や他の下札に使用するための木簡型木製品の内、その樹種に日本産の木材であるスギが含まれている点である<sup>152</sup>。この遺跡では須恵器片一点が出土しており、隣近のヒョソドウル遺跡でも須恵器片が共に発見された。これら日本産の遺物は双北里住公アパート敷地に対する調査で出土した「那尔波連公」という木簡とも関連があるだろう。このことから、双北里一帯の木簡や日本の須恵器片が発見された周辺地域は、単純な貴族の邸宅と言うよりは、国内外の物資が集積されたり搬出される官庁といった性格を有した可能性がある。その他に、官北里遺跡の蓮池や宮南池の水路からも木簡と共に日本産の須恵器や須恵器系統の遺物の発見されている点が参考となる<sup>153</sup>。このような点を考慮すると、日本から輸入した須恵器やスギ製の木簡などが共に発見された双北里一帯は、官庁やそれと深い関連のある遺跡が隣近に立地していた可能性が高いといえるだろう。現段階でこの一帯に外椋部という官署があったと断定はできないが、この一帯が羅城東側や扶蘇山城北東側の道路を利用しやすい場所に立地しており、隣接地域で共に出土した遺物に尺や量器といった度量衡があったことを見ると、現在の扶余女子中学校一円、双北里住公アパート一円、扶蘇山城東南側区間は、外椋部をはじめ中央行政官署が位置した可能性がかなり高いといえる<sup>154</sup>。

こうした点を考慮すると、これらの木簡が発見された西側地帯は、中央行政官署と関連する重要施設である王宮のあった可能性が高いと考えられる(図二一三五)。王宮の東側地域に中央の行政官署が位置することになったのは、南側一帯には定林寺址をはじめ寺院が位置

しており、西側には白馬江が流れているためではなかったかと思われる。ただ、この一帯で出土した遺物の大部分が、七世紀前半以後に属することをみると、武王代以後になって双北里一帯に対する開発が本格化した可能性もあろう<sup>155</sup>。そうした点から六一二年の大洪水の記録や六五五年に東宮を修理した記録は、この一帯の発掘調査の内容と一定の関わりがあるといえよう。挟余市街地内で出土した木簡からも中央行政機関の位置を推定し、これによって都城の核心施設である王宮の位置を推測してみた。

以上の検討の結果、泗泚期の王宮区域は扶蘇山城南側の旧衙里・官北里・双北里一帯に位置したものと考えられる。その範囲は、西側は官北里大型建物址の近くで唐式瓦窯が発見された地点が一定の指標になるであろう。東側は扶余初等学校や扶余女子高校付近で「大唐」銘瓦当が発見された双北里遺跡付近、南側は定林寺址の北側を境界とした一定区域であったと考えられる。ただ、図二一三五をみると旧衙里の正方形区画が想定される地点がより中心的な位置にあったと思われる。「大唐」銘瓦当が発見された双北里遺跡の近隣で二つの古道が合流しているが、その東北側にある地籍図の線は、旧衙里付近の地籍図の線と方向が異なっている。したがって、こうした違いが前述した双北里一帯の開発が遅れたことと関連するののか、今後の検討が必要であろう。

それでは、旧衙里の正方形区画あるいは王宮区画は、定林寺址とどのような関わりを持つのだろうか。図二一三六は旧衙里の正方形区画を等分して地籍図に合わせたものである。その結果、現在の定林寺址は旧衙里の正方形区画から南側に一八〇歩離れた東側に位置することが確認される(図二一三六のA)。ただ、地籍図に表示された定林寺址の位置は推定したものであるため、今後より精密な補正作業が必要である。しかしながら、図二一三六を通して定林寺址の伽藍中心部が正方形区画に含まれる可能性が確認される。少なくとも、現在までの発掘の結果あらわれた北端の講堂址と南端の蓮池は、方形区画の内側に位置していることを確認できる。しかし、先に指摘したように、定林寺址の外郭線(南門や西門、塀など)は全く明らかになっておらず、その大きさは不明である。したがって、これだけで旧衙里の正方形区画と定林寺址が密接な関係をもっていると断定することは難しいだろう。

しかし、図二一三六に基づいてさらに推論してみると、旧衙里正方形区画あるいは王宮区域が定林寺址の寺域となんら関係がないとも言い難い。旧衙里の正方形区画を東西南北に六十歩ずつ拡大してみると、これまで発掘された官北里の長方形区画や官北里ラ地区の大型

殿閣建物址を含むことになる(図二一三六のB)。そして、その外郭線の二二〇步南側に王宮の四分の一程度の大きさで定林寺址の伽藍中心部建物が位置することになる。この時、定林寺址の創建時点を筆者のように五四一年前後と把握できるならば、その配置は王宮や王宮区画との関係を考慮した非常に意図的なものといえることになる。

一方、定林寺址の発掘では、泗泚遷都以前に遡る三足土器と中国青磁片(図二一九の一)が発見されている<sup>156</sup>。これは寺院の敷地造成や配置のような基礎作業が遷都前後から始まっていたことを示唆する。そうした準備過程があったため、五四一年の梁武帝の工匠・画師の派遣を通して、比較的短期間に木塔や塔本塑像、丈六尊像などを作ることができたのだろう。したがって、定林寺址は遷都当時から王宮や官衙のような国家施設の一部として計画され、聖王の意志通りに建立が実現したものと推定される。ただ、王宮の位置を確定できず、定林寺址の寺域も未詳であるため推論の域をでない。とはいえ、定林寺址式伽藍配置が泗泚期における百済の伽藍配置の原型として滅亡期まで続いたことをみると、その可能性を完全に否定することも難しいだろう。

泗泚都城における定林寺址の立地条件や位相は、北魏の洛陽永寧寺や南京同泰寺に比肩しうる。洛陽永寧寺の場合、仏塔を中心として周囲に主要な建物を配置しているが、仏殿の形態が太極殿と共通し、寺院の塀も宮牆と同様で、南門の形態と構造を宮殿の正門(端門)のように作るなど、当時の官庁の建物と非常に類似しているという<sup>157</sup>。また、「釈老志」には洛陽城内に永寧寺しか建立できないよう規制したと記されており<sup>158</sup>、洛陽永寧寺の建立が徹底した計画と統制の中で行われたことが分かる。永寧寺に対する発掘の結果、この寺院は朱雀大路の西側に位置し、南北大路や東西大路などの街路区画の中で整然と配置されたことが再確認された<sup>159</sup>。

南京同泰寺は、普通二年(五二二)九月に建立されはじめ、普通八年つまり大通元年(五二七)三月に完成した寺である<sup>160</sup>。梁の武帝は、ここで捨身や無遮大会・講經といった仏事を何度も執り行った。武帝は行幸の便宜のために台城の北側に大通門をつくったが、大通門は世俗の空間である台城から、聖なる空間である寺院に入る通路であった。武帝が三回または四回にわたり同泰寺で捨身を行なったとき、必ずこの門を通過したが、これは世俗の統治者としての皇帝権の消失と復活を意味する象徴的な行為であったといえよう<sup>161</sup>。同泰寺には建康で最も高い九層木塔が建立されたが、これは、洛陽永寧寺の九層木塔を意識して建立されたものと考えられる。永寧寺や同泰寺は、

発願者の信仰心を表わすと同時に、ここが世界の中心であり、仏教の都であるということを象徴的に示し、帝都のランドマーク的役割を果たしたのである<sup>162</sup>。

こうした洛陽永寧寺と南京同泰寺の事例は、定林寺址の都城内における位相ともよく符合する。したがって、定林寺址は、王宮の南側に遷都以前から一定の計画によって配置された寺院であり、王宮とともに都城の最も際だったランドマークであったと考えられる。こうした景観的な特性は、定林寺址の伽藍中心部に建てられて木塔を初めとする塔本塑像と金堂の丈六尊像などによってさらに華麗に荘厳されたのである。定林寺址は地理的な側面だけでなく、景観的、機能的にも泗泚遷都直後の都城における最も核心的な寺刹として機能したものと考えられる。まさにこの点ゆえに唐の將軍蘇定方は百濟を滅亡させた後、戦勝記念文である「大唐平百濟国碑銘」を五層石塔に意図的に刻んだといえるであろう。定林寺址の塔内塑像の製作と寺院の建立は、泗泚遷都直後における聖王の王権強化の努力に伴う記念碑的な造形物製作の一環であったと評価できる。こうした国家的な象徴物が泗泚遷都直後に聖王の積極的な支援の下になされた点で、定林寺址の建立目的と泗泚遷都の目的は関連していたといえよう<sup>163</sup>。

王宮と寺院の配置という観点からみると、泗泚期の王宮と定林寺址の関係は、非常に重要な意味を持つ。聖王は、五三八年の泗泚遷都を通して、政治空間と宗教空間を計画的に一体化させたと評価できるためである。六世紀末から七世紀代、日本の都城と寺院では小墾田宮と飛鳥寺をはじめ、斑鳩宮と若草伽藍、百濟宮と百濟大寺、前期難波宮（小郡宮・豊碓宮）と四天王寺のように王宮と寺院がセットになっていることが確認される<sup>164</sup>。このように王宮との密接な関連の下で運営された寺院は、王権の統合儀礼が行なわれた統合中枢として機能した可能性がある。こうした特徴的な姿は、泗泚都城の王宮と定林寺址の関係や本稿では検討できなかったが、離宮と推定される益山王宮里遺跡と帝釈寺址の関係と酷似しているといえよう（本稿第四章第一節参照）。

## まとめ

扶余定林寺址は泗泚遷都以後、都城の中央に建立された最初の寺院である。第一節ではここから出土した塑像の奉安場所と製作時期、

系統と伽藍配置の特徴を調べた。定林寺址から出土した塑像は共伴遺物と史料二一一などの文献記録からみると、五四一年に梁の工匠・画師のような技術者の直接的な援助を受けて製作されたもので、創建当初には木塔の塔内塑像であったと考えられる。定林寺址は塔内塑像の製作や製瓦術、緑釉製作技術、木塔の建立をはじめとして東堂と西堂といった伽藍配置にいたるまで南朝の影響を多く受けたといえる。しかし、二重基壇の下成礎石や講堂址の東西にある別途建物址のような要素は高句麗の影響と考えられる。したがって、定林寺址は南朝文化を主としながらも高句麗文化を部分的に受容して成立したものと考えられる。

泗泚都城で最初に建立された定林寺址の伽藍配置は、百濟滅亡期まで持続的に影響を与えたため百濟泗泚期の寺院は「定林寺式伽藍配置」の成立と展開過程であったといえ、そうした点でこの寺院の創建を契機に百濟式寺院が成立したと評価できる。定林寺式伽藍配置は日本の四天王寺式伽藍配置と同じく中門と塔、金堂、講堂が南北一直線上に配置なされ、それを回廊が囲む型式をいう。ただし、講堂と回廊の連結方式は北回廊に連結するのではなく、回廊北端の付属建物や講堂の東西にある別途建物に連結する型式であった。そして、回廊北端で共通して見られる付属建物は金堂よりは格が低い建物で、僧房のようなものと推定される。ただし、寢食が行われる生活空間である講堂北側の僧房よりはやや公的性格が強いことからこれを区分するために「東堂・西堂」（または「東室・西室」という用語の使用を提案した。その他に、東西回廊と南回廊はL字型にすぐに連結されずに断絶し、南回廊は東西回廊よりやや長く突出していることも確認された。

第二節では定林寺址建立の背景と目的、泗泚都城内での地位について検討した。定林寺址の塔内塑像には礼仏図の場面のようなものが含まれていたものと推定されるが、これは俗世の支配者を越えて仏教界の支配者を志向した聖王の意図が込められていると考えられる。史料二一一は定林寺址の建立に梁の専門技術と百濟王室の絶対的な支援があったことを裏付けるものであり、史料二二三の丈六尊像造成記録とも関連する。史料二二三は百濟の当時の事情を反映した信憑性がある記録で、定林寺址の創建や大型塑像の造営は聖王の造像を通じた功德の実践であると評価できる。つまり、定林寺址の創建目的は百濟王が徳を得ることと加耶諸国などのミヤケが百濟王に頼ること、全ての百姓が解脱を得ることにあったことを推察できる。

泗泚都城内部で定林寺址が持つ地位を検討するため、泗泚都城内部で発見された道路遺跡の開設時期と王宮の位置についても検討した。これまで泗泚都城は遷都当時から整然とした街路区画によって整備されていたと把握されてきたが、これは根拠のない推定であり、実際発掘された資料を見ると、その大部分は六世紀後半頃に開設されたことが確認できた。また、植民地期に製作された地籍図と滅亡期の「大唐」銘瓦、出土木簡などを通して泗泚期の王宮や王宮区域を図二二六のように推定してみた。その結果、旧衙里の正方形区画を中心にした王宮区域と定林寺址は非常に密接な関連性を持つて配置されていたことが確認できた(図二二六)。

したがって、本稿のように定林寺址の創建時点を五四一年前後と理解するならば、これは五三八年の遷都時に王宮との関係を考慮して非常に意図的に配置したものと見える。このような定林寺址の配置は、洛陽永寧寺や南京同泰寺のように王宮の南側に一定の計画によって配置されたもので、王宮と共に都城の最も特徴的なランドマークであったと言える。定林寺址を造営しながら行われた木塔の塔内塑像や百濟式寺院の建立は、泗泚遷都直後の聖王による王権強化の努力に伴う記念碑的な造形物製作の一環であり、その後百濟の最も核心的な寺刹であったと評価できる。

聖王が都城の中央に定林寺址のような大規模寺刹と大型の木塔を建設したことは、転輪聖王を自称しながら大規模寺刹と多数の木塔を建設した梁の武帝の姿を連想させる。梁の武帝は建康に同泰寺をはじめとする多くの寺院を建立したが、これは印度の阿育王、つまり後代に仏教の理想君主である転輪聖王とされたアショーカ王の行為を念頭に置いたものであった。聖王は梁の武帝との外交で仏教を積極的に活用し、その呼称は転輪聖王を意味したものと見ることもできる<sup>165</sup>。百濟の聖王はこれを通して自らが必要とする知識や技術を習得することができた。史料二一に羅列した事項はその成果物であるといえ、扶余定林寺址とその出土品はこれを具体的に傍証すると考えられる。定林寺址の建立、特に木塔の塔内塑像に聖王自身を主人公にした行列図のような場面を演出したり王宮と共に定林寺址を都城の中心部に配置したことは、彼の政治的意図と仏教、外交的努力が結合した産物であるといえ、これは新たな都城の優れた舞台装置になったと評価できるだろう。

- 1 国立扶余文化財研究所『百済廢寺址―學術調査報告書』(二〇〇八年)。
- 2 扶余文化院『扶余の地理志・邑誌』Ⅰ・Ⅱ(一九九九・二〇〇〇年)。
- 3 喜田貞吉「大唐平百済国碑に関する疑問」(『考古学雑誌』一五卷五号、一九二五年)。
- 杉山信三「大唐平百済塔の比例に就いて」(『考古学』八卷六号、一九三八年)。
- 米田美代治「扶余百済五層石塔の意匠計画」(『韓国上代建築の研究』、秋田屋、一九四四年)。
- 4 一九四二〜四三年度の試掘調査の結果は、一九七一年に藤澤一夫によつて簡略に紹介されている。しかし、当時の出土遺物や関連遺構についてほとんど知られていない。
- 藤澤一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の関係」(『アジア文化』八卷二号、一九七一年)。
- 5 尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』(忠南大学校博物館、一九八一年)。
- 6 尹武炳「扶余定林寺址蓮池遺跡発掘報告書」(『百済研究』一八、一九八七年)。
- 7 尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』(前掲書、六八頁)。
- 8 定林寺址五層石塔と弥勒寺址石塔の前後問題に関する研究史は次の論考が参考となる。
- 嚴基杓「百済石塔の先後に対する考察」(『文化史学』一六、二〇〇一年、三二〜四四頁)。
- 9 文明大「扶余定林寺址から出土した仏像と陶俑」(『季刊美術―冬号』、中央日報社、一九八一年)。
- 10 金理那「三国時代の捧持宝珠形菩薩立像研究」(『韓国古代仏教彫刻史研究』、一潮閣、一九八九年)。
- 金理那「宝珠捧持形菩薩の系譜」(『法隆寺から薬師寺へ』、講談社、一九九〇年)。
- 11 亀田修一「百済古瓦考」(『百済研究』一二、一九八一年) … 『日韓古代瓦の研究』(吉川弘文館、二〇〇六年)。
- 12 徐五善「韓国平瓦文様の時代的変遷に対する研究」(忠南大碩士学位論文、一九八五年)。
- 13 金英心「唐平済碑」(『訳註韓国古代金石文』Ⅰ、韓国古代社会研究所、一九九二年)。

李道学「定林寺址五層塔碑銘とその作成背景」(『先史と古代』八、一九九七年)。

<sup>14</sup> 権允遠「百済の籠冠考」(『尹武炳博士回甲紀念論叢』、一九八四年)。

金東旭『百済の服飾』(百済文化開發研究院、一九八五年)。

パクヒョンジョン「扶余定林寺址陶俑復元のための籠冠服飾研究」(『服飾』五一卷六号、二〇〇一年)。

<sup>15</sup> 鄭子英「六〜七世紀百済寺刹内講堂左右建物址の変遷過程考察」(『建築歴史研究』七三、二〇一〇年)。

金洛中「百済泗泚期寺刹の伽藍配置と造営の特徴」(『韓国上古史学報』七四、二〇一一年)。

鄭子英「扶余定林寺址伽藍配置と編年的検討」(『韓国上古史学報』七六、二〇一二年)。

<sup>16</sup> 尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』(前掲書、二二頁)。

<sup>17</sup> 其曰明器、神明之也。塗車芻靈、自古有之。明器之道也。孔子謂為芻靈者善、謂為備者不仁。注…備偶人也、有面目機發、有似于生人。

(『礼記』檀弓 下編)

仲尼曰、始作俑者、其無後乎。為其象人而用之也。趙岐注云、俑偶人也、用之送死。(『孟子』梁惠王編)

<sup>18</sup> 奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』(一九八七年)。

飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(一九八五年)。

<sup>19</sup> 尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』(前掲書、一七頁)。国立扶余博物館には一九八一年の発掘調査報告書から漏れた五〇余点の塑

像片があり、また最近の再調査でも同じ場所から二五点ほどの塑像が追加で確認されるなど(国立扶余文化財研究所『扶余定林寺址発掘調

査報告書』、二〇一一年、三一〇〜三一六頁)、ここでは一六〇余点ほどの塑像が発見された。

<sup>20</sup> 定林寺址出土塑像の分類は北魏の洛陽永寧寺の事例を参考にして大きさによって区分できる。洛陽永寧寺の分類案と用語は奈良国立文化財

研究所の用例を参考にした。

奈良国立文化財研究所『北魏洛陽永寧寺―中国社会科学院考古研究所発掘報告』(一九九八年)。



- 李炳鎬「扶余定林寺址出土塑像の製作技法と奉安場所」（『美術資料』七二・七三合集、二〇〇五年）。
- 21 山崎隆之「永寧寺塔内塑像の製作技法について」（『北魏洛陽永寧寺』（前掲書）。
- 22 下半身K・L・Mを文官の下半身と推定した見解がある。
- 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』（前掲書、四頁）。
- 23 定林寺址出土塑像の製作技法については次の論考で詳論しており、参考されたい。
- 李炳鎬「扶余定林寺址出土塑像の製作技法と奉安場所」（前掲誌、五一〜五九頁）。
- 24 定林寺址出土塑像の胎土は共伴した瓦や土器の胎土と非常に類似する。特に、瓦当製作の場合、瓦範を用いて製作されたため、范型を用いた塑像の製作技術をより容易に習得できたものと考えられる。
- 25 梁銀景「遼寧省朝陽北塔出土塑造像研究」（『美術史学研究』二五六、二〇〇七年）。
- 向井佑介「北魏平城時代の仏教寺院と塑像」（『仏教芸術』三二六、二〇一一年）。
- 26 （長沙寺）殿前塔。宋謙王義季所造。塔内素像切利天工所造。仏殿中多金銅像。宝帳飛仙真珠華珮。并是四天王天人所作。（『法苑珠林』第三九（『大正新修大藏経』五三卷 二二二二、五九八頁））。
- 27 賀云翱「南京鍾山二号寺遺址出土瓦当初探」（『東亞考古論』創刊号、二〇〇五年）。
- 賀云翱「南京鍾山二号寺遺址出土南朝瓦当及与南朝定林寺関係研究」（『考古与文物』一期、二〇〇七年）。
- 28 王志高・王光明「南京紅土橋出土的南朝泥塑像及相關問題研討」（『東南文化』三期、二〇一〇年）。
- 29 本稿の第四章第二節参照。
- 30 孫華「四川綿陽平楊府君闕闕身造像」（『漢唐之間的宗教芸術与考古』、巫泓主編、文物出版社、二〇〇〇年、八九〜一三五頁）。
- 31 国立扶余文化財研究所『扶余定林寺址発掘調査報告書』（二〇一一年、三二〇〜三二二頁）。
- 32 最近、梁職貢図の題記が追加で発見され、魯国は内容上、「北魏」を指すものと理解されている。

趙燦鵬「南朝梁元帝職貢圖題記佚文統拾」(『文史』四期、二〇一一年)。

<sup>33</sup> 図二一三が図二一五の「梁職貢図」の図像と類似し、また「帝王図巻」や「維摩經變」などとも関連させることができるということは、定林寺址の塑像の年代や塔内塑像の政治的意味を考慮する際にも重要な示唆を与えていると考える。「維摩經變」と「帝王図巻」、「梁職貢図」に見られる図像の意味については次の論文が参考となる。金惠媛「敦煌莫高窟唐代へ維摩經變に見られる世俗人聴衆の図像と意味」(『美術史の鼎立と拡散(二卷)』韓国および東洋の美術)、社会評論、二〇〇六年、三五八〜三六一頁)。

<sup>34</sup> 金理那「三国時代の捧持宝珠形菩薩立像研究」(前掲書、八五〜一四三頁)。

金理那「宝珠捧持形菩薩の系譜」(前掲書、一九五〜二〇〇頁)。

<sup>35</sup> 大西修也「宝珠捧持形菩薩の成立過程について」(『日韓古代彫刻史論』、中国書店、二〇〇二年、一七一〜一八九頁)。

車命貞「三国時代菩薩像に対する一考察」(持物を中心に)、『仏教美術史学』二、二〇〇四年、一〇九〜一二二頁)。

<sup>36</sup> 中国南北朝時代の仏舍利信仰と莊嚴については次の論考が参考となる。

周昞美『中国古代仏舍利莊嚴研究』(一志社、二〇〇二年、六〇〜九五頁)。

<sup>37</sup> その中で成都市西安路から出土した梁中大通二年(五三〇)銘仏造像と成都万仏寺出土梁中大通五年(五三三)銘仏造像が最も類似すると考えられる(図二一七の一)。これらの仏造像の背面には淨土図のようなものが浮彫りにされているが、これを見ると、定林寺址木塔の塔内塑像には捧宝珠菩薩像が含まれた群像や政経塑像で組み合わせられた行列図以外に、經典に基づいた変相図の一部が他の壁面を装飾した可能性も推定できる。

<sup>38</sup> 定林寺址五層石塔の建立時期を推定する際、まず最初に考慮する点は初層塔身に彫られた「大唐平百济国碑銘」である。この銘文を根拠に蘇定方が百济を滅亡させた後、それを記念するために五層石塔を建て碑銘を刻んだ可能性を提起できるためである。この銘文の作成時期は顕慶五年(六六〇)八月一五日と記録されている。羅唐連合軍の攻撃によって熊津城に移った義慈王が泗泚に戻って降伏したのは六六〇年七月一八日で、同年九月三日に蘇定方は劉仁願に泗泚城を守らせて唐に戻った。したがって、義慈王の降伏と碑銘が作成された時差は

わずか一ヶ月しかない。戦乱期という特殊性を勘案すると、一ヶ月という短期間に五層石塔を建立し碑銘を刻むことは不可能である。蘇定方は泗泚都城の中心部に位置し百済を象徴する最も核心的な寺刹である定林寺址の象徴性を認識していたため意図的にそこに戦勝記念文を刻んだと見なければならぬだろう。

<sup>39</sup> 金正基「弥勒寺塔と定林寺塔―建立時期の先後について」(『考古美術』一六四、一九八四年、二〇八頁)。

<sup>40</sup> 最近の金堂址に対する発掘の結果、百済創建期の金堂基壇土は約三〇センチ残ったまま削平され、その上に高麗時代の金堂址の積心石が配置されていることが確認された。ところで、高麗時代の金堂址の積心石が発見された地点のレベルと石塔の地面がほぼ同じであった。塔の基礎部は中心寺域内部より高いことが一般的であることから、これは現在の石塔の地面が創建当時のものではないことを示唆する。一方、中門址から蓮池につながる付近のトレンチ調査の結果、中門址の北側部分は創建当時に盛土されたが、その南側一帯は後代に再び盛土を行ったことが明らかになった。これは創建以後、特に七世紀中半に金堂と塔、中門などの建物址の基盤土が削平された後、木塔の位置に石塔が建立されたことを確認させるものと理解できる。

朴淳発『百済の都城』(忠南大学出版社、二〇〇九年、二八二―二八四頁)。

<sup>41</sup> 長干寺については早稲田大学院東洋美術史編「美術史料として読む『集神州三宝感通録』―釈読と研究(二)東晋金陵長干塔縁二」(『奈良美術研究』八、二〇〇九年を参照)。

<sup>42</sup> 円光大学校博物館『益山王宮里伝瓦窯址(帝釈寺廃棄場)試掘調査報告書』(二〇〇六年)。

<sup>43</sup> 綱干善教「飛鳥川原寺裏山遺跡と出土遺物」(『仏教芸術』九九、一九七四年)。

松下隆章編『研究発表と座談会―川原寺裏山遺跡出土品について』(仏教美術研究上野記念財団助成研究会、一九七七年)。

<sup>44</sup> 関西大学文学部考古学研究室「飛鳥・川原寺裏山遺跡と東アジア資料集」(国際シンポジウム実行委員会、二〇一二年)。

<sup>44</sup> 南京市文物保存委員会「南京郊区两座南朝墓清理简报」(『文物』二期、一九八〇年、二六頁)。

<sup>45</sup> 一方、南京燕子磯の梁普通二年墓と対文山南朝墓は、その規模や構造が公州武寧王陵と最も類似するという見解(権五栄「喪葬制を中心と

した武寧王陵と南朝墓の比較」(『百濟文化』三一、二〇〇二年、六〇頁)を参考にすると、この遺物は武寧王陵を築造した当時に伝来した可能性もある。

46 李炳鎬「百濟泗泚都城の造営過程」(『韓国史論』四七、二〇〇二年、一〇四〜一二二頁)。

47 文明大「扶余定林寺址出土の仏像と陶俑」(『季刊美術』冬号、一九八一年、一一八〜一一九頁)。

48 南北朝時代の仏像や塑像、壁画に描写された人物造形は梁武帝中期を前後に顧愷之と陸探微の「秀骨清像」から張僧繇の「骨氣奇偉」に変化し、北魏末からは肉感的な肉体表現が流行するようになる。

宿白「五・六世紀、北中国における人物造形上の変化と諸問題」(『中国国宝展』、東京国立博物館、二〇〇〇年、二五三〜二五八頁)。

49 南京博物院「江蕭丹陽景胡橋、建山兩座南朝墓葬」(『文物』二期、一九八〇年、一一六頁)。

50 南京市博物館『六朝風采』(文物出版社、二〇〇四年、二九四頁(図版二三八))。南京靈山墓は五五一年に亡くなった陳文帝の墓として知られている。

51 最近、南北朝時代の墳墓から出土した籠冠俑の分析結果もこれと符合している。

朴淳発「百濟籠冠俑研究」(『百濟研究』四八、二〇〇八年)。

52 同じ内容が『南史』列伝卷六九百濟條と『三國史記』百濟本紀四聖王一九年條に記録されている。

53 そのような点から中大通六年(五三四)の使臣派遣は五三八年に百濟が遷都を準備していることを梁に通報した可能性も排除しがたい。

54 李炳鎬「百濟泗泚都城の構造と運営」(『韓国の都城 都城造営の伝統』、ソウル学研究所、二〇〇三年、三八頁)。

55 山尾幸久「ヤマト国家の形成と日朝関係」(『古代の日朝関係』、塙書房、一九八九年、三二三〜三二六頁)。

56 ただし、定林寺址から泗泚遷都以前に遡る遺物が出土したり、第二章第二節で検討するように、この寺院が王宮を意識して意図的に配置されたものであれば、泗泚遷都当時からこの場所に寺院を建立しようという企画案があり、その過程で百濟内部では足りない技術を梁に具体的に要請したものと考えられる。

<sup>5</sup><sub>7</sub> 楊泓「百済定林寺遺址初論」(『宿白先生八秩華誕紀念文集』、二〇〇二年)・『中国古兵与美術考古論集』(文物、二〇〇七年)。

<sup>5</sup><sub>8</sub> 尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』(前掲書、三三三〜三四頁)。しかし、一九八〇年代の発掘品はもちろん、一九四二年度の発掘調査でも多数の単弁蓮花文瓦当が含まれているため、最小型式が存在したことが分かる。

<sup>5</sup><sub>9</sub> 亀田修一は、A・B・C類型の全てを六世紀後半から末期と把握しているが、その中でB類型が古式に属するものと見た。B類型の年代は塑像の製作時期を六世紀後半とし、これと同時期であると理解した。

亀田修一「熊津・泗泚時代の瓦」(『日韓古代瓦の研究』、前掲書、五九頁)。

<sup>6</sup><sub>0</sub> 定林寺址のA・C類型は梁蕭偉墓のI・II型式(図一六・一七)と、B類型はIII型式(図一〇・一一・図二二・二三)と類似し、南京鍾山出土品のうち、B・C・J・F型と類似する。特に定林寺址B類型は鍾山出土E類型(図一一、一三)と類似点がある。

南京市文物研究所・南京栖霞区文化局「南京梁南平王蕭偉墓闕発掘簡報」(『文物』七期、二〇〇二年、六三〜六九頁)。

賀云翱「南京鍾山二号寺遺址出土瓦当初探」(前掲誌、四〇七頁)。

<sup>6</sup><sub>1</sub> 清水昭博「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開」(『日本考古学』一七、二〇〇四年)・『古代日韓造瓦技術の交流史』(清文堂、二〇一二年)。

<sup>6</sup><sub>2</sub> 最近の南朝地域で出土した蓮華文瓦当に関する研究と新資料の紹介については次の論著を参考にした。

賀云翱『六朝瓦当与六朝都城』(文物出版社、二〇〇五年)。

賀云翱「南朝瓦総論」(『古代東アジアの造瓦技術』、奈良文化財研究所、二〇一〇年)。

王志高「六朝建康城遺跡出土陶瓦の観察と研究」(『韓国瓦学会第八回定期学術大会瓦の生産と流通』、二〇一一年)。

井内潔『井内古文化研究室所蔵中国六朝瓦図譜』(井内古文化研究室、二〇一二年)。

<sup>6</sup><sub>3</sub> 金英媛「百済時代中国陶磁の輸入と倣製」(『百済文化』二七、一九九八年、七六〜七九頁)。

<sup>6</sup><sub>4</sub> 国立中央博物館編『特別展百済』(一九九九年、一四三頁(図版二六七)、一七七頁(図版三二六)、一八四頁(図版三四一))。

<sup>6 5</sup> 松井忠春「韓国の土器文化について―百済の長鼓形器台とその性格―」（『激動の古代東アジア―六・七世紀を中心に』、帝塚山考古学研究所、一九九五年、一三三頁）。

<sup>6 6</sup> 李炳鎬「扶余定林寺址出土塑像の製作技法と奉安場所」（前掲誌、五八頁）。

<sup>6 7</sup> もちろん、百済では外交の一環としてだけでなく、他のルートを通して外国の技術者たちを導入したのであろう（窪添慶文「南北朝時代の国際関係と仏教」（『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一〇年、二八七頁））。しかし、定林寺址から初めて確認された新たな文物や技術は五四一年の技術導入過程において百済に入ってきたものと見ても無理は無いと考える。

<sup>6 8</sup> 樋口隆康「百済武寧王陵出土鏡と七子鏡」（『史林』五五巻四号、一九七二年、四一四〜四一五頁）。

<sup>6 9</sup> 佐藤武敏『中国古代工業史の研究』（吉川弘文館、一九六二年、八〇〜八六頁）。

桃崎祐輔「七支刀の金象嵌銘技術にみる中国尚方の影響」（『文化財と技術』四、二〇〇五年、一四七〜一六二頁）。

<sup>7 0</sup> 高敏『魏晉南北朝経済史』下（上海人民出版社、一九九六年、八一―頁）。

<sup>7 1</sup> 藤澤一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の関係」（前掲誌）。

尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』（前掲書）。

<sup>7 2</sup> 尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』（上掲書、六〇頁）。

<sup>7 3</sup> 国立扶余文化財研究所『扶余定林寺址発掘調査報告書』（前掲書、八九〜九五頁）。

<sup>7 4</sup> 李炳鎬「植民地期における扶余地域の寺址調査に対する再検討」（『奈良美術研究』一一、二〇一一年）。

百済寺院をはじめとした韓国の古代寺院において、北回廊の導入時期に対する問題の重要性を最初に指摘したのは金正基であり、一九七〇年代初半のことである（金正基「韓国の寺院遺跡について」（『仏教芸術』八三、一九七一年））。その後、一九八八年に発表された次の論文を通して継続して自説を補完したが（金正基「韓国古代伽藍の実態と考察」（『蕉雨黄寿永博士古稀記念美術史学論叢』、通文館、一九八八年）、最近までもこれに関するこれといった議論の進展がなかったのが事実である）。

7 5 佐川正敏 「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置、木塔心礎施設、舍利奉安形式の系譜」(『古代東アジアの仏教と王権』、二〇一〇年、一六四頁)。

7 6 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址六〇八次発掘調査報告書』(二〇〇七年)。

7 7 本稿の第三章第一節参照。

7 8 本稿の第三章第二節参照。

7 9 本稿の第三章第二節参照。

8 0 二九九号の場合、祭祀儀礼の位牌とする見解(尹善泰 「扶余陵山里出土百済木簡の再検討」(『東国史学』四〇、二〇〇四年)と人名簿の記

録簡とする見解(近藤浩一 「扶余陵山里出土木簡と泗泚都城関連施設」(『東アジアの古代文化』一二五、二〇〇五年)、祓禊行事の中でも大禊といった祭祀儀礼で用いられたという見解(方国花 「扶余陵山里出土二九九号木簡」(『木簡と文字』六、二〇一〇年)などがある。裏面に乙のような記号を反復して羅列した点や、表面は空間を作り、裏面は外郭に枠線を設けているなどから呪符木簡である可能性が高いと考えられる。二〇〇一―八号の場合、四面から「迦」と若干の空白を置いて「葉」が発見されているが、「釈迦」や「迦葉」といった仏教的な文章があった可能性がある(本稿の第三章第一節参照)。この木簡は三〇四号宝意寺、三二三号子基寺銘木簡とともに陵山里出土木簡が仏教と密接な関連を持っていることを直接的に示している。

8 1 本稿の第三章第一節参照。中門址南側では青磁硯足片をはじめとした多様な形態の硯足片と削刀、削屑などが共に発見された。これを見ると、陵山里寺址では初期段階から持続的に書写や行政行為が行われたものと考えられる。したがって、不明建物址Ⅱのみならず、その向かい側にある工房址Ⅰ(西側付属建物)も類似した機能を担ったものと考えられる。

8 2 趙源昌 「百済二重基壇築造術の日本飛鳥寺伝播」(『百済研究』三五、二〇〇二年)。

清水重敦・山下秀樹 「古代寺院建築における特異な基壇、平面とその構造」(『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』、二〇〇九年)。

裴秉宣 「弥勒寺の造営と東アジア建築」(『百済仏教文化の宝庫、弥勒寺』、国立文化財研究所、二〇一〇年)。

8 3 米田美代治 「朝鮮上代の建築と伽藍配置に及ぼせる天文思想の影響」(『朝鮮上代建築の研究』、一九四四年)。

- 84 尹武炳「扶余定林寺址発掘記」(『仏教美術』一〇、一九九一年、三九頁)。
- 85 盧明鎬ほか『韓国古代中世地方制度の諸問題』(集文堂、一九九四)。
- 86 李道学「抱川半月山城出土「高句麗」瓦銘文の再検討」(『高句麗研究』三、一九九七年、三五頁)。
- 87 金栄晃『中世語辞典』(科学百科事典総合出版社、一九九四年、二二頁)。この本では『杜詩諺解』と『三訳総解』から「새」が「草」を意味することを明らかにしている。『杜詩諺解』巻七の狂夫編には「万里橋西一草堂」を「万里橋入西入너그새지미로소니」としている。
- 88 高麗時代の扶余定林寺において大藏殿(堂)の位置は明確ではないが、講堂址北東側の東北区一带建物址がそれではないかと考えられる(国立扶余文化財研究所『扶余定林寺址』(前掲書、一二七頁および図面三八)。
- 89 文東錫「梁武帝の仏教政策について」(『東亞考古論壇』二、二〇〇六年)。
- 90 南京鍾山二号寺址を上定林寺と推定した研究があり、注目される。  
楊泓「百濟定林寺遺址初論」(前掲書)。
- 賀云翱「南京鍾山二号寺遺址出土南朝瓦当及与南朝定林寺關係研究」(前掲誌)。
- 91 趙胤宰「扶余定林寺寺名の由来と意味に対する検討」(『韓国史学報』四五、二〇一一年)。
- 91 石田茂作「橋寺、定林寺の発掘」(『飛鳥』、近畿日本叢書三、一九六三年、一二七〜一四〇頁)。
- 奈良国立文化財研究所「定林寺調査」(『飛鳥藤原宮発掘調査概報』八、一九七八年、六〇〜六二頁)。
- 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲書、一六頁と五二〜五三頁)。
- 92 扶余定林寺址の寺名が百濟当時のもので中国南朝の上定林寺に由来したとしても、第二章第二節で説明するように都城内のプランや位相は建康同泰寺や洛陽永寧寺により類似したものと考えられるため、この点を誤解されないようお願いしたい。
- 93 森三樹三郎『梁武帝―仏教王朝の悲劇』(平楽寺書店、一九五六年、一五〇〜一五一頁)。
- 94 五四一年、百濟が梁に要請した『涅槃經』など註釈書は梁武帝代に編纂された註釈書、つまり宝亮の『涅槃經義疏』と僧朗が編集した『涅槃



槃経集解』(全七二卷)などを指すものと見る場合もある。

崔鉞植「百済後期仏教教学の変遷と弥勒思想の性格」(『百済仏教文化の宝庫、弥勒寺』、二〇一〇年、七八頁)。

95 藺田香融「東アジアにおける仏教の伝来と受容」(『関西大学東西学術研究所紀要』二二、一九八九年、一一頁)。

96 李基東「百済国の政治理念に対する一考察」(『百済史研究』、一潮閣、一九九六年、一七七〜一七八頁)。

97 窪添慶文「南北朝時期の国際関係と仏教」(『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一〇年、二八六〜二八七頁)。

98 二十七年(四五〇)、毗上書献方物、私假台使馮野夫西河太守、表求易林式占腰弩、太祖並与之。(『宋書』夷蠻列伝第五七 百済伝)

99 正光元年(五二〇)、明帝遣假員外將軍趙義等使於嘉。嘉朝貢不絶、又遣使奉表、自以辺遐、不習典誥、求借五経諸史、并請国子助教劉燮以爲博士、明帝許之。(『北史』列伝第八五 高昌伝)

このような見解は次の論考で提示されている(窪添慶文「南北朝時期の国際関係と仏教」(前掲書、二九〇頁)。

100 百済が梁からもらい受けた涅槃経関係と毛詩博士の構成の組み合わせは、五五四年(欽明一五)に百済から日本へ五経博士と僧を一緒に送ったことと関連があるものとみる場合もある。

新川登亀男「百済と日本の飛鳥・奈良における仏教文化」(『忠清学と忠清文化』一三、二〇一一年、九五〜九七頁)。

101 坂本太郎等校注『日本書紀』下(岩波書店、一九八六年、九二頁)。

102 田中史生『倭国と渡来人』(吉川弘文館、二〇〇五年、四七頁)。

この時の呉財を欽明四年(五四三)九月条の「扶南財物」とする見解もあり(新川登亀男「百済と日本の飛鳥・奈良における仏教文化」(前掲誌、九三〜九四頁)、また史料二二三の任那の使臣に「呉財」を与えた五四五年(欽明六)前後を日本の仏教伝来の年代と推定する見解もある(藺田香融「東アジアにおける仏教の伝来と受容」(前掲誌、二八頁)。

103 有働智英「六世紀における仏教受容の問題」(『国学院雑誌』一一二七、二〇一一年、一三〜一六頁)。

104 坂本太郎等校注『日本書紀』下(前掲書、九三頁)。

105 池内宏「安羅におけるわが官家の没落」(『日本上代史の一研究』、中央公論美術出版、一九七〇年、一八五頁)。

106 最近、史料二一四について百済三書に基づいた記事として「丈六仏」の造像技術を通して大陸の先進文化を受容したことを日本に知らせた記録と見て、『阿含経』など原始仏典を参考して作文したものであるという見解があり参考となる。

有働智瑛「六世紀における仏教受容の問題」(前掲誌、十六〜十八頁)。

107 『日本書紀』は多分に日本の天皇を中心に記録されているため、聖王がその国家(百済)と国民(蒼生)のため丈六尊像を造成したものと読み直さなければならないという指摘があった。

金煥泰「威徳王当時の仏教」(『百済仏教思想研究』、東国大出版部、一九八五年、六二頁)。

108 延敏洙「六世紀前半加耶諸国をめぐる百済・新羅の動向」(『新羅文化』七、一九九〇年)。

李永植「百済の加耶進出過程」(『韓国古代史論叢』七、一九九五年)。

金泰植「百済の加耶地域関係史―交渉と征服」(『百済の中央と地方』、忠南大百済研究所、一九九七年)。

109 北敵強大、我国微弱。若不置南韓、郡令城主、修理防護、不可以禦此強敵。亦不可以制新羅。故猶置之、逼新羅、撫存安羅。(『日本書紀』欽明天皇五年 一月條)

110 金泰植「百済の加耶地域関係史―交渉と征服」(前掲書、七四頁)。

111 史料二一四を南朝から百済へ「造仏功德」を説いた大乘経典が伝来した結果とみる場合もある。有働智瑛「六世紀における仏教受容の問題」(前掲誌、二〇〜二三頁)。

112 そのような点において百済は南朝文物の単純な伝達者ではなかった。百済は加耶諸国と倭国に文物を贈与したが、南朝から受容したものを百済文化の一部として内在化して、その文物の優秀性を立証させようと努力したと評価したい。

113 泗泚都城の整備過程や拡大過程については次の論考で整理されている。

李炳鎬「百済泗泚都城の造営過程」(前掲誌、一〇四〜一二二頁)。

114 泗泚都城の研究現況については次の論考が参考となる。

朴淳発 「泗泚都城研究の現段階」(『東アジア都城の比較研究』、京都大学学術出版会、二〇一一年)。

115 朴淳発 「泗泚都城の構造について」(『百済研究』三二、二〇〇〇年、一一九〜一二四頁)。

116 朴淳発 「泗泚都城空間区画予察」(『湖西地方史研究』、湖雲崔近黙教授定年記念論叢刊行委員会、二〇〇三年、五二〜五四頁)。

117 申鍾国 「泗泚都城発掘調査の成果と意義」(『百済泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年、七九〜八一頁)。

118 扶余官北里遺跡のナ地区北側からは二ヶ所の石築が発見された。旧国立扶余文化財研究所の下側に第一石築があるが、その下側に幅約二メートルの道路と六〇センチの側溝がある。第一石築と東西小路を間において若干北側に第二石築が発見されているが、朴淳発は第一石築の下端線と第二石築下端線の間隔が五・三〜五・五メートルであることから、第一石築は東西小路の中心軸線の役割を果たしたと見た(朴淳発 「泗泚都城の研究現況と課題」(『百済泗泚時期文化の再照明』、二〇〇五年、一〇二頁)）。しかし、官北里長方形区画の場合、東西小路のみ確認され、東西大路が確認されなかったため、南北大路と南北小路間の中心軸間距離と東西小路間の中心軸間の距離を同じ方式で算出することが適切なのかについては議論が必要であろう。

119 尹武炳 『扶余官北里百済遺跡発掘報告』(忠南大博物館、一九九九年、三六〜三九頁)。

120 申鍾国 「泗泚都城発掘調査の成果と意義」(前掲書、八〇〜八一頁)。

121 南北大路もまた、ナ地区に対する本格的な盛土が行われた段階には埋め立てられ、泗泚時期末には存続していなかったと見ている(国立扶余文化財研究所『扶余官北里百済遺跡発掘報告』(二〇〇九年、一〇八頁)）。このように見ると、官北里長方形区画は短期間の間のみ存続した可能性がある。また、二〇一一年度のカ・ナ地区南側に対する調査では南北大路が旧衙里正方形区画と推定した北東側一帯で途切れる状況が確認された(扶余郡文化財保存センター「扶余泗泚宮址発掘調査第一次現場説明会資料」、(二〇一一年)）。したがって、この南北大路が定林寺址一帯まで延長したという推定は無理があることが再確認された。

122 国立扶余博物館『百済の工房』(二〇〇六年、二〇〜二二頁)。

123 金成南「百済泗泚王宮の拡大と変貌過程試論」(第五七回忠南大百済研究所公開講座発表文、二〇〇七年)。

124 亀田修一「熊津・泗泚時代の瓦」(前掲書、七八〜七九頁)。

125 国立扶余文化財研究所『扶余官北里百済遺跡発掘報告Ⅰ』(二〇〇九年、一三〇頁)。報告書では陝西省泰州市泰西郷魯莊村から出土した陳代遺物と陝西省西安市李靜訓墓出土品を例示している。

126 扶余官北里遺跡のP地区に対する調査結果もこれと符合している。

南浩鉉「扶余官北里百済遺跡の性格と時間的位置」(二〇〇八年度調査区域を中心に)、『百済研究』五一、二〇一一年)。

127 尹武炳「百済王都泗泚城研究」(『学院院研究論文集(人文・社会編)』三三、一九九四年、一四五〜一四六頁)。

128 孫楨睦「日帝下扶余神宮造営といわゆる扶余神都建設」(『日帝強占期都市計画研究』、一志社、一九九〇年)。

129 扶余郡の都市計画沿革を見ると、一九三九年「総督府告示」第九〇〇号によって樹立された扶余市街地開発計画案は一九四五年以後にも大きな変化無く、続いていたことを確認できる。

扶余郡『二〇一一年扶余都市計画再整備用役結果報告書』(二〇〇四年)。

130 国立扶余文化財研究所『宮南池Ⅱ―現宮南池西北便一帯』(二〇〇一年、一九一頁)。

131 忠南大百済研究所『泗泚都城・陵山里および軍守里地点発掘調査報告書』(二〇〇三年、六一頁)。

132 李亨源「泗泚都城内軍守里地点の空間区画および性格」(『湖西考古学』八、二〇〇三年、一一六頁)。

133 図二二二の軍守里地点を都城内の最小単位区画と想定するためには、次のような問題が解決されなければならない。まず、ここでは北側を除くと西側と南側から道路の痕跡がなんら発見されていない。また、東西道路の右側端部は直角に曲がって下るのではなく、斜め方向に斜線を描いている。このような遺構状況を根拠に方形の単位区画を設定できるのか疑問である。二つ目、推定木柵列の方向が建物群の中心軸線と方向が一致しておらず、その一部は東西道路の上から発見された。これは木柵の築造と東西道路が時期差があるか、なんらかの変化があったことを示すものと考えられる。そのような場合、推定南北道路線と木柵列間の関係が説明されない。三つ目、区画中軸線

の役割をするS4号大柱建物の北側と東側は柱穴が四〇センチほど離れて二重に巡っていることから建物の改修や増築の痕跡が観察されるが、これを区画中軸線と把握できるのかに対する説明が必要である。また、建物区画の推定南側線が工房址と推定されるS3の端を通っているが、S3遺構をその端部と断定できるのか疑問である。四つ目、この建物址群の築造時期、あるいは中心時期を遷都前後と想定するほどの証拠がない。特に、S4号大壁建物の場合、出土遺物からみると六世紀中後半を遡らないものと考えられる。

<sup>134</sup> 丘冀鍾・李旼燮「扶余佳塔里チャングモクドウル百済遺跡調査概報」(『湖西地域文化遺跡発掘の成果』第一二回湖西考古学会学術大会発表集、二〇〇五年)。

(財)忠清文化財研究院『扶余陵山里東羅城内外部百済遺跡』(二〇〇六年)。

<sup>135</sup> 忠清文化財研究院が発掘した南側地帯に対する発掘でも図二―二三と連結する道路遺構が確認されているが、この道路もまた六世紀第四半期以後から七世紀前半の道路遺構と推定されている。

(財)扶余郡文化財保存センター『扶余佳塔里百済遺跡』(二〇一〇年)。

<sup>136</sup> (財)忠清文化財研究院『扶余双北里ヒョンネドウル・北浦遺跡』(二〇〇九年)。

<sup>137</sup> 上平五銖銭を根拠にして六世紀中半にはこの遺跡の道路が開設されたと見る場合もある(朴淳発「泗泚都城研究の現段階」(前掲書、五三頁))。しかし、ヒョンネドウル遺跡全体の編年的な位置はそれより新しい六世紀中後半以後であると考えられる。

<sup>138</sup> 最近、扶余官北里やヒョンネドウル遺跡、佳塔里遺跡から発見された道路の中には磁北を軸とする道路と異なる事例が増加している。

扶余郡文化財保存センター「扶余泗泚宮址発掘調査第一次現場説明会資料」(二〇一一年)。

錦江文化遺産研究院『扶余佳塔里佳塔ドウル遺跡』(二〇一二年)。

<sup>139</sup> 李炳鎬「泗泚都城の構造と築造過程」(『百済の建築と土木』、百済文化史大系一五、二〇〇七年)。

<sup>140</sup> 百済では六世紀後半まで南朝尺を使用したものと考えられており、官北里遺跡から実物が出土している。

盧重国「百済の度量衡とその運用」(『韓国古代史研究』四〇、二〇〇五年、一一三―一一七頁)。

- 141 国立慶州文化財研究所『新羅王京発掘調査報告書』一(二〇〇二年、五五三〜五五四頁)。
- 142 龜田修一「扶余「大唐」銘軒丸瓦の語るもの」(『古代文化』五六―一(通巻五五〇号)、二〇〇四年)。百濟滅亡以後、扶余地域に五都督府と熊津都督府が設置されたことを勘案すると(千寛宇「馬韓諸国の位置試論」(『東洋学』九、一九七九年)、『古朝鮮史・三韓史研究』、一潮閣、一九八九年、三九五〜三九七頁)、「大唐」銘軒丸瓦は扶余にあつた唐の五都督府や熊津都督府の主要殿閣に使用された瓦当であつた可能性が高いといえよう。
- 143 尹武炳「扶余双北里遺跡発掘調査報告書」(『百濟研究』一三、一九八二年)。
- 144 国立扶余文化財研究所『扶余官北里百濟遺跡発掘報告』(前掲書、一二六頁)。
- 145 国立扶余文化財研究所『扶余官北里百濟遺跡発掘報告』(前掲書、八四〜八八頁)。
- 146 沈相六・李美賢・李孝重「扶余中央聖潔教会遺跡およびティッケ遺跡出土木簡報告」(『木簡と文字』七、二〇一一年)。
- 147 李康承「百濟時代の尺に対する研究―扶余双北里遺跡出土尺を中心に」(『韓国考古学報』四三、二〇〇〇年)。
- 平川南「百濟の都出土の連公木簡」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一五三、二〇〇九年)。
- 148 朴泰祐・鄭海濬・尹智熙「扶余双北里二八〇―五番地出土木簡報告」(『木簡と文字』二、二〇〇八年)。
- 早稲田大学朝鮮文化研究所・国立加耶文化財研究所「扶余双北里木簡」(『日韓共同研究資料集咸安城山城木簡』、二〇〇九年、一四九〜一五五頁)。
- 李成市「東アジアの木簡文化―伝播の過程を読みとく」(『木簡から古代がみえる』、岩波書店、二〇一〇年)。
- 鄭海濬・尹智熙『扶余双北里二八〇―五遺跡』(百濟文化財研究院、二〇一一年)。
- 149 李旼燮・尹善泰「扶余双北里ヒョンネドウル・北浦遺跡の調査成果」(『木簡と文字』創刊号、二〇〇八年)。
- 150 孫浩成「扶余双北里一九安全センター敷地出土木簡の内容と判読」(『木簡と文字』七、二〇一一年)。
- 151 沈相六・李美賢・李孝重「扶余中央聖潔教会遺跡およびティッケ遺跡出土木簡報告」(前掲誌)。

152 ここでは「佐官貸食記」木簡を含む33点の木簡形木製品がスギ製であるという。姜煥九「扶余双北里二八〇―五遺跡出土土木製遺物及び木柱樹種分析」(『扶余双北里二八〇―五遺跡』、(財)百済文化財研究院、二〇一一年)。

153 土田純子「百済遺跡出土倭系遺物に対する検討」(『百済と周辺世界』、成周鐸教授追慕論叢刊行委員会、二〇一二年)。

154 朴泰祐「木簡資料を通してみた泗泚都城の空間構造」(『百済学報』創刊号、二〇一〇年)。

155 ただ、一九一〇年代の地籍図を見ると、双北里一帯の場合、官北里・旧衙里一帯の真北方向とは中心軸を異にしている。したがって、この一帯が七世紀前半以後に本格的に開発されたとしても官北里・旧衙里一帯のように中心軸を変える大規模な開発であったというよりは既存の道路網や土地区画を基本にした開発であったと考えられる。

156 本稿の第二章第一節参照。

157 浮図北有仏殿一所、形如太極殿。(中略)寺院牆皆施短椽、以瓦覆之、若今宮牆也。四面各開一門、南門樓三重通、三道去地二十丈、形製似今端門。(楊銜之、『洛陽伽藍記』卷一 永寧寺條)

158 故都城制云、城内唯擬一永寧寺地、郭内唯擬尼寺一寺、余悉城郭之外。(『魏書』卷一一四 積老志一五五)

159 奈良国立文化財研究所『北魏洛陽永寧寺』(前掲書、六〇八頁)。

160 諏訪義純「梁武帝仏教関係史蹟年譜考」(『中国南朝仏教史の研究』、法蔵館、一九九七年、五四―五七頁)。

161 船山徹「捨身の思想―六朝仏教史の一断面」(『東方学報』七四、京都大学人文科学研究所、二〇〇二年、七八―七九頁)。

162 下倉渉「南北朝の帝都と寺院」(『東北学院大学論集…歴史と文化』四〇、東北学院大学学術研究会、二〇〇六年、二〇七頁)。

163 百済聖王が都城に大規模寺刹と舍利塔を建設したことは、転輪聖王を自負しながら大規模寺刹と舍利塔を多数建設した梁武帝を模倣したものである。聖王という呼称は転輪聖王を意味するものと把握されるが、すでに聖王がモデルとした梁武帝が転輪聖王の姿を演出していたのである。聖王は転輪聖王を自負しながら仏教を政治に積極的に活用し、さらに仏教を国教化したのである。

164 山中章「古代宮都城立期の都市性」(『新体系日本史六―都市社会史』、山川出版社、二〇〇一年)。

清水昭博「斑鳩からみた飛鳥」（『都城―古代日本のシンボリズム』、青木書店、二〇〇七年）。

古市晃「統合中枢の成立と変遷」（『日本古代王権の支配論理』、塙書房、二〇〇九年）。

165 趙景徹「東アジア仏教式王号比較」（『韓国古代史研究』四三、二〇〇六年）。



### 第三章 祀廟から陵寺へ―陵山里寺址―

#### はじめに

五三八年の泗泚遷都以後、扶余定林寺址の建設によって百濟式伽藍配置が成立する。しかし、扶余定林寺址は後代の破壊が激しく、その実状がよく分からない状況である。そこで本章では定林寺址の直後に建設された陵山里寺址の遺構や出土遺物の分析を通して、その細部の姿や変化様相について検討してみよう。扶余陵山里寺址は、王陵群と推定される陵山里古墳群と羅城の間に位置する百濟泗泚時代の廃寺址である。一九九二年から一一次にわたり発掘調査が実施され、金銅大香炉、昌王銘石造舍利龕など多量の金属工芸品と土器類、瓦類が出土し、木塔址や金堂址をはじめとする多数の建物址が確認された(図三二一)。それに対する発掘調査の内容は発掘報告書をはじめとして、当時発掘を担当した研究者の個別研究を通して公開されている<sup>1)</sup>。

これまで文献史的立場からは陵山里寺址と木簡の性格に対する問題が主に扱われてきた。金寿泰と金相鉉はこの寺址の立地的な特性と昌王銘石造舍利龕の銘文を根拠にここが陵山里古墳群の願利として聖王を追福するために建立されたとした<sup>2)</sup>。陵山里出土木簡の発掘を担当した朴仲煥は陵山里寺址との関連性を言及したが、近藤浩一と尹善泰は羅城や羅城禁衛と関連するものと理解した<sup>3)</sup>。このような研究は陵山里出土木簡の記載内容によるものであった。しかし、発掘調査を通して確認された考古学的な資料という属性を持つ木簡をさらに理解するためには何よりも出土脈絡と遺跡の性格に関する理解が重要である。陵山里木簡の場合、その大部分が陵山里寺址中門の南側低湿地から出土しているため、これと直接連結する伽藍中心部の変遷過程を明確にする必要がある<sup>4)</sup>。したがって、第一節では、木簡が出土した状況を再検討し、その廃棄時点や製作・使用時期、記載内容を通してその性格を明らかにする。

扶余陵山里寺址からは百濟の寺院としては異例の五〇〇点を越える多量の瓦当が出土しており、調査者による基本的な型式分類案と相對編年案も提示されている<sup>5)</sup>。しかし、既存の相對編年案には若干の問題があり、特に各型式別の分布様相に関する情報が欠落している。これについて第二節と第三節では先行研究を批判的に検討しながら瓦当の型式別分布様相に対する分析を行い、伽藍中心部の主要建物の

建立順序を推定し、これを通して陵山里寺址の性格変化を推定してみることにした<sup>6</sup>。このような分析を通して当初ここには陵山里古墳群の築造と関連した祠廟のような施設があつたが、それが次第に陵寺のようなものへと性格が変化していったことを明らかにしたい<sup>7</sup>。

## 第一節 陵山里出土木簡の性格

### (一) 木簡の出土状況と出土位置

扶余陵山里木簡が出土した地域は、当初寺院の中門址南側にあるものと期待された南門を探索するために発掘調査が行われた場所である。しかし、期待とは異なり南門は確認されず、多様な時期にかけて作られた排水路や排水施設と共に多量の木簡が発見された。ここから出土した木簡は発掘調査報告書の刊行以前にも略報告書や図録の形態で刊行されており、早くから注目されてきた<sup>8</sup>。それによつて陵山里出土木簡に対する釈読作業と内容分析、製作および廃棄時期と全般的な性格に対する議論もかなり進められた。最近では発掘報告書が刊行され、未公開木簡が追加で紹介されて発掘状況についての情報もかなり補足された<sup>9</sup>。

陵山里出土木簡に対する研究史を簡略に整理すると次の通りである。まず、発掘を担当した朴仲煥は、これらの木簡を陵山里寺址と関連するものと紹介し、共伴遺物や書体を根拠として、泗泚遷都直後である五四〇年前後から威徳王代半ば(五七〇年)の間に製作・使用されたものと推定した<sup>10</sup>。その後、多くの研究者は、これらの木簡が陵山里寺址の中門の南側で出土したため、当然、寺院に関わるものであると信じるようになった。しかし、こうした理解は、八次調査以後、新たな問題に直面することとなる。八次現場説明会では、六・七次調査時に木簡が集中して出土した初期自然排水路が、陵山里寺址の西大排水路より古い時期に利用されたことを確認して、その上限が東羅城の築造時期まで遡りうるという見解を提起したためである<sup>11</sup>。

その後、近藤浩一は、陵山里出土木簡の内容を全面的に検討して「羅城築造木簡説」を提起し、作成時期を東羅城の築造工事が始まつたと考えられる五二七年頃と推定した<sup>12</sup>。彼が根拠としたのは、八次調査で確認された初期自然排水路と西大排水路の層位関係、そし

て食米・道使などが記録された四面木簡(二〇〇〇一号)である。彼は四面木簡を東羅城築造と関連する帳簿で理解し、ここに羅城築造工事の責任を負った拠点施設が存在したと見た。

近藤浩一が提起した羅城築造木簡説は尹善泰によって再び批判を受ける。彼は八次調査時、陵山里寺院の建立以前遺構でも縄目叩きをもつ瓦が確認されることを考慮すると、陵山里寺院以前にこの一帯に瓦を葺いたなんらかの施設があり、そういう水準の施設であれば単に羅城築造を目的とした臨時施設ではなかったと主張する。また、陵山里木簡の中で仏教や祭祀・儀礼と関連する木簡が多数存在することから、これを単純に羅城築造と結びつけることは難しいとした<sup>13</sup>。特に男根形木簡(二九五号木簡)<sup>14</sup>は百済の道祭に使用されたのであり、百済でも都城の四方の入口や外郭の周辺道路で路神に幣帛を捧げ、王京に入ってくる疫病など邪悪な気運を防ぐための国家儀礼があったことを推定できる資料であると見た。また、八次調査で発見された四面木簡を分析し、これを羅城大門の禁衛と関連するものと主張した<sup>15</sup>。ただし、これに関連する施設が以前の論文で明らかにした国家儀礼と同時期に機能したものと理解するのか、また、本来沼地であるここに敷地造成以前に寺院と性格を異にする別途の施設があったのかについては説明がない。

その他に木簡の書体に対する研究<sup>16</sup>と二九五号男根形木簡を日本古代の道饗祭と比較した研究<sup>17</sup>、三〇五号木簡を中心にした百済史読に対する研究<sup>18</sup>、三〇四号「宝熹寺」銘木簡に基づいた仏教史的研究<sup>19</sup>、地方統治体制に関する研究<sup>20</sup>などが進められた。これらの研究は陵山里出土木簡全体を扱ったものもあるが断片的に言及したものもある。いずれの場合も木簡を通して多様な方面の研究を進めることができる可能性を提示した点で意義が大きい。

本章の第一節ではまず陵山里出土木簡の性格を明らかにする。既存の研究では木簡の記載内容に関する分析のみを深く掘り下げ、出土位置や層位、相伴遺物など出土脈絡と木簡の使用・廃棄年代に関する問題を等閑視してきた。その間、陵山里出土木簡の性格に関する議論の核心は、初期自然排水路と西大排水路の前後関係に対する問題と食米・道使など豊富な内容を含んでいる四面木簡の記載内容に対する視角の違いであった。しかし、初期自然排水路が西大排水路より先行することを挙げて、その段階に陵山里寺址の伽藍中心部に何ら施設もなかったとは断定し難い。また、四面木簡の記載内容を羅城や推定東門址と関連づけるためには、その廃棄年代と相伴遺物に関する

理解が先行しなければならない。

そこでまず、陵山里木簡の出土状況と出土位置を検討してみたい。木簡の出土位置は木簡の廃棄時点や記載内容の違いを反映するであろうし、その性格を把握するうえで重要な諸点を示唆するものと考ええる。その後、寺院内部から出土した瓦当の分析を通して主要建物の建立順序を推論し、暗渠施設を中心にした排水施設の配置様相を検討する。この結果、陵山里寺址の性格がより鮮明となり、初期自然排水路の整備と関連した西大排水路の築造時点について明確に言及できるだろう。さらに、八次調査で出土した二〇〇二一号四面木簡の層位関係と陵山里最下層遺構から発見された中国製磁器片および硯片の相對編年を通して木簡の廃棄時期を推定する。木簡の廃棄年代と伽藍中心部の整備過程、木簡記載内容に関する分析を総合することによって、陵山里出土木簡の性格がより明らかになるだろう。最後に八次調査で発見された二〇〇二一号四面木簡の記載内容を詳細に分析した。三〇〇号、三〇六号、三一〇号木簡など廃棄様相と記載内容が類似する木簡を比較しつつ、木簡の廃棄時点も考慮して食米と関連した内容が記載された背景と意義を説明したい。

扶余陵山里木簡が出土した地域は、陵山里寺址の中門址東南側と西南側に該当する。木簡が最初に出土した六次調査では三一〇号木簡をはじめ七点の木簡と木簡片八点の計一五点が出土した<sup>21)</sup>。七次調査では二九六号木簡をはじめとして墨書のある木簡一九点(既報告で一四点、追加五点、未報告一点)、木簡片一点(三〇二号)、墨書がない木簡形木製品二点など計二三点以上が出土した。八次調査では食米・道使などが記録された四面木簡(二〇〇二一号)一点のみ出土した。しかし、最近発刊された発掘調査報告書には、一部の木簡と木簡片に遺漏があり、今後補完を必要とする<sup>22)</sup>。

〈表三二〉は今後の議論を進展させるために国立昌原文化財研究所の刊行物と発掘調査報告書の番号を再整理したもので、図三二は出土地点を図式化したものである。連番は発掘野帳を通して出土日時を把握しその順序に従ったが、最も多くの木簡が出土した七次調査出土品の場合、二九六号、三一三号、二〇〇一八号を除くと、出土日時や位置を正確に判定しづらく、国立昌原文化財研究所刊行の図録と発掘報告書の順序を適用した。木簡の出土地点と関連して発掘当時の野帳と現場写真、関連者に対する聞き取りなどを基に作成した。

〈表三—一〉 扶余陵山里木簡の現況と出土位置

番号	木簡番号	報告書番号 (図面図版)	出土位置	備考
1	310号	53-1, 140-2	第二石築排水施設南端 S130~140, W50~40	
2	306号	52-1, 139-2	割石集水槽S130, W80~40	
3	295号	51-1, 139-1	中門址南側初期自然排水路 S110, W50~40	第2・3 木柵列東端部分
4	314号	54-1, 141-1	中門址南側初期自然排水路 S110~120, W50~40	295号に隣接
5	309号	52-2, 140-1	中門址南側初期自然排水路 S110~120, W50~40	
6	2000-1号	53-3, 140-4	中門址南側初期自然排水路 S110~120, W50~40	309・314号と共伴 発掘者の証言
7	2000-2号	54-3, 141-3	中門址南側初期自然排水路 S120, W60~40	削屑
8	2000-3号	53-2, 140-3	中門址南側初期自然排水路 S110~120, W50~40	295号に隣接
9	2000-4号	54-2, 141-2	中門址南側初期自然排水路 S110~120, W50~40	2003-3号共伴 削屑
10~ 15	2000-5 ~10号	54-4, 141-4	中門址南側初期自然排水路 S110~120, W50~40	2003-3号共伴 削屑
16	296号	86-2, 163-1	中門址南西側初期自然排水路 S110, W50~61	第2・3木柵列間の 木材片北側
17	313号	90-2, 165-2	中門址南西側初期自然排水路 S110, W60	第2・3木柵列間の 木材片北側
18	299号	88-1, 163-4	中門址東南側初期自然排水路 S100~110, W20	現場写真および発掘者の 証言
19	297号	87-1, 163-2	中門址南西側初期自然排水路	現場写真参照
20	298号	87-2, 163-3	中門址南西側初期自然排水路	現場写真参照
21	300号	88-2, 164-1	中門址南西側初期自然排水路	
22	301号	89-1, 164-2	中門址南西側初期自然排水路	
23	303号	90-1, 165-1	中門址南西側初期自然排水路	
24	305号	95-2, 169-1	中門址南西側初期自然排水路	
25	304号	90-3, 165-3	中門址南西側初期自然排水路	現場写真参照
26	307号	91-3, 166-3	中門址南西側初期自然排水路	
27	308号	91-4, 166-4	中門址南西側初期自然排水路	
28	311号	91-3, 166-3	中門址南西側初期自然排水路	
29	312号	91-4, 166-4	中門址南西側初期自然排水路	
30	302号	89-2, 164-3	中門址南西側初期自然排水路 S120, W60	木柵隣接区間
31	2000-1号	86-1, 162-5	中門址南西側初期自然排水路	
32	2000-2号	92-1, 167-1	中門址南西側初期自然排水路	
33	2000-3号	93-1, 167-2	中門址南西側初期自然排水路	
34	2000-4号	93-2, 168-1	中門址南西側初期自然排水路	
35	2000-5号	96-1, 169-2	中門址南西側初期自然排水路	
36	2000-6号	94-1, 168-2	中門址南西側初期自然排水路	木簡状木製品
37	2000-7号	95-1, 168-3	中門址南西側初期自然排水路	木簡状木製品
38	2000-8号	写真参照	中門址東南側初期自然排水路 S100, W20	
39	2002-1号	125-1, 213	S90, W60~75トレンチ北側	四面木簡

※六次調査は1~15号、七次調査は16~38号、八次調査は39号に当たる。

七次調査出土品の場合、出土地点が正確でないが、発掘担当者によると当時出土した木簡の大部分が中門址南西側の初期自然排水路、特にS一〇、W六〇地点で収拾されたため、別途に明記しなかったという。

六〇八次発掘調査で出土した木簡の出土地点は一定の傾向性が見られる。まず、六次調査で発掘された木簡は三〇六号と三一〇号木簡を除くと、全てS一一〇～一二〇、W五〇～四〇区間の黒色砂泥層から発見された。二九五号木簡の場合、第二木柵列東端と第三木柵列東端から発見された背負子用籠出土地点の北側から検出された。また、三〇九号と三二四号、二〇〇〇一～一〇号木簡と木簡片は背負子用籠の東側から発見された。そうした点から六次調査で収集された木簡群は、中門址南側の初期自然排水路から同じ脈絡で出土したといえる。

ただ、三〇六号と三一〇号木簡の場合、S一三〇～一四〇、W四〇～五〇区間から出土しているが、前者は割石集水槽の内部、後者は第二石築排水施設の南端から出土した。これら排水施設の場合、後述するように中門址の南側で確認された初期自然排水路より一段階遅い時期に築造されて、一連の木簡群が出土した地点より二〇～三〇メートル南側から発見されたために出土脈絡が異なるといえる。こうした事実は、この木簡の廃棄時点、さらに記載内容や性格の違いを示唆するものではないだろうか。

七次調査で出土した二三点の木簡と未報告木簡は、ほとんどがS一一〇、W六〇地点の第二木柵列と第三木柵列の東北側、特に木材片が大量に残っていた地点で集中して発見された。中門址西側の初期自然排水路から流れてきた水が、この付近でゆるやかに折れて東流する。水路変更地点には、比較的大きな木材が大量に残っていたが、木簡の大部分はその北側付近から発見された。ところで、中門址東南側の別の排水路からも二点の木簡が発見された事実が注目される。二九九号は、S一〇〇～一一〇、W二〇地点、中門址東南側の初期自然排水路とY字形の石築排水施設が東側で合流する地点から出土した。七次調査の公式の発掘が終了して最後の整理作業をしていた段階で収集されたといひ、当時の現場写真によって出土地点を確認できる。未公開木簡である二〇〇一～一八号の場合、S一〇〇、W二〇地点、中門址東南側の初期排水路から発見された<sup>233</sup>。このように七次調査では、中門址南西側の木橋北側区間から木簡が集中して発見された

が、東南側の初期自然排水路からも発見された事実が注目される。陵山里出土木簡が、陵山里寺址の西側に存在したならかの施設だけでなく、東側にあった施設とも関連することを示唆するためである。

八次調査では、二〇〇二一一号の四面木簡のみが出土した。この木簡は、陵山里出土木簡のなかで出土位置と層位が最も正確に分かるため、木簡の廃棄時点を推定しうる重要な資料となる。この木簡の場合、S九〇、W六〇〜七五地点のトレンチの北側で黒色粘土と有機物層に刺さったままで出土したが、相伴遺物と層位、相對編年案については後述することとする。

陵山里木簡の出土状況で共通して確認されるのは、すべての木簡が排水路や排水施設と関連しているという点である。これは、有機物である木が腐ら残りに残りうる保存環境と関わるだろう。また、発見された木簡は、一定に集まって発見されている。こうした現象は、排水路によって流されてきた木が、その場所に溜まっている状態で沈んだり突然埋没したりした結果と考えられる。S一一〇〜一二〇、W五〇〜四〇区間の背負子用籠が発見地点と、S一一〇、W六〇付近の大型木材片の発見地点が、こうした状況と関連があるだろう。二点の木簡が出土したS一一〇、W二〇地点東南側の初期自然排水路の場合、付近でほかの木材片がほとんど発見されず、他の木簡の廃棄様相とは若干異なったものと予想されるが、初期自然排水路として機能した時期は同じであったと考えられる。三〇六号と三二〇号の場合、初期自然排水路とは関係ない地域で発見され、二〇〇二一一号木簡の場合も、後述するように初期自然排水路が機能した時期とは異なる。そうした点でこれら三点の木簡は、他の木簡とは廃棄時点が異なっていた可能性が大きい。

一方、木簡の出土状況と関連して、最も重要な排水路や排水施設の調査内容をさらに具体的に検討してみよう<sup>2,4</sup>。この一帯で最初に確認された排水施設は、陵山里寺址の伽藍中心部の調査ですでに検出されていた東・西大排水路であった(図三二一)。これら大排水路は、寺址の東側と西側にほぼ南北一直線上に对称に配置されている。そのうち西大排水路は、大小の石を利用して整然と積み上げており、幅一六〇〜二〇〇センチ、深さ五〇〜八〇センチで、南側に行くほど深くなり、西石橋の南側二〇メートル地点では水路面上部最大幅二メートル、底の幅一・八メートルほどに広がる。この排水路からは、工房址の $\square$ の前庭に繋がる部分の南回廊南側三二・五メートル地点の木橋、その南側の石橋など三箇所が確認された。

東大排水路は、西大排水路と同様に、北側から南回廊址付近まではよく整えられた割石を利用して整然と積み上げるが、その南側は石築施設がなく、断面がV字形をなす溝となり、南回廊の南側五メートル地点でふたたび二つに分かれる<sup>25)</sup>。ところで、七次調査では中門址の東南側方向で東大排水路に繋がる初期自然排水路が確認された。この初期自然排水路は、中門址の南西側区間の初期自然排水路と対称となり、溝状遺構として知られるところで合流したと考えられる。この排水路は、中門址南西側の初期自然排水路と同じように石築施設がない自然水路であり、黒色泥質土の砂泥層が形成され、その内部から土器片と瓦当片が出土した。

中門址南西側の初期自然排水路をみる前に、中門址南側の溝状遺構を検討する必要がある。この遺構は東石橋と西石橋を東西方向に結ぶ線にかかっており、水路の断面がU字形を呈する。溝の最大幅七メートル、深さ八〇センチであり、底には砂利が敷かれていて、縁を補強する小型の木柵施設が確認された。この溝状遺構は、東西大排水路とは異なり断面がU字形を呈しており、層位からみても西側にある第二石築排水施設よりも先行するため、比較的古い時期に造成されたものと考えられる。特に、その内部の砂利の間から黒褐釉陶硯台脚片一点が出土している(図二二六の二参照)。この点からみて、この溝状遺構は寺院の南側区間の初期排水施設を整備する過程で造成された、かなり古い時期の初期中心排水路であったとみられる。

溝状遺構の北端では、木橋の北側から東側に流れる自然水路が発見された。この水路は、八次調査の結果、南回廊西側付近からはじまり、木橋北側を経て東側に流れ、溝状遺構に繋がることが明らかになった。これが中門址の南西側区間の初期自然排水路であり、水路の北側と南側には、木柵列状のいわゆる柵状遺構が東西方向に三列設置されていた。ところで、木橋のすぐ北側の西大排水路近くの地点からは、太い木を並べて作った東西方向の木柵が南北二ヶ所で確認され、先に述べたとおり第二木柵列と第三木柵列の北側の初期排水路内部から多量の木簡が出土したのである。初期自然排水路の付近で発見された柵状遺構は、軟弱な地盤を補強するための施設である可能性もあるが、第二木柵列と第三木柵列が木橋の幅に該当するため、木橋と関連する可能性もある。

南回廊の下を通過している石築暗渠(第一石築排水施設)は、さらに続いて南側に繋がり、中門址の南側三〇メートル地点で南回廊東南側区間から下ってきた石築暗渠と合流する。第一石築排水施設は全体的にY字形をしており、一つに合流した後、溝状遺構の北端で終わ



っている。ところで、第一石築排水施設は、寺院内部である講堂址南側から発して金堂址と木塔址西側をすぎて南下する西側暗渠と繋がっている。伽藍中心部の敷地造成工事や中門址南側一帯の整備工事が、直接的に繋がっていることを意味する重要な遺構と思われる。

第二石築排水施設は溝状遺構の三メートル西側に位置し、川原石と割石を混ぜて積み上げた施設が九メートルほど確認された。この遺構は、暗渠のように内部に空間をつくっているのではなく、自然石を南北方向に長く積んで、その間に水が流れるようにしたものである。その南端には、割石を利用して整然と作った長方形の集水槽がある。この割石集水槽は、長さ二六〇センチ、内部幅七〇センチ、深さ七〇センチほどで、層位上、東側の溝状遺構より一段階新しいことが確認された。

一方、多数の木簡が出土した中門址南西側の初期自然排水路の北側に対する八次調査では、南北方向の石築基壇と、多量の瓦が散布している建物址の痕跡が確認された<sup>26</sup>。この石築基壇は、水路から西側に二メートルほど離れて南北方向に繋がる。基壇は、五〇センチほどの石材を利用して二段に積んでいる。この石築基壇は、二次調査の際に発見された西大排水路西側の南北石列と一致しているため、全体の長さは約五メートルに達すると推定されている。しかし、この石築基壇が最後まで繋がるのか、また、その上にどのような建物が存在したのかについては、調査が実施されなかった。

以上、陵山里出土木簡の出土脈絡を理解するうえで最も重要な遺構である排水施設の整備状況を整理した。これまでの陵山里出土木簡に関する研究で見過ごされてきたのは、中門址南西側の初期自然排水路だけでなく、東南側の初期自然排水路、そして、第二石築排水施設や割石集水槽からも木簡が出土したという事実である。陵山里出土木簡を羅城と関連させる研究者の場合、八次調査で発見された約五メートルほどの南北方向石築基壇を活用した何らかの建物で木簡を使用して廃棄したものとみて、その建物の性格を羅城築造に関わる施設と理解している<sup>27</sup>。しかし、中門址南西側の初期自然排水路と全く異なる東南側の初期自然排水路からも木簡が出土した事実は、中門址東側や東北側にもこれら木簡と関連するなんらかの施設が存在したことを示している。また、これら初期自然排水路が整備されてから築造された第二石築排水施設や割石集水槽でも木簡が発見された事実は、少なくともこの地点で出土した木簡の廃棄時点は、陵山里寺院の創建以降にあたり、羅城築造ではなく陵山里寺院の整備と関連した可能性を示唆している。これまでの陵山里木簡の性格を羅城築

造や羅城城門の禁衛と関連づけてきた先行研究は、こうした事実をまったく考慮しなかったのである。

## (二) 排水施設と主要建物の整備過程

扶余陵山里出土木簡に関する初期の研究で問題となったのは、西大排水路と中門址南西側の自然排水路との前後関係であった。そして、八次調査では、初期自然排水路が西大排水路の下を通過していることが明らかになった。こうした層位上の前後関係に基づいて、研究者たちは初期自然排水路が整備されて西大排水路が作られる以前に木簡が廃棄され、それは陵山里寺院の創建以前にあたりと断定するようになった。しかし、初期自然排水路が西大排水路より先行するからといって、木簡の廃棄時点を寺院創建以前と断定することはできるだろうか。初期自然排水路の内部で発見された木簡の廃棄時点を昌王銘石造舍利龕の年代である五六七年以前、あるいは泗泚遷都以前に遡らせて考えるためには、西大排水路の築造時点を説明しなければならない。また、陵山里寺院の伽藍中心部の建物がどのような過程で築造されたのかを説明する必要がある。

周知のとおり、古代寺院の築造は長期間におよぶ作業であり、特に伽藍の外郭を巡る排水路の整備は最後の段階に行われた可能性がある。陵山里寺址は、もともと低湿地であったため、敷地造成に多くの労力を傾けたことが明らかとなった。五次調査では、寺院全体の土層を確認するために、講堂址南側基壇から南北に長さ一〇七メートル、幅三メートルの規模でトレンチ調査を実施した。その結果、南回廊を基準として北側と南側に一定の断層があり、寺址内部でも木塔北側を境界としてさらに断層があることが確認された。敷地造成作業は細かい砂と粘土を交互にして傾斜をつけながら北から南へと盛土された。盛土層の高さは、最も浅い講堂の南側基壇部分が〇・一メートル、最も深い南回廊付近が約二・三メートルに達するなど、南低北高という地形を補完するものであった。

一方、回廊の内側では、低湿地の水を処理するための暗渠を設けている。伽藍中心部からは、図三三のように三カ所の暗渠が確認されており、西側暗渠と北側・東側暗渠は異なる時期に造成された。北側と東側の暗渠は、すでに盛土した敷地を再び掘って造られているため、寺院内部になんらかの建物が建てられた後に造られたものと考えられる。西側暗渠は、盛土の下の泥土とみられる灰黒色粘土

の上に造られたため、敷地造成以前にその水を処理するために造成されたと考えられる。西側暗渠を設置したのと同時またはその後には敷地を造成して何らかの建物を建てた後、北側と東側の暗渠を設置しそれまでの西側暗渠と繋げたのである。

最初の建物が建ち並んだ後に作られた東側の暗渠施設は、東回廊址と南回廊址の間を通過して東大排水路と繋がっている。これは東回廊や南回廊が他の建物よりも遅れて造られたことを示唆するものではないだろうか。回廊と回廊の間に一定の空間があった可能性は十分にあるが、建物が完成した後に幅二五〇〜三五センチ、高さ三五〇〜五〇センチの暗渠を追加で設置したとは考えにくいためである。そうした点から、東側暗渠と繋がる東大排水路の整備も、それと同時期であるか若干遅れるものと推定できる。

西回廊址でも寺内の水を回廊の外に出すための暗渠施設を設けており、長さ一六メートル、幅五六センチ、深さ三〇センチ前後であった<sup>30</sup>。この暗渠は、回廊の基壇土を幅一〇〇センチほど掘った後に雑石を利用して作られているため、少なくとも西回廊の建立と同時期であるか、それよりも若干早かったものと考えられる。伽藍中心部の全体的な整備過程を考慮すると、この暗渠は東回廊址と南回廊址の間を通過する東側暗渠と似た脈絡で作られたものであり、そうした点からこの暗渠と繋がる西大排水路も、東大排水路と同じ時期に築造されたものと想定しうる。

さきに説明したとおり、最も古い時期に作られた西側暗渠は、南回廊址の西側の下を通りすぎて、六・七次調査で検出された第一石築排水施設とすぐに繋がる。こうした配置は寺院内部の整備と中門址南側の排水施設の整備が直接的に繋がることを示すものである。したがって、第一石築排水施設とその南側の溝状遺構は、中門址南側で確認された最も古い時期の人工的な痕跡と判定できることとなった。また、東西大排水路の整備がこれら初期排水施設より遅かったと考えられるため、この排水施設と木簡が出土した初期自然排水路は、一定期間共存した可能性がある。

伽藍中心部の整備過程をさらに具体的に把握するために、伽藍中心部の主要な建物がどのような順序で建立されたのかを検討したい。そこで筆者は、発掘調査報告書に収録された遺物だけでなく、収録されなかった破片を含む、一〜五次発掘調査で出土した瓦当五〇〇点余りを全面的に再調査した(第三章第一節および第三節参照)。その結果、講堂址と不明建物址Ⅰ、工房址Ⅱ、不明建物址Ⅲ、工房址Ⅰな

どがまず建立され、その後、木塔址と金堂址、中門址、回廊址などが次々と建立されたものと推定できた。一般的な古代寺院における建物の建立順序は木塔や金堂をまず建立し、その後中門・回廊、講堂を建立する<sup>31)</sup>。しかし、陵山里寺址の場合、講堂址と不明建物址Ⅰ、工房址Ⅱ、不明建物址Ⅲ、工房址Ⅳなどがまず建立され、木塔址と金堂址、中門址・回廊址が後に建てられ、それに伴って北側と西側、東側の排水路が整備されたものと考えられる。講堂址を中心にした初期建物址群が木塔址や金堂址よりさきに建立されたことはこの建物址が寺院とは異なる特殊な機能を有していたことを物語っている。

ここで講堂址として知られている建物址が最も古い段階に建立された背景には、この寺院の性格と関連があるものと考えられる。陵山里寺址の講堂については、その構造が高句麗の東台子遺跡と似ている点を挙げて、平常時には祖王を祀る神廟であり、王室の葬送儀礼または殯宮として使用されたと推定する見解がすでに提起されている<sup>32)</sup>。これまで陵山里寺院の創建時期については、木塔址から出土した昌王銘石造舍利龕の埋納年代である五六七年を絶対視して、これを完工年代とみなそうとする傾向もあった。しかし、五五四年の管山城の敗戦と威徳王の出家発言、また、それによる一〇〇名の度僧をだした事件などをみると、この寺院の創建は、それよりも若干古かった可能性はある<sup>33)</sup>。木塔建立のはじまりを知らせる舍利龕埋納の前に、これら一連の事件と関連したなんらかの施設があったと考えざるをえないのである。したがって、講堂が木塔よりもさらに古い段階に建立された事実は、こうした状況と関連があり、初期の講堂がすでにそれと関連するなんらかの特殊な機能を果していたと考えられることから、第三章第三節ではこれを祠廟や祠堂のようなものと推定した。

五五四年前後から五六七年前後まで、陵山里一帯に存在した施設の機能を推定してみると次の通りである。まず、五六七年に木塔の建立がはじまってから、ここは聖王陵の造営やそれと関連する儀礼を司った願刹として陵山里寺院が存在した。第二に、威徳王の出家発言以後、度僧となった一〇〇名の僧侶が活動して様々な功德を捧げることのできる施設がなんらかの形で存在した可能性がある。第三に、その施設は王陵の祭祀と関連した祠廟のような性格も同時に持っていた可能性がある。こうした三つの機能は同時期に併存したのではなく、一部は順番に展開して相互補完的な側面があった。特に、伽藍中心部で講堂が最初に建立された点と、隔壁によって分けられたいわ

ゆる一堂二室建物という独特な建物の構造は、こうした展開様相と緊密に関係するものと思われる。したがって、五五四年の聖王の死後から五六七年に木塔建立工事に着手するまで、この場所には聖王陵の造営や祭祀など特殊な機能を担った施設があり、それが現在、講堂と呼ばれる初期施設であったものと考えられる。

講堂址をこのように理解すると、不明建物址Ⅱの性格に対する推論もある程度可能ではないかと思われる。東回廊北端に繋がるこの建物は、後代の破壊により遺構の状況が明確でない。しかし、この建物とその東側を流れる東大排水路の間にある木柵施設のように一定の間隔で柱を打ち込んだ施設が留意される<sup>3,4</sup>。こうした現象は、中門址の南西側の初期自然排水路付近から発見される柵状遺構と類似するためである。また、中門址の東南側区間の初期自然排水路が、不明建物址Ⅱが運営されている時期にも機能していた可能性を想定すると、この一帯で発見された木簡はこの建物と一定の関連がある可能性が提起しうるためである。

中門址東南側の初期自然排水路からは、二九九号、二〇〇一―八号木簡が発見されており、二九九号木簡の場合、祭祀儀礼の位牌である可能性<sup>5</sup>と、人名簿の記録簡とする見解<sup>6</sup>が提起されている。裏面に「乙」のような記号を反復して羅列している点、オモテ面は段を作って裏面は外郭の枠の線を書いている点などから、符籍や呪符木簡である可能性がより高いと思われる。また、尹善泰がすでに指摘しているように、木簡の半分を刃物のような道具を利用して意図的に割って廃棄したことは、儀礼の最終過程と関連した廃棄行為とみる余地がある。

二〇〇一―八号木簡の場合、これまで紹介されていないが、不明建物址Ⅱの性格、さらには、陵山里出土木簡全体の性格を把握するうえで注目される(図三―四)。

- (一) 「太歳□□ ×
- (二) 「…………… ×
- (三) 「一□□ ×

四面に墨書があるこの木簡は、四隅の角をとって八角形のように加工している。上部は完形であるが、下端は欠失している。確定できる墨書がほとんどなく、どの面を一面としうるか分からないが、とりあえず最も多くの墨痕が残っている面を一面として提示した。一面は全部で四文字が書かれており、最初の二字は「太歳」である可能性がある。二面は、墨痕はあるが確認できる文字はない。三面は、三文字が残っているが、第一字目以外は確定しがたい。四面は、発掘過程で木簡の一部が傷ついてしまったが、現在、全三字が確認される。第一字目は「迦」と推定され、しんによは「L」に近い。第二字目はすでに削られて痕跡のみ残っている。最後の文字は、これら二字と若干の空白をおいて書かれていて、「葉」である可能性があるが、文字の下半分は発掘当時から破損していた。

このように二〇〇一―八号木簡は、「太歳」「迦」「葉」などしか確定できないが、文書木簡であり、仏教と関連する内容をもつていと推定できる。太歳という筆者の釈読が誤りでなければ、これは、昌王銘石造舎利龕の「百濟昌王十三季太歳在、丁亥妹兄公主供養舍利」に見られる太歳と関連するものと思われる。太歳は、木星が天球を運行するのに一二年かかることを利用して、十二支の順序によって年を表記する方法をいう<sup>37</sup>。この木簡を昌王銘石造舎利龕と直結させることはできないが、太歳紀年法が使用されたようである。四面の「迦」と「葉」の二字は、非常に断片的である。ただ、出土位置や後述する廃棄年代などを考慮すると、「迦」と繋がりうる文字は「釈迦」や「迦葉」のような仏教的な名称以外には想定しがたい。もちろん、迦や葉の二文字の間に相当な空白があり、「迦葉」と断定することは難しい。しかし、二番目の文字の下端部が発見当時からすでに削られていたため、その下側の「葉」字が再度習書された可能性も排除できない。したがって、この木簡は、三〇四号(宝熹寺)、三一三号(子基寺)木簡とともに、陵山里出土木簡が仏教と密接な関連をもっていることをより直接的に物語っていると見える。

二九九号木簡が呪符木簡として儀礼と関わるもので、二〇〇一―八号が仏教と関連する木簡であるとする時、不明建物址<sup>四</sup>は、そうし

た儀礼を司り準備した場所や、儀礼担当者が滞在した建物であった可能性がある<sup>38</sup>。筆者のこうした推定は、中門址南側一帯が整備される以前から不明建物址Ⅱが機能していたものとみて、そこで使用した物品が中門址東南側の初期自然排水路によって流れ下って廃棄されたものと考えたためである。ただ、不明建物址Ⅱの外郭で木柵列が発見された点を積極的に解釈すると、不明建物址Ⅱが瓦葺き建物として建立される以前にも、ここに掘立柱建物のような他の建物が存在して、そのような役割を担っていた可能性も排除し難い<sup>39</sup>。

以上で陵山里木簡が出土した地点の排水施設と伽藍中心部の整備過程についてみてきた。陵山里寺址はもともと地形が沼地であったため、別途の敷地造成が必要であり、その敷地造成の直前に排水のための西側暗渠施設が作られた。この西側暗渠施設は中門址南側に続いていき、Y字形の第一石築排水施設と溝状遺構に繋がる。したがって、中門址の初期排水施設は、東南側と南西側の初期自然排水路と一定期間共存していた可能性が高い。寺院内部の主要建物の建立順序は、出土瓦当の型式別の分布様相を通して、より具体的に推定することができるが、講堂をはじめとした初期建物群が木塔址や金堂址より先に建立されたものと考えられる<sup>40</sup>。陵山里寺院で講堂が最初に建立されたという事実は、祠廟や陵寺という本寺院の性格と関連がある。五六七年の木塔建立以前に建立され運営された初期の施設は聖王陵の造営や祭祀などなんらかの特殊な機能を担ったものと考えられる。

### (三) 木簡の廃棄時期と性格

扶余陵山里出土木簡は、いつ廃棄されたのであろうか。八次調査で明らかとなった木簡出土地点の土層調査の内容を中心に、この問題にアプローチしてみたい。図三一五は、S九〇、W六五〜七五区間の土層図である。この最下層にあるのは灰色砂と粘土の層(一五番)であり、伽藍中心部の最下層土層である沼地と同じ様相である。初期自然排水路は、六〜一番と関連があるものと考えられるが、二〇〇二一号木簡はそうした初期自然排水路が埋没した後に形成された六番層に刺さった状態で発見された。ところで、七番の黄色砂層では第三章第二節の型式分類案の1b型式の瓦当が発見され、一番の灰色砂+有機物Ⅱ層では縄目文様が施された平瓦片と2型式の瓦当三点が発見された<sup>41</sup>。土層調査の結果のみみると、二〇〇二一号木簡は、七番や一番層から発見された瓦よりも後に廃棄されたこと

が明らかである。

前章で説明したとおり、中門址南側の初期自然排水路の廃棄は、西大排水路の整備と関連している。この初期自然排水路の内部で発見された瓦は、瓦だけでなく丸瓦・平瓦などすべて伽藍中心部ですでに発見されている型式である<sup>42</sup>。したがって、これらの瓦片は、西大排水路を整備する過程でそれまでの初期自然排水路を埋めるために捨てられた建築用廃棄物のようなものと思われる。そうした点で、六〇一一番土層は、若干の時間幅があるとはいえ、初期自然排水路を埋める過程で非常に短期間に形成された層位である可能性が高い。特に、六番層で発見された二〇〇二一号木簡は、七番層で発見された1b型式や一一番層で発見された2型式の使用年代と密接な関連をもつと考えられる。

1b型式の場合、第三章第二節で述べるように陵山里寺院の創建瓦であり、1a型式とほぼ同じ時期に製作・使用されたものであるが、2型式の場合、陵山里寺址を除くと扶余で発見された事例がないため、さらなる検討が必要である。2型式は、中房に一十六の蓮子が配置されており、中房が低くて平らであり、圏線が配置されている。蓮弁文様だけをみると、1a・1b型式と連続性がないわけではないが、製作技法と胎土、焼成温度は若干異なる。伽藍中心部の調査では、全五二点が発見され、1a・1b型式以外では最も大量に出土している。泗泚期の瓦当で中房が低く圏線が配置されたものは、おおよそ七世紀以降に出現するため、2型式の製作時期はひとまず六世紀後半から七世紀前半ころと推定できるだろう。ただ、2型式が陵山里寺址以外では発見されていないため、本寺院の創建瓦である可能性を排除できない。とはいえ、2型式瓦当の使用年代は、五六七年より若干新しい六世紀後半段階を遡ることは難しく、この年代は2型式の上限に該当するだろう。そうした点で二〇〇二一号木簡の廃棄時点は、1b型式よりは2型式瓦当の廃棄とより深い関連がある。さきに述べたように、2型式は金堂址で半分程度が発見された。したがって、二〇〇二一号木簡の廃棄時点は、2型式が最も多く製作・使用された金堂の完工や補修時点と関連すると考えられ、その年代は六世紀後半以降であったとみられる。

一方、三〇六号と三二〇号木簡は初期自然排水路ではなく、第二石築排水施設と割石形集水槽付近で発見された(図三二二)。この排水施設は先に述べたとおり、その東側の溝状遺構と比較すると、層位上、一段階新しい時期に造られたものである。ところで、最も古い時



期の排水施設と考えられる金堂址と木塔址西側の暗渠が南回廊下部を通過して中門址南西側に下ってくる地点、すなわちS九〇、W四五〜五〇地点の北端暗渠付近でも、1b型式瓦当片が発見された<sup>43</sup>。これをみると、創建期の敷地造成と関連する西側暗渠施設と、その南側の延長線に位置する第一石築排水路および溝状遺構は、少なくとも1b型式の瓦当が使用された時点では地下に埋没していたことが予想できる。したがって、溝状遺構西側の第二石築排水施設は、それよりもさらに新しい段階に該当し、具体的な時点は寺院南側の低湿地に対する整備作業も伽藍中心部の整備と関連したであろうから、二〇〇二一号木簡の廃棄年代と大きな違いはないと思われる。

このように二〇〇二一号木簡と二〇六号、三二〇号木簡は、陵山里寺院に一次の建物群が建ち並んで一定期間が経過した後、廃棄されたものと考えられる。具体的には、二〇〇二一号木簡が発見された土層図分析の結果や西大排水路と関連する排水施設の配置関係を総合してみると、金堂に対する工事が着工したか完工して、回廊が建立された時点であるといえるだろう。絶対年代としては木塔の心礎石が置かれた五六七年以降、一定期間が過ぎた六世紀後半頃に該当する。そして、この年代は陵山里出土木簡の下限になると考えられる。ところで、中門址の東南側と南西側の初期自然排水路で発見された大部分の木簡は、沼地のすぐ上の黒色有機物層から出土しているため、二〇〇二一号木簡よりは一段階早く廃棄された可能性が高い。もちろん、中門址南西側の初期自然排水路が、二〇〇二一号木簡が出土した初期自然排水路と同じ水路であるという点を考慮すると、これら木簡の廃棄時点も二〇〇二一号木簡のそれを大きく遡らないだろう。ただ、ここで疑問となるのは、その具体的な時点が木塔の心礎石埋納年代とどのような関係をもつのかということにある。この問題は木簡の製作時期と関わり、陵山里寺址における伽藍中心部の建立年代の上限や木簡の記載内容に関する分析を通してアプローチできると考える。

まず、陵山里木簡が製作され流通した時期を推定してみよう。陵山里寺址の五次調査と六次調査では、盛土敷地の下の沼地から三点の中国青磁片が出土し、その上限年代の問題についてアプローチが可能となった(図三二六)。つまり、講堂址から南に約四三メートル離れたところから青磁貼花人物文樽片一点、溝状遺構の礫の間から黒褐釉陶硯台脚片一点、S一〇〇、W六四〜六〇地点の初期自然排水路の内部から青磁蓋片一点が出土したのである。そのうち、青磁貼花人物文樽片は青磁蓮花樽の口縁部片であり、中国河南省景県封氏墓群

(そのうち封子絵墓は五六四年に死去して五六五年に埋葬されたという墓誌がある)や、陳の文帝(五三五～五五一年)陳蒨の永安陵に比定される南京靈山大墓、河南省上蔡出土の蓮花樽との比較を通して、おおよそ六世紀半ばに該当するという研究が参考となる<sup>44</sup>。

黒褐釉陶硯台脚片の場合、山本孝文による分類で1b型式である陽刻蓮弁文様獸足硯に該当する<sup>45</sup>。こうした型式の硯は、隋代以降に流行するものであり、中国四川省成都の青羊宮窯址で比較的古い型式が出土している。この窯址の年代は、窯構築以前の文化層から北周の五行大布銭が出土していることから北周最末期まで遡る可能性があるという<sup>46</sup>。南朝でも同型式の青磁硯が出土しているが、出土状況や年代については知られていない<sup>47</sup>。陽刻蓮弁文様獸足硯は隋代以降に流行するが、南朝以前から製作されていたことを意味する資料といえよう。しかしながら南朝末期の梁・陳代には、泗泚期の最も古い時期の硯である伝扶余出土青磁硯にみられるように、水滴形多足硯が主流であったと考えられるため、陵山里出土品の場合も南朝末期である六世紀半ば以降と比定できる<sup>48</sup>。

青磁蓋片の場合、内側に薄緑色の釉薬が残っており、氷裂が多い。蓋の外側には中腹以上にのみ釉薬が施されているが、口縁部は破損している。底部の高台は直角に近いが、若干内傾する印象を与える。青磁蓋の場合、時期を判定する観察属性を探すのが難しいが、中国洪州窯出土蓋や杯、碗などと比較すると、三期(南朝)以降に比定できる<sup>49</sup>。このように沼地で発見された中国青磁片は大部分六世紀半ばと推定され、この年代は寺院造営の初築の上限や木簡製作・使用の上限を意味するものと考えられる。

一方、陵山里六〇八次調査では多様な型式の硯片が出土しているが、硯は木簡という書写材料と直接的に関連するものであるため、木簡の製作・廃棄年代を推定するうえで良好な資料になると考えられる。六〇八次調査では、山本孝文が分類した泗泚期の硯型式の大部分が確認されるが、その中には、陽刻蓮弁文様獸足硯片(図三二七四)をはじめ、公山城出土三足硯と類似する製品が含まれている(図三二七五)。<sup>50</sup> まず、図三二七四の場合、初期自然排水路の内部で木簡とともに出土したが、先に説明した黒褐釉陶硯台脚片(図三二六一)との比較や、扶余宮南池、軍守里で出土した獸足蓮弁文硯片と比較すると、六世紀中後半を遡らないものと思われる。図三二七の二の場合、硯堤と硯池の一部と台脚のみ残っているが、台脚には削った痕跡が鮮明に残っている。図三二七三は硯堤が内傾し、その内側の硯岡と硯池の区分がより明確になって、台脚は三足器の脚部のように削った痕跡が鮮明である。図三二七一・三の硯片の場合、図三二七一の公山

城出土品と同じ型式である。公山城出土品の場合、山本孝文は共伴遺物と中国資料との比較を通して、その年代を熊津期末から泗泚初期めに比定している<sup>5.1</sup>。ところで、図三三七の二・三の硯片の台脚は、公山城出土品とは異なり、何度も削った痕跡が鮮明に見られる。こうした製作技法は三足土器の台脚にもしばしば見られる技術属性であり、熊津期から泗泚期の全てにわたり確認される<sup>5.2</sup>。台脚の形態や硯岡と硯池の形態を見ると、陵山里出土品は公山城出土品より若干新しいことが明らかである。そうした点から陵山里出土硯片の製作年代は、六世紀半ばころと比定できよう<sup>5.3</sup>。

このように陵山里寺址の造営の上限を推定できる資料は六世紀半ばを大きく遡らず、特に木簡とともに使用される硯の年代も六世紀前半前後に該当する<sup>5.4</sup>。したがって、中門址南側の初期自然排水路を廃棄した年代の上限、さらには木簡廃棄の上限も、これと大きく異ならないと考えられる。扶余陵山里出土木簡の性格を論じるときに、三つの重要な絶対年代がある。五三八年の泗泚遷都、五五四年の菴山城の戦いでの聖王の死、五七七年の昌王銘石造舎利龕の埋納がそれである。これまで陵山里寺址が羅城と隣接していて、初期自然排水路が西大排水路より古いという点に根拠を置いて、木簡の使用・廃棄年代を漠然と五二七年や五三八年に遡らせようという傾向もあった。しかし、以上の検討の結果は、その上限が遷都以前まで遡ることは難しく、むしろ、五五四年の事件と関連することを意味している。それゆえ、初期自然排水路で出土した陵山里木簡の使用・廃棄年代は、五五四年頃から木塔が建立された五六七年前後の間のある時期であったと考えられる。

こうした推論は、木簡の記載内容とも大きく矛盾しないと考えられる。出土した木簡は二九五号や二九九号木簡のように儀礼と関連するもの、三〇四号木簡と三二三号木簡のように他の寺院との人的・物的交流を証明するものだけでなく、三〇九号木簡のように死者への儀礼と関連する木簡が含まれている<sup>5.5</sup>。また、二九六号、三〇三号木簡の梨田・竹山のように生産地と関連するものや、三〇〇号木簡のように倉庫関連のもの、二〇〇二一号のように食米を支給する内容も含まれている。二〇〇一五号には「伏願」という特異な表現がみられるが、これは国王関連文書で主に使用されるものである<sup>5.6</sup>。このように陵山里出土木簡の記載内容は仏教や祭祀と関連するもの、物品の生産地や物品の移動、帳簿のようなものが網羅されている。したがって、陵山里出土木簡を羅城や羅城門の出入と関連づけること

は難しく、その廃棄年代とともに考慮するとき、陵山里寺址との関連性がさらに高くなるといえよう。

そうであれば、陵山里出土木簡の性格を一律に規定できるだろうか。陵山里出土木簡は、出土位置や時期によっていくつかの群に分けることができる。第一に、初期自然排水路から離れた地域で発見された三〇六号、三二〇号、二〇〇二一―一号木簡である<sup>57</sup>。第二に、中門址東南側の初期自然排水路で出土した二九九号と二〇〇一―八号である。第三に、六次調査時に中門址南側の初期自然排水路で出土した二九五号、三〇九号、三一四号、二〇〇一―一五号である。第四に、中門址南西側の初期自然排水路で発見された二九六号、二九七号、三一三号をはじめとする七次調査の出土品である(表三一の連番一六・一七、一九―三七)。

このうち第一群は、さきに検討したように木塔建立以後である六世紀後半に廃棄されたことが確実であるため、陵山里寺院の運営と関連するものといえる。第二群は、不明建物址Ⅱの性格に関する推論で説明したように、年代的には木塔建立前後に廃棄されたもので、陵山里寺院の初期施設に関連する木簡と考えられる。第三群・第四群は同じ水路で同一の出土脈絡をもって発見されたものである。初期自然排水路の廃棄年代が六世紀半ばから五六七年前後と考えられるため、これら二群は陵山里寺院の初期施設だけでなく木塔建立といった寺院との関連性を持っていたと考えられる。木簡の出土位置と記載内容の関連性については、今後補充していきたい。

以上を総合してみると、陵山里出土木簡は五五四年の聖王の死後、この一帯で行なわれた各種の行事と儀礼、物品の移動、行政行為と関連があつたと考えられる。大多数の木簡は五六七年の木塔建立工事の前後には廃棄されたため、陵山里寺院の初期施設である講堂の活動や性格と関連を持つものと考えられる。しかし、一部、六世紀後半に廃棄された木簡が含まれているために、陵山里寺院の建立や運営と関連する側面も同時に持っている。そうした点から陵山里出土木簡全体を「陵山里寺址出土木簡」と単純化するのはやや無理がある。特に、初期の陵山里寺院、講堂をはじめとする少数の建物のみが存在したものと想定され、初期講堂の性格も寺院本来の建築物ではない祠廟の性格を持っていた点を勘案すると、さらにその念を強くする。陵山里寺院の場合、初期講堂が建立されてから木塔が建立されるまで若干の時間差があり、その間に初期施設の性格が変化したと考えられるため、こうした問題が発生したのである。しかしながら、初期

の講堂は木塔建立以後、結果的に陵山里寺院の伽藍中心部の一部となり、その性格も願利や陵寺という寺院の性格と符合する。そうした点から陵山里出土木簡は巨視的な観点では、すべて「陵山里寺院の造営や運営過程で派生した木簡」とみることができよう。木塔建立以前に廃棄された木簡は、そうした点において今後、初期講堂の性格や活動を分析する資料として活用できるだろう。

#### (四) 二〇〇二一号四面木簡の分析

扶余陵山里寺址に対する八次調査では、四角柱状の四面木簡「觚」一点が発見された。現存長四三・八センチ、各面の幅一・九〜二・二センチであり、左方向へと墨書の内容が続いていて、元来の長さは五〇〜五五センチほどであったと考えられる。この木簡については、最近、尹善泰の釈読と解釈が発表されており、これを簡略に要約すると次の通りである<sup>55)</sup>。

この木簡は、内容上、一・二面と三面、四面に分けられ、そのうち一・二面は、「支葉兒食米記」と命名しうる帳簿であり、三面は、これとは性格の異なる別の帳簿が記されていた。四面は、一〜三面と書写方向が反対となっており、「又十二石」という文句が反復して書かれている。一・二面の支葉兒食米記は、「支葉兒に与えた食米の記録簿」と理解され、支葉兒は「葉材を支給する仕事を担当する使役人」であろうと推定した。三面は大きく二つの段落になっており、「口、道使(である)口次(と)如逢、小吏(である)猪耳(らは)其身者如黒也。(道使(である)復口、弾耶方(の)牟氏(と)牟口、口耶(方)の誰はどうである)」と解釈した。この内容は、「職名(または地名)+人名」の形式で人物を羅列して、彼らの身体的特徴やそれに類した事実を記したものである。ところで、三面に羅列された人物は、県クラスである城に派遣された道使という地方官、そして、弾耶方に籍を置く地方人であり、すべて「地方居住者」であるという共通点がある。

一方、一・二面の支葉兒食米記と三面の帳簿は、一つの木簡に連続して記されているため、別個のものではなく互いに関連性があるものと把握した。特に「葉の支給」と関連する支葉兒と「其身者如黒也(その身が黒いようである)」は、互いに密接に照応するため、その前に羅列された人物の病状を記したものと理解した。したがって、三面の内容は、木簡出土地点が羅城大門(東羅城第三門址)と近いこと

を考えると、羅城門を管轄する官人が各地方から都城に上京する人物を統制した痕跡といえよう。さらに、地方社会で疫病が蔓延した際には、羅城大門では上京する地方官をはじめ地方居住者をより徹底して統制したが、この時、薬部からは彼らの治療に必要な薬材を支給するために、都城外の薬草畑にその供給を要請して、羅城大門を統制する官吏が薬材を運搬してきた支葉兒に食米を支給し、その出納の事実を「支葉兒食米記」として整理したとみた。

しかし、こうした解釈は、二つの大きな問題を抱えている。まず、先述したように二〇〇二一号木簡は、木塔建立以後に廃棄されたものであるが、これを羅城大門の禁衛と関連づけて理解することが可能かという点である。第二に、内容に違いのある一・二面と三面、特に「支葉兒」と「其身者如黒也」を直接結びつけることができるかという点である。木簡の赤外線写真を参考にしながらこの問題にアプローチしてみよう(図三二八)。ここに提示するのは、筆者が作成した二〇〇二一号木簡の積読案である。

一・二・四面の積読結果は、これまでの積読と大きな違いはない。ただ、支葉兒食米記の上部に文章符号のような「<」という標示が確認され、五日の食米記録の最後に「一」が追加で確認された。問題は三面であり、冒頭はこれまで未読字とされていた。しかし、図三一九の一から分かるように、この文字は、「食」の下部が消えたものであることが明らかである。これは、一・二面と三面の関係を捉えるときに重要な示唆を与える。なぜならば、本来三面にも食米と関連する内容が記載されていたが(一次木簡)、それを削り取って現在のような内容(二次木簡)が記された可能性が高いためである。三面がそれまでの一次木簡を再活用したものであるというもう一つの証拠は、道使の下にある未確認の文字からも確認される(図三一九の二)。この部分は木簡が破損して文字の判読が非常に難しいが、墨書の濃度から二回以上文字を書いたことが分かる。したがって、一・二面と三面は、一定の関連性を持ちながらも、作成時期の異なる帳簿であったと考えられる。三面「其身者如黒也道使」の下の二文字は確定しがたいが、「弾耶方」の下の「牟氏」の左側が「牟殺」であり、その下の「殺耶」と同じ文字と考えられる。

二〇〇二一号木簡に対する積読と検討の結果、一・二面と三面は作成時期の異なる帳簿であり、四面は習書に該当することを確認できた。そうであれば、一・二面の支葉兒食米記は、どのような状況で作成されたものであろうか。まず、支葉兒を人名とみることもでき

るが、なんらかの建物や施設の名称と解釈する余地はないだろうか。これと関連して、倉庫や米、綿衣など物品の保管や移動と関連する内容が記された記録である三〇〇号、三〇六号、三二〇号木簡が注目される。

三〇〇号	(一)	「< 三月仲椋内上	」
	(二)	「< □□□	」
三〇六号	(一)	□斗 之末米	□□升
	(二)	×	(墨痕なし)
	(三)	×	□ □也
	(四)	×	(墨痕なし)
三二〇号	(一)	□ 廿両斑綿衣	×
	(二)	×	己
		×	×

三〇〇号木簡の場合、「仲椋」と「(𪛗)」字からこの木簡が出土した地点の近くに倉庫施設があったことが分かる<sup>60</sup>。三〇六号木簡の場合、一面の「之末」の右側下段に細字で「米」と書かれている。「米」の部分は、右側面が削られているが、残っている字画を二〇〇二一号木簡と比較すると「米」と確定できる。「斗」や「升」は、確定することは難しいが、二〇〇二一号木簡との比較を通して推定したものである。三〇六号木簡は廃棄時点が二〇〇二一号とほぼ同じであるため、二〇〇二一号木簡のように米の支給と関連する何らかの内訳を整理した伝票や帳簿のようなものであったと考えられる。三二〇号木簡は、「斑綿衣」という物品と関連があるが、その前の「廿両」は物品の数量単位であると考えられる<sup>61</sup>。斑綿衣は、斑模様の綿衣ほどの意味に解釈されるが、『三国志』魏志倭人伝には、倭の使者が中国に綿衣を献上した事例が確認される<sup>62</sup>。そうしたことから斑綿衣は、非常に珍しい物品であるか、倭の特産品であった可能性もある<sup>63</sup>。一方で、斑綿衣を綿または広義の布とみることもできよう。『周書』によると、百濟では米とともに麻布、絹、

糸、麻を租調として徴収したという。六・七世紀代、三国では穀物と織物を現物貨幣として使用していた点を考慮すると、この木簡に記された斑綿衣もそれに類する機能をもった物品ではなかったかと思われる。したがって、三一〇号木簡は、斑綿衣二〇両の保管や移動と関連する可能性がある。

こうした検討を通してみると、陵山里一帯には倉庫施設があり、それと関連して米の支給や物品の保管を担当する何らかの建物や施設があったことが予想できる<sup>64</sup>。特に、三〇六号と三二〇号は、二〇〇二一号木簡と廃棄時期が近い<sup>65</sup>ため、その可能性を更に高めてくれる。したがって支葉児食米記は「支葉児に与えた食米の記録簿」というよりは、「支葉児(で)の食米関連記録簿」である可能性が高いと思われる。ここで支葉児を人名と捉える余地もなくはないが、他の木簡との関連性からそのような建物や施設あるいは行政官署の名称である可能性がより高いと考える<sup>66</sup>。したがって、二〇〇二一号木簡はこの遺跡の近隣に存在した食糧支給に関する管理業務を担当した所が作成主体となり、米を支給する度に作成したメモであり、一定期間保管してから他の木簡とともに廃棄されたものと考えられる<sup>67</sup>。

一方、「支葉児」の名称に「葉」が入っていることは、この建物や施設が葉の取り扱いと関連することを示唆する。そうであるとする<sup>68</sup>と、まず、百濟二二部司の一つである葉部が思い浮かぶが、中央行政官署が羅城外郭にあったとは考えられない<sup>69</sup>。また、二〇〇二一号木簡が木塔心礎石を埋めた後に廃棄されたことが明らかであるため、木簡の記載内容は、何らかの形で寺院と関連づけなければならぬであろう。ところで、陵山里一帯に葉と関連する何らかの建物や施設があったと仮定することは、百濟仏教に医学的な要素が多いという点を考慮すると、さほど問題とはならない<sup>70</sup>。

『日本書紀』には、五七七年に倭の使臣が本国に帰る際、律師のほかに禪師と比丘尼、呪嚩師、造仏工、造寺工など六人を付けて送り、彼らを難波の大別王寺に安置したという内容が記されている<sup>71</sup>。このうち、呪嚩師という人物が注目される。彼は、律師、禪師などとともに日本に派遣されていることから、仏教と密接な関係を持つ人物、つまり僧侶であったと考えられる。呪嚩師は、日本の養老令に規定されているように、医薬的な性格を持っているが、彼自身が医療技術を持っていた可能性はある<sup>72</sup>。彼の主たる任務は「祓除爲厲者」とあり、呪文と祈禱を通して兵士を治療することであるが、それはすなわち鬼神を追い出す行為をいう。したがって、呪嚩師は「仏



法の呪を唱えて病災を斥ける者」といえる<sup>71</sup>。ところで、陵山里寺院の創建、特に初期講堂は五五四年の菅山城の戦いで戦死した聖王と密接な関連を持っている。呪噤師の任務は、そのような恨みをもって死んだ聖王の行跡と関連する。

陵山里出土木簡のうち、二九五号や二九九号木簡など祭祀と関連する木簡が出土したことも、こうした呪噤師の任務と関係があるだろう。特に、二九五号木簡の場合、それが道饗祭や道祭祀と関連するとはいえず、出土位置が中門址の南側、第二木柵列の北側であるため、羅城と関連した道路というよりは中門址前の道路と関連させなければならぬだろう。図三一〇は六〜七次調査で検出された道路遺構を概念化したものである。西大排水路方向の木橋を越えて北側にむかう道路は中門址南側を過ぎたあと、再び東石橋のほうに曲がって陵山里古墳群の方向に繋がっている<sup>72</sup>。二九五号木簡が発見された中門址南側の東西道路の開設時点は断定しがたいが、初期講堂を中心としたなんらかの施設が機能していた段階に、ここにはその初期施設や陵山里古墳群へと繋がる道路が存在していたものと考えられる。したがって、二九五号木簡は、都城外郭にあった陵山里寺院の初期講堂と陵山里古墳群の連結道路で行なわれた祭祀に関連するものと考えられ<sup>73</sup>、そうした儀礼過程に呪噤師がある程度関与していた可能性は十分に想定できる。ところで、初期講堂を筆者のように祠廟や祠堂のようなものと把握できるならば、この道路は祠廟や王陵へと向う「神道」のようなものであり、二九五号木簡は、神道の傍で行なわれたなんらかの儀礼を意味すると考えることもできよう。

二〇〇二―一号木簡三面の道使以下はどのように理解できるだろうか。筆者は、最も上にある「食」と小吏の「小」は、木簡の一次使用の痕跡であると推定している。道使以下は大きく二つの段落で構成されており、「道使□□次如逢吏猪耳」は、「その体が黒いようである(其身者如黒也)。道使□□、弾耶方の牟氏と牟祓、祓耶(方)の某が…」というような意味と解釈される。最初の文章の道使以下はどこまでが人名であり、どこまでが職名であるか、いくつか解釈が可能である。二番目の文章の道使以下は、「道使某、弾耶方(出身)の牟氏と牟祓、祓耶(方)…」などと解釈される。ところで、一・二面と三面が異なる時点に作成された帳簿であるとはいえず、完全に関係のない記録とは考えられない。四面の場合、一・二面にみられる食米の量と関連する「又十二石」という習書が反復して記されたことをみると、さらにその可能性が高い。

前述したとおり、一・二面の食米関連記録は、米を支給する度に作成されたメモのようなものであるため、正式な帳簿を作成した後に廃棄されたり再活用されたりしたのであろう<sup>74</sup>。ところで、食米記を作成した人物が、「其身者如黒也」のような身体的特徴を記したのは、それを受領した人物、つまり道使をよく知らないために、一次木簡の三面を活用してメモ用紙のように使用したものと考えられる<sup>75</sup>。同じメモといっても、一・二面は情報を他の人に伝達する機能をもつ客観的なものであるのに比べ、三面は情報を自分に伝達する機能を果たした、より主観的で自己認識的な機能をもつものという違いがある<sup>76</sup>。

支葉児で食米の支給を受けた道使や弾耶方の牟氏と牟祲らは、地方から泗泚都城に派遣された人物であるが、官人である道使の場合には、その麾下に一定の人員を率いていたと考えられる。また、ほとんど毎日食米を受け取っていることをみると、ここで一定期間なんらかの労働に従事していたと思われる<sup>77</sup>。ところで、この木簡が六世紀後半頃に廃棄されたことを勘案すると、この時の労働は羅城築造ではなく陵山里寺院の建立や運営に関連するものとみられる。したがって、二〇〇二―一号木簡は、支葉児というなんらかの建物や施設において、寺院の建立に力役として動員された地方民に米を支給して、その内訳を記録した伝票あるいは一次帳簿であったといえよう。

そうであれば、支葉児はなぜ食米を支給し、どのような性格のものであったのか<sup>78</sup>。食米は文字通り食べる米を意味するが、一・二面の記録はこの地域に食米支給作業を遂行する行政組織があったことを意味し、三〇〇号や三〇六号木簡もこれと関連があることは前述した通りである。支葉児で支給された食米の量に、日ごとに差があることは、道使などそれを受領する集団内部の人員に変動があったためであろう。また、一・二面の食米量に関する記録のうち、一日と二日に小升一が増加していることからすると、これが食米の日当に対する最小単位である可能性がある<sup>79</sup>。

ところで、食米を受領する人物は地方官である道使某と弾耶方の牟氏と牟祲と記されている。道使は城主の異称であり、城は五方制の下で第三段階の統治単位に当たる<sup>80</sup>。城の長官である道使と、弾耶方に籍を置く牟氏と牟祲という人名が一緒に記されているが、後者の場合、道使のような官人ではないにも関わらず個人の資格で食米を受領している点が注目される。彼らが食米を支給される理由は、陵山里寺院の建立という国家的な事業に動員されて、一定期間力役に従事したためであろう。したがって、この時の食米は、そうした力役

を遂行するための現地生活費や代価としての性格を持ち、それを受領した側の立場からは日給のようなものであったといえよう<sup>81</sup>。個人の資格で食米を受領している牟氏と牟祿という人物の力役は、国家や地方官庁に動員されて無償で労役する単純な用役ではなかったと思われる。つまり、寺院の敷地造成のような単純労働ではなく、それよりも専門的な技術や特別な才能を持っていたと考えられる<sup>82</sup>。そうした点で弾耶方の牟氏と牟祿という人物はなんらかの特別な専門技術をもつ個人や集団の代表であった可能性がある<sup>83</sup>。彼らは力役遂行のための現地生活費や対価として、実際の勤務日数によって米を支給されたのであろう。

一方で、この時の力役動員単位は、道使という地方官が派遣された城や、弾耶方という行政区と関連がある。この時の弾耶方について、『日本書紀』欽明天皇一三年(五五二)条にみられる「牛頭方」と「尼弥方」を根拠にして、百済では六世紀前半にすでに広域行政区画である五方制とは性格の異なる「方」という地方行政制度が実施されていたことを意味する資料として解釈する場合もある<sup>84</sup>。しかし、四面木簡の廃棄時点を筆者のように六世紀後半と把握するならば、この資料はむしろ六世紀半ばに確立された五方制が、実施以降にもそれとは性格の異なる「方」という地方行政制度が存在したことを意味する資料と理解しなければならないだろう<sup>85</sup>。したがって、陵山里寺院の建立には城単位や特殊な性格の方単位で編成された地方民の力役動員があったことを確認できる。

二〇〇二一号木簡は、支葉児という建物や施設において陵山里寺院の建立に動員された地方民に米を支給して、その内訳を記録した一次帳簿であり、六世紀後半、この寺院の整備過程における力役動員とその運営方式を表わす資料と評価できる。毎日支給される食米の量や動員された人員に対する記録は、その後、正式な帳簿に整理されたであろう<sup>86</sup>。仏国寺の「西石塔重修形止記」と「無垢浄光塔形止記」の内容には、石塔重修作業の進行状況が詳細に記されており、特に日付ごとに作業内容と飲食提供の状況が共通して確認されて興味深い<sup>87</sup>。たとえ後代の記録であるとはいえ、二〇〇二一号木簡もこのような形で再整理されたことが予想されるためである。

一方、日本では平城京の西隆寺や但馬国分寺、安芸国分寺において、寺院の造営と関連した木簡が出土している。これを通して寺院の造営過程や寺院を構成する施設、寺司の組織、造営の財源や資材などに関する具体的な推定が行われている<sup>88</sup>。陵山里出土木簡の場合もこのような事例との比較分析を通して、今後、寺院の造営過程や運営、景観に関する問題についても検討する必要があるだろう。

## 第二節 陵山里寺址出土瓦当の分類と需給体系

### (一) 出土瓦当の再検討

百済泗泚期の瓦当については、先行研究において蓮弁文と中房、蓮子などの形態変化に関する流れを把握でき、同范関係を通した生産と流通の問題、瓦当面と丸瓦の接合方式を中心にした製作技法の問題などがある程度解明されてきた<sup>39)</sup>。しかし、これまでの泗泚期の瓦当研究は、研究者個人が設定した一つの分類体系によって瓦当全体を包括できるという前提の下で進められてきた。また、瓦当面と丸瓦の接合方式を中心にした製作技法についての研究でも、それが持つ意味について適切な解釈を導き出すことができなかった。

瓦当文様と製作技法は、一つの建物址を発掘しただけでも一〇余個以上の多様な型式が確認される場合が大部分である。そのような状況で一つの瓦当について研究者ごとにそれぞれ異なる型式分類案が提示されることもあり、数十種類の型式を単純に羅列する場合もあった。これまでの型式分類や類型の設定では個別遺跡から出土した多様な型式の瓦当を包括しがたく、これを基にした相對編年の設定についてもこれ以上の議論は困難であった。したがって、百済瓦当研究を進展させるためには、様々な遺跡で出土した全ての資料を包括できる型式分類とそれに対する分析が今まさに切実な段階にあるといえる。個々の遺跡に対する事例分析が増加した後、今後より進展した総合的な議論が可能となるであろう。

扶余陵山里寺址の場合、昌王銘石造舍利龕の銘文から五六七年という絶対年代が確認され、印花文土器片などの遺物と遺構状況から見ると、六六〇年の百済滅亡期に廃寺となった可能性が高い<sup>40)</sup>。したがって、ここから出土した瓦当は泗泚期の他の遺跡とは異なり、統一新羅時代や高麗時代の遺物が全く混入していない百済時代のものといえる。このような資料の特徴は約一〇〇年間存続したこの古代寺院がいかなる過程を経て創建され、維持・補修されてきたのかを把握できる良好な事例となるだろう。

扶余陵山里寺址の伽藍中心部に対する発掘調査の内容はすでに報告書として発刊されている<sup>41)</sup>。しかし、報告書で提示された型式分類案は極めて一部の資料のみを対象とした試案に過ぎない。そうした意味において、ここから出土した瓦当の型式分類案と編年案を提示

した金鍾萬の研究が注目される。<sup>30</sup> これについて、まず金鍾萬の先行研究を批判的に検討しながら筆者の修正案を提示した。瓦当の型式分類においては瓦当文様と接合技法、瓦当と連結した丸瓦部の違いに注目し、瓦当の接合技法が持つ意味に対する筆者の所見を明らかにする。次に、筆者の型式分類案を基にした相対編年案を提示し、これを通して創建期の瓦当と補修用瓦当を区別する。さらに陵山里寺址出土瓦の生産と供給体系についても把握していく。

扶余陵山里寺址では多様な型式の瓦当と平瓦、丸瓦、垂木瓦、鴟尾などの瓦類が大量に出土した。金鍾萬は陵山里寺址出土の瓦当三四〇点を対象に型式分類案と年代観を提示しており、それをへ表三二に整理した。彼はまず蓮弁文を基準として蓮華文瓦当(Ⅰ)と巴文(Ⅱ)、素文(Ⅲ)に区分した後、蓮華文瓦当を再び蓮華の形態と中房を基準として細分している。つまり、蓮華の形態を弁端尖形(A)、弁端反転突起形(B)、弁端反転形(C)、弁端三角反転形(D)、弁端有角反転形(E)に区分し、これをさらに中房の高低、圏線の有無、蓮子の数を基準に五型式一六種に細分したのである。

泗泚期の蓮華文瓦当研究と比較してみると、蓮弁と中房の形態を基準として瓦当型式を細分したことは妥当性を持つ。蓮弁文様を尖形、反転形、三角形、有角形に分類したことは用語上理解するうえで難しい部分があるが、再検討の結果、各型式別の類似性と差別性は認められる。しかし、蓮弁文様による分類と中房など他の観察属性による分類が同じ範疇に設定され<sup>31</sup>、また一次的に設定された蓮弁文様に二次的な観察属性を図式的に代入すると各型式別の関連性が弱くなるため補完する必要がある。

そこで本稿では瓦当の型式分類のため、編年と系統設定に最も重要な蓮弁文様を一次的な基準とし、中房の大きさや形態、圏線の有無、蓮子の数、製作技法などを二次的な基準とした<sup>32</sup>。また、蓮弁の形態を反転型、隆起型、三角形といった用語で表現するよりも客観化した数字で表記し、蓮弁文様の類似性が高いものを出土頻度が高い順に配列した。この過程で問題となるのは瓦当面と丸瓦の接合方式である製作技法をいかに処理するのかということである。なぜならば、蓮弁文様や中房の形態が同じ同范品の場合、おおよそ同じ型式の接合方式を使用しているが、一部の瓦当の場合、異なる技法が用いられている場合があるためである。また、同范品であり同じ接合技法を用いたとしても、瓦当と連結した丸瓦の内面処理方式や釘穴の位置が異なる場合が見られるため、これを他の型式に分類するのかが問題

〈表三-二〉金鍾萬の型式分類案と年代観

型式	蓮弁の形態と計測的属性	中房の形態と蓮子数	接合技法	数量(340点)	年代観	筆者分類案
I A	蓮弁が厚く、端部尖る 直径一三.六、蓮弁径一二.三、子房三.五	圏線○, 一+八顆	A2	二〇	大通寺、西穴寺出土品が変化したものと推定	4型式
I Ba5ア	反転突起型の中で端部が尖ったもの 直径一三、蓮弁径一一.二、子房三.四	圏線○, 一+八顆	B2	二	大通寺式から蓮弁と蓮子の配置が変形	10型式
I Bb3ア	反転突起型の中で端部が尖ったもの 直径一二.九、蓮弁径一〇.二、子房三.二	圏線× 一+六顆	B2	四	旧衙里出土品と同范形	9a型式
I Ba3イ	反転突起型の中で端部が鈍いもの 直径一三.三、蓮弁径一〇.五、子房三.三	圏線× 一+六顆	B2	二	舒川金德里窯址出土品と同范形	9b型式
I Cb5ア	蓮弁が厚く、間弁が三角形 直径一四、蓮弁直径一二.一、子房四.三	圏線× 一+八顆	A2	二八	井洞里窯址、龍井里寺址からみて六世紀中葉	3型式
I Cb3ア	I Cb5アと類似、中房が小さいもの 直径一四.五、蓮弁径一二.一、子房三.三	圏線× 一+六顆	B2	二	上同	12型式
I Ca4イ	蓮弁が厚く曲がるもの 直径一四.二、蓮弁径一二.子房五.一	圏線○ 一+七顆	C2	一五	公山城出土品と若干異なる	6型式
I Cb4ア	蓮弁が厚く短い、中房が大きい 直径一四.二、蓮弁一二、子房五.一	圏線○ 一+七顆	B2	一三	なし	7型式
I Cb2ウ	蓮弁が三角形と円形、子房が小さい 直径一四.一、蓮弁径一二、子房三.二	圏線× 一+五顆	C2	五	なし	11型式
I Db5ア	蓮弁三角反転型 直径一四.九、蓮弁径一二.四、子房五.二	圏線× 一+八顆	B3	八八	創建期瓦、五六七年以上限	1a~1e型式
I Db5イ	I Db5アと大きさ、接合方式が異なる。 直径一四.六、蓮弁径一一.七、子房四.七	圏線× 一+八顆	C1	九六	創建期瓦、五六七年以上限	1a~1e型式
I Da3	中房が圏線で囲まれる 直径一四.七、蓮弁径一一.七、子房四.七	圏線○ 一+六顆	B3	三三	なし	2型式
I Db1	直径一四.一、蓮弁径一一.一、子房五	圏線× 一+四顆	B1	一二	亭岩里窯址出土品 六世紀後半	5型式
I Dc2	中房の形態が独特 九葉に復元	圏線○ 一+五顆	×	一	東南里遺跡、定林寺址出土品と同范品	13型式
I Eb3ア	蓮弁が角ばる 直径一四.五、蓮弁径一二.一、子房四.四	圏線× 一+六顆	A1	三	新たな瓦型	8b型式
I Eb3イ	I Eb3と大きさと接合方式が異なる 直径一三.五、蓮弁径一一.一、子房三.八	圏線× 一+六顆	B4	七	新たな瓦型	8a型式
II型	直径一六.九、子房三.一	巴文	B3	二	七世紀代	巴文
III型	直径一六.九	素文	D	七	七世紀代	素文

となる。

本稿では瓦範の形態が異なるものは、ひとまず一つの型式に分類し、製作技法と関連する属性の違いはその型式内部の変形と理解した。ただ、そのような細かな変形を一つ一つ表現してしまうと過度に煩雑な分類案となるため、この場合は観察結果を本文で簡単に言及するにとどめた<sup>950</sup>。

本稿で述べる接合技法の分類案は、次のとおりである(図三一一)。まず、金鍾萬の研究によると全部で九型式の接合技法が確認されるところ<sup>960</sup>。しかし、各型式別の接合技法に対する再検討の結果、これまでの研究とは若干の相違点が看取され、瓦当周縁の上段部と丸瓦先端部の処理方式についてより明確な概念を提示する必要があると感じた<sup>970</sup>。瓦当と丸瓦の接合方式は瓦当周縁上段部の処理方式と丸瓦先端部の処理方式によって区分することができるが、陵山里寺址の場合、図三一一のように全部で九型式の接合技法が確認された。

A型式の場合、瓦当周縁と周縁上段部の一部を残したまま周縁上段部裏面を削った後、丸瓦を接合させる方法である。その中でA1式は瓦当裏面を一度削って、丸瓦先端部を斜めに一度削って接合させたものをいう(金鍾萬B2式)。A2式は瓦当裏面を一度削っている、二度加工した丸瓦先端部を接合させたものを指す。

B型式は瓦当周縁上段部を残したまま、その端部から削ったもので、C型式は瓦当周縁上段部の一部を削り出したものである。このうちB1式は周縁上段部端部から斜めに一度削った後、一度加工した丸瓦先端部を接合させたものであり(金鍾萬B1式)、B2式は周縁の上段部端部から一度削った後、二度加工した丸瓦先端部を接合させたものを指す(金鍾萬A1式)。一方、C1式は瓦当周縁の一部を斜めに削った後、一度加工した丸瓦先端部を接合させたもので(金鍾萬B3式)、C2式は瓦当周縁の一部を残したまま二度加工した丸瓦先端部を接合させたものである(金鍾萬B4式)。

D型式は瓦当周縁部を残すことはA型式と類似するが、瓦当裏面の一部を二度削り出して丸瓦部を接合させた点が異なる。その中でD1式とD2式は丸瓦先端部を二度削る点は同じであるが、D1式は斜めに削った後、垂直に整えており、一方D2式はL字形に削っている点で異なる。E型式は瓦当周縁部を残さず削り出した後、加工していない丸瓦部を差し込んだものをいう(金鍾萬C2式)。

本稿で検討対象とした瓦当資料は五〇二点である。これまでの研究と数量において違いが生じた理由は、筆者の場合、破片も一点として処理したためである。瓦当片の場合、三分の一や四分の一程度だけ残っていても、他の出土事例を通して型式分類が可能であり、各破片がほぼ接合されないものと見られるため、一点と処理しても大きな問題はないと判断した。筆者は瓦当の型式と型式別出土位置を確認するために国立扶余博物館で数ヶ月にわたって、瓦当の裏面に記録された注記と遺物採集カード、発掘野帳などを参考にして、これを全面的に再確認する作業を実施した。また、本稿で検討した瓦当に対する型式分類と出土位置、発掘報告書の図面と図版、遺物番号などについては付録を参考されたい<sup>98)</sup>。

## (二) 出土瓦当の型式分類

陵山里寺址出土瓦当の場合、大きく蓮華文と巴文、素文に区分できる。その中で蓮華文瓦当は一三の型式に細分され、巴文瓦は二型式、素文瓦当は一型式で分けることができる。ここでは蓮華文瓦当を中心に各型式の詳しい内容について調べてみよう。まず、1型式瓦当は蓮弁にポリウムがあり、端部が若干尖っており中房が大きい。瓦当周縁上段部には斜格子文の痕跡が共通して確認されるが、これは丸瓦先端部に斜格子の形態に刻みを加えた後に接合させたもので瓦当と丸瓦の接合効果を高めるためのものである。金鍾萬は1型式瓦当を大きさと接合方式の違いから二つの型式に細分しているが、両者の違いは大きさや接合技法の違いだけでは説明できない。なぜならば、瓦当の大きさは焼成時の収縮率によって違いが生じることがあり、接合技法においても両者を厳格に区分しにくいためである<sup>99)</sup>。

筆者は1型式瓦当の胎土と焼成度、蓮弁と周縁部の処理方式、接合方式、瓦当裏面の処理方式、特に瓦当と連結する丸瓦の型式により五つ型式に細分した(図三二一<sub>100</sub>)。その中で1a式は南回廊址東側窯址で出土した瓦当と同範品で胎土に砂が多く混じっており、濃い灰色を呈しており硬質である。全部で九七点が確認された。蓮弁文様と周縁が互いに連接するものを整えず、そのまま連結した状態である点が1型式の他の瓦当と異なる。瓦当と丸瓦の接合方式はC1式である。瓦当と連結する丸瓦は有段式であり、縄目叩きの後、ナデを施している。丸瓦内面には玉縁端部まで麻布の痕跡が残り、瓦刀は内側から外側にひいている。瓦の背面には四角形の釘穴が瓦当と連



結する部分から二三センチの所にあり、丸瓦の長さは三〇センチ前後である。釘穴の外郭には四角形の枠が確認され、外から内方向に開けられている。

1 b式と1 e式は1 a式に比べて胎土に相対的に砂の量が少なく、明るい灰色を呈して軟質である場合が多い。蓮弁文様と周縁が接続した部分を一回以上瓦刀で整えており、若干の間隙が確認される。ただし1 b式は八葉の蓮弁の一部が周縁と接続しており、1 c式と1 d式は蓮弁と周縁の間をきちんと整えている。1 d式の場合、瓦当裏面の下段部を数回にわたって瓦刀で整えることが1 c式と区分される点である。瓦当と丸瓦の接合方式は1 b式の場合、B 1式とC 1式が共に見られ、1 c式と1 d式はE式であるが、1 e式はB 1式なのかC 1式なのか明確でない。1 e式の場合、後述するように1 b式と瓦当文様が非常に類似しているが、残存する丸瓦の形態において違いが見られる。1 b式は最も多い一三一点が確認され、1 c式は二一点、1 d式は一九点、1 e式は一点が出土した<sup>10)</sup>。

一方、1 型式の場合、瓦当と連結する丸瓦の型式の違いが明確に確認される(図三一三)。1 b式の場合、1 a式と接合技法の違いも見られるが、それよりは瓦当と連結する丸瓦の違いが目立つ。1 b式瓦当と連結する丸瓦は無文の灰白色軟質であり、有段式であるが内面の麻布痕が玉縁段部まで残っている。玉縁は粘土帯で整形し若干、斜方向に接合している。瓦の背面には釘穴が残っており、瓦当と連結された所から一一センチ地点に位置している。また、1 a式で観察される釘穴周辺の枠は確認されず、全体の長さも三二センチ程度で若干大きい。

1 c式と1 d式の場合、どのような丸瓦を連結したのか不明である。しかし、報告書の図面一四九上(図版一七五上)の丸瓦は瓦当接合面を整えず、丸瓦端部に斜格子形の陽刻線文が残っており、1 型式の瓦当の中でE式接合技法と関連する丸瓦と考えられる。この丸瓦は有段式であり、無文の灰青色硬質を呈する。内面の麻布痕は玉縁段部まで残っており、玉縁は粘土帯で整形されており1 b式と類似する。全体の長さは三二・七センチ、釘穴の位置は瓦当連結部分で二〇・四センチ地点に配置された点が1 b式瓦の丸瓦部と異なる。この丸瓦が1 c式と1 d式のうち、どの型式と接合されるのかは不明であるが、B 1式やC 1式接合技法を見せる1 a式、1 b式、1 e式とは全く異なる丸瓦を連結して使用したことは明らかである。

1 e 式の場合、灰色硬質の有段式丸瓦が接合されている。丸瓦内面の麻布痕は玉縁段部まで残っており、玉縁を粘土帯で整形しているが、1 b 式連結丸瓦とは異なり、玉縁段部の内面を数回瓦刀で整え、直角に近い角度で接合させている。丸瓦の長さは二八・五センチ程度と短く、釘穴も瓦当接合面から一八・七センチ地点に四角形にあげられており、その周辺に四角形の枠を残している。これは一点しか確認されていないが、ひとまず細部型式の一つとして設定した。

ところで、1 b 式と1 c 式および1 d 式は蓮弁文様と瓦当と丸瓦の接合方式、瓦当裏面の処理方式などによって大別できるが、いくつかの例外がみられる。報告書の図面一六七―八(図版一九三―八)瓦当の場合、その裏面に瓦刀痕が残っており、1 d 式に分類したが、C 1 式接合技法が確認される。図面一二八―三(図版一五九―二)の場合、E 式接合であり、蓮弁と周縁部を非常に整然と仕上げていることから1 d 式に分類したが、瓦当裏面下段の周縁部を削らず丸く仕上げている。また、図面一六〇―四(図版一八四―四)や図面一六七―二(図版一九三―二)の場合、ひとまず1 c 式に分類したが、C 1 式とE 式接合技法が共に見られる。この場合、瓦当面と丸瓦が接合されはじめる両側部分は周縁の一部を残すC 1 式であるが、中央部分は周縁を残さないE 式になっている。

そうした点でこれらを1 e 式のように新たな型式に設定することが妥当なのか、そうでなければ例外的な亜型式として処理するのかが問題となる。1 a 式と1 d 式瓦当の接合方式や製作方式には先に明らかにしたように主流的な傾向性が確認される。B 1 式とC 1 式、E 式接合方式は瓦当周縁上部を残したのか否かによる区分であるが、C 1 式とE 式が一つの遺物で確認されるように両者の区分は瓦の製作工程で発生した違いと考えられる<sup>102</sup>。したがって、これをもう一つの型式として設定するよりは、同じ瓦製作集団部の工人差と把握することになろう。

しかし、1 e 式の場合、瓦と接合した丸瓦の長さや玉縁の製作方式、釘穴の形態などにおいてその他の1 型式瓦当と比較的大きい違いが確認される。このような違いは単純な工人差と考えられず、瓦製作工程を総括する造瓦組織や工程の違い、つまり工房の違いから発生したものと考えられる。そうした点で1 a 式と1 e 式瓦当の間には単純な工人差以上の型式的な違いが存在したものと考えられる。1 型式瓦当は全て木材で作った瓦範を使用したものと考えられ、これは一部瓦当の蓮弁に残っている木目痕を通して確認できる。したがって、

1型式瓦当内部には祖型となる瓦範の移動や部分的な改範の可能性を想定できるだろう。また、胎土と硬度の違い(1a式と1b式、1e式の間)、蓮弁と周縁接続部の処理方式の違い、また瓦当に接合する丸瓦の接合方式だけでなく丸瓦自体の型式差を確認できる。そうした点で1型式内部には工人差以外に工房差、さらには製作年代の違いが存在した可能性が提起される。

2型式瓦当は蓮弁の形態が1型式瓦当と類似するが、中房の形態と接合方式において違いが見られる(図三一四)<sup>103</sup>。2型式瓦当は中房に一六顆の蓮子が配置されており、中房は低く圏線がある。また、胎土に砂がほとんど混入しておらず、軟質である場合が多く、全部で五二点が確認される。瓦当と丸瓦の接合方式はこれまでC1式として紹介されていたが、A1式に設定することが妥当であると考えられる。報告書の図面と図版を詳しく観察してみると、瓦当周縁上段部の一部を残して斜めに削り出した後、丸瓦部を接合させたためである。瓦上段部の削り出した部分には陰刻や陽刻の跡が全くなく、瓦当裏面にもナデの痕跡は全く確認されない。

3型式瓦当は蓮弁が若干厚く、蓮弁端部が隆起しており、中房は凸形に突出し、一八顆の蓮子が配置されている<sup>104</sup>。非常に精選された胎土を使用しており、灰青色硬質のものが多い。全部で四一点が出土している。丸瓦接合方式はC2式であるが、瓦当周縁上段の切り出した部分にはなんら痕跡がない。3型式の場合、どのような型式の丸瓦が連結されたのかは完形品が残っておらず、詳細は不明である。ただ、報告書図面一五三二・三(図版一七九二・三)を参考にすると、1型式瓦当と連結した丸瓦とは全く異なる型式の丸瓦が接合されたことは明らかである(図三一五)。この丸瓦は縄目叩き後、ナデを施しており、その痕跡が比較的よく残っていて、砂が混入していない精選された粘土を使用している。また、灰青色硬質であり、いずれにも内面には麻布痕が確認できるが、このような連結丸瓦の型式は後述する4型式瓦当と非常に類似する。

4型式瓦当は蓮弁のポリウムが豊かで端部が点珠状に近い尖形をなし、中房に圏線があり、一八顆の蓮子が配置されている。非常に精選された胎土を使用しており、灰青色硬質が多くて、瓦当裏面には回転ナデの痕跡が残っている<sup>105</sup>。全部で二七点が出土した。瓦当と丸瓦の接合方式は3型式瓦当と同じC2式である。瓦当と連結する丸瓦部は縄目叩き後、ナデを施した有段式丸瓦で、砂が混入していない精選された粘土を使用しており、灰青色硬質である。ところで、報告書図面一二三二(図版一五四一)と図面一五〇二(図版一七

六一二を比較すると、4型式に連結された丸瓦の間にも若干の違いがあったことがわかる。図面一三三二一の連結丸瓦部は瓦当と連結する地点から二六センチ地点に四角形の釘穴があげられるのに対し、図面一五〇二二の場合、二三センチ地点に釘穴があげられているためである(図三一一五)。この二点は瓦が半損しており丸瓦が接合されたまま残っているが、軟質と硬質という点を除くと細部の文様や接合技法の違いを見出しがたい。連結丸瓦部が同じ型式で、釘穴の位置は瓦製作工程で発生しうる微細な違いと考えられるため、ひとまず同じ型式に分類した。

5型式瓦当は蓮弁と間弁が三角形をなし、中房には一四顆の蓮子が配置されている<sup>106</sup>。比較的精選された胎土を使用し、灰青色と灰白色が共に見られる。全部で二九点が出土した。瓦当裏面には丸瓦の接着効果を高めるために別途の補強土を使用した痕跡があり、瓦当裏面下段部にはケズリ調整を施した痕跡が観察される。瓦当と丸瓦当連結方式はこれまでB1式で見られたが、瓦当周縁の一部を残した後、丸瓦を二度調整して接合するC2式と考えられる。瓦当に連結された丸瓦は無段式であり、背面には太線文が打擦され釘穴がない(図三一一六)。蓮弁文様の形態や接合技法、灰白色の別途補強土を使用した痕跡などは5型式瓦当が亭岩里窯址で生産・供給されたことを示唆している。

6型式瓦当は蓮弁が厚くて端部が円形を呈し、大きく隆起している<sup>107</sup>。胎土は精選されており、灰青色硬質である場合が多い。中房は平面的であり圏線があつて一七顆の蓮子が配置されている。全部で二二点が出土した。瓦当と丸瓦の接合方式はE式と紹介されているが、C1式と考えられる<sup>108</sup>。瓦当と丸瓦の接合部分には斜格子文が陽刻されたまま残っており、瓦当裏面にはこれといった痕跡は観察されないが、一部の瓦当では瓦刀で削り出した痕跡が見られる。

7型式瓦当は蓮弁が短く鈍重で、中房には一七顆の蓮子が配置されているが、瓦当面全体の厚さが他の瓦当に比べて厚い<sup>109</sup>。中房が広くて凸形に膨らんでいるため、蓮弁が相対的に短く見える。胎土には砂が一部混入しており灰白色や灰青色を呈する。全部で一九点が出土した。瓦当と丸瓦接合方式はこれまでA1式として紹介されているが、C1式が主流であったものと考えられる。7型式の瓦当周縁の上部には接合技法を確認できない五点を除くと、斜格子文が陽刻されたもの(八点)と直線の線文が陽刻されたもの(三点)、無文(三

点)など三種類の接合痕が確認される<sup>110</sup>。この中で斜格子文や線文が陽刻されたものはC1式接合技法であるが、無文のものはB1式である。斜格子文の中で一部B1式接合と考えられるものが含まれているが、両者を厳格に区分することは容易ではない。このような違いは瓦当と連結した丸瓦先端部の処理方式の違いから発生するものであるが、丸瓦端部に斜格子文や線文の刻みを施して加工する場合とそうではない場合は製作工人の差を意味するものと考えられる。

8型式瓦当は蓮弁に角があり、中房に一十六課が配置され、瓦当周縁の外郭を数度瓦刀で整えた痕跡が観察される(図三一七)。8型式瓦当の場合、二つの型式に細分できるが、8a式と8b式は焼成度と接合方式に違いが見られる。8a式の場合、灰青色の硬質焼成であり、B2式接合方式で製作されており、8b式は灰色の軟質焼成であり、A2式の接合方式である<sup>111</sup>。8a式は八点、8b式は六点が確認されている。ところで、この二つの型式の場合、瓦当と連結した丸瓦部が残っていることから明確に区分できる(図三一八)。8a式の場合、報告書の図面一九二(図版一五〇)のように縄目叩き後、ナデを施した丸瓦が連結される。丸瓦部の玉縁部分は残っていないが、瓦当連結部分から一九センチの地点に円形の釘穴があげられている<sup>112</sup>。8b式の場合、報告書の図面七四一(図版一〇四)のように破損した丸瓦が残っているが、丸瓦の背面には格子叩き後、ナデを施した痕跡が見られる。丸瓦部の残存長が二一・五センチであるが、釘穴の痕跡は確認されない。このような連結丸瓦部の違いは8型式内部に存在する焼成度と接合方式の違いをより鮮明に示しており、それは工人の違いを示唆するものと考えられる。

9型式瓦当の場合、蓮弁の端部が若干反転して中房に一十六顆の蓮子が配置されている。瓦当裏面には回転ナデの痕跡があり、若干膨らんだ形態を呈する。この瓦は蓮弁端部の形態によつて9a式と9b式に分けられる。9a式の場合、蓮弁の端部が突起のように若干反転するが、9b式の場合、反転が鈍くて蓮弁が平たい<sup>113</sup>。両型式とも細かい砂が一部混入しており灰色を呈する。接合方式は若干の違いがあり9a式はA1式、9b式はA2式になっており、前者は四点、後者は二点出土した。9型式瓦当の場合、いわゆる大通寺式瓦当で、蓮弁の反転の程度や蓮子の大きさおよび范傷の程度によつて微細な変化を見せるため、極めて細かい観察が要求される。

10型式瓦当の場合、9型式瓦当と類似するが、蓮弁と中房の変形した大通寺系瓦である<sup>114</sup>。蓮弁はポリウムがなく平らで蓮弁端

部が点珠状に尖っている。中房には圈線があり、一十八顆の蓮子が配置されておりA1式接合方式を見せる。全部四点が確認された。

11型式瓦当は蓮弁端部を三角形と円形で装飾し、中房が小さく一十五顆の蓮子が配置されている<sup>115</sup>。灰白色軟質で砂が混入しており瓦当裏面を数度瓦刀で削った。全部で六点出土した。E式接合技法を見せるが、瓦当周縁上段部を切り出した後、瓦当部分に針線を入れて丸瓦を連結することが特徴である。

12型式瓦当は蓮弁端部が三角形に近いが、端部が若干隆起している(図三一<sup>19</sup>)<sup>116</sup>。蓮弁はスマートな印象を与え、中房が小さく一十六顆の蓮子が配置されている。11型式瓦当と類似するが、蓮子数が異なり中房の形態と蓮弁の形がはるかに粗雑である。全部で二点出土した。瓦当と丸瓦の接合方式はA1式と紹介されたが、六・七次発掘調査で出土した事例を見るとC2式と考えられる<sup>117</sup>。瓦当の蓮弁と周縁が接する地点を斜めに整え、周縁上段部に斜格子形の針線を入れて丸瓦との接合効果を高めた。連結丸瓦は有段式で長さは一・八センチであり背面は無文である。瓦当と連結する所から二〇・二センチ地点に四角形の釘穴があるが、丸瓦内面にも四角形の釘穴痕がある(図三二<sup>20</sup>)。これを見ると、この丸瓦は内側から外側に穴をあけ、工程上、瓦当部を接合する以前に丸瓦部に穴をあけたものと推定される。13型式瓦当の場合、蓮弁と間弁が三角形であり、九葉の蓮華文瓦当に復元される<sup>118</sup>。中房は膨らんでおり太い圈線が巡り、一十五顆の蓮子が配置されている。二点の破片のみ出土した。瓦当と丸瓦の接合方式は不明であるが、扶余東南里や中井里遺跡出土同範品の事例を見るとC2式と推定される。

巴文瓦当の場合、報告書の図面一七〇一八(図版一九六<sup>18</sup>)と図面七三三二(図版一〇三三<sup>21</sup>)のように二点の破片のみ確認される。扶余地域で発見された同範品と比較すると、巴文1・2式に細分できる。巴文1式の場合、C2式接合技法で上部に斜格子文が確認される。巴文2式の場合、陵山里寺址出土品のみでは接合技法を知ることができないが、扶蘇山城出土品などを参考にすると、D1式であると推定される。一方、巴文1式瓦当の場合、井洞里窯址(C地区)で同範品が出土している。

素文瓦当の場合、円板に周縁部を別途に作った後、丸瓦を差し込んだものと紹介されているが、そのような痕跡は確認できない。瓦当と連結した丸瓦部の背面には直線の太線文をナデた痕跡が見られる(図面一五四<sup>11</sup>、図版一八〇<sup>12</sup>)。全部で九点の確認され、扶余扶蘇

山城出土事例などを参考にすると、D2式接合技法と考えられる。素文瓦当は青陽汪津里窯址で出土しているが、汪津里窯址出土品の場合、接合方式がB2式であることが確認されるため若干の違いがある。

以上で陵山里寺址から出土した五〇二点の瓦当に対する筆者の分類案を紹介した。金鍾萬による型式分類案との違いは、1型式瓦当を五つに細分したこととこれまで別個の型式としてきた8・9型式瓦当を一つの型式の中で二種類に細分したことである。また、各型式別の接合技法が既存の研究とは若干の違いがあることを確認し訂正した。特に一つの型式の中に類似する接合方式が混在している場合(1b式、1d式の場合)や連結丸瓦の釘穴の位置が異なる場合(4型式の場合)、連結丸瓦の端部の処理方式が異なる場合(7型式の場合)があることを確認した。また、蓮弁文様や接合技法が同じとはいえず、瓦当と連結する丸瓦の型式に違いが存在することを確認できた<sup>119</sup>。このような事例は一つの造瓦組織内部に存在する工人差を物語るものと考えられる。

### (三) 出土瓦当の相対編年と需給体系

扶余陵山里寺址から出土した13型式の蓮華文瓦当と巴文・素文瓦当は各型式別にいかなる序列を有しているだろうか。瓦の年代には製作年代と供給年代、廃棄年代がある。陵山里寺院の場合、六六〇年の百濟滅亡期にほぼ同時に廃寺となったと予想されるため、問題になるのは製作年代と供給年代である。また、約一〇〇年間、一つの建物が維持されるためには創建以後一定の補修が必須である。このような事項を考慮しながら次に出土瓦当の相対編年案を提示し、創建期の瓦当と補修用瓦当を区分してみたい<sup>120</sup>。

まず、陵山里寺院の創建期瓦当はいかなるものかを検討しよう。消費遺跡で発掘された瓦当の中で創建期瓦当を抽出する場合にしばしば採用されるのは、「絶対多数の論理」である<sup>121</sup>。ある建物址や寺址から出土した瓦当の中で最も多数を占める瓦当型式が創建当時に主に採用されていたという論法である。そうした点で計二七〇点が出土した1型式瓦当は陵山里寺址創建期に使用された創建瓦である可能性が高い。このことは南回廊址前の東大排水路接続区間から発見された窯址出土品からも確認できる(図三二二)<sup>122</sup>。伽藍中心部の隣接地域で陵山里寺院に瓦を供給した窯址が発見されたが、そこでは1a式瓦当二点が出土している。1型式瓦当は扶余地域の遺跡のう

ち陵山里寺址を除いて一点も発見されていない。したがって、1型式瓦当は陵山里寺址式瓦当、あるいは陵寺式瓦当と呼ぶことができ、この寺院に供給するために製作された専用の瓦型式といえる。その製作年代は地下式心礎石である昌王銘石造舎利龕の埋立年代から五六七年以前と考えられる<sup>123</sup>。

ところで陵山里窯址では1a型式の瓦のみ出土し、1b式と1e式瓦当は出土していない。1a式と1b式と1e式は胎土と焼成度、接合方式、瓦当裏面の処理方式、連結丸瓦の型式、釘穴の位置と形態などにおいて明確な違いが存在する。このような違いは1型式内部の細部型式の間にかかる違いを反映するのだろうか。普通、胎土や焼成度の違いは生産地の違いと認識する 경우가多く、接合方式や瓦当裏面の処理方式、丸瓦釘穴の位置と形態などの違いは製作工人の違いを反映するものと理解されている。したがって、二つのグループの間には造瓦集団内部の工人差はもちろん生産地の違い、つまり工房差が存在するといえるだろう。

このような工房差と工人差は年代差を反映するのだろうか。陵山里窯址全体が発掘されなかったために即断することは難しいが、結論から述べるとその可能性が高いと考える。陵山里窯址は一次発掘調査時、南回廊址隣接区間で灰原が発見されたが、六・七次調査時、窯址から南側三〇余メートル離れた東石橋付近の丘陵から窯址と推定される痕跡が確認された。このような状況を考慮すると、陵山里寺址近隣の窯址は大規模で長期間にかけて操業されていたものと推定される。1型式瓦当が比較的長期間にかけて生産され、その内部で胎土と焼成度、丸瓦の型式の違いが見られることは、1型式を生産する工人集団が最小で二つ以上存在したことを示し、その製作時期や供給時期に時間差があったことを物語るものであるように考えられる。

また、南回廊址近隣地域の窯址で1a式瓦当のみ出土している事実にも注目する必要がある。南回廊址付近窯址は建物址からわずか数十メートルしか離れていなかった。火災に脆弱な木造建物の特徴を考慮すると、この地域の窯址が持続的に操業されたとは考えにくい<sup>124</sup>。少なくとも南回廊址が建立された当時には初期の窯址が閉鎖され、南側に移動したり全く別個の窯から瓦を供給した可能性があるのである。陵山里寺址近隣の窯址は南回廊址隣接区間から次第に南側に移動しながら運営されたものと考えられる。したがって、そうした点で1a式は1型式部でも最も古い型式の瓦当であったと推定される<sup>125</sup>。



1 a 式と1 b 式と1 e 式グループ間の前後関係は瓦当文様からもある程度類推できる。筆者はまだ両者間に存在する木材瓦範の損傷〔範傷〕や瓦範の変形〔改範〕の痕跡を明確に把握できていない。しかし、蓮弁と周縁の間の処理方式のみ見ると、前者が後者より遅く出現した可能性はきわめて低い。前者の場合、蓮弁一ヶ所、または二ヶ所で必ず周縁と直接接触し粗雑に処理された場合が確認されるのに対し、後者の場合、間弁と周縁の間を瓦刀で整然と整えている。中房の場合、後者が前者より若干突出した凸形で、蓮子の配置もより鮮明な印象を与える。また、前者の場合、中房の一部が蓮弁一ヶ所で若干突き出て不定形をなすが、後者の場合はそのような痕跡を観察できない。しかし、両者の区別が計量的属性では説明することはできないため、二つのグループ間の工人差と工房差、生産地の違いはさほど大きくなかったものと見られる。つまり、1 a 式は1 b 式より若干先に製作・使用されたが次第に1 b 式と1 e 式と共存しながら代替したものと考えられる。1 型式瓦当の中で1 a 式より1 b 式瓦当が相対的に多数を占める理由もこのような状況と関連があるのではないだろうかと思われる。

創建期の瓦当以外に比較的古い段階に設定できるものが3・4 型式と9 型式瓦当である。その中で3・4 型式の場合、1 型式のように陵山里寺址以外では発見されず、相対編年を設定するうえで多くの困難を伴うが<sup>126</sup>、泗泚期の瓦当蓮弁文様の流れと比べると、比較的古い段階に属することは明らかである。また、3・4 型式の胎土やC 2 式の接合方式、瓦当と連結する丸瓦の背面の文様やその内面の麻布痕が非常に類似する点は二つの型式がほぼ同じ生産地で製作されたことを示唆している。これは3・4 型式と1 型式瓦当を比較するとより鮮明にあらわれるもので、この瓦当が少なくとも1 型式瓦当とは全く別個の工房で製作されたものであることを物語っている。

一方、1 b 式瓦当の出現過程で説明したように南回廊址隣接区間に存在した陵山里窯址の閉鎖時点は単純に1 型式瓦当内部の工人差や工房差、年代差だけでなく、陵山里寺院全体の瓦生産と供給体系の変化を伴ったものと考えられる。つまり、陵山里窯址内部で1 a 式が1 b 式と1 e 式瓦当の生産をもたらしたことは別に、全く異なる不明窯址で3 型式と4 型式瓦当が新たに生産され、陵山里寺院に供給されたものと推定される。そしてまさにその時点で陵山里寺址の伽藍中心部の建立が最高潮に達したものと予想される。3 型式と4 型式では、4 型式が若干古い時期に製作されたものと考えられる。それは泗泚期の瓦当の場合、蓮弁端部が若干隆起する蓮弁文様は点珠状よ

り新しい時期に出現し、3型式瓦当は6・7・11・12型式などその後の段階にも似た系統の蓮弁文様が製作されつづけるが、4型式瓦当は断絶したためである。このような議論を総合してみると、3型式と4型式瓦当の製作時期は五六七年以後と推定される。

9型式瓦当の場合、いわゆる大通寺式瓦当で、特に9b型式は舒川金德里窯址出土品と同范品である。舒川金德里窯址出土品の製作年代は泗泚遷都以後から六世紀後半までとその年代幅が非常に広く、その中心時期については陵山里寺址出土品を根拠として活用する場合があった<sup>127</sup>。つまり、9b型式瓦当が中門址付近から出土するため、その製作時期を五六七年前後と想定したのである。しかし、陵山里寺址の伽藍中心部内部でも各建物の建立時期に違いが存在するため、9型式瓦当の供給時期は少なくとも五六七年以後と見なければならぬだろう。したがって、9型式は創建期瓦当である1型式より若干新しい時期に製作・供給されたと考えられ、3・4型式と同時期か若干新しい時期に相對編年できるだろう。9a式と9b式の相対的な順序は扶余地域で出土する大通寺式瓦当の出現様相を見た場合、蓮弁端部の反転の程度が大きい9a式が若干古い。しかし、この二つ型式の瓦当が陵山里寺院に供給された時期はほぼ同じものと見なければならぬだろう。

以上の検討の結果、陵山里寺址の伽藍中心部の創建期建物に適用された瓦の供給体系は次のように整理できる。まず、陵山里寺址創建当時には陵山里窯址を中心とした寺院専用窯で小規模の瓦生産が行われた(1a式瓦当の生産)。その後、窯が南側に移動しながらより大規模で長期間にわたって瓦を生産した(1b式と1e式瓦当の生産)。それとほぼ同時期かその直後に他の不明窯(3・4型式瓦当の生産)と金德里窯(9型式瓦当の生産)を編入して瓦は供給した<sup>128</sup>。そのような過程は伽藍中心部の建築工事の進行過程と関連があり、南回廊址東側隣接部の陵山里窯址が廃棄される時点とも関連があるだろう。草創期の瓦当は最初の製作時期には前後があるが、ある段階には同時に製作・供給されたものと考えられる。

初期の瓦当より若干新しい時期に製作されたものが5型式瓦当である。5型式は瓦当と丸瓦の接合効果を高めるために別途の補強土を使用した<sup>129</sup>が、これは扶余亭岩里窯址生産品の特徴である。ところで5型式はこれまで発見された亭岩里窯址群出土品とは若干異なるものと考えられる<sup>129</sup>。その最も大きな違いは瓦当裏面の下段部と周縁部の外郭を数度瓦刀で整えた点と太線文がある無段式丸瓦と接合した

点である。亭岩里窯址八号と九号窯址出土品の中には瓦当周縁の外郭を瓦刀で整えた事例が確認され、特に九号窯址では太線文がある無段式丸瓦が発見されている<sup>130</sup>。

しかし、瓦の焼成度と厚さ、丸瓦の背面文様、厚さなどで多くの差異点が確認されるため両者を同范品で断定することは難しい<sup>131</sup>。つまり、5型式瓦当が九号窯址をはじめとする亭岩里窯址出土品と緊密な関係を有することは事実であるが、必ずしもそこで生産されたものと断定できない状況である。亭岩里窯址の場合、広い地域が未発掘のまま残っているため、5型式の生産地として他の窯址を想定することも難しい。亭岩里窯址生産品の製作時期については蓮弁文様とA・B地区で印刻瓦が全く出土していない点などを考慮すると、六世紀中半から後半頃が操業の中心年代と推定され、C地区の場合、それより新しい七世紀前半頃と推定されている<sup>132</sup>。

一方、陵山里寺址から出土した亭岩里窯址系統の5型式瓦当は工房址Ⅰでのみ出土するものと知られており、そのような理由から1型式より一段階遅れた六世紀後半を供給年代で推定した。しかし、表三二三から分かるように5型式瓦当は金堂址や木塔址でより多くの数量が発見されているため、これだけを根拠とするには不足である。ただ、工房址Ⅰでは5型式が一点しか出土していないにもかかわらず、5型式の丸瓦部と同じ丸瓦の完形品が多数発見されている<sup>133</sup>。また、陵山里寺址の工房址Ⅱ(図版一三四一・二・三・四)と不明建物址Ⅰ(図版一三五三・四、図版一三六一〜五、図版一三七一〜三)、西排水路(図版一七一、三〜五、図版一七二)などでもこれと同じ型式の丸瓦が出土した。そうした点で5型式に接合された丸瓦と同じ型式のものは大部分が建物下部の溝で配水用として使用されたものと推定できる。つまり、5型式瓦当が各建物の屋根を装飾していたとはいえ、5型式の丸瓦部と同型式のものは配水用の陶管としても使用されたのである。

この点は5型式が創建期に使用されたというよりは、補修用瓦当であったことを示唆するものと考えられる<sup>134</sup>。瓦当の裏面と周縁部を瓦刀で整える製作技法は六世紀中半には確認されておらず、亭岩里窯址のこれまでの発掘においても少数に過ぎない。したがって、陵山里寺址で発見された5型式瓦当の供給時期は1型式や3・4型式、9型式より一段階新しい六世紀末から七世紀初めと推定される。5型式は補修用瓦の中で最も古い段階に該当し、そうした点から5型式が供給される段階には伽藍中心部の建物の大部分が完備していたも

のと推定される。

5型式とともに2型式、6・7型式、8型式、10・13型式、巴文、素文瓦当などは創建当時の五六七年より一段階あるいは二段階遅れて作られた補修用瓦当である。これらの型式の瓦当は中房が相対的に広くあるいは狭くなりながら平面化したり突出して、圏線がある場合が多い。蓮弁の形態は初期瓦当と系統上連結しながらも変形が生じ、蓮弁が角ばったり蓮弁の数が多くなり、巴文や素文など全く新しい文様が登場したりもする。これらの瓦当は製作時期が新しく出土量が少なく、ある型式は特定建物に集中分布する傾向が確認される。

各型式別の特徴を簡略に調べてみると、まず2型式瓦当の場合、1型式瓦当の蓮弁文様と類似するが中房の形態、接合方式などが全く異なる。6・7型式と11・12型式瓦当の場合、蓮弁の端部が隆起する点は3型式瓦当と類似するが、中房の形態と接合方式が異なる。8型式瓦当の場合、全く新しい蓮弁文様と接合方式を見せており、13型式瓦当の場合、5型式と類似しながらも蓮弁の数や中房が全く異なる。13型式の場合、扶余東南里遺跡と定林寺址、中井里遺跡で同范品が確認されている。10型式瓦当の場合、青陽本義里窯址で生産されたもので、軍守里寺址、定林寺址、錦城山建物址などで同范品が確認されている。巴文1式の場合、井洞里窯址(C地区)で同范品が出土し、素文瓦当の青陽汪津里窯址で同系品が出土しており、ある程度の相対編年が可能である<sup>133)</sup>。このように同范品物が出土した10型式、13型式、巴文1式瓦当は扶余地域の出土事例から見て、おおそ七世紀前半から中半のものと推定される。巴文2式と素文瓦当は瓦当部と丸瓦部ともに二度調整された点と扶余地域で発見された同范品の出土様相から見ると、それよりさらに新しい七世紀前半以後に比定される。

その他の瓦当は蓮弁文様や中房の形態を中心に製作時期を推定せざるを得ない。8型式瓦当の場合、蓮弁に角があつて、周縁部外郭を数回削った点は5型式瓦当と類似することから、それと近い六世紀末から七世紀初めと考えられる。瓦当の蓮弁が隆起する6型式、7型式、11型式、12型式の場合、蓮弁文様の型式変化を考慮すると、7型式瓦当が最も古いものと考えられる。7型式瓦当の場合、3型式と蓮弁の形態が最も類似し、1型式瓦当と中房の比率が類似することから七世紀前半に比定できる。11型式の場合、蓮弁の形態は7

型式より先行するものと見ることができ、瓦当周縁上段部を陰刻し丸瓦を接合させて、瓦当裏面を瓦刀で削る方式は後期的な要素と考えられるため、7型式と類似する七世紀前半と考えられる。

12型式の場合、11型式と蓮弁文様が類似するが蓮弁端部の表現が粗雑で、中房の形態や蓮子も稚拙であることから11型式より新しい七世紀前半から中半と考えられる。6型式瓦当の場合、蓮弁端部が隆起しており、中房が平面的で圏線が配置されている点から11型式や7型式より若干新しい七世紀前半から中半と考えられる。2型式瓦当の場合、良好な比較資料がないが、創建期瓦当である1型式と蓮弁の形態において連続性が確認される。しかし、中房が低く平たくて、圏線が配置されている点から1型式よりは一段階新しいものと考えられる。また、補修用瓦の中で最も多く出土した点を考慮すると、5型式瓦当と近い六世紀末から七世紀初半ごろに製作されたものと考えられる。

以上の検討を通して推定した陵山里寺院補修用瓦当の製作と供給時期を整理すると次のとおりである。伽藍中心部の一次的な完備以後、六世紀末から七世紀初半には2型式と5型式、8型式瓦当が新たに製作され、七世紀前半には7型式と11型式瓦当が再び製作される。七世紀前半から中半にかけては6型式をはじめとして10型式、12型式、13型式および巴文1式が製作され、七世紀中半以後には巴文2式と素文瓦当が製作・使用されたものと考えられる<sup>136</sup>。

ところで、このような補修用瓦当の一部は表三二二三のように特定建物址に集中する傾向が確認される<sup>137</sup>。5型式の場合、金堂址から69%、6型式の場合、木塔址から90%、7型式の場合、講堂址とその周辺から66.3%が集中的に出土した。このような出土様相からみると、5型式は金堂址、6型式は木塔址、7型式は講堂址を補修するために特別に製作・供給されたものと考えられる。つまり、この瓦当は特定建物を補修するための専用瓦当といえるのである。

しかし、8型式瓦当の場合、各建物址から散発的に発見されるため、特定建物を補修するための瓦当とは考えられない。ただ、8型式瓦当が他の補修用瓦より若干古い時期に製作された点を勘案すると、屋根を大規模に補修する前段階に同時に修理した事情を反映するのではないかと考える。また、2型式の場合、金堂址から48%が集中的に分布するため、金堂址の補修専用瓦と理解する余地もあるが、

〈表三-三〉 陵山里寺址出土補修用瓦当の建物址別分布様相

区 分	2型式	5型式	6型式	7型式	8型式		10型式	11型式	12型式	13型式	巴文	素文
					8a	8b						
工房址 I	1	1		1		2						
講堂址と 東西翼舎	3		1	12	3	2						
不明建物址 II	3			2	1							
金堂址	25	20		1	2					2		
木塔址	3	5	19	1			1	4				4
中門址							2					
回廊址 東西排水路など	13			1	2	2		1	2		2	2
不 明	4	3	1	1			1	1				1
合 計	48	26	20	18	8	6	3	5	2	2	2	6

他の建物址からも少数ではあるが出土しているため断定しがたい。10～13型式と巴文、素文瓦当の場合、出土量が少なく木塔址や金堂址、中門址などから散発的に発見されるため、特別な意味を見出し難い。巴文2式と素文瓦当の場合、陵山里寺の廃寺直前にも持続的な屋根の補修があったことを物語るものと考えられる。

最後に、補修用瓦当はいかなる方式で生産され供給されたのかをみておきたい。陵山里寺址の5型式、10型式、13型式、巴文、素文瓦当の場合、扶余地域の他の遺跡で同范品の出土事例があり、13型式を除くとその生産窯址もある程度推定できる。

つまり、5型式は亭岩里窯址(推定)、10型式は本義里窯址、巴文は井洞里窯址(C地区)、素文は汪洋里窯址(推定)で生産されたものと見られる。しかし、2型式、6～8型式、11～12型式瓦当の場合、泗泚期の他の建物址や窯址で同范品が発見されていないため、陵山里寺院専用の窯址が一定期間持続的に維持された可能性がある。ただしこの場合、窯址の運営は断続的で小規模であったため、草創瓦は相当な違いがあったものと考えられる。

このように陵山里寺院では生産地の異なる補修用瓦が時期的に重複しながら持続的に出土するため、1b式瓦当や3・4・9型式瓦当が供給される頃に成立した複数の瓦窯―一寺院型供給体系は滅亡期まで続いたものと推定される。つまり、陵山里寺院の瓦供給体系は1a式瓦当が生産された初期の一瓦窯―一寺院型段階を除くと、寺院専用の窯と別途の外部窯で瓦を生産・供給する複数瓦窯―一寺院型体系であったといえるのである。

### 第三節 陵山里寺址の伽藍中心部の変遷とその意味

#### (一) 瓦当の分布様相と建物の建立順序

前節では陵山里寺址伽藍中心部の整備と変遷過程を明らかにするための基礎研究として、そこから出土した五〇〇点余りの瓦当に対する型式分類と相對編年案を提示した。したがってそれを基に本節では各建物址別の瓦当の分布様相と各建物の建立順序を把握する。その過程で五六七年の木塔建立以前に講堂址を中心にした初期建物址群が機能していたことを確認し、そのような施設の性格や変遷過程に対する分析を通じて陵山里寺院建立の意義もあわせて検討したい。

扶余陵山里寺址は中門址・木塔址・金堂址・講堂址が南北一直線上に配置されており、その東・西・南側を回廊が囲む典型的な一塔一金堂式伽藍配置をなしている(図三二一)。陵山里寺址から出土した瓦当は各型式別にかかる分布様相を見せるのか。また、伽藍中心部の建物址ではいかなる型式の瓦当が分布しているだろうか。このような分析作業は伽藍中心部建物の建立過程を解明する重要な根拠となるだろう<sup>138</sup>。〈表三二四〉は陵山里寺址の伽藍中心部から出土した瓦当の型式別出土位置を整理したものである<sup>139</sup>。

まず、〈表三二四〉を中心に各型式別の分布様相を検討しよう。1型式瓦当の場合、全二七〇点が出土しているが、講堂址(七八点)と木塔址(七〇点)、不明建物址Ⅱ(二〇点)で最も高い頻度数を見せる。講堂址の場合、翼舎と考えられる工房址Ⅱと不明建物址Ⅰの間から出土した一二点を含めると、その比率はより一層高まり、特に1a式瓦当の48%が分布する点が注目される。なぜならば、筆者は1型式瓦当中、1a式が1b式より1e式より古式と推定しているためである。

木塔址の場合、講堂址だけに多くの数量が出土したが、1式よりは1b・1c・1d式が集中する点が異なる。不明建物址Ⅱでは1型式が金堂址よりも数量的に多く出土した。南回廊址の場合、1a型式瓦当の出土比率が高いが、伽藍中心部の地形が北高南低という点や中門址から五〇メートル離れた南側一帯からも1型式瓦当が出土している点、東側近隣に創建期の瓦当を生産した窯址が運営されていた点などを勘案すると、特別な意味を見出しがたい。創建期瓦当である1型式瓦当が伽藍中心部のほぼ全ての建物址で発見されてい

〈表三-四〉 陵山里寺址における瓦当の出土位置と数量

区分	西回廊址	西回廊址外側小型建物址	工房址Ⅰ	西大排水路	工房址Ⅱ	工房址Ⅱと講堂址間	講堂址西室	講堂址東室	講堂址	講堂址と不明建物Ⅰ間	不明建物Ⅰ	不明建物Ⅱ	東回廊址	東大排水路	講堂址	講堂址と本塔址間	本塔址	中門址	南回廊址東側	南回廊址西側	南回廊址	統計処理困難	不明	合計		
1a式			2	3	5	7	17	7	23	1	2	7	1	1	4		5	1	5	1	3		2	97		
1b式	2			2	4	1	3	10	13	3	3	10	1	2	9	4	44	1	2	4	2	4	7	131		
1c式	1		1	1			1	1	3			1			1		9					2		21		
1d式				1								2	1		1		12	1			1		1	20		
1e式																							1	1		
2式			1	2	1			1			1	3	2	2	25		3		4	2	1	2	2	52		
3式	1			3			1			1	2				26		2	1		1		1	2	41		
4式				3			2		1			2		1	12			2			1		3	27		
5式			1	1											20	1	4						2	29		
6式								1									19						1	21		
7式		1	1		1		1	2	6	1	1	2			1		1						1	19		
8a式							2		1			1		2	2										8	
8b式			2		1				1										1	1					6	
9a式																1	2						1		4	
9b式																		1			1				2	
10式																1	2						1		4	
11式				1												4							1		6	
12式		1		1																					2	
13式														2												2
巴文	1			1																						2
素文																4					2		1			7
合計	5	2	8	19	12	8	27	22	48	5	8	30	5	8	103	5	109	11	12	9	11	9	26		502	



ることを鑑みると、長期間にかけて大規模に製作・使用されたことを推察できる。

3型式瓦当は全部で四一点が出土しており、金堂址から二六点が出土した。3型式全体の63%が金堂址から出土していることを考えると、金堂址が最も重要な使用場所であったことが分かる。この点は4・5型式瓦当の場合にも確認される現象である。4型式瓦当は全体の44%(一一点)、5型式瓦当の場合、69%(二〇点)が金堂址から発見されているためである。このような事項を考慮すると、3・5型式瓦当は一次的に金堂址で使用する目的で生産・供給されたものと推定される。

9型式瓦当の場合、中門址(三三点)と木塔址(一点)、南回廊址(一点)で少量が出土しているため分布上特別な意味があるとは考え難い。その他の瓦当は補修用瓦当で5型式は金堂址、6型式は木塔址、7型式は講堂址専用の補修瓦当であるといえる。

では、伽藍中心部の各建物址ではいかなる型式の瓦当が出土したかを検討してみよう。まず講堂址の場合、全九七点の瓦当が発見されており、1型式七八点、7型式九点、8型式四点、4型式三点、2型式と3型式、6型式各一点が出土した。1型式瓦当は講堂址出土瓦当の80%を占めるため、この型式が講堂址の創建期瓦当といえる。1型式瓦当の中で特に1a式瓦当が講堂址に集中分布する現象は、この建物址が伽藍中心部の様々な建物よりさらに古い段階に建立された事実を反映するものと考えられる。

また、7型式が講堂址に相対的に集中して分布する現象を見ると、この型式が講堂址を補修するための専用瓦当と考えられる。もちろん時期を異にする他の型式の瓦当も講堂址の屋根を補修するため使用された。一方、講堂址の翼舎といえる工房址□と不明建物址Ⅰの場合、1型式瓦当がそれぞれから九点・五点出土し、講堂址と接続した区域でも一二点が発見された。そうした点からこの翼舎建物も講堂址とほぼ同時期に建立されたものと見ても無理はないだろう。

木塔址の場合、全部で一〇九点の瓦当が発見されたが、1型式七〇点、6型式一九点、5・11型式と素文四点、2型式三点、3型式二点、7・9・10型式各一点が出土した。1型式瓦当は木塔址出土瓦当の64%を占めており、この型式が木塔址の創建期瓦当と考えられる。この点を見ると、木塔址と講堂址はほぼ同じ段階に建立されていたものと考えられるが、木塔址では1a式が五点しか出土しておらず、1b式四四点、1c式九点、1d式一二点など1b式と1e式の比率が圧倒的に高い。筆者は1型式瓦当中、1a式と1b・

c・d式が生産地や工人集団の違いのみならず年代差があるものと把握している。したがって、1a式が集中分布する講堂址と1b式が集中分布する木塔址の間には若干の年代差があると見られ、講堂址が木塔址よりやや古い段階に建立されたものと推定される。6型式瓦当の場合、木塔址以外にはほぼ発見されていないため木塔を補修するための専用瓦当と考えられる。

金堂址の場合、全部で一〇三点が発見されており、1型式一五点、2型式二五点、3型式二六点、4型式一二点、5型式二〇点、7型式一点、8型式二点、13型式二点が出土した。金堂址の場合、講堂址や木塔址とは異なり1型式をはじめとする3・4・9型式など初期の瓦当が分散して分布することが特徴である。また、陵山里寺院創建期瓦当の中心的な位置を占める1型式の出土比率が講堂址と木塔址に比べて非常に低い。

前節では1b～1e式瓦当と3・4・9型式瓦当が供給された段階で陵山里寺院の瓦供給体系に一定の変化があり、その背景には陵山里窯址の配置問題が関連していることを指摘した。そうした観点から見ると、1b式～1e式瓦当と別個に3・4型式という全く新たな瓦当が外部から供給された背景には金堂の建立問題が介在していると推測できる。そうした点から見ると、金堂址の創建期瓦当は1・3・4型式であったと言える。5型式をはじめとするその他の型式の瓦は金堂址の補修用瓦と考えられる。

不明建物址Ⅱの場合、三〇点の瓦当が出土したが、1型式が二〇点、2型式三点、3型式二点、4型式二点、7型式二点、8型式一点が確認された。不明建物址Ⅱの場合、講堂址や木塔址、金堂址のように規模の大きい重層建物ではないが、比較的多くの瓦当が発見され、特に1型式瓦当が69%を占めている事実は、この建物が比較的古い時期に建立され重要な役割を担ったことを物語っている。不明建物址Ⅱの創建期瓦当は1型式瓦当であり、少なくとも木塔址や金堂址以前の段階に建立されたものと推定される。

不明建物址Ⅱの性格については、この建物とその東側を通る東大排水路の間から木柵と類似した痕跡が発見された点と、このような木柵施設が中門址東南側の初期自然排水路付近から発見された柵状遺構と類似する点(六～七次調査)、特に中門址東南側の初期自然排水路区間から二九九号木簡と二〇〇一八号木簡など祭祀・儀礼と関連した木簡が出土した点から、木塔建立以前からなんかの儀礼を担当し準備した所ではないかと推定した<sup>140</sup>。

ところで、第二章第一節で説明したように二〇〇八年度の定林寺址発掘調査によって、講堂址の東西に別途の付属建物址が東西回廊址まで続くように配置されていた事実が新たに確認された<sup>141</sup>。定林寺址の講堂址は北回廊に連結するのではなく、その左右に別途の独立建物を配置した後、東西回廊によって連結したのである。この時の付属建物址はその配置が陵山里寺址の不明建物址□や工房址■と類似するが、王興寺址の発掘調査でも同じ付属建物址二棟が確認された。陵山里寺址の不明建物址□と工房址■は当初、定林寺址や王興寺址、軍守寺址の回廊址北端の付属建物址と同じ機能を果たしたものと推定される。その具体的な性格は弥勒寺址の場合、講堂址の左右に連結した付属建物址を「僧房址」と命名したことが参考となる。しかし、陵山里寺址の場合、九次調査で僧房址と推定される施設が確認されている。そのため、これら付属建物址は僧侶の寢食が行われた生活空間としての僧房というよりは、公式の面会や儀礼準備などより公的な事務が執り行われた空間であったと見るのが妥当であろう。

不明建物址□と対称をなす工房址■の場合、八点の瓦当しか発見されなかった。1型式三点、2型式一点、5型式一点、7型式一点、8型式二点である。瓦当の出土量が少なく統計処理に限界があるが、不明建物址□が金堂址より古い段階に建立されたことからみると、それと対称をなすこの建物址もまたそれと似た時期に建立されたのではないかと推定される。ただし、工房址■が創建当時から工房として機能したかについては建築構造上の疑問が提起されているため<sup>142</sup>、建物址内の機能化を共に考慮する必要があるだろう。

中門址からは全部で一点の瓦当が発見されていて、1型式三点、3型式一点、4型式二点、9型式三点、一〇型式二点が出土した。中門址の場合、出土量は少ないとはいえ金堂址のように1型式が少なく、3・4型式と9型式が出土している点が留意される。このような瓦当の出土様相は、金堂址建立過程にあらわれた陵山里寺院の瓦供給体系の変化を反映しているものと考えられるためである。中門址の場合、他の建物と異なり9型式瓦当が出土しているが、筆者の相對編年案のように9型式瓦当が3・4型式瓦当より若干遅くこの寺址に供給されたのならば、中門址の建立は金堂址すぐ次の段階に始まったと見ることができらるだろう。

回廊址の場合、出土瓦当が極めて少なく建立時期を推定するには困難である。東回廊址の場合、1型式三点、2型式二点が出土し、西回廊址の場合、1型式三点、3型式一点、巴文一点が出土した。南回廊址の場合、1型式一六点、2型式七点、8型式二点、9型式一点、

素文二点が出土しているが、廃寺以後、木塔址や金堂址に使用された瓦が水に流され移動した可能性を排除できず、大きな意味を与えることは難しい。さらにこのような瓦の分布様相から見ると、回廊の屋根に瓦当が使用されたのか疑問が残る。

回廊址の建立時期は東・西回廊址と南回廊址が接する地点で発見された暗渠施設など排水施設の整備過程を考慮すると<sup>143</sup>、他の建物がある程度完備した後の、最も新しい段階に建立されたものと考えられる。西回廊址外側の小型建物址では12型式瓦当が一点だけ発見されたため、この建物もまた瓦当で飾られた建物ではなかったものと見られ、伽藍中心部の完備後に一段階遅く建立されたものと見られる。

以上で陵山里寺院における伽藍中心部の建物の建立順序を出土瓦当の分布様相を検討してきた。その結果、伽藍中心部の建物は講堂址とその付属建物がまず建てられ、木塔址と不明建物址Ⅱ、工房址Ⅰがその後建立されたものと推定した。木塔址と不明建物址Ⅱ、工房址Ⅰの前後関係は出土瓦当のみでは判断し難い。しかし、不明建物址Ⅱを筆者のように初期講堂址と関連した何らかの施設と把握できるならば、その状況上、木塔址より先に建立されたものと考えることができる。

また、後述するように講堂址主屋と不明建物址Ⅰ、工房址Ⅱ、不明建物址Ⅲ、工房址Ⅰなどは共通して退間や庭を備えており、二室、または三室に分かれている。このような建物構造はこの建物址の同時期性を示唆するものと考えられる。木塔建立以後、金堂址、中門址の順で建立され、回廊址は最後の段階に建立されたものと見られる<sup>144</sup>。

伽藍中心部の建物建立の順序で注目される事実は、講堂址とその付属建物が木塔址や金堂址より古い段階に建立された点である。一般的な古代寺院の建立過程は木塔や金堂がまず築造され、その後中門と回廊が作られて、講堂が最も遅れて作られる<sup>145</sup>。五八八年から建立が始まった飛鳥寺の場合、五九〇年に建立に必要な材料を持ってきて、五九二年に金堂と回廊の工事を始め、五九三年に仏舍利を木塔心礎石に安置する。五九六年に伽藍の大部分を完成させ、僧侶を駐在させて六〇六年(または六〇九)には丈六仏を完成させて金堂に安置する。伽藍中心部の大部分は五九六年に完成しており、この時から高句麗僧慧慈と百濟僧慧聡が駐錫するようになる<sup>146</sup>。

しかし、陵山里寺院の場合、講堂址をはじめとする工房址Ⅰ・Ⅱ、不明建物址Ⅰ・Ⅲがまず建てられ、その後に木塔と金堂、中門、回

廊が建立されたことが明らかになった。これは講堂址を中心にした初期建物址群が木塔址や金堂址を中心にした寺院とは性格が異なる何らかの特殊な目的を遂行していたことを示唆している。ただし、講堂址と木塔址の主流瓦型式である1a式と1b式瓦当がほぼ同じ文様をしていることから、年代差は大きくなかったものと考えられ、初期建物址群と木塔をはじめとする寺院建築物の時期差はさほど大きくなかったと推定される。図三二二はこのような陵山里寺址伽藍中心部の主な殿閣に対する復元鳥瞰図である<sup>147</sup>。

## (二) 初期建物址群の性格

陵山里寺址の伽藍中心部建物の建立に対する絶対年代を把握するうえで最も重要な資料は木塔址地下の心礎石で発見された昌王銘石造舍利龕である。しかし、各建物址の建立順序に対する分析の結果、舍利龕を地下に埋めた五六七年以前にすでに講堂址をはじめとする初期建物址群が機能していたと考えられる。そのため、その初築の上限と性格に関する問題を検討する必要がある<sup>148</sup>。

発掘報告書では「講堂址から南側に約四三メートル離れた場所からは、この沼地状の土層上部から一連の遺物が出土したが、これらの遺物は中国陶磁器片、土器片、各種木製品などがカキや各種の貝殻など自然遺物と共に出土した。このことから寺が建立される以前からこの地域はなんらかの生活空間として利用されていたようである」とし<sup>149</sup>、陵山里寺院の創建以前にすでに人為的な使用痕跡があったことを示している。

陵山里寺址の場合、北高南低の地形で本来低湿地であったために、敷地造成と配水に相当な労力を傾けたが、初期の排水路や最下層遺構からは比較的古い時期の遺物が出土している。その中で青磁貼花人物文樽片や青磁蓋片、黒褐釉陶硯台脚片といった中国青磁片や各種硯片は相対編年が可能であるが、筆者による検討の結果、おおよそ六世紀中半に編年される(図三一六・七)<sup>150</sup>。また、陵山里寺址の最下層から出土した三足土器や蓋杯、器台など土器類に対する検討からも、泗泚遷都以後から六世紀中半にかけての遺物が多数含まれていることが確認された<sup>151</sup>。

このような遺物の出土状況は初期建物址群といかなる関係を持つのだろうか。扶余陵山里寺址の初期建物址群の展開過程を検討する際、

考慮されるべき重要な事件を列挙してみると、五三八年の泗泚遷都と東羅城の築造<sup>152</sup>、五五四年の管山城の戦いにおける聖王の死と陵山里王陵の造営、五七七年の昌王銘石造舍利龕の埋納などを挙げることができる。陵山里寺址最下層で発見された遺物は六世紀中半に陵山里一帯で活動した人々の痕跡と考えられるため、東羅城の築造や王陵の造営、寺院の建立などと関連がある。

しかし、中国青磁片や硯片などはその上限が五三八年段階まで遡らないことを示しており、それを泗泚遷都の問題と結びつけることは難しい。また、これらの遺物が木塔址心礎石の埋め立て年代より若干古いため、仏教寺院の創建問題として断定することも難しい。そうした点から講堂址を中心にした初期建物址群は東羅城や聖王陵の築造、陵山里寺址の初期的形態という観点から把握することがより適切であると考える。

陵山里寺址の中門址南西側と東西側の初期自然排水路からは多数の木簡が出土しており、この問題にアプローチできる余地を残している。ここから出土した木簡は記載内容から仏教や儀礼と関連した木簡、移動を伴った情報伝達関連木簡、記録管理関連木簡などに大きく分類できる<sup>153</sup>。陵山里木簡は出土位置によって廃棄年代や記載内容に若干の違いがあるが、大部分は木塔の心礎石埋め立て以前やその前後に廃棄されたもので、木簡の廃棄時期と出土脈絡、記載内容を総合してみると、五五四年の聖王の死を前後して陵山里一帯で執り行われた各種仏教行事と儀礼、物品の移動、行政行為と関連があると考えられてきた<sup>154</sup>。

筆者のこのような見解に対して、近藤浩一は羅城築造関連木簡説を再度主張している<sup>155</sup>。近藤浩一が集中的に批判した陵山里木簡出土遺構の状況については、第三章第一節で詳細に再検討した。近藤浩一が提唱した羅城築造木簡説の最大の問題は、この一帯に寺院建立以前に瓦を使用した施設が存在したとすれば、そのような水準の施設は単純に羅城築造を目的とした臨時的な施設と見ることは難しいという点である。また、仏教や祭祀儀礼と関連した内容が記載された木簡の出土を羅城築造という問題に限定させることは難しいだろう。

現在まで一一次にわたって調査された陵山里寺址の中心部と周辺部から出土した土器類と瓦類、各種金属工芸品と木製品、中国製遺物などは全て陵山里寺址と不可分の関係にあり、木簡もそのような観点から把握されなければならないだろう。最近、尹善泰は陵山里木簡の中に仏教つまり陵山里寺院を作成主体と考えざるを得ない木簡が存在することを認めている<sup>156</sup>。陵山里出土木簡は東羅城よりは陵山

里寺址、その中でも特に初期建物址群と密接に関連すると言えるだろう。そうした観点から初期建物址群の性格問題は聖王の死や王陵の築造、陵寺としての陵山里寺院の建立過程などと関連させなければならないと考えられる。

講堂址をはじめとする初期建物址は全て退間や庭を備えており、二室、または三室に分けられるという共通点が確認される。したがって、初期建物址群の性格を明確にするためには、この建物の構造を調べる必要がある(図三二二三)。講堂址の場合、東西三七・四メートル、南北一八・〇メートルで伽藍中心部北側の一番高い場所に位置する最も大きな建物で重層に復元される<sup>157</sup>。講堂址の基壇は木塔址や金堂址とは異なり雑石と瓦片を利用して積んでいる。一つの屋根の下に隔壁を置いて構造が異なる二つの部屋が設けられているが(いわゆる一棟二室)、二つの部屋の間には二・二メートルの通路がある。また、主屋の東室は正面三間、側面二間であるが、内部に礎石がない通間構造であり、東・西・北側に壁体があり、南側からのみ内部を見ることができ<sup>158</sup>。西室は東壁中央にかまどを設置し、東壁北側と北壁にかけてオンドル施設が設けられていた。中央には方形の花崗岩が置かれており、その東南側には長方形の石槨形施設と長楕円系施設が確認された。ここからは三ヶ所で二〇三センチ程度の焼土層が発見されたが、火災によるものではなく、長期間火を焚いた結果形成されたものであるという。また、西室の石槨形施設の内部からは図三二二四の木製漆器片が発見されたが<sup>159</sup>、華麗な花文の漆器という点から、ここが非常に位相の高い場所であることを推察できる。

講堂址の東西には翼舎が位置しているが、東側と西側の構造が異なる。工房址Ⅱと呼ばれる西側翼舎は中央に通路型空間があり、二つの部屋に分けられている。南側基壇の前には庭があつて、庭の西端には西排水路に連結した橋が確認される。不明建物址Ⅰと呼ばれる東側翼舎は一つの部屋で構成されており、工房址Ⅱより若干小さい。工房址Ⅱと不明建物址Ⅰともに翼舎と呼ぶことができるが、後者がより辞典的な意味に近く、若干非対称をなしている。

その南側に不明建物址Ⅲと工房址Ⅰが配置されている。工房址Ⅰは、退間があり、三つの部屋で構成されているが、排煙施設と炉施設、排水施設、各種金属品とガラス製品、スラグが出土した。工房址Ⅰの主屋の南室と北室入口では瓦積基壇が確認される<sup>160</sup>。不明建物址

Ⅲの場合、破損が激しいが現存している遺構を見ると、工房址Ⅰと同じ構造であり互いに対称をなしていたものと推定される。その建物

址の東側基壇外郭から一二個程の木柵列が確認されたが、報告者はこれを塀のようなものと考えた。

初期建物址群のうち、講堂址は百済はもちろん高句麗・新羅の古代寺院で確認される一般的な講堂建築とは明確に異なる。このような独特な建物構造は集安東台子遺跡と類似するが、一つの屋根の下に隔壁を施した二個の部屋があることやオンドル施設、用途未詳の大型板石材などが共通して確認される(図三一・二五)。その中で集安東台子遺跡の東側部屋中央にある長方形巨石(あるいは石座)は日常生活や官員の活動とは距離がある。ある研究者はこれを祭祀と関連した神主と類似しており、『三国史記』故国壤王九年(三九二)春三月条に出ている「社稷をたてて宗廟を修理するようにした」という記録を反映するものと見た<sup>161</sup>。したがって、陵山里寺址の講堂址の場合も仏教寺院本来の講堂でなく、神宮や祭堂であるという見解<sup>162</sup>、また、平常時には祖王を祭祀する神廟として、王室の喪葬儀礼時には殯宮として使用したという見解が提起されている<sup>163</sup>。

そのような観点から陵山里古墳群の中下塚が聖王陵に推定されている点<sup>164</sup>に注目する必要がある。陵山里寺院が聖王を追福して聖王陵を守るために創建された功德墳寺だったとの事実は、石造舍利龕銘文を通して類推できる。しかし、建物址の建立過程を分析しながら分かったように五五四年段階から陵山里寺院が願利や陵寺として機能したのではなかった。これまで研究者は五六七年を木塔建立の完成、または寺院建立の完成と見て、それ以前から陵山里寺院が陵寺として機能したと見た。しかし、五六七年は舍利龕を地下に埋めた年であるため、木塔建立が始まったものと限定して考えなければならぬだろう。

陵山里寺院が陵寺として機能した時点は少なくとも五六七年以後からであり、木塔建立以前と以後には建物の規模と機能、性格に違いがあったといえる。そうした点で五六七年以前の講堂址をはじめとする初期建物址群は寺院の付属建物でなく、陵墓祭祀と関連した独立的な施設として設計された可能性がある。その上限は五五四年の聖王の死が重要な基点になるであろうが、共伴遺物の出土状況を見ると、それよりも少し遡る可能性がある。

初期建物址群と古墳との関連性について明らかにするために、百済王室の喪葬儀礼を検討する必要がある。その場合、武寧王陵と艇止山遺跡が注目される。艇止山遺跡は、武寧王陵の殯殿と推定される場所である<sup>165</sup>。武寧王陵は、誌石を通して二七ヶ月の殯期が確認さ



れるが<sup>166</sup>、艇止山遺跡で殯殿関連施設として議論される場所は瓦建物址をはじめとする一・三号大壁建物址である(図三一二六)<sup>167</sup>。その中で瓦建物址は核心的な場所であり、氷盤が置かれていたという。その他にも大型竪穴が確認され、その東側と北側には広い庭が位置する。また、この建物址を中心に多重の木柵列が配置されており、一・三号大壁建物址が品字形をなしながら配置されていた<sup>168</sup>。

武寧王陵と艇止山遺跡の関係は、陵山里古墳群の中下塚と陵山里寺址の初期建物址群との関係に対応するかのように見えることから、その関連性についても少し検討する必要がある。なぜならば、図三一三二と図三一二六を互に対比させると分かるように、艇止山遺跡の瓦建物址は講堂址の主屋に対応し、一号と三号大壁建物址は主屋の左右の翼舎に対応し、二号大壁建物址は不明建物址□と工房址■にそれぞれ対応するものと見ることができると推測される。艇止山遺跡の瓦建物址は陵山里寺址講堂址の主屋の西室と関連づけることができるが<sup>169</sup>、暖房施設が備わっている点から全く異なる施設であった可能性を排除し難い。

講堂址の主屋の東室は前述したように、内部に礎石がない通間構造であり、東・西・北側には壁体があり、南側からのみ内部を見ることができると推測されたという<sup>170</sup>。このような施設は艇止山遺跡では確認されない全く新しいものである。特に南側からのみ内部を見ることができると推測される建物構造や東室の東西で発見された大型竪穴から厚い灰層が発見されている事実から祭祀との関連が推測される。

陵山里寺址の講堂址を中心にした初期建物址群は艇止山遺跡と一定の共通性を持ちながらも差別性も有している。しかし、講堂址を艇止山遺跡の殯殿と同じ施設であると確定するためには、いくつの問題が先決されなければならない。艇止山遺跡の場合、瓦建物址を殯殿と推論するに至った決定的な契機は多数の竪穴遺構を氷庫と認識した時からであった。しかし、陵山里寺址では氷庫関連遺構は全く発見されていない。主屋の西室にオンドル施設がある点も留意する必要がある。この建物址を殯殿のようなものと見るならば、暖房に伴う遺体の腐敗をどのように説明するのかが問題となる。また、『周書』や『北史』高句麗伝に見られる殯は埋葬時まで遺体を小屋に安置したり仮埋葬する臨時施設としての性格が強いが、この場合、大型の重層瓦建物である。したがって、講堂址をはじめとする初期建物址群は艇止山遺跡と似た脈絡の祭祀関連施設であるが、これを殯殿であると断定することは難しい。

一方、南朝では皇帝が生前にあらかじめ寿陵を準備し、陵の付属建物として寝殿を建てた。南朝では寝殿を寝廟と呼ぶ場合が多かった

が、寢廟以外に帝陵にはこれを管理する人々が泊まる吏舎などの建築物があり、仏教が盛んになると陵墓のそばに仏寺を建てる場合もある<sup>171</sup>。つまり、『建康実録』には次のような記録がある。

史料三一…(五四四年)三月甲午、幸蘭陵。庚子闕建陵、陵上有紫雲覆、久而乃散。帝望陵流涕、所沾草木變色、陵旁先有枯泉、是時流水香潔。辛丑、帝哭於修陵。又於皇基寺設法會、賜蘭陵老少位各一階、所經縣邑、放今年租調。因賦還舊鄉詩。(『建康實録』

卷一七 高祖武皇帝 大同一〇年条)<sup>172</sup>

『南史』卷七武帝紀中にもこれと類似する内容が伝わっているが、建陵は父蕭順之文帝、修陵は武帝自身の陵と推定されている<sup>173</sup>。五四四年三月、武帝は自身が生まれた蘭陵に行つて、その一六日には父の陵である建陵に拝し、翌日一七日には自身の墳墓である修陵に赴いた。そして、一日にはその近くに建立された皇基寺で法会を開いた<sup>174</sup>。『梁書』卷五〇任孝恭伝には彼が武帝の命によつて「建陵寺刹下銘」を作つたという記録が残っているが、皇基寺が建陵寺とも呼ばれた可能性があるという<sup>175</sup>。そうした点から皇基寺は建陵寺として建陵の陵寺であつたと考えられ、少なくとも五四四年段階には維持されていたといえる。梁武帝は亡くなつた両親のために大愛敬寺と大智度寺を建立しているが、建陵のそばには別途に皇基寺を建立していたのである。

古代東アジアにおいて陵墓と寺院が結びついた最も多くの資料が残っているのは北魏方山永固陵と思遠仏寺である。方山には太和年間に靈泉宮・思遠仏寺・永固陵など陵園が造営されたが、山西省大同市北方には現在も北魏文明皇后馮氏の墓である永固陵と孝文帝の寿陵が残っている。孝文帝の寿陵は文明太后の墓の東北一里にあるが、埋葬されない虚宮として万年堂と呼ばれた。寿陵の南側には永固堂、その西側には思遠靈宮、さらにその西側には齋堂、南側には石闕があり、その下の断崖には御路が連結しており、下に靈泉宮池が見えるという(図三二二七)。

図三二二七のA地点を馮氏墓である永固陵と見ることに異見がない。B地点の場合、一部遺物が散布しているという理由から永固堂

に比定する研究があるが、ほとんどの研究者はC地点を永固堂に比定している。ただし、C地点の白仏台遺跡とD地点の草堂山遺跡を永固堂と思遠靈図にそれぞれ比定するのか、そうでなければC・D地点にそれぞれ永固堂と思遠靈図を組み合わせて理解するのかという違いがある。D地点である草堂山遺跡の場合、一九八一年の発掘結果が最近公表され、思遠仏寺遺跡に該当するということを確認に推定できるとなった<sup>176</sup>。なぜならば、ここからは北魏時期の塑造像と文様磚、正方形木塔の痕跡と塔心実体などが確認されたためである。しかし、最近C地点の白仏台遺跡とD地点の草堂山遺跡の二ヶ所とも思遠仏寺と見なければならぬという見解が提起された<sup>177</sup>。現段階で思遠寺の領域がC地点とD地点を包括するものなのか、D地点にのみ限定されるのか判断することは難しいが、C・D地点とも寺院領域であると確定するためには、二地点で確認された遺構や遺物が果たして一つの寺院内部でいかなる配置をなしていたのかについても検討する必要があるだろう<sup>178</sup>。いずれにせよ、方山一帯では思遠仏寺という寺院がまず建立された後、寿陵である永固陵が作られ、その後永固陵の清廟である永固堂が作られていることは陵墓と寺院の結合が進行する過程を物語る事例であると言えよう。

高句麗定陵寺の場合、伝東明王陵から南側に一二〇メートルほど離れた所に位置し、「定陵」、「陵寺」などの銘文がある土器片から見て、伝東明王陵の陵寺と推定されている(図三二二八)<sup>179</sup>。伝東明王陵の墓主については移葬した東明王陵<sup>180</sup>、長寿王陵<sup>181</sup>、あるいは政治・社会的権威の象徴物や墟墓である可能性<sup>182</sup>など様々な見解が提起されてきた。しかし、古墳の築造時期は立地や背後の封土墳との分布関係、構造形態、壁画の内容等を通してみると、四二七年の平壤遷都以後である五世紀後半代の古墳であることは明らかである<sup>183</sup>。定陵寺址と伝東明王陵の前後問題はこれまで公表された資料だけでは判断し難いが、少なくとも六世紀前半以前には陵墓と寺院が結合した景観が演出されていたことは明らかであるといえよう<sup>184</sup>。

このように中国南北朝時代と高句麗では陵墓付近に陵の修理や管理、各種祭祀を執り行ううえで必要な建物があり、それが仏教寺院と結合した事例が確認される。百済の場合、陵山里寺址一帯でそのような様相が同じように展開したのではないかと思われる。

中国の文献によると、王陵付近の祭祀関連施設として両側に翼舎を備えた建物は「廟」と呼ばれた。中国の陵寝制度において寝と廟は位置と機能、建物構造が異なるが、『爾雅』「釈宮」では「室の東側と西側に廂(副室)があるものを廟といい、東側と西側に廂がなくて

室のみあるものを寝という」としている<sup>185</sup>。廟に副室があつたことは廟が朝を真似て建築されたためであるが、朝にある東西の廂は臣下が君主の政務処理を待ったり朝見を準備する場所であつた<sup>186</sup>。

『爾雅』「積宮」でいう廟は東西の翼舎を持つ講堂址の全体構造と符合し、南側のみ開放された講堂址の主屋東室の構造とも連結する。講堂址の東西にある不明建物址<sup>1</sup>と工房址<sup>2</sup>は明らかに翼廊でなく翼舎建物であるためである。ただ、図三二二三から分かるように東側翼舎は一室であるのに対し、西側翼舎は二室で構成されており、講堂址と接する位置もまた正確な左右対称をなしていない。したがって、このような建物配置と構造を廟であると断定することは難しく、軍守里寺址の東北基壇と西北基壇として知られている遺構と類似する配置をなしていることから陵山里寺址特有の独特な伽藍配置であると断定することには躊躇する。さらにそれを宗廟や仇台廟<sup>187</sup>あるいは神宮<sup>188</sup>のうち、どれであると推定することは現時点においては無理であると考える。

これについて筆者は講堂址をはじめとする初期建物址群の建物構造と配置、その関連内容はもちろん各種祭祀関連記録が共に記されている木簡の記載事項、初期建物址群は結果的に五六七年以後に仏教寺院として機能することになった点などを総合的に考慮して、陵山里古墳群、特に聖王陵の祠廟あるいは祠堂施設と定義したい。それを宗廟や仇台廟のような国家祭祀施設と断定し難い理由は、そのような国家祭祀施設が果たして王室勢力によって仏教寺院に変えることができたのが疑問であり、陵山里出土木簡の記載内容と解釈を考慮する必要があるためである。初期建物址群をはじめとする木塔址と金堂址の配置は仏教寺院、特に陵寺や願刹の建立という巨視的な基本計画の中でその必要性と重要度によって順次建立されたものと理解しなければならぬだろう。

一方、陵山里一帯で聖王陵の祠廟施設が建立された背景については、これまで主に高句麗の影響が強調されてきた。図三二二五の東台子遺跡や図三二一八の定陵寺で確認される独特な建物構造と板石造の二重屈折型オンドル施設、煙筒形土器をはじめとして扶余地域で発見される高句麗系土器が重要な根拠となる<sup>189</sup>。しかし、陵墓と仏教寺院の結合様相は高句麗のみならず北魏と梁でも確認される現象である。また、第二章第一節や第六章第一節で検討するように泗泚期の仏教寺院には高句麗と南朝の影響が共に確認されるため、南朝についても注意が必要であると考える。

そこで筆者は、講礼博士陸詡の活動や梁武帝の影響も高句麗の影響と共に注目する必要があると考える。陸詡は崔靈恩から『三礼義宗』を習い、五四一年から五五二年の間に百済で活動した人物である<sup>190</sup>。百済では泗泚遷都を前後して梁から祀典をはじめとする各種制度を受容したが、周礼の理念に立脚した政治秩序の確立には陸詡の影響が大きかったと考えられる<sup>191</sup>。陸詡は遷都以後一〇余年間、講礼博士として活動しながら国王と群臣に多くの影響を与え、祭儀体系はもちろん具体的な祭場の選定や儀礼の順序にも関与したであろう。そのような脈絡から陵山里一帯で熊津期とは異なる祠廟施設が設立された背景には陸詡の影響があったものと考えられる<sup>192</sup>。

梁の武帝の影響はより直接的なものとみられる。彼は両親に対する孝道を表現するため大愛敬寺を創建したが、愛敬とは『孝経』の核心的語句である。『孝経』に拠りながら明孝道と建寺、講読が共に行われるのは梁で新たに展開した孝思想の姿であるという<sup>193</sup>。陵山里寺址一帯で儒教的な喪葬礼と関連した初期施設が寺院である願利や陵寺に転換できた背景には梁から受容された孝思想と儒仏の思想的融合という土台があったのであろう<sup>194</sup>。

梁武帝の影響は威徳王の捨身関連発言からも見出すことができる。威徳王は、戦死した聖王の冥福を祈るため出家修道を宣言するが、諸臣の引き止めによって出家をあきらめ王位に就いた。威徳王が捨身の発言を通して所期の政治的意図を達成しようとした背景には梁の武帝の捨身関連行跡が大きく参考となったであろう。

威徳王は自身が出家修道するのをあきらめるかわりに一〇〇人を出家させようという臣下たちの建議を受け入れる。そこで臣下たちは相談して一〇〇人を出家させて、多くの幡蓋を作り、様々な功德を積んだという。これはまさに父王の追福をするための国家的な事業の展開といえる<sup>195</sup>。この時、出家した度僧一〇〇人は威徳王の失墜した王権を回復する基盤になったであろうし、結果的に陵山里寺院創建の主役となっただろう<sup>196</sup>。その時点が五五五年八月のことであり、五六七年の舍利龕を埋めたこととは一三年の時差がある。そしてまさにその頃、講堂址を中心にした初期建物址群が様々な役割を担っていたと考えられる。それは、聖王陵の築造や聖王を追福するための各種祭祀を執り行った祠廟のようなものであったと推定される<sup>197</sup>。このような威徳王の行跡は、高句麗をはじめとして梁武帝や陸詡の

影響と考えられる。ただ、泗泚遷都以後、百濟の祀典体制に影響を及ぼした陸詔の場合、その師である崔靈銀が元々、北朝で官職についた後、天監一三年(五一四)に梁にやってきた人物であるという点を考慮すると<sup>198</sup>、王陵の近隣に仏寺を築造することが、ある一国の系統や影響というよりは、当時の一つの思潮であった可能性も考慮できるであろう。

### (三) 寺院の変遷過程とその意義

陵山里寺址の講堂址の場合、建物構造のみならず建立の順序において独特な位置を占めていたため、一般的な仏教寺院と異なる特殊な目的を担ったものと考えられる。そして、講堂址をはじめとする初期建物址群は五五四年に非業の最期を遂げた聖王を追福するための祭祀を執り行った祠廟のようなものと推定される。このように講堂址を中心にした初期建物址群が早くから建立された背景には、聖王の非正常的な死という歴史的な事件が介在している。次に、陵山里一帯で聖王陵が築造された経緯と伽藍中心部建物の整備過程および寺院建立の意義についてみていく。

陵山里寺址最下層から出土した中国製青磁片や硯片、土器片などの上限は六世紀中半頃と考えられる。しかし、六世紀中半という年代は極めて相対的なものであり、五五四年という絶対年代といかなる関係を有するのか検討する必要がある。陵山里古墳群の中下塚の石室構造や出土遺物など考古資料からは、それが聖王の生前に作られたのか、死後に作られたのかは確定し難い。

ただ、図三一一九を見ると、陵山里古墳群の周辺に陵山里寺址だけでなく防御施設である東羅城と羅城の東門、三山の一つである呉山などが配置されており、それが非常に意図的なものであると考えられる。陵山里一帯は中国や日本の都城制に見られる羅城門と類似した景観が演出されるなど、非常に重要な地域であったといえる<sup>199</sup>。そうした点から五三八年の遷都時からそのような配置計画案が準備されていた可能性がある。つまり、陵山里一帯は聖王の寿陵の有無と関係がなく、王室の埋葬地として聖王の生前からすでに指定されていた可能性があるのである<sup>200</sup>。

五五四年七月の聖王の死は非常に異例的な事件であり、その遺体もまた非常に特殊な状況に置かれていた。『日本書紀』欽明紀一五年

冬一二月条には管山城の戦いの展開過程と聖王が戦死する過程が詳細に描写しているが、聖王の遺体処理に関する次の内容が注目される。

史料三一二…(前略)苦都斬首而殺。掘坎而埋。一本云、新羅留理明王頭骨、而以礼送余骨於百濟。今新羅王埋明王骨於北序階下、名此序曰都堂。(『日本書紀』卷一九 欽明天皇一五年冬一二月条)

『日本書紀』には飼馬奴苦都が聖王を斬首した後、その死体を堅穴に埋めたという説と頭蓋骨は新羅の慶州に送って、他の骨は百濟に送ったという説を共に記録している。ところで、昌王銘石造舎利龕の銘文を通して陵山里古墳群に聖王の墓があり、中下塚がそれに該当するものと推定されることから、後者の可能性がより高い。前者の場合であっても陵山里一帯に仮墓が作られたと見なければならぬだろう。

聖王の亡骸はいかなる過程を経て中下塚に葬られることになったのであろうか。百濟の三年服喪制度は中国側の記録だけでなく、武寧王陵の誌石を通して、二七ヶ月三年喪であることが証明された<sup>201</sup>。もちろんこの場合も、武寧王陵が生前に作られた寿陵であったのかという問題が残っているが<sup>202</sup>、聖王こそ武寧王陵の最終的な完成者である点に注目すると、威徳王の場合も三年喪の伝統を継承したものと考えられる。もし、聖王が五五四年七月に正常な死を迎えたと仮定すれば、彼は五五六年一〇月前後には中下塚に本埋葬されたであろう。しかし、管山城の戦いの過程で派生した非正常的な状況でいつ、いかなる手続きで国葬が執り行われたのかを推定することはほぼ不可能である<sup>203</sup>。

ただ、聖王が亡くなった後の葬儀の手続きと関連付けることができる事件が五五五年八月の威徳王の出家発言ではないかと考える。威徳王は「奉為考王」を名分に出家修道すると言い、その結果一〇〇人の道僧と幡蓋を作るなど様々な功德を積んだ。この時奉為が持つ意味や孝思想が仏教と結合する様相についてはすでに十分な研究があり<sup>204</sup>、幡蓋と功德の具体的な様子に対する推定もある<sup>205</sup>。

ところで、この事件の裏面には五五五年八月頃にはすでに聖王の冥福を祈るために出家修道する条件が成熟していたという事実が含ま

れている。その時点ですでに聖王の遺骸が一定の施設に奉られていた可能性を類推できるのである。そうした点で講堂址をはじめとする初期建物址群を殯殿関連施設とすることは論理的に無理があり、筆者のように王陵と関連した祠廟施設と理解することが妥当である。

陵山里寺院伽藍の変遷と整備過程は大きく三段階に区分できる(図三二〇)。一段階には講堂址と東西翼舎、不明建物址Ⅱ、工房址Ⅰ以外に木塔址西側の西側暗渠と中門址東南側と南西側の初期自然排水路、柵状遺構、西排水路付近で発見された木橋、窯址などが機能していた。講堂址をはじめとする初期建物址群は南側一帯が開放している構造を見せるが、講堂址前庭は大きな広場のような形態であったと考えられる。このような広場は祠廟施設と推定される講堂址とともに一定の祭祀儀式を執り行うために考慮されたものと考えられる。

二段階には五六七年の木塔の礎石埋め立てを基点に木塔と金堂など寺院連施設が建てられた。この段階には木塔と金堂、中門、回廊などが順に建立されて伽藍中心部建物が完成した。その過程で北側と東側暗渠、東西大排水路をはじめとして中門址南側一帯に対する大々的な整備作業が断行される。この段階は講堂址南側の大きい広場に木塔をはじめ金堂などの中心建物が建てられるとともに陵山里寺址が本格的に寺院として機能することになる。そして、昌王銘石造舍利龕を通して、五六七年がそのような工事開始の分岐点となり、その寺院は王陵の陵寺であったことを推定できる。

三段階には伽藍周辺部、特に講堂址北側と西回廊址西側一帯に対する開発が行われた。陵山里寺址の九〇次調査では数基の建物址と水路、作業場および廃棄場、井戸址などが発見された。出土遺物では1b型式と11型式の瓦と素文瓦当、垂木瓦、「巳毛」銘をはじめとする各種印刻瓦、多量の平瓦と丸瓦、灯皿と一緒に金銅製鉸具、塑造像片、器台片、硯片、鏃と鉄スラグ、印花文土器片などが出土した<sup>206</sup>。伽藍周辺部の建物址では多量の平瓦と丸瓦が出土したが、瓦当の出土量は非常に少なく、一部は基壇土内部から発見された。そうした点から伽藍周辺部の瓦葺き建物は瓦当で装飾しなかったものと見られる。

伽藍周辺部の施設は寺院で生活した僧侶の生活空間や事務を担当した付属施設と推定される。共伴遺物を参考にすると六世紀後半〜七世紀前半頃から滅亡期までと考えられる<sup>207</sup>。この時期には出土瓦当に対する分析で明らかにしたように、伽藍中心部の主要殿閣の大々的な補修が行われた<sup>208</sup>。また、西回廊址外郭に小型建物址が付加されたり工房址Ⅰが工房として機能するなど伽藍中心部各建物址の性



格や機能が再度変わったものと考えられる<sup>209</sup>。

陵山里寺址の初期建物址群が五六七年の木塔建立を基点に本格的な寺院として機能するようになった背景と意味についてみていきたい。陵山里古墳群の祠廟といえる初期建物址群は五六七年以後になると、寺院の付属建物として機能することになる。講堂址の場合、初期建物址群の核心施設となったにもかかわらず、木塔建立以後には泗泚期の一塔一金堂式伽藍配置で確認される講堂址と同じ配置を見せる。つまり、三段階以前までは通間でない隔壁構造(所謂一棟二室建物)と左右翼舎型式を維持していた。そうした点で初期建物址群は木塔建立以後にも一定期間、それまでの祭祀機能を引き続き遂行したものと推定される。これは陵山里寺院の陵寺としての性格をより一層明らかに示している。

都城の運営と関連して、五六七年に祠廟が仏教寺院へと性格が変化したことは、羅城内部に限定された貴族の居住地が外郭に拡大する時点と結びついている。筆者は扶余官北里道路遺跡、双北里ヒョンネドウル道路遺跡、陵山里・佳塔里道路遺跡など、これまで扶余地域で発見された道路遺跡の大部分が、六世紀中後半以後に整備されたものと考えている。そうした点から五六七年は都城内外の道路の開設と整備といった大規模土木工事を開始した年ではなかったかと思われる<sup>210</sup>。

五六七年は威徳王が対内的な体制整備と北朝との交渉を再開するなど王権強化の作業が本格化した年と評価される<sup>211</sup>。ところで、五六七年の舍利供養の主体は妹兄公主と記録されている。妹兄公主は威徳王の「妹」というように解釈される<sup>212</sup>。これを見ると、この段階には王と王室、貴族勢力の間で勢力均衡が維持されていたことを物語るものと推定される。五七七年に製作された王興寺址木塔址で出土した舍利函には「昌王」が舍利供養の主体と明示されたことと対比されるためである。したがって、五六七年の舍利龕の埋納と木塔の建立は「舍利」が持つ象徴性を積極的に活用して陵山里古墳群と陵山里寺院の神聖性を高める一方、貴族との勢力均衡の中で泗泚都城の大規模的な整備事業を対内外に宣言する記念碑的な事件であったといえよう。

このように陵山里寺院の整備と変遷過程は王陵の祭祀と関連した祠廟施設が仏教寺院に置き換わる過程をよく示している。第三章第一節で検討した陵山里出土木簡はこれをさらに補完して証明する資料といえる。

二九五号男根形木簡の場合、日本の道饗祭と道祖神と関連させたり<sup>213</sup>、土着信仰や道教思想と関連づけられる場合がある<sup>214</sup>。二九五号や二〇二一号木簡は呪噤師の活動と関連づけて理解する見解がある<sup>215</sup>。呪噤師は「祓除爲厲者」といい呪文と祈祷を通して病人を治療する人で、五五四年に非業の戦死を遂げた聖王とその後の威徳王の行跡と関連があると考えられる。このような木簡が三〇四号釈迦誕辰日連木簡や三一三号寺院名称が見られる木簡と共に出土している。このような現象は五六七年を寺院の完成時点と把握した既存の研究では理解することが難しかった部分である。しかし、初期建物址群を筆者のように把握すると、木塔建立前後に聖王陵に対する祭祀と仏教行事が互いに緊密に連結していたことを物語る資料と評価できる。

三〇五号木簡の場合、宿世歌が記録した書簡<sup>216</sup>や婚書と関連したもの<sup>217</sup>と議論されてきた。ところで、趙海淑は三〇五号木簡が葬礼の手続きを歌にのせて厳粛に準備された一連の儀式を行うことで亡者の魂を慰勞して、礼と敬意をつくして拝礼しながら話者の望みを知らせているものであるとした<sup>218</sup>。特に是非相問の「是非」は正確と錯誤で『礼記』に由来し、儀礼で是非を明確にすること、「相問」は「互いに送る礼儀(互相贈送)」で封墳を作った後に退く儀礼の一つの方法であると把握している<sup>219</sup>。

このような解釈は陵山里寺址の初期建物址群を陵山里古墳群の祠廟施設と把握した筆者の見解と符合する。王陵築造と関連した祠廟施設が運営されたという筆者の見解が認められるならば、三〇五号木簡の宿世結業歌は単純な叙情詩というよりは王陵築造と関連した葬儀の手続きを明らかにし、それにとりもなう儀式を遂行しながら礼を尽くして父王を哀悼する具体的な状況に基づいた記録としての性格も共に持っているといえるだろう<sup>220</sup>。今後、陵山里出土木簡の記載内容に関する分析を通して陵山里寺址の初期建物址群の機能と運営に関してより具体的にアプローチできるだろう。

## まとめ

以上で扶余陵山里寺址の中門址南側から出土した木簡や出土瓦当の分析を通して伽藍中心部の変遷過程を把握し、ここに本来祠廟のような施設があったが、五六七年木塔が建立されたことを契機に陵寺へと性格が変化したことを述べてきた。

第一節ではここから出土した木簡の性格について検討した。中門址南側から多量に発見された木簡は五五四年の管山城の戦いで聖王が戦死した事件以後から五六七年に木塔が建立された段階に主に製作・使用・廃棄されたが、一部の木簡は六世紀後半まで製作・使用された後、廃棄されたことを確認した。ここから出土した木簡の大部分が五六七年の木塔建立を前後した時期に廃棄された事実はこれらの木簡が陵山里寺址の初期講堂址にあったなんらかの施設と密接に関連することを物語っている。また、木簡に記録された内容が仏教や死者の儀礼と関連したこと、物品の生産地と移動、帳簿のようなものが網羅されている点を考慮すると、陵山里出土木簡は陵山里にあつた寺院の造営や運営過程で派生したものといえる。八次調査で発見された二〇〇二一―一四号四面木簡は陵山里寺院の建立に動員された人々に食米を支給した内訳を記録した中間帳簿のようなものであるが、三〇〇号、三〇六号、三一〇号木簡などを総合してみると、陵山里寺址一帯には米といった物品の移動と関連した倉庫施設や行政組織が存在したと推定される。

第二節と第三節では陵山里寺址から出土した瓦当の型式分類と相對編年、建物址別の分布様相に注目して伽藍中心部建物の建立順序を把握した。この寺址からは五〇二点の瓦当が出土しており、型式分類の結果、一三種類の蓮華文瓦当と二種類の巴文瓦当、一種類の素文瓦当が確認された。瓦当の型式分類を通して、1型式と3・4・9型式を創建期瓦当に設定し、特に1a型式が最も古い段階に該当すると見た。この寺院では1a型式が生産される初期段階には一窯址―一寺院型であつたものが、次第に1b式〜1e式瓦当が生産され、3・4・9型式が生産・供給された段階には複数窯址―一寺院型に変化したものと把握した。また時期的に新しく、少量出土する瓦当は補修用瓦当と推定した。5型式は金堂址、6型式は木塔址、7型式は講堂址から集中的に出土することから、これらの建物を補修するために特別に製作・供給された瓦当であると把握した。

以後、各型式別瓦当の建物址別の分布様相とともに暗渠など排水施設の築造過程、建物址の構造、木簡などの共存遺物などを総合的に考慮し、伽藍中心部の建物の建立順序を把握した。陵山里寺址の伽藍中心部は講堂址とその付属建物である不明建物址Ⅰ、工房址Ⅱ、そして不明建物址Ⅲ、工房址Ⅰなどがまず建立され、木塔址と金堂址、中門址、回廊址の順に建立されたものと考えられる。講堂址を中心にした初期建物址群が木塔址や金堂址より先に建立された事実は、この建物址が仏教寺院とは異なつた何らかの特殊な目的を有していた

ことを示唆する。

陵山里寺院の創建時期についてこれまで昌王銘石造舎利龕の埋納年代である五六七年を完工年代と理解する傾向があった。しかし、敷地造成や初期排水施設の整備と関連する最下層遺構から中国製青磁片と硯片、土器片などが出土している。これらの遺物は五六七年より若干古い五五〇年前後に編年される。したがって、初期建物址群は木塔建立以前から機能しながら聖王陵の築造といった問題とさらに関連していると言える。初期建物址群は全て退間や庭を備えており、二室、または三室に分けられているが、講堂址の場合、一つの屋根の下に二つの部屋が作られたいわゆる一棟二室建物で、東西に翼舎がある独特な構造をなしている。講堂址のこのような建物構造は集安東台子遺跡と類似するもので、寺院本来の講堂でなく祭祀関連施設であったことを示している。

中国では皇帝陵を築造した後、その付属施設として寢殿を作ったが、仏教が盛んであった梁や北魏では陵墓のそばに仏教寺院を建立する。高句麗の場合も伝東明王陵と定陵寺の関係で陵墓と寺院が結合した事例を確認できる。百濟ではこのような展開様相が陵山里古墳群と陵山里寺址の関係で確認される。陵山里寺址の初期建物址群を宗廟や始祖廟、神宮など特定の国家祭祀施設と断定することは難しいが、建物構造と配置、出土木簡をはじめとする共伴遺物との関連性、五六七年以後の展開様相などを考慮すると、陵山里古墳群、特に聖王陵の築造や聖王を追福するための各種祭祀を執り行った祠廟あるいは祠堂施設と推定される。

五五四年の管山城の戦いにおける聖王の死は非常に突然のことで異例的な事件だった。しかし、計画的な泗泚遷都過程と陵山里一帯の重要遺跡の配置状況などを考慮すると、王室の埋葬地はすでに指定されていた可能性があり、そうした点から初期建物址の上限もまた、五五四年以前まで遡る余地がある。陵山里寺址は図三二二〇のように大きく三段階に変化したものと考えられる。一段階は五五〇年代から五六七年の木塔建立以前までに講堂址をはじめとする初期建物址群が王陵の祠廟として機能した段階である。二段階は五六七年の木塔の礎石埋め立てを基点に木塔と金堂など寺院関連施設が建てられた時期で、伽藍中心部の建物が完成する。その過程で外郭の排水路と中門址南側一帯に対する大々的な整備作業が断行された。三段階は六世紀後半〜七世紀前半から滅亡期までに講堂址北側と西回廊址西側一帯に対する開発と整備が行われた。この段階は工房址<sup>1</sup>が工房として機能するなど伽藍中心部の各建物址の機能が変化したものと考え

られる。また、出土瓦当に対する分析で明らかにしたように、伽藍中心部の主な殿閣の補修が行われた。

講堂址を中心にした初期建物址群は寺院成立以後にも引き続き伽藍の付属施設として機能した。これは寺院建立以後にも、それまでの陵墓に対する祭祀機能を持ち続けていたことを示唆し、陵山里寺院の陵寺としての性格をさらに鮮明に見せる。五六七年は威徳王が対内的な体制整備を基に北朝との交渉を再開した時点であり、羅城内部に限定された貴族居住地の拡大とともに道路整備など泗泚都城の大規模的な土木事業が始まった年と評価される。五六七年の舍利供養と木塔建立は「舍利」が持つ象徴性を活用して陵山里一帯の神聖性を高める記念碑的な事件であった。このように陵山里寺院の整備と変遷過程は王陵の祭祀と関連した祠廟施設が寺院である陵寺に変化していく過程をよく示している。

<sup>1</sup> 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(二〇〇〇年)。

金鍾萬「扶余陵山里寺址に対する小考」(『新羅文化』一七・一八合集、二〇〇〇年)。

申光燮「百済泗泚時代陵寺研究」(中央大史学科博士学位論文、二〇〇六年)。

国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址六〇八次発掘調査報告書』(二〇〇七年)。

国立扶余文化財研究所『陵寺―扶余陵山里寺址一〇次発掘調査報告書』(二〇〇八年)。

韓国伝統文化学校『扶余陵山里寺址第九次発掘調査報告書』(二〇一〇年)。

<sup>2</sup> 金寿泰「百済威徳王代扶余陵山里寺院の創建」(『百済文化』二七、一九九八年)。

金相鉉「百済威徳王の父王のための追福と夢殿観音」(『韓国古代史研究』一五、一九九九年)。

<sup>3</sup> 朴仲煥「扶余陵山里発掘木簡予報」(『韓国古代史研究』二八、二〇〇二年)。

近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡の研究」(『百済研究』三九、二〇〇四年)。

尹善泰「扶余陵山里出土百済木簡の再検討」(『東国史学』四〇、二〇〇四年)。

尹善泰「百済泗泚都城と岬夷木簡からみた泗泚都城の内と外」(『東亞考古論壇』二、二〇〇六年)・『韓国出土木簡の世界』、アジア地域文化学叢書四、雄山閣、二〇〇七年)。

尹善泰『木簡が聞かせてくれる百済物語り』(周留城、二〇〇七年)。

近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡再論」(『韓国古代史研究』四九、二〇〇八年)。

4 本稿で述べる「伽藍中心部」は回廊で囲まれた木塔と金堂、講堂、中門など寺院の中心施設を指す。陵山里出土木簡の場合、伽藍中心部南側の低湿地から大部分が出土しているが、木簡と共伴した遺物の大部分が伽藍中心部出土品と類似あるいは関連している。したがって、木簡の出土脈絡と出土遺跡の性格を把握するためには、伽藍中心部の変遷過程を理解することが必須である。

5 金鍾萬「扶余陵山里寺址出土瓦当文様の形式と年代観」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』四、二〇〇〇年)。

6 本稿では陵山里「寺址」の建立や整備という表現が問題があるから、陵山里一帯にあった廢寺址という意味で「陵山里寺院」や「陵山里寺址」という用語を併用した。

7 日本の古代史研究においては陵寺の誕生を平安時代に文徳天皇が父の仁明天皇を追福するため建てた嘉祥寺から求めている(大江篤「天曆期の御願寺―『新儀式』の記載のもつ意味」(『人文論究』三三―四、関西学院大学人文学会、一九八六年)、西山良平「陵寺の誕生―嘉祥寺再考」(『日本国家の史的特質(古代・中世)』、大山喬平教授退官記念会、一九九七年)。しかし、奈良時代以前にも「墓寺」が存在した(和田萃「飛鳥・奈良時代喪葬儀礼」(『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上、塙書房、一九九五)、伊達宗泰「古墳・寺・氏族」(『末永先生古稀記念古代学論叢』、一九六七年)・森浩一編『論集終末期古墳』(塙書房、一九七三年に再収録)。本稿では日本の概念とは異なり、陵墓と結合した寺院という意味で「陵寺」という用語を使用したことを明らかにしておく。

8 朴仲煥「扶余陵山里寺址発掘調査概要―二〇〇〇年〜二〇〇一年調査内容」(『東垣学術論文集』四、二〇〇一年)。

朴敬道「扶余陵山里寺址八次発掘調査概要」(『東垣学術論文集』五、二〇〇二年)。

- 国立扶余博物館『百済の文字』（ハイセンス、二〇〇二年）。
- 国立昌原文化財研究所『韓国の古代木簡』（芸脈出版社、二〇〇四年）。
- 国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址六ヶ八次発掘調査報告書』（前掲書）。
- 国立扶余博物館『百済木簡』（学研文化社、二〇〇八年）。
- 国立扶余博物館『木に残された暗号、木簡』（芸脈出版社、二〇〇九年）。
- 早稲田大学朝鮮文化研究所・国立伽倻文化財研究所『日韓共同研究資料集咸安城山城木簡』（雄山閣、二〇〇九年）。
- <sup>10</sup> 朴仲煥「扶余陵山里発掘木簡予報」（前掲誌）。
- <sup>11</sup> 国立扶余博物館「第八次扶余陵山里寺址現場説明会資料」（二〇〇二年）。
- <sup>12</sup> 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡の研究」（『百済研究』三九、二〇〇四年）。
- 近藤浩一「扶余陵山里出土木簡と泗泚都城関連施設」（『東アジアの古代文化』一二五、二〇〇五年）。
- <sup>13</sup> 尹善泰「扶余陵山里出土百済木簡の再検討」（『東国史学』四〇、二〇〇四年）。
- <sup>14</sup> 本稿で使用した木簡の一連番号は国立昌原文化財研究所から発行された『韓国の古代木簡』（二〇〇四年）に基づいている。ただし、当時紹介されていない資料は発掘年度によって表三一～のよう<sup>15</sup>に整理した。
- <sup>15</sup> 尹善泰「百済泗泚都城と岬夷」（前掲誌）。
- 尹善泰「泗泚都城の境界と儀礼」『木簡が聞かせてくれる百済物語り』（前掲書）。
- <sup>16</sup> 李星培「百済書芸と木簡の書風」（『百済研究』四〇、二〇〇四年）。
- <sup>17</sup> 平川南「百済と古代日本における道の祭祀」（『百済泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五）。
- 平川南「道祖神信仰の源流」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一三三、二〇〇六年）。
- <sup>18</sup> 金永旭「百済史読について」（『口訣研究』一一、二〇〇三年）。

<sup>1</sup> 崔鉉植「百濟撰述文献としての『大乘四論玄義記』」（『韓国史研究』一三六、二〇〇七年）。

<sup>2</sup> 金英心「百濟の地方統治に関するいくつかの再検討」（『韓国古代史研究』四八、二〇〇七年）。

<sup>2</sup> <sup>1</sup> 追加された二点は国立扶余博物館の二〇〇七年発掘報告書の図面五三二一（図版一四一一）と図面五三二二（図版一四一二）である。一方、報告書では図面五四一二（図版一四一二）、図面五四一三（図版一四一三）以外に一点の削屑がさらにあると報告した。しかし、筆者は一点の削屑の場合、図版一四一四に提示した墨痕がある六点のみを算定した。共に提示された削屑の場合、墨痕が確認されない残片は保存処理や保存過程で破片に変形した可能性が高いためである。また、出土当時の発掘写真を参照すると、図面五三二一は図面五四一二、五四一二と同じ場所から出土したため、これらの木簡片は同一木簡から出た削屑であると考えられる。

<sup>2</sup> <sup>2</sup> 陵山里木簡と関連する報告書と図録は次のものが参考となる。また、ここでは筆者が把握したものを以外にも七次調査資料の中で木簡四点、削屑四件（三件二点は破片、一件は一二五点）が追加報告され、木簡三一点、削屑一三七点の計一六八点が出土している。

国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址六〇八次発掘調査報告書』（前掲書）。

国立扶余博物館『百濟木簡』（学研文化社、二〇〇八年）。

国立扶余博物館『木に残された暗号、木簡』（前掲書）。

国立扶余博物館『百濟中興を夢見る・陵山里寺址』（二〇一〇年）。

<sup>2</sup> <sup>3</sup> 二〇〇一八号木簡の場合、筆者の韓国木簡学会での発表当時、紫外線写真のみ残っており、その所在を把握できなかった。その後、扶余博物館での遺物整理過程でこれを確認し、先ほど述べた未報告木簡と削屑の存在もその過程で知ることとなった。そして、この木簡を保管した容器の外側に「S一〇〇、W二〇地点、陵山里七次、2001.7.3」という記録を確認できた。

<sup>2</sup> <sup>4</sup> 六〇八次発掘調査で確認された排水施設については、最近発掘調査報告書が発刊されており参考となる（国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址六〇八次発掘調査報告書』（前掲書、二五〇五頁））。しかし、この報告書のみではこれらの排水施設と伽藍中心部の調査内容との関係、排水施設の前後関係や木簡との関連性を有機的に把握しがたく、不明な点もあるがひとまず叙述することにした。



2 5 南回廊南側のこれらの排水路は寺刹が廃された後の施設という(国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(前掲書、五四頁)。

2 6 国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址六く八次発掘調査報告書』(前掲書、二六九く二七〇頁)。

2 7 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡の研究」(前掲誌、一二三頁)。

2 8 国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(前掲書、二〇く二二頁)。

2 9 国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(前掲書、五五頁)。

3 0 (上掲書、二二六頁)。

3 1 田辺征夫・森郁夫「寺院の造営」(『日本歴史考古学を学ぶ』中、一九八六年、三六く三七頁)。

3 2 申光燮「陵山里寺址の発掘調査と伽藍の特徴」(『百済金銅大香炉と古代東亞細亞』、二〇〇三年、四五く四六頁)。

3 3 金相鉉「百済威徳王の父王のための追福と夢殿観音」(前掲誌、五四く六二頁)。

3 4 国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(前掲書、五〇頁)。

3 5 尹善泰「扶余陵山里出土百済木簡の再検討」(前掲誌、六五頁)。

3 6 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡の研究」(前掲誌、九七頁)。

3 7 李道学『生きてゐる百済史』(二〇〇三年、五九二く五九三頁)。

3 8 不明建物址 $\square$ は最近の百済寺院に関する研究で議論となっているいわゆる「付属建物址」に該当する。筆者は本稿で推定したことを基に不

明建物址 $\square$ といった「付属建物址」を公的性格が強い僧房のようなものと考えた。本稿の第二章第一節参照。

3 9 扶余東南里遺跡では瓦建物址の下層から瓦建物の以前の段階に使用された掘立柱建物址の痕跡が発見された(李炳鎬「百済泗沘都城の造営過程」(『韓国史論』四七、二〇〇二年、一一八く一一九頁)。陵山里寺址の場合も瓦建物以前の段階に掘立柱建物を使用した遺構の痕跡が残っている可能性を排除しがたい。

40 本稿の第三章第三節参照。

41 七番の層から国立扶余博物館の二〇〇七年発掘報告書の図面一一四―七番(図版二〇五―七)の1b型式が発見され、一番の層から図面一一四―三、五、六番(図版二〇五―三・五・六)の2型式瓦当と図面一一六―一、一一七―二、一一八―一(図面二〇六―一、二〇七―二、二〇九―二)の縄文平瓦が出土した。

42 実際、六〇八次調査で出土した瓦当、平瓦、丸瓦、椽木瓦などの瓦類は地表採集品はもちろん層位発掘が行われた資料も例外なく寺院内部で既に出土した型式であった。この点から筆者は陵山里出土木簡の性格を陵山里寺院の築造と関連させなければならないという考えを持つようになった。

43 国立扶余博物館の二〇〇七年発掘報告書の図面七四―三(図版一五四―一二)、図面七四―六(図版一五五―三)がこれに該当する。

44 朴淳発「公州水村里古墳群出土中国瓷器と交差年代問題」(『忠清学と忠清文化』四、二〇〇五年、一九五―一九八頁)。

45 山本孝文「百済泗泚期の陶硯―分類、編年と歴史的意義」(『百済研究』三八、二〇〇三年、一〇四―一〇五頁)。

46 白井克也「東京国立博物館物保管青磁獣脚硯」(『MUSEUM』五六八、二〇〇〇年、三七頁)。

47 王靖憲『古硯拾零』(湖北美術出版社、二〇〇二年、一九頁)。

48 ただし、南朝出土獣足硯が一点しか知られておらず、その年代も不明確であり、獣足硯は隋代以後に流行したことから、陵山里出土品の年代は六世紀前半の中でも後半に近いものと考えられる。

49 李梅田「長江中游地区六朝隋唐青磁分期研究」(『華夏考古』四期、二〇〇〇年、八九頁)。

50 <図三―一―七の二>はS九〇―一〇〇、W六五―七五地点の黒灰色砂質粘土層から発見され、<図三―一―七の三>はS一〇〇、W一〇地点から、<図三―一―七の四>はS一〇〇、W六〇南北水路内部からそれぞれ出土した。

51 山本孝文「百済泗泚期の陶硯―分類、編年と歴史的意義」(前掲誌、八八―八九頁)。

52 土田純子「百済有蓋三足器の編年研究」(『韓国考古学報』五二、二〇〇四年、一六六―一七一頁)。

<sup>53</sup> 陵山里七次調査ではS一三〇、W六〇付近から鉄製刀子一点が出土した(報告書図面五〇―一九)。本来、木製鞘と共に出土したとするが、鞘の所在は不明である。この刀子は削刀であり、文房具のひとつだったのであろう。

<sup>54</sup> 陵山里六〇八次調査では鉢形器台や蓋、高杯などの土器類でも五六七年を遡ることが一部で確認されたが、それが泗泚遷都以前まで遡ることとはないと考えられる。

金鍾萬「聖王時代の生活土器」(『百濟聖王と彼の時代』、二〇〇七年、一三二―一五五頁)。

<sup>55</sup> 三〇九号木簡の一面には「死」が、二面には「再拜」という文字が判読される。墨書の内容のみでも死者のための儀礼と関連したことを推測できる(尹善泰「扶余陵山里出土百濟木簡の再検討」(前掲誌、六六頁)。

<sup>56</sup> 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址六〇八次発掘調査報告書』(前掲書、二五五頁。)ではこの文字を「伏顛」と判読し、国王に捧げる上疏文や外交文書体と推定されたとした。しかし、「顛」は「願」である可能性が高い。

<sup>57</sup> 七次調査出土品の大部分が発見層位や位置が明確でない。したがって、三〇〇号木簡をはじめとした他の木簡もこの部類に含まれる可能性がある。  
がある。

<sup>58</sup> 尹善泰「百濟泗泚都城と岬夷」(前掲誌、二四三―二四九頁)。

<sup>59</sup> 一方、「小吏」の場合も百濟で作られた造字と紹介されているが、「小」の書体が一面の小升の「小」と同じであることから「小升」という文字の一部が消えず残った可能性がある。

<sup>60</sup> 三〇〇号木簡の最後の文字である「」を「𠂔」の造字とみて、「三月に仲(中)の椋の内に、上納した」(𠂔)に付せられた付札とする見解が提起され、その可能性を一層高めている。

平川南「正倉院佐波理加盤付属文書の再検討」(『日本歴史』七五〇、二〇一〇年、九頁)。

<sup>61</sup> 本稿を最初に作成した時には「𠂔方」と判読したが、弥勒寺址出土金鋌など他の資料を参考にすると、「𠂔」と判読することが正しいと判断され、ここで修正することにする。

早稲田大学朝鮮文化研究所・国立加耶文化財研究所「扶余陵山里木簡」(『日韓共同研究資料集成安城山山城木簡』、二〇〇九年、一四八頁)。  
朴南守「益山弥勒寺址出土金錠と百済の衡制」(『韓国史研究』一四九、二〇一〇年、八五〜八九頁)。

<sup>62</sup> (正始)其四年、倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人上献生口、倭錦、絳青縑、緜衣、帛布、丹、木彳付、短弓矢、掖邪狗等。壹拝率善中郎将印綬。(『三國志』魏書 卷三〇 東夷 倭人伝 正始四年条)

<sup>63</sup> 陵山里出土木製品に対する樹種分析が行われておらず断定し難いが、慶北大学の朴相珍教授によると、日本産木製品と考えることができる可能性があるという。陵山里寺址の位相や出土遺物の様相からみると、日本との交易品も出土する可能性も十分あるだろう。

<sup>64</sup> 陵山里寺址北側と西側に対する九、一〇次発掘調査では伽藍中心部より一段階新しい建物址が調査されたが、倉庫関連遺構は検出されなかった。しかし、西回廊址西側一帯はまだ調査されておらず、その可能性は残っている。

国立扶余文化財研究所『陵寺・扶余陵山里寺址一〇次発掘調査報告書』(二〇〇八年)。

韓国伝統文化学校『扶余陵山里寺址第九次発掘調査報告書』(二〇一〇年)。

<sup>65</sup> 支葉児を人名や職名と見たとしても、それは食米を支給される人ではなく、支給したり管理する人であったであろう。

<sup>66</sup> 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡の研究」(前掲誌、一〇一頁)。

<sup>67</sup> この点は尹善泰もすでに指摘している(尹善泰「百済泗沘都城と岬夷」(前掲誌、二四六頁))。しかし、李鎔賢はこれを「葉児の食米を支給した記」あるいは「葉児を扶持する食米の記」と見て、葉児は「薬の調剤と処方および薬剤など薬関連の業務に従事する実務者」とした(李鎔賢「木簡」(『百済の文化と生活』、百済文化史体系二二、二〇〇七年、二七六〜二七八頁))。

<sup>68</sup> 最近、支葉児食米記を「葉児に支給した食米の記録」と解釈し、葉児を百済二二部司の中で薬部と関連した人物と把握した見解が提起されており参考となる。

盧重国「医・薬技術の発展と医療活動」(『百済社会思想史』、知識産業社、二〇一〇年)。

張寅成「百済の医薬と道教文化」(『百済研究』五二、二〇一〇年)。

69 『日本書紀』二〇、敏達天皇六年十一月条。

70 森郁夫「わが国における初期寺院の成立」（『学叢』一六、一九九四年）…『日本古代寺院造営の研究』（法政大学出版局、一九九八年、二〇頁）。

71 張寅成「古代韓国人の疾病観と医療」（『韓国古代史研究』二〇、二〇〇〇年、二五九～二六八頁）。

72 吉基泰「呪嚙師と薬師信仰」（『百済泗泚時代の仏教信仰研究』、二〇〇六年、二一六～二二七頁）。

73 国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址六く八次発掘調査報告書』（前掲書、二五頁）。

74 二九五号木簡と共に発見された三〇九号木簡と二〇〇〇一六号削屑に「死」の文字が確認される。ただし、武寧王陵の墓誌石では国王の死を「崩」で表現しているため、「死」という表現から聖王以外の戦死者たちに関する儀礼も共に執り行われた可能性も考慮できる。

75 二九六号木簡の場合、前面の「三月十二日梨□□」まで一次木簡であり、それ以下の「之勝勝□勝勝□□」は二次木簡として習書に該当する。陵山里出土木簡の中にもこのように再活用木簡があることが確認できる。

76 三面の「猪耳」の猪は「豕者」で人名でなく「イノシシの耳」と見ることができ、この場合、猪耳は相手を卑下する意味を持っていた可能性がある。しかし、猪耳を百済の吏読とする見解が提起されており参考となる（金永旭「百済の吏読について」（前掲誌、一八三～一八六頁））。

77 日本古代の古文書で帳簿をこのような方式で分類する場合もある。

78 寺崎保広「帳簿」（『文字と古代日本―支配と文字』、二〇〇四年、二八四～二八七頁）。

79 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡の研究」（前掲誌、一〇二～一〇三頁）。

80 日本と中国における食米に対する用例と研究については次の論考を参考にした。

81 富谷至「漢代穀倉制度―エチナ川流域の食糧支給より」（『東方学報』六八、京都大、一九九六年）。

82 勝浦令子「長屋王家の米支給関係木簡」（『木簡研究』二二、一九九九年）。

山口英男「帳簿と木簡―正倉院文書の帳簿、継文と木簡」(『木簡研究』二二、二〇〇〇年)。

<sup>79</sup> 尹善泰はこれを支葉児の個人別食米日当と比例する数値と理解した(尹善泰「百済泗泚都城と岬夷」(前掲誌、二四五頁)。

<sup>80</sup> 金英心「百済地方統治体制研究」(ソウル大博士学位論文、一九九七年、一六七〜一七三頁)。

金寿泰「百済の地方統治と道使」(『百済の中央と地方』、一九九七年、二二一〜二二八頁)。

金寿泰「百済の聖王代の郡令と城主」(『百済文化』三一、二〇〇二年、一四五〜一四九頁)。

<sup>81</sup> 金立之撰聖住寺碑片と雲陽台吉祥塔記を根拠にして九世紀初葉には対価を受ける工人たちが登場したものと見た見解が参考となる。

朴南守「中・下代の工人の文化と社会経済的地位変動」(『新羅手工業史』、一九九六年、二九七〜三〇二頁)。

<sup>82</sup> 二〇〇〇―七号削屑の場合、「□金四」と判読できるが、最後の文字は断定できない。このときの「金」という銘文は人名の姓氏というより金(Gold)という材質と関連があるものと考えられる。そのような点からこれらの人物も金や金属と関連する材質を扱う工人であった可能性が考慮される。

<sup>83</sup> 牟氏と牟祿は「癸酉銘三尊千仏碑像」の牟氏や双北里ヒョンネドウル遺跡出土八五―八号木簡の牟氏のように人名であることが明らかである(李販燮・尹善泰、二〇〇八「扶余双北里ヒョンネドウル遺跡出土百済木簡」(前掲誌、二九九〜三〇〇頁)。二〇〇二―一号木簡の牟氏と仏像の牟氏がなんらかの関連性を持っているとすれば、牟氏がかなり一般的な人名であるとしても牟氏あるいはその集団は仏像彫刻といった専門技術を持っていた可能性が考慮される。

<sup>84</sup> 尹善泰「百済泗泚都城と岬夷」(前掲誌、二四七頁)。

<sup>85</sup> この場合、三〇六号木簡の「六〇五方」という表現が注目される。この場合の五方を泗泚時期の地方行政区域と理解すると、そのような可能性はさらに高まるためである。しかし、このような場合、中央行政組織を六部と表現することに対する説明が難しいためにひとまず判断を保留しておく。

<sup>86</sup> 二〇〇二―一号木簡の生産と再活用、廃棄など文書行政に関する整理は次の論考に詳しい。

尹善泰「百済の文書行政と木簡」(『韓国古代史研究』四八、二〇〇七年、三一〇～三一四頁)・「新出木簡からみた百済の文書行政」(『朝鮮学報』二二五、二〇一〇年、五～九頁)。

<sup>87</sup> 盧明鎬・李丞宰「高麗顯宗、靖宗代釈迦塔重修記録の判読・訳注」(『釈迦塔発見遺物調査中間報告』、国立中央博物館、二〇〇七年)。

崔鉉植「仏国寺西石塔重修形止記の再構成を通じた仏国寺石塔重修関連内容の再検討」(『震檀学報』一〇五、二〇〇八年)。

<sup>88</sup> 今泉隆雄「平城京西隆寺の木簡とその創建」及び「但馬国分寺木簡と国分寺の創建」(『古代木簡の研究』、吉川弘文館、一九九八年)。  
妹尾周三・佐竹昭「二〇〇一年出土の木簡―広島安芸国分寺跡」(『木簡研究』二四、二〇〇二年)。

渡辺昭人・関広尚世・佐竹昭「釈文の修正と追加―広島安芸国分寺跡」(『木簡研究』二六、二〇〇四年)。

<sup>89</sup> 亀田修一『日韓古代瓦の研究』(吉川弘文館、二〇〇六)。

清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』(清文堂、二〇一二年)。

<sup>90</sup> 金賢晶「陵山里寺址出土印花文土器に対する検討」(『国立公州博物館紀要』二、二〇〇二年)。

<sup>91</sup> 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(前掲書)。

国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址六〇次発掘調査報告書』(前掲書)。

国立扶余文化財研究所『陵寺―扶余陵山里寺址一〇次発掘調査報告書』(前掲書)。

<sup>92</sup> 金鍾萬「扶余陵山里寺址出土瓦当文様の形式と年代観」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』二、二〇〇〇年)。

<sup>93</sup> 例えば、I Bb3A型式とI Bb3I型式は蓮弁文の反転の程度による区分で極めて微細な違いに過ぎないが、I Cb3A型式とI Cb2U型式は蓮弁文だけでなく、中房の形態、製作技法の違いを共に考慮している。

<sup>94</sup> 保寧聖住寺址出土瓦当に対する事例分析でも軒丸瓦の分類と編年に蓮弁文様を最も重要な属性と設定している。筆者は瓦当の蓮弁文が型式分類や編年の一次的な属性となる背景には瓦当文様を考案する画師、つまりデザイナーが関与していたためと理解している。

成正鏞「瓦」(『聖住寺』、忠南大博物館、一九九八年、四〇三～四〇九頁)。

李炳鎬「百濟泗泚都城の造営過程」(『韓国史論』四七、二〇〇二年、六五〜六六頁)。

<sup>95</sup> 瓦当の型式はひとつの遺物を構成する諸要素の連鎖型といえる。瓦当の型式は瓦当文様、焼成、胎土、製作技術などの連鎖型によって設定されなければならない。そのような点において本稿で述べる型式はこのような連鎖型の組み合わせによって抽出された型式といえる。これは考古学における土器論で言及される様式と類似した概念で、これを通して編年論、工房論、流通論、遺構論の段階へと進むことができる。瓦の型式、様式の内容は次の論考を参考にした。

上原真人「瓦の見方について」(『富山市考古学資料館紀要』三、一九八四年、七〜九頁)。

上原真人『瓦を読む』(歴史発掘一一、講談社、一九九七年、六二〜七一頁)。

<sup>96</sup> 金鍾萬「扶余陵山里寺址出土瓦当文様の形式と年代観」(前掲誌、三二頁)。

<sup>97</sup> 金鍾萬の接合技法に対する模式図と発掘報告書の模式図は若干異なる。後述するように瓦当の接合技法は同じ型式の瓦当内部でも若干の変形を見せる亜型式が想定されるため、何を主流的な接合技法とし、何を亜類型と処理するのか悩む場合がある。この場合、後述する創建期瓦当の設定問題のように「絶対多数の論理」に従わざるを得なかった。

<sup>98</sup> 最近、国立扶余博物館では筆者の瓦当分類案に基づいた展示図録が刊行されており、これを共に参考するとより理解しやすい。

国立扶余博物館『百濟中興を夢見る「陵山里寺址」』(前掲書)。

<sup>99</sup> 金鍾萬分類B3式とC1式の接合方式は瓦当周縁上段部を斜めに切ったのか、水平に切ったのかによる区分である。しかし、出土遺物から両者を厳格に区分することは難しく、その意味づけをすることが困難である。

<sup>100</sup> 1型式の標識的遺物は国立扶余博物館の二〇〇〇年報告書に掲載されている次の遺物を参考にした。1aは図面一二〇一二(図版一五一二)、1bは図面一二二一二(図版一五三二c)、1cは図面一六八一五(図版一六〇一五)、1dは図面一五九一七(図版一八五七)、1eは図面一五三一(図版一七九一)である。一方、本稿で提示した標識的遺物は筆者の観察結果を反映させ、国立扶余博物館の二〇〇〇年報告書に掲載された図面の一部を改変した。



101 1b式の場合、丸瓦部が残っている事例は全てB1式接合技法が使用されたものと考えられる。したがって、1b式の一部は1e式に含ませる可能性が残っているが、1e式の蓮弁文様と接合技法が明確でなくひとまず保留した。

102 戸田有二はE式を公山城技法Ⅰ、C1式を公山城技法Ⅱに分類しながら、前者は熊津時期の主流的な製作技法であり、後者は熊津期末から泗泚期初に新たに登場したものと見た(戸田有二「百済泗泚時代における造瓦集団の一端」(『百済泗泚時期文化の再照明』、二〇〇五年、一九二頁)。ところで、陵山里寺址1型式瓦当では二つの技法が共にあらわれている場合があり、接合技法のみを根拠に時期差を言及できるのか疑問である。

103 2型式の標識的遺物は報告書の図面一六八―四(図版一九四―四)である。

104 3型式の標識的遺物は報告書の図面一五八―三(図版一八四―三)であり、連結された丸瓦は図面一五三―二・三(図版一七九―二・三)である。

105 4型式の標識的遺物は報告書の図面一六八―二(図版一九四―二)であり、連結された丸瓦は図面一二三―一(図版一五四―一)と図面一五〇―二(図版一七六―二)である。

106 5型式の標識的遺物は報告書の図面七三―二(図版一〇三―二)である。ところで、図面七四―二(図版一〇四―二)の丸瓦はこれを互いに連結する丸瓦部であることが確認された(図三一―六)。4型式瓦当より出土量が多いが、3型式と4型式の関連性、4型式と5型式の時期差などを考慮して後に配置した。

107 6型式の標識的遺物は報告書の図面一六九―五(図版一九五―五)である。

108 6型式瓦当の場合、瓦当周縁上段部が破損したまま残っており、E式と誤解を招く可能性がある。しかし、周縁上段部が残っている図面一六四―四と一六五―一はC1式接合技法と陽刻された斜格子文が観察できる。

109 7型式の標識的遺物は報告書の図面一二四―五(一五五―五)と図面一三〇―七(図版一六一―七)である。

110 斜格子文が陽刻されたものは報告書の図面一二五―五、一二六―二、一二七―六、一二九―六、一三〇―七、一六三―八、一六九―六、未報告一点があり、線文が陽刻されたものは図面一二四―五、一二五―三、一二五―八であり、無文のものは図面一二五―四、一三〇―四、一三〇―六

などがある。

111 8 a 式の標識的遺物は報告書の図面一三〇―二(図版一六一―二)、8 b 式は報告書の図面一三〇―一(図版一六一―一)である。

112 報告書の図面一一八―二(図版一四九―三)は8 a 式の丸瓦部と推定される。この丸瓦は長さ三五・七センチで縄文打擦後にナデを施しており、灰青色硬質である。瓦当連結部分から一九。三センチ地点に円形の釘穴があげられている。

113 9 a 式の標識的遺物は図面一六〇―六(図版一八六―六)、9 b 式は図面一八六―一(図版二一六―一)である。

114 10 型式の標識的遺物は報告書の図面一八七―四(図版二一七―四)である。

115 11 型式瓦当の標識的遺物は報告書の図面二二八―二(図版一五九―二)である。

116 12 型式瓦当の標識的遺物は報告書の図面七三―七(図版一〇三―七)である。

117 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址六く八次発掘調査報告書』(前掲書、一一五頁(図面三九―三、図版一三〇―三))。

118 13 型式は報告書の図面一五七―五(図版一八三―五)のみ該当するが、扶余東南里、中井里遺跡でも同范品が出土している。

国立扶余博物館『百済の瓦博』(一九八九年、五一頁)。

国立扶余博物館『懐かしいものは大地の中にある』(二〇〇七年、一三二頁)。

119 清水昭博は亭岩里窯址の事例を挙げて、「瓦当と連結する丸瓦型式の違いを「消費地の要求」に対応したものと把握したが(清水昭博「軍守里廢寺出土軒丸瓦の検討」(『MUSEUM』五九六、二〇〇六年、四一―四四頁)、陵山里寺址の事例を見ると、「技術体系を異にする工人差」を反映したものと理解することがより適切であると考える。特に、1 型式の細部型式は丸瓦型式の違いが瓦当の蓮弁文や接合技法、胎土、焼成度の違いと符号するためである。ただし、4 型式の場合、釘穴の位置が異なるものも一つの型式に分類した。このような事例は釘穴の位置や形態の違いが工人差や工房差を証明する絶対的な基準ではないという点を示唆している。本稿では瓦当と丸瓦の接合技法、胎土や焼成度はもちろん、丸瓦の型式や釘穴の位置もまた工人差や工房差を反映する重要な属性となるという事実を強調したい。

120 泗泚時期の同范品が発見された瓦当の場合、次の論文を主に参考して相対編年を提示した。

亀田修一「百済古瓦考」(『百済研究』一二、一九八一年)・『日韓古代瓦の研究』(前掲書)。

清水昭博「百済大通寺式軒丸瓦の成立と展開」(『百済研究』三八、二〇〇三年)。

李炳鎬「百済泗泚都城の造営過程」(前掲誌)。

121 上原真人『瓦を読む』(前掲書、七三〜七四頁)。ただし、寺院の創建期という伽藍中心部の主要建物全体が完備した状態をいうが、本章では草創期または創建初期という言葉と類似する意味で使用している。

122 一・二次調査で確認された窯址の位置は次の論文が参考となる。

金鍾萬「泗泚時代の瓦にあらわれた社会相小考」(『国立公州博物館紀要』二、二〇〇二年、六四頁(図面一))。

123 1型式の上限がいつまで遡るのかは共伴遺物の相対編年を通してさらに検討する必要があるが、中国製青磁片と硯片など陵山里寺址の最下層出土遺物からみると、六世紀中半の五五〇年前後であると考えられる(本稿の第三章第一節参照)。

124 清水昭博「瓦の伝来―百済と日本の初期瓦生産体制の比較」(『百済研究』四一、二〇〇五年、一八五頁)。

125 1b型式を1a型式より古いものとする見解(花谷浩「飛鳥の瓦と百済の瓦」(『古代東アジアの造瓦技術』)、奈良文化財研究所、二〇一〇年)もあるが、窯址の位置など遺跡全般の状況から見ると、1a型式が若干古いものと考えられる。

126 金鍾萬の場合、3型式は公州大通寺址や西穴寺址出土品が変化したものと考え、4型式は井洞里窯址や龍井里寺址出土品と比較して、六世紀中半とした。しかし、4型式の場合、彼が根拠とした縄蓆文が打捺された平瓦が必ずしも4型式瓦当と関連するという根拠はない。

127 清水昭博「百済大通寺式軒丸瓦の成立と展開」(前掲誌、六七〜六八頁)。

128 これは一瓦窯―寺院型から複数瓦窯―寺院型に変化したことを指す。

亀田修一「熊津・泗泚時代の瓦」(『日韓古代瓦の研究』、前掲書、一五五頁)。

129 清水昭博は5型式を亭岩里地区二・三・五・六号窯址出土品と同じものと把握している。

清水昭博「百済泗泚時代の瓦生産」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』X、二〇〇八年、九八〜一〇二頁)。

130 国立扶余博物館『扶余亭岩里窯址』口(一九九二年、一一〇～一一二頁)。

131 一方、軍守里寺址と舒川辛山里出土品の場合、亭岩里窯址出土瓦当に有段式と無段式丸瓦ともに連結されることを示している。しかし、無段式丸瓦が連結した舒川辛山里遺跡出土品の場合、蓮弁文と瓦当裏面の処理方式、丸瓦の背面の文様、焼成度などが陵山里寺址出土品と異なる点に留意する必要がある。

132 清水昭博、二〇〇六「軍守里廃寺出土軒丸瓦の検討」(前掲誌、二四～三九頁)。

133 清水昭博「瓦の伝来―百済と日本の初期瓦生産体制の比較」(前掲誌、一七六～一七七頁)。

134 報告書の図面六〇―一(図版九四―一)、図面六一―一(図版九四―三)、図面六一―二と六二―一・二(図版九五―一・二・三)、図面六三―一・二(図版九六―一・二)などは工房址から出土した丸瓦で全て5型式の丸瓦部と同じ型式である。

135 金鍾萬は亭岩里窯址の経営を国家施設物に対する補修の性格を持って築造された生産施設と推定している。軍守里寺址の場合、瓦当のみならず平瓦、博などほぼ大部分を亭岩里窯址から供給されている点などをみると、これを一般化させることはできないが、陵山里寺址の場合は十分に想定できると考えられる。

136 金鍾萬「泗泚時代の瓦にあらわれた社会相小考」(前掲誌、一七六頁)。

137 国立扶余博物館『百済の工房』(二〇〇六年、一四三頁および一四七頁)。

138 創建期瓦当の中で9型式の場合も出土数量が六点に過ぎず、補修瓦である可能性を排除しがたい。

139 伽藍中心部から出土した瓦当全体の建物址別分布様相は本稿の第三章第三節で検討した。

140 瓦当の型式分類と分布様相を通して建物の建立順序を把握した事例として次の論考が参考となる。

141 中島正「軒瓦からみた高麗寺の沿革」(『高麗寺跡』、山城町教育委員会、一九八九年)。

142 栗田薫『新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究』(京都大博物館、二〇〇五年)。

143 陵山里寺址の伽藍中心部に対する発掘報告書(国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(前掲書)には瓦当の出土位置

が大部分記されていない。そこで筆者は二〇〇六年から二〇〇七年にかけて国立扶余博物館で勤務しながら収蔵庫に所蔵されている瓦当の裏面に記された注記と遺物採集カード、発掘野帳などを確認し、これを発掘報告書と対照させる作業を行い、〈表一〉を作成した。〈表一〉の詳しい内容は付録を参考されたい。

140 本稿の第三章第一節参照。

141 本稿の第二章第一節参照。

142 趙源昌「扶余陵寺第三建物址(別名工房址)」の建築考古学的検討」(『先史と古代』二四、二〇〇六年、四〇二〜四〇八頁)。しかし、仏法を尊ぶ僧侶階層と工人集団が一つの回廊内で共同生活したとみることは難しいとした点には同意できない。百濟をはじめとした古代寺院の工房については次の論考が参考となる。

金妍秀「韓国古代の寺刹工房施設について」(『美術史の定立と拡散』二、二〇〇六年)。

国立扶余博物館『百濟の工房』(前掲書)。

143 本稿の第三章第一節 参照。

144 以上の検討の結果は造宮尺に基づいて建物の建立の順序を把握した申光燮の見解と類似する(申光燮「百濟泗泚時代陵寺研究」(前掲誌、二七〜三五頁))。ただ、筆者は木塔址を金堂址より古い段階に建立したと考えている。

145 田辺征夫・森郁夫「寺院の造営」(『日本歴史考古学を学ぶ』中、一九八六年、三六〜三七頁)。

146 大橋一章「飛鳥寺の創立と本尊」(『奈良美術成立史論』、中央公論美術出版、二〇〇九年、八二〜八六頁)。

147 本稿の復元図は忠南扶余郡百濟歴史再現団地に再現された陵山里寺址の鳥瞰図(三扶土建製作)である。

148 本稿で述べる初期建物址群は、講堂址と東西側の不明建物址Ⅰ、工房址Ⅱをはじめとして不明建物址Ⅲと工房址Ⅰを指す。講堂址の場合、初期には講堂と呼ぶことができず、工房址の場合も創建当時から工房として機能したとは考えないが、混同を避けるため発掘報告書の名称に従った。

- 149 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』（前掲書、二〇〇～二二頁）。
- 150 本稿の第三章第一節参照。
- 151 金鍾萬「聖王時代の百済の生活土器」（前掲書、一二七～一五六頁）。
- 152 東羅城はその状況から泗泚遷都前後に完備されたものと見ている（朴淳発「泗泚都城の構造について」（『百済研究』三一、二〇〇〇年、一一〇頁））。筆者は五三八年羅城完備説はさらなる資料増加が必要であり、少なくとも五五四年以前に完備していたものと考えている（李炳鎬「泗泚都城と慶州王京の比較試論」（『東アジア都城と新羅王京の比較研究』、新羅文化祭学術論文集二九、二〇〇八年、八～一〇頁）。
- 153 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡の研究」（前掲誌、九三～九八頁）。
- 154 尹善泰「扶余陵山里出土百済木簡の再検討」（前掲誌、六〇～六六頁）。
- 154 本稿の第三章第一節参照。
- 155 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡再論」（前掲誌、三五八頁）。
- 156 尹善泰『木簡が聞かせてくれる百済物語』（前掲誌、一五七～一五九頁）。
- 157 講堂址西側屋根はほぼそのまま落ちたように保存状態が良好であるが、瓦当が約一・七メートル間隔で二列になっており（国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』（前掲書、二九頁）、図三二二のように重層に復元できる）。
- 158 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』（前掲書、三四頁）。
- 159 国立扶余博物館『百済中興を夢見る―陵山里寺址』（前掲書、一七二頁）。図三二四の漆器の文様は高句麗古墳の内里一号墳玄室南壁の天井持送壁画の装飾文様（朝鮮古蹟研究会『昭和一一年度古蹟調査報告書』（一九三七年、図版二〇および二三参照））と最も類似し、双楹塚の玄室天井と真坡里一号墳の天井、中国南京地域の磚などに表現されている装飾文様とも相通ずる。しかし、武寧王陵の王や王妃の冠飾、図七二一の陵山里古墳出土の冠装飾や銀花冠飾、扶余下黄里出土銀製琉璃玉の文様とも相通ずる点があるため、百済的な文様と見ること

もできると考えられる。

160 趙源昌はここが工房として機能したのは七世紀後半以後、特に印花文土器からみると滅亡期以後とした(趙源昌「扶余陵寺第三建物址(別名工房址)」の建築考古学的検討」(前掲誌、四一三頁)。161しかし、出土遺物からみると、遅くとも七世紀前半以後と考えられる。

161 方起東「集安東台子高句麗建築遺址の性質と年代」(『東北考古歴史』、文物出版社、一九八二年)・「集安東台子高句麗建築遺址の性質と年代」(『高句麗遺跡と遺物研究』、白山資料院、一九九九年、四四〜五五頁)。

集安東台子遺跡が位相の高い建物址ということは明らかであるが、瓦当の相對編年の結果、五世紀末以前に遡らないため、国社のようなものと断定できないという反論もある。

姜賢淑「中国吉林省東台子遺跡再考」(『韓國考古學報』七五、二〇一〇年、一九一〜一九六頁)。

162 張慶浩『美しい百濟建築』(周留城、二〇〇四年、一五二〜一五九頁)。

163 申光燮「百濟泗泚時代陵寺研究」(前掲誌、一一三頁)。

164 姜仁求『百濟古墳研究』(二志社、一九九七年、八七頁)。

165 李漢祥「公州艇止山遺跡の編年と性格」(『百濟の王室祭祀遺跡「公州艇止山」學術發表會』、一九九八年)。  
權五榮「艇止山遺跡と百濟の喪葬儀禮」(『艇止山』、国立公州博物館、一九九九年)。

金吉植「氷庫を通してみた公州艇止山遺跡の性格」(『考古學誌』一二、二〇〇一年)。

166 權五榮「古代韓國の喪葬儀禮」(『韓國古代史研究』二〇、二〇〇〇年、一四〜一六頁)。

167 金吉植「氷庫を通してみた公州艇止山遺跡の性格」(前掲誌、六三〜六九頁)。

168 李漢祥「百濟の葬禮風習」(『百濟の生活と文化』、百濟文化史体系一二、二〇〇七年、四六六〜四六七頁)。

169 主屋西室の花崗岩製方形礎石とオンドルは高句麗の東台子遺跡と比較すると、祭祀と関連したなんらかの施設および居住に必要な施設と考えられる。また、長方形施設と石槨型施設、長楕円形施設と焼土層は艇止山遺跡の瓦建物址の大型竪穴と対応する側面がある。一方、

金吉植は艇止山遺跡の大型竪穴を遺体の腐敗を防ぐため氷を入れた氷盤が置かれたものと推定している(金吉植「氷庫を通してみた公州艇止山遺跡の性格」(前掲誌、六六〜六八頁)。

170 国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(前掲書、三四頁)。

171 張寅成「南朝の喪礼研究」(『百済研究』三二、二〇〇〇年、一五五頁)。

王志高「南朝帝王陵寢初探」(『南方文物』、一九九九年、六八〜六九頁)。

王志高「六朝帝王陵寢述論」(『南京曉庄学院学報』二〇〇四年、二八〜二九頁)。

172 許嵩『建康実録』卷一七(張忱石点校、中華書局、一九八六年、六八八頁)。

173 朱傑『金陵古蹟図考』(中華書局、一九三六年、一三五〜一三七頁)。筆者は二〇〇六年の復刻本を参考にした。

174 皇基寺は江蘇省丹陽市にある建陵の北側約二キロ付近に所在する。

梁銀景「中国仏教寺刹の検討を通してみた百済泗泚期仏教寺刹の諸問題」(『百済研究』五〇、二〇〇九年、一六八〜一六九頁)。

175 諏訪義純「梁武帝仏教関係史蹟年譜考」(『中国南朝仏教史の研究』、一九九七年、一六九〜一七〇頁)。

176 大同市博物館・山西省文物工作委員会「大同方山北魏永固陵」(『文物』七期、一九七八年)。

大同市博物館「大同北魏方山思遠仏寺遺址発掘報告」(『文物』四期、二〇〇七年)。

177 岡村秀典・向井佑介編「北魏方山永固陵の研究」(『東方学報』八〇、二〇〇七年、六五〜六六頁)。

178 例えば、白仏台遺跡でも一辺二〇メートルに達する土台と塑造像が発見されており塔基と推定できるが、草堂山遺跡でも塔址が確認され

ている。一つの寺刹で互いに異なる二つの塔が建立されたならば、この二つの塔の関係はいかなるものか、果たしてそのような塔は伽藍

内部においてどのように配置されたのか、伽藍配置に対する疑問が提起されるためである。

179 金日成大学『東明王陵とその付近の高句麗遺跡』(金日成大学出版社、一九七六年)。

田中俊明「高句麗の寺院」(『高句麗の歴史と遺跡』、中央公論社、一九九五)。



- 180 チョン・ジエヒョン『東明王陵に対する研究』（平壤、一九九四年）。
- 181 永島暉臣慎「高句麗の都城と建築」（『難波宮址の研究』七（論考編）、一九八一年）。
- 魏存成『高句麗考古』（文物出版社、二〇〇二年）。
- 曹永鉉「伝東明王陵の墓主比定」（『科技考古研究』一〇、二〇〇四年）。
- 182 姜賢淑「伝東明王陵と真坡里古墳群の性格検討」（『湖西考古学』一八、二〇〇八年）。
- 183 高句麗に寿陵制があったのかについて根拠が不足しており、金製冠装飾や棺釘が出土していることを見ると、墟墓である可能性は低いと考えられる（鄭浩燮「高句麗壁画古墳の銘文と被葬者に関する諸問題」（『高句麗渤海研究』三六、二〇一〇年、五九〜六〇頁）。
- 184 三国および統一新羅の陵寺については次の論考で整理されており参考となる。
- 185 田中俊明「朝鮮三国の陵寺について」（『東アジア都城の比較研究』、橋本義則編、京都大学学術出版会、二〇一一年）。
- 室有東西廂曰廟、無東西廂有室曰寢。（『爾雅』「積宮」）
- 李賢淑「爾雅積宮积例考」（『人文科学研究』一一、西原大人文学研究、二〇〇二年、二六頁）。
- 186 楊寛『中国古代陵寢制度史研究』（上海人民出版社、二〇〇一年、一八頁）。
- 187 金吉植「百濟始祖仇台廟と陵山里寺址・仇台廟から寺廟へ」（『韓国考古学報』六九、二〇〇八年）。このような仇台廟説に対する批判は次の論考で整理している（李炳鎬「扶余陵山里寺址伽藍中心部の変遷過程」（『韓国史研究』一四三、二〇〇八年、五八〜五九頁）。
- 188 筆者は初期施設物が『日本書紀』欽明紀、一六年二月条の祖上神祭祀と関連した神宮である可能性を言及しているが、本稿を通してそれを祠廟のようなものと訂正することにする。
- 李炳鎬「扶余陵山里出土瓦当の性格」（『木簡と文字』創刊号、二〇〇八年、六六頁）。
- 189 金圭東「百濟土製煙筒試論」（『科技考古研究』八、二〇〇二年、五九〜六一頁）。
- 柳基正「泗泚期オンドル施設建物址に対する一考察」（『国立公州博物館紀要』三、二〇〇三年、一六九〜一七三頁）。

朴淳発「高句麗と百濟…泗泚様式百濟土器の形成背景を中心に」(『高句麗と東アジア』、高麗大開校一〇〇周年記念国際学術大会発表文、高麗大博物館、二〇〇五年、三六〜三七頁)。

190 趙景徹「百濟聖王代儒仏政治理念と陸詡と謙益を中心に」(『韓国思想史学』一五、二〇〇〇年、一〇〜一四頁)。

191 李基東「百濟国の政治理念に対する一考察」(『震檀学報』六九、一九九〇年、一二〜一三頁)。

192 新川登亀男は講礼博士陸詡が毛詩博士なのか分らないが、陵山里寺址における舍利供養は釈尊の舍利を供養するだけでなく、亡き父王の遺形を釈尊のそれと重ね合わせて、あるいは釈尊の舍利に仕立てて供養するという回路を想定でき、これは毛詩博士の活動と関連があるものと推定した。

新川登亀男「百濟と日本の飛鳥・奈良における仏教文化」(『忠清学と忠清文化』一三、二〇一一年、一〇五頁)。

193 近藤浩一「百濟時期の孝思想受容とその意義」(『百濟研究』四二、二〇〇五、一二一〜一二三頁)。

194 本稿で筆者は陵山里寺址の性格の変化に高句麗や梁の影響があったと主張したが、儒教と仏教の喪葬儀礼は本質的に異なるものであるため、建造物の変化と儀礼の内実の変化についてより具体的に検討する必要性が指摘されている(李成市「王興寺の成立と百濟仏教」高句麗・新羅仏教との関係を中心に」『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一〇年)。これについて筆者は陵山里寺址と陵山里古墳群一帯は遷都当時から王室の陵園と陵寺が企画されていたため、そのような変化が可能であったのではないかと推定している。陵山里寺址の講堂址をはじめとした初期建物址群とその南側の塔と金堂などの伽藍中心部はひとつの一貫した計画を持って配置され、順次造営されたものと考えられるためである。五五四年、聖王の突然の死がそのような建物の建立順序や機能に影響を与え、祠廟から陵寺へと変化したのではないかと考えている。

195 金相鉉「百濟威徳王の父王のための追福と夢殿観音」(前掲誌、五六頁)。

196 吉基泰『百濟泗泚時代の仏教信仰研究』(書景、二〇〇六年、七八〜七九頁)。

197 趙源昌は軍守里寺址を五五五〜五六七年の間に威徳王によって創建された寺刹と把握した。(趙源昌「百濟軍守里寺院の築造技法と造営

主体の検討」（『韓国古代史研究』五一、二〇〇八年、一八〇～一八五頁）。しかし、編年資料として提示した大通寺系瓦当と亭岩里窯址出土品は陵山里寺址出土創建期瓦当より一段階新しいものと見られる（清水昭博「軍守里廃寺出土軒丸瓦の検討」（前掲誌））。前者の場合、大通寺址出土品と胎土や文様が異なり、瓦当自体が厚く、接合技法が異なるため、六世紀後半に編年される。亭岩里窯址の場合、少なくとも五六七年以後の六世紀中後半から操業されたものと考えられている。したがって、彼の仮説は成立しがたい。

198 新川登亀男『日本古代文化史の構想』（名著刊行会、一九九四年、一三三～一三三頁）。

199 李炳鎬「泗泚都城の構造と築造過程」（前掲書、一二二頁）。

200 金吉植の場合、陵山里寺址から出土した高句麗系土器の中に五三八年前後まで遡るものが含まれているとした（金吉植「百濟始祖仇台廟と陵山里寺址」（前掲誌、五九～六四頁））。しかし、扶余一帯で出土する高句麗系土器の場合、同じ時期のソウル 阿且山堡壘群や漣川 瓠蘆古壘などから出土するような高句麗土器ではなく、五世紀代の土器製作の伝統に則っていることから（梁時恩「南韓で確認された高句麗の時・空間的正体性」（『考古学』一〇巻二号、二〇一一年、一二二～一二三頁）、二つの遺跡の土器を同じレベルで比較することは無理がある。一方、筆者の場合、1型式瓦当の展開過程や木簡の記載内容を見ると、そのような高句麗系生活用土器が出土することとは別途に中心建物の初築時期は五六七年の木塔建立年代を大きく遡らない五五〇年代頃であろうと考えている。

201 李漢祥「百濟の葬礼風習」（前掲書、四四九～四五三頁）。

202 武寧王陵を寿陵とする決定的な資料は「壬申年作」銘文磚である。しかし、それは武寧王陵の羨門を閉じるために使用されたものであることから、宋山里六号墳から転用された可能性が残っている。実際、出入り口閉鎖用の磚は武寧王陵で主に使用された蓮花文磚以外にも六号墳に主に使用された銭文磚など他の場所から転用されたものが多数含まれている。

井内潔「南朝梁と熊津期百濟文化―宋山里六号墳と大通寺に係わる新思考から」（『朝鮮古代研究』八、二〇〇七年、四～五頁）。

203 聖王の三年喪に関する資料が無く、威徳王の即位の過程を通してこれを復元した研究がある。それによると、『日本書紀』には威徳王の即位を聖王が戦死した三年後の五五七年三月と記録されている。聖王が戦死した時期は『三国史記』には五五四年七月、『日本書紀』に

は五五四年一二月と違いが見られる。『日本書紀』の五五四年一二月は聖王の遺骸が戻ってきた事情を反映したものと見る事ができ  
るため、威徳王は二七ヶ月の三年喪を済ませ、二七ヶ月後に王位に就いたものとした。

趙景徹「百済王室の三年喪」武寧王と聖王を中心に」（『東方学志』一四五、二〇〇八年）。

204 近藤浩一「百済時期の孝思想受容とその意義」（前掲誌、一二八〜一三一頁）。

205 金相鉉「百済威徳王の父王のための追福と夢殿観音」（前掲誌、五八〜六二頁）。

206 国立扶余文化財研究所『陵寺・扶余陵山里寺址一〇次発掘調査報告書』（前掲書）。

韓国伝統文化学校『扶余陵山里寺址第九次発掘調査報告書』（前掲書）。

207 伽藍周辺部建物址の中で韓国伝統文化学校が発掘した第二建物址の場合、三室に分けられ、各室ごとにオンドルが確認された。そのよう  
な点から第二建物址は僧房址であった可能性が高いが、伽藍中心部の展開過程と関連させると、二段階から機能した可能性がある。

208 本稿の第三章第二節参照。

209 最近、金鍾萬は陵山里寺址建物群の建物址の構造的特徴を検討しながら、大きく五段階の変遷過程を想定する見解を提示したが、本稿の  
一段階と三段階を細分する程度の違いに過ぎない。金鍾萬「扶余陵山里建物群の性格と変遷」（『考古学誌』一七、二〇一一年）。

210 李炳鎬「泗泚都城と慶州王京の比較試論」（前掲誌、三二〜三三頁）。

211 梁起錫「百済威徳王代王権の存在形態と性格」（『百済研究』二二、一九九〇年）。

梁起錫「百済威徳王代の対外関係」（『先史と古代』一九、二〇〇三年）。

朴胤善「威徳王代の百済と南北朝の關係」（『歴史と現実』六一、二〇〇六年）。

212 申光燮「陵山里寺址発掘調査と伽藍の特徴」（『百済金銅大香炉と古代東亞世亞』、百済金銅大香炉発掘一〇周年記念国際学術シンポジウ  
ム、二〇〇三年、五〇頁）。

213 尹善泰「扶余陵山里出土百済木簡の再検討」（前掲誌）。

平川南「百済と古代日本における道の祭祀」（前掲誌）。

平川南「道祖神信仰の源流」（前掲誌）。

<sup>214</sup> 李鎔賢「木簡」（前掲書、二七〇～二七六頁）。

<sup>215</sup> 李鎔賢は二九五号木簡を呪嚩師と関連させて見た（上掲書、二七五頁）。これに対して筆者は二〇〇二―一号の四面木簡が呪嚩師と係わる可能性を言及した（本稿の第三章第一節参照）。

<sup>216</sup> 金永旭「百済の吏読について」（前掲誌、一四三頁）。

<sup>217</sup> 金完鎮「国語学一〇年先の将来を展望する」（『国語国文学の未来への道を問う』、大学社、二〇〇五年、二五～二七頁）。

<sup>218</sup> 趙海淑「百済木簡記録「宿世結業…」について」（『冠嶽語文研究』三一、二〇〇六年、一七〇頁）。

<sup>219</sup> 趙海淑「百済木簡記録「宿世結業…」について」（上掲誌、一六七～一六八頁）。

<sup>220</sup> 三〇五号木簡は前面を「慧暉前」と判読して書簡と断定する傾向があつた。しかし、「前」の最後の画は右側に曲がり、「苑」に近いためにそのような判読は受け入れがたい。慧暉は人名で、陵山里寺院の初期施設に居住した僧侶である可能性が高いと考えられる（尹善泰「扶余陵山里出土百済木簡の再検討」（前掲誌、六四頁））。七次調査では「会暉」という銘文が印刻された土器片が発見されており（国立扶余博物館『陵寺・扶余陵山里寺址六く八次発掘調査報告書』（前掲書、一四〇頁））、この「会暉」が木簡の「慧暉」と音が似ていると見ることができるとすれば、同一物である可能性がある。会暉は土器の所有者を表記するために刻まれたのである。

## 第四章 泗泚期における百済寺院の諸相

### はじめに

最近、扶余と益山地域を中心に進められている百済の寺院址に対する発掘ではこれまで知られていなかった新たな遺物と遺構、編年資料が発見され、国内外における百済文化に対する関心を高めている。特に定林寺址、陵山里寺址、軍守里寺址、王興寺址、帝釈寺址、弥勒寺址などに対する発掘成果は、植民地期をはじめとする過去の調査において見過ごされてきた百済の伽藍配置に対する重要な事実を新たに認識させ、既存の見解を再検討する契機となっている。

したがって、本章では泗泚期の主要寺院を対象にしてこれまで知られていた資料と最近再調査された成果を整理して百済寺院の多様な様相についてみていく。第一節では主な寺院址の伽藍配置を中心に分析対象とし、その展開過程を「定林寺式伽藍配置」という側面から整理する。その過程で泗泚遷都以後、最初に成立した百済式寺院である定林寺址の伽藍配置のプロトタイプを抽出し、その後、それがどのように変化したのかを確認したい。第二節ではこれまで断片的に知られていた塑像という遺物に焦点を合わせる。第二章第一節で部分的に検討したが、百済故地で発見された塑像の場合、現在は破片でしか残っていないが、木塔や金堂に奉安された主要な仏教造像であることに間違いはない。したがって、これまで知られていた資料を総合的に集成・整理した後、その製作技法の特徴や奉安場所、系統に関する問題をより詳しく検討する。百済の塑像は破片の状態で残っているとはいえ、六〜七世紀における東アジアの文化交流の姿を雄弁に物語る極めて重要な遺物である。

### 第一節 定林寺式伽藍配置の展開過程

#### (一) 主要寺院の伽藍配置に関する調査内容

これまで百済の寺院址として知られる、あるいは推定される場所は熊津期の大通寺址を除けば大部分が泗泚期に属する。泗泚期の寺院の大部分は扶余地域に位置するが、現在の扶余邑と窺岩面、恩山面一帯には百済時代のものとはされる寺院址が全二五ヶ所知られている(図二一―一参照)<sup>1)</sup>。また、益山の帝釈寺址と弥勒寺址、保寧の聖住寺址、礼山修徳寺などで百済寺院址が発見されたり百済時代の遺物が出土している。その外にも礼山花田里四面石仏と泰安磨崖三尊仏、瑞山磨崖三尊仏、益山蓮洞里石仏坐像、井邑普化里石仏立像、青陽本義里窰址で発見された陶製仏像台座などが百済の地方で発見された仏教関連遺跡である。泗泚期の仏教関連遺跡は扶余や公州、益山地域を除くと忠清南道北西部地域に多数分布していることが特徴である。これはこの地域が中国との交流において重要な交通路であったためであろう<sup>2)</sup>。また、蘆嶺山脈以南の全羅北道南部地域と全羅南道地域で仏教関連遺物や遺跡がほとんど発見されていないことは、榮山江流域に永らく百済の中央とは区分される甕棺古墳の築造が持続していたことと関連があるかもしれない<sup>3)</sup>。

百済泗泚期の寺院址の中で伽藍配置の型式が分かるのは扶余定林寺址と陵山里寺址、軍守里寺址、王興寺址、東南里寺址、扶蘇山廢寺址、益山の帝釈寺址、弥勒寺址、恩山金剛寺址である。次に最近の発掘成果を中心に、これらの百済寺院の伽藍配置について簡略にみていきたい。

#### 一) 扶余定林寺址

本稿の第二章で詳しく論じたように泗泚遷都直後、特に五四一年以後本格的に建立されたものと考えられる定林寺址は一九四二年と一九四三年に藤澤一夫、一九七九年に忠南大学校博物館の尹武炳が調査し、二〇〇五―二〇一〇年に国立扶余文化財研究所によって再調査が行なわれ、計三回にわたる大規模発掘が実施された(図四一―一)。定林寺の伽藍中心部については第二章第一節で検討しているため、最近の発掘成果のみを簡略に整理したい<sup>4)</sup>。

まず、台地造成のために高い部分を削って、低い部分を盛土している。その盛土は北側から南側へ四〇―五〇度ほど傾斜をつけている。寺域の西側と南側は中心建物が建てられた盛土台地より一・五―二メートル低くなっている。これは伽藍中心部の景観や威容を強調する

ためであつただろう<sup>55</sup>。講堂址は長辺三九・一メートル、短辺一六・三メートルの長方形を呈し、北面は合掌式、他の所は平積式で積んだ瓦積基壇を持つ。東・西の付属建物址はやはり瓦積基壇で石を一部混ぜた平積式で、東側の付属建物址は南北三九・三メートル、東西十二・一メートルの細長い形態を呈し、報告書ではこれを単一建物と推定している。講堂址北側には東西方向の瓦積基壇建物址が確認されており僧房と推定される。東西回廊址と南回廊址の連結はL字形に直接連結せず、石築排水路で区分されている。南回廊址西側の石築排水路の西側では三・六メートルほどの東西石列遺構と小型炉址などの工房の痕跡が確認された。

一方、東西回廊址北端の付属建物址が講堂址付近で断絶するのかどうか、つまり講堂址の東西に軍守里寺址や東南里寺址の東北基壇・西北基壇のような別途建物址があつたのかは残存遺構の破壊によつて確認できなかつた。しかし、藤澤一夫が作成した図面や扶余地域における他の寺院遺跡の事例を参考にすると、現在、付属建物址と命名されている建物址は南北三九・一メートルで長く連続した建物であつたと考えるよりは、講堂址南側基壇付近で断絶した二棟の建物であつた可能性が高いものと考えられる。

## 二) 扶余陵山里寺址

百済金銅大香炉と昌王銘石造舍利龕が出土した遺跡として有名な陵山里寺址は五六七年に木塔の礎石が埋められたが、第三章で検討したように、それより若干古い六世紀中半に建立されはじめたものと考えられる。この寺院は谷間に位置しているため台地造成のための大規模的盛土と排水施設設置に多くの努力を傾けた。台地造成作業は北側から南側へと真砂土と粘土を交互に傾斜をつけて盛土した。盛土層の高さは最も浅い講堂南側基壇部分が〇・一メートル、最も深い南回廊付近が約二・三メートルに達するなど南低北高という地形を忠実に補完した。盛土台地の中には石築暗渠が設置されており、排水が円滑に行われるようにしている。

伽藍配置は図四二一のように南門がない状態で中門と木塔、金堂、講堂が南北一直線上に配置されているが、東西回廊址北端には工房址一と不明建物址二と命名された付属建物があり、回廊址東西側にも工房址三と不明建物址一と命名された別途建物がある。講堂址北側には建物址二と命名された僧房址が確認されているが、本体が三つ部屋に区分されており、各部屋ごとにオンドル施設が設置されていた。



また、建物址2の西側には建物址1があるが全体の規模は確認できなかった。建物址1の内部からはオンドルと排水施設が確認されている。建物址3の場合、礎石の間隔が一定でなく、二基のオンドルが別途に位置していることから、最小二棟の建物が存在していたものと推定されている。ただ、筆者はその部から土器類や玉製品とともに80点余りの灯皿が出土していることから、第三章第一節の陵山里出土木簡に関する議論で説明した倉庫のような施設に該当するのではないかと推定できよう。

### 三) 扶余軍守里寺址

一九三五・一九三六年に石田茂作・斎藤忠の発掘調査と二〇〇五～二〇〇七年に国立扶余文化財研究所の再発掘が実施された。植民地期の調査では塔・金堂・講堂が南北一直線上に配置されており、その伽藍配置が大阪の四天王寺と同じという点と中門址と塔址、金堂址、講堂址の中心間の距離が日本の四天王寺、山田寺と類似するという点を確認した(図四一三の一)。また、出土遺物の中で蠟石製如来坐像と金銅菩薩立像は法隆寺やその他の飛鳥時代の遺物と類似する点があった<sup>7)</sup>。

二〇〇五～二〇〇七年度の調査では金堂址と木塔址、東回廊址一帯に対する再発掘を実施した(図四一三の二)。その結果、木塔址の調査では隅丸長方形の掘立柱の痕跡と一六ヶ所の柱穴、心礎石の安置および心柱設置のための傾斜路(四七四×一八〇センチ)が確認され、金堂址の調査では南・北・西側の階段址をはじめとして下層瓦積基壇の内側から別の瓦積基壇の痕跡が見つかり二重基壇建物であったことが明らかになった。金堂址の東側二〇メートル地点では、東西幅六メートルの東回廊址と東側へ二メートル離れた地点から東方基壇建物址の痕跡が確認されたが、建物址の規模や瓦積基壇の痕跡は後代の耕作に伴う削平によって確認できなかった。

軍守里寺址の場合、講堂址に対する再調査は実施されておらず、建物址内部の礎石の配置状態は不明である。しかし、一九三五・三六年度の調査結果を見ると講堂址基壇から約五メートル離れた所に経蔵址、鐘楼址と推定される東北基壇と西北基壇があったことは明確である。東西回廊址北端の付属建物址(本稿のいわゆる東堂・西堂)はその実体が明らかでないが、一九三八年度報告書には西回廊址北端に二室と推定できる遺構の痕跡が明瞭に残っている(図四一三の一)。また、東回廊と東方基壇に対する再調査では東回廊址の東側に二メートル

ルの間隔を置いて東方基壇建物址があつたことを再認識できた(図四―三の二)。このことから軍守里寺址は東・西回廊址北端に東堂と西堂、その外郭周辺に別の東方基壇建物址と呼ばれる別途の建物址があつたといえるだろう。つまり、軍守里寺址は泗泚遷都以後に定林寺址の建立過程で成立したいわゆる定林寺式伽藍配置をプロトタイプとしながらも、東西回廊の外郭に新たな機能を有した建物が付加される新しい変化があらわれているのである。

#### 四) 扶余王興寺址

扶余王興寺址は白馬江西側の王興寺岑城(現在の蔚城山城)があるトゥムジェ山南側の稜線間の溪谷部に位置する。『三国史記』と『三国遺事』には法王二年(六〇〇)に創建され、武王三五年(六三四)に完成したと推定できる記録が残っている。また、百済の武王が度々船に乗って寺に入って香を焚いたという。一九三四年に「王興」と刻まれた高麗時代の文字瓦片が収集されており、早くから王興寺址に比定されてきたが、二〇〇〇年から国立扶余文化財研究所によって年次的な発掘調査が実施され、次第に寺院の全貌があらわれつつある。

この寺院は木塔と金堂、講堂が南北一直線上に配置されているが、通常は中門が位置する場所にT字形の石築があり、寺域の西側境界と考えられる地点では排水路と別途の進入施設が確認されている(図四―四)。その中で木塔址は一四×一四メートルの正方形建物址で二重基壇と推定されている。その中央に心礎石が残っていたが、現在残っている基壇土上面から五〇センチ下に位置する。この心礎石の南側中央に舍利孔(二六×十二×一六)を設けて舍利器を奉安し、朱漆で文様を描いた隅進閣屋根形の花崗岩製蓋で覆った。石材の南側には多量の舍利供養具が散らばっていた。

金堂址は東西二二・七メートル、南北一六・六メートルの長方形建物址で、高麗時代に再利用されたため外側の基壇は百済時代、内側の基壇は高麗時代のもので推定されている。講堂址は金堂址北側基壇から一六メートル離れたところに位置し、東西四六・八メートル、南北一九・二メートルで南側基壇は架構式基壇であるが、残りは割石を利用して積んだ石築基壇である。内部調査が行われておらず一棟

二室建物であったかは確認できないが、その可能性は非常に高いと考える。また、その東西に別途の建物址が対称をなして配置されている。東西回廊の北端には二棟の付属建物址(東堂・西堂)が対称をなしており、幅一三・二メートル、長さ四八メートルを測る。

この寺院は溪谷部に寺域を作ったため東西築台とそれに直角をなす南北築台を積んで進入施設として活用した。東西石築の北側である寺域中心部の場合、最大四・八メートルほどの盛土層が確認されたが、木塔址南側基壇付近を境界にして若干施工部式が異なることが確認された<sup>10</sup>。進入路は現在の東西築台の中央と西側の二ヶ所で確認されたが、東側にも対称の位置に進入施設があったものと推定される。これを通して復元した中心寺域の東西規模は約一五〇メートルである。中央の進入施設は現在六三・四メートル確認されているが、その幅は一三メートルで、金堂側に行くにつれて徐々に低くなる。西側進入施設の場合、中央進入路から約六一メートル離れており幅は八メートルを測る。一方、王興寺に供給された瓦を生産した瓦窯址が中心寺域から東に約一五〇メートル離れた丘陵に位置していたが、これまで百済時代の瓦窯址十六基、高麗時代の瓦窯址一基が発掘された。

王興寺址では青銅銀一金製の舍利容器が発見され、青銅製舍利盒の外面から塔の築造年代と建立理由を記録した銘文が確認された。

丁酉年二月十五日百済王昌為亡王子立利本舎利二枚葬時神化為三

この銘文を通して五七七年に威徳王が亡くなった王子のためにここに木塔を建立したことが分かった<sup>11</sup>。また、周辺から金銀玉で作られた耳飾りと首飾りなどの装身具、北斉との交流を示す上平五銖錢、花形雲母装飾、鉄製冠飾などが出土した。

ところで五七七年という年代は先に言及した文献記録に見られる王興寺の創建内容とは異なるため議論となった。つまり、舍利容器の銘文に見られる「立利」を木塔の建立にのみ限定して解釈できるといふ指摘である<sup>12</sup>。このような見解は北魏や梁代の刹が「塔基表示の刹」を意味する事例がある点から<sup>13</sup>、検討の余地がある。そのため、二〇〇八年度の調査では金堂と木塔の前後関係を明らかにするための土層調査が実施された。その結果、金堂は盛土層の上に基壇土を構築しているが、木塔は台地造成層を掘壊して構築したことが明

らかになった(図四一五)。木塔の場合、中層建物の構造的 특성上、軸基部を掘削して基壇土を構築する必要があったが、金堂の基壇土と同じ土層を再度掘削していることから、金堂が木塔より若干先に建立されたか、ほぼ同時期に築造されたものと推定できる<sup>14</sup>。木塔と金堂周辺からは同じ范型の瓦当が出土しており、このことを裏付けている(第六章第二節の図六一二十八の5型式瓦当を指す)。したがって、王興寺址は寺域全体が一定の企画下に段階的に工事が実施されたといえる。

一方、最近の調査では伽藍中枢部外郭から別の建物址、つまり東西外郭建物址が対称をなしつつ配置された新たな変化も共に確認されたのである。この建物址の正確な規模や構造についてはまだ不明な点が多いが、配置から見ると回廊内側の建物よりは低いが東西境界の築台内側に独立的に位置していることから一定の格を備えた建物であったものと推定される。その性格と意味については第六章第一節で再び検討する。

#### 五) 扶余東南里寺址

一九三八年に石田茂作・斎藤忠によって調査され、一九九三・九四年に忠南大博物館、二〇〇五年に忠清南道歴史文化研究院によって再発掘と追加調査が実施された。植民地期の調査では塔が確認されないなか中門址、金堂址、講堂址が南北一直線上に配置され、中門と講堂の左右の建物址を連結する回廊址が確認された(図四一六の一)<sup>15</sup>。一九九三・九四年の忠南大博物館による再発掘では金堂址と推定される所から方形積心土(一辺一六〇×一八〇センチ)を礎石にした東西五間、南北三間の建物址(金堂址)が確認されたのみで、木塔や中門、南門、回廊の痕跡は見出せなかった(図四一六の二)。ただ、東回廊址東側で三基の掘立柱建物址の痕跡が確認され一基の大壁建物址が発見された。この建物址の東側では東西の幅一・五メートル、南北の長さ一〇〇メートルの瓦列が確認されたが、寺院の東側境界線や塀のようなものと推定される<sup>16</sup>。二〇〇五年度の追加調査では遺跡の北東側一〇メートル地点から井戸址が発見され、その内部から銅碗と扁瓶、木簡一点が出土した<sup>17</sup>。木簡の場合、井戸址内から百済と統一新羅時代の遺物が混ざって発見されたため、出土様相を基にした年代判定は困難であった。

この遺跡については塔がない伽藍なのか、そうでなければ金堂南側の左右に双塔があったのかに対する議論があったが、最近の再調査ではいかなる痕跡も見つからなかった。講堂址の東西からは経藏址、鐘楼址と推定される東北基壇と西北基壇が確認されたが、これらの建物址は講堂址基壇と平行するように基壇を構築され、その規模が縮小している。金堂址の場合、積心土を基壇の礎石として使用しているが、このような事例は扶余官北里遺跡と益山王宮里遺跡の東西三五メートル、南北一九メートルの大型殿閣建物址でも確認されている<sup>18</sup>。東回廊址外郭の大壁建物址をはじめとする掘立柱建物址の場合、伽藍の建立と共に廃棄されたと見ることができ、寺院に先行する遺構と考えられる。

#### 六) 益山帝釈寺址

益山帝釈寺址は『観世音心験記』に百済武康王(武王)が枳慕密地に遷都して帝釈精舎を建てたが、貞観一三年(六三九)に雷雨によって仏堂と七級浮屠および廊房が全て焼けたという記録が残っており<sup>19</sup>、六三九年以前である七世紀前半には七層木塔と仏殿、回廊および僧房などを備えた大規模王室寺院であったという見解が早くから提起されてきた<sup>20</sup>。この寺院は北東―南西側に緩やかに傾斜した地形を盛土して平坦な台地を造成した後、磁北から東に約六度偏った南北中心軸線上に中門と木塔、金堂、講堂が配置されている(図四一七)。一九九三年に円光大学校馬韓百済文化研究所によって初めて試掘調査が実施され、その後二〇〇三―二〇〇四年の調査では七世紀前半の瓦当と塑像片、壁体片など建築用廃棄物が捨てられた廃棄場遺跡が発掘されている<sup>21</sup>。二〇〇七年度には国立扶余文化財研究所によって伽藍中心部に対する全面的調査を実施し、その結果、木塔址と金堂址、講堂址、東回廊と東側付属建物址、僧房址などが確認された<sup>22</sup>。

木塔址の場合、一辺の長さ二一・二メートルの正方形基壇が二重になっており、結果的に三重基壇に構成されているが、心礎石は地上に置かれていた。金堂址は下層基壇が東西三一・八メートル、南北二三・六メートル、上層基壇は東西二九・六メートル、南北二〇・八メートルである。南側と北側基壇の中央では階段の痕跡が確認された。講堂址は削平が激しいため明確ではないが、東西五二・七メートル

ル、南北一八・四メートルと推定される。

一方、木塔址と金堂址の間からは東西二一・五メートル、南北二〇・八メートルになる方形の建物基礎部が確認されたが、木塔址の基礎部の規模と築造技法が同じである。しかし、その性格についてはまだこれといった意見が提示されておらず、課題として残っている。

帝釈寺址は東西回廊の間が約一〇〇メートルを測り、中門から講堂の間の距離が約一四〇メートルに達する百済泗泚期の寺院の中では最大級に属する。講堂址の左右に別途建物址の痕跡が見られないことも、それ以前の時期の百済寺院とは異なる点である。

ここからは多量の瓦類と土器類が出土したが、その中で軒平瓦と軒丸瓦がセットをなして発見されたことは特記するに値する。流麗な忍冬唐草文が施された軒平瓦および子房と蓮弁に枠線がある独特な形の軒丸瓦は帝釈寺式軒平瓦・軒丸瓦と呼べるだろう。

一方、帝釈寺址の位置は別宮や離宮と推定される王宮里遺跡との関係で注目される。なぜならば王宮里遺跡の場合、六世紀末以後、遅くとも七世紀前半には宮城や工房連施設が運営されていたが<sup>23</sup>、それとほぼ同時期に王宮里遺跡の東側に並ぶように帝釈寺址が造営・運営されたためである(図四一八)。このように王宮と寺院がセットをなす様相は第二章第二節で検討したように泗泚都城と定林寺址の関係を再現したものと見え、時期的に近い日本の百済宮と百済大寺との関係や難破宮(小郡宮・豊宮)と四天王寺とも関連があるものと考えられる。

#### 七) 益山弥勒寺址

一九二〇年代後半、藤島亥治郎は益山弥勒寺址に対する地表調査を実施した後、伽藍配置と石塔復元に関する重要な仮説を提示している(図四一九の一)<sup>24</sup>。彼は伽藍配置について西塔院と東塔院の後方に中塔院を想定した品字形伽藍配置案を提示したが、彼が提示した仮説は一九八一年の中院木塔址と金堂址が確認される前までは『三国遺事』の「殿塔廊廡、各三所創之」という記録を最も合理的に解釈したものと評価してきた。しかし、一九七〇年代中半から二〇〇〇年代初半までの数回にわたる発掘調査を通して、この寺址は三院並列式伽藍配置であることが確認された(図四一九の二)<sup>25</sup>。弥勒寺址の中軸線は中院木塔址を中心にした時、真北方向になく、N26度46分

00秒で、若干西南向きに配置されている。これは三院式で弥勒三尊を配置するという特異な伽藍配置と南向きに開けた地形的な条件のためと理解されている<sup>260</sup>。

ところで、弥勒寺址の伽藍配置を三院並列式と断定するにはさらなる検討が必要である。図四一九一二の配置図を見ると、中門と塔、金堂を基準とすると三院に区分されているといえるが、講堂と東西僧房は中院の北側にのみ存在するため、中院の領域とより密接な関係の中で配置されていると見ることが出来る。南北朝時代の多院式寺院の場合、各院の中心は仏塔と仏殿、講堂が中心をなし、その付属要素として僧房や回廊が追加される様相が一般的である<sup>27</sup>。特に、東西僧房の建物中心軸と東院中門・東塔・東金堂の軸は互いに一致しないことも東西僧房がそれぞれの院を構成する一つの要素でないことを意味している。つまり、弥勒寺跡の伽藍配置は塔と金堂が同等に配列された三院でなく、木塔と中金堂、その北側の講堂と東西僧房が一つの完結した配置を構成しており、東西でさらに塔と金堂を追加（または拡張）で配置した後、東西回廊によって寺域全体を囲みながら境界を形成したと見ることが出来る<sup>28</sup>。講堂址の場合、左右の構造が異なる左右異形平面であるが、西側は壁体を利用して内部空間を構成し、東側は柱を立てて開放された空間を形成したものと推定され、東西僧房址の場合も一棟二室形式の単位空間を並列させて構成した型式であるということが新たに明らかになった<sup>29</sup>。

一方、二〇〇九年一月、西石塔補修整備事業を実施する過程で心柱石上面中央から舍利孔が確認され、その内部から舍利奉安記をはじめとする多様な舍利荘嚴具が発見された。その後、韓国の学界では七回にわたる学術大会が開催されるなど多様な方面からの検討が進められた<sup>30</sup>。そのうち、伽藍配置と関連するものとしては、舍利奉安記の己亥年（六三九）の「造立伽藍」をどのように理解するのかに対する問題が重要な論点となった<sup>31</sup>。筆者はこれまでの研究成果を参考にすると、弥勒寺址の造営は基本的に同じ計画の下に順次造営されたものと考えられる。中院の西回廊址と西石塔の土層調査の結果は中院回廊がまず造営された後、西塔址で台地盛土および掘墻基壇の築造が行われたことが明らかになった<sup>32</sup>。東塔と西塔の場合、残存している塔部材を比較した結果、西塔がまず建てられ、その後東塔が建てられたものと見られる<sup>33</sup>。

また、最近行われた西石塔下部に対する調査で、石塔の基壇盛土層から単弁六葉蓮華文瓦当二点と一緒に多量の平瓦と丸瓦が出土した

ことが注目される(図四一九一三)<sup>34</sup>。ここから出土した単弁六葉蓮華文瓦当は弥勒寺址でのみ発見される特徴的な創建瓦で、いわゆる「弥勒寺式瓦当」といえるものであり、平瓦も弥勒寺址の主要建物址から発見されたものと同じものである。したがって、弥勒寺の西石塔は伽藍中心部の主要木造建物が建設された以後よりやや新しい段階に次々と造営されたことをより明確に把握できるようになった。

そうした点から六三九年の西石塔の造成は中院の造営と東院石塔築造の中間段階に位置づけることができると考えられる。その上限は丁亥(六二七)・己丑(六二九)銘印刻瓦から六二〇年代後半まで遡り、下限は西石塔の建立年代とさほど違いがないものと考えられる。そして、中院の木塔と金堂、その北側の僧房と東西僧房が伽藍の完結性を持つて構成されていたという本稿の推定もそれがまず建立され、西院と東院が順次建立されたものと推定した上記の見解とも符合している。

弥勒寺の創建はその名称から分かるように弥勒思想と深い関連がある<sup>35</sup>。百済の弥勒信仰は五七〇年頃に中国に留学した玄光を通して慧思の弥勒信仰が受容されるとともに活発になった。百済王室はこのような弥勒思想を積極的に後援する一方、弥勒思想の立場から王権の正当化と神聖化を試みた。それゆえ益山弥勒寺は弥勒の出現を祈る一方、弥勒が出現した時に正法を広められるように準備された道場であり、同時に弥勒と弥勒の成仏の本質に対して遂行して悟るための空間として創建されたといえる。益山弥勒寺址の三院は未来に弥勒が出現した時の三会説法のために準備された空間で、一つの講堂は現在そこにとどまる修行者が弥勒仏とその成仏の本質について勉強し遂行する空間であったといえるだろう。

#### 八) 扶余恩山金剛寺址

恩山金剛寺址は百済の他の廃寺址とは異なり東向きに配置されている<sup>36</sup>。この寺院は中院と塔、塔と金堂の距離が同じであり、金堂と講堂の距離は二倍程離れている(図四一〇)。<sup>37</sup> 金堂址は東西二一・二メートル、南北一七・九メートルで礎石は残っていないが、石造単層基壇と推定できる基壇部遺構が確認された。木塔址の場合、版築の規模を元に一四・二四メートルほどの正方形と推定され、二層の石造基壇と推定される。講堂址は東西四五・四五メートル、東西一九・〇九メートルを測る。講堂址の北側では東西八八・四八メートル、



南北一三・四メートルの長方形と推定される。金剛寺址の場合、百済の他の寺院とは異なり講堂と回廊が北回廊で連結したものと報告されている。しかし、基壇石の型式や基壇築土から推察すると、創建当時のものというよりは後代のことと考えられるため、北回廊の存在を認め難い<sup>37)</sup>。

#### 九) 扶余扶蘇山廢寺址

一九四二年に藤澤一夫、米田美代治によって発掘されたものの伽藍配置図が公開されない状態が続いたが、一九七六年に伽藍配置復元図が公開された(図四一―一)<sup>38)</sup>。しかし、一九八〇年度にはこの復元図が知られないまま再発掘が実施されたようである(図四一―一の二)。この時の再調査では既存の発掘遺構を再確認し、木塔址の中央付近から供養品の性格を持つ唐式帶金具を收拾した(図四一―一の三)<sup>39)</sup>。この帶金具について、『三国史記』百濟本紀武王三八年(六三七)条に唐太宗が百濟使臣に錦袍と彩帛三〇〇段を与えたという記録に注目してその造営時期をそれ以後と比定した研究があり参考となる<sup>40)</sup>。この遺跡は王宮の背後の山城と推定される扶蘇山城内部に位置する立地的な特性とともに講堂が確認されなかったという点で注目されている。

#### (二) 定林寺式伽藍配置の変遷

泗泚期の扶余と益山地域の伽藍配置は中門―塔―金堂―講堂が一直線上に配置され、伽藍中心部を回廊が囲む一塔一金堂式伽藍配置が主流をなす。そのうち、東南里寺址や弥勒寺址、扶蘇山廢寺址の場合、塔や講堂の有無、多院式伽藍などで変形が生じたものと考えられる。第二章第一節で検討したように、二〇〇八年度の定林寺址再発掘調査を基点にして一塔一金堂式伽藍配置の細部的な問題、特に講堂址と回廊址の連結方式や講堂址の東西にある別途建物址、講堂の内部構造といった問題が検討されはじめた。これについては、泗泚期における主要寺院の伽藍配置の原型(プロトタイプ)として「定林寺式伽藍配置」という概念を設定し、それがどのように展開していったのかについて主要寺院の伽藍配置の変遷を中心に検討していく。定林寺式伽藍配置については第二章第一節でも検討したが、論旨展開の必要上、

重複をいとわず再度検討したい。

まず、定林寺式伽藍配置のプロトタイプを推定してみると次のとおりである。この寺院は中門―塔―金堂―講堂が南北一直線上に配置されており、これを回廊が囲む型式である(図四―一)。大阪の四天王寺式伽藍配置と非常に似ているが、講堂と回廊の連結方式が北回廊によつてつながるのではなく、東西回廊北端の付属建物(以下、東堂と西堂という名称を混用する)、講堂址の東西にある別途建物で連結する方式を取っている。ところで、定林寺址の再調査の結果、講堂址の左右には別途建物がなく、東堂・西堂が長く配置された形式であったと推定する見解が台頭しており<sup>41</sup>、これについても少し検討する必要がある。

この遺跡に対する最初の発掘者である藤澤一夫が作成した図四―一の一を見ると、金堂址と講堂址の西側にそれぞれ別個の建物址の痕跡が二棟確認される。二次発掘者の尹武炳が作成した図四―一の二を見ると、講堂址東側と東回廊を中心で発掘が進められたことが分かる。これは一次調査が伽藍中心部の西側一帯を中心を実施されたためであろう。二次調査で確認された東回廊北側地域に対する調査区域は、三次調査の東側付属建物の範囲とほぼ一致している(図四―一の三)。つまり、最近の三次調査は一・二次発掘調査地域に対する再調査であるため、多くの先行遺構がすでに削平された可能性が非常に高い。図四―一の一を見ると講堂址の東側と西側、金堂址の西側にそれぞれ別個の建物址の痕跡が表現されている。最近調査された図四―一の三でも講堂址南西隅の西側付近で排水施設の痕跡が発見された。そこで筆者はそのような遺構の状況とその後に出現する百濟寺院の東堂・西堂の事例を参考にして図四―一の四のような復元図を作成した。この図面のように定林寺址は回廊北端に二棟の建物が配置されたと見るのがより適切である<sup>42</sup>。六世紀代の他の寺院とは異なり、回廊北端の東堂・西堂の規模が大きくなったことは、木塔の代わりに石塔が建立される重建期に図四―七の帝釈寺址と類似した形態に変形した<sup>43</sup>ことと関連するのではないかと推定される。

一方、定林寺址の東西回廊北端の建物址を一棟の建物と想定して図四―一の三のように復元した研究は定林寺址の創建時期を泗泚遷都以後ではなく、六世紀後半から七世紀前半と推定している点で共通している<sup>43</sup>。しかし、このような見解を主張する研究者は塑像をはじめとして中国製青磁片など六世紀前半以前に遡る重要な相対編年資料についての言及が無い。本稿の第二章第一節で詳しく述べたが、

このような見解を主張する当事者が直接参加して発掘した図二一三のような独特な形態の人物像片の場合、その形態は「梁職貢図」で「魯国」と命名された人物と図像的に一致する。したがって、六世紀後半の定林寺址の本格的な造営以前に泗泚都城の中心部である現在の定林寺址の位置に炉址をはじめとする小規模の工房関連施設のみが存在したと主張することは論理的に無理がある。むしろ、図二一一の三のように南北に長い東堂・西堂建物は重建された定林寺址の姿を示すものと理解するのがより妥当である。それは、六三九年に焼失した、つまり七世紀前半に建立された図四一七の帝釈寺址の東堂・西堂と非常に類似するもので、七世紀代以後、創建期の定林寺址の原形が一部変形したと見なければならぬだろう。

一方、定林寺址についての最近の再調査では東西回廊址と南回廊址の連結方式がL字形であり、直ちに連結せず石築排水路で区分されていることが確認された(図四一一の三)。これは屋根の高低差を利用して回廊を連結する方式で、その後、陵山里寺址や新羅の皇龍寺址でも確認されている。また、南回廊址西側一帯に対する調査では東西の石列遺構とともに工場の痕跡が確認された。これらの遺構は中心部より一・八メートルほど低く作られている。これは定林寺址建立のために大規模的な盛土作業を行った結果であり、伽藍中心部の権威的な建築物としての威容を視角的にもより強く誇示できたものと考えられる<sup>44</sup>。

定林寺址の場合、遺構の破壊が激しく伽藍配置のプロトタイプや各建物址の機能を把握するためには限界がある。現段階では定林寺址に最も忠実に従いながら、時期的にも近い図四一一の陵山里寺址を参考にする必要がある。そこで両者を比較しながら定林寺式伽藍配置を定義してみると、この寺院は南門がない状態で中門―塔―金堂―講堂が一直線上に配置され、これを回廊が巡る型式であったといえる<sup>45</sup>。講堂と回廊の連結方式は回廊址北端のいわゆる東堂と西堂、講堂址東西側の別途建物で連結される型式であった。その他に東西回廊と南回廊はL字形で直ちに連結せず断絶しており、南回廊は東西回廊より少し長く突出している。

軍守里寺址の場合、瓦当をはじめとする出土遺物、心礎石と舍利の安置方式、建物址の配置などから見ると、陵山里寺址と王興寺址の中間段階に位置づけることができよう<sup>46</sup>。この遺跡に対する戦前の調査では塔―金堂―講堂が南北一直線上に配置され、その伽藍配置が大阪の四天王寺と同じという点と中門址と塔址、金堂址、講堂址の中心間距離が四天王寺、山田寺などと類似するという点を確認した

(図四一三の一)。また、最近の木塔址に対する再調査では一六ヶ所の柱孔、心礎石の安置および心柱の設置のための傾斜路が確認され、金堂址の調査では二重基壇と下成礎石を確認した(図四一三の二)。金堂址東側の東方基壇建物址の場合、建物址の痕跡は確認されたが、その規模などについては不明である。

軍守里寺址の場合、講堂址に対する再調査は実施されておらず、建物址内部礎石の配置状態が不明である。しかし、一九三五・一九三六年の調査結果を見ると、講堂址基壇から約五メートル離れた地点に東北基壇と西北基壇が確認され、西回廊址北端に西室と推定される遺構の痕跡があった。また、東回廊と東方基壇に対する再調査では東回廊址の東側に二メートルの間隔を置いて東方基壇建物址があったことが分かった。そこで陵山里寺址と王興寺址の事例を参考にして図四一三の二のような復元図を作成した。この図面で既存の図四一三の一と二と異なる点は二点ある。まず西回廊址北端に西堂、その反対側に東堂があったと推定した点である。東堂と西堂の規模は東回廊址の内側石列が講堂址東側の東北基壇付近まで続いていることから陵山里寺址の東堂・西堂を参考にして三間と推定した。また、東回廊址外郭で金堂址と平行するように配置された東方基壇建物址を参考にして西側にも同じ大きさの建物を復元した。図四一三の一の西方基壇は東方基壇と規模や位置が異なり左右対称にはならない。したがって、図四一四の王興寺址の伽藍配置を参考にして東方基壇と対称する建物が西側にもあったものと推定した。

五七七年に威徳王が発願した王興寺址の場合、木塔址から舍利容器と舍利莊嚴具が発掘されたことを契機に発掘成果が紹介されている。その後、年次的な発掘を通じて伽藍配置の全貌が徐々にあらわれているが、基本的に定林寺式伽藍配置に従いながらもいくつかの相違点が発見された(図四一四)。まず、木塔址南側ではT字型の東西石築が配置されている点である。東西石築の場合、北側の寺域を造成するために築造されたもので、他の寺院では中門址附近に該当する部分に施設され、南北石築の場合、『三国史記』や『三国遺事』に記録された王の行幸と関連した御道のような進入施設と考えられる。二〇一〇年度の調査では寺域の中心部から約六一メートル離れた地点で幅約八メートルの別途の進入施設が確認されている。

伽藍中心部は木塔と金堂、講堂が南北軸線上に配置されているが、東西回廊址北端には南北の長さ約四八メートルの附属建物址が確認

された。講堂址の場合、その東西側で別途建物址が確認された。その規模や内部構造は不明であるものの全般的な配置様相は陵山里寺址と非常に類似する。一方、東西回廊址の外郭では東堂と西堂の外郭から実体の分からない別の外郭建物址の基壇が確認された。回廊址外郭の東西付属建物址は軍守里寺址の東方基壇と類似した性格の建物と推定されるため今後の調査結果が期待される。このように軍守里寺址と王興寺址は定林寺式伽藍配置を基本としながらも新たな機能を持つ建物が増築されていることを確認できる。

六世紀後半には東南里寺址が建立された。この遺跡については初期の発掘調査から塔がない伽藍なのか、そうでなければ金堂の南側左右に双塔が存在したのかについての論争があったが(図四一六の一)、最近の再調査ではいかなる痕跡も発見されなかった。講堂址の東西からは経蔵址、鐘楼址と推定される東北基壇と西北基壇が確認されているが、これらの建物址は講堂址基壇と平行するように基壇を構築し、その規模が縮小している(図四一六の二)。最近再調査された金堂址の場合、方形積心土を基壇の礎石として使用している。このような事例は扶余官北里遺跡と益山王宮里遺跡の大型殿閣建物址の基壇と類似し、洛陽永寧寺木塔址と南門址や城の趙彭城廢寺址の木塔址で類似する痕跡が発見されており、北朝の礎石設置方式との関連性が想定される<sup>47</sup>。この寺院の場合、塔が建立されておらず<sup>48</sup>、講堂の東西にある別途建物縮小し、回廊北端の東堂・西堂も建立されないという変化があらわれる。

益山帝釈寺址は『觀世音心驗記』に六三九年に火災で焼失したという記録と出土遺物から七世紀前半に建立された寺刹と考えられる。寺域の北側約三〇〇メートル離れた地点では火が受けた瓦片と塑像片、壁体片などが出土した廃棄場が確認され、この記録の信憑性を高めている。これまでの調査の結果、講堂址の東西には別途建物址が確認されず、その代わりに東西回廊址北端の東堂・西堂が大型化された(図四一七)。帝釈寺址の場合、講堂址の東西にあった別途建物がなくならないという変化があらわれないといえる。

弥勒寺址の場合、三院並列式伽藍配置をなしているが、基本的には定林寺式伽藍配置に従っている(図四一九の二)。弥勒寺址の伽藍配置は塔と金堂が同等に配列された三院でなく、定林寺址のように木塔と中金堂、その北側の講堂と東西の僧房が一つの完結した寺刹配置を構成した後、東西に塔と金堂を追加(または拡張)して配置し、東西回廊によって寺域全体を囲みながら境界を形成したと見ることができ<sup>49</sup>。特に、定林寺式伽藍配置で共通して確認される東堂と西堂がここでは講堂址南側にある東西僧房址に変形し、講堂址の東西に

ある別途建物址がなくなる代わりに北回廊によって連結する様子が初めて確認された<sup>50</sup>。つまり、図四一八と図四一九の二を比較してみると、帝釈寺址の東堂と西堂が弥勒寺址では僧房址に変わり、弥勒寺址の場合、講堂と東・西堂の連結も北回廊に変形したことを確認できる。したがって、弥勒寺址の三院並列式伽藍配置も定林寺式伽藍配置をベースにした百済内部における変化・発展という連続性を有していると言える。この時、三院式という要素は南朝大愛敬寺や東魏・北斉の趙彭城廢寺址などから始まり<sup>51</sup>、隋唐代に本格的に流行する多院落多仏殿の大型院落式寺院<sup>52</sup>の影響があったと見なければならぬだろう(本稿の第六章第一節参照)。

七世紀中半になると、扶蘇山廢寺址のように講堂が省略された型式が出現する(図四一一)。この遺跡は王宮の背後山城であり後苑の機能も担った扶蘇山城内部に位置するという立地的特性から、内仏堂のような性格の寺刹であった可能性がある。伽藍配置上では講堂が確認されないという変化があらわれる<sup>53</sup>。

以上の検討を総合してみると、定林寺式伽藍配置の伝統は基本的に百済滅亡期まで続くが、軍守里寺址や王興寺址が造営された六紀中後半頃から一定の変化が生じ、六世紀末以後には付属建物や別途建物、講堂といった施設が省略される事例が増加している。七世紀前半にあらわれた弥勒寺址の三院並列式伽藍配置は定林寺式伽藍配置をベースにした変形といえるが、ここには中国の大型院落式寺院の影響があったものと考えられる。それとともにこのような雰囲気の中で六世紀後半、皇龍寺址の重建伽藍や飛鳥寺に見られる三金堂が造営されたものと考えられる。百済では泗泚遷都初期から滅亡期まで定林寺式伽藍配置が造営され続けた。したがって、このような様式の伽藍配置は広い意味で「百済式伽藍配置」と呼んでもよいだろう。ただし、以上の検討は伽藍配置の外形に対する形態的分析のみ依存しているため、今後建物の基壇構造や規模、建物間の中心距離をはじめとする造営計画の分析、建物址の機能に関する検討などを通して補完する必要がある、中国や新羅、日本の寺院との比較も求められる。

一方、百済伽藍の建物址の中で陵山里寺址の講堂址で確認されたいわゆる「一棟二室建物址」にも注目する必要がある。この建物址は中国集安東台子遺跡で初めて確認されたが、最近では益山王宮里遺跡の第一建物址、弥勒寺址の講堂址と僧房址でも確認されている(図四一二)<sup>54</sup>。そのうちの図四一二の三の弥勒寺址講堂址の場合、東室は礎石の上に柱を立てて空間を作り、西室は壁体を利用して内部

空間を構成した特異な構造をしている。これは陵山里寺址の講堂址(図四一二の一)と非常に類似している。また、図四一二の四の弥勒寺址僧房址の場合、一棟二室型式の建物を並列させたと思われるが、このような構造は慶州皇龍寺址の創建伽藍の講堂址下部遺構と非常に類似している(図四一二の六)。また、慶州感恩寺址の工房址でも一棟二室建物址が確認されるなどその事例が増加している。そうした点で一棟二室建物は百濟建築の専有物であると断定することは難しいが、寺院の運営や生活と関連した百濟建築の特徴の一つとして、古代寺院の機能と性格を理解するうえで重要な意味を持つと考える(所謂「一棟二室建物」と日本の初期寺院との関連性に対しては本稿の第六章第一節参照)。

## 第二節 泗泚期塑像の展開過程

### (一) 塑像の出土状況

扶余と益山を中心にした百濟故地からはこれまで多数の塑像片が出土している。百濟で初めて塑像が出土したのは扶余扶蘇山廢寺址であり、一九四二年八月下旬に米田美代治氏、藤澤一夫氏はここから壁画片と塑像片、風鐸の舌などを発掘した。その後、藤澤氏は一九四二年九月と一九四三年十一月に扶余旧衙里一帯の寺院遺跡を調査し、その際にも多量の塑像片が出土した。扶蘇山廢寺址の出土品については、当時すでに法隆寺五重塔のような木塔の内部を荘嚴する塔本塑像であると推定する見解が提示されていた<sup>55</sup>。

一九四五年以後は、一九六四年三月に扶余郡恩山面金剛寺、一九六四年十月に扶余臨江寺址、一九七一年五月に青陽汪津里窰址から塑像が発掘されたが、目立った注目はあびなかった。その後、一九七九年から行なわれた扶余定林寺址の発掘において、多量の塑像が出土し研究者の耳目を集めたが、本格的な研究成果には繋がらなかった。一九八〇年、益山弥勒寺址から彩色された塑像片と磚片が発掘されており、一九八六年には青陽本義里窰址から塑造の大型台座が発見された。一九九〇年代以降には扶余陵山里寺址と益山帝釈寺址廢棄場遺跡から多量の塑像片が発掘され、最近では益山王宮里遺跡と弥勒寺址西石塔からも塑造の螺髪が発見された<sup>56</sup>。

百濟故地から出土した塑像の大部分は形態がわからないほど破壊された状態で出土しているため、これまで特別な関心を持たれることがなかった。塑像は発掘調査や地表調査によって発見されてきたが、塑像は美術史学の研究対象であるという認識のため考古学からは等閑視され、また美術史学分野においても頭状や相好、手印、衣文などの特徴の把握が難しい破片がほとんどであったため、あまり関心が払われなかった。百濟の塑像発掘において画期的な転換点となった定林寺址の出土品においても、これを「陶俑」と命名して墳墓に副葬する明器であると誤認させ、この分野の研究を遅延させるもうひとつの原因となった。

しかし、筆者は定林寺址出土の塑像を再検討し、百濟故地から出土した塑像の様相と、中国や日本における塑像の出土事例との比較を通じて、それが元来木塔を荘嚴していた塔本塑像であったと推定した(本稿の第二章第一節参照)。その過程で、これまで断片的にしか知



られていなかった百済故地出土の塑像を総合的に整理する必要性を痛感した。そこで本節では百済故地出土塑像の展開過程と特徴を整理していく。まず、扶余と益山など百済故地において確認された塑像の出土様相を整理した後、その変遷過程と奉安場所と製作技法の特徴、系統に関する問題を検討し、高句麗や新羅、日本から出土した塑像との関連性についても簡略に言及する。

これまで百済故地では全部で十二遺跡から塑像が出土している。そして、それらの事例を出土位置、製作技法を中心に紹介し、その同伴遺物との相対編年を通して製作時期を推定する。製作技法に関する叙述では胎土、成形方法、焼成の有無などについて主に検討したが、特に成形方法の場合、范型使用の有無、芯木の使用痕、頭部と胴体の結合方式などに注目して検討する。

#### 一) 扶余定林寺址

定林寺址出土の塑像は、そのほとんどが西回廊址と南回廊址が接する南角の大型瓦廃棄堅穴から赤色の焼土・瓦片とともに出土した。これまで百六十点余りが出土しており、大型塑像、中型塑像、小型塑像、情景塑像(影塑像)など多様な大きさと形態をなす塑像片が確認されている。定林寺址から出土した塑像は泗泚期の塑像中で最も古い段階に属し、製作時期は泗泚遷都直後、具体的には『梁書』、『南史』、『三国史記』などに記録された五四一年の「梁武帝の工匠・画師の派遣」を契機に製作されたものと考えられる。ここから出土した塑像については、第二章第一節と第二節で詳細に検討した。

#### 二) 扶余陵山里寺址

陵山里寺址では、木塔址の心礎石の下層基壇周辺から二〇点余り、中門址南側から二点、講堂址北側にある推定僧房址(第二建物址)の西側から一点の塑像片が出土しており<sup>57</sup>、残存高から情景塑像と装飾像であると考えられる。そのうち、塑造坐像二点は残存高が二二センチ程度の坐像であり、頭部が無く手勢が違うのみでほぼ同じ形態である(図四一三)。頸には先の尖った頸飾があらわされており、衣文は陰刻線で表現している。二点ともに頸部には別に製作した頭部をはめ込むための凹みがもうけられている。裏面を見ると背中は平

らであるが、脚部が何かに固定できるように「コ」字型に曲がっている。一点は天衣が風に翻っているように流麗で、盒子のような持ち物をささげており、他の一点は両手を長い布で覆っている。形態からみると、如来像というより菩薩像や供養者像であると考えられる。

頭像は、頭に帽子を被るものと剃髪相のもの二点が出土したが、両方とも頸部には穴が穿たれている(図四一三二)。後者の場合、定林寺址と洛陽永寧寺出土の僧侶像と酷似している。身像は大部分衣文片であるが、菩薩装の下半身片と俗人装の上半身片が含まれている。前者はX形に大きく交叉する天衣や右大腿部のO字型衣文が残存する。後者は文官や侍者の胴体片であると考えられる。装飾像としては二種類の木葉装飾が出土した。

陵山里寺址の塑像は全て頭部と胴体を別に製作して接合した頭体別製式であり、芯木を使用した痕跡がよく残っている。塑像の成形には手捏法と范拔が同時に使われたと考えられる。

二点の坐像は手で捏ねて作る手捏法によって製作され、頭像や身像、木葉のような塑像は范拔で製作されたと考えられる。范拔の場合には裏面が平らであるため、片面范を利用したと考えられる。塑像は基本的に焼成されたと考えられるが、塑造坐像の場合は裏面の形態が「コ」字形に曲がっており(図四一三三の最上部)、骨組として使用された有機物の痕跡が残っており、どこかに像を固定した後に手捏法で成形して乾燥させた乾燥式で製作した可能性があると思われる。塑像は最終的に白色系統の灰漆を塗って仕上げた後、追加的に彩色があつたとみられるが、現在ではほとんど残っていない。塑像の製作時期は木塔址心礎石の内部から出土した昌王銘の石造舍利龕の銘文に見られる昌王十三年(五六七)以後であると考えられる。

### 三) 扶余旧衙里寺址

旧衙里寺址は扶蘇山城の南側、官北里推定王宮址の西側に位置し、一九四二年および一九四三年に藤澤一夫氏によって調査された。報告書は発刊されていないが、藤澤氏によると、一九四二年九月に旧衙里の台地南側の採土場から方形の舍利孔がある心礎とともに多量の蓮華文瓦当、「丁巳」銘の印刻瓦、高麗時代の「天王」銘の銘文瓦などが発見されたという。藤澤氏は丁巳を威徳王四十四年にあたる五

九七年に比定し、高麗時代の天王銘瓦は『三国史記』義慈王二十年条にみえる天王寺と関連していると理解した<sup>58</sup>。また、一九四三年十一月には旧衙里の扶余警察署の裏庭から数種類の型式の瓦当と施釉された陶製仏像片、埴塼などを収拾したという<sup>59</sup>。その後、この一帯に対する再調査があり<sup>60</sup>、筆者が総合的に検討した結果、一九四二年と一九四三年の二つの旧衙里遺跡は同一遺跡であり、旧衙里寺址と命名するのが適切であるという結論に至った<sup>61</sup>。筆者は、ここから出土した塑像片には「塔址北」と記されたものがあり、木塔の心礎石も残っているため塔本塑像の一部であったと推定した。

旧衙里寺址からは大型塑像は発見されていないが、小型塑像や情景塑像の四十余点が出土した。中型塑像に分類できる衣摺片が出土しているが、その原型については不明である。小型塑像は仏頭をはじめとする頭像片が含まれている(図四一四)。ほとんど情景塑像で、頭像と身像、衣摺片であり、動物裝飾も一緒に出土している。仏頭片は、顔の四分の一しか残っていないが、端正な姿の鼻や口が確認できる。頭像片一・二の場合、破損されているが、口を大きく開いて悲嘆にくれてすすり泣く仏弟子の頭像で、法隆寺五重塔の塔本塑像に見られる涅槃場面の仏弟子の様子を連想させる。頭像片9は二弁形の髪を結んだ人物の頭像であり、洛陽永寧寺の小型及び情景塑像の髪飾と類似する<sup>62</sup>。

情景塑像の場合は、剃髪の頭像片と人物像片がほとんどである(図四一四)。人物像片の中に頭像はないが、完形の人物像が残っており、残高が一五・七センチで俗人像であると考えられる。その他にも笏頭履を履いた下半身片、合掌する供養者像とみられる坐像片、侍衛する姿の武士像片などが一緒に発見された。動物裝飾の場合、熊として紹介されているが<sup>63</sup>、後述する扶蘇山麁寺址出土の象像片や四川省成都出土の仏教造像の事例を参考すると、獅子像であった可能性が高いと考える。

旧衙里塑像の製作技法については、中型塑像の場合は明らかでないが、小型及び情景塑像の場合は頭部と胴体を別々に製作した後に組み合わせた頭体別製式であることが確認できる。頭像片と身像片は芯木を使用した痕跡が確認されており、頸と胴体に小さな孔と凹みが残っている。成形方法は中型塑像の場合は、大型であるため手捏法が使用された可能性もあるが、小型および情景塑像の場合は、定林寺址出土のものと同様であるために范拔を使用したと考えられる。

旧衙里塑像の製作時期は明確ではないが、旧衙里一帯の台地造成による盛土の様相や蓮華文瓦当などの共伴遺物、特に井戸址の最下層から出土した「丁巳」銘印刻瓦を五九七年と考えた場合、少なくともそれ以前には製作されたと考えられる。また、旧衙里一帯からは日本の飛鳥寺創建瓦の星組・花組系列の瓦当がすべて出土しているため、飛鳥寺より若干古い六世紀中後半頃に製作されたと考えられる。  
640

#### 四) 扶余臨江寺址

臨江寺址は、東羅城の東南側の外郭、錦江の北側に位置しており、東国大博物館によって試掘調査が実施された。調査の結果、正面五間、側面四間の建物址の周辺から瓦当と塑像片が出土したが、略報告書のみ刊行されている<sup>65</sup>。ただ最近、この寺址に対する精密地表調査と発掘調査が実施されており、今後の成果が期待される<sup>66</sup>。ここから出土した塑像は一九六四年の試掘調査で出土したもので、これまで一点しか公開されていないが、筆者が再調査した結果によると、塑造人物像片をはじめ、三〇余点の破片が同時に出土していたことが確認された<sup>67</sup>。

臨江寺址塑像は塑造人物像片と衣摺片、足片、裝飾破片などを除くと、すべて形態が把握できない破片である(図四一五)。塑造人物像片の場合、残存高が一・七センチであり、頸には穴が残っており、膝まで垂れる上衣をつけるが、胸部にはU字形の簡略な衣文線が表現されている。裏には陰刻線で簡略な衣文が施されており、左右脚の後部には芯木痕が残っている。右脚を若干前に出して歩行するような姿勢を取っており、定林寺址出土の下半身Nと類似している。右靴には、足の甲に黒色で縞模様が裝飾されている。右足は指まできわめて精巧に表現されており、足下に踏みおろした台座の一部がともに残存している。裝飾破片の場合、動物の眼、鼻、歯があらわされており、胴体部には足とみられる痕跡が残っている。裏にはどこかに付着していた痕跡が残っており、葦のような材料を芯として使用した痕跡とみられる。その他にも蓮華座の一部であると思われる蓮華文裝飾片が残っており、最近の国立扶余博物館による発掘調査では赤色と黒色に裝飾した壁体片が収拾されている。

塑像の製作技法は手捏法であり、頭部と胴体を一緒に製作した一体式である可能性がないわけではないが、塑造人物像片の芯木の痕跡からみると、范拔と頭体別製式である可能性も残っている<sup>66)</sup>。一部の塑像の中には泗泚期の塑像で共通して確認される芯木の使用痕跡と彩色痕跡がみられる。塑像の製作時期は共伴した瓦当を通してある程度推定できる。つまり、ここから出土した蓮華文瓦当は扶余亭岩里窯址と同范品であり、亭岩里窯址出土品の場合は瓦当面と丸瓦を接合する際に別の白色粘土を使用したという特徴があるため、同范かどうかを簡単に判定することができる。亭岩里窯址B地区の操業時期は六世紀中後半であると推定されている<sup>67)</sup>。したがって、筆者は共伴遺物と塑像の様式から、臨江寺址塑像を旧衙里寺址塑像より若干新しい六世紀後半頃に製作されたと推定できる。

#### 五) 青陽汪津里窯址

青陽汪津里窯址は扶余市街地から約五・五キロ離れた錦江北岸に位置し、全部で六基が確認され、うち五基が登窯、一基が平窯であると判明した<sup>70)</sup>。塑像は平窯である四号窯址から瓦磚類、土器と共に出土した。塑像は十二点が出土しており、すべて赤褐色の硬質で、一〇センチ程度の残片に過ぎない。形態によって身像であると推定できるものもあり、衣文が簡略に表現されたものが残っている(図四一・一六)。汪津里窯址出土の塑像からは製作技法や形態を推定することができないが、泗泚期の塑像が扶余の周辺地域において主体的に生産されていたことを示すもので、これらはきわめて重要な意味を持つ。汪津里窯址の操業時期は蓮華文瓦当や印刻瓦などの共伴遺物からみて、六世紀末から七世紀前半と推定される<sup>71)</sup>。塑像もその頃に製作されたと推定され、旧衙里寺址や臨江寺址より若干新しい時期のものと考えられる。

#### 六) 青陽本義里窯址

青陽本義里窯址は公州市の西側約一〇キロ、扶余邑の北北東約二〇キロ離れたところに位置する半地下式登窯で、一九八六年に国立公州博物館によって調査された<sup>72)</sup>。ここからは塑造の大型仏像台座が出土している。これは全部で七つの部材に分かれ、前面三つ、側面

一つ、後面二つの部材をそれぞれ組み合わせたものである(図四一七)。下段の横幅が二五〇センチ、高さが九〇センチであり、元来は大型塑造仏像をその上に載せていたと考えられる。台座に垂れている裳裾は、正面中央にU字形の衣文線を対称的に並べたものが二、三回重ねて垂れており、両側面にも類似する形態の衣文線が台座を覆っている。裳懸座はいくつかの大きな蓮弁で構成された蓮華座の上に置かれる。このような裳懸座は扶余軍守里寺址出土の蠟石製如来坐像にもみられ、この台座は中国の事例に見られるものよりかなり単純化した形態に変化したものと評価されている<sup>73</sup>。

仏像台座の製作技法は上質の粘土で基本骨格を作った後、その上に再び塑土をかぶせて文様を彫刻する手捏法によって成形された。一次成形の厚さは二〜三センチであり、その上に二次成形として衣褶、蓮華文などの文様を刻んだ塑土の層を二〜三センチの厚さでかぶせて成形している。七つに分割しているのは、大きいので窯で一緒に焼成することが難しかったためであろう。七つに分割された台座には直径一・五センチほどの孔が四、五個ずつ穿たれており、裏面には鋸状の取っ手が三つずつ付いている。これは焼成後に台座を接合させるために考案されたものであり、鋸は、運搬の便宜を図るためのものであったと考えられる。仏像台座の製作時期は台座の様式と共伴した蓮華文瓦当の編年など<sup>74</sup>を踏まえると七世紀前半から中半と考えられる。

#### 七) 益山帝釈寺址と廃棄場遺跡

益山帝釈寺址廃棄場は、帝釈寺址の伽藍中心部から北側に三〇〇メートル離れたところに位置する廃棄場遺跡で、日本の川原寺裏山と非常に類似する<sup>75</sup>。益山帝釈寺址の場合は、最近まで木塔の心礎石のみ残っており、木塔と塑像の関係については全く知られていなかった。ところで、最近円光大博物館と国立扶余文化財研究所の再調査を通して伽藍配置が確認され、瓦当をはじめとする多様な遺物が収められた<sup>76</sup>。帝釈寺址は『観世音応驗記』に、貞観一三年(六三九)火災によって焼失したという記録が残っており、現在帝釈寺址の廃棄場から出土された遺物たちは当時の火災による廃棄物と考えられる(本稿の第四章第一節参照)。

帝釈寺址廃棄場からは、塑像は破片を含めて全部で三百四十六点が出土しており、報告者によると、仏・菩薩・天部像類が二百八十二

点、神将像類が八点、悪鬼および動物像類が十四点、その他などに分類できるとい<sup>77</sup>。仏・菩薩・天部像類の場合は頭像をはじめとして額・耳・髪があり、上半身の場合は胸・肩・腰・腕・手などがあり、下半身の場合は脚、膝、足などと大衣や裾の衣摺片が多量出土した。神将類は頭像の破片(眼、額、鼻と胴体脚、足)が含まれている。悪鬼および動物像類は頭部と胴体片がともに発見された。

塑像は大型のものは発見されていないが、中型のものが見られる(図四十八)。下半身の破片四点は出土後に接合復元されたもので、残存高は二九・三センチあるが、本来は五〇センチ以上の中型塑像であったと推定される。ほとんどの塑像は小型であるか情景塑像であったと考えられるが、その中でも双髪の天部像の頭像片や悪鬼像の頭像片、動物像の頭像片などは、様式的に非常に優れた作品である。

手の破片は仏菩薩の手印というよりは供養者や侍者の手であると考えられる。また、笏頭履のように俗人像でよく見られる服飾も確認される。

悪鬼頭像片の場合は眼、鼻、歯、毛などがきわめて立体的であり、生き生きした表現がなされていて、右側面は平らになっている。これは立像がその上に踏み立てる程度の広さであり、残存部の形態によってそのような形跡が確かめられる。このような塑像とともに六二点の壁体片が出土しているが、それらは包壁体、一般壁体、特殊壁体に区分でき、表面の処理方法によって灰壁体、壁画壁体、砂壁体に細分できる。彩色の痕跡が残っている壁体の場合は表面を灰漆し、その上に壁画を描いたように見えるが、破片であるために内容については不明である<sup>78</sup>。

塑像の製作に使用された粘土は藁などの草本類を混ぜた荒土と砂粒が多く混じる粘土、上質の微細粘土などの三種類が確認できる(図四十九)。ほとんどの塑像には芯木痕が残っており、角木や円形、角木と円形を一緒に使用したものなどがある。塑像の胎土と芯木の関係を詳しくみると、量感が必要な部分には中に藁がまざった胎土を用いており、他にも「芯木+藁がまざった粘土+砂粒+微細粘土」でつくられたものや「芯木+微細粘土+麻布+微細粘土」でつくられたもの、「芯木+微細粘土」でつくられたものなど、必要に応じて臨機応変に用いている。成形は手捏法が使用されており、頭部と胴体を別につくって接合した頭体別製式が利用されたと考えられる。仕上げの段階には彩色の工程があったと考えられるが、ほとんど残っていない。

帝釈寺址廃棄場出土の塑像は川原寺裏山遺跡の事例を参考すると、当初の七層木塔に奉安されていたものがここに廃棄されたと考えられるため、製作の下限は大火事があった六三九年であると考えられる。最近、帝釈寺木塔址の北方五キロの地点で、東西一〇・三メートルにわたる大きさの廃棄堅穴が見つかっており、ここからも多量の瓦片とともに塑像片が出土した<sup>7)</sup>。塑像の製作時期は共伴している瓦当の年代や本義里窯址の仏像台座と製作技法が類似することから七世紀前半を中心時期とするものと推定できる。

#### 八) 益山弥勒寺址

弥勒寺址では中院金堂址や西院金堂址、中院木塔址、東院石塔址周辺から彩色が施された塑像片が出土している(図四一二十)<sup>8)</sup>。弥勒寺址の場合は非常に広い地域から断片的に出土しており、発掘報告書にも図版が紹介されるのみであるため実態を把握するには限界がある。ただ、西院金堂址の比較的安定した層位から螺髪片と塑像片が出土しており、中金堂の内部からも多量の塑像が出土しているために両金堂址には塑像が一緒に奉安されていた可能性が高い。膝とみられる断片には衣文の一部に彩色の痕跡が残っており、赤褐色の色調や硬度が帝釈寺址廃棄場出土品と類似する。一方、中院の西回廊坑からは埴仏片が出土しており、菩薩像の仏頭であると考えられる。製作時期は統一新羅時代であると推定されている<sup>9)</sup>。しかし、埴仏が寺院の堂塔の内部を荘厳した装飾として使用された可能性が高い点から<sup>10)</sup>、埴仏も塑像とともに百濟時代に属するものと見ることが妥当であろう<sup>11)</sup>。最近、西石塔の解体修理の過程で南側通路の下部から八九点の小形螺髪が発見されている(図四一二十一)。弥勒寺址塑像の製作時期は、西石塔出土の舍利奉安記によると六三九年に伽藍が建立されたと記録されていることからその前後に製作されたものと考えられる。

#### 九) 扶余金剛寺址

扶余郡恩山面琴公里に位置する金剛寺址は一九六四年および一九六六年の二度にわたり国立博物館によって調査されており、東西方向を中心軸にした一塔一金堂式の伽藍配置が確認された<sup>12)</sup>。ここから出土した塑像は三種類で、人物像の下半身片と足片、螺髪などが残



つている(図四一二十二)。下半身片と足片は申告品であるが、螺髪は金堂址一帯から発掘によって收拾されたものである<sup>86)</sup>。足片の場合には右足の一部と台座しか残っていないが、爪まで非常に精巧に表現されている。二点の申告品は手捏法で製作されており、仕上げの段階で白色漆を施した痕跡が残っている。円錐形の螺髪は三・五×五・五センチの大きさとで范抜きによると考えられる。

金剛寺址からは二重基壇の木塔址と一緒に発掘されているが、その周辺からは塑像が收拾されなかった。そうした点から金剛寺址と弥勒寺址の事例は金堂址と塑像の組合わせがあったことを示すと考えられる。金剛寺址塑像の製作時期についての詳細は不明であるが、共伴した瓦当の中には汪津里窯址出土品と同范品がある。扶余地域出土瓦当の相對編年案を参考にすると七世紀前半から中半にあたりと考えられる。

#### 十) 扶余旧橋里寺址

旧橋里寺址は、推定西羅城の外郭の錦江辺に位置し、藤澤一夫氏によって調査されたというものの記録は残っていない。しかし、韓国戦争以後にこの一帯から塑造仏頭片が一点発見されており、現在国立扶余博物館に保管されている。塑造仏頭片は残高が五・七センチで、黄褐色を呈し頭の上には小さい穴が穿たれている(図四一二十三)。頸には穴がなく黒色の漆痕が残っており、鼻は破損しているが、眼と唇、肉髪が残っている。後頭部は扁平であるが、仕上げの形状からみて范抜で成形された可能性がある。ただ頭体別製式の製作技法では共通して確認できる頸部の芯木の痕跡がみられないのが特徴である。藤澤氏によると、ここから「己丑」銘の印刻瓦が発見されたというが<sup>87)</sup>、己丑は六二九年に該当する。塑造仏頭片の様式的な特徴と共伴した蓮華文瓦当の相對編年案に勘案すると、その時期の前後である七世紀前半～中半の製作と考えられる。

#### 十一) 扶余扶蘇山廢寺址

扶蘇山廢寺址は、扶蘇山の西南側に位置し、一九四二年の調査当時には木塔址周辺から塑像が、金堂址周辺からは壁画片が出土した。

また、一九八〇年には国立扶余博物館によって再調査された<sup>87)</sup>。現在、国立扶余博物館には頭像片四点と動物像片一点、上半身片一点が残っている(図四一二十四)。頭像片は仏菩薩像であると推定できるものと人物像片がともに残っているが、二点は同範品である可能性がある。動物像は、象の頭部のみが残存しており、主尊仏の周囲に配置され莊嚴をなしたと考えられる。扶蘇山麿寺址出土塑像は芯木を使用しており、頭体別製式、低火度の焼成、彩色痕などの特徴が確認される。成形時の范拔であるか、手捏法であるか判断し難いが、同範品が存在することからみると、両方が併用された可能性もあると考えられる。

扶蘇山麿寺址出土塑像の製作時期と関連して、一九八〇年の再調査で木塔址の心礎石から東南に一・五メートル離れた地点から出土した唐式帯金具の年代が注目される。これについては、『三国史記』百濟本紀武王三十八年(六三七)条の唐太宗が百濟使臣に錦袍と彩帛の三千段を与えたという記録<sup>88)</sup>に注目して、それ以後に比定した研究がある<sup>89)</sup>。これと共伴した蓮華文瓦当の相對編年案に勘案すると、塑像は六三七年以後である七世紀中半以降に製作されたと考えられる。

## 十二) 益山王宮里遺跡

益山王宮里遺跡の窯址5から採取した土を水洗選別する過程で一点の螺髪が出土した(図四一二十五)<sup>90)</sup>。この遺構は百濟末期の窯址であるが金属用坩堝と金銀琉璃製品、開元通宝片などが混入していた。遺構の性格と共伴遺物を考慮すると、百濟末期に該当するものと考えられる。

## (二) 塑像の変遷と特徴

百濟故地で製作された塑像は泗泚期の扶余と益山地域の寺址や窯址でのみ発見されるが、その中でも定林寺址、陵山里寺址、帝釈寺址、麿棄場遺跡の場合、文献記録や金石文を通して絶対編年の基準となる資料が得られ製作時期を推定する際の手がかりになる。ここではまず塑像が出土した各遺跡の相對的な前後關係を推定してみることにする。

## 一) 塑像の製作時期

扶余定林寺址は五四一年の梁武帝が工匠・画師を派遣したとする記事と関連していると理解されるため、塑像はそれ以後のある時点に製作されたと考えられる。定林寺址は百濟故地における塑像出土遺跡の中でも古い時期に属しており、その系統を議論するうえできわめて重要な遺跡である。陵山里寺址は、昌王銘の石造舍利龕に昌王十三年の年記がみられるため、五六七年前後のある時点で製作されたものと考えられる。特にここから出土した塑像は製作の絶対年代が確かめられ、木塔と塑像との関連性がよくあらわれている。帝釈寺址廃棄場遺跡は、『觀世音応驗記』によると六三九年に帝釈寺が焼失したと記録されるため、それより古い七世紀前半に製作されたと考えられる。ここで出土した塑像は製作時期、奉安場所はもとより、その廃棄の様相をもよく示すもので、七世紀代の塑像についての基準資料になるといえる点で注目される。

百濟故地における他の塑像出土遺跡は、前述の遺跡から出土した塑像との比較や瓦当などの共伴遺物を通してある程度の相対編年と製作時期を推定できる。その中でも旧衙里寺址の場合、塑像の形態や製作技法が陵山里寺址よりはるかに洗練されており、人物像の表現もより生きいきとした表現である。また、旧衙里井戸址から出土した「丁巳」銘の印刻瓦を五九七年とし、共伴した蓮華文瓦当の文様が飛鳥寺の創建瓦とも関係することから、六世紀中後半頃、陵山里寺址の次段階に位置づけることができるだろう。

臨江寺址は、塑像だけを見ると旧衙里寺址と近い時期に製作されたと考えられるが、創建期の瓦当とみられる蓮華文瓦当が亭岩里窯址の出土品と同範である点が留意される。亭岩里窯址の操業は六世紀中後半が中心時期であるため、旧衙里寺址との前後関係が判断し難い。ただ、旧衙里・官北里一帯からは亭岩里窯址で生産された蓮華文瓦当の出土事例が少なく、「丁巳」銘の印刻瓦が出土した井戸址からもそうした型式の瓦当は出土していない。旧衙里寺址の次の段階に築造された官北里大型殿閣建物の盛土層からこの型式の瓦当が出土している点を勘案すると、旧衙里寺址や亭岩里窯址における生産品は補修用の瓦当として使用された可能性がある<sup>1)</sup>。それゆえ臨江寺址は旧衙里寺址の次の段階に位置づけることができると考える。

七世紀代の遺跡については、現段階で扶余と益山地域における瓦当の交差編年作業が不完全であるため、厳密に順序立てることは難しい。その中でも益山帝釈寺址廃棄場遺跡は出土遺物の質量において他遺跡の相対編年の基準となる。帝釈寺址の場合、上限が明確ではないものの、出土瓦当をはじめとする共伴遺物の相対編年案と周辺遺跡の益山王宮里遺跡の発掘成果を考慮すると<sup>2)</sup>、武王代初期にあたる七世紀前半を建立の中心時期とみなして無理はないと考えられる。

青陽汪津里窯址は塑像が出土した四号窯址は平窯で、その構造が王興寺址の三号瓦窯址と非常に類似している。つまり、両窯址は二つの焚口と二つの煙突、オンドル式焼成室を備えた独特な構造となっている<sup>3)</sup>。王興寺址の三号窯址から出土した蓮華文瓦当は中房の蓮子が一十八であり、ハート形の蓮弁をつくっており、五七七年に創建された王興寺址の創建瓦の中では若干新しい段階に属するものと考えられる。こうした点を考慮すると青陽汪津里の四号窯址は王興寺窯址より若干新しい六世紀末を上限とし、七世紀前半を中心時期と比定することができる。青陽汪津里窯址と益山帝釈寺址出土の塑像の製作順序は前者がほとんど破片の状態で出土しているため直接的な比較が難しいが、共伴遺物と窯構造などを判断すると、前者が若干先行するか併存していたと考えられる。一方、青陽本義里窯址出土の塑造仏像台座はそれのみでは相対編年が困難であるが、共伴した蓮華文瓦当の編年を勘案すると、帝釈寺址廃棄場より若干新しい七世紀前半に位置づけることができよう。

弥勒寺址の出土品は、西石塔出土の舍利奉安記による六三九年を参考すると、その前後である七世紀中半のものと想定され、こうした点から帝釈寺址廃棄場の出土品より一段階新しい時期に製作されたと考えられる。金剛寺址や旧橋里寺址、扶蘇山廢寺址出土の塑像は、帝釈寺址廃棄場の出土品と比較して厳密な相対順序を確定することは容易でない。中でも金剛寺址と旧橋里寺址から出土したものは、帝釈寺址のものとはほぼ同時期に併存していた可能性もある。ただ、扶蘇山廢寺址は共伴遺物や文献記録との比較検討により七世紀中半以後と推定され、現在まで発見されている百濟の塑像の中で最も新しい時期に該当すると思われる。以上の議論を整理すると、百濟故地で出土した塑像製作の相対序列は定林寺址―陵山里寺址―旧衙里寺址―臨江寺址―汪津里窯址―帝釈寺址廃棄場、本義里窯址、金剛寺址、旧橋里寺址―弥勒寺址―扶蘇山廢寺址―王宮里遺跡と推定できよう。

## 二) 製作技法の変化

塑像の製作時期を考慮しながら塑像の製作技法の変化過程を考察していきたい。まず胎土は最も古い時期に属する定林寺址の塑像をみると、大小型のすべての塑像に不純物が混在しない精選された胎土を使用している。しかし、陵山里寺址、帝釈寺址廃棄場遺跡出土品では、小型・中型塑像には藁を混ぜた荒土、砂が多く含まれた粗い粘土、上質の微細な粘土などが用途に応じて臨機応変に使用されている。ただ、この場合にも精密な表現を必要とする身体部位や装飾表現、小型の塑像の製作には共通して上質の胎土を使用している。

塑像の製作は基本的に芯木を使用している。小型や情景塑像の場合は木材や竹、葦のようなものを用いており、中型塑像の以上は藁や葦を束ねるか、木材に藁縄を巻きつけたものを骨組として使用している。一方、青陽汪津里窯量や帝釈寺址廃棄場遺跡出土品には、成形の過程で麻布を用いて補強した痕跡が確認されたものもある。

塑像の成形方法は、手捏法、范拔、手捏法と范拔を混用したものがすべて確認される。その中で手捏法は定林寺址の中型・大型塑像から帝釈寺址廃棄場、扶蘇山廃寺址など全時期の出土例において確認できるが、范拔が難しい中型以上の塑像の製作に使用されたと考えられる。帝釈寺址廃棄場出土の悪鬼像の場合、手捏法を利用して細密で生きいきした表現する段階にまで達している。范拔には二種類あるが、片面の范型を利用した単模製と、両面の范型を利用した合模製がともに確認された。単模製の場合は、定林寺址、陵山里寺址、旧衙里寺址などから出土した六世紀代の小型塑像・情景塑像が主流を占める。しかし、帝釈寺址廃棄場、扶蘇山廃寺址のような七世紀代の遺跡の場合には塑像の背面側にも衣文が表現されるなど合模製を利用した可能性が高い。こうした変容は、金銅仏の場合とも軌を一にするもので、六世紀と七世紀の金銅仏を比較した場合、七世紀の金銅仏には背面に衣文や肉体の表現がみられるようになる。一方、定林寺址の大型塑像は基本的には手捏法を使用して成形しており、瓔珞や装飾表現は范拔を利用した可能性が考えられる。

范拔を利用した場合は基本的に頭部と胴体を別々に製作した後に結合させた頭体別製式が用いられた。これは定林寺址、陵山里寺址、旧衙里寺址、帝釈寺址廃棄場、扶蘇山廃寺址など全時期の遺跡にわたって確認されている。ただ、臨江寺址や旧橋里寺址のように頸の凹

みや孔が設けられた痕跡がない事例もみられ、比較的小型である情景塑像の中には頭部と胴体を一緒に製作した一体式も共存していた可能性がある。

成形が終わった塑像は焼成の過程に入る。しかし、定林寺址の中型塑像の場合、現状でも胎土が手に付着する程柔らかいため、焼成をしない乾燥式で製作されたのではないかという疑問が想起される。しかし、中国の乾燥式塑像とは異なり表土と内部土に同一の胎土を使用しており、また表土と内部土の色が均一である点、玉ねぎの皮のような断層が見えない点、乾燥式であるなら地中で発見されたものは現在のような形態を維持することが難しいと考えられる点、釉薬が塗られた小型塑像(図二一六)と色が同じである点などを考慮すると、低火度であつても焼成した可能性が高いと考えられる<sup>94</sup>。

ただ、陵山里寺址から出土した二点の塑造坐像をみると灰黒色を呈し、裏面に「L」字形に曲がっており、裏面に葦のようなものを骨組としていた痕跡がよく残っている(図四一十三)。これはどこかに像を固定した後手で成形し、乾燥後にすぐ安置した乾燥式の製作方法によるものと考えられる。このような点からみると、六世紀代の塑像は焼成式と乾燥式が一定期間併存していた可能性がある。しかし、汪津里窯址、帝釈寺址廃棄場などの七世紀に属する遺跡から出土した塑像はすべて非常に硬質化しており、基本的には焼成が施されたものと考えられる。

また、百済故地から出土した塑像は最終的に彩色を施して仕上げたものと思われる。仕上げ材としてどのような顔料を使用したかは不明であるが、白色や灰色、紫色、黒色などの彩色痕が確認される。定林寺址出土の小型塑像の中でも仏頭からは黄褐色を施した痕跡が確認されたが、このような施釉工程は他の塑像の彩色過程と同一な性格の工程であると考えられる。ただし、塑像に彩色の代わりに釉薬を使用した点が異なる。一方、扶蘇山廃寺址出土塑像の場合、発掘時には「風貌端麗の小塑仏像に金泥を塗抹したように所々に金色の残影が確認できた」という<sup>95</sup>。現存する資料の中にそうした痕跡は確認されていないが、今後の保存科学的な分析を通してそのような痕跡が確認できる可能性は残っていると考えられる。

### 三) 奉安場所

百済の塑像は廃寺址や窠址から発見されている。ここでは廃寺址で発見された塑像の出土位置を具体的に検討してみると、興味深い事実が認められる。つまり、塑像の奉安場所の問題に関わる点である。ただ、発掘調査を通して発見された塑像の出土位置は塑像が廃棄された結果であることを同時に勘案しながら奉安場所の問題についてアプローチする必要がある。

まず、定林寺址の場合は西回廊址と南回廊址が接する地点の大型瓦廃棄竅と金堂址附近から塑像が発見された。ところで、双方で見られた塑像には製作技法に若干の違いがある。つまり前者からは灰白色を帯びた大型塑像のみが発見されたのに対し、後者からは赤褐色で中型以下の塑像のみが発見されたのである。このような違いは双方から出土した塑像がそれぞれ異なる場所に奉安されていた可能性を示唆するもので、そのような点から前者は金堂、後者は木塔に安置されていたと推定される(本稿の第二章第一節と第二節参照)。つまり、定林寺址の塑像は木塔の塔本塑像のみならず、金堂の主尊仏としても製作された可能性がある。

陵山里寺址の場合、木塔址の心礎石付近と中門址の南側、講堂址北側の推定僧房址の一带から塑像が発見された。中門址や推定僧房址から発見された塑像は木塔址で発見されたものと製作技法が同一であるため、廃寺となる過程で移動したものと考えられる。発掘調査者によると、陵山里寺址は六六〇年の百済滅亡期に廃寺となり、昌王銘石造舍利龕もこの時期に毀損されたと推定されている。<sup>97)</sup> という。こうした点を考慮すれば、陵山里寺址出土の塑像は木塔址に奉安された塔本塑像であることを示す最も確実な遺跡とみなしうる。

旧衙里寺址の場合、報告書が未刊であるため不明確な点があるが、現在も木塔の心礎石が残っており、残存する塑像にも「塔址」や「塔址北」といった記録があり、最近の官北里・旧衙里一帯に対する発掘の成果を総合的に検討した結果、木塔址の塔本塑像の一部であったことが推定できる<sup>97)</sup>。

益山帝釈寺址廃棄場は日本の川原寺裏山遺跡のように中枢伽藍の火災を経て廃棄された場所と考えられるが、『観世音応驗記』の記録や最近の心礎石周辺に対する発掘調査を通してこれらの塑像が元来木塔を荘厳した塔本塑像であったと推定できる。帝釈寺址にみられるような廃棄の様相は、川原寺裏山遺跡といった日本の類例のみならず、羅末麗初と推定される南原実相寺の寺域外郭の竅穴から数点の塑

造仏頭片が発見された事例があり、その仏頭の大きさと形態はいずれも同様であることが確認された<sup>99)</sup>。帝釈寺社のように木塔焼失後に塑像や瓦埵類を寺院の外郭に廃棄してから再び中樞伽藍を再建した事例や、定林寺址のように塔本塑像の残骸物を西回廊付近に埋めた後、既存の木塔址に石塔を再建した事例<sup>100)</sup>などは、先行する木塔の残骸物を除去する作業がそれほど難しくなかったことを示唆している。扶蘇山廃寺址の場合にも木塔址周辺から塑像が出土しており、塔本塑像の一部であった可能性がある。旧橋里寺址の場合には発見申告品であるために正確な出土状況は不明である。

一方、臨江寺址や弥勒寺址、金剛寺址の場合、出土した塑像が木塔ではなく金堂に奉安されていた可能性がある。臨江寺址の場合、最近の再調査において壁画が描かれた壁体片一点が出土している<sup>101)</sup>。この遺物が金堂址付近から収拾されたものであることから金堂に安置されていた可能性がある。弥勒寺址の場合、中院金堂址や西院金堂址、中院木塔址、東院石塔址周辺から塑像が発見されている。金堂址の場合、中院金堂と西院金堂の二か所の比較的安定した層位から出土している。したがって弥勒寺址の場合、西石塔下部から螺髪が見されており塔本塑像の存在を排除できないが、少なくとも両金堂には塑像が奉安されていたと考えられる。金剛寺址の場合、二点の収集品については不明であるが、螺髪は金堂址から発掘されたものである。定林寺址の金堂址をはじめ臨江寺址、弥勒寺址、金剛寺址の事例は百済の塑像が木塔を荘嚴する塔本塑像のみならず、金堂の主尊仏としても用いられたことを物語っている。

#### 四) 塑像の系統

泗泚期の塑像はいかなる背景と系統によって製作されたのであろうか。百済の塑像の中で最も古い定林寺址や陵山里寺址塑像についてこれまで北朝の墳墓から出土した陶俑や洛陽永寧寺出土の塑像との類似性から中国北朝系統の影響があったとみなされていた。しかし、五世紀後半から五六七年まで北朝と百済との間には公式使節の往来は途絶えていた上に、最近南京靈山墓のように墳墓からも籠冠をかぶった陶俑が出土しており、定林寺址からは宝珠棒持菩薩像のような南朝特有の仏教造像が含まれている。また定林寺社の創建期の瓦当は



南京の梁代遺跡出土の瓦当と非常に類似していることなども含め、南朝と百済の文物交流の結果であると解すべきである(本稿の第二章第一節)。

特に『梁書』などに記録された工匠・画師の派遣が定林寺址と関連するものと把握できるならば泗泚初期の仏教寺院は北朝でなく南朝の仏教寺院とより直接的に関連するといえる<sup>101</sup>。そうした点から最近上定林寺と推定される南京鍾山二号寺址<sup>102</sup>、延興寺と推定される南京建業区紅土橋から出土した塑像の製作技法が注目される<sup>103</sup>。つまり最近、南京地域の仏教寺院址から出土した塑像は片面范を利用した頭体別製式の製作方法、芯木の活用方法、彩色の痕跡と色彩、一部の頭像に黄褐色の釉薬が使用された点など、その製作技法が定林寺址をはじめとする泗泚期の塑像と正確に一致しているのである(本稿の第二章第一節の図二十参照)。この中で釉薬を使用した塑像の製作事例は、北朝地域の仏教寺院址からはいまだ確認されていない点で注目すべき要素である。したがって、文献記録と百済と南京地域から出土した塑像の製作技法の一致は、いずれも百済の塑像製作に南朝の技術工人の積極的な参与と技術の指導があったことを証明するものといえよう<sup>104</sup>。

一方、中国南朝の寺院に対する発掘調査の事例は皆無であるが、百済と北朝の仏教寺院の相違点についても注目する必要がある。それは、一つ目は永寧寺から講堂址が確認されていない点であり、二つ目は百済の木塔址からは塔心実体、または夯土塔心体と呼ばれる遺構が確認されていない点である。まず、講堂の問題を検討すると、洛陽永寧寺に代表される北朝の伽藍配置は仏塔を中心に仏殿が一直線上に配置されるが、仏殿の後ろに講堂が確認されなかった。これは南朝の影響を受けたと考えられる定林寺址をはじめ百済の伽藍配置においては共通して講堂址が確認される点と対照をなす。このような現状について楊泓氏は「南朝仏教は玄学義理を重視した。一方、北方仏教は宗教行為を重視した」と関連があるだろう」と述べている<sup>105</sup>。北朝の仏教寺院遺跡の発掘事例が多くないため断定し難いが、伽藍配置についても南朝と北朝の仏教寺院に違いがあった可能性に言及したことは注目すべきであろう。そうした相違点としては、最近百済の伽藍配置に共通して確認される東西回廊址の北側のいわゆる「東堂・西堂」のような建物址の存在も注目しなければならない(本稿の第二章第一節および第四章第一節参照)。

次に木塔構造にみられる相違点について検討していきたい。北朝の木塔址の場合、その内部に塑像を設置するため、塔の中央に土(日干煉瓦)と木(柱)で混成された方形の塔心実体、または夯土塔心体と呼ばれる遺構が残っている点が注目される<sup>106</sup>。北魏の方山思遠仏寺<sup>107</sup>、洛陽永寧寺址、東魏北齊時期の趙彭城仏寺跡<sup>108</sup>などでは一・二五メートル〜三・七メートルの高さの塔心実体が確認された。

その中で洛陽永寧寺の場合、日干煉瓦を積み上げた方形の塔心実体は、一辺が約一九・八メートル、残存高が三・七メートルである。残存する方形の塔心実体は日干煉瓦製の壁柱状をなし、東・南・西の三面にそれぞれ五個、弧形に窪められた龕の遺構が確かめられるが、いずれも損壊している。これらの日干煉瓦積みの壁龕はいずれも二本の柱の間に窪められることから、仏像を奉安する仏龕とみなされる。塔基壇の発掘調査時に出土した多量の仏・菩薩・弟子の塑像と多様な情景塑像は龕内および龕外の壁面に彫塑されたものと考えられる<sup>109</sup>。

ところで百済故地の木塔址が調査された遺跡では塔心実体、または夯土塔心体といえる遺構が全く確認されていない。定林寺址の塑像が出土した西回廊址の大型竪穴からも中小型の塑像とともに焼土の塊が出土しているが、これらは四天柱の壁面に使用されたものであると考えられる。帝釈寺址廃棄場からも瓦磚類、土器類と共に壁体類が出土しているが、建築部材の一部として壁面に使用されたと考えられる。

『高僧伝』などの文献記録をみると、南朝の木塔は刹柱をまず立てた後に中心刹柱に依支しながら、一層ずつ築き上げるか、あるいは一層をまず建立した後にその上を築き上げる方法であったという<sup>110</sup>。南朝地域の仏教寺院に関する考古学的な資料は皆無であるが<sup>111</sup>、日本の飛鳥地域の木塔の結構を参考にすると、南朝の木塔もそれと同じく内部に夯土塔心体を設置せずに心柱を中心とする木材を架構する構造であったと考えられる<sup>112</sup>。このように百済の木塔址や飛鳥の現存する木塔からは塔心実体または夯土塔心体と呼びうる構造は残っていない。このような木塔基壇部の構造は北朝ではなく南朝を淵源に持つことを示唆するものといえるだろう。

一方、南朝の磚築墳の中には、墓室の後壁に三層塔を形象化したと推定される新資料が紹介されており注目される(図四一・二六)<sup>113</sup>。南京市江寧区胡村において発見された磚築墳の後壁中央には画像磚と花文磚を利用して品字形に配列された塔型結構が確認された。下の

二基は三層で、高さ一・四四メートルである。両塔の間にも頂部に小規模の塔があるが、単層で高さは〇・五八メートルである。墓室の後壁にこのような特殊な装飾がつけられた事例は河南鄧県画像塼墓と南京西善橋南朝墓においても確認されており<sup>114</sup>、南朝晩期の仏教盛行という時代的な背景と関連するのであろう。これらの事例は、北朝の大型木塔と区別される南朝的な仏塔の具体的な形状を推定できる資料として大きな意味を持つといえよう。

以上を検討してみると、中国南北朝時代における木塔の基壇と結構方法は「北土南木」、つまり北朝では土を利用して築造された夯土積心を基礎として木塔が建立されたのに対し、南朝では心礎石の上に刹柱を立てた後に木で架構した木塔が建立されたというように、その技術的な違いを概念化することも可能であろう。このような木塔構造の違いは、塑像の安置方法の違いも伴うものであり、南朝や百済故地の塑像の数量が北朝地域に比べて貧弱な点を説明する手がかりとなりうる。この問題については今後、木塔の平面形態や舍利の埋納方法をはじめとする多様な方面からの検討を通して補完する必要がある。

### (三) 周辺国家の塑像との関係

百済故地における塑像出土遺跡は定林寺址をはじめ十二か所にもぼる。塑像の出土位置と製作技法の分析、中国の事例などを総合的に検討した結果、その奉安場所が木塔と関係する場合が多く、伝播ルートや系統については南朝に淵源を持つ可能性が高い点が確認できた。近年、南京地域の鍾山二号寺址や紅土橋遺跡から出土した塑像の事例がそのような推論を根拠づける実物資料であるといえる。その点において百済故地から出土した塑像は、南朝―百済―倭とつながる仏教文化の伝播ルートを証明する新たな資料として評価されうると考えられる。以下で百済の塑像と高句麗、新羅、日本の塑像との相関関係について簡単に言及していきたい。

高句麗故地からは、平安南道平原郡徳浦里万徳山付近の元五里寺址出土の塑像<sup>115</sup>と、平壤市楽浪区域の土城里出土の陶範<sup>116</sup>が知られている(図四―二十七)。前者の場合、一〇〇余点の禅定印仏坐像と二〇〇余点の菩薩立像が残っている。彫刻手法が柔らかく、衣文線は端正に整理されており、丸い立体感が感じられ、東魏の仏像様式と類似している点が指摘されている<sup>117</sup>。また、范型を利用して同じ

型から作られている点から延嘉七年銘金銅仏立像の銘文にも見られる千仏造成の信仰が流行のさなかにあった当時の信仰形態の一部として解釈されたこともあった<sup>118</sup>。また後者は、裳懸座の下段に覆蓮が表されているこのような形式は青陽陶製仏像の裳懸台座や南京栖霞寺の南齊時期の石造如来坐像の裳懸座により類似しており、高句麗の仏像様式にも北魏のみならず南朝の影響があったという見解が提起されている<sup>119</sup>。

元五里寺址出土塑像の製作技法と奉安場所に関する研究においては、ここから出土した塑像に芯木を使用した痕跡が残っているものの、頭部と胴体を一緒につくり出した一体式であり、成形後に焼成がなされたものと把握した<sup>120</sup>。一体式の成形方法は遼寧省思燕仏図からも出土した事例があるが、北魏の塑像においてはまだ焼成の痕跡が確認されていない。前述のように塑像の焼成は南朝や百済の塑像にみられる特徴的な要素である。そうした点から元五里寺址の塑像は奉安方法や製作技法の面から北魏の塑像との関連性があるが、「焼成」という要素や仏像様式の側面から南朝や百済との関連性をともに考慮せざるを得ない。

新羅の塑像の場合、靈廟寺丈六三尊をはじめ十個の事例と彫刻僧である良志に関する記録が『三国遺事』に残っている。その中で慶州四天王寺址出土の緑釉塑像と錫杖寺址出土の塑像は、彼の作品であるといわれている(図四一二十八・二十九)<sup>121</sup>。『三国遺事』良志使錫杖をみると、良志の出自は不明であるが、善徳王代(六三二〜六四六年)に頭角をあらわし塑造に優れており、殿塔の瓦をつくり、筆札にも長けていたという。四天王寺址の場合、六七〇年に着工して六七九年に完成し、彼の作品として「天王寺 塔下 八部神将」が記録されているため、文武王代にも活動していたと考えられる。ところが、韓国の美術史学界では慶州四天王寺址の緑釉塑像について「四天王像」とみるか、それとも「八部神衆」とみるかについての議論があり、最近の再発掘以後には『灌頂経』に記載される神王である「護塔善神」とみるべきであるという見解が提起されている<sup>122</sup>。

筆者はこれに関する知見を持たないが、百済の塑像との比較によって提起できる示唆点を指摘していきたい。まず、良志が塑造のみならず、瓦、書芸にも長けていた点である。これは良志、あるいは良志に代表された工人集団が塑像と瓦の製作、書芸に長けていたことを物語り、青陽汪津里窯址、本義里窯址出土品のように百済の塑像は瓦陶兼業窯において焼成された点と関連づけて検討する必要がある。

二つ目に注目したいのは、四天王寺址の緑釉塑像の製作技法において断面に三重の胎土層が発見された点や、施釉している点である<sup>1230</sup>。

慶州地域で発見された統一新羅時代の緑釉製品の場合、四天王寺址出土品が最も古い段階に属する。したがって、統一新羅の緑釉の発生は百済との関連性の中で把握する必要があるだろう<sup>124</sup>。なぜならば青陽本義里の仏像台座や益山帝釈寺址廃棄場出土の塑像からも二層または三層の断面が確認され、弥勒寺址の緑釉椽木瓦など、百済故地では多様な緑釉製品が確認されているためである<sup>125</sup>。また、統一新羅の初期に属する慶州陵只塔出土塑像の場合、大型塑像であるにもかかわらず焼成が行われたことが明らかであるため<sup>126</sup>、百済故地で出土した塑像との技術的な関連性が共に考慮されなければならないだろう<sup>127</sup>。

三つ目は四天王寺址の緑釉塑像の凶像と関連する問題である。この中で悪鬼像の場合、益山帝釈寺址廃棄場でも悪鬼像を踏んでその上に立像が立つよう考案された痕跡が見られる。益山帝釈寺址廃棄場出土品の場合、頭像や持物と推定できる遺品が非常に少ないが、これまで武人像と推定できるほどの破片が全く確認されていない点も共に考慮しなければならないだろう。悪鬼の頭部片も四天王寺址緑釉塑像の悪鬼と類似性があり今後比較する余地がある。

その他に臨江寺址出土の装飾破片(図四十五)の場合、四天王寺址塑像の龕形周縁部装飾と類似する位置に付着して飾っていたものと考えられる。このような点から四天王寺址塑像の技術系統や尊名、良志の出自などをはじめとする統一新羅の塑像の問題は百済滅亡前後の百済遺民の動向と関連づけて把握する必要があると考える。

最後に日本で出土した塑像との関係についてみていく。日本における塑像と関連する最も古い記録は四天王寺に関する次の記録である。

史料四一…阿倍大臣、請四重於四天王寺、迎仏像四軀、使坐于塔内、造靈鷲山像、累積鼓為之。(『日本書紀』卷二十五 孝徳天皇 大化四年二月条)

ここには、大化改新の主役であった左大臣阿倍内麻呂(倉梯麻呂)が比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆を四天王寺に屈請し、塔内に仏像四軀を安置または塔内に鼓を積み重ねて靈鷲山像を作ったと記されている。この記録に見られる塑像は現存する法隆寺五重塔初層の塔本塑像と非常に類似する形態であったものと推定されている<sup>128</sup>。第六章第一節で言及するが大阪の四天王寺の伽藍配置が百済寺院のそれと最も類似し、七世紀中半という時期を考慮すると、この塑像の製作に中国でなく韓半島の諸国のうち百済との関連性を考慮できるだろう<sup>129</sup>。

一方、日本に現存する最も古い塑像の遺品は川原寺の裏山遺跡から出土した塑像群である。この遺跡については一九七四年三月から二月月わたり発掘調査が実施され多量の方形三尊博仏、塑像片、方形緑釉埴、銅製品、貨銭、土器片、瓦片が検出された(図四一三十一)。調査の結果、この遺跡は焼失した寺院の仏像、荘嚴具などを裏山の丘陵端部に長径約四・五メートル、短径二・六メートル、底径約一・五メートル、深さ約三メートルの穴を掘り、その中に埋納した遺構であることが判明した<sup>130</sup>。ところで、このような廃棄様相は前述した益山帝釈寺址の廃棄場遺跡と非常に類似しており注目される<sup>131</sup>。

ここで出土した塑像は頭像と胴体を別途に製作して接合した頭体別製式で製作されており、多様な形態の芯木を使用した痕跡がよく残っていた。螺髪や耳のような場合、范を利用して製作されたと考えられるが、他の塑像の場合、おおよそ手捏法を使用して成形したものと考えられる。大型塑像は荒土と砂粒が多く混ざった粘土、精選された微細粘土などを使用して整形されており複数の層をなすことが確認される。また、塑像の断片の中には唐草文や花文などを彩色した痕跡が鮮明に残っており、一部には金箔をかぶせたことが確認されている。このような成形技法は百済地域の塑像で確認される点と共通しており、特に益山帝釈寺址廃棄場遺跡出土品と最も類似すると言える。

川原寺裏山遺跡で出土した塑像をはじめとする日本の初期塑像と百済との関連性を考慮すると最も重要なことは「焼成の可否」であるといえる。しかし、川原寺裏山遺跡の場合、火災で焼失したものを廃棄した場所であるため、焼成の可否を確認することが容易ではない。例えば、十二支神将像の一部と考えられるウマやニワトリの頭部片が発見されたが、ここでは明らかに琉璃質の釉薬成分が確認される

(図四一三十一)。しかしこの場合、目に嵌め込んだ琉璃のような物質が火災によって溶けて流れ離れたと見られるため、この資料を通して川原寺裏山遺跡の塑像が焼成されたとは言い難い。

ところで、ここから緑釉水波文埴が共に発見された。これは塚廻古墳出土の緑釉棺台、藤原京出土の緑釉硯、飛鳥池出土の緑釉壺などいわゆる「白鳳緑釉」に属するもので、日本で発見された最も古い段階の緑釉製品の一つである。川原寺裏山遺跡では半肉彫り文様の緑釉埴と線彫り文様の緑釉埴など二種類が確認されているが、前者は創建当初のものと考えられている(図四一三十二)<sup>132</sup>。そして、このような日本への鉛釉技術流入の契機について白村江の戦い以後日本に渡っていった百済遺民の影響と把握した見解が注目される<sup>133</sup>。本稿の第二章二節で説明したように百済地域では扶余定林寺址創建以後多様な方面で緑釉を使用した<sup>134</sup>。これを見れば川原寺が創建された七世紀後半段階においてこの寺院の建立に百済の技術が活用された可能性があり、これは緑釉埴だけでなく塑像の場合にも該当する可能性もある。川原寺裏山遺跡の武装天部像腰部と紹介されている資料の場合<sup>135</sup>、その下部に金箔や彩色痕と共に緑釉と推定される痕跡が観察されるため、その可能性を全く排除することは難しいと考える(図四一三十三)。つまり、緑釉水波文埴や塑像の製作技術は中国や高句麗・新羅でなく百済に淵源を持つ可能性が高いと考える。そして、それが輸入された契機は緑釉埴の輸入過程に関する議論で指摘したように、百済滅亡以後の遺民の活動と関連する可能性が高いという点に同意するが、四天王寺の記録を参考にすると塑像の場合はそれ以前に百済から技術的な影響を受けた可能性も排除し難いだろう<sup>136</sup>。

#### まとめ

扶余と益山地域を中心に百済寺院址に対する発掘調査の進展は既存の堂塔を主とした配置論から抜け出して各建物址の機能や性格に関する問題まで議論が拡大している。そのうち第一節では伽藍配置を中心にして百済寺院の展開過程を検討して。定林寺式伽藍配置は日本の四天王寺式伽藍配置と似ているが、講堂と回廊の連結方式が北回廊で連結するのではなく東・西回廊北端の付属建物、講堂址東西側の別途建物に連結する方式をとっている点が異なる。東・西回廊北端の付属建物は僧房のようなものと考えられるが、公的な性格が強いた

め「東堂と西堂」と呼ぶことが望ましいと考える。このような様式の伽藍配置は塑像をはじめとする共伴遺物と文献記録などを通してみると、泗泚遷都(五三八年)以後、中国南朝の影響を受けて成立したが、部分的に高句麗の影響も共に受けたものと考えられる。六世紀中後半の軍守里寺址や王興寺址が建立された段階からは東西回廊の外郭に建物が増築されるかと思えば六世紀末以後には一部の殿閣が建立されないなどの変化があらわれる。七世紀前半に建立された弥勒寺址は三院並列式伽藍配置を見せるが、これは定林寺式伽藍配置を基にして中国の大型院落式寺院と弥勒思想の影響を受けて建立されたと考えられる。百済の寺院は泗泚遷都以後から滅亡期まで基本的に定林寺式伽藍配置で建立されたためこれを広義の「百済式伽藍配置」と呼んでもよいと考えられる。

第二節では百済故地でしばしば出土する塑像の展開過程と周辺国家の塑像との関連性を検討した。百済の塑像はこれまで廃寺址や窯址など十二ヶ所で発見されているが、主に寺院の木塔や金堂に安置されたものと考えられる。その成形方式は手捏法、范拔の二種類が全て確認されており、成形後に焼成あるいは乾燥させる。釉薬が施された塑像や窯址で塑像が出土する事例は百済で部分的であるが焼成過程を経たことを明確に示す。これは中国の南京で発見された塑像でも確認される点であるため、その技術的な系統が南朝と関連している可能性を高めている。

百済の塑像に見られる製作技術の特徴は、高句麗の元五里寺址出土の塑像や新羅の四天王寺の緑釉埴などでも部分的な関連性が確認され、日本の場合、四天王寺に関する文献記録や川原寺裏山遺跡から出土した塑像などを見ると百済の影響があった可能性がある。特に川原寺裏山遺跡出土品の場合、廃棄様相だけでなく製作技法が益山帝釈寺址廃棄場と非常に類似し、釉薬が施された緑釉埴からは百済滅亡以後の遺民による技術の伝播の可能性を想定できるものと考えられる。

1 国立扶余文化財研究所『百済廃寺址学術調査報告書』(二〇〇八年)。

2 北野耕平「百済時代寺院址の分布と立地」(『百済文化と飛鳥文化』、黄寿永・田村圓澄編、吉川弘文館、一九七八年)。



3 栄山江流域が百済中央に完全に編入されたのは、百済が熊津に遷都した後のことであり、実際に百済中央の文化が本格的にあらわれるのは泗泚時期以後の現象である。栄山江流域では、羅州新村里九号墳の金銅冠や羅州伏岩里三号墳の卍字銘土器を除くと、漢城く熊津時期の仏教関連遺物や遺跡が発見されていない。しかし、最近、高麗時代の廃寺址として知られている康津月南寺址で七世紀代と推定される百済の蓮華文瓦当と多量の平瓦が発見された(民族文化遺産研究院「康津月南寺址真覚国師碑周辺文化財精密発掘調査現場説明会資料」、二〇一二年(油印物))。このような点から全羅南道地域にも泗泚遷都以後、一定期間が過ぎた七世紀代に百済中央と関連する寺院が建立されたと考えても問題はないであろう。

4 国立扶余文化財研究所『扶余定林寺址発掘調査報告書』(二〇一一年)。

5 金洛中「扶余泗泚都城に対する研究成果と課題」(『韓国の都城く三国く朝鮮、発掘調査と成果』、国立慶州・扶余・加耶文化財研究所二〇周年記念国際シンポジウム、二〇一〇年、一八く一九頁)。

6 国立扶余文化財研究所『陵寺く扶余陵山里寺址一〇次発掘調査報告書』(二〇〇八年)。

7 石田茂作「扶余軍守里廢寺址発掘調査(概報)」(『昭和十一年度古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九三七年)。

石田茂作「百済寺院と法隆寺」(『朝鮮学報』五、一九五三年)・『法隆寺雑記帖』(学生社、一九六九年)。  
斎藤忠「扶余軍守里廢寺址に見られる伽藍配置とその源流」(百済文化と飛鳥文化)(前掲書)。

8 国立扶余文化財研究所『扶余軍守里寺址一木塔址、金堂址発掘調査報告書』(二〇一〇年)。

9 国立扶余文化財研究所『王興寺址一瓦窰址発掘調査報告書』(二〇〇七年)。

国立扶余文化財研究所『王興寺址一木塔址・金堂址発掘調査報告書』(二〇〇九年)。

国立扶余文化財研究所「扶余王興寺址第一次発掘調査」(『二〇一〇百済文化を探して』、二〇一一年)。

金容民「王興寺跡と舍利器・荘嚴具の発掘調査成果」(『古代東アジアの仏教と王権 王興寺から飛鳥寺へ』、勉誠出版、二〇一〇年)。

金洛中「百済泗泚期寺刹の伽藍配置と運営の特徴」(『韓国上古史学報』七四、二〇一一年)。

10 木塔址南側基壇の北側には礫と砂が混じって排水が容易な薄褐色真砂土盛土層が比較的水平に積まれているのに対し、その南側からは褐色礫層と褐色砂質層が三〇〜四〇度ほどの傾斜をなしながら盛土されていた。

11 扶余王興寺址出土舍利函の銘文の文字や用語の解釈については次の論考が参考となる。

新川登龜男「古代朝鮮半島の舍利と舍利銘文―飛鳥寺再考の準備として」(『古代東アジアの仏教と王権』、二〇一〇年、四九〜五三頁)。

12 李道学「王興寺址舍利器銘文分析を通してみた百濟威徳王代の政治と仏教」(『韓国史研究』一四二、二〇〇八年、九〜一〇頁)。

13 小杉一雄「六朝及び隋代に於ける塔基表示」(『中国仏教美術史の研究』、新樹社、一九八〇年、二〇〜三四頁)。

14 国立扶余文化財研究所『王興寺址Ⅲ』(二〇〇九年、一四三〜一四五頁)。

15 石田茂作・斎藤忠「扶余に於ける百濟寺址の調査(概報)」(『昭和十三年度古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九四〇年)。

16 一九九三・一九九四年の調査内容は報告書が未刊であり、次の本を参考にした。

(財)扶余郡文化財保存センター『扶余東南里寺址整備基本計画』(扶余郡、二〇〇七年)。

17 忠清南道歴史文化研究院『扶余東南里二一六―七番地遺跡』(二〇〇七年)。

姜鍾元「扶余東南里と錦山栢嶺山城出土文字資料」(『木簡と文字』三、二〇〇九年)。

18 国立扶余文化財研究所『王宮里発掘調査中間報告Ⅳ』(二〇〇八年)。

国立扶余文化財研究所『扶余官北里百濟遺跡発掘報告Ⅲ』(二〇〇九年)。

19 百濟武康王、遷都枳慕蜜地。新宮精舎、以貞觀十三年歲次、己亥冬十一月、天大雷雨。遂災帝釈精舎、仏堂七級浮図乃至廊房、一皆燒。塔下礎石中有種種七宝、亦有仏舍利彩水晶瓶。又銅作紙写、金剛波若經、貯以木柒函。発礎石開視、悉皆燒盡。唯仏舍利瓶及波若經漆函如故。牧田諦亮『觀世音應驗記研究』(平樂寺書店、一九七〇年)。

20 黄寿永「百濟帝釈寺址研究」(『百濟研究』四、一九七三年)。

21 円光大学校馬韓百濟文化研究所、一九九四年『益山帝釈寺址試掘調査報告書』、遺跡調査報告三六集。

円光大学校博物館『益山王宮里伝瓦窯址(帝釈寺廃棄場)試掘調査報告書』(二〇〇六年)。

<sup>22</sup> 国立扶余文化財研究所『帝釈寺址―発掘調査報告書Ⅰ』(二〇一一年)。

<sup>23</sup> 田庸昊「王宮里遺跡の最近の発掘成果」(『益山王宮里遺跡の調査成果と意義』、国立扶余文化財研究所、二〇〇九年)。

<sup>24</sup> 藤島亥治郎「朝鮮建築史論其三」(『建築雑誌』二、一九三〇年)・『朝鮮建築史論』(一九六九年)。

<sup>25</sup> 弥勒寺址の発掘過程および成果に対する研究史は次の論考が参考となる。

梁正錫「弥勒寺址塔址の調査過程に対する検討」(『韓国史学報』三六、高麗史学会、二〇〇九年)。

<sup>26</sup> 国立扶余文化財研究所『弥勒寺遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(一九九六年、五二六頁)。

<sup>27</sup> 李裕群「中国伽藍配置の変化および百済に与えた影響」(『東アジアの仏教文化と百済』、ハノル文化遺産研究院開院五周年記念国際学術

大会、二〇〇九年、四五〜四六頁)。

<sup>28</sup> 国立文化財研究所・益山市「弥勒寺の寺刹配置」(『弥勒寺復原考証基礎調査研究報告書二』、弥勒寺復原研究学術資料叢書Ⅲ、二〇一〇年、一三四〜一三八頁)。

<sup>29</sup> 裴秉宣「弥勒寺の配置と建築遺構を通してみた百済造営技術」(『百済仏教文化の宝庫、弥勒寺』、学術シンポジウム論文集、二〇一〇年、三〇七〜三〇九頁)。

<sup>30</sup> 弥勒寺址に関する韓国の学界における最近の研究成果は次の論考で総合的に整理されている。

国立文化財研究所・益山市『弥勒寺復原研究学術資料叢書Ⅰ〜Ⅳ』(二〇一〇年)。

<sup>31</sup> 窃以法王出世隨機赴感応物現身如水中月。是以託生王宮示滅双樹遺形八斛利益三千。遂使光耀五行七遍神通变化不可思議。我百済王后佐平沙宅積徳女種善因於曠劫受勝報於今生撫育万民棟梁三宝。故能謹捨淨財造立伽藍以己亥年正月廿九日奉迎舍利。願使世世供養劫劫無尽。用此善根仰資大王陛下年寿与党山岳齐固宝歷共天地同久上弘正法下化蒼生。又願王后即身心同水鏡照法界而恒明身若金剛等虚空而不滅。七世久遠蒙福利凡是有心俱成仏道。

弥勒寺址の舍利奉安記に関する銘文と釈文については次の論考が参考となる。

金相鉉「百濟武王代仏教界の動向と弥勒寺」(『韓国史学報』三七、高麗史学会、二〇〇九年)。

瀨間正之「百濟弥勒寺「金製舍利奉安記」と「聖徳太子」」(『日本書紀の迷と聖徳太子』、平凡社、二〇一一年)。

稲田奈津子「百濟弥勒寺の舍利奉安記について」(『朱』五五、伏見稲荷大社、二〇一一年)。

<sup>3 2</sup> 国立扶余文化財研究所『弥勒寺址西塔周辺発掘調査報告書』(二〇〇一年、二八〜三〇頁)。

<sup>3 3</sup> 塔身部の組み立て方法において両塔とも一層では礎石と隅柱石、面石を別の石材で作ったが、東塔では二層以上の塔身石では隅柱石と面石に同じ部材を用いて塔身に隅柱を模刻する型式をとっている。

扶余文化財研究所『益山弥勒寺址東塔址基壇および下部調査報告書』(一九九二年、五九頁)。

<sup>3 4</sup> 国立文化財研究所『弥勒寺址石塔基壇部発掘調査報告書』(二〇一二年)。

<sup>3 5</sup> 崔鉉植「百濟後期弥勒思想の展開過程と特性」(『韓国思想史学』三七、二〇一一年、一九〜二〇頁)。

<sup>3 6</sup> 国立博物館『金剛寺』(一九六九年)。

<sup>3 7</sup> 裴秉宣「扶余地域百濟建物址の構造」(『定林寺―歴史文化的価値と研究現況』、国立文化財研究所、二〇〇八年、一五四頁)。

<sup>3 8</sup> 古代を考える会『古代を考える』五(古代の日本と朝鮮)、一九七六年、二八頁)。

<sup>3 9</sup> 申光燮「扶余扶蘇山廃寺址考」(『百濟研究』二四、一九九四年)。

<sup>4 0</sup> 梁銀景「百濟扶蘇山寺址出土品の再検討と寺刹の性格」(『百濟研究』五二、二〇一〇年)。

<sup>4 1</sup> 鄭子英「六〜七世紀百濟寺刹内講堂左右建物址の変遷過程考察」(『建築歴史研究』七三、二〇一〇年)。

金洛中「百濟泗泚期寺刹の伽藍配置と運営の特徴」(『韓国上古史学報』七四、二〇一一年)。

鄭子英「扶余定林寺址伽藍配置と編年的検討」(『韓国上古史学報』七六、二〇一二年)。

<sup>4 2</sup> 創建時講堂と別途建物は現在の復元図とは異なるものと考えられるが、現在、保護閣があり内部構造を調査することが難しい状況である。

<sup>4</sup><sub>3</sub> その主要な根拠は盛土層下部炉址の古地磁気測定値である。成亨美「扶余定林寺址九次調査地域に対する考古地磁気学的研究」（『扶余定林寺址発掘調査報告書』、国立扶余文化財研究所、二〇一一年）。

<sup>4</sup><sub>4</sub> 中門址南側に対する発掘では南門址が確認されなかったかわりに蓮池が検出された。この蓮池は伽藍中心部と中心軸を異にしているために創建期ではない七世紀代に作られたものと考えられる。

<sup>4</sup><sub>5</sub> 定林寺址では講堂址北側から僧房址が確認されたが、配置が陵山里寺址とは若干異なる。陵山里寺址の場合、講堂址北側の僧房址が中心軸から若干西側に位置するが、これは地形的にその東側に丘陵があったためであろう。

<sup>4</sup><sub>6</sub> 軍守里寺址の創建瓦は大通寺式と亭岩里窯址式の二種類である。その中で亭岩里窯址式は陵山里寺址では補修用瓦当として使用されているため、これより若干新しい六世紀中半に編年される。軍守里寺址出土瓦当については次の論考が参考となる（清水昭博「軍守里廃寺出土瓦当の検討」、『MUSEUM』五九六、二〇〇六年）…『古代日韓造瓦技術の交流史』（清文堂、二〇一二年）。

<sup>4</sup><sub>7</sub> 金洛中「百濟泗泚期寺刹の伽藍配置と運営の特徴」（前掲誌、二二四頁）。

<sup>4</sup><sub>8</sub> これについて洛陽建中寺のように貴族の邸宅を寺刹に再活用したためであるという見解が提示されている（梁銀景「中国仏教寺刹の検討を通してみた百濟泗泚期仏教寺刹の諸問題」（『百濟研究』五〇、二〇〇九年、一七〇～一七二頁）。しかし、日本の国分尼寺で塔が建立されないことを参考にすると「尼寺」であった可能性も考慮しなければならないと考えられる。

<sup>4</sup><sub>9</sub> 国立文化財研究所・益山市「弥勒寺の寺刹配置」（前掲書、一三四～一三八頁）。

<sup>5</sup><sub>0</sub> 前述したように、図四一〇の恩山金剛寺址で講堂と接続する北回廊址が確認されているが、創建当時の遺構と見ることが難しいため、百濟寺院において北回廊は弥勒寺址で最初に出現したと想定できるだろう。

<sup>5</sup><sub>1</sub> 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古隊「河北臨漳県鄴城遺址趙彭城北朝仏寺遺址的勘查与発掘」（『考古』七期、二〇一〇年）。

<sup>5</sup><sub>2</sub> 河利群「北朝および隋唐代寺院の考古学的考察」（『東アジア古代寺址比較研究Ⅰ—金堂址編』、国立扶余文化財研究所、二〇一〇年）。

<sup>53</sup> 扶蘇山廢寺址の場合、地形的な理由から講堂が無いものと理解されてきた。しかし、最近では金堂址北面の広い平坦面が後代の削平によって無くなったため、その存在の可能性を認める見解が提起されている(趙源昌「百済泗泚期扶余扶蘇山寺址の築造技法と伽藍配置検討」(『歴史と談論』五九、二〇一一年)。扶蘇山廢寺址のように講堂が無い事例としては扶余臨江寺址があり、慶州芬皇寺の場合も金堂の後側が顕著に低くなる地形をなしており、講堂がより新しい時期に中心軸を異にして建立されたことを見ると、それが存在するとしても一定の変形の中で存在した可能性が高いと考える。

<sup>54</sup> 裴秉宣は一棟二室建物について、柱と梁を組み合わせる一般的な建築結構と異なり、梁を使用せず、柱が直接桁を支える穿斗式構造と命名し、これを中国南朝の影響と見た(裴秉宣「弥勒寺の配置と建築遺構を通してみた百済造営技術」(前掲書、三〇九頁)。

<sup>55</sup> 杉三郎「百済山懷精舍址」(『古美術』一三卷五号、宝雲舍、一九四三年)。

軽部慈恩「扶蘇山南側中腹廢寺址出土の塑像」(『百済美術』、宝雲舍、一九四六年)。

<sup>56</sup> 百済の塑像を紹介する図録や資料集も発刊された。韓国では一九八三年に忠南大学校博物館が図録の中で定林寺址の塑像を集中的に紹介した。その後、一九九二年に(財)百済文化開発研究院から図録が発刊され、一九九七年に国立扶余博物館、二〇〇五年に弥勒寺址遺物展示館、二〇〇六年に東国大慶州キャンパス博物館でも部分的に紹介されており、二〇〇九年度には国立扶余博物館から百済の重要塑像を紹介する図録が発行された。一方、日本では一九八五年に飛鳥資料館の特別展図録が唯一であるが、扶余定林寺址、益山弥勒寺址、平壤元五里寺址、慶州陵旨塔、保寧聖住寺址、光州元曉寺址出土品などが紹介されている。

忠南大学校博物館『忠南大学校博物館図録』(一九八三年)。

飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(一九八五年)。

(財)百済文化開発研究院『百済工芸・彫刻図録』(一九九二年)。

国立扶余博物館『国立扶余博物館図録』(三和出版社、一九九七年)。

弥勒寺址遺物展示館『特別展全北の廢寺出土遺物』(二〇〇五年)。

- 東国大慶州キャンパス博物館『来如哀反多羅―東国大学校建学一〇〇週年紀念塑造仏特別展』（二〇〇六年）。
- 国立扶余博物館・仏教中央博物館『百濟伽藍に込められた仏教文化』（二〇〇九年）。
- 57 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』（二〇〇〇年）。
- 韓国伝統文化学校『扶余陵山里寺址第九次発掘調査報告書』（二〇一〇年）。
- 58 藤澤一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の関係」（『アジア文化』八巻二号、一九七一年、六一頁）。
- 59 藤澤一夫「百濟仏教遺跡の研究」（『人文』三巻一号、人文科学委員会、一九四六年、一二九―一三〇頁）。
- 60 旧衙里一帯に対する再調査の内容は次の文献が参考となる。
- 扶余文化財研究所『扶余旧衙里百濟遺跡発掘調査報告書』（一九九三年）。
- 扶余文化財研究所『扶余伝天王寺址文化財保存地区発掘調査報告書』（一九九三年）。
- 申鍾国「泗泚都城発掘調査の成果と意義」（『百濟泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年）。
- 国立扶余文化財研究所『扶余官北里百濟遺跡発掘報告書』（二〇〇九年）。
- 61 李炳鎬「扶余旧衙里出土塑像とその遺跡の性格」（『百濟文化』三六、二〇〇七年）。
- 62 奈良国立文化財研究所『北魏洛陽永寧寺』（一九九八年、五〇頁、図三三七・八・六一頁 図四〇―一）。
- 63 国立扶余博物館『国立扶余博物館図録』（一九九七年、四二頁）。
- 64 李炳鎬「扶余旧衙里出土塑像とその遺跡の性格」（『百濟文化』三六、二〇〇七年、九二―九五頁）。
- 65 申栄勳「扶余臨江寺址発掘参加記」（『考古美術』五巻一号、一九六四年）。
- 曹永祿「扶余臨江寺址発掘記」（『東国史学』八、一九六五年）。
- 66 忠清大学博物館・扶余郡『扶余臨江寺址』（二〇〇七年）。
- 尹龍熙「扶余臨江寺址発掘調査概報」（『考古学誌』一七、二〇一一年）。

- 67 李炳鎬「扶余臨江寺址出土塑像について」（『扶余臨江寺址』、二〇〇七年）。
- 68 筆者は臨江寺址の塑像を手捏法を用いて一体式で成形したものと報告したが、出土事例が少なく判断しがたい。今後の発掘調査を通して修正する余地があると考える。
- 69 李炳鎬「扶余臨江寺址出土塑像について」（前掲書、一二六～一二七頁）。
- 69 国立扶余博物館『扶余亭岩里窯址』Ⅱ（一九九二年）。
- 清水昭博「百済泗泚時代の瓦生産」（『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅹ、二〇〇八年）…『古代日韓造瓦技術の交流史』（清文堂、二〇一二年）。
- 70 金誠龜・金鍾萬・尹龍熙『青陽汪津里窯址』（二〇〇八年）。
- 71 亀田修一『日韓古代瓦の研究』（吉川弘文館、一九九六年、一三二～一三三頁）。
- 72 朴永福「青陽陶製仏像台座調査報告」（『美術資料』四九、一九九二年）。
- 73 金理那「七世紀百済の仏教彫刻」（『百済の美術』、百済文化史大系一四、二〇〇七年、一一六～一一七頁）。
- 74 清水昭博「瓦の伝来―百済と日本の初期瓦生産体制の比較」（『考古学論攷』二七、二〇〇四年、二四～二五頁）。
- 75 綱干善教「飛鳥川原寺裏山遺跡と出土遺物」（『仏教芸術』九九、一九七四年）。
- 松下降章編『研究発表と座談会―川原寺裏山遺跡出土品について』（仏教美術研究上野記念財団助成研究会、一九七七年）。
- 76 関西大学文学部考古学研究室「飛鳥・川原寺裏山遺跡と東アジア資料集」（国際シンポジウム実行委員会、二〇一二年）。
- 76 円光大学校馬韓百済文化研究所『益山帝釈寺址試掘調査報告書』（一九九四年）。
- 円光大学校博物館『益山王宮里伝瓦窯址（帝釈寺廃棄場）試掘調査報告書』（二〇〇六年）。
- 国立扶余文化財研究所『帝釈寺址―発掘調査報告書Ⅰ』（二〇一一年）。
- 77 77 円光大学校博物館『益山王宮里伝瓦窯址（帝釈寺廃棄場）試掘調査報告書』（前掲書、二二〇～二二二頁）。



- 梁銀景「百濟帝積寺址出土塑造像の分析と木塔址を通してみた奉安原形推定」(『湖西考古学』二三、二〇一〇年)。
- 7 8 帝積寺址廃棄場から出土した塑像の尊名について、帝積寺址木塔の塔内塑像には天王像または神将像、天部像などが奉安されたものと把握した見解がある。
- 梁銀景「百濟帝積寺址出土塑造像の分析と木塔址を通してみた奉安原形推定」(前掲誌、五〇〜五八頁)。
- 7 9 国立扶余文化財研究所『帝積寺址―発掘調査報告書―』(前掲書、九九〜一〇一頁)。
- 8 0 文化財管理局文化財研究所『弥勒寺址―発掘調査中間略報告―』(一九八二年)。
- 文化財管理局文化財研究所『弥勒寺―発掘発掘調査報告書―(図版編)』(一九八七年)。
- 8 1 山田隆文「韓国の博仏」(『朝鮮古代研究』一、一九九九年、五二頁)。
- 8 2 日本の博仏の使用方法に対する研究としては次の論考が参考となる。
- 清水昭博「出土状況からみた博仏用法の検討」(『考古学論攷』一九、一九九五年)。
- 白井陽子「日本出土の三尊博仏―その製作のはじまり」(『考古学論攷』三四、二〇一一年)。
- 8 3 この博仏片を弥勒寺址創建期のもとの把握し、出土した螺髪を通して見た場合、金堂や木塔には塑像が奉安されていたという見解が最近提起された(崔聖銀「東アジア仏教彫刻を通してみた百濟弥勒寺の仏像」(『百濟文化』四三、二〇一〇年)。
- 8 4 国立博物館『金剛寺―扶余郡恩山面琴公里百濟寺址発掘報告』(一九六九年)。
- 8 5 国立扶余博物館・仏教中央博物館『百濟伽藍に込められた仏教文化』(前掲書、一一五頁)。
- 8 6 藤澤一夫「百濟仏教遺跡の研究」(前掲誌、一二九頁)。
- 8 7 申光燮「扶蘇山城―廃寺址発掘調査報告(一九八〇年)」(『扶蘇山城発掘調査報告書』、国立文化財研究所、一九九六年)。
- 8 8 冬十二月、遣使入唐献鐵甲雕斧、太宗優勞之、賜錦袍并彩帛三千段。(『三国史記』百濟本紀五 武王三十七年条)
- 8 9 山本孝文「韓半島の唐式鍔帯とその歴史的意義」(『嶺南考古学』三四、二〇〇四年)。

梁銀景「百済扶蘇山寺址出土品の再検討と寺刹の性格」(前掲誌)。

90 国立扶余文化財研究所『王宮里Ⅶ』(二〇〇八年)。

91 扶余亭岩里窯址を泗泚時期の国家施設物に対する補修の性格を持つて築造された生産施設と推定した見解として次の論考が参考となる。

金鍾萬「泗泚時代瓦にあらわれた社会相小考」(『国立公州博物館紀要』二、二〇〇二年、五四頁)。

92 金善基「益山帝釈寺址一考察」(『文物研究』六、東アジア文物研究学術財団、二〇〇二年)。

金善基「益山帝釈寺百済瓦について」(『瓦学会論文集』三、韓国瓦学会、二〇〇七年)。

朴淳発「泗泚都城と益山王宮城」(『馬韓百済文化』一七、二〇〇七年)。

田庸昊「王宮里遺跡の最近の発掘成果」(前掲書)。

93 嚴基日「泗泚期百済瓦窯の構造変化研究」(『百済文化』四三、二〇一〇年、一一一〜一二二頁)。

94 これまで日本の古代寺院から出土した塑像は基本的に焼成されていないものと認識され、これが博仏との違いと知られている(西川杏太郎

『塑像』(日本の美術二五五、至文堂、一九八七年、一八頁)。しかし、百済の事例を通してみると、再検討する必要があると考える。日

本の塑像資料については次の文献が参考となる。

寺島典人「日本塑像分布一覽表(日本国内)」(『石山寺境内遺跡発掘調査報告書』、二〇〇六年)。

寺島典人「研究ノート大津市内の塑像について」(『大津市歴史博物館研究紀要』一四、二〇〇七年)。

95 杉三郎「百済山懷精舍址」(前掲誌、八七頁)。

96 申光燮「百済泗泚時代陵寺研究」(前掲誌、三六〜四〇頁)。

97 李炳鎬「扶余旧衙里出土塑像とその遺跡の性格」(前掲誌、八二〜八四頁)。

98 国立中央博物館「博物館新聞」(三九八号、二〇〇四年一〇月、四面)。

99 金正基は石塔下部から発見された版築土層を根拠にして、創建期末塔建立説を最初に提起した。

金正基「弥勒寺塔と定林寺塔―その先後問題に関して」『考古美術』一六四、一九八四年、二〇八頁。

100 尹龍熙「扶余臨江寺址発掘調査概報」(前掲誌)。

扶余扶蘇山廃寺址、臨江寺址、益山弥勒寺址などでは壁画片が出土している。このような壁画片は堂内を荘嚴する裝飾の一部であったものと考えられる。今後、日本の古代寺院の事例とともに検討する必要があるだろう。

百橋明穂「古代寺院における堂内壁画荘嚴の系譜」(『秋山光和博士古稀記念美術史論文集』、便利堂、一九九一年)。

101 北朝地域の塑像出土事例は北魏方山思遠仏寺址、洛陽永寧寺址、朝陽北塔(思燕仏図)遺跡、東魏・北齊時期の趙彭城仏寺跡などがあり、これらについては次の論考で整理されている。

梁銀景「遼寧省朝陽北塔出土塑像研究」(『美術史学研究』二五六、二〇〇七年)。

向井佑介「北魏平城時代の仏教寺院と塑像」(『仏教芸術』三一六、二〇一一年)。

102 賀云翱「南京鍾山二号寺遺址出土南朝瓦当及与南朝定林寺關係研究」(『考古与文物』一期、二〇〇七年)。

103 王志高・王光明「南京紅土橋出土的南朝泥塑像及相關問題研討」(『東南文化』三期、二〇一〇年)。

104 最近、南京市内から出土した仏像資料については次の論考が参考となる。

梁銀景「南京地域南朝金銅仏像に対する一考察」(『CHINA研究』一一、釜山大中国研究所、二〇一一年)。

105 楊泓「百濟定林寺遺址初論」(『宿白先生八秩華誕紀念文集』、二〇〇二年)；『中国古兵与美術考古論集』(文物、二〇〇七年)。

楊泓「百濟仏教文化に対する南朝の影響」(『扶余王興寺址出土舍利器の意義』、国立扶余文化財研究所国際學術大会、二〇〇八年、一三二―一三三頁)。

106 中国社会科学院考古研究所では「以土坯砌成的形実心体」、奈良国立文化財研究所では「土(日干煉瓦)と木(柱)で混成する方形の塔心実体」、梁銀景は「木の柱と土で構成された夯土塔心体」と説明している。

中国社会科学院考古研究所『北魏洛陽永寧寺』一九七九―一九九四年考古發掘報告』(中国大百科全書出版社、一九九六年、一六―一七頁)。

- 奈良国立文化財研究所『北魏洛陽永寧寺―中国社会科学院考古研究所発掘報告』（一九九八年、一九頁）。
- 梁銀景「中国仏教寺刹の検討を通してみた百濟泗泚期仏教寺刹の諸問題」（前掲誌、一六二頁）。
- 107 岡村秀典・向井佑介編「北魏方山永固陵の研究」（『東方学報』八〇、京都大学人文科学研究所）。
- 108 朱岩石「鄴城遺跡趙彭城東魏北齊仏寺跡の調査と発掘」（前掲誌）。
- 109 奈良国立文化財研究所『北魏洛陽永寧寺』（前掲書、一九頁）。
- 錢国祥「洛陽永寧寺と塔基壇の発掘と研究」（『東北学院大学論集：歴史と文化』四〇、二〇〇六年、二三頁）。
- 110 鍾曉青「北魏洛陽永寧寺塔復原探討」（『文物』五期、一九九八年、五七―五八頁）。
- 111 江蘇省文物工作隊・鎮江市博物館「江蘇鎮江甘露寺鐵塔塔基發掘記」（『考古』六期、一九六一年）。
- 張贊初「南京六處六朝仏寺遺址考」及び「關於金陵長干寺与禪衆寺之舍利」（『長江中下流歴史考古論文集』、科学出版社、二〇〇〇年）。
- 112 梁銀景「中国仏教寺刹の検討を通してみた百濟泗泚期仏教寺刹の諸問題」（前掲誌、一六三頁）。
- 113 南京市博物館「南京市江寧区胡村南朝墓」（『考古』六期、二〇〇八年）。
- 114 河南省文化局文物工作隊『鄧県彩色画像博墓』（文物科学出版社、一九五九年）。
- 南京博物院「南京西善橋南朝墓」（『東南文化』一期、一九九七年）。
- 115 小泉顕夫「泥仏出土地元五里廢寺址の調査」（『昭和十二年度古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九三八年）。
- 小泉顕夫『朝鮮古代遺跡の遍歴―発掘調査三十年の回想』（六興出版、一九八六年）。
- 116 梅原末治・藤田亮策『朝鮮古文化綜鑑』四（養徳社、一九四七年、三二頁）。
- 117 金理那「高句麗仏教彫刻様式の展開と中国仏教彫刻」（『高句麗美術の対外交渉』、韓国美術史学会、一九九六年）…『韓国古代仏教彫刻比較研究』（文芸出版社、二〇〇三年、八〇―八二頁）。
- 118 文明大「元五里寺址塑像の研究」（『考古美術』一五〇、一九八一年）…「元五里寺址塑仏像―高句麗千仏造成と関連して」（『観仏と古拙

美三国時代仏教彫刻史研究」、礼耕、二〇〇三年、一七四〜一七六頁。

<sup>119</sup> 金理那「百濟初期仏像様式の成立と中国仏教」（『百濟史の比較研究』、一九九三年）…『韓国古代仏教彫刻比較研究』（前掲書、一一四〜一二六頁）。

<sup>120</sup> 梁銀景「高句麗塑造仏像と中国塑造仏像の関係」（『東北亞歴史論叢』二四、二〇〇九年、三二九〜三三八頁）。

<sup>121</sup> 東国大慶州キャンパス博物館『来如哀反多羅―東国大学校建学一〇〇週年記念塑造仏特別展』（前掲書）。

国立慶州博物館・国立慶州文化財研究所『特別展四天王寺』（芸脈、二〇〇九年）。

<sup>122</sup> 林玲愛「四天王寺址塑像の尊名」（『美術史論壇』二七、二〇〇八年）。

<sup>123</sup> 姜友邦「四天王寺址出土彩釉四天王浮彫像の復元的考察」（『美術資料』二五、一九八〇年）…『圓融と調和―韓国古代彫刻史研究』（悦話堂、二〇〇〇年、一八七〜一九〇頁）。

<sup>124</sup> 金英媛「統一新羅時代鉛釉の発達と磁器の出現」（『美術資料』六二、一九九九年、七〜一三頁）。

ただし、忠南唐津九龍里窯址から出土した緑釉瓶の場合、統一新羅初期のものと報告されているが（李浩炯「唐津九龍里窯址収拾調査概要」（『考古学誌』四、一九九二年）、最近の百濟地域における発掘資料を見ると、百濟末期のものと見なければならぬだろう）。

<sup>125</sup> 筆者は百濟泗泚時期における緑釉製品製作のきっかけを定林寺址と同様に五四一年の工匠・画師の派遣と関連するものと把握している（本稿の第二章第一節参照）。

<sup>126</sup> 姜友邦「陵旨塔四方仏塑造像の考察」（『新羅文化』一七、一九九六年）…『法空と莊嚴 韓国古代彫刻史の原理Ⅱ』、悦話堂、二〇〇二年、一七八〜一七九頁）。

<sup>127</sup> 慶州四天王寺出土緑釉埴を百濟滅亡以後の百濟系工人の影響と把握した見解があり、共に参考となる。

崔聖銀「百濟塑像の様相とその伝播―新羅と白鳳の塑像と関連して」（『飛鳥・川原寺裏山遺跡と東アジア資料集』、関西大学文学部考古学研究室、二〇一二年、九五〜九六頁）。

128 大橋一章「四天王寺の発願と造営」(『奈良美術成立史論』、二〇〇九年、一五六〜一六〇頁)。

129 日本で最初に造山造庭が出現するのは『日本書紀』推古天皇二年(六一二)の百済の路子工から求めている小杉一雄の見解は非常に示唆的である。

小杉一雄『中国文様史の研究』(新樹社、一九七九年、一四二〜一四六頁)。

130 網干善教「飛鳥川原寺裏山遺跡と出土遺物」(前掲誌)。

松下隆章編『研究発表と座談会―川原寺裏山遺跡出土品について』(前掲書)。

関西大学文学部考古学研究室「飛鳥・川原寺裏山遺跡と東アジア資料集」(前掲書)。

131 このような資料は、七世紀後半の川原寺が創建された当時のものというよりは、その後追加で製作されたものと考えられる。川原寺裏山遺跡出土塑像内部に時期差が存在するものと想定した研究としては、次の論考が参考となる。

市元壘・輪田慧「X線CTスキャナによる川原寺裏山遺跡出土塑像の基礎調査」(前掲書)。

132 田中琢「三彩・緑釉」(『世界陶磁全集』二、小学館、一九七九年)。

133 高橋照彦「日本古代における三彩・緑釉陶の歴史的特質」(『国立歴史民俗博物館研究報告』九四、二〇〇二年)。

高橋照彦「緑釉陶器その変遷と特質」(『列島の古代史六―専門技能と技術』、岩波書店、二〇〇六年)。

134 百済地域から発見された輸入陶磁とそれを倣製した緑釉製品については次の論考が参考となる。

金英媛「百済時代中国陶磁の輸入と倣製」(『百済文化』二七、一九九八年)。

135 網干善教『川原寺裏山出土の埴仏と塑像』(奈良県高市郡明日香村飛鳥古京顕彰会、一九七六年、一八頁(図五四))。

136 川原寺裏山遺跡出土塑像を百済滅亡以後の遺民の活動と関連させて把握した見解が提起されており、共に参考となる。

崔聖銀「百済塑像の様相とその伝播―新羅と白鳳の塑像と関連して―」(前掲書)。

第二部 百濟寺院が周辺国家に及ぼした影響

## 第五章 新羅の初期寺院に見える百済の影響

### はじめに

新羅における初期仏教の諸問題のうち、本章では新羅における最初の寺院である興輪寺を中心に、主に造営技術の系統に関する問題を検討する。新羅における仏教受容の過程には高句麗や北朝系統の影響のみならず、南朝系統の影響があったことが指摘されており<sup>1</sup>、近年ではそのような立場から一歩進んで百済の役割を強調した論考も発表されている<sup>2</sup>。本稿も、このような立場から寺院建築の部材の一つである瓦の文様と製作技術を分析することで、この問題について具体的にみていきたい。

慶州地域から出土した中古期新羅の古式蓮華文瓦当と平瓦・丸瓦については、近年慶州地域において重要な建物址や窠址の発掘が増加するにつれ、研究成果も蓄積されつつある。その中でも瓦当の場合、文様の型式分類を通して相對編年の設定と文様の系統に関する研究が主流をなし、平瓦・丸瓦などの場合、製作技法を中心にした属性の分析と系統、相對編年の問題が中心となった。その結果、中古期新羅の瓦製作は五世紀末ないし六世紀前半の高句麗系、百済系造瓦術を基にして六世紀後半には独自の新羅系瓦当を完成させたものと理解されている<sup>3</sup>。

中古期新羅瓦製作において百済の影響を強調した見解は植民地期から提起されてきた<sup>4</sup>。梅原末治らは植民地期に慶州地域で収集された瓦当を整理し、新羅蓮華文瓦当の製作に高句麗よりは百済の直接的な影響があり、それは日本の飛鳥時代の瓦当と同じ脈絡と見た<sup>5</sup>。その後、金和英は新羅の瓦当を高句麗系・百済系と新羅的なものに区分して説明しながら、「慶州出土百済系瓦当は扶余から出土したそれとほぼ同じであることから慶州で出土したという事実のみ知らされなければ、百済のものと錯覚するほど形態が同じである」とした<sup>6</sup>。稲垣晋也は井内功収集資料を中心にして新羅瓦当における百済や高句麗様式の影響を段階に分けて説明した<sup>7</sup>。金誠龜は雁鴨池出土瓦当を中心にして六世紀前半の高句麗・百済の一次的な影響以外にも、滅亡した百済瓦工の移住と考えられる二次的な波及が統一直後にあったという点を強調した<sup>8</sup>。申昌秀は皇龍寺址の瓦廃棄遺構から出土した瓦当を分析して皇龍寺址の創建瓦に高句麗と百済系統の瓦当が共



に使用されたことを指摘した<sup>9</sup>。

このような初期の研究は中古期新羅瓦当の成立に高句麗だけでなく百済の影響があり、その中で百済の影響は六世紀前半から新羅統一期まで持続したことを確認した。高句麗系・百済系瓦当の出現時期や新羅的な瓦当型の成立時期が主な論点となり、百済系瓦当の出現背景や影響の程度についてはまだ皮相的な分析にとどまっていた。これは当時、慶州地域において発掘調査された資料が少なく、比較対象となる百済地域の瓦当の編年や製作技法が明確ではなかったことによるものであろう。

しかし、このような雰囲気は二〇〇〇年代初半、国立慶州博物館の『新羅瓦博』特別展と月城塚字、蓀谷洞・勿川里窯址などの発掘報告書が刊行されるとともに新たな転機をむかえることになる。国立慶州博物館の『新羅瓦博』特別展を契機に刊行された図録には、慶州地域で発掘、収集された統一新羅のみならず中古期の瓦当が網羅的に紹介されている<sup>10</sup>。その後、月城塚字の発掘報告書刊行とともに、そこから出土した瓦当の型式分類と製作技法、相伴遺物を通じた相対編年に関する研究が試みられた。李善姫は月城塚字から出土した最も古い段階の瓦当を高句麗系と百済系に区分して説明した<sup>11</sup>。

新羅瓦の出現を遡らせることができたのは、慶州蓀谷洞・勿川里窯址と花谷里窯址から出土した瓦が五世紀後半に編年される土器と相伴したためであった。慶州花谷里窯址については、報告書が未刊であるため詳細は不明だが<sup>12</sup>、慶州蓀谷洞・勿川里窯址の場合は新羅瓦の出現時期だけでなく百済系瓦当の出現時点や技術的な前後関係を研究するうえで非常に重要である<sup>13</sup>。ここから出土した瓦の研究は、平瓦・丸瓦などに関するものから始まった。趙成允は百済瓦の製作において共通して確認される桙板連結式瓦桶で製作された平瓦が混ざっていることを指摘して、慶州地域で出土した平瓦を段階化して、その導入時期を六世紀前半と理解した<sup>14</sup>。金基民は勿川里C地区で出土した瓦と相伴した土器を比較して、これをさらに細く区分した<sup>15</sup>。すなわち、一段階(六世紀前半以前)は無瓦桶製作法で平瓦が製作される時期、二段階(六世紀前半末から六世紀前半初め)は百済で瓦当范型が導入され、それまでの無瓦桶製作法の瓦と接合した時期、三段階(六世紀前半)は平瓦に百済系桙板連結式瓦桶を使用した時期などに区分した。

一方、崔英姫は新羅および統一新羅の平瓦の製作全般を検討して、初現期から六世紀後半までの新羅瓦を「多様な製作系統の登場と共

存、規模が異なる製作集団の共存期」と説明した<sup>16</sup>。彼は新羅の初期平瓦を共伴遺物や出土遺構を考慮して無瓦桶製作法・桹板連結式瓦桶・非連結式瓦桶の順に登場することを明らかにした。このような三種類の技術は七世紀前半以後になると、非連結式瓦桶が中心となりながらも規模の違いがある技術系統(瓦工集団)が相当期間共存したとする。

さらに崔英姫は、古式瓦当の文様と製作技法の分析を通して平瓦の製作技法と瓦当の文様および製作技法(接合技法)の相関性を検討した<sup>17</sup>。その結果、高句麗系文様を持つ瓦当の場合も接合技法は百済系の丸瓦被覆接合法(Ⅲ技法)であり、百済系瓦当の場合、漢城期に流行した円筒接合後分割法(Ⅰ技法)と熊津期に流行した丸瓦加工接合技法(Ⅱ技法)が共に使用されたことを確認した。したがって、新羅初期の瓦当や平瓦の製作技法は全て百済地域に淵源を持つ可能性が高いと主張した。彼女の研究は平瓦・丸瓦など製作技術と瓦当文様および製作技術の相関性を総合的に整理し、研究の論点を明確にしたという点で意義がある。

一方、比較的文献記録が多く残っている皇龍寺址出土品を中心にした再検討作業も並行して行われた。崔孟植はここから出土した平瓦に百済系統の桹板連結式瓦桶で製作された事例があることを確認した<sup>18</sup>。趙源昌は皇龍寺址から出土した瓦当のうち、重建伽藍の創建瓦に比定される蓮弁に稜線がある瓦当(申昌秀分類C・D、I・J・K型式)を、同時期の百済地域で発見されない点と当時の対中関係を根拠にして新羅と南朝陳が直接交流して自主的に製作したものと理解した(後述する図五―一八―三・四)<sup>19</sup>。ただ、清水昭博はこれに対して蓮弁に稜線がある瓦当の導入時期について興輪寺址でも類似する事例があり、またその文様も南京で発見された瓦当と類似するため、六世紀前半まで遡及する可能性を言及言及している<sup>20</sup>。それゆえ検討の余地は残っていると考える。

このように最近の新羅瓦研究は、瓦当の文様だけでなく製作技法、平瓦・丸瓦の製作技法、瓦当と平瓦の相関性に関する研究などに深化・拡大している。これと歩調を合わせて百済地域の瓦研究も次第に深化した。漢城期のソウル風納土城では無瓦桶製作法で作られた平瓦や円筒接合後分割法(Ⅰ技法)で製作された瓦当が確認されており<sup>21</sup>、熊津期の公山城や大通寺址では丸瓦被覆接合法(Ⅲ技法)、丸瓦加工接合法(Ⅱ技法)で製作された瓦当の存在が明らかになった<sup>22</sup>。これまでの文様中心の瓦当研究から次第に瓦当と平瓦の製作技法に関する研究へと拡大し、これを基にした技術系統に関する研究も深化している(本書の第一章第二節および第三章第二節参照)。

このような研究の進展によって中古期の新羅瓦導入期に見られる百済系造瓦術の影響についても、漢城期の瓦製作技術が導入された段階と熊津期の造瓦術が入ってくる段階の区分、文様のみ伝来する段階と文様と製作技術が共に伝授される段階を区分することができるようになり、両地域の瓦当の相對編年について再検討する必要性が提起された。特に南朝と百済、新羅瓦の影響関係においてもそれが南朝から直輸入されたものか、百済を経由したものかという系統についても新たに検討する必要がある<sup>23</sup>。

このような課題を解決するためには何よりもまず、歴史記録が確実な個別遺跡に関する事例を分析することが重要であると考えられる。そこで伝興輪寺址とされている慶州工業高等学校(以下慶州工高)の敷地から出土した瓦を整理・分析したい。第一節では慶州工高一带から出土あるいは収集された古式蓮華文瓦当を網羅し、型式分類と相對編年を試みる<sup>24</sup>。第二節ではこのような分析結果を基に百済系瓦製作技術の導入過程を段階化し、ここから出土した百済系瓦と文献記録の関係を比較・検討して、ここが興輪寺址である可能性を再確認し、その歴史的意義を把握したい。

## 第一節 伝興輪寺址出土瓦の分析

### (一) 出土瓦の型式分類

興輪寺は新羅で最初の本格的な寺院である。『三国史記』には金大問の『鷄林雜伝』を引用して法興王一五年(五二八)に興輪寺が建立されたといい、『三国遺事』には法興王一四年(五二七)に建立されたとあり、一年の違いが見られるが、完工年度は真興王五年(五四四)で一致する。興輪寺の位置については靈廟寺址の位置比定と関連して多くの議論があった。現在、史跡第一四号興輪寺址に指定されている慶州市沙正洞二八一―一番地一带が興輪寺址でなく靈廟寺址に該当し、慶州工高一帯が興輪寺址に該当するという反論が早くから提起されたためである(図五―一)<sup>25</sup>。実際に、興輪寺址に指定された天鏡林興輪寺から図五―二のような「靈廟之寺」、「大令妙寺造瓦」という文字瓦が出土しており、ここが興輪寺址でなく靈廟寺址である可能性が高い<sup>26</sup>。それゆえこのような見解は説得力があるといえる。

靈廟寺址に比定されている天鏡林興輪寺一帯や新たに興輪寺址に比定されている慶州工高一帯については、断続的な発掘調査が行われた<sup>27</sup>。前者については国立慶州文化財研究所で一九七二・一九七七・一九七八・一九八一年の四回にわたって調査が行われた<sup>28</sup>。後者

については一九六五年の慶州工高運動場整理中に多くの遺物が收拾されており、一九九九年には慶尚北道文化財研究院によって慶州工高西塀に隣接した住宅地に対する調査が行われた<sup>29</sup>。そして、二〇〇八年度には慶州工高運動場周辺の排水口設置工事中に数ヶ所の建物址と排水施設が確認され、国立慶州博物館によって緊急收拾調査が行われた。本稿は、基本的にこの時に収集された遺物を基に作成した。

慶州工高一帯で出土あるいは収集された古式蓮華文瓦当の型式分類は、蓮弁文様と蓮弁の数を一次的な基準とし、中房の大きさと形態、蓮子の数、圏線の有無、製作技法などを二次的な基準とした。各型式の配列は蓮弁の文様が類似したり関連性があるものを結びつけて配列したが、寺域全体に対する正式発掘が行われていないため出土頻度は考慮しなかった。また、国立慶州博物館の調査で出土した瓦当のうち、破片しか出土しておらず、本来の形態が分からない場合は慶北文化財研究院で発掘したものや、これまでに収集された瓦当の中で同范品と考えられる遺物を共に提示した<sup>30</sup>。一方、製作技法については本稿の第一章の図一―一の模式図を参考されたい。

慶州工高が位置する沙正洞(旧塔正洞含む)一帯で出土した古式瓦当は、図五―三のように一一型式一三種に分類できる。これまでの発掘調査報告書とは異なり、慶北文化財研究院発掘品と井内功収集品を参考にして7型式と10型式を追加して5A・5B型式を一つの型式に統合した。また、既存の報告書の10型式は形態が明確でなくて、新羅統一期以後である可能性があると判断して除外した。1型式から8型式までは稜線がない典型的な素弁蓮華文、9型式から11型式は蓮弁に稜線がある素弁蓮華文で、これをより詳しく調べてみると次のとおりである。

1型式は大きく三種類に区分できる。1A型式は八葉を基本とし、一十六の蓮子に圏線がなく、中房は凸形であり瓦当の裏面には回転ナデの痕跡が見られる。1A型式は細かい粘土を使用して作られ、色調は灰白色系統を呈するものが多い。1Aa式は1B式と異なり瓦当裏面の外縁を削り出したように凸形に作った点と回転痕がより鮮明な点で違いが見られる。一八二番が1Aa型式の標識資料で<sup>31</sup>技法によって接合されている<sup>32</sup>。1Ab式は一六八番が標識資料で1Aa式と胎土と色調、形態がすべて同じだが、<sup>33</sup>技法によって接

合されており違いを見せる。

1 B型式は部分的に小さい砂が混ざっており、色調は灰青色系統が多い。一八三番が標識資料であり、八葉の蓮弁と一十六の蓮子、 $\square_{22}$ 技法による接合などは1 A a型式と非常に類似する。しかし、 $\square_{5-4}$ から分かるように両者は瓦範を異にしている。つまり、一八三番を基にして一八二番の中房と蓮子、蓮弁を重複させると、 $\square_{5-4}$ のように同范品でない別個の瓦範で製作されたことが確認できる。このような違いは蓮弁と間弁の比較を通して分かるが、1 B型式が1 A型式より平たくなり形式化した印象を与えている。

2型式は全体的な形態や色調が1 A型式と類似するが、灰白色を基調として蓮弁と中房の全体的な形態、回転ナデの痕跡などが同じである。ただし、1 A a型式に比べ中房が若干丸く蓮弁端部がさらに滑らかに反転した印象を与え、蓮弁と周縁の間が広い。瓦当裏面の回転ナデの痕跡は共通しているが、瓦当裏面の下部と周縁部が接する部分を丸く処理した点において違いを見せる。一八四番が標識資料であり、接合技法の詳細は不明である。

3型式は八葉の蓮弁、灰白色の色調、凸形の中房、一十六の蓮子などから1 A型式と類似する。一八七番が標識資料で1 A型式に比べ、蓮子や蓮弁がはるかに鈍くなり、2型式より中房と蓮弁の間が広い。そうした点から3型式は1型式や2型式の退化型といえるが、具体的にどの型式がモデルであったかはもう少し検討が必要である。<sup>32)</sup>このような文様の退化は木製範の持続的な使用による摩耗の結果である可能性もある。接合技法は現在の資料のみでは断定できないが、 $\square_{1}$ 技法で接合されたものと推定される。

4型式は八葉の蓮弁、灰青色の色調、細かい砂が混ざった胎土、凸形の中房、一十六の蓮子、回転ナデの痕跡、 $\square_{22}$ 式の接合技法などが1 B型式と形態的、技術的に類似する。一八一番が標識資料であり、1 B型式と比較すると中房がより際立つように表現され、蓮子の配置が散漫になりながら中央に集中している。蓮弁と間弁の端部がさらに鈍くなり、蓮弁と周縁の幅が広く周縁が相対的に高い。一六七番瓦当もこの型式に属するものと推定され、 $\square_{1}$ 技法によって製作された。したがって、この型式はもう少し細かく分類できる余地がある。

5型式は蓮子が磨耗して見られず、蓮弁と間弁が非常に図式的に表現され、蓮弁と周縁の間の幅が広くて周縁が高い。一八〇番が標識

資料であり、裏面には回転ナデの痕跡が鮮明に残っており、接合方式はⅡ<sub>1</sub>技法である。全体的な形態や技法から見ると、1A・1B型式の亜流といえるが、文様と技法の側面からは4型式が直接的な祖形に近いと考えられる。

6型式は八葉の蓮弁、中房と蓮弁の間の凹、一十五の蓮子、Ⅱ<sub>1</sub>技法の接合方式を特徴とする。これまでの報告書では灰白色と灰青色系統で両分されていたが、焼成度の違いといえるため区分せず、ひとつの型式に分類した。一八〇番が標識資料であり、慶北文化財研究院の発掘品の中から完形の同范品が発見されたが、その裏面には回転ナデの痕跡が見られる<sup>33</sup>。

7型式は既存の報告から抜け落ちていたもので、形態や色調が1A型式と類似するが、蓮弁端部が丸く反転し、中房と蓮子が大きくて鈍い。瓦当裏面には回転ナデの痕跡が観察され、一六四番が標識遺物である。図五―五の慶州校洞洞収集品を参考にすると、本来中房には一十六の蓮子が配置されており、Ⅱ<sub>2</sub>技法によって接合された可能性がある<sup>34</sup>。

8型式は半破しており完全な形態は分からないが、井内功収集瓦博資料の中に完形品が残っており、全体的な形態を推察できる(図五―六)<sup>35</sup>。この瓦当は蓮弁端部が隆起しながら尖った形態をなし、中房が若干膨らみ一十五の蓮子が配置されている。Ⅱ<sub>2</sub>技法によって接合されており、裏面には回転ナデの痕跡が見られる。今回の調査では一六三番一点しか出土しなかった。

9と11型式は全て蓮弁に稜線があるもので蓮弁と蓮子の数によって区分した。9型式の場合、国立慶州博物館の調査では一九三番のように破片しか出土しなかった。しかし、慶北文化財研究院の調査で形態が分かる事例があり、七葉の蓮弁に中房に圏線があり、四個の蓮子が配置されている<sup>36</sup>。10型式は八葉の蓮弁で、中房中央に一つの蓮子のみ配置されているが、慶北文化財研究院調査のみ少数発見された<sup>37</sup>。11型式は八葉の蓮弁で中房に圏線があり四個の蓮子が配置されているが、蓮弁には木の葉形を刻んだような装飾が施されている。一九二番一点のみ出土した。9と11型式の接合技法は慶州地域で確認される同范品の事例からみると、全てⅢ技法で製作されたものと推定される<sup>38</sup>。

以上が慶州工高一帯で出土あるいは収集された瓦当の型式分類案である。慶州沙正洞や塔正洞で収集された資料の中にはこれより多様な型式が含まれているが、発掘によって出土したものではないため除外した。これらのうち、1Aa・1Ab・1B・2・3・7・8型

式は文様と製作技法から見ると、百済系瓦当であるといえる。また、4・5・6型式は文様と製作技法が「型式瓦当と関連するため、百済系瓦当の変形や亜流であるといえよう。9・10・11型式の場合、蓮弁に稜線がある特徴を持ったもので、これまで新羅的な瓦当型と評価されてきたものである。

一方、国立慶州博物館と慶北文化財研究院の発掘調査では瓦当以外にも多量の平瓦と丸瓦が収集・報告されている。その中には百済系とみられるものも含まれており、その一部を紹介しておく(図五七)。まず、先に平瓦の場合、杵板連結式瓦桶で製作されたものが多数確認される。これらの瓦は粘土版を利用して作られており、灰白色や灰青色系統が多い。表面は無文や太線文で内部に杵板の痕跡が確認され、瓦刀痕は切断面を何度も削って破碎された面が見えない場合が多い。

その中で四一三番平瓦の場合、杵板連結式瓦桶の痕跡が観察され、広端面の裏面に同心円文があり、表面には平行線文がつけられている。これは平瓦を作る過程で広端面を補完するための補足痕であり、叩き板を外面に当て、当て具のようなもので内側から叩いた痕跡といえるが、その意味については後述することにする。四五〇番平瓦の場合、杵板連結式瓦桶の痕跡が鮮明である。ただし、右側上端に瓦刀痕が観察されるが、これは瓦を焼成する前に用途を考慮して一部分をカットした痕跡といえる。四五一番平瓦の場合、杵板連結式瓦桶なのか不明であるが、先端部が「L」字形の段をなす、いわゆる先端有段式平瓦である。このような型式の平瓦は慶北文化財研究院の発掘調査でも一点出土しており<sup>39</sup>、皇龍寺址や六通里瓦窯址、多慶瓦窯址でも出土しているが、泗泚期の扶余地域で類似する事例が多数確認されている<sup>40</sup>。四五一番平瓦で興味深いのは、凸面に朱線が観察される点である<sup>41</sup>。これは日本の飛鳥池遺跡で発見されたように、軒部分を彩色する際に偶然についた朱漆の痕跡であると(茅部の全面を彩色した時に偶然ついたベンガラ)いえる<sup>42</sup>。したがって、四五一番の先端有段式平瓦は初期段階の「軒平瓦」といえるであろう。皇龍寺址で杵板連結式瓦桶で製作された先端有段式平瓦が出土しており、扶余地域でもこのような先端有段式の平瓦が多数出土していることをみると、百済の影響下で製作されたことを推察できる。また、新羅の初期寺院の場合、建物の外部を五彩の丹青で彩色したのかは資料不足のため不明であるが、日本の飛鳥寺のように朱漆のみ施した可能性もあり、これは百済の初期寺院の場合も類似していたものと考えられる。

丸瓦の場合、有段式と無段式が共に出土しているが、その中で四〇〇番丸瓦は古式と考えられる。この丸瓦は有段式で玉縁と玉縁段部を別に製作して接合させている。玉縁段部には麻布痕が見られず、玉縁と玉縁段部が接する表面には回転ナデの痕跡が鮮明である。このような丸瓦は公州艇止山遺跡から出土した有段式丸瓦と技術的や系統的に関連があると考えられる。慶北文化財研究院で発掘した資料の中でも玉縁と玉縁段部を別途に製作して接合した有段式丸瓦が多数確認されている<sup>43</sup>。このように慶州工高一帯で出土した平瓦や丸瓦は、その製作技術において百済と関連が深いと言える。

## (二) 相対編年と創建瓦の設定

慶州工高一帯で出土した瓦の相対編年を設定するため、まず同范品や同形品についてみていく。7型式と8型式の場合、破片しか出土しなかったが地表収集品(図五五・六)が残っており、六通里瓦窯址から出土した瓦当と比較が可能である(図五八)。六通里瓦窯址では二点の瓦当が紹介されているが<sup>44</sup>、その中で図五八の一は図五三の7型式、図五八の二は8型式と関連があるものと考えられる。図五八の一、六通里瓦窯址出土瓦と7型式瓦当、図五五の慶州校洞出土瓦当は蓮弁と中房、蓮子の形態と裏面の回転ナデの痕跡などがすべて同じであるが、六通里出土品はⅢ技法、ここから出土した7型式はⅡa技法で接合技法が異なる。

図五三の8型式(一六三番)瓦当の場合、図五六の興輪寺址収集品と文様および製作技法が同じであるため同范品であるといえるが、これを図五八の二、六通里瓦窯址出土瓦当と比較すると製作技法までも同一であることから、六通里で生産された瓦当が供給されたといえる。一方、図五七の三の四五一番先端有段式平瓦の場合、六通里窯址でも出土しているが、このような先端有段式平瓦は扶余陵山里寺址でも出土している<sup>45</sup>。このような点を勘案すると、慶州工高一帯には六通里瓦窯址で生産された瓦の一部が供給された可能性が非常に高いといえる。

図五八の一、六通里瓦窯址出土瓦当の場合、公州大通寺址で出土したいわゆる大通寺式瓦当の文様を基調としながらもⅢ技法で製作された。百済地域でこれと類似する文様と接合技法で製作された事例として公州艇止山遺跡を挙げることができる(図五九)。この遺跡



は武寧王の殯殿と推定されるため、遅くとも五三八年の泗泚遷都以前に使用されたであろう。ただし、慶州工高一带で出土した7型式瓦当の場合、Ⅱ<sub>2a</sub>技法で製作されているため、五八の一とは工房差や工人差はもちろん若干の時間差も想定できるようである。なぜならば、図五八の二と8型式瓦当の場合、蓮弁端部が若干角張りながら反転した形態をしているが、このような蓮弁と最も類似する瓦当として扶余陵山里寺址出土瓦当(本稿の第三章第二節の3型式)があるためである<sup>46</sup>。したがって、六通里瓦窰址と本遺跡の8型式、扶余陵山里寺址の3型式および有段式平瓦、そして後述する1A・1B型式の出現時期(五三五年以後)などを共に考慮すると、六通里瓦窰と関連がある7型式と8型式は創建期瓦当より若干新しい六世紀中半に比定できるようである<sup>47</sup>。

4型式は財買井址出土品と高霊邑で収集された瓦当が同範品と考えられる<sup>48</sup>。高霊で収集された瓦当の場合、百済的な文様に回転ナデの痕跡が見られ、Ⅱ<sub>2a</sub>技法で製作されている。そのため、百済と大加耶の直接交流の結果と考えられることもできるが、慶州工高と財買井址で同範品が出土しているため慶州から移動したものと見なければならぬだろう。よって4型式は大加耶滅亡以後である六世紀中半から後半以後に製作されたと考えることが出来る。5型式の場合、4型式の瓦範が磨耗したものと思うほど文様が類似していることから七世紀前半以後と見ることが出来るようである。6型式の場合、同範品はないが蓮弁と中房の間に凹があり、七葉に一五の蓮子を持ったものが芬皇寺と天官寺址で出土し、八葉に一四の蓮子を持ったものが仁旺洞建物址で出土している。慶州地域で6型式のように中房と蓮弁の間に凹が作られるものは七世紀前半以後に出現すると考えられる。

蓮弁に稜線がある9・11型式の場合、月城塚字、皇龍寺、芬皇寺、雁鴨池などでしばしば見られる型式で、六世紀後半から七世紀前半まで多くの同範品が存在する。9型式のように七葉で中房に四個の蓮子があるものは皇龍寺址で出土事例がある<sup>49</sup>。10型式の場合、製作時点に若干の議論があるが、慶北文化財研究院発掘品の中に同範品が混ざっている<sup>50</sup>。ところで、このように中房に一つの蓮子だけ残っているわけではないが、殿廊址から一四の蓮子を持つ同形品が確認される(図五一一〇)<sup>51</sup>。中房に配置された蓮子の数が増減するのは時期的な変化を示す重要な属性の一つと考えられる。それゆえ10型式瓦当がたとえ南京地域で発見された瓦当と類似するとはい

え、これを興輪寺址の創建期である六世紀前半や中半まで遡らせる<sup>52</sup>には無理があると考えられる。そこで本稿では10型式を皇龍寺址重建伽藍の年代を勘案して、10型式をひとまず六世紀中後半以後と推定しておきたい。

1A・2・3型式の場合、慶州地域で同範品が発見されていない。ただ、1B型式の場合、慶州天官寺址で同範品が出土している(図五一一)<sup>53</sup>。図五一一の場合、灰青色硬質焼成で胎土には砂が多量含まれており、 $\square_{1B}$ 技法で接合されている。これを1B型式の標識資料である一八三番と対照させると、中房と蓮子が若干飛び出す印象を与え、接合技法も若干異なる。1A型式内にも1Aa型式と1Ab型式の間で接合技法が異なるものが確認され、実際に $\square_{1B}$ 技法と $\square_{1B}$ 技法の技術的な違いは非常に微細なものである。そのため、両者の間には同じ工房内の工人差や若干の年代差があることを示唆するものと見ることができよう。

このように1Aと1B型式、2型式と3型式は慶州工高一带以外ではほとんど発見されていない。そうした点からこの型式の年代は他の資料を通して求めなければならず、この時に注目されるものは公州地域で発見された瓦当である。その中で1Aと1B型式の場合、公州大通寺址出土瓦当と文様のみならず製作技法まで一致している(図五一一)。公州大通寺址出土瓦当は八葉素弁で蓮弁端部を突起で表現し、滑らかに反転する印象を与えており、小さくて低い中房には一十六や一七、一八の蓮子が配置されていることが特徴である。瓦当の裏面は回転ナデで整面し、先端部をななめに切り出して調整した丸瓦を接合させる丸瓦加工接合法( $\square$ 技法)で製作された。このような特徴を持つ瓦当を大通寺式瓦当と呼ぶが、これは中国南朝から始まったもので五二〇年代後半から公州地域で生産され、泗泚遷都以後には百済の主流的瓦当型となる<sup>54</sup>。ところで、1A・1B型式は文様と製作技法が大通寺式瓦当と一致するため、それをモデルにして製作されたといえる。

ただし、図五一一と1A・1B型式をもう少し比較してみると、慶州地域で出土した瓦当は蓮弁と間弁の形態が類似するといえ、より図式化された印象を与え、中房がより大きくなり飛び出す。このような点で公州大通寺式瓦当の出現より若干新しい六世紀前半から中半の間に相對編年でき、後述する文献資料を参考にすると五三五年以後に比定できるようである<sup>55</sup>。また、1A型式と1B型式部にも若干の違いが存在する。つまり、両型式の瓦当は文様が非常に似ているが、蓮子の配置、蓮弁と間弁の形態が異なり、瓦当裏面の回転

ナデ技法、胎土と焼成度などにおいて少しずつ違いを見せている。蓮子と蓮弁の形態差は瓦範の差、瓦当裏面の処理方式は工人の差、色調の違いは焼成度の違いであり、胎土とともに工房差を見せるものといえよう。そうした点で1Aと1Bの間には瓦範と瓦工、工房の違いが存在したものと見ることができるとは、両型式の間に年代差があったのかは不明であるが、類似するものと考えられる<sup>56</sup>。また、1Aと1B型式は製作技法や胎土などが7・8型式とは異なるため、六通里瓦窯址とは異なる不明窯で製作・供給されたと思なければならぬだろう。

2型式と3型式の場合、公州公山城出土品と文様や製作技法が類似するが、百済地域の瓦当と直接比較できるようなものは出土せず、むしろ1Aや1B型式瓦当と類似度が高い。3型式の場合公山城式瓦当の特徴的な接合技法である目技法で製作された可能性があるが文様の全体的な形態は1A・1B型式の延長線の中で把握することが適切であると考えられる。そうした点で2・3型式は1A・1B型式より若干新しい六世紀前半に編年できるようである。

それでは、興輪寺址と推定される本遺跡の創建瓦は、どのようなものであろうか。消費遺跡で発掘された瓦当の中で創建瓦を抽出する際にしばしば採用されるのは「絶対多数の論理」である<sup>57</sup>。一つの建物址から出土した資料の中で最も多く出土したものが創建時に主体的に採用されたという論理である。しかし、慶州工高一帯に対する調査は建物址の部分的な収拾調査であるため、出土量を基準とすることは困難である。したがって、出土品の型式学的分析に依存せざるをえないが、前述したようにこの遺跡から出土した瓦当の中で最も古いものは1Aと1B型式で、その後の2・3型式や7・8型式瓦当が相対的に新しく出現したものと考えられる<sup>58</sup>。

そのような脈絡からこれまでの報告書では1Aと1B型式瓦当のみを創建瓦と見た。しかし、寺院の創建には比較的多くの時間が必要とされるため、仏殿や木塔といった主要建物だけでなく回廊や僧房といった周辺建物が完成して寺院が本格的に運営できる時までを創建期と見なければならぬという点で、創建瓦の種類ももう少し幅広く設定しなければならないようである。したがって、1Aと1B型式だけでなく2・3型式と7・8型式瓦当までも創建瓦の範疇で議論でき、本遺跡ではこのような型式の瓦当が全て百済系瓦当に属する。この遺跡の場合、1Aと1B型式瓦当を主体にして最初の建物が建立されたが、本格的に寺院が建立された段階には2・3型式と7・8

型式のようにより多様な型式の瓦当が製作・供給されたものと見る事ができるだろう。本稿の第三章第二節や第六章第二節で検討するように陵山里寺址や軍守里寺址、王興寺址では二種類以上の創建瓦が確認され、一つの消費遺跡で複数の生産地で製作された瓦の供給を受けるシステムは百済寺院では一般的なことであつたため<sup>59)</sup>、この遺跡の瓦供給体制もまた百済から始まつたものといえるだろう。

## 第二節 百済系造瓦術の導入過程とその意義

### (一) 百済系造瓦術の導入過程

慶州地域で発見された最も古い段階の瓦当は月城塚字出土品と勿川里窯址出土品であるということは先に説明したとおりである。ところで、月城塚字から出土した古い段階の瓦当には高句麗系と百済系のものが共に混ざっている(図五・一三)<sup>60</sup>。その中で百済系の場合、その瓦当文様は六世紀前半代の百済で流行した弁端点珠状であるが、接合技法には漢城期に盛行した円筒接合後分割法(「技法」)を駆使している。ところで、漢城期に流行した「技法」は熊津・泗泚期にはほとんど確認されない接合技法であり、熊津期の比較的古い段階である公州公山城の場合、「技法」が主流をなしている。そうした点から図五・一三の一の百済系瓦当は百済の立場から見ると、漢城期の在来の技術に熊津期の新たな文様要素が共に混在している。このように慶州地域で百済の新旧技術が共に現れる現象は当時の新羅の瓦製作において百済系造瓦術を持つ瓦工が直接移動したのではなく、瓦範や製品といった「道具」のみ伝来したためではないかと考えられる。

このような推論は高句麗系瓦当の導入過程においてより鮮明にあらわれる。先学が指摘したように高句麗系統の瓦当はその文様が高句麗の蓮華文瓦当や古墳壁画の蓮華文と相通じる点がある<sup>61</sup>。しかし、図五・一三の二の高句麗系瓦当に見える接合技法は高句麗では確認されない丸瓦被覆接合法(「技法」)である。これまで「技法」を高句麗の技術系統と誤解してきたが、現在までの資料を見ると高句麗よりは百済で流行したと見ることが妥当である<sup>62</sup>。「技法」は風納土城からその端緒が見られ、熊津期以後には「技法」ともに百済で最も多く確認される技法となる<sup>63</sup>。したがって、図五・一三の二の事例は高句麗系文様の瓦当を製作しながらも高句麗の技術でなく百済系の技術を採用していたという重要な根拠となる。つまり、新羅では高句麗から製瓦術を導入する時も瓦範や文様だけを輸入したと見ることができるのである<sup>64</sup>。

このように新羅の瓦の中で最も古い段階に該当する月城塚字に百済系造瓦術が著しくあらわれることは、百済の造瓦術が新羅の初期瓦製作技術に非常に大きな影響を与えたことを物語るものである。しかし、一方では新羅で文様と製瓦術を選択的に受容できたことを意味

すると理解できるため、当時の新羅の瓦製作技術がこの段階にすでに一定の水準に達していたことを示唆するものである。

その背景と関連して勿川里窯址から出土した無瓦桶で製作された瓦が注目される(図五―一四)。勿川里窯址からは、無瓦桶製作法の平瓦と短い玉縁を持つ丸瓦、図五―一三の一と同範である点珠状の百済系瓦当および土器口縁部と似た軒平瓦などが生産される時期(二段階)があつたことがわかる。さらにこの時期以前に、無瓦桶製作法のみで瓦が製作された段階(一段階)があつた。その年代は共伴した台脚や蓋などの土器の編年との対照から、五世紀後半、少なくとも六世紀初期以前と推定されている<sup>65</sup>。金基民が分類した平瓦の1aと1b・1cの差が時間差を意味するものかは不明な点がある<sup>66</sup>。しかし、勿川里窯址では瓦当をはじめとする多様な種類の瓦が製作される以前に、無瓦桶製作法で作られた平瓦が製作される段階があり、その時期は六世紀以前である五世紀後半段階まで遡らせることができるとおもわれる。

新羅にはこのような瓦製作技術があつたため、瓦範や文様の輸入のみでも図五―一三のような型式の瓦当を製作できたのだろう。ただ、無瓦桶製作法の技術的な系統は金海府院洞遺跡の事例があるとはいえ、ソウルの風納土城からそのような技術で製作された平瓦が多量出土している点を勘案すると、その技術系統もまた百済から影響を受けたと見なければならぬだろう<sup>67</sup>。

では、図五―一三の一の月城塚字出土百済系瓦当のようなものはいつ製作されたのであろうか。この型式の瓦当は月城塚字をはじめとして勿川里窯址、仁旺洞五五六・五六六番地遺跡、花谷地区などから同範品が出土しているが、共伴した土器の相對編年に基づいて五世紀末まで遡らせる見解がすでに提示されている<sup>68</sup>。しかし、このような見解は公州地域でこれと類似する文様を持つ瓦当が六世紀前半以後から出現しており問題点を抱えている。

百済地域で図五―一三の一の月城塚字出土品と最も類似する瓦当は、図五―一二の大通寺址出土品である。両者は同範品ではないが、蓮弁や中房の形態がほぼ同じである。しかし、図五―一三の一の月城塚字出土品は漢城期に流行した「」技法で接合され、図五―一二の大通寺址出土品は「」技法で接合されており裏面に回転ナデの痕跡が見られる。このような違いは両瓦当の製作における技術的な違いを物語っており、月城塚字出土百済系瓦当が大通寺址の瓦や文様のみを借用して製作されたことを示唆する。つまり、新羅では無瓦桶で製作さ

れた平瓦を使用して新たに瓦当を導入・使用しながらも、最初は単純に瓦范といった同じ道具のみを限定的に受容したといえる。

その時点は図五―一三の一のような瓦当文様が公州大通寺址で最初に出現し、新羅と梁が五二一年に初めて交流した点を勘案すると、公州大通寺が建立された五二〇年代に導入されたと見ることができよう<sup>6)</sup>。したがって、新羅で百濟系統造瓦術が受容される初期段階は勿川里窯址の一段階のように無瓦桶製作法の平瓦と短い玉縁を持つ丸瓦が製作される段階(五世紀後半から六世紀初め)と図五―一三の一のように百濟系統の瓦当文様に「技法で製作される段階(六世紀前半)」に分けることができる。一方、月城塚字出土品の場合、新羅における蓮華文瓦当の使用が寺院の建立以前から行われていたことを示している点にも注意が必要である。日本の学界では、飛鳥寺創建以後に瓦の使用が本格化したため仏教の普及と瓦当の使用・普及を同一視しようとする傾向があるが、新羅では王宮をはじめとする官衙遺跡で瓦を使用した痕跡を明確に確認できるためである。

新羅で百濟系造瓦術を導入する過程において画期をなすものは慶州工高一帯で収集された。1Aと1B型式の瓦当である。1Aと1B型式の瓦当は図五―二二の大通寺址瓦当と比較すると、文様だけでなく丸瓦加工接合法(□技法)、裏面の回転ナデの痕跡など製作技術まで正確に一致している。1A・1B型式は慶州地域で□技法である丸瓦加工接合法が確認された最も古い事例に該当する。筆者はこのような特徴を持つ1Aと1B型式の瓦当を文献記録との関連性から「興輪寺式瓦当」と呼ぶことを提案した<sup>7)</sup>。慶州で出土するいわゆる興輪寺式瓦当は単純な道具の移動だけでは説明しがたく、道具のみならず熟練した瓦工の派遣や指導を想定しなければならないだろう。つまり、1Aと1B型式瓦当の製作には大通寺式瓦当の製作に関与した工人集団の一部が派遣された可能性が高いのである。

もう一つの根拠はここから出土した瓦当の文様と製作技術だけでなく、瓦当と共に出土した丸瓦や平瓦の製作にも百濟系造瓦術の痕跡が見られるためである。丸瓦四〇〇番の有段式丸瓦の場合、玉縁と玉縁段部を別途に製作して接合した後、接合する部分に回転ナデを施して仕上げた(図五―七)。このように玉縁と玉縁段部を別に接合する事例は慶北文化財研究院の発掘品の中でも確認されるが、その場合、接合面や表面に回転ナデの痕跡は見られない。ところで、公州艇止山遺跡から出土した有段式丸瓦にも、これと類似する製作技法が確認

される。艇止山遺跡では円柱状の模骨に麻布をかぶせて玉縁部分を粘土帯で別途に製作して接着させながら端部を瓶形土器の頸部のように短く直立させた。丸瓦の表面は板状道具を用いて掻きあげて面を整え、約三分の二地点から玉縁段部までは回転掻きや回転ケズリで整面した後、回転ナデを施した(図五一九の三・四)<sup>71</sup>。泗泚遷都以後の資料ではあるが、扶余定林寺址と陵山里寺址でも玉縁段部付近まで麻布をかぶせて玉縁段部を粘土帯で別途に製作して接合した有段式丸瓦が確認されている<sup>72</sup>。

玉縁と玉縁段部を別途に製作した後に接合した四〇〇番丸瓦(図五二七)の場合、玉縁段部の内面に麻布痕がなく、玉縁と玉縁段部が接合される部分の表面には回転ナデの痕跡が観察される。このような特徴は、金基民が分類した勿川里瓦窯址出土の短い玉縁段部に平瓦と似た曲がりを持つ1a式丸瓦や、玉縁段部が直角に降りてきて短い玉縁に変わりながら半円状の曲りを持つ1b式丸瓦は異なるものと考えられる<sup>73</sup>。そうした点で四〇〇番有段式丸瓦の場合、1Aと1B型式の瓦当と共に百済で新たな技術が導入されて製作されたものといえる。

平瓦の場合も同様である。先に説明したようにここでは百済の平瓦製作において特徴的に観察される桙板連結式瓦桶で製作された瓦と共に発見された(図五二七)。その中で四一三番平瓦の場合、広端面の裏面に同心円文があり、表面には平行線が残っている。これは平瓦を製作する過程で広端面を補完するための補足痕である。このような痕跡は日本の飛鳥寺など初期遺跡で出土した平瓦でたびたび確認される(図五二五)。図五二五の飛鳥寺から出土した平瓦の中には同心円文の当て具を当てた補足痕が観察されるが、このような痕跡は須恵器、特に甕の成形に用いられるものであり、初期の瓦工房で須恵器工人の関与があったことを示す証拠と評価されている<sup>74</sup>。つまり、日本における初期瓦生産段階には瓦の需要に対応するために須恵器工人を動員して労働力として依存した結果、そうした痕跡が見られるようになったのである。

したがって、四一三番平瓦の場合、桙板連結式瓦桶を利用した平瓦の製作に在地の土器工人を動員した痕跡を見ることができるといえる。このような現象は慶州勿川里窯址をはじめとする慶州地域の初期瓦窯が瓦陶兼業の形態で運営されたため、当然のことかもしれないが<sup>75</sup>、平瓦自体にそうした土器製作の痕跡が確認されたのは本事例が最初である。ただ、これまで慶州地域で桙板連結式瓦桶を用いた平瓦は、



皇龍寺址をはじめとして勿川里瓦窯址でも確認されているが、その上限年代は明確でなかった<sup>76</sup>。そうした点から本遺跡の枅板連結式瓦桶で作られた平瓦はその上限を示す重要な資料といえよう。慶州工高一帯で発見された枅板連結式瓦桶を利用した平瓦は、1Aと1B型式瓦当や四〇〇番有段式丸瓦など一つのセットをなしているといえ、四一三番平瓦の補足痕を通して百済から新たな造瓦術を教わりながら慶州で活動していた在地の土器工人たちが動員されたことを確認できる。

一方、四〇〇番のような有段式丸瓦や枅板連結式瓦桶を用いた平瓦は熊津期の百済遺跡のみならず南京地域でも確認されるものである。最近、王志高が報告した南京地域出土丸瓦の中でE・F・G型式丸瓦の場合、玉縁と玉縁段部を別途に製作して接合し、玉縁段部の内面に麻布痕はなく、玉縁と玉縁段部が接合される部分の表面には回転ナデの痕跡が観察される<sup>77</sup>。平瓦の場合もE・F・G型式で粘土板を利用した枅板連結式瓦桶の成形と分割突帯痕が観察される(図五一六)<sup>78</sup>。このような平瓦と丸瓦は南朝後期の遺跡でセットをなして確認されている。したがって、百済の場合もこのような平瓦の製作技術は南朝の影響を受けて成立したものといえるだろう。しかし、枅板連結式瓦桶を利用した平瓦の製作は風納土城など漢城期にすでに導入・使用されていた技術であり<sup>79</sup>、新羅では早くから百済造瓦術の影響を受けていた。したがって、慶州地域で確認される平瓦の製作技術は南朝の技術者が直接新羅に派遣されて成立したというよりは、瓦当と同様に百済を通じた二次的な技術の伝播であったと見ることがより妥当であろう。

六世紀中半以後、慶州地域では丸瓦被覆接合法(Ⅲ技法)で製作された百済系瓦当が登場し、次第に普遍化したと見られる。慶州工高一帯で出土した3型式や7型式はⅢ技法である可能性があり、9〜11型式はⅢ技法によって製作された。本稿では3型式や7型式を六世紀中半と比定しているが、7型式と8型式の場合、慶州六通里窯址と関連があると考えられる。六通里窯址では枅板連結式瓦桶で製作された平瓦だけでなく、円筒形瓦桶で成形された平瓦が共に出土した<sup>80</sup>。Ⅲ技法で接合した瓦当の場合、円筒形瓦桶で成形された丸瓦と平瓦と組み合わせる場合が多い<sup>81</sup>。前述したように六通里瓦窯址から出土した図五一八の一は大通寺式瓦当の文様を基調としながらもⅢ技法で製作されたが、公州艇止山出土瓦当(図五一九)と比較すると、六世紀中半と見ることができらるだろう<sup>82</sup>。

慶州工高一帯で出土した3・7型式がⅢ技法なのかは確定し難いが、Ⅲ技法は9〜11型式のように蓮弁に稜線がある独特な文様を持

つ、いわゆる新羅的な瓦范に採択されてからは皇龍寺址、月城塚字、雁鴨池、芬皇寺などで幅広く使用された。つまり、Ⅱ技法はそれまでのⅡ技法で製作された興輪寺式瓦当より少し新しく、それも既存の興輪寺式瓦当の文様を基調としながら別途に採択・使用された。蓮弁に稜線がある新羅的な瓦型が完成してからは次第に新たな様式としての地位を占めるようになり、円筒形瓦桶で製作された平瓦・丸瓦と結合して次第に普遍的に活用されるようになったといえる。七世紀後半以後、新羅では円筒形瓦桶のみを使用するようになり、新たに考案された叩き板を使用した新しい規格の平瓦が幅広く製作・使用されるに至る<sup>83</sup>。

慶州から出土した百済系瓦について、百済造瓦術の対外伝播という側面から日本の飛鳥寺と比較すると興味深い点が観察される。瓦製作技術を導入しながら不足した労働力を補充するために在地の土器工人を動員したという点だけでなく、創建期瓦当の製作においても興味深い点を見出すことができる。創建期瓦当と考えられる1型式と2・3型式、7・8型式の間に瓦范の違いだけでなく工人差や工房差、時期差があったように思われる。最も古い段階に製作された1Aと1B型式の間にも瓦范や工人差を確認できることから、百済から派遣された造瓦集団は最小二つ以上のグループであったと推定できる。このような様相は百済から瓦博士が派遣された日本の飛鳥寺の創建瓦が文様と製作技術などにおいて花組と星組の二つのグループに区分される点と類似する構図であり、百済の造瓦体制と関連した可能性があり、一つの寺院を安定的に造営するため、最小二組以上の造瓦集団が必要であったのかも知れない<sup>84</sup>。

一方、ここから出土した瓦当は1Aと1B型式瓦当が作られて以後、これを基本形として多様な変形と亜類型が持続的に出現している。このような現象は百済の寺院址では見られない独特なものである。日本の飛鳥寺の瓦製作に関与した花組と星組集団の場合、寺院の完成以後、改範しながらも固有な文様属性と技術系統を維持しながら引き続き活動していた<sup>85</sup>。百済から技術を伝授した新羅と日本の寺院でのみこのような様相が観察されるのは非常に興味深い現象であり、その違いが百済と新羅・日本の瓦製作技術水準の差を暗示するのかもしれない。

## (二) 百済系技術導入の意義

慶州工高一帯は新羅最初の寺院である興輪寺址とされており、出土瓦当に対する分析結果と文献記録の関連性について検討する必要がある。興輪寺の創建過程と関連する重要な史料を提示すると次のとおりである。

史料五一一 真興大王位五年甲子、造大興輪寺。〔按国史与党郷伝、実法興王十四年丁未、始開、二十一年乙卯、大伐天鏡林、始興工、

梁棟之材、皆於其林中取足、而階礎石龜皆有之、至興王五年甲子、寺成、故云甲子、僧伝云七年誤。〕（『三国遺事』興法

### 第三原宗興法厭觸滅身条）

史料五一二 王許之、命興工、俗方質儉、編茅葺屋、住而講演、時或天花落地、号興輪寺。（『三国遺事』興法第三阿道基羅条）

史料五一一をみると、興輪寺は法興王一四年（五二七）に創建されはじめたが、しばらく中断し、二一年（五三四）乙卯に工事が再開され、真興王五年（五四四）に完成したといえる。しかし、「二十一年乙卯」の「二十一年」は誤字であるため、「乙卯」を重視して五三五年に工事が再開されたものとしている<sup>86</sup>。興輪寺の創建年代に関しては諸説あるが、本稿と関連するものとして史料五二の「編茅葺屋」という表現に注目する必要がある。新羅最初の寺院である興輪寺は建立当初には瓦葺きでなく茅を編んで屋根を葺いた草家であった可能性があるためである<sup>87</sup>。日本の仏教展開過程においても五三八年の仏教の公認と五八八年の飛鳥寺建立の間には時差があり、『扶桑略記』には坂田原に草堂を建てて仏像を安置した事例がある<sup>88</sup>。

史料五一一と五二二を総合してみると、興輪寺は五二七年に創建されたが当初は草家からなる微々たる水準であった。五三五年に再び本格的な伽藍が建立され、五四四年に完成したと見ることができるところで、本稿ではここから出土した1A・1B型式の瓦当が公州大通寺址の瓦当より少し新しい段階のものとして推定した。そうであれば、五二七年を前後して建立された公州大通寺で使用された製瓦術が、興輪寺が初めて建立された五二七年頃に直ちに伝えられたのではなく、本格的に工事が再開された五三五年以後に伝えられた可能性がある。『海東高僧伝』には当時の新羅の貴族が仏教信仰自体でなく、土木工事による社会的困難を理由に興輪寺の創建に反対していること

を伝えている<sup>89</sup>。史料五二一の「編茅葺屋」という表現がこのような事情と関連がありえるが、一方では百済の大通寺建立を意識して大規模寺刹に転換した可能性も考慮できる<sup>90</sup>。

新羅にはこのような過程を経て百済から大通寺式瓦当が伝来したが、造瓦術だけでなく寺院造営に必要な技術についても援助を受けた可能性がある。古代寺院の造営は土木建築のみならず彫刻・金工・木工・石工など多様な技術が集約されていたため、技術の相互の依存度や提携度が高い<sup>91</sup>。したがって、興輪寺の場合も瓦の製作技術のみ伝達したというよりは、日本の飛鳥寺の事例と同様に寺院造営技術全体が総合的に伝来した可能性を排除し難い。1A・1B型式の瓦当と百済系統の平瓦・丸瓦は史料五二一・二の歴史記録と非常に符合しており、そうした点でこの遺跡は「興輪寺」であった可能性がある。特にここから出土した「王(?)興」(一三〇番)や「寺」(一三一番)と読める文字瓦の存在はその可能性をさらに高めている(図五一一七)<sup>92</sup>。

ここを興輪寺址と推定できるならば、1Aと1B型式の創建瓦は百済と日本の瓦当命名法を参考にすると、いわゆる「興輪寺式瓦当」と呼べるであろう<sup>93</sup>。この様式は公州大通寺式瓦当をモデルにして、五三五年以後の興輪寺の本格的な建立工事過程で使用された瓦という。興輪寺式瓦当は百済系瓦製作道具と技術者の直接的な指導を受けて作られたが、蓮弁は八葉で反転を突起で表現し、中房には一六の蓮子が配置された。瓦当の背面は回転ナデで整面し、丸瓦加工接合法(ㄇ<sub>2</sub>技法)で接合し、七世紀中後半まで変形や亜流型が製作され続けた。このような瓦当は枳板連結式瓦桶で製作された平瓦と玉縁と玉縁段部を別途に製作した後、接合して外面に回転ナデを施した有段式丸瓦とセットをなしながら製作・使用された。

以上の推論が妥当であるならば、慶州工高一帯は記録上の興輪寺址といえ、「興輪寺式瓦当」は一定の意味を与えることができるだろう。『三国史記』や『三国遺事』には興輪寺の創建過程に与えた百済や南朝の影響についてはなんら言及がない。それによって中古期新羅の仏教は高句麗や北朝系統仏教の影響が強かったものと理解されてきた。しかし、百済-南朝系、特に百済の直接的な支援によって製作された興輪寺式瓦当は、これまで新羅における仏教の受容過程で見過<sup>94</sup>とされていた百済の影響を実物資料によって確認させ、南朝仏教の影響を再認識させる契機を作った<sup>94</sup>。『梁書』新羅伝によくあらわれるように五二二年、新羅は百済の紹介で梁と初めて通交するこ

とができた<sup>95</sup>。このような百済の役割は一回性のものでなく、一定期間持続したものと考えられる。百済と新羅両国における最初の本格的寺院といえる大通寺と興輪寺で同じ文様と技術で製作された瓦を使用したことは非常に興味深い発見であり、異論の多い新羅の仏教初伝記録を再解釈するうえでも多くの示唆を与えている。

一方、図五―二の公州大通寺址出土瓦当は泗泚遷都初期、王宮や寺院で主に使用された型式である。扶余旧衙里や官北里、陵山里寺址、軍守里寺址、東南里遺跡などでは大通寺式瓦当が出土しているが、日本の飛鳥寺の星組系列の祖形また大通寺式と推定されている<sup>96</sup>。熊津期の王宮で使用された公山城式ではなく大通寺式瓦当が泗泚時期初めに主流的位置を占めることになった現象は、興輪寺式瓦当と関連して注目される。新羅最初の寺院を建立する際にも百済から大通寺式瓦当が伝来したためである。

筆者はそのような現象があらわれた背景には、百済官营造瓦工場の成立という問題が介在しているのではないだろうかと考えられる（本稿の第一章第二節参照）。つまり、百済では大通寺を建立する過程で官营造瓦工場が樹立されたため、慶州の興輪寺式瓦当でも大通寺式瓦当が採択され、新たな都城である扶余地域でも大通寺式瓦当が主流的位置を占めることになったと把握したのである。百済から新羅最初の寺院である興輪寺の建立に瓦工といった技術者を派遣するためには、その内部で官营造瓦工場のようなものが成立していなければならない。百済では泗泚遷都以前にこのような官营造瓦工場が成立していたため新都造営に必要な大量の瓦を安定的に供給することができたのであろう。

興輪寺式瓦当は玉縁段部を別途に接合した有段式丸瓦や梓板連結式瓦桶で製作された平瓦とともに百済から伝授されたもので、百済の瓦製作技術の対新羅伝播過程において一つの画期をなす。また、五八八年、百済瓦博士によって製作された飛鳥寺の創建瓦を研究するうえで良好な比較資料となる。その源流となる大通寺式瓦当は南朝の影響を受けて成立したものであるため、興輪寺式瓦当も広い意味では南朝―百済系瓦製作技術の範疇に属しているといえる。しかし、大通寺式瓦当の成立過程に百済的な変容があり、そのように変形した文様と技術が再度新羅に伝播したものであるため厳密な意味では「百済系」技術であると見なければならぬだろう。六世紀前半、南朝―百済―新羅の造瓦術の伝播過程において百済が非常に主導的に活動したことを確認できる遺物である<sup>97</sup>。

百済は先進文明としての仏教を積極的に受容して外交に利用した国家の一つであった。六世紀前半、百済が新羅や日本に積極的に仏教を紹介したり公伝したことは高度の思想体系を持つ宗教としての仏教を伝達しただけでなく、梁武帝の歓心を買うための外交上の戦略であり、新羅や日本も梁との関係を結ぶための手段として仏教を利用した側面がある。河上麻由子はこれを「仏教的朝貢」と呼んでいる。すなわち、梁武帝に送る上表文に仏教的用語を使用して皇帝を称賛したり仏牙など仏教的な朝貢品を献上するかと思えば、漢訳仏典などを回賜品として要求する朝貢の形態をいう。<sup>80</sup> 仏教的朝貢は劉宋・南齊・梁代と北魏・北齊・隋代全てに見られるが、梁武帝と隋文帝が最も多くの仏教的朝貢を受けた。このような仏教的朝貢を通して南海諸国では貿易関係の維持と発展、中国で活動する自国の僧侶の安全を確保するなど現実的利益を得ることができた。

百済や新羅の場合、これを通して内政改革や国家体制を整備する際に支援を受けたといえる。特に百済は梁と新羅の交渉を仲介したり、新羅最初の寺院である興輪寺を建立する際に自国の技術者を派遣して技術を支援するかと思えば、五三八年には遷都という国家的な大事業を遂行しつつ日本に仏教を公伝した。そうした点でこの時期の百済が自国の技術者集団を新羅に派遣したり日本に仏教を公伝したことは梁と新羅、日本との外交関係の中で百済の影響力と主導権を引き続き維持したり強化するという側面があったと評価できる。<sup>81</sup> このような雰囲気の中で百済は五四一年に梁武帝に涅槃経などの義疏を要請するとともに百済内部で現実的に必要な技術の支援を受けるために梁の技術者である工匠・画師の派遣を要請し、新都の姿を一新することができた(本稿の第二章第一節と第二節参照)。

したがって、百済は梁と単純に仏教的朝貢のみを実施したとは断定し難い側面がある。百済は自身たちに必要な技術を具体的に要請し、これを積極的に実現した。本稿の第一章第三章で検討したように、大通寺址や定林寺址、陵山里寺址のような寺院はこれをよく物語っている。その後、百済は造瓦術をはじめとする寺院造営技術を利用して新羅や日本と交流した。その過程で軍事的・外交的側面から現実的な利益を得ることができたのであろう。そうした点で興輪寺式瓦当は六世紀前半の南朝と百済、新羅の外交的関係の中で百済の主導的な役割を確認させる非常に重要な資料であるといえるだろう。

一方、興輪寺式瓦当で確認される百済系造瓦術は、その後の皇龍寺創建にも持続的な影響を与えている。皇龍寺址の創建期に使用され

た瓦は大きく高句麗系と百済系の二種類の瓦当が知られている(図五一一八)。その中で図五一一八の一の高句麗系瓦当は、文様は高句麗系統であるが、その接合技法は百済の公山城式で呼ばれるⅢⅡ技法である。これに対し、図五一一八の二の百済系瓦当は蓮弁文様のみならず接合技法(ⅢⅡ技法)、背面の回転ナデの痕跡などが大通寺式瓦当や興輪寺式瓦当と類似する。つまり、文献史料の記録とは別個に皇龍寺の創建期には百済系造瓦術が持続的に影響を与えたことを確認できる。このような百済系技術は重建伽藍の所用瓦に比定される蓮弁に稜線がある瓦当(図五一一八の三・四)が製作されて以後にはその数量が減少するが、雁鴨池や芬皇寺などでは引き続き百済系瓦当が出土している。このことから百済系造瓦術は新羅の初期寺院だけでなく七世紀代まで持続的に影響を与えたということができよう。

中古期新羅の伽藍配置と関連して、興輪寺址の場合、一塔一金堂式の百済式伽藍配置である可能性があり<sup>100</sup>、皇龍寺址創建伽藍の場合、一棟二室建物址が確認されている(図四一二の六)。また、皇龍寺址重建伽藍の三金堂は高句麗よりは百済寺院の影響を受けて成立した可能性があると考えられる(本稿の第六章第一節参照)。このように新羅では百済の持続的な影響を受けたため、六四三年に皇龍寺の九層木塔が造営されるとともに百済から阿非知のような技術者が派遣されたのであろう。

その外にも慶州地域ではこれまで百済の専有物と理解されてきた瓦積基壇建物址が少数であるが確認されている。慶州天官寺址(一号建物址)、仁旺洞五五六・五五六番地遺跡(南北塀石列付属出入施設)、伝仁容寺址(一八号建物址)、清州福台洞遺跡などでは百済の扶余や益山地域でのみ確認されているものと類似する型式の瓦積基壇が発見された(図五一一九)。その中で天官寺址の場合、一号建物址周辺では図五一一と類似する百済系瓦当が出土しており、百済滅亡以前に百済系技術が導入されていた可能性を示唆している<sup>101</sup>。このような様相は新羅や日本地域における瓦積基壇の出現を百済滅亡以後、百済系遺民の移住に伴う技術の伝播と見るこれまでの理解とは全く異なるものである<sup>102</sup>。したがって、たとえ少数の事例ではあっても、新羅地域でこのような瓦積基壇が出現するのは六〜七世紀代の百済と新羅の持続的な文化交流を証明するものであり、本章で検討した百済系造瓦術をはじめとする寺院造営技術の対新羅伝播とも関連していたといえるだろう。

## まとめ

慶州地域では早くから公州や扶余地域で発見される瓦当と類似するものが収集され、「百済系瓦当」として概念化され注目されてきた。しかし、百済系瓦製作技術がいかなる過程を経て伝来したのかについては不明確な点が多かった。そのような中で新羅最初の寺院である興輪寺址に比定される慶州工高一帯でその具体的な姿を推定できる瓦当と平瓦、丸瓦が発見された。本章では国立慶州博物館が収拾調査した資料を中心にして慶北文化財研究院の発掘品とその他蒐集資料を網羅して百済系瓦製作技術の対新羅伝播過程を検討した。

伝興輪寺址に比定される慶州工高一帯で確認された古式蓮華文瓦当は図五二二のように一一の型式に分類できる。その中で1Aと1B型式瓦当は最も古い段階に製作された瓦当で、公州大通寺址出土瓦当と文様および製作技法が同じである。2型式と3型式、7型式と8型式も比較的古い段階の創建期瓦当といえるが、1A・1B型式とは工人差や工房差、時期差があったものと考えられる。その中で7・8型式の場合、慶州六通里瓦窯址で出土した瓦当と同范品や同系品と考えられるため、この寺院の創建過程において六通里で生産された瓦が部分的に供給されたと推測できる。

慶州地域で発見された百済系瓦当の導入過程は慶州勿川里瓦窯址から出土した無瓦桶製作法で製作された平瓦が使用される段階、月城垓字から出土した百済系瓦当文様に円筒接合後分割法(Ⅱ技法)で接合された瓦当が作られる段階、慶州工高一帯で収拾された1A・1B型式瓦当のように百済系瓦当文様に丸瓦加工接合法(Ⅱa技法)で製作される段階、3・6型式および9・11型式のように丸瓦被覆接合法(Ⅲ技法)で製作される段階に分けることができる。慶州勿川里瓦窯址から出土した初期の平瓦はソウル風納土城から出土した漢城期の平瓦と技術的につながり、共に出土した土器を参考にすると、五世紀後半段階には製作されたものと見られる。月城垓字出土品の場合、瓦当文様は大通寺址と類似するが漢城期の円筒接合後分割法で製作されたため、瓦范のような道具のみ伝えられて製作されたものと考えられ、百済地域の事例を参考にすると五二〇年代である六世紀前半に製作されたものと見ることができると考えられる。

慶州工高一帯で出土した1A・1B型式瓦当の場合、大通寺式瓦当をモデルにして製作されたもので、瓦当文様と文献記録から見ると、五三五年頃に製作されたものといえる。ここから出土した1A・1B型式瓦当は共に出土した図五二七の玉縁段部を別途に接合する有段



式丸瓦と梓板連結式瓦桶を利用した平瓦とセットをなすため、単純な道具の移動だけでなく、百済系瓦製作技術を保有する瓦工人の移動に伴う技術の伝播であったといえる。四一三番平瓦の場合、広端面の裏面に同心円文があり、表面には平行線文が施されている。これは百済の造瓦術の伝播過程において慶州で活動していた在地の土器製作工人が動員されたことを物語るものといえる。

その後の3・6型式や9・11型式瓦当は丸瓦被覆接合法で接合された瓦当である。6型式の場合、7型式、四五一番平瓦と共に六通里瓦窯址で生産された可能性が高い。六通里瓦窯址から出土した瓦当の場合、公州艇止山から出土した丸瓦被覆接合法で製作された瓦当と類似しており、軒平瓦と推定される有段式丸瓦の場合、扶余旧衙里遺跡、陵山里寺址などで出土した遺物と類似しているため、六世紀前半まで百済の影響が持続したことを確認できる。9・11型式瓦当の場合、蓮弁に稜線があるいわゆる新羅系瓦当で六世紀中後半頃にはこのような文様に丸瓦被覆接合法で接合された瓦当が、円筒形瓦桶によって製作された平瓦と共に生産され、次第に普遍的な瓦製作技術としての位置を占めるようになる。

1Aと1B型式瓦当の場合、慶州工高一帯で出土した最も古い段階の瓦当で、公州大通寺址出土瓦当と文様や製作技法が同じである。この瓦当は五三五年から興輪寺を本格的に建立したという文献記録と符合することから興輪寺の創建瓦といえる。したがって、この瓦当を「興輪寺式瓦当」と呼ぶことを提案した。いわゆる興輪寺式瓦当は新羅における仏教伝来の過程で未確認であった百済の影響を初めて実物によって物語るものであり、六世紀前半の南朝・百済・新羅の瓦製作技術や仏教の伝播過程を解明できる重要な資料であるといえる。

この時期、百済から新羅に技術者集団を派遣したことは、梁を意識した側面があるが、高句麗の軍事的な脅威の中で新羅に対する協力を維持あるいは強化しようとする側面もあったといえる。

以上、新羅最初の寺院である興輪寺址の創建を前後して展開した百済系瓦製作技術の伝播過程を整理した。新羅では寺院建立以前から月城など王宮で瓦当と平瓦を使用していたことを確認した点や新羅最初の本格的な寺院である興輪寺の瓦製作に百済系瓦製作工人が直接的に関与していたことを確認した点は重要な成果といえるだろう。寺院の建立は古墳に比べて技術相互間の依存度が非常に高いため、興輪寺址の造営に百済の瓦製作技術だけが<sup>103</sup>、影響を与えたとは考えられない。今後、発掘調査が進展するならば他分野において百済の

技術の影響を確認できるものと期待される。

- 1 辛鍾遠 「六世紀新羅仏教の南朝的性格」(『新羅初期仏教史研究』、民族社、一九九二年)。
- 2 辛鍾遠 「三国仏教と中国の南朝文化」(『講座韓国古代史Ⅸ』、文化の受容と伝播、韓国古代社会研究所、二〇〇二年)。
- 2 藺田香融 「東アジアにおける仏教の伝来と受容」(『関西大学東西学術研究所紀要』二二、一九八九年)。
- 2 崔鉉植 「六世紀東アジア地域の仏教拡散過程に対する再検討」(『忠清学と忠清文化』一三、二〇一一年)。
- 3 金誠龜 「新羅瓦の成立とその変遷」(『新羅瓦博』、国立慶州博物館、二〇〇〇年)。
- 3 金有植 「五〜六世紀新羅と周辺諸国の瓦」(『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』、科学研究補助基金研究成果報告書、二〇〇九年)。
- 4 京都帝国大学 『新羅古瓦の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究报告第一三冊、一九三四年、三〇〜三一頁)。
- 5 植民地期の新羅瓦に関する研究史は次の文献で簡略に整理されている。
- 5 申栄勳 「既往の新羅瓦の研究」(『韓国建築史大系』新羅の瓦(東山文化社、一九七六年、三七八〜三八〇頁)。
- 6 金和英 「韓国蓮花紋研究」(梨花女子大博士學位論文、一九七六年)。
- 7 稲垣晋也 「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅的要素」(『新羅と日本の古代文化』、田村圓澄・秦弘燮編、吉川弘文館、一九八一年)。
- 8 金誠龜 「雁鴨池出土古式瓦当の形式的考察」(『美術資料』二九、一九八一年)。彼の見解は比較対象となった百済瓦当との相対編年に問題があった。しかし、その後皇龍寺址や月城塚字、勿川里窯址などの発掘資料が紹介されるとともに百済の影響は六世紀初年から七世紀後半まで続いていたと修正した(金誠龜 『百済の瓦博芸術』、周留城、二〇〇四年、一五四〜一六六頁)。
- 9 申昌秀 「皇龍寺址瓦廃棄遺構出土新羅瓦当」(『文化財』一八、一九八五年)。
- 9 申昌秀 「三国時代新羅瓦の研究―皇龍寺址出土新羅瓦を中心に」(『文化財』二〇、一九八七年)。
- 10 国立慶州博物館 『美しい新羅瓦、その千年の息遣い―新羅瓦博』(二〇〇〇年)。

11 つまり、高句麗系は桃の種形の尖った蓮弁に周縁接合法(本稿の丸瓦被覆接合法、目技法)で製作され、六世紀初め以前から製作され、多量に出土している百濟系は滑らかな蓮弁に突起がある文様に背面接合法(本稿の円筒接合後分割法、一技法)で製作され、五世紀末から製作・使用されたとした。

12 李善姫 「月城塚字出土古式軒丸瓦の製作技法と編年研究」(『韓国考古学報』七〇、二〇〇九年)。

13 聖林文化財研究院 「慶州花谷地区地表水補強開発事業地区内遺跡」(文化財発掘調査略報告書、二〇〇八年)。

14 韓国文化財保護財団 『慶州競馬場予定敷地C』地区発掘調査報告書』(一九九九年)。

15 東国大慶州キャンパス博物館 『慶州菘谷洞・勿川里遺跡(目)競馬場予定敷地B地区』(二〇〇三年)。

16 国立慶州文化財研究所 『慶州菘谷洞・勿川里遺跡競馬場予定敷地』(二〇〇四年)。

17 趙成允 「慶州出土新羅平瓦の編年試論」(慶州大碩士学位論文、二〇〇〇年)。彼は菘谷洞出土瓦当に関する再検討の過程でも短脚高杯を根拠に六世紀後半以後に編年している(趙成允 「新羅古式蓮花文軒丸瓦の製作時期について」(『釜山史学』三〇、二〇〇六年)。

18 金基民 「新羅瓦製作法に関する研究―慶州勿川里出土瓦を中心に」(東亜大碩士学位論文、二〇〇一年)。

19 崔英姫 「新羅における平瓦・丸瓦製作技術の展開」(『東アジア研究』一、東アジア研究会、二〇〇九年)。

20 崔英姫 「新羅古式軒丸瓦の製作技法と系統」(『韓国上古史学報』七〇、二〇一〇年)。

21 崔孟植 「皇龍寺址回廊外郭出土平瓦調査研究」(『文化史学』一七、二〇〇四年)。

22 趙源昌 「皇龍寺重建期瓦当からみた新羅の対南朝交渉」(『韓国上古史学報』五二、二〇〇六年)。

23 清水昭博 「古新羅瓦の溯源に関する検討―有軸素弁蓮華文軒丸瓦を中心として」(『王権と武器と信仰』、管谷文則編、同成社、二〇〇八年) … 『古代日韓造瓦技術の交流史』(清文堂、二〇一二年)。

24 権五栄 「漢城時期百濟瓦の製作伝統と発展の画期」(『百濟研究』三八、二〇〇三年)。

25 鄭治泳 「漢城時期百濟瓦製作技術の展開様相」(『韓国考古学報』六三、二〇〇七年)。

鄭治泳「百濟漢城期瓦当の形成と系統」(『韓国上古史学報』六四、二〇〇九年)。

蘇哉潤「百濟軒丸瓦製作技法と生産体制の変化―風納土城出土品を中心に」(『百濟学報』四、二〇一〇年)。

<sup>2</sup><sub>2</sub> 戸田有二「百濟の軒丸瓦の製作技法について(一)」(『百濟文化』三〇、二〇〇一年)。

戸田有二「百濟の軒丸瓦の製作技法について(二)」(『百濟研究』四〇、二〇〇四年)。

清水昭博「百濟大通寺式軒丸瓦の成立と展開」(『百濟研究』三八、二〇〇三年)。

<sup>2</sup><sub>3</sub> 山崎信二は新羅の初期瓦製作における高句麗の影響を否定するとともに、初期には梁と百濟の影響を受けた二つのタイプが並存した後、六世紀中半段階から陳の影響を受けて新たな段階に入ったものと把握している。しかし、六世紀前半に新羅が梁と直接交流できたのか、また端部が尖ったいわゆる高句麗系瓦当が梁から始まったのかについては疑問である。

山崎信二「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本の関係」(『韓日文化財論集』一、国立文化財研究所、二二〇〇八年)。

山崎信二「新羅の瓦生産」(『古代造瓦史―東アジアと日本』、雄山閣、二〇一一年)。

<sup>2</sup><sub>4</sub> 本稿は基本的に国立慶州博物館の収拾調査で出土した資料を中心にしたが、既存に紹介された資料の中から参考になるものを含めた。これまで慶州工高一帯で出土した瓦について紹介している文献は次のとおりである。

井内古文化研究室編『朝鮮瓦博図譜』(百濟・新羅一、真陽社、一九七八年)。

国立慶州博物館『新羅瓦博』(前掲書)。

慶尙北道文化財研究院『慶州市沙正洞四五九―九番地収拾発掘調査報告書』(二〇〇一年)。

朴洪国「瓦博資料を通じた靈廟寺址と輿輪寺址の位置比定」(『新羅文化』二〇、二〇〇二年)。

李在景「沙正洞建物址と輿輪寺址」(『新羅文化』二〇、二〇〇二年)。

国立慶州博物館『慶州工業高等学校校内遺構収拾調査』(二〇一一年)。

<sup>2</sup><sub>5</sub> 本稿では慶州市沙正洞二八一―一番地一帯の寺址について伝輿輪寺址に比定される慶州工高一帯の寺址との混乱を避けるため、「天鏡林興

輪寺」と記述することにする。

<sup>2</sup><sub>6</sub> 朴洪国「瓦埴資料を通した靈廟寺址と興輪寺址の位置比定」(前掲誌、一二六頁)。

<sup>2</sup><sub>7</sub> 既存の天鏡林興輪寺と伝興輪寺址に対する発掘調査の経緯については次の文献が参考となる。国立慶州博物館『慶州工業高等学校内遺構収拾調査』(前掲書、一四〇―一六頁)。

<sup>2</sup><sub>8</sub> 申昌洙「興輪寺の発掘成果の検討」(『新羅文化』二〇、二〇〇二年)。

<sup>2</sup><sub>9</sub> 慶尙北道文化財研究院『慶州市沙正洞四五九―九番地収拾発掘調査報告書』(前掲書)および李在景「沙正洞建物址と興輪寺址」(前掲誌)。

<sup>3</sup><sub>0</sub> 以下の型式分類は国立慶州博物館の発掘報告書の考察編に収録された筆者の論考を修正・補完したものである。

李炳鎬「古式蓮花文瓦当の分類と編年」(『慶州工業高等学校内遺構収拾調査』、前掲書)。

<sup>3</sup><sub>1</sub> 本稿で述べる連番は二〇一年に刊行された国立慶州博物館『慶州工業高等学校内遺構収拾調査』(前掲書)の報告書に記載されている遺物番号である。

<sup>3</sup><sub>2</sub> 井内古文化研究室編『朝鮮瓦埴図譜Ⅲ』(前掲書、図版一二八・一三〇)の興輪寺址収集品がこの型式と関連があるものと考えられる。

<sup>3</sup><sub>3</sub> 慶尙北道文化財研究院『慶州市沙正洞四五九―九番地収拾発掘調査報告書』(前掲書、図面一六―四(写真二―一))。一方、嶺南大学所蔵品の中で出土地不明資料には6型式と類似するが、七葉になっており参考となる(崔英姫「新羅古式軒丸瓦の製作技法と系統」(前掲誌、一

一六頁、図一―二))。

<sup>3</sup><sub>4</sub> 井内古文化研究室編『朝鮮瓦埴図譜Ⅲ』(前掲書、図版一五〇(慶州校洞)、一五一・一五二(慶州市内)、一五三(慶州四天王寺址))の出土品が参考となる。一方、慶尙北道文化財研究院『慶州市沙正洞四五九―九番地収拾発掘調査報告書』(前掲書、図面二―一―三(写真二五―七))も同範品と考えられるが、これを通してITa技法を確認できる。

<sup>3</sup><sub>5</sub> 井内古文化研究室編『朝鮮瓦埴図譜Ⅲ』(前掲書、図版一七一・一七二)の興輪寺址収集品がこの型式と関連があるものと考えられる。

<sup>3</sup><sub>6</sub> 慶尙北道文化財研究院『慶州市沙正洞四五九―九番地収拾発掘調査報告書』(前掲書、図面一六―八(写真二―五))が標識遺物である。

<sup>37</sup> (上掲書、図面一九一八(写真三三一九)が標識遺物である。

<sup>38</sup> 井内功資料の慶州興輪寺址で収集された瓦当の中には9〜11型式のように蓮弁に稜線がある事例が確認されることから、この型式の瓦当は今後、さらに増加するものと予想される。

<sup>39</sup> 慶尚北道文化財研究院『慶州市沙正洞四九一九番地収拾発掘調査報告書』(前掲書、図面四四一(写真四九一)参照)。

<sup>40</sup> 趙成允「古新羅有段式瓦について」(『古文化』五七、二〇〇一年)。

崔孟植「三国軒平瓦の始原に関する小考」(『文化史学』二二、二〇〇四年)。

沈相六「百濟軒平瓦の出現過程に関する検討」(『文化財』三八、二〇〇五年)。

ただ、沈相六の場合、有段式平瓦を軒平瓦と見ることに懐疑的な見解を提示しているが、百濟の軒平瓦の展開過程を段階化した点で注目される。一方、四五一番平瓦の場合、後述するように六通里瓦窯でも出土していることから興輪寺址の初創より一段階新しいものと考えられる。

<sup>41</sup> この点については二〇一二年八月三〇日、日本古代寺院研究会の菱田哲郎(京都府立大学)教授一行と共に国立慶州博物館で直接確認した。

<sup>42</sup> 花谷浩「飛鳥寺豊浦寺の創建瓦」(『古代瓦研究』一、奈良文化財研究所、二〇〇〇年、三一頁)。

<sup>43</sup> 慶尚北道文化財研究院『慶州市沙正洞四九一九番地収拾発掘調査報告書』(前掲書、図面三二二(写真三七三)、図面三三四(写真三八一)、図面三四四(写真三九三)、図面三七三(写真四二二)などがこれに該当するものと考えられる。

<sup>44</sup> 金誠龜「百濟・新羅の瓦窯」(『仏教芸術』二〇九、一九九三年、八四頁)。

<sup>45</sup> 国立扶余博物館『扶余陵山里寺址発掘調査進展報告』(二〇〇〇年、図面七七一(図版一〇七一)参照)。

<sup>46</sup> 扶余陵山里寺址出土3型式瓦当は創建期瓦当と同時期あるいは若干新しく製作されたもので、五六七年より若干新しい六世紀中後半に編年される(本稿の第三章第二節参照)。

<sup>47</sup> 一方、7型式瓦当の場合、仁旺洞五五六・五六六番地遺跡の第二建物址から出土した瓦当と同范品である可能性があるが(国立慶州文化財研究所『慶州仁旺洞五五六・五六六番地遺跡発掘調査報告書』(二〇〇三年、図版二八一・図版三六一)、その下層から月城塚字出土百

済系瓦当(図五―一三の一)と同范品が出土している。したがって、7型式をそれより若干新しい六世紀中半に比定できるもうひとつの根拠となるようである。また、軒平瓦と推定される有段式平瓦(四五一番)と同じ型式の瓦が出土した扶余旧衙里遺跡、陵山里寺址、官北里遺跡、観音寺址など百済の遺跡が泗泚遷都以後に集中することを見ても、六通里瓦窰址の造営時期は六世紀中半以後と見ることができようである。

48 国立慶州博物館『新羅瓦博』(前掲書、七八頁(図二五九)および井内古文化研究室編『朝鮮瓦博図譜』(前掲書、図版一一二))。

49 国立慶州博物館『新羅瓦博』(前掲書、一〇〇頁(図三二五))。

50 慶尙北道文化財研究院『慶州市沙正洞四五九―九番地収拾発掘調査報告書』(前掲書、図面一九一八(写真二二九九))。

51 国立慶州文化財研究所『殿廊址 南古墨発掘調査報告書』(一九九五年、八四頁)の単弁蓮花文軒丸瓦B(国立慶州博物館『新羅瓦博』(前掲書、七三頁(図二三四))を指す)。

52 清水昭博「韓半島南部地域における初期造瓦技術の導入・普及とその背景―百済・新羅の初期造瓦技術と仏教」(『市大日本史』一三、大阪市立大学日本史学会、二〇一〇年、二四頁)。

53 国立慶州文化財研究所『慶州天官寺址発掘調査報告書』(二〇〇四年、一四五頁(図面五五二))。ただ、図面は接合部分を一部修正した崔英姫「新羅古式軒丸瓦の製作技法と系統」(前掲誌、一一六頁の図二二二)を転載した。

54 清水昭博「百済大通寺式軒丸瓦の成立と展開」(『百済研究』三八、二〇〇三年、六九―七〇頁)。

55 国立慶州博物館が発掘した無突帯一段透窓高杯の台脚片(五番)や表面に三角集線文とコンパス円点文が施文された蓋片(七番)、慶北文化財研究院が発掘した二段交互透窓高杯の台脚片(図面四一六、写真九一六)など六世紀前半に編年できる土器片が共に出土しており参考となる。

尹相惠「考察―遺跡の年代と占有様相」(『慶州工業高等学校内遺構収拾調査』(前掲書、一六一―一六二頁))。

慶尙北道文化財研究院『慶州市沙正洞四五九―九番地収拾発掘調査報告書』(前掲書、二九頁)。

56 日本の飛鳥寺の創建瓦が瓦当文様と製作技法によって花組と星組の二つのグループに分けられるが、両者の間に年代差はほとんど無いとい

う見解が参考となる。

花谷浩「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」(前掲誌)。

上原真人「初期瓦生産と屯倉制」(『京都大学文学部研究紀要』四二、二〇〇三年)。

57 上原真人『瓦を読む』(歴史発掘一一、講談社、一九九七年、七三〜七四頁)。

58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

59 亀田修一「熊津・泗泚時代の瓦」(『日韓古代瓦の研究』、吉川弘文館、二〇〇六年、一五五〜一五六頁)。

清水昭博「百済の造瓦技術と瓦生産体制」(『古代日韓造瓦技術の交流史』、清文堂、二〇一二年、三二六〜三二九頁)。

60 李善姫「月城塚字出土古式軒丸瓦の製作技法と編年研究」(前掲誌、一四二〜一四六頁)。

61 申昌秀「皇龍寺址瓦廃棄遺構出土新羅瓦当」(『文化財』一八、一九八五年)。

62 金有植「瓦を通して見た新羅・高句麗の対外交渉」(『東岳美術史学』二、二〇〇一年)。

63 清水昭博「韓半島南部地域における初期造瓦技術の導入・普及とその背景」(前掲誌、二四頁)および崔英姫「新羅における平瓦・丸瓦製作技術の展開」(前掲誌、一二六頁)。

64 戸田有二「百済の軒丸瓦の製作技法について(II)」(前掲誌)。

65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

65 金基民「新羅瓦製作法に関する研究」(前掲誌、三〇〜三三頁)。

66 崔英姫「新羅における平瓦・丸瓦製作技術の展開」(前掲誌、七〇頁)。

67 このような動向は、四七五年の漢城陥落以後に見られる百済と新羅の密着と関連があり、東城王代の四九三年に両国が婚姻関係を結んだこ



とも注目する必要がある。一方、この時期の金工品を中心にした百済と新羅間の交流に関する研究があり参考となる(崔鍾圭「済羅耶の文物交流―百済金工品」(『百済研究』二三、一九九二年)。

<sup>68</sup> 李善姫「月城塚字出土古式軒丸瓦の製作技法と編年研究」(前掲誌、一四四―一四六頁)。

<sup>69</sup> ただ、図一三―一の文様は武寧王陵出土蓮華文博でも類似するものが出土しているため、大通寺より若干先行する余地がある。慶州地域で出土する古式瓦当の中には無瓦桶製作法で作られた平瓦と連結したものがあり、五世紀末まで遡る土器と共伴することが確認されているためである。したがって今後、公州地域で大通寺式の瓦当文様を持ちながら「二」技法で製作された瓦当が出現する可能性を完全に排除することはできない。公州西穴寺址と新元寺址から出土した瓦当は「二」技法で製作されたが(戸田有二「百済の鎧瓦の製作技法について」(『百済文化』三七、二〇〇七年)、慶州地域で出土している初期の瓦当とは文様が異なる。

<sup>70</sup> 李炳鎬「古式蓮花文瓦当の分類と編年」(前掲書、一八〇頁)。

<sup>71</sup> 李漢祥「艇止山出土土器および瓦の検討」(『艇止山』、国立公州博物館、二〇〇〇年、三五六―三五九頁)。

<sup>72</sup> 国立扶余文化財研究所『扶余定林寺址発掘調査報告書』(二〇一一年、一一三―一一四番(図面六六・六七、写真三一九)の資料)。

国立扶余博物館『扶余陵山里寺址発掘調査進展報告』(前掲書、図面六七―一(図版九八―一三)、図面六七―二(図版九九―一)、図面一四五―一二(図版一七三―一・一七二―一六)、図面一四九―一・二(図版一一七―一・二))。定林寺址の一一三番資料にも外面に回転ナデの痕跡が確認される。一方、これまで熊津時期の丸瓦の中には無段式丸瓦が知られていなかったが、定林寺址では外面に回転ナデの痕跡がある無段式丸瓦が混じっている(一〇四・一〇八番)。そのような点から百済では泗泚遷都以前から無段式丸瓦を製作した可能性があるため、慶州興輪寺址をはじめとする慶州地域には百済から無段式丸瓦も共に伝来した可能性がある。今後、この点については注目する必要があるだろう。

<sup>73</sup> 金基民「新羅瓦製作法に関する研究」(前掲誌、一三―一四頁)。

<sup>74</sup> 菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」(『史林』六九―二、一九八六年)。

<sup>75</sup> 朴憲敏「慶州地域古新羅統一新羅時代瓦研究」(『瓦の生産と流通』、韓国瓦学会第八回定期学術大会、二〇一一年)。

7 6 崔英姫「新羅における平瓦・丸瓦製作技術の展開」(前掲誌、八〇頁)。

7 7 これを南朝式丸瓦と呼ぶことが提案されている(山崎信二『古代造瓦史』(前掲書、一七頁))。

7 8 王志高「六朝建康城遺跡出土陶瓦の観察と研究」(『瓦の生産と流通』、韓国瓦学会第八回定期学術大会発表文、二〇一二年、四九〜五八頁)。その中で本稿の図面で提示した資料は図四三・四四の丸瓦と図一一・一二の平瓦である。

7 9 鄭治泳「漢城期百済瓦製作技術の展開様相」(『韓国考古学報』六三、二〇〇七年)。

8 0 国立慶州博物館『新羅瓦博』(前掲書、一八六頁(図五八八〜五九〇))。

8 1 崔英姫「新羅古式軒丸瓦の製作技法と系統」(前掲誌、一二七〜一二八頁)。

8 2 ただ、月城塚字から出土した図一三二の高句麗系瓦当は㊦技法で製作されており、公州公山城からも同じ接合技法が確認されているため、  
8 3 ㊦技法導入の上限は遡る可能性がある。しかし、百済系瓦当の変遷という点からみると、慶州工高から出土した3型式と7型式、六通里  
8 4 瓦窯址から出土した瓦当が重要な位置を占めることは明らかである。

8 3 崔英姫「新羅における平瓦・丸瓦製作技術の展開」(前掲誌、八四頁)。

8 4 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館『蓮華百相』(一九九九年)。

上原真人「寺院造営と生産」(『記念的建物の成立』、鈴木博之・山岸常人編、東京大学出版会、二〇〇六年)。

清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』(前掲書)。

8 5 六〜七世紀の百済寺院の場合、大通寺式だけでなく陵山里寺式、王興寺式、帝釈寺式、弥勒寺式などと呼ぶことができる独特な文様を持つ  
8 6 創建瓦が各寺院で確認されている(本稿の第六章第二節参照)。つまり、百済では新たな寺院を創建する度に新たな瓦当文様を使用してい  
8 7 る。新羅の初期寺院や日本の初期寺院のように既存の瓦当文様を固守あるいは再活用することとは全く異なる。

8 6 李基白「新羅の初期仏教と貴族勢力」(『新羅思想史研究』、一潮閣、一九八六年、七六〜七七頁)。

8 7 盧重国「新羅と百済の交渉と交流」(『新羅文化』一七・一八合集、二〇〇〇年、一三五〜一三六頁)。

<sup>8</sup> 岡本東三『古代寺院の成立と展開』（山川出版社、二〇〇二年、一一〜一四頁）。

<sup>8</sup> 大臣恭謁等諫曰、近者年不登民不安。加以隣兵犯境、師旅未息。奚暇勞民作役。作無用之屋哉。王憫左右無信。（『海東高僧伝』法空条）

<sup>9</sup> 崔鉉植「六世紀東アジア地域の仏教拡散過程に対する再検討」（前掲誌、七七〜七八頁）。

<sup>9</sup> 上原真人「寺院造営と生産」（前掲書、九〇〜九二頁）。

<sup>9</sup> 国立慶州博物館『慶州工業高等学校内遺構収拾調査』（前掲書、七〇〜七一頁）。

<sup>9</sup> 古代寺院から出土した創建瓦を「寺名(地名)+式」瓦当と命名することで該当する瓦当をイメージ化することができ、その名称の中に編年観と歴史性を共に付与できるため、一定の意味を持っていると考えられる。

<sup>9</sup> 従来、8型式瓦当を根拠に初期の新羅仏教が梁と百済の影響下に成立したと把握した見解があった(藺田香融「東アジアにおける仏教の伝来と受容」(前掲誌、一七頁)。基本的論旨は同じであるが、8型式瓦当は六世紀中後半に属するため、1a・1b型式瓦当を中心に議論しなければならぬだろう。

<sup>9</sup> 魏時曰新羅、或曰斯羅。其國小、不能自通使聘、普通二年、王募名秦始使、使隨百濟奉獻方物。(中略)無文字、刻木為信、語言待百濟以後通焉。(『梁書』新羅伝)

<sup>9</sup> 清水昭博「百済大通寺式軒丸瓦の成立と展開」（前掲誌、七一〜七二頁）。

<sup>9</sup> 一方、新羅古墳でも南朝・百済系と推定できる遺物が出土しており、これも参考となる。飾履塚の金銅履や皇南大塚北墳の熨斗および黒釉小瓶がそれに該当し、それらについては次の論考が参考となる。

<sup>9</sup> 李漢祥「新羅古墳の中の外来文物の調査と研究」（『中央考古研究』六、二〇一〇年、六九〜七〇頁）。

<sup>9</sup> 河上麻由子「仏教与朝貢的關係―以南北朝時期为中心」（『伝統中国研究集刊』一、二〇〇六年）。

<sup>9</sup> 河上麻由子「遣隋使と仏教」（『日本歴史』七二七、二〇〇八年）。

河上麻由子「中国南朝の対外関係において仏教が果たした役割について」（『史学雑誌』一一七―二二、二〇〇八年）。

以上は全て河上麻由子『古代アジア世界の対外交渉と仏教』（山川出版社、二〇一一年に再収録）。

<sup>99</sup> ここで注目されることは、五三二年の新羅の金官加耶併合と、五三八年の泗泚遷都を前後した済羅の関係である。新羅の金官加耶併合を契機に百済と新羅の羅済同盟は危機を迎えるようになったのであろう。しかし、五四一年（真興王二年）に百済が使臣を送り和親を要請した際、すぐに許諾したという記録を見ると、同盟が決裂していなかったといえる。したがって、文献史料にはあらわれないが、興輪寺の造営に百済の技術者集団が派遣されたことは、五三八年の泗泚遷都を準備していた百済の立場からは高句麗との戦争に備えるため新羅との同盟維持や強化のための側面があったといえるだろう。

<sup>100</sup> 慶州興輪寺址の伽藍配置や遺構については不明である。慶州皇龍寺址や芬皇寺址の事例を通して一塔三金堂式であったと推定する見解（金昌鎬「新羅興輪寺の伽藍配置問題」（『新羅文化』二〇、二〇〇二年、一四三～一四七頁）があるが、この見解は受け入れがたい。ただ、『三国遺事』に残っている記録を通して統一新羅時代にここに南池、南門、殿塔（金堂）、左右廊廡、左経樓、呉堂などがあったことを確認できる（田中俊明「慶州新羅廃寺考（一）―新羅王都研究の予備的考察」（『堺女子短期大学紀要』二三、一九八八年、四～一三頁）。これを根拠にして南池、南門、仏塔、仏殿が順番に配置され、周囲に回廊が巡っている一塔一金堂式の伽藍配置を想定した見解がある（李康根「慶州の文化財に対する再認識―新羅最初の寺、興輪寺を中心に」（『慶州文化』四、一九九八年、六七～七二頁）。ところで、興輪寺址を一塔一金堂式の百済式伽藍配置と推定した論者自身も法興王代の新羅で百済式の伽藍配置を採択できたのかについて疑問を呈している。しかし、本章で検討した内容が妥当であれば、興輪寺の創建伽藍は百済式な定林寺式伽藍配置が採択された可能性がより高いと考える。

<sup>101</sup> この瓦当を根拠にして天官寺址一号建物址を六世紀後半に建立されたと見る場合もあるが（趙源昌「新羅瓦積基壇の型式と編年」（『新羅文化』二八、二〇〇六年、九三～九五頁）、百済地域の瓦積基壇がおおよそ六世紀末や七世紀前半から急増する様相を考慮すると、その年代があまりにも古い。ただし、天官寺址や伝仁容寺址一号建物址（国立慶州文化財研究所「慶州（伝）仁容寺址発掘調査」（『年報』二〇、二〇一〇年）の事例は、新羅の瓦積基壇が百済滅亡以前から出現していた可能性を示唆しており注目される。

<sup>102</sup> 日本の古代寺院に見られる瓦積基壇は六六〇年の百済滅亡による遺民の影響であるということが早くから指摘されてきた（田辺征夫「古代

寺院の基壇「切石積基壇と瓦積基壇」（『原始古代社会研究』四、校倉書房、一九七八年）および田辺征夫「瓦積基壇と渡来系氏族」（『季刊考古学』六〇、一九九七年）。ただ、最近ではそれ以前の七世 中段階の大阪の四天王寺や大津の穴太廃寺でも瓦積基壇建物が造営された可能性が提起されており参考となる（綱伸也「日本における瓦積基壇の成立と展開―畿内を中心として―」（『日本考古学』一九、二〇〇五年）および小笠原好彦「瓦積基壇考―近江・山背・大和・河内―」（『日本古代寺院造営氏族の研究』、吉川弘文館、二〇〇五年）。

## 第六章 百濟寺院が日本の初期寺院に及ぼした影響

### はじめに

飛鳥寺は日本最初の本格的な寺院である。瓦葺の礎石建物という新たな形式による記念的な建築物であることから日本古代史において画期的な意味を持つ。飛鳥寺は法興寺、元興寺とも呼ばれ、当時最高の実力者である蘇我馬子が物部守屋を滅亡させた翌年の五八七年に発願した。飛鳥寺の造営過程を説明する際よく引用される史料を提示すると次のとおりである<sup>1)</sup>。

史料六一一 是歲、百濟国遣使并僧惠総、令斤、惠寔等、献仏舍利。百濟国遣恩率首信、徳率蓋文、那率福富味身等、進調并献仏舍利、僧聆照律師、令威、惠衆、惠宿、道嚴、令開等、寺工太良未太、文賈古子、露盤博士将徳白味淳、瓦博士麻奈文奴、陽貴文、懐貴文、昔麻帝弥、画工白加。(『日本書紀』卷二一 崇峻元年 是歲条)

史料六一二 次撰天皇治下時、戊申年送六口僧、名令照律師、弟子惠念、令威法師、弟子惠勳、道嚴法師、弟子令契、及恩卒首真等四口工人、并金堂本様奉上、今此寺在是也。(『元興寺縁起』「本文」)

史料六一三 戊申始請百濟王名昌王法師及諸仏等、改遣上积令照律師、惠聰法師、鏤盤師将徳自味淳、寺師丈羅未大、文賈古子、瓦師麻那文奴、陽貴文、布陵貴、昔麻帝弥、令作奉者、山東漢大費名麻高垢鬼、名意等加斯費也、書人百加博士、陽高博士、丙辰年十一月既、尔時使作全人等、意奴弥首名辰星也、阿沙都麻昔名未沙乃也、鞍部首名加羅尔也、山西首名都鬼也、此四部首為将、諸手使作奉也。(『元興寺縁起』所引「塔露盤銘」)

以上の史料と関連記録から、五八八年に百済から恩率首信などの高位官僚と仏舎利を送るとともに僧侶六人、寺工二人、露盤博士一人、瓦博士四人、画工一人が派遣され、本格的な造営が始まった。その後、五九〇年(崇峻三)に山から用材を確保し、五九二年(崇峻五)に金堂と回廊の工事が開始された。また、五九三年(推古元)には塔心礎に仏舎利を安置して刹柱を立てた。五九六年(推古四)には露盤(塔)が完成し、これについて『日本書紀』は「法興寺造竟」と記す。六〇五年(推古十三)には銅繡の丈六仏像を製作しはじめるが、この際に高句麗から黄金三〇〇両が送られてきたという。六〇六年(推古十四)または六〇九年(推古十七)に丈六仏像が完成し、これを金堂に安置することによって飛鳥寺の造営に関する史料は一段落する<sup>2)</sup>。

ところが、五九六年の「法興寺造竟」という記事が寺院全体の造営工事の完成を意味するのか、木塔だけの完成を意味するのかははっきりしない。また、丈六尊像の完成時期についても『日本書紀』と、『元興寺伽藍縁起並流記資財帳』の「丈六光銘」にそれぞれ異なる記録が伝わっているため、これに対する議論がある。

飛鳥寺については、一九五六年と一九五七年に奈良国立文化財研究所の発掘調査によって伽藍中枢部の概要が明らかになった。発掘調査において注目されたことのひとつが伽藍配置が塔を中心に中金堂と東西金堂を配置する一塔三金堂式であったことである<sup>3)</sup>。百済の技術者の支援があったという文献記録と、付近から収集された瓦当が扶余から出土したものと同様であることから、飛鳥寺は百済寺院の一般的な伽藍配置である一塔一金堂式であろうという予想が大きくはずれず結果となった。塔を中心に三金堂を配置する型式は、当時高句麗の清岩里廃寺でしか見当たらず、百済からは確認されていなかった。そのため、日本の学界では五九六年に日本に渡った高句麗の僧侶慧慈が百済の慧聡と共に飛鳥寺に住席したことや高句麗の大興王(嬰陽王)が黄金三百両を貢上したことを見ても高句麗の影響があったと想定できることから、その伽藍配置は百済のみならず高句麗の技術や情報が複合的に受容されたものと理解してきた。こうした学説は一九五八年に飛鳥寺の発掘調査報告書が刊行されて以来、長らく定説となった。

飛鳥寺三金堂に対する高句麗源流説の最大の問題点は、発掘調査終了後に開催された座談会においてすでに指摘されたように、三金堂という「プラン」しか高句麗との類似点がないということである<sup>4)</sup>。特に、高句麗寺院の木塔は八角形であって、飛鳥寺の方形とは異なる

る。これは単に平面形態の差異だけでなく、木塔建立の技術や思想の差異もあつたことがうかがえる。また、これまでは蓮弁に稜がある豊浦寺式瓦当の一部を、いわゆる高句麗系または高句麗百済系に分類していたが、実際に高句麗では同じ型式の瓦当が見当たらないため、最近では新羅の影響や日本で創案されたものであると考えられている<sup>5)</sup>。したがって、六世紀後半から七世紀前半の日本の初期寺院では、高句麗系の技術の直接的な痕跡がほとんど見当たらないといつても過言ではない。

こうした矛盾を解決するためにいくつかの代案が提示された。まず一つ目に、時期差を想定する立場として、初期には百済式の一塔一金堂を計画していたが、その後二棟の金堂が増築され、高句麗式になったという、毛利久・ベルチエ・上原和などによるいわゆる二期造営説である<sup>6)</sup>。二期造営説は、木塔と中金堂が壇上積基壇をしていることと、東西金堂が二重基壇と下層礎石を使用していることとの差異を説明するために考案された側面もある。しかし、根拠として提示された史料解釈に問題があり、仏塔のような大規模の建物を建立するのに少なくとも四・五年はかかると思われるため、五九六年(推古四)には木塔が完成し、六〇九年(推古十七)頃に東西金堂をはじめ伽藍中枢部が完成したと考えるべきであるという反論が出された。また、発掘調査の結果をみても、飛鳥寺の一塔三金堂は整然と配置されており、一貫して造営されたようにみられるため、一時期に造営されたともみなすべきであるという反論も提起された<sup>7)</sup>。現在は一時期造営説が支持されているが、講堂や南門が若干遅れて建立された可能性は残っている。

二つ目に、百済の寺址からはまだ飛鳥寺の三金堂と同じ伽藍配置が発見されていないが、少なくとも類似する型式の伽藍配置を探ることができると、百済にその源流を求めるときであるという見解である。大川清・猪熊兼勝・趙源昌・佐川正敏などがこのような見解を提示している<sup>8)</sup>。初期には軍守里寺址が代案として提示されたが、最近では王興寺が新たに注目されている。この見解には、軍守里寺址の東回廊址の東側から発見された東方基壇の建物址を東金堂とみていることや、王興寺の東西回廊址の北端の付属建物址が東・西金堂に変形されたという見解がある。現在は少数の意見であるが、最近、百済の寺院址の調査が増えるにあたってこれを再吟味する必要があると思われる。

三つ目に、百済と高句麗間にも技術の交流があつたため、高句麗の影響を受けた百済の技術者が来日し、三金堂を築造したという見解



である。新羅の皇龍寺は、最初一塔一金堂式に建立されたが、五八四年に重建伽藍が造営されるようになってから東・西金堂が追加され、六四〇年代には再び百済の工人を招聴して木塔を建立した。こうした事実は三国が政治的・軍事的な行動とは別途に文化や技術面では交流があったことを示すものであり、百済も高句麗の影響を受けた可能性を示唆する。したがって、飛鳥寺にみられるいくつかの系統の造営技術や寺院のプランは、大陸から個別に日本に伝わったものではなく、百済の寺工や技術者によって総合的に伝播したとみなすべきであるという。具体的な論証がないことが惜しまれるが、当時の東アジアにおける文化伝播と受容過程を理解するうえできわめて重要な観点である。

以上、三つの見解は、百済地域から三金堂式の伽藍配置が確認されれば、簡単に解決できるようにみえるが、大規模な発掘が多数行なわれた現在の状況をみると、その可能性はそれほど高くはないであろう。比較的によくの資料と研究が蓄積された瓦当の場合、百済の瓦当の中に飛鳥寺の創建瓦と類似するものは発見されているものの、文様や技法の組み合わせが一致するものは確認されていない（本稿の第六章第二節参照）。したがって、伽藍配置においても同じ状況が予想される。飛鳥寺の建立における瓦博士をはじめとする百済の技術者の技術供与とは単に高価なものを伝えただけではなく、多方面にわたって高度の技術を伝授したものであった。この場合、技術の伝授と習得の過程で多様な形態の相互作用と変形が生じる可能性もあるため、その結果物は同じ形で発見されるというよりは、若干異なる形態として変形されるのであろう。このことは、梁の技術者の援助によって築造された公州の宋山里六号墳や武寧王陵の場合も南京地域の磚築墓に類似してはいるものの、全く同じものではないことと相通じる。したがって、飛鳥寺三金堂の源流を探る際に、韓半島や中国で飛鳥寺三金堂と一致するものを探すよりも、微妙な差異を勘案しながら脈絡的に類似したものを探すべきである。

一方、飛鳥寺三金堂が高句麗の伽藍配置と類似しているため、寺院を建立する際に百済だけでなく、高句麗など韓半島各地の文化や技術が飛鳥に結集されたとする見解については検討する必要がある。こうした視点は飛鳥寺を造営する際に来日した百済の工人の中で、中世ペルシア語と同一の人名が混じっているため、ペルシアなどの西アジアを含む多様な文化と技術が駆使され、こうしたことから飛鳥文化は最初から国際性を持つ文化として出発したとする見解へ拡大しつつあるためである<sup>10</sup>。

しかし、古墳の築造よりも技術の相互間の依存や結合度が高い寺院を造営する際に、しかも外国の専門技術者の助力を受けて初めて寺院を建立する際に、技術を伝授する国家の個性的な文化要素を理解し、選択的に受容することができたのかについては疑問を抱く。こうした視点は百済の内部でも高句麗的な文化要素が幅広く受容されていたことを看過したものであるためより問題視される。六世紀代の百済では南朝だけでなく、北朝や高句麗などと活発に交流しながら多様な文化要素が溶解されたのである。

こうした観点に基づいて、第一節では飛鳥寺の三金堂の源流について検討する。まず、百済寺院では飛鳥寺三金堂と全く同じとはいえないものの、類似する性格の建物が存在するなど新たな要素が確認されることから、高句麗の文化が直接日本に伝えられたのではなく、百済を経由して伝播した可能性を提起した。このためにまず扶余地域にみられる高句麗系の文化要素を紹介する。六世紀代の百済では一般民のみならず、支配層の文化に至るまで幅広く高句麗文化に影響を受けていた。こうしたことから、飛鳥寺三金堂も百済において高句麗文化の一部として受容されたものが再伝授された可能性も提起できる<sup>11)</sup>。

次にこのような検討を基に六世紀中後半の百済寺院に見られる新要素を検討する。六世紀中後半の軍守里寺址や王興寺址では回廊の外郭に新たな性格の建物を築造するなど定林寺式伽藍配置というプロトタイプとは異なる要素が確認されている。本稿ではそのような変化の出現背景として中国の多院式寺院や高句麗寺院の影響に注目した。このような分析と当時の文献記録などを総合して飛鳥寺の三金堂をはじめとする寺院の造営は百済で組織・派遣された臨時的なプロジェクトチームによって行われたことを論証していきたい。

さらに飛鳥寺建立以後に造営されるいわゆる四天王寺式伽藍配置の展開過程についても簡略に言及する。第二章第一節と第四章第一節で検討した百済泗泚期の定林寺式伽藍配置と日本の四天王寺式伽藍配置の同異に対する相互比較を通してこれまで知られていた伽藍配置の原状を再検討する契機としたい

飛鳥寺で百済寺院造営技術の伝播と受容過程を最もよく物語る資料は瓦当であり、日本の学界では文様だけでなくその製作技術や同范関係、生産体制などに関する多くの研究が蓄積されている。第二節ではこれらの成果を参考に、観点を飛鳥寺の瓦当から百済瓦当の問題へと転じて、飛鳥寺創建瓦の源流に関する問題を検討する。泗泚期の各遺跡で出土する全ての瓦当をいくつかの類型に分類した後、飛鳥

寺の瓦当と最も類似する事例を提示する方法論の代わりに、主要遺跡の創建瓦を抽出した後、主要寺院と王宮区域で使用された瓦当の文様や製作技術、需給体系にいかなる共通性と差異点があったかに注目したい。このような議論を基に飛鳥寺の花組と星組などの創建瓦が泗泚期の百済瓦当といかなる関係を持つのか明らかにして、さらに飛鳥寺建立のために派遣された百済の技術者が百済の行政組織体系においていかなる位置にあるのかについても共に言及する。

### 第一節 飛鳥寺三金堂と日本の初期寺院の源流

#### (一) 六世紀代百済における高句麗系文化

六世紀代の百済は南朝のみならず、北朝、その後を継いだ隋、高句麗と新羅、伽耶、日本などと活発に交流しながら自国の文化を発展させていった。一般的に百済は六世紀初めから半ばにかけて南朝文化の影響を大きく受けるが、六世紀後半からは北朝の国家と隋の影響を受け、より多様な文化を受容していた。しかし、中国の影響に劣らず重要なのが高句麗の影響である。熊津期末期から次第にあらわれはじめる高句麗系の文化要素は、泗泚遷都以後になると、各種土器類や金工品、オンドル、瓦当、特殊な建物址、墓制など多様な分野で確認できる。

まず、最も多くの研究と資料が蓄積された土器類を確認してみたい(図六)。泗泚期の百済土器の中で高句麗土器が起源であるとみられる器種は、有顎土器(耳杯)、楸匙・盤・帯状把手付壺、帯状把手付蓋、暗文土器、煙家、甑など、きわめて多種にわたっている<sup>12)</sup>。それらのうち、有顎土器や皿は扶余官北里、扶蘇山城、宮南池、花枝山、陵山里寺址、王宮里遺跡など、王宮や寺院のような位相が高い遺跡から主に発見されている。盤や帯状把手付壺、帯状把手付蓋、甑などのような日常生活の容器は、扶余亭岩里窯址、井洞里建物址、松菊里、東南里、扶蘇山城、旧衙里、宮南池、王宮里、弥勒寺址など、各種の建物址だけでなく、窯址からも出土している。高句麗土器の特徴的な文様の施文技術の一つであると思われる暗文土器も松菊里、宮南池、陵山里寺址、軍守里、東羅城一帯、東南里、双北里で広範

圃から発見されている。

こうした高句麗系土器は六世紀前半代から出現し、単純に器形だけを模倣したのではなく、製作技法や焼成技術まで一致するため、高句麗土器の製作技術をもつ工人が移住したと見ている<sup>13</sup>。しかし、六世紀中後半の亭岩里窯址や青陽冠峴里窯址からも盤や帯状把手付四耳壺などが発見されていることから、百済の内部でも次第に高句麗系土器を主体的に製作したことがうかがわれる。このように泗泚期の土器の中には日常生活の容器から高級器種に至るまで高句麗土器の影響がきわめて大きかったと考えられる<sup>14</sup>。ただし、扶余を中心にした泗泚期の百済地域から出土する高句麗系土器はソウル阿且山の堡壘群や漣川瓠蘆古壘などで出土した六世紀代の高句麗土器でなく、五世紀代に流行した高句麗土器の伝統を持っており、より精選された泥質の胎土を利用しているという違いが見られる<sup>15</sup>。

一方、同時期の高句麗土器の製作にも百済土器の影響が確認される。打捺された高句麗土器がその例である。高句麗土器には終始打捺技法が採用されていないが、韓国の高句麗遺跡である漣川瓠蘆古壘や隱垈里城、坡州舟月里、清原南城谷遺跡などから出土した土器の中には百済土器に観察される打捺文が残っていたり類似する器形が混じっている。これは百済工人が高句麗土器の製作に参加したことをうかがわせる資料であると考えられる<sup>16</sup>。

住生活に関しては煙家とオンドルに注目したい。煙家の場合、陵山里寺址、官北里、東南里・花枝山・扶蘇山城・王宮里、益山の射徳などから出土した排煙施設の一つであり、日本の学界では土製煙筒とも呼ばれている。百済の煙家は扶余と益山を中心に寺院や王宮、大壁建物址などから出土しているが、集安の禹山下墓区M二二三二五号の出土品の影響を受け、六世紀中半以降に出現したものと見ている(図六二)<sup>17</sup>。このような煙家の出現は高句麗の暖房施設であるオンドルの使用と関連している。扶余井洞里や陵山里寺址などからは割石や板石を利用して長いオンドル用の石をつくり、煙突を備えた暖房施設がつけられていた(図六一五の二)。集安の東台子遺跡(図六一五の二)や平壤の定陵寺址(図六一五の二)区域十号、Ⅱ区域一号、Ⅳ区域一号)から同様の板石造の二重屈折のオンドルが確認されているため、扶余井洞里や陵山里寺址などでも高句麗の影響がうかがわれる<sup>18</sup>。オンドルが発見された周辺からは先述のように煙家が発見されており、高句麗系の盤などが一緒に発見された。こうしたことから住居生活にも高句麗の影響があったことがうかがわれる。

住生活における高句麗の影響は瓦当や二重基壇、一棟二室建物址などからも確認できる。扶余地域から出土した高句麗系の瓦当の場合には龍井里廢寺、双北里一帯から発見されたAグループ、官北里、龍井里廢寺一帯から発見されたBグループに分けられる。Aグループは幅線で瓦当の面を四等分し、杏仁状の隆起した蓮弁を配置したもので(図六―三の二)<sup>19</sup>、Bグループは突出した子房に尖形の隆起に蓮弁を装飾したものである(図六―三の二)<sup>20</sup>。色調は濃い灰色系統と赤褐色系統の二つが確認でき、接合技法は共通して瓦当裏面の最上部に丸瓦を接合するための切り込みを設けた後に接合する方式をとっていた。

このような接合技法は公山城や大通寺址に見られる技術とは異なるもので、むしろ高句麗の瓦当に見られる鋭い道具で刻みを入れる技法や多歯具で掻き刻む技法に類似する<sup>21</sup>。ただ、高句麗の瓦当に見られる瓦刀や多歯具の痕跡がほとんど見られず、文様も若干異なっていることは、高句麗の平壤から直接瓦工が派遣されていないことを示すものである<sup>22</sup>。その製作時期についてはいくつかの見解が出されているが、立地的な側面からみると泗泚遷都の前後である六世紀前半とみることが適切であろう<sup>23</sup>。扶余地域から出土した高句麗系の瓦当は南朝系の瓦当と比較すると、时期的・地域的に制限されたかたちで出土するため少数派であったと考えられる<sup>24</sup>。

二重基壇の場合、五〜七世紀の寺院の金堂や木塔に主に利用される基壇型式であり、初期の二重基壇には下成部に礎石(以下、下成礎石と呼ぶ)がある事例が発見されており注目される(図六―四)<sup>24</sup>。こうした例は高句麗の清岩里廢寺の八角建物址(木塔と推定)を筆頭に百済の定林寺址の金堂址・新羅の皇龍寺址の三金堂址・四天王寺址の金堂址、飛鳥寺の東・西金堂址などで確認されている。百済寺院で発見される下成礎石の場合、时期的に古い高句麗の影響によって出現したと考えられるが、飛鳥寺東・西金堂の下成礎石は高句麗から直接伝わったのではなく、百済を通して伝えられたものと考えられる<sup>25</sup>。

一棟二室建物址の場合、陵山里寺址の講堂址をはじめ益山の王宮里遺跡、弥勒寺址の講堂址と僧房址、慶州の皇龍寺址における創建伽藍の講堂址の下部基壇、慶州の感恩寺の工房址などから発見されている。これまでに発見された最も古い遺構は集安の東台子遺跡の第一建物址である(本稿の第四章第一節参考)。東台子遺跡の第一建物址は図六―五のように平面形態と規模、内部に施設されたオンドル構造および西室中央部に配置された台石、壁体構造などが陵山里寺址の講堂址と酷似しているため、百済の一棟二室建物址も高句麗の影響を

受けて成立したと考えられる。このような形式の建物は益山王宮里遺跡の宮城段階で使用された建物址や弥勒寺址、慶州の皇龍寺址、感恩寺址などでも幅広く使用された<sup>26</sup>。

さて、扶余地域でこのような高句麗文化の要素があらわれた背景とはいかなるものであったのだろうか。高句麗系の土器の製作やオンドルと煙家の使用は道具や技術の移動のみでは説明し難く、人の移動特に高句麗の住生活や食生活に慣れた集団の移住を想定せざるを得ない。そこで注目されるのは四七五年の漢城陥落以降に熾烈に展開された百済と高句麗の戦争関連の記録である。五世紀後半から五五一年に百済と新羅、伽耶の連合軍が漢江流域を占領するまで、高句麗と百済は二〇余回に及ぶ熾烈な戦闘をくりひろげた<sup>27</sup>。その過程で高句麗の戦争捕虜や収復地域の旧百済系の住民を移住させた可能性が提起されている<sup>28</sup>。こうしたことから、高句麗の領土であった地域から百済系の打捺文土器が発見される現状や、高句麗系の瓦当が平壤のものと同じがみられることもある程度理解できるだろう。そのような点で武寧王一〇年(五一〇)の「址防を固く守り、都と方の遊食者らに農事をさせた」<sup>29</sup>という記録もこうした事情を反映する措置と考えられる。

四七五年の漢城陥落以降、新羅が漢江流域を占領する六世紀前半までに百済と高句麗は頻繁に戦争を繰り広げ、その過程で多くの移住を生みだし、両地域は次第に相似する文化を共有していったと考えられる。しかし、一般民だけでなく、支配層の文化においても高句麗の文化要素が確認されている。つまり、先述した瓦当や二重基壇、一棟二室建物以外にも陵山里寺址や陵山里東下塚で確認される高句麗系の金属工芸品や壁画古墳がそれである。陵山里寺址の工房址一からは高句麗系統の金銅花形裝飾や三角形透彫裝飾品、金銅耳飾の中間飾、横孔鉄斧などが出土している<sup>30</sup>。また、東下塚の壁画からも四神図と蓮華文雲文図の表現法や構図が平壤の真坡里一号墳や内里一号墳と極めて類似する(図六一六)<sup>31</sup>。ただ、東下塚の天井は抹角藻井ではなく平天井であり、石室の構造は百済的な伝統を持つものである。

熊津・泗泚期における古墳の変遷については、宋山里型から陵山里型へ変化する過程を玄室の天井の形態、平面プラン、壁面構築法や羨道の長さ、石室の閉鎖方式などを基に段階化した見解が参考になる(図六一七)<sup>32</sup>。陵山里古墳群で最も古い時期に築造されたのは中下

塚であり、石室は玄室平面が長方形を呈しトンネル状の天井をつくり、羨道を前壁の中央に付けたもので、宋山里古墳群の埴室(図六一七の二)を石材で模倣したものである。その後、中上塚(図六一七の三)のような断面六角形の陵山里型石室を完成させるが、編年上、東下塚(図六一七の二)は中下塚と中上塚との間に位置づけられる。このような古墳の相対年代から中下塚は聖王陵、東下塚は威徳王陵と推定されている。

ところで、南朝の影響を受けて築造された埴室から板石造の中上塚へ変化した背景、つまり、大形の板石を材料に選択した背景には高句麗の影響があったことがうかがわれる。中下塚の次に築造された東下塚で高句麗系統の壁画が描かれたことや聖王陵と推定される中下塚が築造される頃に願刹であり陵寺として陵山里寺址が建立されたことは、高句麗の影響を示唆すると見ることができ<sup>333</sup>。しかし、百済は南朝や高句麗の影響を受けながらも直後に断面六角形の陵山里型石室という独特な墳型を完成させ、六世紀後半には百済全域へ拡散させている<sup>334</sup>。こうしたことから高句麗からは壁画の技法のみを採用し、これをすぐに百済化させたと見ることができ<sup>335</sup>だろう。

以上の検討により、六世紀代の百済では基層文化だけでなく、支配層の文化においても高句麗の影響があったことが確認された。五世紀末や六世紀前半から開始された高句麗系文化の流入は、六世紀中半以後は次第に支配層まで拡大したと見られる。ところが、六世紀後半から七世紀に編年される東下塚で図六一六のような高句麗系統の壁画が発見されており、これが威徳王陵と推定されることは非常に示唆的である。なぜならば、威徳王は五八八年に飛鳥寺建立の際に僧侶と技術工人を派遣した張本人であるからである。これは飛鳥寺三金堂の源流を論ずるうえで見逃されてきたため注目する必要がある。威徳王は五六七年を起点に北朝の国家との交渉を再開するなど王権強化の作業を本格化させた(本稿の第三章第三節参照)。ところが、陵山里寺址の講堂址の構造や出土遺物に高句麗文化の要素が混じっていることを見ると、北朝のみならず高句麗との交渉も活発に行っていた可能性が高い。威徳王代の後半は南朝中心の外交から離れ、北朝と高句麗系統の文化が互いに融合される多様な文化の溶鉱炉のような時期であったと見るべきであろう。

## (二) 百済寺院の新要素と出現背景

## 一) 六世紀中後半の百濟寺院にみえる新要素

百濟の本格的な寺院の造営は公州の大通寺から始まるが、その遺構は全く知られていないため、泗泚期の扶余と益山地域の伽藍を中心にその配置を検討せざるを得ない。その中で最も古い段階で建立されるのが定林寺である。本稿の第二章で検討したように定林寺は泗泚遷都以降、特に五四一年の梁武帝による工匠・画師の派遣以降に完成した寺刹と推定されており、その後の百濟寺院の伽藍配置は定林寺を原型として展開されたことを論証した。百濟の寺院は南門がない状態で中門一塔一金堂が一直線上に配置され、これを回廊が取り囲む型式が一般的であったが、講堂と回廊の連結方式が東・西回廊址の北端の付属建物址(以下、東堂と西堂とする)、講堂址の左右の別途建物址へ連結する方式をとるのが特徴である。その他に東西回廊と南回廊はL字型に直接繋がるのではなく断絶しており、南回廊が東西回廊よりも長く突出している(本稿の第四章第一節参照)。

近年、王興寺址の発掘の結果、東西回廊址の北端の東堂と西堂を飛鳥寺の三金堂の源流とする見解が提起され注目されている<sup>30</sup>。それまでの高句麗起源説に従わず、百濟からその源流を求めようとした最初の試みであったことは研究的に評価すべきである。しかし、陵山里寺址の建物配置や出土遺物、弥勒寺址の伽藍配置と建物の機能、日本の古代寺院の三面僧房などを参考にすると、金堂より格が低いが公的な性格の強い僧房のようなものとみるのが適切であろう(本稿の第二章第一節および第三章第一節)。百濟の寺院に見られる東堂と西堂は、定林寺址、陵山里寺址、軍守里寺址、王興寺址の段階を経て、帝釈寺址と弥勒寺址の段階までその伝統が継続している(本稿の第四章第一節参照)。この建物は弥勒寺址では図六二〇のように講堂址南側の僧房址としてあるため、その前段階の建物址も同じ性格の建物とみても無理はないだろう。

ところで、王興寺址の場合、東堂と西堂の外郭から別途の建物址が確認されており注目を集めた(図六一八の一)。この建物址はまだ全面発掘が完了していないため正確な規模は不明であるが、東・西回廊址北端の東堂と西堂からそれぞれ六・五メートルほど離れて、東側と西側から対称をなして発見された<sup>37</sup>。その中で西側外郭の建物址は基壇が比較的よく残っており、割石を平積した石築基壇と、その外郭に小形石材と平瓦片を多量に敷いていることが確認された(図六一八の二)<sup>38</sup>。この建物址は東西三二・四メートル、南北三四・八メ



トールの長方形を呈し、西側基壇は別途に作られておらず、寺域西側の境界となる南北築台まで連結していることが特徴である。建物址の内部は、耕作と洪水などによって削土されたり攪乱によって正確な状況を把握しがたい。しかし、建物址南側一帯から礎石五個、石列六基が確認された。このことから、東側と南側、北側から確認された三二・四メートル、三四・八メートルの基壇石列は、ひとつの建物構成する建物基壇とみなしがたく、複数の建物址が組み合わさったひとつの院を構成する基壇としての性格を有したものと推定できる。一方、東側外郭の建物址は遺構上面が大部分削平されており、基壇土が確認されたのみである。本格的に調査されていないが、西側外郭建物址と対称をなしていることから、これもまたひとつの院をなしていたものと推定される。このような回廊外郭の東・西建物址は、現在まで南北方向の建物基壇が残存していることが明らかになった程度であるが（以下、東・西外郭建物址と呼ぶ）、百済寺院ではそれまで見られなかった新要素であるという点において、注目する必要があると考えられる。

王興寺址の一次調査では、寺域の西側の境界とみられる築台が確認された（本稿の第四章第一節参照）<sup>330</sup>。王興寺址が位置する旧地形は北側と東側が高く、南側と西側が低い。これによって南側と西側が台地造成のために盛土され、南側と西側の境界部には大きな割石を利用して築台を築いた。一次調査で発見された寺域西側の境界の築台は伽藍中枢部から西に約七六メートル離れている。一方、伽藍中心部から約六一メートル離れた地点からも南北方向の石築施設が確認されており、幅が約八メートルであった。この施設は中央の進入路（南北石築、幅二一・八メートル、長さ約六二メートル）と類似した形態であるため寺刹に出入りするもうひとつの進入路であったと推定される。王興寺址の発掘団は、百済の寺院が対称構造をなしているため東側一帯にもこうした施設があったと推定した。

現在までの発掘調査の内容を整理したものが図六八の一の王興寺址伽藍配置推定図である。王興寺址は木塔と金堂、講堂が南北の中心軸線に配置され、回廊址北端に長さ四十八メートル、幅十三メートル前後の東堂と西堂が位置し、講堂址の東西側に別途建物址が配置された典型的な定林寺式伽藍配置を見せている。そして、伽藍中心部の外郭からひとつの院といえる別途の建物址群、つまり東・西外郭建物址が対称をなして配置されるという新たな変化も共に確認されたのである。これらの建物址の正確な構造や性格はまだ不明であるが、配置を見ると回廊内側の建物より低い、東西の境界の築台の内側に独立で位置していることから、その位相を無視することは難しいと

いえるだろう。

王興寺址のこのような伽藍配置は、その前段階に建立されたと考えられる軍守里寺址の伽藍配置と相通ずる点がある（図六一九の一）。軍守里寺址は一九三五～三六年と二〇〇五～二〇〇七年の二度にわたって発掘調査が行なわれたが、伽藍配置に関連しては最近の再調査でも既存の調査内容と異なる新たな事実を追加されなかった。特に東方基壇が金堂のようなものであるという問題についても再調査されたが、耕作によって削平されたため、建物の基壇が確認できなかった<sup>40</sup>。しかし、軍守里寺址の東側の外郭に金堂址と並行して配置された東方基壇の建物址がなかったとは考えられない。当時の発掘調査報告書には東方基壇の建物址の瓦積基壇と礎石群の写真がよく残っているためである<sup>41</sup>。

したがって、筆者は王興寺址をはじめとした最近の百済寺院に対する発掘調査を基に図六一九の二のような伽藍配置の復元図を作成した。既存の図と異なっている部分は二点ある。一つ目は、西回廊址の北端に西堂があったことが図六一九の一で確認されるため、その東側にも東堂があったと推定した。東堂と西堂の建物の規模は東回廊址の内側の石列が講堂址の東側の東北基壇の付近までつながっていることから<sup>42</sup>、陵山里寺址の東堂・西堂を参考にし、三間からなる建物と推定した。二つ目は、東回廊址の外郭に金堂址と平行に配置された東方基壇の建物址を参考とし、西側にも同じ大きさの建物を復元した。図六一九の一の石田茂作が西方基壇と命名した建物址は東方基壇の建物址と大きさや位置が異なり、左右対称をなしていないため、いわゆる付属建物址の一つである西堂に該当する。したがって、図六一八の一の王興寺址の伽藍配置を参考にし、東方基壇に対称される建物が西側にもあったと推定した。以上の推定が妥当であれば、図六一八の一と図六一九の二から百済の寺院には回廊址の北端の東堂と西堂を境界とし、その外郭にもう一つの建物が分布していたことになる。王興寺址の場合、今後も継続して発掘調査が行われる予定であるため、建物の規模や基壇型式、さらに建物址の性格がより明確になることが期待される<sup>43</sup>。

それでは、二つの寺院の回廊外郭で確認された東・西外郭建物址はいかなる性格を持っていたのだろうか。それについてまず検討する必要があるのが弥勒寺址の伽藍配置である（図六一〇）。弥勒寺址の伽藍配置は三院並列式という極めて独特な型式を呈するが、定林寺

式伽藍配置という百済寺院の伝統の中で創造されたと考えられるためである(本稿の第四章第一節参照)。弥勒寺址中院の場合、中門―木塔―金堂―講堂という泗泚時期の典型的な伽藍配置をしながら、講堂がなく中門―石塔―金堂のみで構成された西院と東院が追加的に建設される様相を見せているためである(本稿の第四章第一節)。つまり、中院を中心にして回廊を境界に東・西院が東西に平行するように配置されているのである。したがって、図六一八の一と図六一九の二、図六一〇を比較すると、図六一〇の講堂南側の東西に配置された僧房址は扶余定林寺址で確認された図六一八の一と図六一九の二の東・西回廊北端の付属建物址(東堂・西堂)が変形した可能性がある<sup>44</sup>。それゆえ軍守里寺址と王興寺址の回廊址外側の東・西外郭建物址はその性格や機能が弥勒寺址の東・西院と一定の関連を持つのではないかと推定できる。

二つの寺院の東・西外郭建物址は、配置様相や残存基壇の型式からみると、中央の金堂址より格が低かったことは明らかである。しかし、独立した領域で中心的な位置を占めつつ単独で配置されていることをみると、単純に僧侶が寝食するための居住空間であると判断し難い。その中で軍守里寺址の東側外郭建物址は、その配置において飛鳥寺の東金堂との類似点がみられるが、東回廊といわゆる東堂建物に区分され、その外郭に配置された点で違いがある。王興寺址の東西外郭建物址の場合、法隆寺西院伽藍の東室・西室と類似する配置をとっているが、大規模な築台を築いて独立空間を形成している<sup>45</sup>。東西外郭建物址の名称や性格については、今後、文献記録を通じた詳細な検討が求められるが、寺院全体の空間的な配置からみると、座禅・瞑想の場としての機能を持った禅堂や、寺院の事務や行政を執り行った「別院」または「僧院」のようなものと推定できよう<sup>46</sup>。

ただし、軍守里寺址の東外郭建物址はその遺構が全く分からない状況であるため、さらなる推定が難しく、王興寺址の西外郭建物址の場合も、現在、発掘調査が進行中であり、遺構の状況が明確でないため、これ以上の推論は困難であり、他日を期するほかない。しかし、日本の飛鳥寺が創建される以前、百済寺院では軍守里寺址と王興寺址が造営された六世紀中後半段階に既存の定林寺式伽藍配置に一定の変化がみられ、それは「僧院」や「別院」のようなものであり、初歩的な形態の多院式寺院の形態を呈していることは注目する必要があるだろう。

## 二) 百濟寺院にみえる新要素の出現背景

六世紀中後半の扶余軍守里寺址と王興寺址で新要素が出現する背景についてより広い視野から検討してみよう。中国北方の寺院は北朝時代の前塔後殿の単院式から隋唐代には多院落多仏殿の多院式へと変化し、これは隋唐代に至って北方仏教の宗派が分立し、崇拜対象が多分化したことを反映しているといえよう<sup>47</sup>。これまで確認された隋唐代の寺院址としては、長安の青龍寺や西明寺が代表的である。

青龍寺の場合、東西に接続する二か所の院落遺跡が確認されたが、西院からは中門と仏塔、仏殿、回廊、配房が、東院からは仏殿と壇址、北門址などが確認された(図六十一の一)。このようなことから青龍寺址が多院式伽藍配置であることが確認できる<sup>48</sup>。六五六年に創建された西明寺の場合、部分的な調査において大形院落(主院)一ヶ所とこれに付属する二か所の小形院落(南東院と南西院)が確認された(図六十一一二)。図六十一は全体伽藍の一／一五にすぎないため、文献記録の「大殿十三所」や「凡有十院」の一部であったと推定される<sup>49</sup>。

敦煌莫高窟の壁画は建物配置の多様な型式を見せており、その中の第二三窟や第一四八窟の横列三院式の配置に注目したい<sup>50</sup>。第二三窟の場合、三つの院が連結されずに独立しているが、中央がより大きく、東西側が小さく中央に向くように配置されている(図六十二一)。第一四八窟では三つの院が互いに連結されており、中央がより大きく、東西側が小さい。東西側の建物を取り囲んでいる回廊は中央の回廊より小さく、中央とは二層楼閣の門をつくって通れるようにした(図六十二の二)。これらの石窟の開鑿年代は盛唐から晩唐であるため、百濟寺院と直接比較することは難しいであろう。

しかし、北魏末期から隋代にかけて開鑿された麦積山石窟では一つの壁にいくつかの龕室を配置する一列三龕の石窟が確認される。これを参考にすると、図六十一の壁画も六世紀代の多院式寺院の形態をみせているといっても無理はない。図六十三の麦積山石窟における北魏後期の第二八窟と第三〇窟および隋代の第五窟の一列三窟石窟の場合、皇龍寺址重建伽藍の三金堂や飛鳥寺の三金堂と類似する形態であることが注目される。

一方、図六一・一二・一三のように中心殿閣の両側に付属建物を置く型式は、当時の宮殿建築から影響を受けて成立した可能性がある。北魏の洛陽永寧寺における仏殿の形態が太極殿と同じであるという記録は有名である<sup>51</sup>。ところで、太極殿という名称が初めて使われる曹魏洛陽城以来、隋唐代以前まで中国の王宮では太極殿の東西側に東堂と西堂が共に建立されていた<sup>52</sup>。この時の東西堂の機能について、東堂は朝見・請政の場、西堂は皇帝の居住の場として太極殿より若干格が低かった<sup>53</sup>。南朝建康城の場合、太極殿が十二間、東西二堂は七間であったが、このような太極殿・東西二堂型式は漢化政策を推進した北魏の孝文帝が建設した洛陽城でもあらわれている。したがって、百済の三金堂でも皇龍寺址重建伽藍に見られる仏殿とその東西建物の配置は、中国の宮殿建築に起源し、石窟寺院や仏教寺院に影響を与えたものが、再度影響を与えたものと見ることができよう<sup>54</sup>。

文献記録に見られる最も古い時期の多院式寺院は五二〇年に梁武帝が父のために鍾山に建立した大愛敬寺で「中院から大門までの距離は七里にいたり、廊廡が互いにつながっており、軒が互いにつながっている。その傍らには三六院を置いたが、すべて池と高台を置き、周囲を取り囲むようにした」という記録がある<sup>55</sup>。本史料の傍院は別院をいい、中院である中院の傍らに位置していたと考えられる<sup>56</sup>。大愛敬寺の三六院が具体的にいかなる様子であったかは不明であるが、隋唐代に盛行した多院式伽藍配置が南朝にすでに存在していたことを示す重要な史料といえよう<sup>57</sup>。

近年、東魏・北齊の鄴南城の趙彭城廢寺址から木塔址と南西側の院落および寺院の周囲を囲んでいた堀が発掘された(図六一十四)<sup>58</sup>。寺院の外郭を取り囲む堀は正方形に近いが、東西側が四五〇メートル、南北側が四三〇メートルであり、深さが約三メートル、幅が五〜六メートルで、四方の中央に通路が設けられていた。方形の木塔は寺院の中心部から南側寄りに位置しており、舍利莊嚴具を埋めた磚函も発見された。中央の塔址の北側からは仏殿址が発見されなかったが、南東側と南西側の二か所から院落が発見された。南西側の院落は四方を廊方式の建物が取り囲む閉鎖形の院落であるが、一辺が一〇メートルで、内部からは東西三八メートル、南北二〇メートルの規模の仏殿址が確認された。南東側からもこれと対称となる院落の痕跡が確認されており、形態や規模、配置などが同一であったと推定された。一方、中央の塔址の東西側から幅八メートル程度の南北方向の建物址が発見されたが、夯土層が非常に狭くて薄いという。

図六―十四の趙彭城廢寺址の伽藍配置図はこれまで中国で確認された最も古い時期の多院式の寺院であり、六世紀後半の段階に北朝地域でもこのような型式の寺院が出現していたことを示す重要な事例である。こうした型式の出現は文献記録に見られる南朝の多院式の寺院とも関連しており、中国の春秋時代の宗廟遺跡や伝統的な住宅である四合院にその原型を求めることができるだろう<sup>59</sup>。まだ発掘が進行中であるため、即断することは難しいが、図六―十二の一の敦煌莫高窟第三三一窟に描かれた仏教寺院と類似していたと推定される。

興味深いことに趙彭城廢寺址を示した図六―十四を見ると図六―八の一、図六―九の二、図六―一〇の百濟寺院の伽藍配置と類似している部分がある。中央の塔の東西側に回廊とみられる建物が南北に長く配置され、東南院落と西南院落を区分するような形態は、軍守里寺址や王興寺址にみられるように東堂・西堂によって伽藍中枢部と外郭を区分し、その外郭に建物が配置されている型式と類似している。また、寺域の外郭に堀をめぐらせていることも陵山里寺址や王興寺址、弥勒寺址などでも確認できる。それゆえ、六世紀後半の軍守里寺址と王興寺址において東堂・西堂や東西回廊の外郭に新たな性格の建物が建立された背景には、中国南北朝時代から隋唐代に流行した多院式寺院が一定の影響を与え、それ以前の段階の宮闕建築とも一定の関連性を持っていたものと推定できるだろう。

威徳王は五六七年より南朝一辺倒から北齊・北周など北朝国家とも交流を再開する。扶余の陵山里・双北里ヒョンネドウル・王興寺址などで出土する北齊の上平五銖銭はその具体的な証拠である。王興寺址の舍利を奉安した礎石の舍利孔の蓋が、河北省定県華塔址出土の盃頂形方形函と同一であり、宝珠形の把手がついた円筒形の銅盒子は六〇六年の年代を持つ隋代の河北省定県出土の銅盒子に類似していることや益山の王宮里の平面形態が鄴南城と類似しているという推定などはこうした趨勢と関連するだろう<sup>60</sup>。ただ、文献記録をみると、南朝の建康で多院式寺院が先に出現したとみられるため、南朝から直接輸入された可能性も残っている。いずれにせよ、伝播ルートについては確定することはできない。

百濟における南朝の仏教寺院の影響は熊津期以降、特に五四一年に工匠・画師が派遣されて百濟で活動して以後持続したものと考えられる。そのため、六世紀中後半にあらわれた変化の原因も、新たな外交関係が形成された北朝や他の国家(特に高句麗)、そして梁に代わる陳との関係に求める方が説得力がある。この時に新たに見られはじめる文化要素を南朝や北朝のどちらか一つであると断定し難い。そ

これは中国南北朝相互間にも文化交流があつた可能性があり特定国家の影響と言いがたいためである。ただし、新たに登場する文化要素であるとしても、それは、それまで百済にあつた定林寺式伽藍配置を基本として生まれたものであり、百済内部での選択的な受容や変容があつたとみるべきである。

一方、百済の寺院からは高句麗寺院の影響も継続してあらわれるが、先述した二重基壇の下成礎石や一棟二室建物址以外にも講堂址の左右側の別途建物址が注目される。この建物址は、陵山里寺址の場合、図六一五の二のように非対称的な形態を呈しているが、軍守里寺址や王興寺址の段階(図六一八の一および図六一九の二参照)になると対称をなすようになる。ところが、このような建物址が高句麗の清岩里廃寺からも確認されている。これまで清岩里廃寺の建物配置図は『古蹟調査報告書』に掲載された図六一五の一が主に利用された<sup>61</sup>。しかし、二次調査を主導した米田美代治が作成した図と両者をあわせて補完した小泉顕夫の再作成図などの三種類がある<sup>62</sup>。図六一五と他の図との大きな違いは中央の金堂址後ろの建物址群である。こうした違いは図六一五の一が昭和十三年(一九三八)の調査内容に対する報告を目的としているため、その北側一帯を調査した昭和十四年(一九三九)の内容が漏れていたと理解できる。

一九三九年の米田美代治の調査は一次調査で見つかった敷壇殿址の性格を明らかにするためのものであつた。その一帯から三か所の建物の基壇址を検出し、北側からも一基の建物址の痕跡を見つけたが、新設の墳墓によつて調査ができなかつたという<sup>63</sup>。ところで、この建物址は敷壇殿址と報告された地域から高麗時代の瓦片と鉄器類が出土し、埴を敷いた形式や礎石の形態が高麗時代の特徴を見せているとして後代のものとみなされてきた。しかし、八角建物址や中央の金堂址などからも高麗時代の瓦片が多量に発見され、定陵寺址からも敷壇(九号と一〇号)建物址が確認されており、これのみでこの建物址が後代のものであるとみることはできない。この建物址群は百済や新羅の寺院の伽藍配置をふまえて考えると、講堂址とその東西側の別途建物址および北側の僧房址であつたとみるべきである。つまり、高句麗寺院では非常に古い段階から講堂址の左右側に別途建物を造営したのである。

平壤の定陵寺址からは講堂址と推定される八角建物址の北側でのみ別途建物址(九号)が確認された(図六一十六)。定陵寺址の場合、一区域の八角建物址(一号)と六号建物址(金堂)との間およびその北側に東西回廊が通っていることや、八角建物址と中央の金堂址(六号)が

中門を通る南北の中軸線から東側に寄って配置された点、東西金堂址(一・二号)の規模が異なっている点など、いまだ解決されていない問題がいくつか残っている。したがって、八号建物址の西側から別途建物址が発見されることもあり得るし、一〇号建物のようにまったく異なる形態に変形された可能性も想定できる。いずれにせよ陵山里寺址などの百済の寺院において別途建物址があらわれることは、清岩里廢寺など高句麗寺院の影響があったと考えられ、その非対称的な要素または定陵寺址との関連性を検討する必要があると思われる。

ここで定陵寺址についてさらに注目したい点は、南北の回廊によって寺域を五つの区域に区分したことである。一区域の八角建物址(二号)と六号建物址(金堂)との間や、その北側にある東西回廊は創建当初のものではなく、後代に敷設されたものとみべきであるが、東西二二三メートル、南北一三二・八メートルに達する広い面積を五個の区域に区分した南北の回廊は創建期からのものとしなない理由はない<sup>64</sup>。このように回廊で寺域を区分する方式は先述した東魏・北斉時期の趙彭城廢寺址(図六一四)中央の塔址の東西側から確認された南北方向の建物址や、軍守里寺址と王興寺址の東・西堂址および東西回廊址と酷似している(図六一八の一および図六一九の二参照)。百済の寺院における二重基壇と下成礎石をはじめ、一棟二室建物址、講堂址左右の別途建物址のような多様な要素が高句麗に由来するものであることを想起すると、回廊を利用して空間を区画する方式も高句麗の影響である可能性を無視できない。

以上の検討によって、図六一八の一および図六一九の二の軍守里寺址と王興寺址など、百済の寺院で確認された回廊の外郭の東西建物址や、それを配置する方式および空間の区画方式は中国南北朝時代の多院式寺院の影響とともに高句麗の影響も受けながら成立したと考えられる。もし、軍守里寺址の回廊外郭の東建物址を金堂址のようなものと推定できるならば、百済では高句麗寺院における品字形の三金堂を認知しながらも北朝的な一列式配置を採択したものとみることができよう。なぜならば、飛鳥寺の三金堂が高句麗系統の三金堂形式に沿っていることをみると、百済ではすでに高句麗のそれを認知していた可能性が高いためである。六世紀中後半段階に百済では飛鳥寺の三金堂と同じ形式の伽藍配置が直接具現されていなかったとしても、百済の造寺工たちはすでに高句麗や中国南北朝寺院の伽藍配置に関する情報を幅広く認知していた可能性を想定できるのである。前述したように六世紀代の百済では高句麗の文化が幅広く影響を及ぼしていたためである。百済では方形木塔や東堂・西堂といった要素を維持・発展させつづけ、新たに中国の南北朝や高句麗の影響を共



に受容したために軍守里寺址や王興寺址のような百済的な創造と変形が可能であったといえる。こうした現象は威徳王陵と推定される東下塚で高句麗の古墳壁画の影響を受けた壁画が製作されたのに対して、古墳の構造は確実に百済の伝統的な古墳型式にしたがっていることと脈絡的に類似するといえよう。

さらに、百済において六世紀中後半にこうした三金堂が出現した思想的な背景として弥勒信仰に注目する必要がある。百済では聖王代以後の弥勒下生信仰に基づく転輪聖王の理念が積極的に広められ、威徳王代の五八四年には日本に弥勒仏を送ったことや新羅の僧侶である真慈が弥勒に会うために熊川(公州)水源寺に入ったという記録があるなど、弥勒信仰が幅広く存在していた<sup>65</sup>。このことから百済ではそれ以前にも弥勒信仰に対する理解や信仰が確立されていたと考えられる。六世紀中半以降に弥勒信仰が本格的に重視されたのは、玄光による慧思の末法意識の弥勒信仰の受容と関連していたとする<sup>66</sup>。

南朝の陳に留学した玄光は南嶽衡山の慧思(五一四〜五七七)門下で法華三昧行法と弥勒信仰を学び五七〇年代に帰国した人物である。慧思は当時北朝で少しずつ現れていた末法意識を受容しながらこれを克復する方法として弥勒信仰を強調した<sup>67</sup>。彼の弥勒信仰は玄光を通して百済に伝わった可能性が高く、真慈が弥勒に会うために公州に來たという記録もこれと関連があると考えられる。益山弥勒寺址の三院並列式伽藍配置は未来に弥勒が出現する際の三会説法のために準備された空間として理解されている。ところで、軍守里寺址や王興寺址において初歩的な多院式寺院の形態が出現していることは、それ以前から弥勒信仰といった仏教教理に関する理解が深化し、伽藍配置にも影響を与えたものと推定できるのではないだろうか<sup>68</sup>。

### (三) 百済寺院と飛鳥寺の三金堂

六世紀中後半の百済寺院では定林寺址や陵山里寺址では見られなかった新要素が確認されている。このような変化はその後に新羅や日本の寺院にも影響を与えたものと考えられるが、飛鳥寺より年代的に若干先に建立された慶州皇龍寺址の伽藍変遷について検討することにしよう。皇龍寺址の発掘調査報告書では創建伽藍(図六十七の一)が五七四年の丈六尊像鑄造を契機にして、五八四年にはこれを安置

するための金堂が造成されるとともに重建伽藍(図六一七の二)に変わるようになるが、このような重建伽藍は六四五年に九層木塔が完成するとともに一段落した。そして、重建伽藍に見られる三金堂型式は高句麗の影響を受けて変形した新羅式の一塔三金堂式伽藍配置とした<sup>69)</sup>。

ところで、皇龍寺址の創建伽藍と重建伽藍は、軍守里寺址(図六一九の二)、王興寺址(図六一八の一)、定陵寺址(図六一六)などと比較すると興味深い点が見られる。まず、創建伽藍の場合、百済と高句麗寺院の要素がすべて確認できることがあげられる。図六一七の一の場合、回廊が伽藍の全体を区画する点は定陵寺址と似ているが、北側と東西側に僧房状の建物を配置していた点は百済寺院と類似していると言えるためである。このような現象は皇龍寺址の創建瓦から高句麗系と百済系の瓦当が共に発見されていることも通じる点である(図六一八の一・二、本稿の第五章第二節参照)。図六一七の二の重建伽藍の場合、伽藍を三区画した回廊を撤去して中金堂が他の金堂よりも大きくなって東西に平行し配置される<sup>70)</sup>。こうした三金堂の配置は軍守里寺址や王興寺址、弥勒寺址などの百済寺院の配置と相通ずる点があることから、三金堂であるといっても高句麗と関連づける必要はないといえよう。

重建伽藍の中金堂の基壇型式は二重基壇であるが、下層は長大石、上層は架構式基壇で、下層基壇と上層基壇の間に下成礎石が存在する。このような基壇形式は百済寺院では確認されていない。しかし、図六一四のように下成礎石は高句麗に由来するものであるが、定陵寺址をはじめ百済寺院において早くから採用されており、上層基壇に架構式を使用した事例が陵山里寺址の金堂址から確認されている。こうした事例を組み合わせると、皇龍寺址の中金堂址の基壇を作ることができる<sup>71)</sup>。飛鳥寺の東西金堂址の二重基壇の場合も下層基壇の長大石と下成礎石は百済と同じであるが、上層は玉石積となっている。百済からはいまだこうした上層基壇が発見されていないが、一般的に百済の工人の影響とみられている。したがって、重建伽藍の中金堂の二重基壇も高句麗の直接的な影響ではなく、百済を通じた影響であると考えられる。

ただ、皇龍寺の重建伽藍の東金堂の場合、上層基壇が一枚の長大石からなっているが、こうした事例は三国の中で新羅でのみ確認できる。そのため、東金堂は中金堂より若干新しい時期に建立されたものと考えられ、新羅で独自に変形した基壇形式と見られる。重建伽藍

に使用された図六一八の三・四の南朝系瓦当は、無加工の丸瓦を瓦当と接合させる百済系統の技術を使用しているが、百済ではほとんど使用されなかった文様である。この瓦当の場合、これまでは高句麗系とされてきたが、最近では南朝系とする見解が優勢であり<sup>72</sup>、特に五五二年に新羅が漢江流域を占有してから高句麗や百済の仲介を通さずに直接陳と接触するようになったためであろうという見解が提示された(本稿の第六章第一節参照)<sup>73</sup>。このように皇龍寺では丈六尊像を安置するために重建伽藍が建立されてからは高句麗や百済、南朝的な文化要素とともに新羅独自の變形が起こったといえる。

このように五八四年から造成・運営が開始された皇龍寺の重建伽藍には、軍守里寺址や王興寺址、弥勒寺址で見られるように中金堂を中心にして東西に平行して外郭の建物を配置する伽藍配置があらわれている。これまでこれを高句麗の影響と理解してきたが、百済の影響やその後の新羅的な變形とみることがより適切であると考える<sup>74</sup>。こうしたことから六世紀中後半の軍守里寺址と五七七年の王興寺址、五八四年以後の皇龍寺址の重建伽藍、五八八年以後の飛鳥寺に見られる三金堂は百済寺院の築造術の対外伝播という観点からみると、一定の関連性を持っていると思われる。なぜならば、図六一九の二の軍守里寺址と図六一八の一の王興寺址から東堂・西堂と東西回廊が撤去され、回廊の内部に中心殿閣を配置した形態が図六一七の二の皇龍寺址の重建伽藍の三金堂である。そして、これを高句麗的な品字形に配置したものが図六一九の飛鳥寺三金堂といえるためである。

先述したように扶余の軍守里寺址と王興寺址の伽藍配置に見られる新要素は、それまでの定林寺式伽藍配置を基にし、高句麗的な伽藍配置と東魏・北齊の趙彭城廢寺址などの中国南北朝時代の多院式寺院の影響を受けて出現したものと見える。また、これがさらに皇龍寺址の重建伽藍と飛鳥寺の三金堂にも影響を与え、新たに變形された形態の伽藍配置があらわれたものと見ることができるところで、皇龍寺址の場合、百済のみならず高句麗の影響が部分的ではあるが確認されるが、飛鳥寺の場合、百済以外に高句麗の文化要素を全く見出すことができない。このような点をみても飛鳥寺三金堂は高句麗の直接的な影響を受けて成立したというよりは、百済を経由して伝えられたと見ることが合理的であると考える。

特に飛鳥寺三金堂の祖形は軍守里寺址と王興寺址が直接的なモデルであったと考える。軍守里寺址の場合、東外郭建物址以外にも金堂

址の下成礎石と木塔址の斜道が飛鳥寺のものと類似する。年代的に約一〇年ほどしか差がない王興寺址の場合、心礎石の安置方式、舍利供養具の出土様相などが飛鳥寺のものと最も類似している<sup>75</sup>。また、出土瓦当の場合も王興寺址では飛鳥寺創建瓦に見られる花組・星組二系統が全て確認されている(本書の第六章第二節参照)。飛鳥寺の創建瓦で星組系列は大通寺式瓦当が採択されているが、花組系列は官北里・王宮里など百済の王宮で使用したものを採択している。これを見ると飛鳥寺の造営には百済の特定寺院の築造技術のみが伝達されたのではなく、非常に多様な方面の技術が国家的な次元で組織的に伝えられたものと見る事ができる。

皇龍寺の場合、高句麗僧侶の恵亮の建議を受けて開創したという推定があるが<sup>76</sup>、高句麗的な要素よりは百済的な文化要素が多分にみられる。その背景については別途の検討が必要であるが新羅最初の寺院である興輪寺址を建立する際に百済の技術的な影響が大きかったため、こうした雰囲気を持続されたのではないかと推定できる。第五章で検討したように興輪寺址から出土した瓦当は、公州の大通寺式瓦当と文様や製作技法が同様であるため瓦当だけでなく寺院造営の技術も百済の影響があった可能性があると理解した。そのような影響があったため、六四三年に九層木塔を建てる際に再び百済から阿非知のような技術者を招請したのではなからうか。

新羅では六三四年から芬皇寺を建立する際、図六一十のような新たな型式の品字形の三金堂をつくるが、これは新羅内部において百済だけでなく高句麗の影響も続いていたためである<sup>77</sup>。また、百済においてもこうした品字形の三金堂型式について認識していたため、飛鳥寺の三金堂のような伽藍配置を創出できたのであろう。もし、飛鳥寺のそれが高句麗の影響であったというならば、皇龍寺址の創建伽藍や重建伽藍、芬皇寺のように部分的にでも高句麗的な要素が残っていたはずである。しかし、再三強調しているように飛鳥寺では三金堂という要素以外に高句麗と関連するものがまったく見当たらなかった。高句麗と百済の影響を共に受けた皇龍寺など新羅の事例を通してみても、むしろ飛鳥寺こそ百済の造寺工によって全ての寺院の造営技術が伝受されたことがよく理解できるのである。

飛鳥寺三金堂の高句麗起源説は六世紀後半の高句麗と倭の対外関係から見ても問題がある。五七〇年(欽明三十一)に成立した高句麗の対倭外交は敏達二年(五七三)と三年(五七四)の使臣派遣以後、五九五年に高句麗の僧侶慧慈が倭に来るまで二十一年間断絶していた。これについて『続日本紀』和銅四年(七一)十二月条に狛臣秋麻呂の二世祖比等古が用明天皇代(在位、五八五〜五八七年)に高句麗に派遣

されたという記録があり、高句麗から仏教文化を受容するために派遣されたのではないだろうかと推定する見解もある<sup>78</sup>。しかし、この記録は『日本書紀』には見られず、彼に関する高句麗の反応も全く確認できないために従い難い<sup>79</sup>。つまり、『日本書紀』や『元興寺縁起』に記録されたように、五八七年に飛鳥寺の造営が発願されて寺域が定まり、五八八年に百済の工人集団が派遣され、五九二年に金堂と回廊の工事が開始され、五九三年に仏舍利を心礎に安置して刹柱をたてる時まで高句麗と倭は公式的な外交がしばらく断絶していたといえる。

ところで、飛鳥寺の発掘調査の結果、南門と中門、塔、三金堂は非常に整然と一貫して造営されたものと考えられている<sup>80</sup>。したがって、飛鳥寺の寺院造営計画は高句麗の僧侶が渡ってきた五九五年以前にすでに百済の技術者集団によって立案され実行されていたと見なければならぬだろう。五九三年正月に仏舍利を塔の礎石に安置する儀式を執り行った際、蘇我馬子ら百余人が百済の服を着たという『扶桑略記』の記録は<sup>81</sup>、飛鳥寺と百済との密接な関連性を象徴的に物語っているといえる。高句麗の僧侶慧慈の渡日や六〇五年の高句麗の黄金献上を補助的な根拠としている飛鳥寺三金堂の高句麗起源説は当時の対外関係や史料からからみて無理がある。したがって、『隋書』倭国伝の「敬仏法、於百済求得仏経、始有文字」という記録のように、日本は百済を通じて漢字文明と共に仏法を受けたということが当時の東アジア世界における国際的な常識であっただけでなく歴史的な事実に近いといえるだろう。

従来の飛鳥寺三金堂の源流に関する議論において看過されたものがある。それは当時百済から派遣された技術者が個別的に渡って来たのではなく、国家によって組織された一つのプロジェクトチームのような形態で派遣されたという点である<sup>82</sup>。寺院の造営技術は土木・建築だけでなく、彫刻・金工・木工・石工など各分野の多様な手工業技術が集大成されたものであるため、技術の相互依存度や提携度が高い<sup>83</sup>。もし、百済から派遣されたプロジェクトチームによって一棟の金堂を建てようとした当初の計画が外部の要因によって三棟の金堂を建てる計画に変更されたならば、設計変更にもなう瓦や木材、石材、金属など他の工事部分の支援も必要になるため、その余波は相当なものであったと考えられる。

ところで史料六一一の『元興寺縁起』の本文には百済から「金堂の本様」が伝来したと明確に記録されている。この「本様」とは「製

作の基礎になる手本」という意味で、設計図的な制作の下図を指す<sup>4</sup>。これを見ると、飛鳥寺の金堂に当初から百済の技術が用いられたことは明らかである。東・西両金堂の場合も同様である。二つの建物址で共通して確認される二重基壇と下成礎石の場合、これまで確認された最も古い事例は高句麗の清岩里寺址である。しかし、この技術は高句麗から直接日本に伝えられたものではなく、百済を経由して伝えられたものと理解されている<sup>5</sup>。このような点からみても飛鳥寺の三金堂は全面的に百済の技術者によって造営され、それは外部的な要因によって突然設計が変更されたのではなく、当初から百済によって計画・実行されたとみるのが合理的である。

五八八年、百済から派遣された技術者集団は個別的に日本へ招聘されたり散発的に渡来したのではなく、国家によって派遣された公的な組織であり、単一チームのように各技術や工部門が極めて有機的に連結していた。したがって、飛鳥寺の建立において伽藍配置の側面のみ高句麗の影響を受けたとみなすことは根本的に無理があるといえよう。飛鳥寺に見られるいくつかの系統の造営技術や寺院のプランはすべて百済から派遣されたプロジェクトチームによって総合的に計画され、実現されたとみるべきである。

ところで、飛鳥寺からは百済の寺院にみられる文化要素と完全に一致するものがほとんど発見されていない。東金堂の二重基壇の場合、玉石積を使用するという違いがあり、瓦当においても九葉や一〇葉、一一葉など、百済ではほとんどみられない蓮弁文様が使用された（本稿の第六章第二節参照）。しかし、これは文化受容者側の部分的な変形とみるべきであろう。飛鳥寺三金堂はそれと酷似する配置を呈するものが高句麗の清岩里廢寺であるが、木塔の平面形態が異なり、また時間的な差が大きい。前述したように高句麗の文化は様々な面で百済文化の中に吸収・同化され、百済では高句麗だけでなく中国南北朝時代の多院式寺院などの新たな文化要素まで吸収しながら軍守里寺址や王興寺址、弥勒寺址のような百済的な伽藍配置を作り出した。したがって、飛鳥寺の三金堂もまた百済に淵源を持つものであるが、それが日本で初めて寺院が造営されると同時に日本内部の政治や仏教界、技術的な事情などによって部分的に変形したと見なければならぬだろう。

そのような変形が発生した背景については、まず五八八年に百済の技術者集団が派遣される前、五七七年にすでに造仏工と造寺工が派遣されていた点が留意される。五七七年に百済から日本に派遣された造仏工は、その後に飛鳥寺の本尊であるいわゆる飛鳥大仏の製作に参加したと推定されているが<sup>86</sup>、造寺工の場合も寺院建立と関連した木造建築に必要な技術や伽藍配置などに関する情報を教育したり知らせた可能性がある。したがって、飛鳥寺の伽藍配置が百済寺院と同じ形態で具現されなかったことも、五七七年に派遣された造寺工の事前活動によって、百済寺院をはじめとする当時の東アジアにおける主要寺院の伽藍配置に関する情報を日本側である程度知っていたため可能であったのではないかと考えることができるのである。

そのような背景の下、当時日本の最高の実力者であった蘇我馬子が百済から技術者を招聘して寺院を造営する際に、中央に木塔と三金堂を集中させることで権威的な建築物としての威容をより大きく誇示しようとした可能性が指摘できる<sup>87</sup>。また、以後の初期寺院とは異なり金堂が三つも必要としたこともより多くの多様な形式の仏像を奉安できることを誇示しようとした側面があったのであろう。ところで、飛鳥寺では定林寺式伽藍配置に特徴的な東堂・西堂のような建物がみられないことや、金堂址と講堂址の間に北回廊が設けられるという違いも生じている。前者については、飛鳥寺建立の初期段階はまだ僧侶の数が多くなかったため、多くの僧房が必要でなかったためとも考えられる。後者については、講堂がより遅く建てられたためであるか、講経のようなものがまだそれほど重要ではなかったためにあらわれた変形であると考えられる。このように飛鳥寺の造営はすべてが百済の各種技術者たちによって完成されるが、それを受容する主体である蘇我氏の立場や日本仏教界の事情、寺院造営に関する情報や技術水準が反映されており、伽藍配置にも部分的な変形があらわれたものといえるだろう。

それでは、五八八年百済から日本の飛鳥寺の建立に技術者集団を派遣した理由は何であろうか。崇仏と廃仏論争で廃仏派である物部氏を討伐した後、蘇我氏が台頭したという日本内部の情勢変化も重要な理由であるが<sup>88</sup>、百済内部でもそれに相応するような必要や事情があっただろう。そこで注目されるのが五七〇年代の高句麗・新羅・百済の対倭外交の変化と五八一年の文帝による隋の開国といった東

アジアの国際情勢である。

まず韓半島の三国と倭の関係変化をみると、五五二年新羅の漢江下流域の確保と五六〇年代に始まった新羅の南北両朝に対する自主外交の開始、高句麗と北斉の関係悪化は高句麗の対倭外交にも影響を及ぼし高句麗は五七〇年に倭に使臣を派遣する<sup>89</sup>。倭では五七〇年七月、高句麗の使臣を山背の相楽館に留まらせた後、二年程度の時間が過ぎて高句麗の国書を伝達されるが、これは高句麗との外交に対する立場を整理するのに時間を要したためであろう。ところで倭では高句麗の国交開始要求に対する結論を下す前の五七一年三月、新羅に使節を派遣して新羅との外交的な交渉を再開し、五七五年以後からはしばらく断絶した百済とも国交を再開する<sup>90</sup>。五七〇年に高句麗、五七一年に新羅との交渉が再開されて以後、倭は高句麗や新羅より百済へ頻繁に使臣を派遣している。そして、『日本書紀』によると倭は五七五年から五八三年まで百済から仏教関係文物のみ輸入したように記録されている<sup>91</sup>。

対中関係において百済威徳王は隋文帝が即位した五八一年と翌年である五八二年に使臣を派遣する。その後の五八九年には隋が陳を滅亡させて、隋の戦船が耽羅国(済州島)に漂着すると同時に戦船を隋に送還するとともに遣使して隋の平陳を祝賀する上表文を奉じる。その過程で百済は隋との関係悪化を回避できた。百済から日本に大規模な技術者集団を派遣した五八八年は陳が滅亡する以前で、百済からは五八四年と五八六年に陳に遣使を続けた。百済が隋の登場にもかかわらず、五八八年以前に陳に遣使し続けたことは、それまでの南北朝の対立を持続させることで自国の優位を保とうとする外交戦略であったといえよう<sup>92</sup>。

六世紀後半、新羅の浮上と隋の登場により百済と高句麗は倭との外交関係を再び確立しようとした。高句麗が隋を意識した軍事協力を考慮したとすれば、百済は新羅を相手にする軍事協力を考えただろう。その過程で百済にとって仏教は非常に有用な手段であった。第五章で述べたように新羅最初の寺院である興輪寺の建立に際して自国の技術者を派遣した経験を持っていた百済としては日本に対しても仏教と関連した文物を積極的に活用したといえる<sup>93</sup>。

威徳王は五七七年に経論をはじめとする僧侶と造仏工、造寺工を派遣し、五八四年鹿深臣による弥勒石像の伝授、五八八年に善信尼らの百済への留学を受容するなど仏教を媒介にして日本との関係を持続させている。特に、日本の崇仏と廃仏論争が終息した後には、飛鳥



寺の建立に必要な技術を支援するために自国の技術者を臨時的なプロジェクトチームの形態で組織して高位官僚と僧侶らと共に派遣することによって倭との外交関係をより一層強固なものにしようとしたのであろう。

したがって、百済からは六世紀後半の東アジア国際情勢の中で日本に関する外交的な主導権をより積極的に行使するという目的から飛鳥寺の建立に自国の技術者集団を派遣したといえるだろう。百済では定林寺址や陵山里寺址、軍守里寺址、王興寺址のような大規模寺院を造営しながら内部的に寺院造営に必要な技術力とシステムを備え、中国の南北朝国家や高句麗の文化を幅広く受容していたため、これをより効率的に遂行できたのであろう。

最後に、三金堂という用語について言及してみよう。これまでは図六十九の飛鳥寺三金堂の東・西両金堂について通説に沿って金堂と叙述した。しかし、それを「金堂」または「仏殿」と呼べるかについてはもう少し検討が必要であると考える。平安前期(九一七年説有力)に成立した『聖徳太子伝暦』には鹿深臣将来の弥勒石像が「今在左京元興寺東金堂」という記録がある。平城京の元興寺には東金堂と推定されるような遺構が残っていないため、これは現在明日香村にある飛鳥寺の東金堂を指すものと見ることができよう<sup>94</sup>。しかし、『聖徳太子伝暦』の「東金堂」という名称を六世紀後半まで遡及させることができるかについてはこれとは別途の検討を要する<sup>94</sup>と考える。

一九五八年に刊行された発掘報告書には東・西両金堂の遺構に対する考察の末尾に「いずれにしても以上の諸点を総合してみると、東・西両金堂の建築は中門、塔、金堂に比べると、構造的にも意匠的にも格の低いものであったことが考えられ、或はそれだけ古風な建物であったのかも知れない<sup>95</sup>。」という興味深い記録を残している。また、東西金堂では中金堂や木塔、講堂、中門などで発見される椽木瓦も発見されなかった<sup>96</sup>。したがって、中門や塔、中金堂に比べ構造的や意匠的に格が低いこの東西の両建物を果たして金堂と同格と見ることができるのかという疑問が残る。百済の軍守里寺址と王興寺址に見られる回廊外郭の東西外郭建物址は中央の金堂よりは格が低く、その後に建立された弥勒寺址の東院・西院の場合も中院より格が低い建物群である。新羅皇龍寺址の場合も東西金堂は中金堂より規模や意匠の面において格が低い。したがって、飛鳥寺のいわゆる東・西両金堂を金堂や仏殿と呼ぶよりは「東・西礼(仏)堂」と呼ぶ

ことを提案したい。東・西金堂(あるいは仏殿)は寺院の中心的な殿閣である中金堂とは性格や格が異なるためこれを区分する必要がある。塔および金堂を礼拝し、読経などの宗教行儀を行う場、つまり礼拝空間という意味で<sup>7)</sup>、その性格が明確になるまではひとまず「礼(仏)堂」と呼ぶことを提案するのである。『元興寺縁起』の「本文」には「先金堂礼仏堂等略作」として金堂と礼仏堂を別途に明記しているが、この記録の「礼仏堂」が飛鳥寺三金堂の東・西金堂を指すものとする余地があるという点も参考にする必要があるだろう<sup>8)</sup>。

#### (四) 四天王寺式伽藍配置の成立

飛鳥寺建立以後、明日香村の豊浦寺、奥山廃寺、橘寺をはじめとして聖徳太子と関連がある法隆寺の若草伽藍、四天王寺、中宮寺では全て四天王寺式伽藍配置が採用されている<sup>9)</sup>。これについて飛鳥寺式伽藍配置とは異なる系統の文化がもう一度百済から入ってきたという意見も提起できるかも知れない。しかし、これらの寺院では飛鳥寺の創建瓦の一つである星組流派の瓦当が主に使用されている。これをみると、このような四天王寺式伽藍配置は飛鳥寺三金堂の東西金堂を省略した形態ではあるが、一方では百済の主流的な伽藍配置の型式である定林寺式伽藍配置に回帰したとみるのがより適切であろう。前述したように飛鳥寺式伽藍配置というものも基本的には百済寺院の伽藍配置の流れの中で理解でき、飛鳥寺の建立以後にはむしろ百済寺院の原型に近い型式が選択されたものと考えられるためである。日本の四天王寺式で発掘された伽藍配置を基本型とする、いわゆる四天王寺式伽藍配置は百済寺院の一塔一金堂式の伽藍配置にしたがいながらも東西回廊北端の東堂と西堂をつくらなかったことや講堂址の左右側に別途建物址を設けず、すぐ北回廊に連結させるなど、百済寺院と異なる点も確認される<sup>10)</sup>。しかし、日本の四天王寺式伽藍配置に関する全貌がまだ明らかにされていないため、このような違いが生じた背景や内容については、今後の綿密な再検討が必要であろう。

韓半島の廃寺址に対する最初の発掘調査である軍守里寺址が発掘されたとき、百済寺院は中門一塔一金堂一講堂が南北一直線に配置されたものが定型をなすと認識され、その後いわゆる「軍守里式伽藍配置」が新羅や日本の寺院に影響を与えたと理解されてきた<sup>10)</sup>。当時は金堂や木塔の配置にのみ注目し、そのような伽藍配置が日本の初期古代寺院、特に大阪四天王寺の伽藍配置と同一であるという点のみ

が強調された<sup>102</sup>。しかし、最近の定林寺址における再発掘を契機として、講堂と回廊の連結方式が再検討され、両者の間には共通点だけでなく、相違点も存在する可能性が提起された(本稿の第二章第一節および第四章第一節参照)。ただし、最近提起された相違点というのが、これまで日本の学界ではほとんど関心を惹かなかった内容であるため、まず日本の四天王寺式伽藍配置の内容について具体的に比較検討する必要がある<sup>103</sup>。

飛鳥寺が建立されて以後、伽藍配置の主流となる四天王寺式伽藍配置の講堂と回廊の連結方式はいかなるものであったのか。豊浦寺や若草伽藍の場合、現在までの発掘調査の内容を見ると、これに関するいかなる情報も得ることはできない<sup>104</sup>。したがって、たとえ昔発掘されかつ難解な問題とはいえ、大阪四天王寺報告書を再検討せざるを得ない。その結果、いくつかの新たな事実を確認することができた。まず、ここでも講堂と回廊の連結が北回廊ですぐに連結したのではなく、創建期には別途建物のようなものが設けられていた可能性が確認された<sup>105</sup>。図六一二十一は東回廊北側の講堂と連結する地区の遺構実測図である<sup>106</sup>。2つの図面を詳細にみると、図六一一十一の一の上段中央には北側に上る周溝が明確に確認される。これは四天王寺講堂東側が北回廊に直接連結するのではなく、百済寺院の別途建物のようなもので構成されていた可能性を示唆する。それが別途の建物なのか付属建物(いわゆる東堂)なのかはさらなる検討が必要であるが、これまでの通説とは異なる連結方式であった可能性が非常に高い。

四天王寺の講堂はいわゆる一棟二室建物と似ている点が見られる。平安時代の資料ではあるが、『四天王寺御手印縁起』(二〇〇七年)には、この講堂に対して非常に興味深い記録が残っている。講堂は八間であるが、西側の四間は夏堂、東の四間は冬堂と呼ばれ、それぞれ異なる仏像を安置していたとされる<sup>107</sup>。この夏堂と冬堂の構造がどのようなものであったのかはわからないが、第四章第一節で説明した百済寺院のいわゆる一棟二室建物、その中でも特に陵山里寺址講堂の場合、西室にはオンドルが設置される一方、東室には設置されず、この点でも類似する。したがって、両者に対応させてみると、陵山里寺址のオンドルが設置された西室は、四天王寺の冬堂のように、主に冬に使用された場所であり、東室は夏堂のように、主に夏に使用された場所ではないかと推定できる。つまり、百済寺院の一棟二室建物も建物の機能面からみると、季節によって空間を別々に利用するため考案された可能性を提起できるのである<sup>108</sup>。

一方、四天王寺以外にも、飛鳥寺や山田寺、法隆寺など日本の初期寺院では、講堂が偶数間となる場合がしばしば発見される。これも百済寺院の講堂で主に発見される一棟二室建物の構造と関連があるのではないかと推測される。今後、この部分についてもより綿密な検討が必要であろう。いずれにせよ、四天王寺の夏堂と冬堂は百済寺院から始まった可能性が高いと考えることができるだろう。

四天王寺址では図六二二の二のように南回廊と西回廊の連結が直接し字型に取り付くものでなかった可能性がある<sup>100</sup>。図中の太線は、創建期遺構の痕跡であるため、南回廊と西回廊の連結は別途に区分されていることを示している。これは第一部で検討した定林寺址や陵山里寺址のように、南回廊と東西回廊が別途に作られていたことを示唆する。このような点から、日本の四天王寺式伽藍配置というものもこれまでの通説とは異なる配置をみせており、基本的には定林寺式伽藍配置にしたがっていた可能性があると考えられる。日本の他の初期寺院の発掘でもこの部分に対する注意が必要であり、これをもとに百済寺院との比較・検討がなされなければならないと考える。

一方、大阪の四天王寺の都城内における位置との関係においても百済との関連性が注目される。四天王寺は難波宮の南側約二・五キロの西側に配置されており、その東に難波大道が通る。七世紀前半の創建段階には塔と金堂が完成していたが、前期難波宮が建立された七世紀後半頃に中門から回廊・講堂が完成して伽藍中心部が整備されたものと理解されている<sup>101</sup>。このような配置関係によって四天王寺は前期難波宮の「官寺」として機能したものと推定されることもある<sup>102</sup>。ところで、このように王宮と寺院を都城の中心に意図的に配置する様相は百済泗泚期の王宮と定林寺址の関係や離宮と推定される益山王宮里遺跡と帝釈寺址の関係ですでに確認されている(本稿の第二章第二節および第四章第一節参照)。したがって、難波京の最も中心的な位置に官寺でありランドマークとして四天王寺を建立したことは百済の影響をうけたものである可能性が高く、これは斑鳩宮と若草伽藍、百済宮と百済大寺の関係においても考慮する必要があるだろう。

初期の四天王寺式伽藍配置と関連して富田林市に所在する新堂廃寺とお亀石古墳にも注目する必要がある。二つの遺跡の配置をみると、寺院の北西側三〇〇メートル程度離れて古墳が位置しており、その中間に寺院の瓦を供給したオガンジ池瓦窯が位置する(図六二二)。お亀石古墳は横口式石槨であり、石棺の周囲から瓦積護壁のような施設に使用された平瓦が発見されているが、その製作技法は新堂廃寺

で出土したものと同じである。したがって、はやくからこの古墳の被葬者が新堂廃寺を建立した壇越であった可能性が提起されている<sup>112</sup>。その後、古墳の追加調査において須恵器片が出土したことから、古墳の築造年代が七世紀前半に比定され、その時期はおおよそ新堂廃寺の創建期中門の瓦が製作された頃に該当するという見解が提起された<sup>113</sup>。このことから、お亀石古墳の被葬者は新堂廃寺を建立した主体と非常に密接な関連をもっていたといえる。したがって、二つの遺跡は古墳と寺院の対応をみせる好資料といえるが、これは扶余陵山里寺址と陵山里古墳群の関係と非常によく似ている。

新堂廃寺の場合、基本的には中門・塔・金堂・講堂が一直線に配置された四天王寺式伽藍配置をとる。しかし、図六一二十三のように、東西回廊の中間部分で東方建物と西方建物と命名される特異な建物が確認でき、これを「新堂廃寺式伽藍配置」という新たな型式の伽藍配置であると再認識させた<sup>114</sup>。しかし、東方・西方建物というものは、まさに定林寺式伽藍配置の東堂と西堂にあたる。それゆえ、この寺院こそが百濟寺院の伽藍配置に最も忠実にしたがっているといえる。新堂廃寺の創建年代についてはこれまで七世紀前半から中半と推定されてきたが、最近ここから出土した椽木瓦(R群)が飛鳥寺の1型式椽木瓦と同範品であることに注目して七世紀初頭まで遡らせる見解が提示された<sup>115</sup>。どちらの見解に従うかは即断できないが飛鳥寺の造営以後、非常に早い段階から百濟で流行した定林寺式伽藍配置が日本の初期寺院にも影響を与えていたことは明らかであるといえる。

一方、定林寺址の伽藍配置において明らかに変わった東堂・西堂の機能や性格に関する問題は、これまで知られていた四天王寺式伽藍配置のプロトタイプを再検討する必要性とともに日本の初期古代寺院にも新たな課題を投げかけている。日本の学界では早くから堂塔の位置関係だけでなく、仏地と僧地の組合せから伽藍配置を分類し、その展開過程を説明してきた<sup>116</sup>。その際に重要であると提示された史料が『魏書』釈老志の記録である<sup>117</sup>。そこでは五重塔と仏殿などの仏地と、講堂や禪堂などの僧地を別に記載しているため、これを根拠に中国でも古くから両者を区分しようとしていたと理解した。それ以降は、仏地と僧地の概念をもとに、塔や金堂、講堂などを回廊がどのように囲み閉鎖するのかによって、伽藍配置型式を分類してきた。

ところで、本稿のように定林寺式伽藍配置に見られる東堂と西堂を本稿のように僧房のようなものと見ることができ<sup>118</sup>、特に軍守里

寺址と王興寺址の東西外郭建物址とそれを囲む空間を別院や僧院とすることができるとは、「少なくとも」百済寺院ではこのような仏地と僧地の概念を直接的に対応させることは難しいと考える。百済寺院の場合、定林寺址の建立段階から僧地と仏地が断絶的に配置されたのではなく、東堂・西堂といった折衷的な空間が作られたためである。そうした点から百済寺院の直接的な影響を受けた日本の初期古代寺院の場合もこの問題を再検討する必要があると考える<sup>119</sup>。

その後、日本の古代寺院では塔と金堂を東西に併置する法隆寺式伽藍配置が出現する。法隆寺式伽藍配置は百済大寺に比定されている吉備池廃寺で最初に確認される。この型式は韓半島では全く確認されないことから日本的な伽藍配置であると評価できるかも知れない。その背景と関連して寺院の景観という側面で見ると、既存の四天王寺式伽藍配置の側面の景観が影響を与えたとする見解も提起されている<sup>120</sup>。ところで、日本では法隆寺式や川原寺式のように極めて多様な型式の伽藍配置が出現することになる。ただ、大きな枠からみると、堂塔の数や位置の違いも、飛鳥寺式と四天王寺式をいかに組み合わせるかによる差異といえる。日本で最初の仏教寺院を造営する際に百済から飛鳥寺式と四天王寺式を共に受容して寺院を建立したため、二つのプロトタイプを選択的に組み合わせることが可能であり、それによって多様な型式の伽藍配置が出現し得たのである。

## 第二節 飛鳥寺に派遣された瓦博士の性格

### (一) 泗泚遷都以後の百濟の寺院と王宮の瓦当

百濟寺院造営技術の伝播と日本における受容過程を最もよく示す資料の一つが瓦当であるといえる。瓦当については、百濟地域から出土した主要資料を集大成した図録や報告書が比較的多く刊行され、日本の場合、飛鳥寺出土瓦当に関する重要な研究が進められており両者を比較することがある程度可能なためである<sup>121</sup>。これによつて百濟故地で出土した瓦当の中から飛鳥寺創建瓦の祖形を探す作業も共に進行してきた。

亀田修一は文様と製作技法を通してこの問題を解明しようとした最初の研究者であり、彼は花組は扶蘇山城、星組は旧衙里寺址にその原型を求めることができるとした。ただし、花組文様に星組の接合技法を使用したり星組文様に花組接合技法を使用した場合があるため、百濟では飛鳥寺創建瓦の文様と製作技法が一对一で対応してはいないとした<sup>122</sup>。

李タウンは星組の祖形を旧衙里寺址から求めることができるとし、花組の場合、龍井里寺址出土瓦当と関連するとした<sup>123</sup>。彼は五八八年に派遣された四人の瓦博士は星組を指導し、その後の五九六年の木塔完成以前にもう一度系統を異にする瓦工が派遣され花組を指導したものと言及した。これは日本の学界で花組と星組の時期差を想定しなかったり花組を若干古く見る通説とは異なるものである。清水昭博は星組の瓦当文様と製作技法が大通寺式瓦当の中で金德里系と一致することから金德里窯や本義里窯で作業した瓦工集団が関与したのではあるかと述べた<sup>124</sup>。花組の場合、官北里遺跡などで同じ文様が確認されており、接合技法が異なるものの七世紀前半の弥勒寺址で花組の接合技法が確認されることを見ると、それ以前すでに百濟でそのような技法が存在していたものと見た。また、百濟瓦生産体制の特徴として遠隔地生産、瓦陶兼業、複数生産・複数供給体制を指摘しながら、これは飛鳥寺を中心にした日本の初期瓦生産体制と同じであると見た<sup>125</sup>。

以上の研究を通して飛鳥寺の創建瓦の中で星組系列はいわゆる大通寺式瓦当の文様と製作技法が同じであることが明らかになった。そ

の中で金德里窯址出土品が最も類似する旧衙里寺址、陵山里寺址、龍井里寺址、官北里遺跡、軍守里寺址などで同範品が確認された。花組の場合、文様が類似する事例はあるものの七世紀以前に接合手法まで類似する事例はまだ発見されていない。そうした点から花組の祖形や系統を説明することが重要な課題になるといえる。

一方、日本の初期瓦生産体制にまで百済の影響があったことは、逆に飛鳥寺を中心にした日本の初期瓦の研究が泗泚期の瓦研究にも参考になりうることを示唆するものである。

ところで、花卉の形態や丸瓦の形態、製作技術が百済ではそれほど相関関係がないという見解もある<sup>126</sup>。飛鳥寺の創建時に活躍した技術者たちは各々花組と星組の文様と技術を兼備していたが、それが花組と星組に分けられ、その後裔や技術的影響を受けた工人が七世紀前半までそれを維持しながら活動するようになったというのである。この見解によると百済地域において二つの造瓦集団の系譜を単線的に遡及させて把握する必要はなくなるが、百済や飛鳥寺で花組の文様を持って星組技法で製作したり、その反対の事例があることを見るとある面では首肯できる点も少なくはない。

しかし、星組が大通寺式瓦当と系統的につながることを確認される状況において、そのような努力自体が無意味であるとはいえないだろう。ただし、飛鳥寺創建瓦の源流に関する問題は特定遺跡のどの遺物がそれであるという式のアプローチよりはそれを生産した工人集団や生産体制を説明することが、より進んだ見解ではないだろうかという点を考慮すると重要な見解であるといえる。

一方、本稿の第一章第二節では熊津期の瓦生産体制について蓮華文瓦当の系統と官営造瓦工房の成立過程で説明している。熊津期の瓦当の中で最も古い公山城出土瓦当の場合、文献記録と関連させると南斉の影響があったものと考えられる。また、この時期には公州西穴寺址や新元寺址のように漢城期の製作技術が残っている瓦当が出土してはいるが、大通寺の建立を経ながら新たな瓦当が作られる。大通寺式瓦当は文様だけでなく瓦当裏面の調整方法、接合手法が公山城式とは異なる。文献記録を見ると、梁の影響を受けて成立したものと考えられるが、泗泚遷都以後には瓦当型の主流となる。その理由については大通寺式瓦当が百済の官営造瓦工房で製作されたためと推定した。熊津期には宋山里六号墳から出土した「梁官瓦為師矣」銘埴から推察できるように、梁の官営工房の影響を受けて埴築築造



用の磚を生産したが、これ以後百済では五二六年の熊津城の修理、五二七年の大通寺の建立を経ながら官営造瓦工房が成立したものと考えられる。五三五年頃に生産された慶州興輪寺式瓦当の場合、大通寺式瓦当の直接的な影響を受けて生産されたが(本稿の第五章)、これは百済ですでに官営造瓦工房体制が成立していたため可能なことであつたといえる。

このような点を考慮しながら次に泗泚期の瓦当について検討していきたい。これまで泗泚期の瓦当については各遺跡から出土した瓦当を型式分類したり全ての遺跡の出土品について文様と技術属性を基準で類型分類して編年する方式、生産遺跡と消費遺跡の関係を把握する方式などが用いられた。これを通して各遺跡でいかなる型式の瓦当が出土したのかを知ることが出来るようになり、各類型別瓦当の一般的な変化様相やその供給体制についても理解できるようになった。しかし、泗泚遷都以後、王宮や寺院に供給された瓦当の相違点の有無については関心が及ばず、特に各寺院の創建期瓦当が相互にいかなる関係があるのかについては関心を引くことがなかった。

これについて、以下、泗泚遷都直後から六世紀後半までの扶余地域における主要寺院と王宮区域に属する遺跡を対象として創建期瓦当を抽出して両者間に文様や技術、需給体系において違いがあつたかを中心に見ていきたい。本章で述べる製作技法については本稿の第一章の図一―一の模式図を参考されたい。

まず泗泚期における百済寺院の中で五八八年以前と設定できる定林寺址と陵山里寺址、軍守里寺址、王興寺址など四ヶ所を中心に検討してみよう。その中で定林寺址の場合、発掘報告書では泗泚期に属する九つの型式が紹介されているが、大通寺式瓦当や単弁七葉瓦当などが漏れているため、それよりはるかに多様な型式の瓦当が使用されたものと考えられる<sup>127</sup>。その中で創建瓦は四種類以上で報告書のB型式(1型式)とC型式(2型式)、未報告資料などである(図六―二四)<sup>128</sup>。その中で1・2型式は<sup>129</sup>技法を使用しており1型式瓦当の裏面には回転ナデの痕跡が観察される。1型式は旧衙里寺址でも同範品が発見されているが、1・2型式が主流をなしながら共に出土したのはここだけであるため創建瓦からみて無理がないと思われる<sup>129</sup>。創建瓦の生産地は定林寺址東側の窯址と考えられ<sup>130</sup>、大通寺式(4型式)の場合、不明窯A1で別途に製作・供給されたものと考えられる。

ところで定林寺址の創建瓦は南京の鍾山祭壇遺跡と鍾山二号寺廟遺跡、南平王蕭偉墓闕から出土した瓦当と非常に類似している<sup>131</sup>。

特に南平王蕭偉墓闕から出土した図六一二五のⅠ・Ⅲ型は定林寺址出土Ⅰ・Ⅲ型式と類似し、Ⅱ型は2型式と類似する<sup>132</sup>。蕭偉は五三三年に亡くなったため墓闕はそれ以後に建築されただろう。筆者は定林寺址の創建を五四一年に梁から渡ってきた工匠・画師の直接的な参与と指導により、その成果が木塔の建立や塔内塑像の製作、伽藍配置にも影響を与えたと推定した(本書の第二章第一節参照)。したがって、蕭偉墓闕から出土した蓮華文瓦当と定林寺址創建瓦の類似性は既存の筆者の見解と符合する。これを見ると百済では大通寺の建立以後の五四一年以後にも再度梁の造瓦術が影響を与えた可能性が提起される。ただし、定林寺址の創建瓦である1ⅰ3型式の同范品が扶余地域から制限的に発見されており、大通寺式瓦当と技術的にも大きな違いがないことを見ると瓦当の場合、その影響はそれほど大きくなかったものと考えられる。

陵山里寺址の場合、五〇〇余点の瓦当が出土しているが、全十六種類に分類される(本稿の第三章第二節参照)。その中で創建瓦は1型式と3・4・9型式瓦当であり、1型式はさらに五種類に細分されるが、代表的な二種類のみ紹介した(図六一二六)。1型式の場合、陵山里寺址以外では発見されていないため陵山里寺址式瓦当と呼んでも良いだろう。寺院の南回廊東南側の窯址から1a型式(金鍾萬分類1Db5ア)が出土したため、この型式が最も古い段階から作られたと考えられ、1bⅰ1e式も寺院専用窯で生産されたものと推定される。3・4型式の場合、1型式とは蓮弁文様のみならず胎土や焼成度を異にしており、詳細な内容を知ることができない不明窯B1・2で生産されたものと考えられて、9型式の場合、大通寺式瓦当であり、舒川金德里窯址で生産されたものと見られる<sup>133</sup>。この遺跡の場合、1型式のaとb、1型式以外の創建瓦の間に若干の時期差があると考えられる。これは近接する窯で1型式瓦当を主に生産し、金堂や中門を建立してからは次第に遠隔地の窯で瓦を大量生産して寺院を完成させたのではないか考えられる。

軍守里寺址の創建瓦は大通寺式蓮弁の円形突起式二種類と三角反転形の蓮弁を施した二種類など四種類以上であったと考えられる(図六一二七)<sup>134</sup>。円形突起式の場合、先端無加工の丸瓦を接合させたⅢ技法の1A型式とⅢc技法を使用した1B型式に分けることができる。1A型式は大通寺式瓦当の蓮弁を祖形としながらも接合技法が異なり、不明窯A1や金德里窯址ではなく不明窯A2で生産されたものと考えられる。三角反転形の場合、中房蓮子の形態が異なり2A・2B型式に区分したが、全て亭岩里窯址で生産されたものである。

ここからは2A・2B型式だけでなく亭岩里窯址で生産された小形瓦当や椽木瓦、箱子型磚などが七世紀前半頃まで持続的に供給されたことが確認されている。

軍守里寺址の場合、定林寺址や陵山里寺址のように寺院附近では窯址が発見されておらず、白馬江対岸側の亭岩里窯址や不明窯A2から瓦を供給された。ところで、亭岩里窯址の場合、軍守里寺址以外にも官北里・双北里・花枝山遺跡をはじめとして定林寺址・陵山里寺址・東南里遺跡・臨江寺址など十六ヶ所の遺跡で同范品が発見された<sup>135</sup>。これらのことから亭岩里窯址を国家施設の補修を目的として設置されたものと推定する見解がある<sup>136</sup>。ここで生産された瓦の供給地が、国家施設にのみ限定的に供給されたのかについては別途の検討が必要であるが、陵山里寺址の事例を見ると補修用瓦当の可能性は十分に想定できると考える。

ところで、亭岩里窯址でさらに一層注目されるのは、ここが官营造瓦工房と考えられる点である。ここで生産された瓦が官北里や陵山里寺址のような多数の国家施設から出土していることは、ここが公的な施設であったことを示唆する<sup>137</sup>、そのうえ窯の構造においても平窯と登窯の長軸と短軸の偏差がほとんどないという規格性が確認される点も、大規模的な生産体制段階の様子を示すものといえる<sup>138</sup>。軍守里寺址の1A・1B型式を生産した不明窯A2の場合、公州大通寺址に瓦当を供給した不明窯A1や金德里窯址とは異なるが、大通寺式瓦当を祖形としている点は同じであり、不明窯A1を官营造瓦工房と見ることができると不明窯A2もまた官营造瓦工房であった可能性が高い。このように軍守里寺址で発見された創建瓦は亭岩里窯址と不明窯A2など二ヶ所の官营造瓦工房で製作・供給されたと見ることができるところで、不明窯A2で生産された瓦当は主に木塔に供給された後に断絶するが、亭岩里窯址で生産された瓦当は主に金堂に供給されており、ここからは各種道具瓦をはじめとして箱子型磚なども供給し、七世紀前半には補修用瓦当まで供給し続けていた。これを見ると軍守里寺址とこの二窯址の関係は若干異なったものと考えられるが、その中で亭岩里窯址はその他の寺院の近接窯のような役割を担ったのではないかと考えられる。

軍守里寺址の創建瓦に見られるこのような様相は王室と密接に関連する大通寺址や定林寺址、陵山里寺址、後述する王興寺址とはかなり異なるものである。特に、創建時に最小二ヶ所の官营造瓦工房から瓦が供給されている様相は王室発源の寺刹とは大きく異なるためにここ

を「官寺」のようなものと推定できるかも知れない<sup>139</sup>。軍守里寺址の金堂や木塔、講堂は他の寺院に比べて大きく寺院全体が大規模であるという点も参考にする必要があるだろう。この創建瓦と道具瓦を生産した亭岩里窯址は都城の他の公的な施設にも瓦を供給した泗泚期の代表的である官营造瓦工房である。しかし、軍守里寺址の立場から見るとそれは寺刹の専用瓦工房のようなものであった。王宮や官庁施設でない寺刹でこのような様相が見られることは、この寺刹を官寺と推定できる端緒ではないかと考える。

王興寺址の場合、これとはまた異なる様相を見せている。王興寺址から出土した瓦当は千点余りに達するというが、これまで報告された資料は極めて一部に過ぎない。ただし最近、王興寺址東側約一五〇メートル地点の窯址から発掘された資料と共に伽藍中心部から出土した瓦当に対する分析結果が報告されており注目される<sup>140</sup>。王興寺址やその窯址から出土した瓦当のうち、創建期の瓦当と考えられる資料を分類すると図六一八のとおりである。ここから出土した創建瓦はハート形蓮弁二種、円形突起式蓮弁四種など六種類が確認された。その中で最も古い段階の創建期瓦当は1・2型式と3・4型式であったと考えられるが、蓮弁文様と製作技法、瓦当と連結した丸瓦の違いなどを通して1・2型式をA組、3・4型式をB組に区分できるようである。

A組の場合、ハート形蓮弁で中房に圏線があるが、そのうち1型式(報告書のⅡID①型式)は一八顆の蓮子にⅡIIa技法が多く、一部ⅢII技法も共に見られる。2型式(報告書のⅡID②型式)は瓦窯址でのみ出土しているがⅡIIa技法で接合された。6号窯址では1型式が無段式丸瓦と連結したまま発見されているが(図六一九)、七・九号でも同じものが確認された。2型式が出土した2・3号窯址では無段式丸瓦のみ発見されていることを考えると、A組は全て無段式丸瓦を連結した可能性が高いと言えよう。1型式の場合、寺域中心部のほぼ全ての建物址で確認されており、窯址では最も古い段階に属する3号窯址から最も新しい時期に属する5号窯址でも発見されていることから創建期から廃窯時まで持続的に生産され王興寺址に供給されたものと考えられる<sup>141</sup>。

B組の場合、蓮弁の形態や中房に配置された蓮子の数などによって細分が可能であるが、その中で最も古い段階に属する3型式(報告書のⅡIC①型式)と4型式(報告書のⅡIC②型式)も創建瓦と考えられる。3型式の場合、一八顆の蓮子が中房の端に偏って配置されており、ⅡIIa・ⅡIIb・ⅡIIc技法が全て確認され裏面に回転ナデの痕跡が鮮明に見られる。寺域内部から発見された一七六中九〇点がこの型

式に属する。4型式は五点確認でき、3型式に比べて直径が一六・三センチと大きく若干厚くてⅡ<sub>2</sub>技法で接合されている。5型式と6型式は中房に一八と一十六顆の蓮子が配置されておりⅡ<sub>2a</sub>技法で接合されており、5型式の場合、龍井里寺址と官北里遺跡、6型式は官北里遺跡と旧衙里寺址、佳塔里寺址で同範品が確認された<sup>142</sup>。ところでB組に属する瓦当は蓮弁の形態や接合技法、瓦当裏面の回転ナデの痕跡などが大通寺式瓦当と非常に類似している。ただし、3・4型式は泗泚期の他の遺跡では出土していない新たな文様であるため王興寺址でのみ独自に製作・使用されたものといえる。その中で3型式の場合、東西石築の下部から有段式丸瓦と結合したものが確認されている<sup>143</sup>。

このように王興寺址で発見された創建瓦は、文様と製作技術、連結丸瓦の型式を基準に大きく二つのグループに分けることができる。これは飛鳥寺の創建瓦が花組と星組からなっていることと非常に類似する現象であり、A組は花組、B組は星組に対応するものと見ることができ(図六一二九)<sup>144</sup>。そうであれば、飛鳥寺の創建と年代的に最も近い王興寺址の創建瓦を製作した工人が日本に派遣されたといえるだろうか。この問題は今後王興寺址の瓦当に関するより体系的かつ綿密な分析が必要であるが、両者の間には細部的な技術や生産体制において違いがあるため即断しがたい。

すなわち、二つの寺院の創建瓦はその文様が一对一で対応していないだけでなく、A組の場合、飛鳥寺の花組に見られるⅡ<sub>2</sub>技法が全く確認されておらず、B組の場合も瓦当と連結した有段式丸瓦が玉縁部まで麻布をかぶせて成形する方式で製作されているため星組のそれとは若干の違いがある。特に、瓦の生産体制において飛鳥寺は近接窯と遠隔地窯体制を敷いているのに対し、王興寺址は近接窯で創建期の全ての瓦を生産する方式であった。前述したように王興寺址窯址で製作されたA・B組の創建瓦(特に1型式と3型式)は伽藍中心部に対する発掘で全て確認されているが、この瓦当は扶余地域の他の遺跡では全く確認されていない。また、扶余地域の瓦建物址で最も頻繁に発見される大通寺式瓦当は少量しか出土しておらず、亭岩里窯址で生産された瓦当は皆無である。百濟寺院の場合、飛鳥寺のように近接窯と遠隔地窯を共に運営することが一般的であるが<sup>145</sup>、王興寺址は創建期に近接窯のみ運営されていたのである。王興寺址創建瓦に見られる二種類の瓦当は飛鳥寺創建瓦の花組・星組と類似していてもその生産体制までは同じではないのである。しかし、飛鳥寺建立

以前に扶余地域で二つのグループの造瓦組織によって寺院が建立された事実を資料として確認できる点は重要な意義を持つといえよう。<sup>146</sup>

王興寺址でこのように新たな瓦生産体制が出現した背景は何であろうか。それは王興寺址建立の特殊性に求めなければならないであろう。木塔址から発見された青銅舍利盒には昌王、つまり威徳王が亡き王子のために寺院を建てたと記録されている。王興寺址は妹兄公主が発願した陵山里寺址とは異なり国王自身が発願した勅願寺のようなものである。王興寺址が建立された段階には大通寺址や定林寺址とは異なり外部的な技術支援がなくとも寺院の建立が可能であり、中央行政組織である二十二部司が完備され王権が安定し強化されたといえる。もし、王興寺を造営したり運営するための「造寺官」のようなものがあつたとすれば<sup>147</sup>、功德部と司空部などから工人を選んだり作業量を割り当てる方式で瓦を生産したのではないかと考えられる。王興寺址の建立はこのように国王の直接的な統制下で迅速に推進されたものと予想され、それゆえに寺院の隣近で瓦を大量生産する体制が運営されたのではないかと推定できる。

次に同時期の泗泚期の王宮ではいかなる型式の瓦当が使用されていたのかをみていく。この問題を検討するのに先立ちまず泗泚期の王宮址や関連遺跡が何なのかを把握しなければならないだろう。泗泚期の王宮の位置については議論があるが、植民地期の地籍図で方形区画が確認される旧衙里・官北里一帯が有力である。また、百濟滅亡後に唐の支配と関連する中心的な施設が建立されたことを物語る「大唐」銘瓦当が出土した扶蘇山城とその東南側の双北里一円にも中心地域があつたものと考えられる。これまでの発掘状況や木簡などの遺物の出土様相を総合してみると、泗泚期の王宮区域は扶蘇山城をはじめとする南側の旧衙里・官北里・双北里一帯で西側は官北里大形建物址の西側地域、東側は扶余初等学校や扶余女子高校付近、南側は定林寺址北側を境界にする地域であつたと考えられる(本稿の第二章第二節参照)。

ところで、泗泚期の王宮に使用された瓦当の場合、寺院址のように遺跡別に創建瓦を抽出して説明することは適切でない。扶余旧衙里・官北里・双北里遺跡は地域的に非常に広いが瓦当の出土様相が比較的単純であるため王宮区域出土瓦当という概念で一緒に検討することが適切であると考えられる。次に旧衙里遺跡、官北里遺跡、双北里遺跡と扶蘇山城、益山王宮里遺跡から出土した六世紀代の瓦当を分析

したが部分的に七世紀代の資料も共に紹介した。官北里・双北里遺跡は王宮区域の東西側に位置しているが、瓦当の出土様相が類似している。旧衙里遺跡の場合、六世紀後半に寺院が建立されるが<sup>148</sup>、遷都直後の比較的古い瓦当が多数発見されており、扶蘇山城の場合、王宮の防御のみならず王宮の背後地として後苑の機能を兼ねたものと考えられる<sup>149</sup>。王宮里遺跡は武王代が中心時期ではあるが六世紀末まで遡らせることができる資料が含まれていることから共に検討した。

図六・三〇は六世紀中後半を中心にした扶余と益山の王宮遺跡から出土した瓦当を分類したもので大きく三つのグループに分けることができる<sup>150</sup>。その中でAグループは大通寺式瓦当で文様や技術で最も多様な変化を見せるが1〜4型式が六世紀代に属すると考えられる。蓮弁が六葉のもの八葉のもの二種類があり、中房に一六、一七、一八の蓮子が配置され、瓦当と丸瓦の接合方式はB技法とC技法ともに確認される。その中で公州大通寺式瓦当と文様や技術が類似する2型式と1型式が最も古く、舒王金德里窯址出土品のよくな2b型式や接手法がD技法に変わった3・4型式がその後について製作されたものと考えられる。1〜4型式瓦当を基本型としながら蓮弁と蓮子の形態が変わった5・6型式は六世紀末や七世紀前半に属すると考えられる。これを見るとAグループは王宮区域で遷都前後から七世紀前半まで製作・使用された范型といえる。1〜6型式の瓦当が出土した地域を見ると旧衙里と官北里遺跡に多く、扶蘇山城・双北里でも少数確認されるが、益山王宮里一帯ではまだ発見されていない。

Bグループは、7・8型式が六世紀代に属するものと見られる。7型式はハート形蓮弁でボリューム感があり瓦当面が八等分されておらず蓮弁の大きさが少しずつ異なる。中房は凸形で一八の蓮子が八個の間弁に対応する位置にあるが、方形に近い形態で配置されている。8型式は7型式と似ているが蓮弁の中央が三角形に隆起して尖形のように見え蓮弁が若干短い。中房は若干凹面を呈し、周囲が圏線状をなして一八の蓮子が界線に対応して配置されている。7・8型式ともにH<sub>2b</sub>技法で接合されており、一部回転ナデの痕跡があるものも確認される。瓦当面の厚さが一・一〜一・三センチと薄く、周縁が〇・五センチ程度と薄いことが特徴である。9型式はボリューム感ある蓮弁が8型式と似ているが、中房の蓮子が鈍くなる。10型式は蓮弁が平たく中房が広くなるが、一七・一六の蓮子が二重に配置され圏線がある。11型式は蓮弁の中央と間弁が三角形をなし、中房は凸形に突出しているが一六・一三の蓮子が配置された。9〜11

型式は7・8型式を基本として変形したもので七世紀初半以後のものと考えられる。

Bグループは、扶余地域の王宮区域だけでなく益山王宮里遺跡でも出土している。7・8型式の製作時期については飛鳥寺の花組の直接的な祖形と見て、五八八年以前とする見解が早くから提示されたが<sup>151</sup>、官北里遺跡の創建瓦として五三八年の泗泚遷都前後とする反論もあつた<sup>152</sup>。しかし、官北里遺跡の瓦建物と方形蓮池をはじめとする生活遺跡が、遷都前後でなく六世紀後半以後に造営されたといふことが最近の発掘調査において確認された(本稿の第二章第二節参照)。したがって、7・8型式は五三八年まで遡らず五八八年以前の六世紀中後半頃に製作・使用されたものと考えられる。

Cグループの場合、中房が大きく蓮弁の端と間弁が三角形をなす亭岩里窯址生産品である。12～14型式は蓮弁の形態が同じで中房が大きく、瓦当と丸瓦の接着力を高めるための補強土の痕跡が共通して確認される。12・14型式は一十四の蓮子が配置されるが12型式はⅡc技法、14型式はⅢc技法で接合された。13型式はⅡc技法で接合されており、当初一五の蓮子が配置されていたが、その内の一個がとれたように見える亭岩里A-1号窯址出土品がある。Cグループの場合、出土量が少なくこれまで旧衙里、官北里、双北里でのみ確認されており、益山王宮里遺跡では確認されていない。

扶余官北里遺跡に対する発掘では遺跡の全域で盛土台地層が確認され、これを基準にしてその下部と上部の生活面を区分できるようにした。その下部では工房や貯蔵穴などが発見され、上部では各種建物址と蓮池、井戸址などが確認された。盛土台地の造成年代と関連してラ地区大形殿閣建物の基壇盛土層内部で発見された2a・8・13型式の瓦当が注目される。この瓦当はその廃棄時点が注目されるが、その中で8型式の年代は五八八年以前と推定され、これを通してこの一帯に対する台地造成が六世紀後半に行われたものと推定した(本稿の第二章第二節参照)。ところで、二〇〇八年のバ地区に対する調査では盛土層内部から中国製青磁罐片が発見された(図二二八参照)。この遺物は器形や蓮華文の形態が中国陳代の古墳から出土するものと類似する。したがって、官北里一帯の台地造成は六世紀第四半期以後ということが明らかになった<sup>153</sup>。これを参考にすると盛土層から発見された2a・8・13型式瓦当の使用時期はそれと同時期あるいは若干古い六世紀中後半と見ても無理はないだろう。泗泚遷都直後の官北里一帯は工房や貯蔵施設が位置していたため、王宮



の中心殿閣の外郭や内裏のような場所であったといえる。したがって、王宮の中心区域に対する発掘で新たな型式が出土する可能性は残っているが、ひとまずこれまで出土した瓦当を中心にその使用時期を調べてみると、Aグループの1〜4型式は大通寺式瓦当の展開過程から見ると遷都前後から使用されたものと見られる。Bグループの7・8型式は盛土層で確認された共伴遺物から見ると、五八八年以前である六世紀中後半から使用されたものと考えられる。Cグループの場合、同范品の事例を見るとBグループよりは若干古い段階から出現しているが、出土量が少なかったため補修用瓦当であったと考えられる。これを見ると、泗泚期の王宮の殿閣に使用された瓦当は遷都以後から六世紀中後半まではAグループが主流をなし、六世紀中後半からは次第にBグループで代わっていったといえる。扶蘇山城と双北里遺跡ではBグループが最も多く発見されており<sup>154</sup>、離宮と推定される益山王宮里遺跡でもBグループが創建瓦として使用された。ところで、王宮里遺跡でA・Cグループの瓦当がほとんど出土しないことを見ると、六世紀末や七世紀初半を基点でA・Cグループはこれ以上王宮区域で採択されなかった可能性がある。

それでは、王宮区域で生産された瓦当の中でAグループとBグループの間に違いが生じた理由は何であろうか。以下、それを瓦生産体制の変化という側面からアプローチしてみることにしよう。泗泚遷都前後の王宮の殿閣に大通寺式瓦当が主に使用された背景については、筆者はこの瓦当が百済中央の官営造瓦工房で製作されたためであると推定した。ところで王宮区域から出土した大通寺式のAグループ瓦当は円形突起式という文様と回転ナデ技法は共通するが、蓮弁の数や蓮子の数、接合技法などにおいて非常に多様化している。そのため、清水昭博はこれを大通寺系、鳳凰洞系、金德里系、軍守里系のように細く分類した<sup>155</sup>。このような細かい型式は部分的に時期差を反映するといえるが、一方では短期間で大量に瓦を生産しなければならなかった遷都前後の事情とも関連していたと考える。つまり、遷都前後の王宮区域の大規模土木工事を円滑に遂行するため、多様な出自を持つ瓦工を集め瓦を製作させようとした結果、文様は共通するが様々な接合技法が駆使されたと見ることができるのである。

このような推論が妥当であれば、遷都初期の王宮区域で使用されたAグループ瓦当は特定中央行政機関で単独に生産されたのではなく、将作大匠や都監といった臨時機構によって生産された可能性がある。Aグループ瓦当に見られる円形突起式という文様の共通性は該当国

家機構の強力な統制力を反映したものといえる。ただし、同じ文様を使用しながらも他の接合技法を駆使している点は、各工房ごとに自身の技術を固守したためなのか、それとも、次第に技術が共有されるとともに任意的に選択されたのかは不明である。いずれにせよ、遷都以後の大規模土木工事を経て官营造瓦工房内部では特定の接合技術を駆使することがさほど大きな意味を持たなくなり、特にその実務責任者といえる瓦博士はⅡ技法やⅢ技法などを全て熟知したり駆使できるようになったものと考えられる。

六世紀中後半から製作されたBグループの場合、時期差はあるが扶余地域の王宮区域のみならず益山地域で発見された瓦当とも文様と製作技術が同じである。これは扶余と益山王宮の瓦建物で同范品の瓦が使用されていたことを物語る。ところでBグループの場合、7・8型式を基本型として9・11型式に継続して改範が進行した(図六一三〇)。このような現象は扶余や益山地域の寺刹で新たに寺院を建立するたびに新たな文様の瓦当を製作したと大きく異なる。その理由について詳細は不明であるが、7・8型式の文様を非常に重要視したりその生産過程に持続的な統制や管理があったことを推測できる<sup>156</sup>。これを見るとBグループの瓦当は将作大匠のような臨時的な行政機構ではなく常設的な中央行政機関傘下の官营造瓦工房で生産されたことを示唆するのではなからうか<sup>157</sup>。このような推論が妥当ならば、泗泚期の王宮区域で発見されたAグループとBグループ間の違いは臨時的行政組織が担当した瓦の生産が次第に司空部や功徳部傘下の官营造瓦工房に再編される過程で発生したものといえるだろう。

## (二) 飛鳥寺創建瓦と百済の瓦博士

史料六一〜三から飛鳥寺の創建瓦は百済の瓦博士によって作られたことが分かる。これまではその祖形が百済故地の瓦当の中でどこに由来するのかについて関心が集中してきた。このうち、星組系列の瓦当については、旧衙里寺址や大通寺式瓦当のうち金德里窯で作業した瓦工集団に淵源するものと理解されている<sup>158</sup>。それは円形突起式の文様と裏面の回転ナゲ技法、丸瓦先に端を有段式に調整した後接合させる手法(Ⅱa)などが飛鳥寺の星組系列と一致するためである。これに対して、花組系列の場合は扶蘇山城や龍井里寺址、官北里遺跡などで見解が交錯している<sup>159</sup>。花組の場合、瓦当の文様は類似しているが花組系列で特徴的にあらわれる丸瓦先端部の調整技法

(II 3a)はまだ六世紀代の資料では確認されていないためである。

ところで前述したように、王興寺址窯址と伽藍中心部に対する発掘調査ではその創建瓦が飛鳥寺の花組(A組)、星組(B組)と非常に類似することが明らかになった。つまり、ハート形蓮弁を持つ1・2型式(A組)は無段式丸瓦と連結し、円形突起式蓮弁を持つ3・4型式(B組)は有段式丸瓦と連結することが分かった(図六二九)。したがって、王興寺址の創建瓦を生産した造瓦集団が飛鳥寺の創建瓦を生産した工人であったか少なくとも非常に深い関連を有していたといえる。王興寺址の場合、飛鳥寺の建立時期と最も類似しており、前節で述べたように伽藍配置や心礎石の安置方法、舍利荘嚴方式などの類似性が非常に高いため、そこから出土する瓦当が類似することはある意味当然なことかも知れない。しかし、前節で説明したように両者は完全には一致しない。王興寺址出土瓦は飛鳥寺の創建瓦と類似するとはいえ相違点もあるため、直接的な祖形であると断定することは性急であると考えられる。

このような状況で花卉の形態や丸瓦の形態、製作技術というものが百済ではさほど相関係がないという見解が再び注目される<sup>160</sup>。つまり、飛鳥寺の創建時に渡ってきた瓦博士は各々花組と星組の文様と技術を兼備していたが、それが偶然に花組と星組に分けられて七世紀前半まで維持されたというのである。泗泚遷都以後、大規模的な土木工事を経ながら特に官営造瓦工房を中心に活動しながら一般的な造瓦術の向上や技術的な共有があつたのであろう。王宮区域から出土した図六二〇の2・4型式の大通寺式瓦当は同じ文様を持ちながらも多様な接合手法を駆使している。また、王興寺址五号窯址では花組(A組)と星組(B組)の瓦当と無段式および有段式丸瓦が共に生産されている<sup>161</sup>。これを見ると百済の官営工房に所属した技術系官僚であり実務責任者といえる瓦博士はそれぞれ花組と星組の文様と技術を兼備していた可能性が高い<sup>162</sup>。

これまで飛鳥寺の花組と星組の源流の摸索において、特に瓦の製作技術面を強調したことで看過されてきた事実がある。それは両地域の瓦当の文様が似ているとはいえ全く同じではないという点である。飛鳥寺の花組と星組を代表する1a・1b型式と3a・3b型式、5型式の場合、十葉や九・十一葉で百済の瓦当では見られない文様である(図六一三十一)<sup>163</sup>。これを見ると、百済の瓦当と飛鳥寺の瓦当が似ているとはいえ、決して全く同じではないということを予見できる。その理由については二つの側面を考慮できるだろう。一つは

飛鳥寺で百済では見られない新たな瓦当文様を使用することになった背景や脈絡に関する点で、もう一つはそのようにして採択された瓦当文様の淵源や意味に関する点である。

まず、飛鳥寺創建瓦に新たな文様が使用された背景に関しては泗泚期における主要寺院創建瓦の様相が注目される。前節で説明したように定林寺址や陵山里寺址、軍守里寺址、王興寺址の創建瓦は「く寺式」と呼べるほど非常に多様で特徴的な瓦当文様を新たに製作・使用している。このような様相は七世紀代の益山帝釈寺址や弥勒寺址の創建瓦において明確に確認できる事項である<sup>164</sup>。したがって、飛鳥寺で新たな文様を採択するのはむしろ当然なことともいえる。それは百済寺院の造営において新たな寺院の創建と新たな瓦当文様の製作はごく一般的な現象であった可能性があるためである。つまり、百済寺院の創建瓦という視角から見ると、飛鳥寺で新たな型式の創建瓦が製作されたことは、それが新たな寺院であったため当然新たな文様が製作・使用されたものと見ることができるのである。

しかし日本の場合、飛鳥寺が完成して以降、花組系と星組系はそれぞれ固有の文様属性と技術系統を維持しながら別個に活動していた<sup>165</sup>。これは百済寺院とは異なる点でむしろ百済王宮における瓦当の使用様相と類似する。泗泚期の王宮関連遺跡では初期には図六―三〇の2く4式の大通寺式瓦当が広範囲に使用されたが、六世紀中後半を基点に図六―三〇の7・8型式の瓦当が使用されはじめ、七世紀前半には益山地域でも同じ文様が使用された。王宮の殿閣に使用された瓦当は図六―三〇の5・6型式や9く11型式瓦のように瓦範の改範を通じた文様の連続性が強いが、これは寺院の瓦当とは全く異なる様相といえる。ところで、百済の王宮区域で使用された瓦当でさらに注目すべきは、大通寺式瓦当は星組の祖形で、ハート型蓮弁を持つ瓦当はその出土地は異なるが花組系列の祖形とされている瓦当の文様であるという点である。これを見ると、五八八年以前に扶余地域の王宮の殿閣には花組と星組の文様と最も類似する瓦当が使用されていたといえる。

飛鳥寺の場合、基本的には寺院であったため、百済寺院の常例にしたがって新たな文様の瓦範が新たに製作・使用されたものと考えられる。ところで、その際に採択された文様は百済の王宮で使用されていたものである。花組と類似する7・8型式瓦当は六世紀中後半から使用されはじめた最新の文様であり、星組と類似する2く4型式瓦当は遷都直後から使用されたものである。飛鳥寺の花組や星組でこ

のような文様を採択したことは発願者である蘇我氏の非常に意図的な選択であったといえる。彼は記念的建造物として寺院を初めて建立して、百済から最新の文様、それも王宮で使用していた瓦当文様を採択することで自身の権威をより一層誇示しようとしたものと考えられる。発願者や発注元が文様を選択することはさほど難しくはなかったであろう<sup>166</sup>。

そうであれば、飛鳥寺創建瓦の源流はどこにあると言わなければならないだろうか。この問題についてこれまでは単純に特定遺跡や窯址から出土した瓦がその祖形として説明されてきた。しかし、そのような解答よりは瓦を生産した窯址や造瓦集団を提示することがより適切であり、花組と星組の祖形をそれぞれ異なる遺跡から求めるより王興寺址のように単一遺跡で組合せをなしていることを提示することが望ましいと考える。そのような脈絡から筆者は六世紀中後半における百済の王宮と寺院の殿閣に使用された瓦を生産した「官営工房の造瓦集団や技術者」であったと考えたい。花組の場合、生産地が不明であるが扶余旧衙里・官北里・双北里遺跡および扶蘇山城・王宮里遺跡など王宮関連遺跡から出土する瓦当を祖形にしたものと見ることができ<sup>167</sup>。星組の場合、金德里窯址や王興寺址窯址で活動した造瓦集団と関連があり、王宮区域のみならず王興寺址のように寺院からも出土する大通寺式瓦当を祖形としたといえる。泗泚期の王宮関連遺跡では両者ともに発見されるが細かい技術属性は一致しておらず、これは王興寺址の場合も同じである。したがって、五八八年前に百済で活動した瓦博士は花組と星組の技術を兼備して王宮と寺院の瓦当を製作して供給する官営造瓦工房に所属した技術系官僚であったといえるだろう。

古代寺院の造営技術は土木建築のみならず彫刻・金工・木工・石工など各分野の多様な手工業技術が集大成されているため、古墳の築造より技術の相互依存度や提携度が高かつた<sup>168</sup>。五八八年に派遣された渡来系の技術工人は前時期の古墳時代に渡来した技術者とは大きな違いがあった。文献記録を通して分かるように当時の技術工人は全て百済の中央行政機関に所属する技術系官僚であった<sup>169</sup>。彼らは個別に渡日したのではなく、飛鳥寺の建立を支援するために国家が組織した派遣団のような一つのプロジェクトチームの形態で一緒に派遣された(本稿の第六章第一節参照)。史料六一―三の『日本書紀』や『元興寺縁起』などの関連史料を見ると、そのプロジェクトチームはたとえ臨時的ではあるとはしても、率系の官等を所持した高位官僚と仏教僧侶、技術工人などで構成されていた。その中で技術系

官僚の所属を推定してみると、露盤博士は前内部、寺師は木部、画工は前内部または功德部に所属していたと考えられる。

前内部の場合、国王の近侍機構として王命の出納と国政を総括する部署であり、新羅内省と非常に類似するものと考えられている<sup>170</sup>。新羅の内省ではその傘下で多様な宮中手工業工房を運営していた<sup>171</sup>。これを参考にすると、金属部分全体を担当した露盤博士は前内部に所属していた可能性が高いと考える。史料六一二で露盤博士が技術工人の中でまず最初に記録されている点や徳系官僚の中で最も高い将徳を冠称していることもこのような前内部の位相と関連があるのではなからうか。

寺師の場合、寺工としても出てくるため五七七年に派遣された造寺工と同じであると言える。彼らは木造建築と関連した業務を遂行したものと考えられ、このことから木部に所属していたと推定される。画工の場合、前内部や司空部に所属していたと推定されているが明確な根拠はない。しかし、他の事例を参考すると、中央行政官署に所属する技術系官僚であったことは明らかであるといえる。

瓦博士の場合、功德部と司空部に配属されていたと推定される。六世紀後半、百済では功德部と司空部に多数の造瓦所が配置された二元的な官営工房体制が運営されていたと考えられる。その中で五八八年に派遣された瓦博士が功德部や司空部のどちらか一つの部署にのみ所属していた官員であったとは考えられない。もし、飛鳥寺建立支援のための臨時的なプロジェクトチームのようなものであったとすれば、二つの部署に所属する瓦博士たちが一緒に選出された可能性がより高いと考える。五八八年、百済では一度に四名もの瓦博士を派遣している。これはその時点での瓦製作の重要性や緊急性を示すものといえるが、一方では一つの部署から四名の瓦博士が一度に選出できるのかという疑問もある。したがって、この時に派遣された四名の瓦博士は司空部や功德部に別途に所属している状況で選出されて、一緒に派遣された可能性がより高いと考える。飛鳥寺の創建瓦が花組と星組に分かれ、百済の王宮や寺院に使用された瓦の要素が共に見られる点、寺院建立以後に花組と星組の流派がそれぞれ異なる展開様相を見せることもまさにこのような事情と関連があるのではないだろうか<sup>172</sup>。

史料六一二から瓦博士が百済の官営工房に所属していた技術系官僚であったということは簡単に類推できる。しかし、これまで百済瓦に対する研究では官営工房の成立や展開過程、中央行政組織との関連性を把握しようとする努力が不足しており、泗泚期の王宮で使

用された瓦が何なのかといった問題を度外視する傾向がなくもなかった。これに対し本章では百済官営造瓦工房の変化様相を把握した後、百済の王宮や寺院に瓦を供給した司空部と功德部に所属していた技術系官僚であり実務責任者である瓦博士が五八八年に飛鳥寺の瓦を製作するために派遣されたものと推定することになった。

一方、史料六一―三を見ると、飛鳥寺を造営しながら百済から派遣された瓦博士などの技術匠人は東漢氏や朝妻氏など従来の渡来人技術者を「部首」として置き、その下に「諸手」と表現された在地の下級技術者を動員している<sup>173</sup>。このような形態は第二章で検討したように五四一年に梁から渡ってきた工匠・画師の指導を受けて百済の定林寺址の造営や塔内塑像の製作が行われたことにその原初的な形態を求めることができる。また、第五章で検討したように新羅の興輪寺の造営においても百済から造瓦術が伝授された際、在地の工人が動員されていることを確認できる。そうした点で百済から寺院造営技術が伝授された新羅や日本において、そのような技術の習得過程は非常に類似するパターンで展開した可能性がある。この点に対しても今後比較検討する必要があるだろう。

#### まとめ

飛鳥寺三金堂の高句麗源流説は、その発掘当時までに知られていた三金堂が高句麗の清岩里寺址にしかなかったために提起された学説の一つである。しかし、飛鳥寺からは三金堂というプラン以外に高句麗寺院と類似するものがまったく発見されておらず、高句麗寺院の影響があらわれた過程についても明確に説明できていない。そこで三金堂が両時期にかけて造営されたか、百済地域で飛鳥寺の三金堂と類似する寺院が発見されるであろうという期待、百済化された高句麗の文化が再び日本へ伝播したという見解などが提示された。二時期造営説は、史料批判と発掘調査の結果に対する再検討によって早い時期から否定された。

そこで第一節では後二者の立場から飛鳥寺三金堂の百済起源説を新たに提示した。すなわち、百済寺院には飛鳥寺の三金堂と同様ではないが、類似した寺院が存在しており、高句麗の文化が直接日本に伝わったのではなく、百済を経由して伝播された可能性を提起した。

五世紀末から六世紀前半から始まった高句麗系文化の百済への流入は六世紀中半からは次第に支配層にまで拡散したと考えられる。威

徳王陵と推定される東下塚に高句麗系統の壁画が描かれていたことは高句麗文化の流入を端的に示すものである。威徳王は五六七年を起点として北朝の国家との交渉を再開するなど本格的に王権を強化し、南朝中心の外交から抜け出し北朝と高句麗系統の文化を積極的に受容した。百済では弥勒寺址建立以前の六世紀中後半の軍守里寺址や王興寺址を建設しながら回廊外郭に新たな性格の建物を建立するなど初歩的な形態の多院式寺院を造営している。このような新要素は中国南北朝時代から隋唐代に流行した多院式寺院や高句麗寺院の影響を受けたためあらわれたものと考えられる。

六世紀中後半に建立された軍守里寺址と五七七年の王興寺址、五八四年の皇龍寺址重建伽藍、そして五八八年の飛鳥寺伽藍配置には互いに一定の関連性を有するといえる。六世紀中後半から百済寺院に見られる多院式寺院で東堂・西堂や東西回廊が撤去された形態が皇龍寺址重建伽藍の三金堂であり、それを高句麗的な品字形に配置したものが飛鳥寺三金堂の伽藍配置であるといえるためである。六世紀代の百済では高句麗の文化が幅広く受容されていた。したがって、百済寺院において飛鳥寺三金堂と同じ伽藍配置が具現されなくとも高句麗が直接日本に影響を及ぼしたのではなく、百済を経由して伝えられたと考えることが合理的であると考えられる。もし、それが高句麗の直接的な影響であるならば、皇龍寺址のように部分的ではあるが高句麗的な要素が残っていないならば、飛鳥寺ではそうした要素を全く見出すことができないことも参考になる。

一方、高句麗と日本は五七四年から五九五年まで一時的に外交交渉が中断した状態であり、高句麗の僧侶慧慈が派遣された五九五年は百済の技術者集団が倭に渡り金堂や木塔を建立工事に着手した後であった。発掘調査の結果、一貫した造営計画を持って建立されたことが確認された飛鳥寺の伽藍配置において、三金堂の要素のみを高句麗に淵源と理解するには論理的に無理がある。五九五年の段階で飛鳥寺は百済の技術者集団によって寺院の造営プランが立案され、すでに工事が着手されていたと見なければならぬだろう。

飛鳥寺の建立のために百済から派遣された技術者は、国家で臨時的に組織されたプロジェクトチームのようなものであり、各技術部門が有機的に連繫されていたため、伽藍配置のみ高句麗の影響を受けたとみることは難しい。金堂の本様が百済から伝来し、東・西金堂の二重基壇と下成礎石が百済の影響を受けて建立されたことを見ると、飛鳥寺の三金堂の建立は百済から派遣された技術者集団によって総



合的に計画され実施されたと見なければならぬだろう。百済は六世紀中後半、新羅の台頭と隋の登場という東アジアの国際情勢の変化の中で仏教を媒介とした技術の伝授を通じて日本に対する主導権をより強固なものとするため、このような技術支援をしたといえる。ただし、飛鳥寺の三金堂が百済寺院の伽藍配置と一致していないことは、五七七年に百済から派遣された造寺工の活動を通して日本内部で伽藍配置に関する情報がある程度把握していたためと考えられる。

飛鳥寺建立以後、日本の初期寺院には四天王寺式伽藍配置が採択された。これは百済の主流的な型式である定林寺式伽藍配置を再び選択したものといえる。ところで両者は若干の違いがあるかのように考えられている。しかし、大阪の四天王寺の場合、講堂の東西に別途建物のような施設があった可能性があり、夏堂と冬堂からなる講堂は百済寺院のいわゆる一棟二室建物址と類似する。また、新堂廢寺と亀石古墳の関係は古墳と寺院が関連する好例として陵山里寺址と陵山里古墳群の関係と同様であるといえる。新堂廢寺の東西回廊から発見された東方建物・西方建物も定林寺式伽藍配置の東堂と西堂に該当する。まだ事例が少ないが定林寺式伽藍配置が日本の四天王寺式伽藍配置と類似した可能性を示唆するものといえるであろう。

第二節では飛鳥寺創建瓦の源流を明らかにするため、百済瓦当の問題を検討した。まず、泗泚期の瓦当については定林寺址、陵山里寺址、軍守里寺址、王興寺址などの寺院から出土した創建期の瓦当と旧衙里・官北里・双北里、扶蘇山城、益山王宮里など王宮関連遺跡から出土した瓦当を区分して検討した。その結果、泗泚期の主な寺院は新たな寺院が創建される際、新しい範型が製作されそれを使用するが、王宮区域では特定文様の瓦範が使用され続けていることを確認できた。また、飛鳥寺と年代的に近い王興寺址の創建瓦から花組・星組系列と最も類似するパターンとともに若干の差異点も確認することができた。

したがって、百済の諸遺跡で飛鳥寺創建瓦の源流を把握するためには、特定遺跡や遺物から完全に同一なものを探すより、それを生産した造瓦集団や瓦博士の性格を説明することがより重要であると考えられる。飛鳥寺の創建瓦を製作した瓦博士は六世紀中後半、百済の「王宮と寺院」の殿閣に使用した瓦を生産した「官宮造瓦工房の造瓦集団や技術系官僚」であった。花組の場合、生産地は不明であるが扶余旧衙里・官北里・双北里遺跡および扶蘇山城・王宮里遺跡など王宮関連遺跡から出土した瓦当を祖形とし、星組の場合、金德里窯址や王

興寺址窯址で活動した造瓦集団と関連があり大通寺式瓦当を祖形としたものと考えられる。

飛鳥寺の場合、百済寺院の創建瓦が新たな范型によって製作されたのと同様に、その創建時に新たな文様の瓦範が製作・使用された。その時に採択された文様は百済の王宮で使用された最新の文様であった。特に、飛鳥寺の金堂や木塔に使用された花組系列の瓦当は百済の王宮で使用されていた最新の文様である。これは記念的建物の建立を通して権威を誇示しようとした蘇我氏の意図的な選択であったといえる。五八八年に百済から派遣された瓦博士は王宮や寺院の瓦を供給した功德部と司空部に所属した技術系官僚であり実務責任者として、寺師と共に国家で組織されたプロジェクトチームの一員であったのである。

日本最初の寺院である飛鳥寺の造営は全面的に百済の造寺工と瓦博士をはじめとする各種技術者によって完成したといえるが、それは百済寺院と全く同じというわけではない。これは受容の主体である蘇我氏の立場や日本の仏教界および技術の水準、特に五七七年に派遣された造寺工と造仏工の事前活動があったためだろう。飛鳥寺の造営は単純なモノの輸出や輸入でなく、人間の移動による技術の伝授過程であった。文化を受容する側の立場が反映され、変化が生じることは考えてみると当然のことである。ところで、問題はどのような変容がどの程度まで可能であったのかという点である。これについて、本章では一金堂を三金堂に変更するほどの大規模な設計変更は不可能であったが、瓦当文様を選択する程度には可能であったと見たのである。

1 史料六一・一・三の元興寺伽藍縁起并流記資財帳の活字本については次の文献を参考にした。

藤田経世編『校刊美術史料二』（寺院編上巻、中央公論美術出版、一九七二年、七五〜八三頁）。

2 大橋一章「飛鳥寺の創立と本尊」（『奈良美術成立史論』、中央公論美術出版、二〇〇九年、八二〜八六頁）。

3 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』（一九五八年）。

4 仏教芸術学会「飛鳥寺の発掘をめぐって―座談会」（『仏教芸術』三三、一九五八年、四七頁）。座談会の記録で興味深いことは、当時まで日

本の学界では高句麗文化を低く評価し、百済については漠然と親近感を持つていたという反省の雰囲気提起されている部分である。

<sup>5</sup> これまで高句麗系瓦当に分類されていた瓦の源流について上原真人は日本自体の創作説、清水昭博は新羅影響説を主張している。

上原真人「寺院造営と生産」（『記念的建物の成立』、鈴木博之・山岸常人編、東京大学出版会、二〇〇六年）。

清水昭博「古新羅瓦の溯源に関する検討」（『王権と武器と信仰』、管谷文則編、同成社、二〇〇八年）。

<sup>6</sup> 毛利久「飛鳥大仏の周辺」（『仏教芸術』六七、一九六八年）。

フランソワ・ベルチエ「飛鳥寺問題の再吟味」（『仏教芸術』九六、一九七四年）。

上原和『仏法東流』（学生社、一九八七年）。

<sup>7</sup> 大橋一章「飛鳥寺の創立に関する問題」（『仏教芸術』一〇七、一九七六年）…『奈良美術成立史論』（二〇〇九年）。

坪井清足「飛鳥寺創建諸説の検討」（『文化財論叢』、奈良文化財研究所創立三〇周年記念論文集、一九八二年）。

<sup>8</sup> 大川清「扶余の百済時代寺院跡」（『百済の考古学』、考古学選書五、雄山閣、一九七二年）。

猪熊兼勝「発掘すすむ大和の飛鳥時代寺院跡」（『仏教芸術』二三五、一九九七年）。

趙源昌「百済軍守里寺址の築造技法と造営主体の検討」（『韓国古代史研究』五一、二〇〇八年）。

佐川正敏「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎施設・舍利奉安形式の系譜」（『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』、勉誠出版、二〇一〇年）。

<sup>9</sup> 速水侑『日本仏教史(古代)』（吉川弘文館、一九八六年、四四〜四七頁）。

<sup>10</sup> 伊藤義教『ヘルシア文化渡来考』（岩波書店、一九八〇年）。

門脇禎二「飛鳥開眼―歴史(一)」（『飛鳥―古代への旅』（別冊太陽）、平凡社、二〇〇五年）。

西本昌弘「飛鳥に來た西域の吐火羅人」（『東西学術研究所紀要』四三、関西大学、二〇一〇年）。

<sup>11</sup> もちろん、飛鳥寺の三金堂が南北朝など中国の仏教寺院にすでに存在した可能性を否定したのではない。後述するように百済では中国南北

朝時代の寺院と高句麗寺院の影響を共に受けたためである。しかし、飛鳥寺の三金堂という要素が中国や高句麗などにすでにプロトタイプがあったとしても、それは必ず百済を媒介にして日本に伝播したものと考えている。

<sup>12</sup> 扶余地域から発見される高句麗系土器の出土地と編年については次の論考を参考にした。

金容民「百済泗泚期土器に対する一考察―扶蘇山城出土土器を中心に」（『文化財』三二、一九九八年）。

朴永民「百済泗泚期遺跡出土高句麗系土器」（『二〇〇二年報』、国立扶余文化財研究所、二〇〇二年）。

金鍾萬『百済土器の新研究』（書景文化社、二〇〇七年）。

土田純子「泗泚様式土器に見られる高句麗土器の影響に対する検討」（『韓国考古学報』七二、二〇一〇年）。

<sup>13</sup> 土田純子「泗泚様式土器に見られる高句麗土器の影響に対する検討」（上掲誌、一四一頁）。

<sup>14</sup> 泗泚時期に出現する新器種は中国製金属器や陶磁器を模倣する系統と高句麗土器の技術的・形態的影響を受けた系統に大きく分けることができる。山本孝文「百済泗泚時期土器様式の成立と展開」（『百済泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年、一五三～一五七頁）。

<sup>15</sup> 梁時恩「南韓で確認される高句麗の時・空間的正体性」（『考古学』一〇巻二号、中部考古学会、二〇一一年、一二〇～一二三頁）。

<sup>16</sup> 朴淳発「高句麗と百済・泗泚様式百済土器の形成背景を中心に」（『高句麗と東アジア』、国際学術シンポジウム、高麗大博物館、二〇〇五年、三五頁）および土田純子「泗泚様式土器に見られる高句麗土器の影響に対する検討」（前掲誌、一四二～一四七頁）。

<sup>17</sup> 金容民「百済の煙家について」（『文化財』三五、二〇〇二年）。

金圭東「百済土製煙筒試論」（『科技考古研究』八、二〇〇二年）。

崔榮柱「三国時代土製煙筒研究―韓半島と日本列島を中心に」（『湖南考古学報』三二、二〇〇九年）。

<sup>18</sup> 柳基正「泗泚期オンドル施設建物址に対する一考察」（『国立公州博物館紀要』三、二〇〇三年、一六八～一七〇頁）。

<sup>19</sup> (財)百済文化開発研究院『百済瓦博図録』（一九八三年、一九九頁の図版三九〇（双北里）、三九一（扶余初等学校西側）、三九二（龍寇里）、

二〇〇頁の図版三九三(双北里扶余初等学校敷地)および国立扶余博物館『百済瓦博』(二〇一〇年、一九〇頁の図四九三(龍井里寺址)などがこれに属する。

<sup>20</sup> 国立扶余博物館『百済瓦博』(前掲書、九四頁の図一七二(官北里)、一八九頁の図四八九〜四九二(龍井里寺址)などがこれに属する。このグループの場合、接合技法が既存の百済瓦当に見られるものと異なるため、高句麗系瓦当とした。一方、扶余双北里と龍井里寺址の瓦当を高句麗の平壤土城里や清岩里寺址で出土する瓦当と関連するという指摘が最近提起されており参考となる(鄭治泳「百済・高句麗と魏晋南北朝の製瓦術比較研究」(『中央考古研究』八、二〇一一年、一三七頁)。

<sup>21</sup> 高句麗系瓦当の製作技術に関する用語および特徴については次の論考を参考にした。吉井秀夫・崔英姫「京都大学総合博物館所蔵山田鈿次郎寄贈高句麗瓦の検討」(『日本所在高句麗遺物』)、東北歴史財団、二〇〇九年、一〇二〜一〇六頁)。

<sup>22</sup> 趙源昌はBグループを五世紀末から六世紀初め、Aグループを六世紀第3四半期に編年し、亀田修一はAグループを百済が漢江流域を一時的に占領した六世紀中半に、李タウンはA・Bグループとも龍井里寺址下層金堂址に使用されたものとみて、五三八年の遷都以後である六世紀第2四半期と推定している。

李タウン「百済の瓦生産―熊津時代・泗泚時代を中心として」(『韓半島考古学論叢』、西谷正編、二〇〇二年)。

趙源昌「百済熊津期龍井里下層寺院の性格」(『韓国上古史学報』四二、二〇〇三年)。

亀田修一「熊津・泗泚時代の瓦」(『日韓古代瓦の研究』、吉川弘文館、二〇〇六年)。

趙源昌「熊津く泗泚期瓦当からみた高句麗製瓦術の百済への伝播」(『白山学報』八一、二〇〇八年)。

<sup>23</sup> 一方、軍守里寺址の指頭文軒平瓦は高句麗集安地域から発見される波文軒平瓦と類似するが、中間に細い線がある点は洛陽永寧寺出土品に  
<sup>24</sup> より近い。その系統については今後さらなる検討が必要である。

趙源昌「百済二重基壇築造術の日本飛鳥寺への伝播」(『百済研究』三五、二〇〇二年)。

清水重敦・山下秀樹「古代寺院建築における特異な基壇、平面とその構造」(『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』、二〇〇九年)。

裴秉宣「扶余地域百済建物址の構造」(『定林寺―歴史文化的価値と研究現況』、国立文化財研究所、二〇〇八年)。

<sup>25</sup> このような見解は発掘終了直後から提示されたものである。浅野清「飛鳥寺の建築」(『仏教芸術』三三、一九五八年、一六〇―一七頁)。

<sup>26</sup> その機能と関連して、日本の大阪四天王寺の講堂と関連した記録が注目されるが、この点については後述することにしよう。

<sup>27</sup> 両国の衝突地点は大きく二つの地域に分けられるが、ひとつは漢江から礼成江流域一帯と忠清北道一帯である。時期的には四九五―五二九年の間には漢江―礼成江流域で、五四〇―五五〇年の間には忠北一帯で戦闘が繰り広げられた。この場合、後者については疑問は無いが、前者の場合、温祚王―多婁王代や肖古王―古爾王代の靺鞨関係記事に登場する地名と同じであることから、『三国史記』百済本紀を信頼できないという立場と、史料の存在を信頼して、武寧王代に一時的に漢城一帯を回したことを物語るものと理解する、武寧王代に一時的に漢城一帯を回したことを物語るものと理解する場に分けられる。研究史的整理と主要論旨については次の論考が参考となる。

林起煥「熊津時期百済と高句麗対外関係記事の再検討」(『百済文化』三七、二〇〇八年)。

金賢淑「高句麗の漢江流域領有と支配」(『百済研究』五〇、二〇〇九年)。

<sup>28</sup> 朴淳発「高句麗と百済」(前掲書、三八頁)では高句麗との戦闘から回復した旧百済住民たちを未開発地域である扶余地域に移住させ、低湿地の開発とともに新都造営の準備を進めたとする。

<sup>29</sup> 下令完固堤防、驅内外遊食者歸農。(『三国史記』百済本紀 武寧王 一〇年条)

<sup>30</sup> 金吉植「百済始祖仇台廟と陵山里寺址」(『韓国考古学報』六九、二〇〇八年、六二―六三頁)。金吉植はこのような金工品を六世紀前半に編年している。しかし、これらの遺物は全て工房址一の廃棄段階の遺物であるため、七世紀前半以後に廃棄されたものと考えなければならず、製作時期または寺院の創建時期である六世紀中後半と見なければならぬだろう。

<sup>31</sup> 田中俊明・東潮「扶余の古墳」(『韓国の古代遺跡―百済・伽耶編』、中央公論社、一九八九年、一二九―一三〇頁)。

安輝濬「百済の絵画」(『百済の美術』、百済文化史大系一四、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇七年、四二―四三五頁)。

<sup>32</sup> 吉井秀夫「百済地域における横穴式石室分類の再検討」(『考古学雑誌』七九、一九九三年、八六―八八頁)。

吉井秀夫『古代朝鮮墳墓にみる国家形成』（京都大学学術出版会、二〇一〇年、二〇〇～二〇二頁）。

<sup>3</sup>3 もしろん、陵山里寺址のように古墳と関連する願刹が築造されたことを高句麗のみの影響と考えることはできない。筆者は南朝から派遣された毛詩博士陸詡や梁武帝の孝に対する実践の姿をみると、南朝の影響もあつたことを指摘した（本稿の第三章第三節参照）。陵山里寺址の造営に高句麗の影響を過度に考慮することは問題がある。しかし、その内部で一棟二室建物址やオンドル、高句麗系統の金工品、土器類などが発見されることを勘案すると、高句麗の影響があつたこともまた否定しがたい。

<sup>3</sup>4 山本孝文「百済泗泚期石室墳の階層性と政治制度」（『韓国考古学報』四七、二〇〇二年）。

<sup>3</sup>5 東下塚壁画には真坡里一号墳など高句麗の影響もあるが、南朝の線刻塼画の影響も見られるという。特に蓮華文の表現は一定の百済化がなされたものとする見解がある。全虎兌「伽倻古墳壁画に関する一考察」（『韓国古代史論叢』四、一九九二年、一八六～一八九頁）。

<sup>3</sup>6 佐川正敏「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置、木塔心礎施設、舍利奉安形式の系譜」（『古代東アジアの仏教と王権』、二〇一〇年、一六四頁）。

<sup>3</sup>7 国立扶余文化財研究所「扶余王興寺址―第一〇次発掘調査」（『二〇〇九百済文化を探して』、二〇一〇年、三三～三四頁）。

<sup>3</sup>8 国立扶余文化財研究所「扶余王興寺址第一―三次発掘調査諮問委員会議資料」（油印物、二〇一二年）。

<sup>3</sup>9 国立扶余文化財研究所「扶余王興寺址―第二次発掘調査」（『二〇一〇百済文化を探して』、二〇一二年、二九～三一頁）。

<sup>4</sup>0 国立扶余文化財研究所『扶余軍守里寺址―木塔址、金堂址発掘調査報告書』（二〇一〇年、八一～八二頁）。

<sup>4</sup>1 石田茂作「扶余軍守里廢寺址発掘調査（概報）」（『昭和十一年度古蹟調査報告』、一九三七年、図版五一・五二）。

<sup>4</sup>2 図六一九―一の中央基壇（金堂址）と東方基壇、東北基壇の間の花崗岩石列を寺院とは関連の無い遺構とみる場合もある（趙源昌「百済軍守里寺址の築造技法と造営主体の検討」（『韓国古代史研究』五一、二〇〇八年、一七四～一七五頁））。しかし、西回廊址北端から西堂建物址が確認されるため、この石列も東堂建物址と関連するものと見なければならぬだろう。

<sup>4</sup>3 筆者は王興寺址の東西外郭建物址を、弥勒寺址の東院と西院の金堂のように把握できるといふ見解を提起したが（李炳鎬「百済寺院からみた飛鳥寺三金堂の源流」（『文化財の解析と保存の新しいアプローチⅩ』、二〇一二年）、西側外郭建物址が南北に細長い形態をなしてい

るといふ最近の発掘進行状況を知った。したがって本稿のように見解を修正することになったことを明記しておく。

<sup>44</sup> 弥勒寺址の三院式伽藍配置が仁寿二年(六〇二)に建立された永泰寺の伽藍配置と非常に類似するという指摘がある(宿白「隋代仏寺布局」『考古与文物』二期、一九九七年、二八頁)。後述するように弥勒寺址の三院式伽藍配置にも隋唐代に盛行した多院式寺院の影響があったと見なければならぬだろう。

<sup>45</sup> 一方、扶余陵山里寺址の西回廊西側一帯でも大型の石築基壇と建物址が確認され、その北西側から長方形の掘立柱建物や僧房のような建物址が検出された(国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址六一八次発掘調査報告書』(前掲書、六九―七四頁)。このことから、王興寺址の西側一帯で確認される基壇と石列は、僧院を構成する施設であったと推定できようである。

<sup>46</sup> インドの寺院にみられる僧侶の集団生活や修行のための空間である僧院や魏書釈老志の三九八年平城に建立された仏寺の僧侶のための空間である「講堂禅堂及沙門座」の禅堂や沙門座のようなものが注目される。一方、上原真人は古代寺院の伽藍配置を僧地と仏地に区別して説明しているが、その際に釈老志の記録を重要視して引用しており参考となる。上原真人「仏教」(『岩波講座日本考古学四―集落と祭祀』、岩波書店、一九八六年、三一三―三一四頁)。

<sup>47</sup> 河利群「北朝および隋唐代寺院の考古学的考察―塔・殿・院の関係変化を中心に」(『東アジア古代寺址比較研究Ⅱ―金堂址編』、国立扶余文化財研究所、二〇一〇年)。

<sup>48</sup> 中国社会科学院考古所西安唐城隊「唐長安青龍寺遺址」(『考古学報』二期、一九八九年)。一方、青龍寺の前身は五八二年に創建された靈感寺で、西院の前塔後殿式建築址がそれに該当するという(宿白「隋代仏寺布局」(前掲誌、二九―三〇頁))。

<sup>49</sup> 中国社会科学院考古研究所 西安唐城工作隊「唐長安西明寺遺址発掘簡報」(『考古』一期、一九九〇年)。  
安家瑤「唐長安西明寺遺址的考古発現」(『唐研究』六、二〇〇〇年)。

<sup>50</sup> 蘇黙「莫高窟壁画にみえる寺院建築」(『中国石窟敦煌莫高窟』四、平凡社、一九九三年、二〇四―二〇五頁)。

<sup>51</sup> 浮図北有仏殿一所、形如太極殿。(『洛陽伽藍記』卷一永寧寺条)



<sup>5</sup><sub>2</sub> 王仲殊「中国古代宮内正殿太極殿的建置及其与党東亜諸国的關係」(『考古』一二期、二〇〇三年、七八〜八二頁)。

<sup>5</sup><sub>3</sub> 中国古代都城の太極殿・東西二堂型式の機能と変化過程については次の論考が参考となる。

吉田敏「隋唐長安宮城中枢部の成立過程」(『古代文化』四九冊一号、一九九七年)。

<sup>5</sup><sub>4</sub> 高句麗の安鶴宮南宮でも東西に付属建物(二・三号宮殿)が配置されている。したがって、太極殿・東西二堂型式は高句麗にも影響を与えた可能性があり、さらに皇龍寺重建伽藍の中金堂と東西金堂も高句麗に淵源するという見解がある(梁正錫「高句麗安鶴宮南宮正殿廓の宮闕構造」(『韓国古代正殿の系譜と都城制』、書景、二〇〇八年、四三〜五〇頁)。しかし、安鶴宮遺跡の造宮時期については議論が多いため、この学説に受け入れることは難しい状況である。

<sup>5</sup><sub>5</sub> 中院之去大門、連表七里。廊廡相架檐霽臨屬、旁置三十六院。皆設池台周宇環繞。(道宣撰、『統高僧伝』卷一宝唱伝、T五〇、No. 二〇六〇・四二七頁上)。

<sup>5</sup><sub>6</sub> 梁銀景「中国仏教寺刹の検討を通してみた百済泗泚期仏教寺刹の諸問題」(『百済研究』五〇、二〇〇九年、一六三〜一六四頁)。

<sup>5</sup><sub>7</sub> このため一塔三金堂のプロトタイプが南朝で成立し、それが北朝へ伝播したと把握する見解が提起されている。大橋一章「古代文化史のなかの飛鳥寺」(『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』、勉誠出版、二〇一〇年、三三二頁)。

<sup>5</sup><sub>8</sub> 朱岩石「南北朝寺院遺跡と出土遺物」(『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』、勉誠出版、二〇一〇年)。  
中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古隊「河北臨漳縣鄴城遺址趙彭城北朝仏寺遺址的勘查与発掘」(『考古』七期、二〇一〇年)。

<sup>5</sup><sub>9</sub> 大脇潔「飛鳥・藤原京の寺院」(『飛鳥から藤原京へ』、古代の都一、二〇一〇年、二〇〇頁)。大脇潔は飛鳥寺三金堂の源流を中国の伝統的な住宅形式である四合院から求めることができるとしたが、中国で図六一四のような寺院がすでに出現していることから飛鳥寺の源流もそれ以後の文化伝播過程の中から摸索しなければならないものと考えられる。

<sup>6</sup><sub>0</sub> 周旻美「百済仏教金属工芸の様相と特徴」(『人文社会科学研究』一〇巻一号、釜慶大、二〇〇九年、一八〜二〇頁)。

金容民「益山王宮城の造営と空間区画に対する考察」（『古代都市と王権』、忠南大百済研究所、二〇〇五年）。

61 小泉顕夫「平壤清岩里廢寺址の調査」（『昭和十三年度古蹟調査報告』、一九四〇年、図版九・一〇）。

62 米田美代治「朝鮮上代の建築と伽藍配置に及ぼせる天文思想の影響」（『建築学会論文集』二二、一九四一年）…『朝鮮上代建築の研究』（秋田屋、一九四四年、一三八頁）。

63 小泉顕夫「高句麗清岩里廢寺跡の調査」（『仏教芸術』三三、一九五八年、八四頁）。

63 米田美代治『朝鮮上代建築の研究』（前掲書、一三七頁）。

64 このような南北回廊はたとえ時期的な問題はあるものの平壤安鶴宮遺跡と慶州城東洞殿廊址でも確認されているため、宮闕建築と関連するものと考える余地がある。

65 崔鉉植「三国時代弥勒信仰と来世意識」（『講座韓国古代史Ⅷ—古代人の精神世界』、二〇〇二年、二五七～二六二頁）。

66 吉基泰「水源寺弥勒信仰の性格」（『百済文化』三六、二〇〇七年、七～一六頁）。

66 崔鉉植「百済後期弥勒思想の展開過程と特性」（『韓国思想史学』三七、二〇一一年、五～九頁）。

67 この点を見ても中国の南北朝時代の仏教や仏教造像を南朝的なものや北朝的なものに区分して断絶的に把握するには問題があることが分かる。

68 王興寺址の舍利奉安過程を通して、王興寺が弥勒信仰と関連した可能性を言及した論考があり参考となる。

69 吉基泰「王興寺址舍利函銘文を通してみた百済仏教」（『韓国史市民講座』四四、二〇〇九年、一五五～一五九頁）。

69 金正基「皇龍寺伽藍変遷に関する考察」（『皇龍寺』、一九八四年、三七～三七八頁）。

70 梁正錫「皇龍寺伽藍変遷過程に対する再検討」（『韓国古代史研究』二四、二〇〇一年、二二七～二二〇頁）では皇龍寺址重建金堂址と西金堂址の間に存在していた原西回廊址から一次中金堂址だけでなく西金堂址と連結する翼廊の痕跡が検出されたことに注目して、東・西金堂址も創建伽藍段階からあったという新たな見解を提示しながら、このような三金堂の配置形式は百済軍守里寺址や弥勒寺址と通ずるとし

た。さらに皇龍寺址の重建伽藍と木塔は弥勒寺址の三院式伽藍配置と木塔の影響を受けて成立した可能性を提起している(梁正錫「新羅皇龍寺九層木塔の造成に関する比較史的検討」(『東北学院大学論集：歴史と文化』四〇、二〇〇六年、一二二〇～一二六頁)。

<sup>71</sup> 趙源昌「皇龍寺重建伽藍金堂址基壇築造術の系統」(『文化史学』三二、二〇〇九年、五三～五五頁)。

<sup>72</sup> 趙源昌「皇龍寺重建期瓦当からみた新羅の対南朝交渉」(『韓国上古史学報』五二、二〇〇六年)。

清水昭博「古新羅瓦の溯源に関する検討」(前掲書)。

<sup>73</sup> 趙源昌「皇龍寺重建期瓦当からみた新羅の対南朝交渉」(前掲誌、三八～四一頁)。

<sup>74</sup> ただし、皇龍寺址重建伽藍の三金堂について中国南北朝時代の太極殿と東西両堂の影響と推定した見解も提起されており共に参考となる。

梁正錫「新羅における太極殿と東西堂」(『韓国古代正殿の系譜と都城制』、二〇〇八年、六四～七〇頁)。

<sup>75</sup> 佐川正敏「日本古代木塔基壇の構築技法と地下式心礎、およびその東アジア的考察」(『東北学院大学論集：歴史と文化』四〇、東北学院大学学術研究会、二〇〇六年)。

佐川正敏「日本古代木塔基壇の構築技術復原と心礎設置形式の変遷に関する研究」(『百済研究』四四、二〇〇六年)。

佐川正敏「飛鳥寺木塔心礎考」(『坪井清足先生卒寿記念論文集』、坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、二〇一〇年)。

大橋一章の場合、王興寺址とともに旧衙里寺址の心礎石との関連性にも注目している(大橋一章「六世紀後半の百済寺院の舍利安置について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五六、二〇一〇年)。

<sup>76</sup> 李基白「皇龍寺とその創建」(『新羅思想史研究』、一潮閣、一九八六年)。

<sup>77</sup> 李康根「芬皇寺の伽藍配置と三金堂形式」(『芬皇寺の諸照明』、新羅文化祭学術発表会論文集二〇、一九九九年)。

<sup>78</sup> 延敏洙「古代韓日外交史—三国と倭を中心に」(『韓国古代史研究』二七、二〇〇二年、一二二頁)。

<sup>79</sup> 井上直樹「六世紀末から七世紀半ばの東アジア情勢と高句麗の対倭外交」(『朝鮮学報』一二二、二〇一一年、三八頁の脚注八)。一方、井上直樹は五九五年の高句麗の対倭交渉再開について、隋の登場と関係悪化によって倭との結束を強化して新羅や百済を牽制するため慧慈

を倭に派遣したと考えた。

80 坪井清足「飛鳥寺創建諸説の検討」(『文化財論叢』、奈良文化財研究所創立三〇周年記念論文集、一九八二年、一七四〜一七五頁)。

81 元年正月。蘇我大臣馬子宿禰依合戦願。於飛鳥地建法興寺。立刹柱日。島大臣并百余人、皆着百済服。觀者悉悅、以仏舍利籠置刹柱礎中。

(『扶桑略記』 推古天皇条)

82 中国では国家的な造営事業に関与した官署として少府と将作大匠があつた。その中で将作大匠は「有事即置無事即罷」する臨時的性格の機

構であつた(向井佑介「魏の洛陽城建設と文字瓦」(『待兼山考古学論集』、大阪大学考古学研究室編、二〇一〇年、七二〜七三頁)。

百済で飛鳥寺を建立するため臨時に組織されたプロジェクトチームもこのような性格の組織ではなかつたかと推定される。

83 上原真人「寺院造営と生産」(前掲書、九〇〜九一頁)。

84 稲木吉一「上代造形史における「様」の考察」(『仏教芸術』一七一、一九八七年、一一八〜一一九頁)。

85 浅野清「飛鳥寺の建築」(『仏教芸術』三三三、一九五八年、一六〜一七頁)。

86 大橋一章『飛鳥の文明開化』(吉川弘文館、一九九七年、一三七〜一四六頁)。

87 飛鳥寺の発源者の意図について、寺院造営のプランや技術を韓半島の三國から習うことで国際色が豊かな大伽藍を出現させ、その偉容を内外に誇示しようとしたものであつたと見る場合もある。

加藤謙吉「蘇我氏と飛鳥寺」(『古代を考える―古代寺院』、吉川弘文館、一九九九年)、三六〜三八頁。

88 曾根正人「日本仏教の黎明」(『日本の時代史三―倭國から日本へ』、吉川弘文館、二〇〇二年、一七四〜一八四頁)。

89 李成市「高句麗と日隋外交」(『古代東アジアの民族と國家』、一九九八年、二九〇〜二九三頁)。

井上直樹「五七〇年代の高句麗の対倭外交について」(『年報朝鮮学』一一、九州大学朝鮮学研究会、二〇〇八年、一七〜二〇頁)。

李成制「五七〇年代高句麗の対倭交渉とその意味」(『韓国古代史探究』二、韓国古代史探究学会、二〇〇九年、六〇〜六八頁)。

90 金恩淑「六世紀後半の新羅と倭國の國交成立過程」(『新羅文化祭学術発表論文集』一五、一九九四年)。一方、金恩淑は百済と倭が五五

年以降五七四年まで外交的な交渉が断絶した理由について、新羅の加耶占領によって両国を往来できる安全な交通路を喪失したことを挙げている。

<sup>91</sup> これは当時の新羅が倭に自国の沿岸を航海して百済に行けるよう許可し、百済から文物を受け入れる文化的な目的に制限したためと考えている(金恩淑「六世紀後半の新羅と倭国の国交成立過程」(『新羅文化祭学術発表論文集』一五、一九九四年、二一九〜二二〇頁)。および金恩淑「倭国との関係」(『韓国史』七、国史編纂委員会、一九九七年、一四七頁)。もちろん、このような状況について、倭の支配層は百済をはじめとした対外交流において新羅の統制を受けた状況を不便に考えたのであろう。欽明(五七一年)、敏達(五七五・五八三・五八五年)、崇峻(五九一年)など倭王が「打新羅、建任那」する意思を表明していることから、このことを推測できるとした。

<sup>92</sup> 金子修一「東アジアの国際情勢と遣隋使」(『遣隋使がみた風景』、気賀澤保規編、八木書店、二〇一二年、六一〜六三頁)。

<sup>93</sup> 新羅興輪寺と日本飛鳥寺の創建瓦の成立過程が持つ類似性については、第五章で説明しており、その仏教受容過程の類似性については次の論考でも指摘されている。

田中央生「百済王興寺と飛鳥寺と渡来人」(『東アジアの古代文化』一三六、二〇〇八年、一二四〜一二五頁)。

<sup>94</sup> 大橋一章『飛鳥の文明開化』(前掲書、二二〇〜二二二頁)。

<sup>95</sup> 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所、一九五八年、四三〜四四頁)。

<sup>96</sup> (上掲書、三四頁)。

<sup>97</sup> 光森正士「古代寺院の礼拝空間についての試論―三金堂・二金堂の存在に対する疑問」(『龍谷史壇』九三・九四合集、一九九八年)・『仏教美術論考』、法蔵館、一九九八年)。

<sup>98</sup> 『日本書紀』には「仏堂与歩廊」と記録されたものが『元興寺縁起』の本文では「金堂礼仏堂」と記録されている。水野柳太郎は「礼仏堂」が後に付加されたものでありうるが、一塔三金堂の伽藍配置を暗示するのではないかという見解を提起している。

水野柳太郎、一九九三「日本書紀と元興寺縁起の対比」『日本古代の寺院と史料』、吉川弘文館、五三〜五四頁。

9 森郁夫『日本古代寺院造営の研究』（法政大学出版社、一九九八年）。

花谷浩「京内廿四寺について」（『研究論集』Ⅹ、奈良文化財研究所、二〇〇〇年）。

花谷浩「豊浦寺の伽藍配置について」（『古代瓦研究』Ⅰ、奈良文化財研究所、二〇〇〇年）。

平松良雄「明日香における古代寺院の調査と遺物」（『続明日香村史』、上巻考古編、二〇〇六年）。

100 金正基「韓国から見た日本古代寺院跡」（『仏教芸術』二〇九、一九九三年、一九頁）。

101 石田茂作「百済寺院と法隆寺」（『朝鮮学報』五、一九五三年）…『法隆寺雑記帖』（学生社、一九六九年）。

斎藤忠「扶余軍守里廢寺跡に見られる伽藍配置とその源流」（『百済文化と飛鳥文化』、吉川弘文館、一九七八年）。

102 当時の官学者たちは百済寺院が四天王寺式伽藍配置と同じという点とともに出土遺物が飛鳥文化と類似する点のみを強調した。これはあくまでも他者の視角であり問題がある（李炳鎬「植民地期における扶余地域の寺址調査に対する再検討」（『奈良美術研究』一一、二〇〇一年））。

103 これについて恩山金剛寺址に北回廊があるという前提の下、四天王寺の回廊の建立が遅かったり、若草伽藍で回廊跡が検出されなかったことと関連があるのではないかという推定があつた（島田敏男「寺院建築のはじまり」（『日本の時代史三―倭国から日本へ』、吉川弘文館、二〇〇二年、二六二頁））。しかし、第四章第一節で検討したように恩山金剛寺址の北回廊は後代のものと見なければならぬだろう。

104 石田茂作「法隆寺若草伽藍址の発掘」（『性相』特別号、「日本上代文化の研究」、一九四二年…『法隆寺雑記帖』（前掲書）。

花谷浩「豊浦寺の伽藍配置について」（『古代瓦研究』Ⅰ、二〇〇〇年）。

奈良文化財研究所『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』（二〇〇七年）。

105 この部分は第一六回古代寺院研究会（二〇一一年五月一五日）で綱伸也の発表文で最初に指摘された（綱伸也「四天王寺伽藍とその出土瓦」、第一六回古代寺院研究会発表文、二〇一一年）。

106 文化財保護委員会『四天王寺』（一九六七年、図五七および図六一）。

107 講法堂一宇、瓦葺八間、夏堂四間、金色阿弥陀仏像一軀丈六、冬堂四間、色観音像一体丈六。（『四天王寺御手印縁起』）

一方、発掘担当者は講堂の中央で東側と西側を区分する柱穴が南北に配列されたものが確認されたとしたが（藤島亥治郎『古寺再現』（学生社、一九六七年、五三〜五四頁））、最終発掘報告書では西側区域全体で柱穴が確認されており、釈然としない点がある（文化財保護委員会『四天王寺』（前掲書、一九六頁の図八八））。

108 ただ、陵山里寺址の講堂址と東西側の建物は祠廟や祠堂といった機能を担ったものと推定している（本稿の第三章第三節参照）。

109 文化財保護委員会『四天王寺』（前掲書、図五〇および図五一）。

110 綱伸也「四天王寺出土瓦の再検討」（『ヒストリア』一四〇、一九九五年）。

綱伸也「四天王寺出土瓦の編年的考察」（『堅田直先生古稀記念論文集』、真陽社、一九九七年）。

111 澤村仁「難波京と四天王寺その他一二の問題について」（『難波宮址研究』七、論考編、一九八一年）。

112 藤澤一夫「新堂廃寺の性格」（『河内新堂・烏含寺の調査』、一九六一年）。

113 栗田熏「お亀石古墳の築造年代―新堂廃寺出土平瓦との比較をとおして」（『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』、二〇〇二年）。

114 小濱成「河内新堂廃寺の伽藍配置に関する一考察」（『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』、二〇〇二年）。

富田林市教育委員会『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』（二〇〇三年）。

115 栗田熏「新堂廃寺の創建年代」（『志学台考古』七、大阪大谷大学文化財学科、二〇〇七年）。

116 太田博太郎「南都六宗寺院の建築構成」（『法隆寺と斑鳩の古寺』、日本古寺美術全集二、集英社、一九七九年）。

上原真人「仏教」（前掲書、一九八六年）。

117 是歳、始作五級仏図、耆闍崛山及須弥山殿、加以續飾。別構講堂禪堂及沙門座、莫不嚴具焉。（『魏書』 积老志）

118 八世紀中半に製作された額田寺伽藍並条里図の図面と記載内容に関する分析でも僧房が伽藍中心部に位置している事例が確認されている。

山口英男「大和額田寺伽藍並條里図」（『日本古代莊園図』、東京大学出版会、二〇〇一年）。

服部伊久男「古代莊園図からみた氏寺の構造と景観」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八八、二〇〇一年)。

<sup>1</sup><sup>19</sup> 仏教の分類基準は仏・法・僧の三宝である。資財帳でも基本的に三宝をもとに分類され、奈良時代では安置場所の如何にかかわらず仏像が仏物、経典が法物、常住僧および聖僧が僧物に分類された。したがって、上原氏の分類は「法」という概念が欠落しているという批判も共に参考する必要がある。

川尻秋生「資財帳からみた伽藍と大衆院・政所」(『古代』一一〇、二〇〇二年、一三三～一三七頁)。

<sup>1</sup><sup>20</sup> 綱伸也「景観の見地からの伽藍配置」(『考古学ジャーナル』五四五、二〇〇六年、一一頁)。

<sup>1</sup><sup>21</sup> 飛鳥寺の創建瓦は瓦当の文様と製作技術、連結した丸瓦の型式などによって大きく花組系列と星組系列の瓦当に分けることができる(図六  
一一一参照)。これに関する主要な研究成果として次の論考が参考となる。

菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人動向」(『史林』六九三、一九八六年)。

大脇潔「飛鳥時代初期の同範軒丸瓦」(『古代』九七、一九九六年)。

花谷浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」(『考古学研究』四〇一、一九九三年)。

花谷浩「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」(前掲誌)。

上原真人「初期瓦生産と屯倉制」(『京都大学文学部研究紀要』四二、二〇〇三年)。

納谷守幸「軒丸瓦製作手法の変遷」(『明日香村文化再調査研究紀要』四、二〇〇四年)。

<sup>1</sup><sup>22</sup> 亀田修一「百済軒丸瓦の製作技法」(『古代瓦研究』一、二〇〇〇年)・『日韓古代瓦の研究』(前掲書、一〇五～一〇六頁)。

<sup>1</sup><sup>23</sup> 李タウン「百済の瓦からみた飛鳥時代初期の瓦について」(『飛鳥・白鳳の瓦と土器―年代論』一一、帝塚山大学、一九九九年)。

李タウン「百済瓦博士考」(『湖南考古学報』二〇、二〇〇四年)。

<sup>1</sup><sup>24</sup> 清水昭博「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開」(『日本考古学』一七、二〇〇四年)・『古代日韓造瓦技術の交流史』(清文堂、二〇  
一二年)。



- 125 清水昭博「瓦の伝来―百済と日本の初期瓦生産体制の比較」(『考古学論攷』二七、二〇〇四年)・『古代日韓造瓦技術の交流史』(前掲書)。
- 126 上原真人「初期瓦生産と屯倉制」(前掲誌、七頁)。
- 127 尹武炳『定林寺』(忠南大博物館、一九八一年、三三三〜三六頁)。
- 国立扶余博物館『百済瓦博』(前掲書、二〇四〜二二三頁)。
- 128 国立扶余文化財研究所『扶余定林寺址発掘調査報告書』(二〇一一年、三二三〜三三三頁)。
- 発掘報告書にはないが、国立扶余博物館『百済瓦博』(前掲書、二〇八頁の図五三二(3型式)や二二一頁の図五四二(4型式))も時期的に古いため、創建瓦に属するものと考えられる。
- 129 亀田修一「百済古瓦考」(『百済研究』一一、一九八一年)・『日韓古代瓦の研究』(前掲書、五九頁)。
- 130 金誠亀「扶余の百済窯址と出土遺物について」(『百済研究』二二、一九九一年、二二五頁)。
- 131 賀云翱「南朝瓦総論」(『古代東アジアの造瓦技術』、奈良文化財研究所、二〇一〇年)。
- 132 南京市文物研究所・南京栖霞区文化局「南京梁南平王蕭偉墓闕発掘簡報」(『文物』七期、二〇〇二年)。百済・新羅の瓦当と建康地区第二期(中期)の蓮華文瓦当の類似性はすでに指摘されている(賀云翱、二〇〇五『六朝瓦当与六朝都城』、文物出版社、五七頁)。
- 133 本稿の第三章第二節参照。ただ、5型式を創建瓦と理解する場合、初期から亭岩里窯址からも瓦を供給されたと見ることができらるだろう。
- 134 清水昭博「軍守里廢寺出土軒丸瓦の検討」(『MUSEUM』五九六、二〇〇六年)・『古代日韓造瓦技術の交流史』(前掲書)。
- 国立扶余文化財研究所『扶余軍守里寺址―木塔址・金堂址発掘調査報告書』(二〇一〇年)。
- 国立扶余文化財研究所『百済泗泚期瓦研究Ⅱ』(二〇一〇年)。
- 135 清水昭博「百済泗泚時代の瓦生産―扶余亭岩里窯の検討」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅹ、二〇〇八年、一〇〇頁)・『古代日韓造瓦技術の交流史』(前掲書)。
- 136 金鍾萬「泗泚時代瓦にあらわれた社会相小考」(『国立公州博物館紀要』二一、二〇〇二年、一七六頁)。

137 清水昭博「百済泗泚時代の瓦生産」(前掲誌、一〇七頁)。

138 崔卿煥「錦江流域百済土器窯址の構造と生産体制に対する一研究」(『韓国考古学報』七六、二〇一〇年、八四〜八六頁)。

139 百済の場合、官寺や僧官の設置に関する記録はないが、日本の僧官設置の契機となった上表文の作成者が百済の僧観勒であり、僧正・僧都の名称が南朝にのみ見られるため、その影響を色濃く受けた百済仏教にもそのような制度があったと考えられる。

井上光貞「日本における仏教統制機関の確立過程」(『井上光貞著作集一』、岩波書店、一九八五年、一四三頁及び三三三〜三三四頁)。

140 国立扶余文化財研究所『王興寺址Ⅱ―瓦窯址発掘調査報告書』(二〇〇七年)。

国立扶余文化財研究所『百済泗泚期瓦研究Ⅲ』(二〇一一年)。

国立扶余文化財研究所「扶余王興寺址―第一二次発掘調査」(『二〇一―百済文化を探して』、二〇一二年)。

141 1型式は寺域内部で発見された一七六点の瓦当中、五一点を占める。1型式は講堂址などではほとんど出土しない反面、3型式はほぼ全ての建物址で出土していることから1型式が3型式より若干先に製作・使用されたものと推定されている。

142 朴原志「王興寺出土軒丸瓦の製作技術と系統」(『百済泗泚期瓦研究Ⅲ』、国立扶余文化財研究所、二〇一一年、八二頁)。

142 いわゆる大通寺式瓦当に属する5型式と6型式は一七六点中、五一点および五一点に過ぎず、泗泚期の他の遺跡で同范品が確認されていることから王興寺址では創建瓦として使用されたというよりは、創建より一段階新しい補修用瓦当と考えられる。

文玉賢「百済王興寺の瓦供給に対する一考察」(『韓国伝統文化研究』九、二〇一一年、三二〜三三頁)。

143 朴原志「王興寺出土軒丸瓦の製作技術と系統」(前掲書、九二頁)。ただ、王興寺址の五号窯址ではハート形蓮弁の1型式瓦当と無段式丸瓦、円形突起式蓮弁の3型式瓦当と有段式丸瓦とともに発見されており、このような文様と丸瓦の組合せが絶対的なものではなかったものと考えられる。

144 佐川正敏「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎施設・舍利奉安形式の系譜」(前掲書、一八〇頁)でその可能性を最初に指摘している。

145 亀田修一『日韓古代瓦の研究』(前掲書、一五五〜一五六頁)および清水昭博「瓦の伝来」(前掲誌、一八八頁)。

146 王興寺址以前にも軍守里寺址や陵山里寺址、定林寺址で創建瓦の生産に二つ以上のグループで構成された造瓦組織が活動していたことが確認されるが、文様のみならず瓦当と連結する丸瓦の型式、接合手法などを系列化できる事例はここが初めてである。

147 造寺官という用語は「造飛鳥寺官」という造語を参照したものである。吉川真司「飛鳥池木簡の再検討」(『木簡研究』二三三、二〇〇一年、二一七〜二一九頁)。

148 李炳鎬「扶余旧衙里出土塑造像とその遺跡の性格」(『百済文化』三七、二〇〇七年)。

149 田中俊明「王都としての泗泚城に対する予備的考察」(『百済研究』二二、一九九〇年、一八〇〜一八一頁)。

150 本稿では扶余官北里、双北里で収集された高句麗系瓦当(図六一三〇の一九)や旧衙里遺跡で発見された定林寺址の創建瓦(図六一二四の1型式)などは検討しなかった。これらの瓦当は六世紀代の瓦当の中でも少数派と考えられる。

151 亀田修一『日韓古代瓦の研究』(前掲書、七八〜七九頁)。

152 李タウン「百済の瓦生産―熊津時代・泗泚時代を中心として」(『韓半島考古学論叢』、西谷正編、二〇〇二年、四八六頁)。

153 南浩鉉「扶余官北里百済遺跡の性格と時間的位置」(『百済研究』五一、二〇一一年、一一七〜一一九頁)。

154 双北里遺跡でAグループ瓦当が発見されないことは、この一帯に対する開発が遅かったことを示唆するのではないかと考える。

155 清水昭博「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開」(前掲誌)。

156 一方、七世紀前半以後、扶余地域の王宮遺跡では図六一三〇の一六〜一八の単弁七葉蓮華文瓦当と巴文、素文瓦当が主に使用されている。  
157 そのような業務を遂行できるほどの中央行政官署としては功德部や司空部が想定され、中でも土木工事と関連する司空部がより有力であるが、その証拠は無い。五八八年以前の泗泚時期の寺院と王宮に用いられる瓦の生産は、司空部と功德部傘下に多数の官営工房が配属される多元的な官営造瓦工房体制によって運営されていたといえるだろう。

158 亀田修一『日韓古代瓦の研究』(前掲書、六八〜六九頁)。清水昭博「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開」(前掲誌、七一頁)。李タウン「百済瓦博士考」(前掲誌、一四六頁)。

159 亀田修一『日韓古代瓦の研究』（前掲書、七八～七九頁）。清水昭博「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開」（前掲誌、九四頁）。李タウン「百済瓦博士考」（前掲誌、一四八頁）。

160 上原真人「初期瓦生産と屯倉制」（前掲書、七頁）。

161 国立扶余文化財研究所『王興寺址Ⅰ瓦窯址発掘調査報告書』（二〇〇七年、一五〇～一七〇頁）。

162 実際、花組系列の瓦当を観察してみると、Ⅱ3a、Ⅱ3b技法も無加工の丸瓦を接合させるⅢ1技法やⅢ2技法と非常に類似すると思われる。したがって、花組の接合技法も瓦博士から始まったと見なければならぬだろう。

163 飛鳥寺出土瓦当の分類や型式名称については花谷浩の次の論文に従った（花谷浩「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」（前掲誌）。一方、扶余王興寺址では飛鳥寺の花組系列瓦当に見られるものと類似する素弁十葉の蓮華文を持った椽木瓦が出土していることから（国立扶余博物館・国立扶余文化財研究所『百済王興寺』（前掲書、四六頁）、百済では蓮弁の数が大きな意味を持たないかもしれないと考える。

164 李タウン「印刻瓦を通してみた益山の瓦に対する研究」（『古文化』七〇、二〇〇七年、九九～一〇二頁）。

165 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館『蓮華百相』（一九九九年）。

清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』（前掲書）。

166 また、飛鳥寺の主要堂塔には花組が使用され、回廊など外郭には星組が使用されたことは百済で花組系列の文様がより新しい様式であったためではないかと考えることもできる。

167 一方、飛鳥寺花組のⅡ2接合技法が六世紀代の百済遺跡ではまだ確認されていない。しかし、弥勒寺址で同じ技法が確認され、花組の中でⅡb式とⅡc式の接合技法は先端無加工丸瓦を接合するⅢ1技法とも通じる点があることから百済の官営工房で使用されたものと推定しても問題はないと考える。

168 上原真人「寺院造営と生産」（前掲書、九〇～九一頁）。

169 五八八年以前に日本へ派遣された五経博士や易博士、曆博士、医博士、採薬師、楽人の場合、徳系官等を所持したことが多いが、泗泚遷

都以後には二二部司の中で司徒部(五経博士)、日官部(易博士、曆博士)、薬部(医博士、採薬師)、法部(楽人)などが所属した官僚であったと考えられる。

<sup>170</sup> 李文基 「泗泚時代百済前内部体制の運営と変化」(『百済研究』四二、二〇〇五年、七二頁)。

<sup>171</sup> 朴南守 「新羅宮中手工業の成立と整備」(『東国史学』二六、一九九二年)・『新羅手工業史研究』(一九九六年)。

<sup>172</sup> この場合でも百済から派遣された諸博士が三年ごとに交代した事情を一括して記述した可能性は残っている。そうだとすると、花組と星組の瓦当の年代差も想定できるのではないかと考える。この部分については今後、より詳しい検討が必要である。

<sup>173</sup> 平野邦雄 「今来漢人」(『大化前代社会組織の研究』、吉川弘文館、一九六九年)。

浅香年木 「倭政権と手工業生産」(『日本古代手工業史の研究』、法政大学出版局、一九七一年)。

大橋一章 「飛鳥寺の発願と造営組織」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四一―三、一九九五年)・『奈良美術成立史論』(二〇〇九年)。

田中史生 「飛鳥寺建立と渡来工人・僧侶たち」倭国における技術伝習の新局面」(『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一〇年)。

## 結論

四世紀後半に仏教を受容した百済は中国や高句麗など周辺国家から仏教や仏教寺院に必要な技術を積極的に受け入れ、百済的な仏教文化を形成し、これを周辺国家の新羅や日本へと積極的に伝えた。百済は激動する六〜七世紀の東アジア世界の仏教の拡散や仏教寺院の建立において、きわめて主導的かつ積極的な役割を担ったのである。以下、本稿で述べた論点を改めて整理しておこう。

第一部では、百済における仏教受容と仏教寺院の成立およびその展開過程を瓦当と塑像、木簡などの出土遺物と伽藍配置を中心に検討した。

第一章では、百済における仏教受容の過程と初期の寺院について考究した。百済は四世紀後半、枕流王代に東晋から仏教を初めて受容した。当時、百済は歴史書を編纂するほか、中国に使節を派遣するなど漢字や漢文に対する理解の水準は相当高かったと考えられる。これは楽浪郡の廃置に伴う多数の中国系遺民の移住と関連すると考えられる。

百済の仏教受容は、高句麗が仏教を通して前秦との協力を強化したことに対応するだけでなく、仏教を信奉した東晋の孝文帝との紐帯強化のためであったと考えられる。仏教伝来以後、百済は新都である漢山に仏寺を建立したが、これは高句麗との対決構図の中で都城を莊嚴にするための象徴物としての役割を担ったと理解される。

漢城期の仏教遺物は蓮華文をモチーフとする金属器や磁器、瓦当以外には残っていないが、熊津期初に活動した発正の事例から、漢城期末から熊津期初における百済の仏教活動を認めざるを得ないであろう。また、ソウル風納土城から出土した獣面文瓦当や蓮華文瓦当は、百済が楽浪や高句麗以外にも中国南北朝の諸国家と幅広く交流し、それらを通して仏教文化を輸入した可能性を示唆している。

熊津期になると、武寧王陵から出土した多様な遺物からも明らかかなように南朝仏教の要素を具体的に確認することができる。武寧王陵を造営した聖王によって建立された大通寺は百済の本格的な仏教寺院といえるが、関連遺構が全く見つかっていないため、出土瓦当を中心にその技術的な系統について推定せざるを得なかった。ここから出土した瓦当には、中国南京で見られる特徴的な瓦製作技術が確認さ

れる。加えて、「梁官瓦為師矣」銘埴が出土していることからみて、百済の造瓦に南朝梁の影響を認めてよいであろう。さらに、大通寺址より古い段階の、王宮である公山城で発見された瓦当の場合も、文献記録の検討から南斉との関連性を類推できる。泗泚都城や慶州興輪寺址では大通寺式瓦当と同一の文様・製作技術によって製作された瓦当が多数確認されることから、この時期、百済では大通寺を造営する過程で官営造瓦工房のような官営手工業体制が成立していた可能性が高いと考えられる。ただ、百済では大通寺式とは異なる公山城式瓦当や高句麗の影響を受けた瓦当も生産されていたため、高句麗の造瓦術の影響もあつたことも軽視してはならないであろう。

第二章では、泗泚遷都以後、都城の中央に建立された定林寺址について考察した。まず、ここから出土した塑像の奉安場所と製作時期、系統と伽藍配置の特徴について検討した。定林寺址出土の塑像は共伴遺物と文献記録から、五四一年、梁の工匠・画師などの技術者の直接的な援助を受けて製作され、創建当初には木塔内に安置されたと推定される。定林寺址は塔内塑像の製作や造瓦術、緑釉の製作技術、さらには木塔の建立をはじめ、東堂と西堂といった伽藍配置に至るまで、南朝の影響を強く受けていたといえる。しかし、二重基壇の下成礎石や講堂址東西の別途建物址といった要素は高句麗の影響と考えられるから、定林寺は主として南朝の影響を受けつつ、高句麗文化も部分的に受容しつつ成立したといえる。

定林寺址で成立した伽藍配置の影響は百済滅亡期まで認められる。それゆえ、百済泗泚期の寺院は「定林寺式伽藍配置」の成立と展開過程であつたともいえる。換言すれば、百済式寺院は、定林寺の創建をもつて成立したといえよう。定林寺式伽藍配置では講堂と回廊が北回廊に連結するのではなく、回廊北端の付属建物や講堂の東西にある別途建物に連結する。また、回廊北端で共通して認められる付属建物は、金堂より格が低く、僧房のようなものと推定されるが、寢食が行われた生活空間である講堂北側の僧房というよりは、より公的な性格が強いため、ここでは僧坊と区別してこれを「東堂・西堂」としておきたい。この外、東西回廊と南回廊はL字形状に直ちに連結されず、断絶し、南回廊は東西回廊よりも若干長く突出していることが確認されている。

定林寺址出土の塑像から創建期の木塔に奉安された塔内塑像には礼仏図の場面のようなものが含まれていたと推定されるが、これは俗世の支配者を越えて仏教界の支配者を指向した聖王の意図が反映されたと考えられる。梁の武帝が派遣した工匠・画師の存在は定林寺址

建立に梁の専門技術と百済王室の絶对的な支援があったことをうかがわせ、『日本書紀』欽明紀六年条にみえる丈六尊像造成とも関連すると考えられる。欽明紀六年条の丈六尊像造成記録は当時の百済の事情を反映した信憑性の高い記録であり、これによって定林寺址の建立が聖王の造像を通じた功德の実践であったと評価できる。

次に、泗泚都城内部における定林寺址の位相を明らかにするために、泗泚都城内部で発見された道路遺跡の開設時期と王宮の位置について検討した。これまで泗泚都城は遷都当時から整然とした街路区画によって整備されていたと理解されてきたが、これは、具体的な根拠にもとづくのではなく、あくまでも推定の域を出ないものであった。実際の発掘資料にもとづくと、街路区画の大部分は六世紀後半頃に開設されたものであった。また、日本の植民地期に製作された地籍図と滅亡期の「大唐」銘瓦当、出土木簡などから推定した泗泚期の王宮や王宮区域と定林寺の位置関係を考究してみると、それらは密接に関連性をもって造営されていたといえる。

このように定林寺址は洛陽永寧寺や南京同泰寺のように、王宮の南側に一定の計画によって築造されたのであり、王宮とともに都城の最も顕著なランドマークであった。定林寺址造営時に作られた木塔内の塑像や百済式寺院は泗泚遷都直後の聖王の王権強化整備にとともに記念碑的造形物の一つであり、定林寺址はその後、百済の最も核心的な寺院であったと考えられる。

第三章では、王陵群である陵山里古墳群に隣接して建立された陵山里寺址について考察した。陵山里寺址の中門址南側からは多量の木簡が発見されているが、既往の研究では木簡の記載内容のみから、その性格・用途などについて論究されるきらいがあった。そこで、本稿では出土位置や共伴遺物から、その廃棄時期と性格について検討した。その結果、陵山里木簡は五五四年の管山城の戦いで聖王戦死以後から五六七年の木塔建立までに製作・使用・廃棄されたが、一部の木簡は六世紀後半まで製作・使用され、廃棄されたことを確認した。ここから出土した木簡の大部分が五六七年の木塔建立前後に廃棄されたことは、これらの木簡が陵山里寺址の初期講堂址にあった何らかの施設と密接に関連することを示唆する。また、木簡に記録された内容が仏教や死者の儀礼と関連するもの、物品の生産地と移動など帳簿のようなものであったことを考慮すると、陵山里木簡は陵山里寺院の造営や運営と関連するものであったことがわかる。八次調査で発見された、二〇〇二・一号四面木簡は陵山里寺院の建立に動員された人々に食米を支給したことを記録した中間帳簿であるとおも



われるが三〇〇号、三〇六号、三一〇号木簡などもあわせてそれらを総合的に分析してみると、陵山里寺址一帯には米などの物品の移動と関連した倉庫施設や行政組織が存在していたと推定される。

陵山里木簡の性格をより具体的に理解するためには、木簡が出土した北側の高い地点にあった伽藍中心部の変遷過程を明らかにする必要がある。そこで、伽藍中心部から出土した瓦当の型式分類と相對編年、建物址別の分布情況に注目し、伽藍中心部建物の建立過程について考察した。ここからは五〇二点の瓦当が出土しているが、型式分類の結果、一三種類の蓮華文瓦当と二種類の巴文瓦当、一種類の素文瓦当が確認された。瓦当の型式からみて1型式と3・4・9型式は創建期瓦で、そのなかでも特に1a型式が最も古い段階に該当すると考えられる。1a型式が生産される初期段階では、一窯址―寺院型であったが、次第に1b式と1e式瓦が生産され、3・4・9型式の生産・供給段階では複数窯址―寺院型に変化する。また、時期的に新しく少量のみ出土する瓦当は、補修用瓦当と考えられるが、5型式は金堂址、6型式は木塔址、7型式は講堂址から集中的に出土することから、それらはこれら建物を修築するために特別に製作・供給された瓦当であると理解される。

それらをふまえ、各型式別瓦当の建物址別の分布と暗渠など排水施設の築造過程、建物址の構造、木簡などの共伴遺物などを総合的に分析し、伽藍中心部の建物の建立順序を討究した。その結果、陵山里寺址の伽藍中心部は講堂址とその付属建物である不明建物址Ⅰ、工房址Ⅱ、そして不明建物址Ⅲ、工房址Ⅳなどがまず建立され、その後、木塔址と金堂址、中門址、回廊址の順で建立されたと考えられる。講堂址を中心にした初期建物址群が木塔址や金堂址に先んじて造築されたことは、この建物址が寺院とは異なる何らかの特殊な目的を有していたことを示唆する。

陵山里寺址の最下層遺構からは中国製青磁片と硯片、土器片などが出土しているが、これらの遺物は、五六七年より古く、五五〇年前後のものと考えられる。したがって、初期の建物址群は、木塔建立以前から機能し、聖王陵の築造と密接に関わっていたと考えられる。初期建物址群は全て廂や庭を備えており、二室あるいは三室からなるが、講堂の場合は一棟二室建物で、東西に翼舎がある独特な構造をなす。講堂址のこのような構造は集安東台子遺跡と類似し、それが、本来、講堂ではなく、祭祀関連施設であったことを物語る。仏教が

盛行していた梁や北魏では陵墓のそばに寺院が建立されており、高句麗の場合も伝東明王陵と定陵寺において、陵墓と寺院の結合事例を確認できる。百済では陵山里古墳と陵山里寺址において、そのような状況を確認することができる。陵山里寺址の初期建物址群は、建物の構造と配置、出土木簡などの共伴遺物との関係、五六七年以後の状況などから、陵山里古墳群、特に聖王陵の築造や聖王を追福するための各種祭祀を執り行った祠廟あるいは祠堂施設であったと考えられる。

陵山里寺址は大きく三期に区分されるが、第一期は、五五〇年代から五六七年の木塔建立以前までの、講堂址をはじめとする初期建物址群が王陵の祠廟として機能した段階である。第二期は、五六七年の木塔の礎石造営から木塔と金堂などの寺院関連施設が建立された段階で、伽藍中心部の建物が完成する。その過程で外郭の排水路と中門址南側一帯の大々的な整備作業も行われた。第三期は、六世紀後半～七世紀前半から滅亡までで、講堂址北側と西回廊址西側一帯の開発整備が行われた時期である。なお、講堂址を中心にした初期建物址群は、寺院成立以後にも引き続き伽藍の付属施設として機能しているが、これは寺院以後も既存の陵墓への祭祀が続いていたことを示しており、陵山里寺址の陵寺としての性格をより一層鮮明に示している。

第四章では、扶余と益山地域の百済寺院の伽藍配置と塑像などの出土遺物について考察した。泗泚遷都以後に成立した定林寺式伽藍配置は日本の四天王寺式伽藍配置と類似するが、講堂と回廊が北回廊によって連結するのではなく、東・西回廊北端の付属建物、講堂址東西の別途建物によって連結する方式をとっており、相違する。このような伽藍配置は、塑像をはじめとする共伴遺物と文献記録などからみて、泗泚遷都(五三八年)以後、中国南朝の影響によって成立したが、高句麗の影響も多少受けていたと考えられる。この定林寺式伽藍配置は六世紀中ばから後半の軍守里寺址や王興寺址において東・西回廊の外郭に建物が増築されるが、六世紀末以後には一部の殿閣が建立されないなどの変化をみせる。七世紀前半に建立された弥勒寺は三院並列式伽藍配置であるが、これは定林寺式伽藍配置をもとに、中国の大型院落式寺院や弥勒思想の影響によって建立されたものと推測される。

次に、百済故地でしばしば出土する塑像の展開過程と周辺国家の塑像との関連性について探究した。百済の塑像はこれまで廃寺址や窯址など一二ヶ所で発見されているが、それらは主に寺院の木塔や金堂に安置されたものと考えられる。それらは手捏法、范拔の二つの技

法によって造られ、成形後に焼成したものと乾燥させたものもある。釉薬が施された塑像や窯址から塑像が出土することは、百済では必ずしも多くないが、焼成されたことは明らかである。これは中国の南京で発見された塑像にも認められ、その技術系統が南朝に連なっていた可能性が高いことを示しているといえる。

百済塑像の製作技術の特徴は高句麗の元五里寺址出土塑像や新羅の四天王寺出土緑釉埴などでも部分的に確認される。日本でも四天王寺関連文献記録や川原寺裏山遺跡から出土した塑像から、百済の影響を受けていた可能性がある。その中でも川原寺裏山遺跡出土品の場合、廃棄状況だけでなく製作技法も益山帝釈寺址廃棄場と酷似しており、釉薬が施された緑釉埴からみて、百済滅亡以後の遺民による技術の伝播の可能性が想定される。

第二部では、瓦当と伽藍配置を中心に新羅の興輪寺址と飛鳥寺に見られる百済技術の影響を考究した。

第五章では、新羅最初の寺院である興輪寺址に比定される慶州工高一带で出土した瓦を分析し、百済系瓦製作技術の新羅への伝播過程を論じた。それによれば、慶州地域で発見された百済系瓦当の導入過程は、慶州勿川里瓦窯址出土の無瓦桶製作法で製作された平瓦が使用される段階、月城塚字の出土の百済系瓦当文様に円筒接合後分割法（Ⅰ技法）で接合した瓦当が作られる段階、慶州工高一带で収拾されたⅠA・ⅠB型式瓦当のような百済系瓦当文様に丸瓦加工接合法（Ⅱ技法）で製作する段階、3・6型式および9・11型式のように丸瓦被覆接合法（Ⅲ技法）で製作する段階に整理できる。

慶州勿川里瓦窯址から出土した初期の平瓦は技術的にソウル風納土城から出土した漢城期の平瓦へと連なり、共伴土器からみて、五世紀後半に製作されたものと理解される。月城塚字出土瓦当の場合、瓦当文様が大通寺址と類似しているが、漢城期の円筒接合後分割法（Ⅰ技法）で製作されているため、瓦範のような道具のみが伝えられ製作されたと考えられ、百済の事例を参照すると、六世紀前半、具体的に五二〇年代に製作されたものと考えられる。

慶州工高一带で出土したⅠA・ⅠB型式瓦当は大通寺式瓦当をモデルとして製作され、瓦当文様と文献記録からみて、五三五年頃に製作されたとおもわれる。ここから出土したⅠA・ⅠB型式瓦当はともに出土した有段式丸瓦と枳板連結式瓦桶を利用した平瓦とセットであ

るため、単純な道具の移動だけでなく、百済系瓦製作技術を有する瓦工人の移動に伴う技術の伝播であったと考えられる。一部の平瓦は桢板連結式瓦桶で製作されたことが看取され、広端面に同心円文や線文の痕跡も認められるが、これは百済の造瓦術の伝播過程において慶州の土器製作工人が動員されたことを物語っている。

1Aと1B型式瓦当は慶州工高一帯で出土した最も古い段階のもので、公州大通寺址出土瓦当と文様や製作技法が同じである。この瓦当は五三五年から興輪寺を本格的に建立したという文献記録からみて、興輪寺の創建瓦と考えられ、それゆえ、これをひとまず「興輪寺式瓦当」と呼ぶことにしたい。この興輪寺式瓦当は新羅における仏教伝来の過程で未確認であった、百済の影響を具体的に示す初めての考古資料であり、六世紀前半の南朝―百済―新羅の瓦製作技術や仏教の伝播過程を解明する上で重要である。この時期、百済から新羅への技術者集団派遣は、梁を意識したものであつと想定できないわけではないが、高句麗の軍事的な脅威のもと、新羅との協力関係維持あるいはそれを強化しようとする意図もあつたと理解される。一方、興輪寺式瓦当で確認される百済系造瓦術はその後も一定の影響を及ぼした。皇龍寺址や慶州地域の建物址出土の百済系瓦当や天官寺址の瓦積基壇建物址から、その影響は七世紀代まで継続していたことがうかがわれる。

第六章では、日本の最初の寺院である飛鳥寺の伽藍配置と創建瓦を中心に百済寺院との関係について検討した。飛鳥寺三金堂の高句麗起源説は、発掘当時に知られていた三金堂が、高句麗の清岩里寺址しかなかったことから提起された学説のひとつである。しかし、飛鳥寺では三金堂というプラン以外、高句麗寺院との類似点を見いだせない。そこで、最近の発掘成果を中心にして飛鳥寺三金堂の百済起源説を新たに提起した。百済寺院では飛鳥寺三金堂と全く同じではないものの、それと比較できる新要素が確認されることから、高句麗の文化が直接日本に伝わったのではなく、百済を経由して伝播した可能性を検討したのである。

五世紀末から六世紀前半に始まった高句麗系文化の百済への流入は、六世紀中半からは次第に支配者層にまで拡散し、威徳王陵と考えられる東下塚には高句麗系統の壁画が描かれている。威徳王は五六七年を起点にして北朝国家との交渉を再開するなど王権強化作業を本格化させたが、それまでの南朝一辺倒の外交から脱却し、北朝と高句麗系統の文化を積極的に受容したものと推測される。百済では飛鳥

寺の建立以前の六世紀中後半の軍守里寺址や王興寺址で東西外郭建物址または建物址群と呼べる独特な建物が新たに確認されている。これらは単純な居住空間である僧房と理解するよりは、座禅や瞑想の場としての機能を有する禅堂のようなものと推定したり、寺院全体の空間配置からみると、中枢伽藍と区分される独立した空間に配置されている点から、「僧院」や「別院」のようなものとみることができようである。初歩的な形態の多院式寺院の姿をうかがい知ることができるのである。六世紀中後半の百済寺院にみられるこのような新しい要素は、中国の南北朝時代から隋唐代に流行した多院式寺院や高句麗寺院の影響を受けて出現したものと考えられる。

こうした理解にもとづいて、改めて六世紀中後半に建立された軍守里寺址、五七七年建立の王興寺、五八四年に造営された皇龍寺の重建伽藍、五八八年創建の飛鳥寺の伽藍配置をみると、それらは関連性が認められる。百済寺院にみえる多院式寺院の初期の形態から東堂・西堂、さらには東西回廊を取り除いたものが、皇龍寺址重建伽藍の三金堂であり、それを高句麗的な品字形に配置したものが、飛鳥寺三金堂と考えられる。六世紀代の百済では、高句麗文化を幅広く受容していたが、飛鳥寺三金堂は高句麗ではなく、百済から伝えられたと考えられ、年代的にも近い軍守里寺址や王興寺址が最も直接的な祖形であると理解される。かりに、それが高句麗の影響を直接的に受けたものであるならば、皇龍寺址のように部分的ではあるものの、高句麗的要素が残っていないが、飛鳥寺の場合、そのような要素を見出すことはできないこともそのように推定する理由の一つである。

また、高句麗の僧侶慧慈が日本へ派遣されたのは五九五年のことであり、それは百済の技術者集団の倭到来、金堂・木塔建立工事着手以後のことであった。したがって、飛鳥寺三金堂の起源を高句麗に求めるのは無理である。五九五年段階では百済の技術者集団によって飛鳥寺の造営プランが立案され、工事が進められていたのであった。

飛鳥寺の建立のために百済から派遣された技術者たちは国家が臨時的に組織したプロジェクトチームのように、各技術部門が有機的に連携していたため、伽藍配置のみが高句麗の影響を受けていたと考えるのは困難である。金堂の様式も百済から伝えられ、東・西金堂の二重基壇と下成礎石も百済の影響を受けて造営されていたことからすると、飛鳥寺三金堂の建立は百済から派遣された技術工人によって総合的に計画され造営されたと考えねばならないであろう。百済は六世紀中ばから後半の新羅の台頭と隋の登場という激動する東アジア

国際社会において、仏教を媒介とした技術の伝授を通して、日本に対する主導権をより堅固なものとするために、このような技術支援を行ったと考えられる。もっとも、飛鳥寺の三金堂が百済寺院の伽藍配置をそのまま踏襲したわけではない。五七七年に百済から派遣された造土工の活動によって、日本国内においても伽藍配置に関する情報がある程度理解されていたからである。

飛鳥寺建立後、日本の初期寺院には四天王寺式伽藍配置が採択された。このことから百済の主流伽藍配置形式といえる定林寺式伽藍配置が再度、選択されたと理解される。ただし、この四天王寺式伽藍配置は通説とは異なり、大阪の四天王寺の場合、講堂の東西に別途建物のような施設があった可能性がある。かりに、夏堂と冬堂からなる講堂であったとすれば、それは百済寺院のいわゆる一棟二室建物址と類似することになる。また、新堂廃寺と亀石古墳は古墳と寺院が結合した事例であり、陵山里寺址と陵山里古墳群の関係と酷似するといえる。新堂廃寺の東西回廊から発見された東方建物・西方建物は、定林寺式伽藍配置の東堂と西堂に該当する。こうしたことからみて、定林寺式伽藍配置が日本の四天王寺式伽藍配置に直接的な影響を与えたと理解される。

これをふまえ、飛鳥寺創建瓦の源流を解明するために、こうした観点から百済瓦当の検討を行った。まず、泗泚期の瓦当を、廃寺址出土の創建瓦当と王宮関連遺跡出土の瓦当を区分し、その結果、泗泚期の主な寺院では、新たな寺院創建に際して、新規の瓦範が製作・使用されるのに対して、王宮区域では特定文様の瓦範が継続して用いられていることが判明した。さらに、飛鳥寺と年代的に近い王興寺址の創建瓦では若干の相違点もあるものの、花組・星組系列と最も類似するパターンが認められた。百済のさまざまな遺跡から飛鳥寺創建瓦の源流を把握するためには、特定の遺跡や遺物において全く同じものを探すよりはそれを生産した造瓦集団や瓦博士の性格を説明することがより重要である。飛鳥寺の創建瓦を製作した瓦博士は六世紀中ばから後半にかけて百済の「王宮と寺院」に使用された瓦を生産した「官宮造瓦工房の造瓦集団や技術系官僚」であった。花組は生産地が必ずしも詳らかではないが、扶余旧衙里・官北里・双北里遺跡および扶蘇山城・王宮里遺跡など王宮関連遺跡で出土する瓦当を祖形とし、星組は金德里窯址や王興寺址窯址で活動した造瓦集団と関係があり、大通寺式瓦当を祖形としていたと考えられる。

百済寺院では寺院創建に際して新たな瓦範が製作されたように、飛鳥寺の場合も創建時に新たな文様の瓦範が製作・使用されていた。

その場合、採択された文様は百済の王宮で使用されていた最新のものであった。これは記念的建物の建立によって権威を誇示しようとした蘇我氏の意図的選択であったと考えられる。五八八年に百済から派遣された瓦博士は王宮や寺院の瓦を供給した功德部と司空部に所属した技術系官僚で、実務責任者として寺師らとともに国家が組織したプロジェクトチームの一員であったのである。このように日本最初の寺院である飛鳥寺は、全面的に百済の造寺工と瓦博士をはじめとする各種技術者によって造営されたのである。とはいえ、百済寺院と全く同じではなかった。飛鳥寺の造営は単純なモノの移動でなく人間の移動による産物であったためである。そのため、一金堂を三金堂に変更するほどの大規模設計変更は不可能であったものの、瓦当の文様を選択することは可能であったのである。

以上が本稿の要旨である。四世紀後半、東晋から仏教を受容した百済は、六世紀前半に梁との積極的な交流によって本格的寺院である大通寺を建立する。新羅の興輪寺建立に関わる技術の伝播はそうした経験にもとづいてなされたものであった。五三八年の泗泚遷都後、梁の工匠・画師の技術的な支援によって都城のランドマークとしての定林寺址が建立され、百済的な寺院型が完成した。それ以後、百済では墳墓と寺院が結合した陵寺としての陵山里寺址、官寺と推定される軍守里寺址、国王が発願した王興寺址が建立され、百済的な寺院型はそれらの造営過程でさらに発展していくことになった。こうした経験にもとづいて、五八八年、百済は日本の飛鳥寺に技術者集団を派遣したのであって、これは純然たる百済の技術によって築造されたといえる。七世紀以降には離宮や別都として益山王宮里遺跡を造営しつつ、帝釈寺址や弥勒寺址も引き続き建立された。六世紀後半以後、百済は南朝だけでなく、高句麗や北朝、隋唐の寺院造営技術を幅広く受容しつつ、百済的寺院を一層発展させていったのである<sup>1)</sup>。百済の外部からの技術伝受や外部への伝授は一定のパターンを持って有機的関連性が認められる。すなわち、新羅の興輪寺や日本の飛鳥寺における百済の技術の伝播は互いに類似点が存在していたのである。また、百済は中国の南朝や北朝、隋唐、高句麗の影響を受けつつ、仏教や寺院造営技術を発展させていったが、その過程でそれをシステム化し、さらに他国に技術伝播できるほどに、それを成熟させていった。それによって百済は周辺国家に対する外交的影響力を拡大、強化させていったのである。そうした観点に立てば百済は単なる文化の伝達者や経由地ではなかった。興輪寺で出土した瓦当や飛鳥寺に

見られる三金堂などは中国南朝や高句麗の文化要素であるが、それらはあくまでも百済国内においてすでに製作され、百済化したものが再度伝授されたのである。新羅や日本の初期寺院に見られる新たな文化要素から逆に百済文化の変化過程を追求することができるのは、まさにこのような性格を有していたためである。

百済の仏教寺院の特徴は多様な文化系統の影響が認められ、当時、最新の文化が反映され国際性豊かであることである。大通寺式瓦当をはじめとして扶余定林寺址やそれ以後に建立された百済の寺院には、南朝だけでなく高句麗、北朝、隋唐など多様な文化要素が有機的に共存している。他国の先進的な文化要素を素早く導入し、洗練された文化を作り上げたことこそが百済の寺院、さらには百済文化全般の特性といえる。百済はこうした過程で仏教や仏教寺院の造営技術を媒介にして活発な外交活動を行い、現実的な利益を得ることができたのであった。このような百済仏教寺院の特性は本稿で論及できなかった他の仏教関連遺物や遺構、六、七世紀代の他の出土遺物などにおいても、明らかになるものと思われる。

インドを起源とする仏教は中国を経て韓半島にも伝来したが、百済の仏教寺院の展開過程とその伝播過程の意義は中国や高句麗など周辺国家との関係をふまえて考察すれば、より具体的に解明できるであろう。だが、百済仏教寺院に影響を与えた中国南朝や高句麗の仏教寺院については未だ詳らかではない部分も多い。それゆえ、今後、それら周辺諸国の寺院研究が進展すれば、場合によっては本稿の内容も追加・訂正を余儀なくされるであろう。それは古代史研究においては不可避であるが、本稿ではこれまで韓国では等閑視されてきた塑像や瓦当に注目し、百済寺院を考究する上での資料として積極的に活用するとともに近年、細分化された各学問分野の問題意識にとらわれることなく、発掘調査をふまえて明らかになった伽藍配置、遺構、出土遺物などとも比較・検討しつつ巨視的かつ総合的な観点から百済の古代寺院の展開過程について論究してきた。その意味で、本稿は百済寺院を研究する上での必要な観点や方法論についての新たな試みの一つと評するのが適切なのかもしれない。

百済は積極的に外部の文物を輸入して主体的仏教寺院を発展、完成させてきた。そして、それを周辺国家に積極的に伝えることによつて、自国の利益を拡大させてきた。まさにそれこそが百済の対外関係における仏教の果たした役割、意義といえる。仏教や仏教寺院を媒



介に行われた百済の周辺国家との交流協力過程は、現在の東アジア諸国が進むべき方向を具体的に指し示しており、その意味で非常に示唆的である。政治・経済・軍事的競争と葛藤のなかにある現在の東アジア諸国において百済仏教寺院の展開とその影響に関する議論は、「文化」を通じての交流と協力の重要性と今後の可能性を具体的に示しており、我々はそのことから何らかの教訓を得ることができるのではないかと思うのである。

1 本稿では検討できなかったが、このような観点から、帝釈寺址や弥勒寺址も、六三九年に建立された日本の百済大寺との関連性をふまえてつづつ分析する必要がある。百済宮と百済大寺の組合せや九層塔の造営などは、益山王宮里遺跡や益山の仏教寺院との共通点が存在すると考えられるためである。

## 補論 植民地期の百済故地に対する古蹟調査

### はじめに

植民地期における百済史に関する研究は、高句麗史や新羅史に比べ、さほど活発ではなかった。津田左右吉、白鳥庫吉、今西龍、池内宏たちによる主要な論考があるが、百済の初期記録に関する史料批判や滅亡期に関する主題に限定される。今西龍の場合、近古肖王代以前の記録を否定し、百済が任那日本府の保護と統制下で歴史を展開したと把握したが、彼のこのような認識体系はその後の日本人研究者に大きな影響を与えた<sup>1)</sup>。

百済史研究の不振は百済と倭の縁を強調しながら扶余を内鮮一体の霊地と宣伝し、神宮を造営しようとした事実を照らしてみれば、むしろ意外といえる。百済最後の首都であった扶余に神宮が建設された背景を理解するためには、植民地期に行なわれた古蹟調査や博物館活動について検討する必要があるだろう。当時の古蹟調査事業は彼らの植民史観や関心事を考古学的に証明するためのものであり、その結果である発掘報告書や図録の発刊、博物館活動は植民統治の文化的成果を誇示しようとするものであったためである。

古蹟調査事業や博物館活動に対するこれまでの研究は、当時の具体的な活動状況の把握と共に多様な立場から評価が行われてきた。しかし、時期的には一九二〇年代以前、地域的には慶州や平壤を中心とした活動に焦点を合わせており、百済故地の全般的な状況についてはあまり整理されてこなかった。

そこで第一節では京畿道・忠清道・全羅道など百済故地に関する古蹟調査事業の全般的な内容を整理する。古蹟調査事業に関する史論的評価というよりは、当時の古蹟調査事業を時期ごとに区分し、その流れを理解することに努める。第二節では一九三〇年代から扶余地域の廃寺址に対する発掘が集中した国内外的な背景を追跡する。日本の学界の動向と共に財団法人扶余古蹟保存会といった地域社会の活動も検討する。このような過程を通して植民地期の百済故地に対する古蹟調査の展開過程と扶余地域における廃寺址調査が持つ性格や意義についてもある程度把握できるものと考えられる。

## 第一節 時期別古蹟調査事業の展開過程

日本の官学者たちによる古蹟調査事業は調査の主体や組織、制度などによって四時期または六時期に区分して理解されている<sup>2</sup>。百済故地の場合、一九〇九年に扶余と公州地域に対する調査が始まるため、大きく四時期に区分できる。本稿では一九〇九年から一九一五年までの関野貞を中心にした古建築および古蹟調査の時期を第一期、「古蹟及遺物保存規則」が施行された一九一六年から一九二〇年までを第二期、朝鮮総督府学務局古蹟調査課で古蹟調査を主管した一九二一年から一九三一年までを第三期、戦時体制下で朝鮮古蹟研究会を中心に古蹟調査事業が実施された一九三二年から一九四五年までを第四期として検討することにしよう。

### (一) 第一期の古蹟調査活動(一九〇九～一九一五年)

一九〇二年の関野貞による古建築物調査では百済故地の調査は実施されなかった。百済故地に対する古蹟調査活動は一九〇九年から一九一五年まで進行された関野貞一行の古蹟調査から始まる。一九〇九年八月二三日、関野貞は統監部度支部建築所古建築物調査囑託に任命され古蹟調査を委託された。彼は建築分野で工学士栗山俊一、考古学分野で谷井濟一を助手としてチームを構成した。関野貞一行の第一期古蹟調査活動については調査日程の復元作業と共に当時の発掘調査の実態が詳細に研究されている<sup>3</sup>。

これを基に百済故地に対する古蹟調査活動を整理したものが表七一であり、第一期の古蹟調査は広州と公州、扶余、益山など「百済の都城址に対する調査」であるといえる。一九〇九年一月三〇日、扶余・公州地域の踏査を皮切りに広州と益山地域に対する調査が実施された。益山地域の場合、王宮里遺跡(馬韓王宮址と推定)、弥勒山城(箕準城と推定)、双陵を馬韓の遺跡と把握しており<sup>4</sup>、弥勒寺址石塔と王宮里五重石塔を全て統一新羅時代のものと把握していた<sup>5</sup>。

第一期の百済故地に対する発掘調査は一九一二年九月の栗山俊一による石村里古墳群調査から始まる。『朝鮮古蹟図譜』三には石村付近の百済古墳分布図が残っており、甲塚二三基、乙塚六七基が表示されている(図七一)。一九一七年の谷井濟一の調査には甲塚を土墳、

〈表七一〉 第一期の古蹟調査の内容と活動

調査地域	調査年月	調査内容 (括弧内は等級)	調査者	資料	備考
忠南扶余	1909・11・30	劉仁願紀功碑(甲)、大唐評百濟塔(甲)など	関野貞、谷井濟一、栗山俊一	関野1915b	『古蹟図譜』 3・4冊
忠南公州	1909・12・4	公山城	関野貞、谷井濟一、栗山俊一	関野1915b	『古蹟図譜』 3冊
全北益山	1910・12・3 ~4	王宮坪(甲)、双陵(乙)、弥勒山城(乙)、弥勒寺塔(甲)、石仏里(乙)など	関野貞、谷井濟一、栗山俊一	関野1914	『古蹟図譜』 3・4冊
京畿広州	1911・9・18	松城、石村古墳(乙)踏査	関野貞、谷井濟一、栗山俊一	関野1914	『古蹟図譜』 3冊
京畿広州	1912・9・22 ~28	石村付近の百濟古墳発掘	栗山俊一	関野1913、14、15a、谷井1912	『古蹟図譜』 3冊
忠南扶余	1915・7月 中旬	陵山里(伝百濟王陵群の発掘(中下塚、西下塚、中上塚、樽鉢塚、割石塚、横穴塚))	関野貞、谷井濟一、後藤慶二、黒板勝美	関野1915b、黒板1916	『古蹟図譜』 3冊
		扶蘇山城、聖興山城	関野貞、谷井濟一	関野1915b	『古蹟図譜』 3冊
忠南公州	1915・7月 中旬	公山城	関野貞、谷井濟一、栗山俊一	関野1915b	『古蹟図譜』 3冊

乙塚は石塚と表記しているため、甲塚は(封土)石室墳、乙塚は積石塚を指すものと考えられる。関野貞はこの古墳の調査結果について非常に簡略に報告しただけで、調査の経過や詳細な内容は不明である。しかし、当時製作された図七一は植民地期に刊行された石村洞古墳群の唯一の分布図という点において、その後の石村洞一帯の遺跡に対する研究で一次資料として活用された。

関野貞一行は一九一三年まで主要遺跡を幅広く調査するが、一九一五年からは開城、慶州、扶余など特定地域の古墳発掘に集中する。その中で注目されるのが扶余陵山里古墳群の発掘である<sup>7)</sup>。関野貞一行による一九〇九年の扶余調査ではこの古墳群の存在は知られていなかった。その後、一九一一年三月頃、扶余と論山をつなぐ道路改修工事の過程で古墳群が発見され、一九一四年、公州に居住していた考古学会会員である藤井鏗治による現場踏査、考古学会幹事である谷井濟一の報告によって世に知られることとなった。

陵山里古墳群に関する最初の発掘は一九一五年、黒板勝美によって始まった。黒板勝美は総督府とは別途に東京帝国大学の命令を受けて一九一五年五月初めから七月末まで韓半島南部地域の史跡を調査した。彼が韓半島南部地域、その中でも洛東江・蟾津江・錦江流域を調査した理由は、この地域と日本との関係、特に任那日本府を証明するためのものであった。彼が調査を終えてから連載した新聞記事には「韓国併合は任那日本府の復活であるため、

吾も上古にあつたように同国同文化という思想が有れば和合となるはずである」とするなど韓日併合の合法性を古代史を通して証明しようとした。<sup>9</sup> 黒板勝美は慶州、加耶方面の調査を終えて南原、論山、公州を経由して七月九日扶余に到着する。その後、陵山里古墳群の中で最も大きい封土を持つ中下塚と西下塚を発掘した<sup>10</sup>。

発掘を始めた数日後、陵山里に到着した関野貞一行は中下塚の次に規模が大きい中上塚を発掘し、その後七月一六日まで埴床塚、割石塚、横穴塚と共に扶蘇山城と聖興山城を調査する。当時の陵山里古墳群に対する調査結果は関野貞によって直ちに報告され、一九一六年『朝鮮古蹟図譜』三集として刊行された<sup>11</sup>。

関野貞が最も注目したものは中上塚から出土した金銅透彫金具で、『朝鮮古蹟図譜』には宝冠金具と紹介されている(図七二)。彼はこの遺物について「これは昔盗掘された時に残ったもので、その輪郭の曲線透彫の唐草文様などは純然と我が飛鳥時代の文様であり、ほとんど差がないといっても良い。我が飛鳥時代の芸術が百済式の真写であったことは実物上、この一片の金具でも明確に証明できる」として、この古墳を聖王や威徳王の墓と推定した<sup>12</sup>。関野貞はこの金銅透彫金具を、法隆寺に伝わる遺物の模様と同じものととらえ、倭と百済、南朝を連結する文化交流の様相に対する認識の枠組みを初めて言及する<sup>13</sup>。

## (二) 第二期の古蹟調査活動(一九一六～一九二〇年)

朝鮮総督府では一九一五年に施政五年記念朝鮮物産共進会を開催した後、同年一二月一日に朝鮮総督府博物館を設立する。博物館の主な業務は古蹟調査の年次計画、古建築物修理・工事、博物館陳列と陳列品の収集および購入、古蹟図譜と報告書などの出版、内外人の文化視察案内、国宝保存、古寺社修理、史跡指定などの業務に発掘まで含まれていた<sup>14</sup>。それまでに関野貞が実施した古蹟調査と鳥居龍蔵が行った史料調査を統合して朝鮮総督府の所属機関である博物館が主管するようになったのである。このように総督府で直接古蹟を調査し博物館で保存・管理する事務を引き受けることになったのは黒板勝美の提案が受け入れられたものであり、彼らはこれを「最初の統一的文化行政」と宣伝した<sup>15</sup>。

一九一六年七月四日、朝鮮総督府では府令第五二号で「古蹟及遺物保存規則」（以下「保存規則」と呼ぶ）を制定・公布する。「保存規則」樹立以後、古蹟調査は古蹟調査委員会が組織されて五ヶ年事業計画が樹立されるなど比較的体系的に進行した。一九一六年に古蹟調査五ヶ年事業計画が樹立され、二次年度である一九一七年には百済故地に対する全面的な調査が実施される<sup>16</sup>。第二期の調査は百済故地に対する最も「広範囲で組織的な調査」であり、第一期の調査内容を拡大・深化させるものであった<sup>17</sup>。

第二期の古蹟調査は一九一六年八月二日、今西龍による百済都城址（広州郡一円）、風納里土城、石村馬墳などの調査から始まる<sup>18</sup>。一九一七年以後には谷井濟一が主導的に調査したが、第一期に調査されている広州、公州、扶余、益山地域以外に羅州地域に対する特別調査が実施された（表七二）。

その中で石村付近の古墳群に対する発掘調査は一九一六年に今西龍がその外形に関する簡略な調査を実施し、二カットの写真を残している。集安地域の積石塚群との関連性に言及して「積石塚」という用語を最初に使用した<sup>19</sup>。一九一七年の谷井濟一の調査はこれよりさらに精密な調査であったが、石村里・可樂里・芳萐里古墳群に対する部分発掘調査も共に実施された。その他に高陽郡中谷里古墳、驪州郡梅龍里古墳を調査し、百済初期の墳墓として「他日詳細に報告する」としたが、可樂里二号墳の平面図と断面図、石村里一号墳の全景と内部写真二カットが知られているのみである<sup>20</sup>。

一九七〇年代、石村洞古墳群一帯には三・四号墳を除くと完全な形態を維持していた古墳はほとんど残っていないかった。百済国家の出現と成長過程を理解するためには（図七一）の分布図と現古墳群との対応関係を積極的に検討する必要がある<sup>21</sup>。特に東西五〇・四メートル、南北四八・五メートルに達する石村洞三号墳の石槨内部にはビニールが混入していたことから<sup>22</sup>、一九一七年の谷井濟一の調査内容を把握するのは大変重要な課題であるといえよう。一九四二年に朝鮮総督府から発刊された『朝鮮宝物古蹟調査資料』には石村里・可樂里古墳について「直径五間（約九メートル）以上のものが約九五ヶ所、それ以下のものが二二ヶ所、その他不明の大部分は石と土が混ざっており、少数土からなったものがある」と説明している<sup>23</sup>。このような説明を見ると、非常に詳細な分布調査が実施されたと推察できる。

〈表七-二〉 第二期の古蹟調査の内容と活動

調査地域	調査年月	調査内容	調査者	資料	備考
京畿 広州	1916・8・21 以後	百濟都城址、風納里土城、石村馬墳、二城山城、南漢山城など	今西竜(測量製図員1名、通訳1名同行)	大正五年報告書	一般調査
京畿 広州	1916・9・12 以後	風納里土城、二里土城、三成里土星、石村付近古墳群など(高陽郡中谷里、驪州郡梅竜里古墳群発掘)	谷井濟一(測量員3名同行)	大正六年報告書 昭和二年報告書	一般調査
忠南 公州	1917・9・21 以後	公山城など	谷井濟一(測量員3名同行)	大正六年報告書	一般調査
忠南 扶余	1917・9・21 以後	扶蘇山城、羅城、青馬山城、聖興山城、陵山里佉王陵、評百濟塔、劉仁願碑など	谷井濟一(測量員3名同行)	大正六年報告書 有光1983	一般調査
全北 益山	1917・9・21 以後	五金山城、弥勒寺址、王宮塔	谷井濟一(測量員3名同行)	大正六年報告書	一般調査
全北 益山	1917・9・21 以後～12・16	益山双陵	谷井濟一(測量員2名同行)	大正六年報告書 有光1979	特別調査
全南 羅州	1917・12・17～27	潘南面古墳群(徳山里四号、新村里九号墳)	谷井濟一、小場恒吉、小川敬吉、野守健(測量員2名)	大正六年報告書	特別調査
全南 羅州	1918・10・16～28	潘南面古墳群(徳山里一・五号、新村里九号、大安里八・九号墳)	谷井濟一、小場恒吉、小川敬吉、野守健	穴沢1973、有光1983、徐声勳1988	特別調査

『朝鮮宝物古蹟調査資料』の凡例によると、この本は一九四二年に刊行されたとはいえ、一九一六・一七年殖産局山林課で林野中にある古蹟遺物を調査して「古蹟台帳」を製作し、要存林野その他の管理、あるいは処分する際に参考とするために編纂したものである。当時には目録のみ公開されたが、その図面の一部が現在、国立中央博物館に保管されている<sup>24</sup>。そのうち「広州郡」編には可楽里一号墳実測図、石村里一・二・三・四号墳実測図、石村里八号墳実測図、石村里古墳群配置図、石村里地籍図、二里夢村土城地籍図、芳萐里古墳群分布図などが残っている<sup>25</sup>。

図面に残っている大正六年九月調査、大正八・九年製図という記録から、この資料は一九一七年九月に谷井濟一が調査し、一九二〇年に報告書製作のために製図したものの一部と考えられるが、石村洞・可楽洞・芳萐里一帯の古墳群に関する詳細な分布図が含まれている(図七-三)。図七-三の分布図には石村洞・可楽洞古墳群二八〇基以上、芳萐里古墳群一六基などが表示されている<sup>26</sup>。これらの図面は漢城期の古墳群の分布状況を研究する際に基礎的な資料となるだろう<sup>27</sup>。

この時期の陵山里古墳群に対する二次調査として西上塚と東上塚、

東下塚に対する発掘も実施された。東下塚玄室内部からは四神図と蓮花雲文壁画が発見されたが副葬品はほとんど残っていないかった。これについて彼は「百濟滅亡当時駐留した唐軍の仕業」と叙述している<sup>280</sup>。益山双陵に対する発掘も実施されたが、古墳の構造や木棺装飾が陵山里古墳群と非常に類似していることが分かり、百濟末期の王族の陵墓として編年を修正することになる<sup>280</sup>。双陵から出土した木棺は比較的完全な状態で残っており、若干の復元・修理を経て朝鮮総督府博物館に陳列された。梅原末治は彼の著書で実測図を提示している<sup>300</sup>。

一九一七年と一九一八年には羅州潘南面古墳群に対する特別調査が実施される。そのうち新村里九号墳からは、金銅冠と金銅履、環頭大刀などが出土し耳目を集めた。当時の報告書では「これらの古墳はその葬法と関係遺物などからみて恐らく倭人のものである。後日、「羅州潘南面における倭人の遺跡」と題して特別報告として提出することになるだろう」とした<sup>301</sup>。しかし、その後なんら後続措置が行われなかった。当時の発掘品は朝鮮総督府博物館に収蔵・登録され、そのうちの一部は常設公開・陳列された<sup>302</sup>。潘南面古墳群に対する発掘の成果は期待以上で、同年に今西龍が発掘した咸安末伊山三四号墳（現在の末山里四号墳）出土鹿角刀装具<sup>303</sup>とともに韓半島南部地域で確認された倭系遺物として注目を集めた。

ところで、谷井濟一行は羅州潘南面古墳群をどのように認知し調査することになったのだろうか。ここで『朝鮮宝物古蹟調査資料』という冊子が注目される。そこには潘南面に所在する五ヶ所の古墳群が記録されているが、新已里、大月里という地名は一九一四年四月の行政区域統廃合以前の地名である<sup>304</sup>。これを見ると、一九一七・一八年の潘南面古墳群の発掘調査が実施される以前に殖産局山林課がすでにこの一帯の古墳群を把握していた可能性が高い<sup>305</sup>。前述したように一九一六・一七年に殖産局山林課では林野にある古蹟遺物を調査して「古蹟台帳」を作成し、国有林の中で特別に要存林野を管理するためこのような資料を作ったのである。

植民地期の林野調査事業の展開過程についても少しみていこう。朝鮮総督府は林野の所有権者を確認するために一九〇八年に「森林法」を制定するが、三年以内に森林山野の地籍および面積の略図を添付して申告するようにして、一九一〇年にはそれとは別途に国有・民有の状況を把握するための「林籍調査」を実施する。林籍調査が終了した一九一一年には「区分調査」という名前で国有林編入地を対



象に要存・不要存を分ける作業を施行する。要存国有林とは「国土保安と森林経営」のため国有で存続させる森林をいい、不要存国有林は「将来民間に移譲する林野」として貸付および譲与の対象になるものを指す。朝鮮総督府は不要存林を「造林を奨励する」という名分で民間に貸付したが、その規定を一九一一年六月に「森林令」として交付し「造林貸付制度」と呼んだ。その後、朝鮮総督府は土地調査事業が終了する頃に民有林の所有権を明確にし、所有者に一種の税金をかけるために一九一七年から一九二四年まで林野調査事業を再度実施する<sup>360</sup>。

一九一一年に実施された「区分調査」で要存国有林に分類される場合、軍事上必要であったり森林経営に必要な場所で、大部分の林相が優秀で経済的価値が高い地点であった<sup>37</sup>。ところで、要存林野の中には「学術上、特に国有として存続する必要があると認められる所」が含まれていた。このため殖産局山林課では古蹟台帳を作成したのである。ところで、『朝鮮宝物古蹟調査資料目録』は関野貞や古蹟調査委員会の古蹟調査の内容よりはるかに広範囲な内容が含まれていた。例えば、全羅道の場合、第二期までに古蹟調査が実施された地域は全州や益山、羅州、順天、麗水郡程度に過ぎなかったが、この資料集には全ての郡単位の古蹟が収録されている。また、公州郡の場合、公山城以外に現在でもほとんど知られていない城址と寺址、窯址が含まれている。このような点を参考にとすると、山林課の「古蹟台帳」は植民地期に全国的に調査された最も広範囲かつ詳細な資料の一つであったと考えられる<sup>38</sup>。

一方、「古蹟台帳」の国有林境界図が作成された時点は一九一六・一七年であるが、潘南面古墳群の地名表記の事例に見られるように、一九一四年四月一日以前にすでに調査が進められていたものと考えられる。一九一一年一月一〇日に「要存置予定林野選定標準に関する件」（『官報』（官通牒第三三二一号）、一九一三年五月二日に「要存置予定林野調査に関する件」（官報（官通牒第一〇六号））が公布されたことを見ると、少なくとも一九一三年五月以後にはこのような資料が蓄積されていた可能性がある。そうした点から羅州潘南面古墳群など地方の重要な古蹟を把握するには、一九一〇年から進行された土地調査事業とそれに伴って作られた地形図、一九一三年の要存林野に関する調査結果などが多くの参考になったものと考えられる。また、一九一六年に公布された「保存規則」は殖産局山林課の「古蹟台帳」を補完する役割を果たすなど相互補完的な側面から運営されたものと見られる<sup>39</sup>。

(三) 第三期の古蹟調査活動(一九二二～一九三二年)

一九一六年の「保存規則」の実施以後、活気を帯びた古蹟調査事業は一九一九年の三・一運動の勃発で大部分が中止あるいは萎縮した。総督府では一九二〇年にいわゆる「文化政策」を標榜して、古蹟調査事業においても組織を改編するが、一九二一年には学務局に古蹟調査課を新設して博物館と古蹟調査を統括させた。しかし、学務局古蹟調査課は一九二三年に財政緊縮を理由に定員が縮小され、一九二四年末には課を廃止して学務局宗教課に業務を移管して一九三一年まで持続する<sup>40</sup>。藤田亮策はこの時期を一種の「整理時代」と呼んでいるが<sup>41</sup>、一九一六年以来発掘・収集された莫大な遺物を整理して発掘報告書を刊行し、科学的で精密な分析を実施して考古学的事業の効果を宣伝することに努めた。そうした点で第三期は発掘自体は減るが「整理と保存活動」が中心となる時期であったと言える。

第三期の古蹟調査は慶州金冠塚、金鈴塚、飾履塚など慶州地域の新羅古墳と楽浪・高句麗古墳に対する発掘にのみ集中し、百濟故地については表七三のように公州宋山里古墳群を除くと保存や收拾調査にとどまっている。一九二二年五月に小泉頭夫は陵山里東下塚壁画墳の状態を視察し、平百濟塔周囲の木柵を修理するために扶余地域に出張し、扶余保勝会に陳列された鄭智遠銘仏像と扶蘇山城出土土器、蓮華文瓦などを調査する<sup>42</sup>。その中で扶蘇山城から発見されて鄭智遠銘仏像については鄭・趙などの姓から見ると、中国六朝時代の小金銅仏が伝えられたのではないかと推定し、瓦当についても蓮弁の型式と手法が飛鳥時代の古瓦と同じであるとしながら飛鳥美術の研究者に興味を与えるだろうと述べた。

一九二三年六月頃、公州尋常高等小学校敷地の東北側で埴が発見された。関野貞はその入手経緯を詳しく調査・報告して、楽浪時代の埴と類似するとした<sup>43</sup>。その後、一九二七年三月、鶴峰里陶窯址の調査を終えた野守健・神田惣蔵は宋山里二・五号墳と錦町一号墳など第三期の古墳を調査した後、一九三五年度に報告書を刊行した<sup>44</sup>。

この時期の公州地域の古墳発掘を主導したのは軽部慈恩であった。一九二七年一月に公州高普教師として赴任した彼は一九三二年まで五年間、七三八基という途方もない数の古墳を発掘することになる。彼の行跡や発掘の問題点についてはすでに幾度か整理と評価が行わ

〈表七-三〉第三期の古蹟調査の内容と活動

調査地域	調査年月	調査内容	調査者	資料	備考
忠南扶余	1922・5	評百済塔木柵修理、扶余保勝会 陳列館参観	小泉頭夫	大正一一年報告書 小泉1986	
忠南公州	1923・6	公州尋常高等小学校敷地東北側出土塚購入	総督府博物館 購入	関野1924	
京畿広州	1925・9	風納里土城など	総督府博物館 収集	復命書	乙丑大洪水後、遺物収集
忠南公州	1927・3・15~3・23	宋山里二・五号墳、錦町一号墳	野守健・ 神田惣蔵	昭和二年報告書、 小泉1986	
忠南公州	1927~ 1932	宋山里、校村里、金鶴里など七三八ヶ所	軽部慈恩	軽部1933・34・ 36、有光2002	
忠南扶余	1929・1	扶余客舎の修理		財団法人扶余古蹟保存会発足 (2・20)	

れているが<sup>45</sup>、有光教一の場合、「公州の場合、特異なことは遺物の略取目的以外に研究目的という美名の下、教鞭を取っていた者によって一〇〇〇基にも達する百済古墳が「私掘」された」と批判している<sup>46</sup>。軽部慈恩の発掘方法に多くの問題があったことは明らか事実である。しかし、第二期まで発掘された百済の古墳で副葬品がほとんど出土しておらず、それ以上調査が行われなかったが、彼が公州地域の古墳を紹介したことで野守健などによって宋山里古墳に対する発掘が再開された<sup>47</sup>。このような彼の活動によって各地方における地域単位の古蹟調査が初めて認識されはじめたという点において、古蹟調査委員会の発掘以外の活動として一定の注意が必要であると考える<sup>48</sup>。

一九二五年七月一七・一八日には漢江で数百年ぶりの洪水(乙丑大洪水)が起こり、甚大な被害を受けた。その過程で岩寺里遺跡、風納里土城、船里遺跡などの姿が知られることとなったが、遺物を収拾したのみであった。一九二七年四月、学務局宗教課技手田中十蔵の復命書によると<sup>49</sup>、同年八月中旬頃、風納土城から出土したと伝えられる鏃斗二点を某商人が博物館に持ち込み、八月下旬に実地を探查してみると百済土器片と多種多様な遺物が散布しており、この時に岩寺里と船里も共に調査することになったという<sup>50</sup>。

当時収拾された遺物は現在の国立中央博物館に所蔵されているが、風納土城出土品の場合、一九二五年九月二一日と二三日、十一月一五日に収拾されたという注記が残

っている。復命書で田中十蔵は今西龍の既存の報告内容をそのまま転載しているが、その後、鮎貝房之進は風納土城を河南慰礼城に比定した。総督府博物館に陳列されていた風納土城出土鏃斗(二点)を祭器用と推定しつつ有力な証拠の一つとして提示したのである<sup>51</sup>。最近の風納土城の発掘成果を勘案すると、当時の収集遺物に対する情報がその後全く報告されていないことは非常に残念なことである<sup>52</sup>。

一方、この時期の古蹟調査委員会の活動とは別途に今西龍と藤島亥治郎によって益山弥勒寺址に対する調査研究が行われた。今西龍は一九二八年に全羅北道を探訪し、翌年「全羅北道西部地方旅行雑記」という題名の文を『文教の朝鮮』を通して連載したが、その過程で弥勒寺址の石塔を百濟時代に創建されたものと主張する<sup>53</sup>。彼は『三国遺事』の弥勒寺創建記事を積極的に受容し、扶余定林寺塔、益山王宮塔、古阜塔立里塔が同一型式で全て百濟時代に属するものと見ることができるとした。

藤島亥治郎は一九二〇年代後半、益山弥勒寺址に対する地表調査を実施した後、伽藍配置と石塔復元図に関する重要な仮説を提示する<sup>54</sup>。特に伽藍配置については西塔院と東塔院の後方に大規模な伽藍(中塔院)を想定して遺跡の現状を説明しようとした。また、百濟仏寺建築の計画性を検討し、唐尺でなく東魏尺でも完尺を得ることができるといふ点を指摘し、西塔を九層塔に復元した復元図も提示している。藤島亥治郎が提示した品字形伽藍配置図は一九八一年、中院木塔址と金堂址が確認されるまでは、『三国遺事』の「殿塔廊各三所創之」という記録を最も合理的に復元したと評価された。

#### (四) 第四期の古蹟調査活動(一九三二～一九四五年)

朝鮮総督府は一九二〇年代後半から財政の緊縮と行政の整理を実施し、博物館や古蹟調査事業が縮小され、一九二六年以後には積極的な事業がほぼ停止した状態であった。このような財政上の困難を打開するために黒板勝美は朝鮮古蹟研究会を組織する<sup>55</sup>。一九三一年八月に組織されたこの研究会は朝鮮総督府の外郭団体として古蹟調査委員会の活動のうち古蹟・宝物の調査研究および出版部分を担当しながら一九四五年まで古蹟調査事業を主導する<sup>56</sup>。

朝鮮古蹟研究会の活動は外部寄付金に依存していた。そのため事業を持続的に維持するには目に見える成果が必要であったことから、

慶州の新羅古墳と平壤の楽浪古墳に調査が集中するという跛行的な状況を生み出した<sup>57</sup>。百濟故地と関連しては一九三五年扶余に百濟研究所が設立され、扶余地域の古墳と寺址に対する発掘を専門的に担当することになる。

朝鮮古蹟研究会の運営は至急を要する場合が多く、黒板勝美の提案によって幹事である藤田亮策が単独で実施することが多かった<sup>58</sup>。研究会では経費節減のために専任研究員を置かず、随時総督府博物館や帝室博物館の官員または東京帝大、京都帝大、京城帝大の教官に旅費を与え研究員として委嘱した<sup>59</sup>。

石田茂作もやはり扶余の古蹟調査に参加したのは、黒板勝美との個人的な縁と藤田亮策の勧誘があったためである。当時、石田茂作は東京帝室博物館に鑑査官として勤務していた仏教考古学の専門家であった。彼は黒板勝美が代表を務めていた財団法人聖徳太子奉讃会の財政支援を受けて飛鳥時代の寺院遺跡、いわゆる「聖徳太子四六院」に対する現場調査を一九二七年から八年余りにかけて行い、それを整理して『飛鳥時代寺院址の研究』という書籍を出版する<sup>60</sup>。その後、飛鳥時代の寺院を研究するためにはまず、百濟の寺院を調査しなければならぬということを認識するようになり、藤田亮策の勧めによって百濟の寺院調査に参加することになった<sup>61</sup>。

藤澤一夫の場合、「本来、毛利久氏が京大史学科を卒業して梅原末治教授から朝鮮総督府博物館に勤めながら扶余調査に従事することを勧められたが、同氏が断つたため自身が同地で出張勤務することになった」という<sup>62</sup>。彼が一九四一年に日本古代瓦研究のバイブルと評されている『撰河泉出土古瓦の研究』を発表した後、日本古代瓦の源流である韓半島の瓦に大きな関心を持っていたため、扶余で活動することになったものと考えられる<sup>63</sup>。このように第四期の扶余地域に対する古蹟調査には百濟の寺院と瓦当に関心を持っていた専門家たちが新たに参加したが、その背後には黒板勝美と藤田亮策がいた。

第四期の古蹟調査活動はへ表七―四のように公州宋山里と羅州潘南面古墳群を除くと全て扶余地域の寺院遺跡に集中する。したがって、第四期は「扶余という地域史と仏教考古学という分野の研究」が実施された時期といえ、一九三九年に扶余神宮造営が発表された後では、そのような傾向がさらに深化した。

第四期の発掘は宋山里六号墳の收拾調査と宋山里二九号墳に対する調査から始まる。そのうち宋山里六号墳については軽部慈恩の略報

〈表七-四〉 第四期の古蹟調査の内容と活動

調査地域	調査年月	調査内容	調査者	資料	備考
忠南公州	1933・8	宋山里六号墳	藤田亮策、小泉顕夫、沢俊一	小泉1986、 軽部1946	
忠南公州	1933・11・15~24	宋山里二九号墳	有光敦一	有光2002	
忠南扶余	1935・9・29~10・11	軍守里寺址(一次)	石田茂作、関根竜雄、斎藤忠	昭和一一年報告書	
忠南扶余	1936・9・14~10・14	軍守里寺址(二次)	石田茂作、関根竜雄、斎藤忠	昭和一一年報告書	
忠南扶余	1937・4・8~5・3	外里遺跡	有光敦一、米田美代治	昭和一一年報告書	
忠南扶余	1937・4・3~4・15	陵山里東古墳群	梅原末治、鏡山猛、沢俊一	昭和一二年報告書	
忠南扶余	1938・4・27~5・17	東南里寺址	石田茂作、蔵田蔵、斎藤忠	昭和一三年報告書	
全南羅州	1938・5・18~5・28	潘南古墳群(新村里6・7号、徳山里2・3・5号、興徳里石室墳)	有光敦一、 沢俊一	昭和一三年報告書 徐声勳1988	
忠南扶余	1938・5・16 以後	佳塔里寺址	石田茂作、蔵田蔵、 斎藤忠	昭和一三年報告書	
その他	1939・4・1	総督府博物館扶余分館(観覧許可)			8・1 開館式
忠南扶余	1941・6月	双北里窠址(扶余神宮の進入道路工事中発掘)	米田美代治	小泉1986	
忠南扶余	1942・6月	旧校里寺址、扶蘇山城内部調査	藤沢一夫	藤沢1946、 藤沢1971、 高正竜2004	
忠南扶余	1942・8~9月	扶蘇山廃寺址(別名西腹寺址)	藤沢一夫、米田美代治、李鐘国	斎藤1940、 杉1943、 藤沢1946	
忠南扶余	1942・10月 1943年	定林寺址	藤沢一夫	藤沢1946、 藤沢1971	
忠南扶余	1942・9月	旧衙里寺址(伝天王寺址)	藤沢一夫	藤沢1946、 藤沢1971、 李炳鎬2007	
忠南扶余	1943・5月	錦城山廃寺址	藤沢一夫	藤沢1946、 藤沢1971、 高正竜2004	
忠南扶余	1943・11月	旧衙里寺址(扶余警察署裏庭)	藤沢一夫	藤沢1946、 藤沢1971、 李炳鎬2007	

告と小泉顕夫の回顧録、尹龍赫によって検討が行われている。<sup>64</sup> 宋山里六号と二九号の発掘は一九二七年から始まった公州地域の古墳調査の延長線にあり盗掘と破壊にともなう収拾調査であった。宋山里六号墳では四神図の壁画、塼築墳の構造、銘文塼などが確認され学界の耳目を集めた。関野貞は銘文塼を「梁良(？)□為(？)師矣」と判読し、「良(？)□」は梁から来た塼工ではないかと推定した。さらに塼の製法と型式が梁から直接伝来したものとして、百済文化が南朝特に梁から多くの影響を受けたという明確な証拠であると<sup>65</sup>した。

扶余地域の場合、一九一七年の陵山里古墳群調査以後、発掘が全く行われなかったが一九三五年に再開される<sup>66</sup>。最初に石田茂作によつて軍守里寺址、東南里寺址、佳塔里寺址に対する発掘が実施され、有光教一によつて外里寺址と潘南面古墳群に対する発掘、梅原末治によつて陵山里東古墳群に対する発掘が実施される。一九三五年の軍守里寺址発掘以後、一九三六年から実施された第三次古蹟調査（一九三六～一九三八年）では高句麗や百濟遺跡にも力を注ぎ、個別遺跡の精密な発掘と共に全面的な分布調査も実施するよう方針が立てられる<sup>67</sup>。また、朝鮮古蹟研究会が扶余地域の発掘を再開した背景には、一九二七年と一九三三年の宋山里古墳群に対する発掘が百濟古墳に関する注意を喚起させるとともに百濟遺跡に対する詳細な調査が必要であったという側面もある<sup>68</sup>。

一九三九年の扶余神宮造営を契機に総督府博物館扶余分館が設立され、その後、分館内に百濟研究所を置いて藤澤一夫が常住しながら調査を専門的に担当する。一九四一年六月扶余に赴任した藤澤一夫は定林寺址、旧衙里寺址、旧校里寺址、扶蘇山城、扶蘇山廢寺址（別名西腹寺址）、金城山廢寺址などを発掘するが、その調査内容は一九四五年八月以後にきわめて簡略に報告されたのみである<sup>69</sup>。

一九四一年五月末には扶余神宮進入路の工事中、窯址が発見され米田美代治が緊急調査を実施する<sup>70</sup>。戦後、小泉頭夫はこの窯址について錦城山佳塔里部落入口の山すそに位置する窯址であるとしながら、飛鳥寺に隣接する瓦窯と構造が類似すると指摘した<sup>71</sup>。しかし、この遺跡は現在の双北里窯址に該当する。国立中央博物館に保管されている古文書の中には当時調査された双北里窯址に関する申告書綴と調査図面、保存施設計画図などが残っている（図七―五の一）<sup>72</sup>。国立扶余博物館には当時調査された土器片と瓦片の一部が残存していることから今後追加的な報告が必要である<sup>73</sup>。

植民地期に行なわれた扶余地域の発掘は泗泚期を理解するうえで非常に重要な遺跡に対する調査であるため、一九七〇年代後半から再発掘が実施された。定林寺址と扶蘇山廢寺址を皮切りに錦城山建物址、東南里寺址、軍守里寺址に対する再調査をはじめとして最近では定林寺址に対する再調査が実施されている（本書の第四章第一節参照）。そのうち一部遺跡の場合、それまで知られていなかった新たな建物址や遺物が確認されるなど期待以上の成果を得ることができた。これを見ると、当時の発掘調査がいかに拙速に実施されたかを如実に知ることができる<sup>74</sup>。特に最近、定林寺址の再調査過程で見られるように当時の発掘資料の未報告や不誠実な報告は多くの問題点を起

こしている。当時発掘された遺物に対する再報告作業と共に当時の未報告資料に対する再調査が必要となっている。

一九三五年以後の古蹟調査は扶余地域を中心に実施されたが、一九三八年五月に突然、羅州潘南面古墳群に対する発掘が実施される。報告書によると、この遺跡は深刻な盗掘が行われ、原状が分からなくなるほど破壊されたため調査したという<sup>75</sup>。発掘の結果、新村里六号、徳山里二号墳は墳丘の形態が日本の前方後円墳と類似しており、徳山里三号、大安里九号は周溝を巡らせた痕跡が日本の古式墳と類似する外形を呈しており、副葬品の中で曲玉・環頭大刀・埴輪・円筒形土器が発見されるなど構造と内容全てにおいて日本的な色彩が濃厚であるとした。さらに有光教一は、谷井濟一が「恐らく倭人の痕跡ではないか」と話したことに同調しながら三国時代内鮮間の形勢を検討する際に格別の考慮が必要であるとした<sup>76</sup>。一九一七・一八年の潘南面古墳群に対する発掘以後、二〇年ぶりに再び探索された倭系遺跡であったが、その後追加調査は実施されなかった。潘南面古墳群に対する当時の評価と追加発掘が行われなかった理由に対しては別途の考慮が必要であろうが<sup>77</sup>、財政的な側面と扶余神宮建設に伴う扶余地域発掘の緊急性が重要な原因であったと考えられる。

## 第二節 扶余地域の廢寺址に対する調査背景と意味

百濟故地に対する古蹟調査は整理と保存が中心となる第三期を経て第四期には「扶余」地域の「廢寺址」を中心に再び活気を帯びる。一九三五年の軍守里寺址発掘以前まで韓半島の古蹟調査事業は古墳の調査が中心であった<sup>78</sup>。軍守里寺址の発掘は朝鮮総督府が韓半島で実施した最初の寺址発掘であったが、その成果は期待以上であった。当時の新聞インタビューで石田茂作は扶余で初めて四天王寺式伽藍配置を確認し、木塔址下部から出土した二点の仏像は飛鳥時代のそれと完全に符合することから「日本の飛鳥時代の仏教文化が百濟から伝来した事実を証明する最初の史蹟」であるとした<sup>79</sup>。

石田茂作は一九二六年に初めて扶余を訪問した後、「もし慶州が朝鮮の奈良とするならば、扶余は飛鳥の旧都に該当する」とその印象を述懐している<sup>80</sup>。当時、満鮮旅行の調査成果を基に韓半島の文化が飛鳥・奈良時代の文化と非常に類似しているという点に着目して古代日本と韓半島の交渉の様相を編年的に考察している<sup>81</sup>。その後、聖徳太子奉讃会から財政支援を受けていわゆる「聖徳太子四六



院」に関する調査を実施し、当時日本の学界において争点となっていた法隆寺再建非再建論争を注視しながら百済寺院に対する調査の必要性を痛感したという<sup>82</sup>。このような点をみると、石田茂作をはじめとする朝鮮古蹟研究会による扶余地域の寺院に対する古蹟調査は日本の初期仏教寺院、特に飛鳥時代の古代寺院と百済寺院の関連性を見出すことに重点を置いていたと考えられる。

石田茂作の寺院研究には「私の古瓦の鑑識、仏寺建築などの知識は個人的な関係から博士(関野貞)の訓導に負うところが非常に大きい」と述べたように関野貞の影響が多であった<sup>83</sup>。関野貞は一九一五・一七年に陵山里伝王陵群から出土した宝冠金具を通して百済の文化を中国南朝と倭間から規定しようとし、その後、宋山里六号墳の埴と銘文埴を通して梁と百済の文化交流を証明しようとした。ところで、関野貞をはじめとする日本の官学者たちは飛鳥―百済―梁の交渉に注目しながらも百済で内在化した南朝の文化が日本に伝えられたのではなく、南朝の文化が百済を経由して直ちに日本に伝えられたと理解した。その前後に藤澤一夫は飛鳥時代の瓦について南梁百済様式、高句麗百済様式という二つの系統を設定し、百済様式自体も中国南梁との文化交流の中で成立したという見解を提示している<sup>84</sup>。

二〇世紀初め、日本人研究者の間で飛鳥文化に対する関心が高まったことは日本美術史の発展過程とも関連がある。西欧の方法論を採り入れた日本最初の美術史は一八九〇〜九一年に東京美術学校で講義した岡倉天心の『日本美術史』である。彼の美術論の中で特記に値することは韓半島をはじめとする大陸から導入された美術品や渡来人が作った美術品が大部分を占める推古時代の美術を「日本美術史」の始まりとしている点である<sup>85</sup>。彼は天孫の後裔であるいわゆる大和民族とは血統が異なる先住民の美術を否定し、仏教が伝来した時期である飛鳥時代の美術から日本美術史が始まったと設定している<sup>86</sup>。彼の『日本美術史』は当初は講義案に過ぎなかったが、一九二二年に日本美術院発行の『岡倉天心全集』で活字化される。日本美術史研究の進展と拡散は、飛鳥文化の源流に対する研究者の関心をより一層高めたものと考えられる。

当時、日本の学界の飛鳥文化に対する関心の増大、理解の深化と関連して注目されることはいわゆる「法隆寺再建非再建論争」である。現在の法隆寺西院伽藍が創建当初である飛鳥時代のものなのか、そうでなければ『日本書紀』の天智天皇九年(六七〇)四月に法隆寺が

焼失したという記録のように、その後には再建されたもののかに対する論争であり、日本建築史と日本美術史の研究もこの論争を通して開始・発展した<sup>87</sup>。この論争は一九世紀後半から始まったが、非再建説を最も積極的に主張したのが他ならぬ関野貞であり、彼は一九二〇年代後半まで引き続きこの学説を補完していった。

この論争は一九三九年一二月に法隆寺内部にあった若草伽藍の心礎石が返還されたことを契機に<sup>88</sup>、心礎石の旧位置を探すための発掘調査が実施されたことで終止符が打たれた。石田茂作と末永雅雄が主軸になって実施した発掘の結果、若草伽藍は四天王寺式伽藍配置を呈しており、出土瓦当が七世紀初めに該当することが分かった(図七六)<sup>89</sup>。一九三九年一二月、石田茂作が若草伽藍に対する発掘を担当することになったのは若草伽藍の心礎石について新聞に寄稿したことが契機になったというが、前年度まで軍守里寺址をはじめとする百済寺院址を実際に発掘した現場専門家という点が大きく作用したものと考えられる。

そうした点で扶余地域の寺址に対する発掘調査は日本の古代寺院の発掘や研究を活発にするうえで大きく寄与したと評価できる<sup>90</sup>。しかし、百済地域において寺址の発掘が実施された背景を見ると、それはあくまでも日本の学界の未解決課題を扶余地域における寺址の発掘を通して確認するための過程に過ぎなかった。その結果物は先天的に他者の視角から整理され加工されざるを得ないという限界を内包していたのである。例えば、彼らは百済寺院と日本の古代寺院の伽藍配置で見られる共通性のみ注目し、相違点については一貫して無関心であった<sup>91</sup>。

一方、当時には学者だけでなく一般人の場合も奈良・京都の古都に対する関心が大きく高まっていた。奈良・京都の古都作り作業は日本近代天皇制の展開過程と密接な関係を持ちつつ展開し、その過程で仏像・古社寺だけでなく奈良・京都自体が「文化財化」された<sup>92</sup>。このような過程で修学旅行の一般化と古寺巡礼のブームは法隆寺をはじめとする日本国内の初期古代寺院に対する関心を大きく高めたものと考えられる<sup>93</sup>。

ここに鉄道など交通の発達日本人の朝鮮旅行を活性化させたが、一九一〇年代後半から一九三〇年代まで盛んに行われたいわゆる満鮮旅行と古都慶州の観光に関する研究があり参考となる<sup>94</sup>。朝鮮の外地観光に必要な各種旅行案内書と紀行文の刊行、交通施設と宿泊

施設の拡充は「新たな日本の地」である朝鮮に対する観光事業を実践しようとする朝鮮総督府の意志と合致し、一層拡大した。日本と「似た」地域と見なされた朝鮮旅行に対する魅力は、他の外地(満州、台湾などの日本統治管轄地)より違和感が少なく、特に旅行者の優越感、つまり先進文化の主体としての自負心がもたらす楽しみを満喫できたという<sup>95</sup>。

このような外的な変化と共に扶余古蹟保存会をはじめとする地域社会内部の活動も注目される。一九一五年に発足した扶余古蹟保存会は一九二九年二月末、朝鮮総督府から財団法人設立許可を得て組織が拡大して財政が強化され、その後活発に活動する。財団法人化のための扶余古蹟保存会の陳情書や設立趣旨書には百済を日本と縁が深い土地であり、飛鳥文化形成に多大な影響を与えたことを強調しながら百済と日本を「唇齒輔車」の関係とするなど両国の緊密性を強調している<sup>96</sup>。財団法人扶余古蹟保存会の発足と活動は百済の旧都扶余を飛鳥の故郷と認識させて観光名所化することを促進した。

財団法人扶余古蹟保存会が実施した主な事業は古蹟の保存、遺物の保存および収集、古蹟に関する調査研究および発表、観覧者の便宜提供のための計画および設備、その他古蹟遺物の保存に関する事項および古蹟遺物紹介などであった<sup>97</sup>。そのうちの遺物の収集と保存活動を見ると、遺物の購入・寄贈・寄託などが行われたが、一九三三年から一九三七年まで「前部」銘標石など六〇点余りを購入し阜蘭寺石仏二体などが寄託され、多数の瓦当と土器、古馬像などが寄贈された。

また、大坂金太郎を中心に扶蘇山門楼址、甌山城、塩倉里古墳などが調査されたが、公州・扶余・青陽の三郡を中心に扶余分館成立時まで持続した。また、古蹟保存だけでなく一般人にこれを知らせるための交通・宿泊など便宜施設の確保と扶余の古蹟を紹介するパンフレットおよびハガキ、案内記などの発刊事業を実施した<sup>98</sup>。その結果、財団法人設立以後、考古品陳列館を訪問した観覧客数は一九二九年に三五〇〇人程度であったのが一九三二年末には七一五六人と二倍以上増加した<sup>99</sup>。

これと関連して大坂金太郎の個人的な活動にも注目する必要がある。慶州で主に活動した彼は一九三二年末、扶余博物館長として赴任した後<sup>100</sup>、扶余の古蹟に対する再解釈を通して扶余の霊地化または聖域化作業に邁進した<sup>101</sup>。例えば、欽明天皇九年(五四八)に三七〇人の日本人を百済に送って築城したという得爾辛城を扶余邑東側の青馬山城に比定し、これは当時日本が積極的に百済救護に努めたと

いう証拠であるとした。また、落花岩に身を投じた主体が百済の女性だけでなく日本人の夫人も含まれたとしたり、皐蘭寺を日本人最初の留学生が起居した場所であると宣伝した。彼の活動が一部扶余の観光名所に寄与し、一九三九年の扶余神宮が建設される土台となったことは事実であるが、上の事例は全て史実を歪曲したものであったため、その弊害はしばらく続き<sup>102</sup>、慶州での古蹟調査活動を地域のみ移して再現したものに過ぎなかった。

朝鮮総督府は神武天皇即位二六〇〇年の一九四〇年を記念するため、一九三五年一〇月から紀元二六〇〇年祝典準備委員会を内閣に設置するなど多くの努力を傾け、朝鮮総督府でも施政三〇年を記念するための各種行事を企画する。朝鮮総督府では記念事業の一つとして扶余に神宮を造営するという内容を一九三九年三月八日発表することになる<sup>103</sup>。一九三九年八月一日には扶余神宮清祓式を挙行するが、この日、中堅青少年修練所開所式と総督府博物館扶余分館開館式が同時に行われた<sup>104</sup>。

中堅青少年修練所は、毎年各道知事が推薦する男女五〇〇人を入所させ、一ヶ月ずつ精神教育と簡単な軍事訓練を実施する場所であり<sup>105</sup>、佳塔里寺址はこの訓練所を作る過程で見られた遺跡である。扶余別館は、一九二九年に発足した財団法人扶余古蹟保存会が主軸となつて一九三三年から扶余別館建設請願書を提出したが、財政上の問題で実現されなかった。しかし、扶余神宮造営を契機に別館設立が決定され、一九三九年四月一日から観覧が許諾されて開館式を行うこととなった。そうした点から扶余別館の開館は内鮮一体の深化と神宮建設など朝鮮総督府の植民政策意図が反映された産物といえる。

扶余神宮建設によって扶余市街地整備のための扶余神都建設計画（一九三九・一〇・三一）が樹立され、扶余と窺岩一帯の四四二四万㎡（約一三三三万坪）を計画区域として決定する（図七七一）<sup>106</sup>。当時、人口一五〇〇〇人もならない扶余面を対象にして、それよりさらに広い面積を都市計画面積としたことは非常に特異な事例である。扶余の都市計画案で注目されるのは広い面積の神宮外苑を作るということであった。当時、日本では紀元二六〇〇年記念事業の一つとして檀原神宮の規模を広げ、外苑を拡張しようとする計画が樹立されていた<sup>107</sup>。したがって、扶余神宮建設計画案を立てる際に、檀原神宮の整備過程を参照し、問題点について事前に備えようとしたことを推察できる。

一九三〇年代の扶余地域における古蹟調査の再開と観光名所化は扶余神宮の造営と神都建設に帰結され、扶余は「内鮮一体の靈地」として宣伝される。国民精神総動員朝鮮連盟から刊行されたパンフレットを見ると、百済の都である扶余が日本と最も縁故が深い場所であることから神宮を建設することになったと強調している<sup>108</sup>。しかし、このような事業は一九四一年一月八日のいわゆる太平洋戦争が勃発するとともに、それ以上工事が進捗されず、一九四五年前半期に神宮の礎石工事が終わったに過ぎなかった。

#### まとめ

本章では百済故地に関する古蹟調査事業の展開過程を四時期に区分してその流れを把握し、さらに一九三〇年代から扶余地域における寺址の発掘調査が集中した背景を追跡してみた。百済故地に対する古蹟調査事業は大きく四時期に展開した。

第一期は一九〇九年の関野貞一行の古蹟調査から始まり、光州、公州、扶余、益山など百済の都城址に対する調査が行われた。第二期は一九一六年の「保存規則」施行以後、最も広範囲かつ組織的な調査が実施されるが、第一期の都城址に加えて羅州地域に対する発掘が追加される。古蹟調査委員会で羅州潘南面古墳群のような新たな遺跡を認知することになったのは殖産局山林課で作成した「古蹟台帳」といった基礎資料があったため可能であったものと考えられる。第三期は一九二〇年代以後、財政的・行政的な理由から発掘調査は減少するが、発掘報告書の刊行といった整理と遺跡の保存が中心となる。第四期は朝鮮古蹟研究会が設立されて以後、一九三五年から扶余地域の寺院址に対する調査が集中的に実施される。百済故地に関する古蹟調査事業は都城址中心の調査、全地域を対象にした組織的な調査と発掘、整理および保存活動、特定地域と分野を中心にした調査などで展開したといえる。

一九三〇年代後半以後、百済故地の古蹟調査は古墳に対する調査でなく、扶余地域の廢寺址が中心となった。このような方向転換は日本の学界の飛鳥文化に対する関心の増大、財団法人扶余古蹟保存会の活動と関連があるものと考えられる。当時、日本学界の懸案であった法隆寺再建非再建論争の解明という自らの問題を解決するためには、飛鳥文化の源流である百済寺院に対する理解が必須であった。このような必要性から扶余の寺院址発掘に参加した石田茂作は軍守里寺址をはじめとする扶余地域の寺院址発掘を通して日本の四天王寺式

伽藍配置の源流が百済にあることを確認した。彼は、その後、日本に戻って法隆寺論争に終止符を打つことになる若草伽藍の発掘を主導することになった。このように百済故地に対する古蹟調査事業、特に扶余地域の廃寺址に関する発掘調査は日本の飛鳥時代の寺院に関する問題意識が早くから、そして深く投影されていたのである。

一方、一九二九年に財団法人となった扶余古蹟保存会は大坂金太郎を中心に活発に活動しながら、扶余を日本と縁が深い百済の旧都と認識させて観光名所化するのに寄与する。そうした対内外的な活動の結果、扶余は日本と縁が深い場所であると宣伝され、一九三九年に朝鮮総督府は扶余地域に神宮と神都を造営することとなり、扶余は内鮮一体の霊地として永らく記憶されることとなる。

遺跡や遺物は自らは語らない。それを調査した目的や研究者の史観によって解釈は変わるためである。植民地期の扶余地域における廃寺址調査では百済の寺院が四天王寺式伽藍配置ということと共に出土遺物が飛鳥文化と直接関連することを確認したことが何より重要な課題であり成果であった。しかし、百済寺院の伽藍配置や遺物が飛鳥時代のそれと同じであるということを確認したのみで、その差異点については無関心であり、そのような他者化された視角(自身の基準によって固定された存在として規定した外在的問題意識)と研究傾向は現在まで続いていると言わざるを得ないだろう。

#### □ 百済故地の古蹟調査事業関連参考文献(表一〜四関連)

- 谷井濟一「朝鮮通信」(『考古学雑誌』三六、日本考古学会、一九二二年)。
- 関野貞「朝鮮東部の遺跡」(『建築雑誌』三一、一九一三年)・『朝鮮の建築と芸術』(岩波書店、一九四一年)。
- 関野貞「朝鮮文化ノ遺跡其三」(『朝鮮古蹟調査略報告』、朝鮮総督府、一九一四年)。
- 関野貞「新羅及百済古蹟」(『朝鮮及滿洲』九七、朝鮮及滿洲社、一九一五年)。
- 関野貞「百済の遺跡」(『考古学雑誌』六一、一九一五年)・『朝鮮の建築と芸術』(岩波書店、一九四一年)。
- 黒板勝美「朝鮮史蹟遺物調査復命書」(一九一六年)・『黒板勝美先生遺文』(吉川弘文館、一九七四年)。
- 朝鮮総督府『大正五年度古蹟調査報告』(一九一七年)。
- 朝鮮総督府『大正六年度古蹟調査報告』(一九二〇年)。

- 朝鮮総督府『大正十一年度古蹟調査報告』(一九二四年)。
- 関野貞「公州新出土百濟時代の埴」(『建築雜誌』四五三、一九二四年)・『朝鮮の建築と芸術』(岩波書店、一九四一年)。
- 軽部慈恩「公州に於ける百濟古墳一・二」(『考古学雜誌』二三卷七・九号、一九三三年)。
- 軽部慈恩「公州に於ける百濟古墳三・六」(『考古学雜誌』二四卷三・五・六・九号、一九三四年)。
- 朝鮮総督府『昭和二年度古蹟調査報告』二冊(公州宋山里古蹟調査報告、一九三五年)。
- 軽部慈恩「公州に於ける百濟古墳七・八」(『考古学雜誌』二六卷三・四号、一九三六年)。
- 朝鮮古蹟研究会『昭和十一年度古蹟調査報告』(一九三七年)。
- 朝鮮古蹟研究会『昭和十二年度古蹟調査報告』(一九三八年)。
- 斎藤忠「彙報」昭和一四年における朝鮮古蹟調査の概要」(『考古学雜誌』三〇卷一号、一九四〇年)。
- 朝鮮古蹟研究会『昭和十三年度古蹟調査報告』(一九四〇年)。
- 杉三朗「百濟山懷精舍址」(『古美術』一三卷五号、一九四三年)。
- 軽部慈恩『百濟美術』(宝雲舎、一九四六年)。
- 藤澤一夫「百濟仏教遺跡の研究」(『人文』三卷一号、一九四六年)。
- 藤澤一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の関係」(『アジア文化』八卷二号、一九七一年)。
- 穴澤 光・馬目順一「羅州潘南古墳群」(『古代学研究』七〇、一九七三年)。
- 有光教一「羅州潘南面新村里第九号墳発掘調査記録」(『朝鮮学報』九四、一九八〇年)。
- 有光教一「扶余陵山里伝百濟王陵・益山双陵」(『檀原考古学研究論集』四・五合集、一九八三年)。
- 小泉頭夫『朝鮮古代遺跡の遍歴』(六興出版、一九八六年)。
- 徐聲勳・成洛俊『羅州潘南古墳群』総合調査報告書(国立光州博物館、一九八八年)。
- 高橋潔「関野貞を中心とした朝鮮古蹟調査行程」(『考古学史研究』九、二〇〇一年)。
- 有光教一「公州宋山里第二九号墳」(『朝鮮古蹟研究会遺稿』Ⅱ、ユネスコアジア文化研究センター、二〇〇二年)。
- 高正龍「扶余時代の藤澤先生」(『朝鮮古代研究』五、二〇〇四年)。
- 李炳鎬「扶余旧衙里出土塑造像とその遺跡の性格」(『百濟文化』三六、二〇〇七年)。

- 1 盧重国『百済政治史研究』（二潮閣、一九八八年、六〇七頁）。
  - 2 早乙女雅博「新羅の考古学調査一〇〇年の研究」（『朝鮮史研究会論文集』三九、二〇〇五年）。
  - 高橋潔・広瀬繁明・山本訝和「関野貞の朝鮮古蹟調査」（『関野貞のアジア踏査』、東京大学コレクションXX、二〇〇五年）。
  - 李順子『日帝強占期古蹟調査事業研究』（景仁文化社、二〇〇九年）。
  - 3 高橋潔「関野貞を中心とした朝鮮古蹟調査旅程：一九〇九〜一九一五」（『考古学史研究』九、二〇〇一年）。
  - 内田好昭「日帝統治下の朝鮮半島における考古学的発掘調査（上）」（『考古学史研究』九、二〇〇一年）。
  - 4 朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』三（一九一六年）および『朝鮮古蹟図譜解説』三（一九一六年、一〜四頁）。
  - 5 朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』四（一九一六年）および『朝鮮古蹟図譜解説』四（一九一六年、三〜四頁）。
  - 6 関野貞「朝鮮東部の遺跡」（『建築雑誌』三二、一九一三年）…『朝鮮の建築と芸術』（岩波書店、一九四一年、七〇七頁）。
  - 朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜解説』三（一九一六年、七頁）。
  - 7 陵山里古墳群発掘の経緯については次の論考が参考となる。高橋潔「関野貞を中心とした朝鮮古蹟調査旅程：一九〇九〜一九一五」（前掲誌、二七〜二九頁）および内田好昭「日帝統治下の朝鮮半島における考古学的発掘調査（上）」（前掲誌、七七頁）。
  - 8 鄭尙雨「一九一〇〜一九一五年の朝鮮総督府囑託の学術調査事業」（『歴史と現実』六八、二〇〇八年、二五七頁）。
  - 9 『毎日新報』には一九一五年七月二二・二三日付に「任那故地紀行」という黒板勝美のインタビューが掲載され、七月二九日から八月一七日まで「南鮮史蹟の調査」を一五回にわたって連載した。しかし、踏査の結果は芳しくなく「今後、多数の資料を発見し、上代文化の痕跡が闡明となる時期があるものと信じる」（一九一五・八・一〇日付）とし、後日に期している。
  - 10 黒板勝美「朝鮮事蹟遺物調査復命書」（『黒板勝美先生遺文』、吉川弘文館、一九七四年、三〇〜三二頁）。
  - 11 関野貞「百済の遺跡」（『考古学雑誌』六巻四号、一九一五年）…『朝鮮の建築と芸術』（前掲書、四六六頁）。
- 朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』三（前掲書、二五八頁の図版七三二）。



<sup>1</sup><sub>2</sub> 関野貞『朝鮮の建築と芸術』（前掲書、四六六～四六七頁）。

<sup>1</sup><sub>3</sub> 図七・二の金銅装飾は冠飾の一部と考えられるが、逆心葉形の文様は法隆寺金堂に奉安された四天王像の宝冠や玉蟲廚子の飾金具、仏像光背などに広く使用された装飾と非常に類似している。建築史家の伊東忠太はその後、この文様を百済式と推定する論文を発表している（伊東忠太「玉蟲廚子の文様と其源流」（『仏教美術』一三、一九二九年）。この文様に対する最近の研究動向については次の論考が参考となる。山本忠尚「飛鳥の文様―猪目形」（『季刊明日香風』八三、二〇〇二年）。

<sup>1</sup><sub>4</sub> 藤田亮策「朝鮮古文化財の保存」（『朝鮮字報』一、一九五一年、二五九～二六一頁）。一方、朝鮮総督府博物館の主要沿革と活動については次の論考で整理されており参考となる。金仁徳「朝鮮総督府博物館」（『韓国博物館一〇〇年史』、国立中央博物館編、社会評論、二〇〇九年）。

<sup>1</sup><sub>5</sub> 李成市「黒板勝美を通してみた植民地と歴史学」（『韓国文化』二三、一九九九年）…『作られた古代』（サミン、二〇〇一年、二一七～二一九頁）。

<sup>1</sup><sub>6</sub> 朝鮮総督府「大正五年度古蹟割説明および概要」（『大正五年度朝鮮古蹟調査報告』、一九一七年）。

朝鮮総督府「大正六年度古蹟調査事務計画」（『大正六年度朝鮮古蹟調査報告』、一九二〇年）。

<sup>1</sup><sub>7</sub> 第二期には一九一六年の今西龍の漢江流域（一府一五郡）、一九一七年の谷井濟一の京畿道広州・高陽、忠南天安・公州・青陽・論山、全北益山、全南羅州、一九一八年の全南羅州・順天・麗水などに対する古蹟調査が行われた。

<sup>1</sup><sub>8</sub> 当時、今西龍は漢城時期の百済都城址について河南慰礼城は広州、漢山は南漢山と把握していた。

<sup>1</sup><sub>9</sub> 今西龍「京畿道広州郡等遺跡遺物調査報告書」（『大正五年度朝鮮古蹟調査報告』、一九一七年、八五～八七頁）。

<sup>2</sup><sub>0</sub> 谷井濟一「京畿道広州郡など一〇郡古蹟調査略報告」（『大正六年度朝鮮古蹟調査報告』、一九二〇年、五九六～六〇一頁）。その後、一九三五年の宋山里古墳群に関する発掘報告書を発刊した際、百済初期の古墳型式を説明する過程で、石村里六・七号墳平面図、可楽里二号墳に関する実測図、中谷里甲・乙墳および梅龍里二・八号墳実測図を掲載した（朝鮮総督府『昭和二年度古蹟調査報告（第二冊）―公州宋山里古

墳調査報告』(一九三五年)、挿図一〇(一)。

<sup>2</sup><sub>1</sub> 権五栄「漢城都邑期文化遺産の分布様相と活用方案」(『漢城百済の歴史と文化』、二〇〇七年、一五三〜一五四頁)。

<sup>2</sup><sub>2</sub> (上掲書、一五七〜一五八頁)。

<sup>2</sup><sub>3</sub> 朝鮮総督府『朝鮮宝物古蹟調査資料』(一九四二年、四八頁)。

<sup>2</sup><sub>4</sub> 国立中央博物館では『光復以前調査遺跡遺物未公開図面』という題目で最近まで六冊が刊行されている。

<sup>2</sup><sub>5</sub> 国立中央博物館『光復以前博物館資料目録集』(一九九七年、二三七〜二三八頁)。

<sup>2</sup><sub>6</sub> この一帯に関する一九七〇年代の発掘調査で石村洞一帯の古墳分布図は作成されなかった。可楽洞古墳群では六基、芳萐洞古墳群では六基が発掘されている。

<sup>2</sup><sub>7</sub> 本稿が二〇一〇年に最初に発表された後、植民地期の石村洞古墳群の発掘地域とそれ以後の発掘調査内容を詳細に比較検討した論文が公表されており参考となる(図七―四)。

趙佳英「石村洞古墳群の築造様相検討―古墳分布を中心に」(『韓国上古史学報』七五、二〇一二年)。

<sup>2</sup><sub>8</sub> 朝鮮総督府「扶余郡」(『大正六年度朝鮮古蹟調査報告』、一九二〇年、六二八頁)。

<sup>2</sup><sub>9</sub> (上掲書、六五二頁)。

<sup>3</sup><sub>0</sub> 梅原末治「百済の古墓制」(『朝鮮古代の墓制』、左右宝刊行会版、一九四六年、図版二二)。

<sup>3</sup><sub>1</sub> 朝鮮総督府「羅州郡」(『大正六年度朝鮮古蹟調査報告』、一九二〇年、六五二頁)。

<sup>3</sup><sub>2</sub> 有光教一「羅州潘南面新村里第九号墳発掘調査記録」(『朝鮮学報』九四、一九八〇年、一一二頁)。総督府博物館から刊行された陳列品図鑑には羅州潘南面徳山里五号墳甕棺と土器の写真が掲載されている(朝鮮総督府博物館『博物館陳列品図鑑』三(一九二六年))。図鑑には新村里五号墳と表記されているが、この古墳は当時調査されていなかったため、誤字であると考えられる。

<sup>3</sup><sub>3</sub> 今西龍「咸安郡(上)」(『大正六年度朝鮮古蹟調査報告』、一九二〇年、二五九〜二七三頁)。今西龍はこの鹿角刀装具について日本から輸

入されたものか日本の製品を模倣した可能性について言及している(上掲書、二六六頁)。

<sup>34</sup> 朝鮮総督府『朝鮮宝物古蹟調査資料』(一九四二年、一七二〜一七三頁)。

<sup>35</sup> 国立文化財研究所『羅州新村里九号墳』(二〇〇一年、三七頁)。

<sup>36</sup> 崔柄澤「日帝下林野調査事業の施行目的と性格」(『韓国文化』三七、二〇〇六年、二〇〇〜二〇九頁)。

<sup>37</sup> 要存国有林の分布地は林相が優良な北部国境地帯の鴨綠江、豆満江流域の原始林と蓋馬高原および江原道一帯に集中分布している。ところで、三南地方の要存林野は学術上の必要による山城、廢寺址、窯址が大部分である。

<sup>38</sup> 一九一七年から実施された林野調査事業の場合、該当地域の林野所有者や国有林野の縁故者二名以上を選定して地主総代(林野総代)としたが、それは面長や区長職に長期間従事した者で一般の実状に精通し協力的な人物であった。一方、一九一〇年代初半からは郡守、面長、憲兵分遣所長を設立主体とする植林組合が登場する。要存林野の詳しい把握と管理には彼らの深い関与があったものと考えられる。姜英心

「日帝下「朝鮮林野調査事業」に関する研究(下)」(『韓国学報』三四、一九八四年、九四頁)。および崔柄澤「日帝下林野調査事業の施行目的と性格」(前掲誌、二一八〜二二四頁)。

<sup>39</sup> 『朝鮮古蹟図譜』には「本府土木局營繕課実測」という古蹟実測図が含まれていることを見ると、朝鮮総督府内部では古蹟調査に関する資料が共有されていたものと考えられる。營繕課の実測図の意義については次の論考が参考となる。

綱伸也・内田好昭「関野貞と日本考古学」(『関野貞のアジア踏査』、二〇〇五年、一一三〜一二四頁)。

<sup>40</sup> 李順子『日帝強占期古蹟調査事業研究』(前掲書、一三九〜一四一頁)。

<sup>41</sup> 藤田亮策「朝鮮に於ける古蹟の調査及び保存の沿革」(『朝鮮』一九九、一九三二年、九九頁)。

<sup>42</sup> 小泉頭夫「扶余発見の遺物の二三」(『大正十一年度古蹟調査報告書(一冊)』、一九二四年、三五頁)。

<sup>43</sup> 関野貞「公州新出土百濟時代の埴」(『建築雑誌』四五三、一九二四・五年)‥『朝鮮の建築と芸術』(前掲書、四七六〜四八〇頁)。

<sup>44</sup> 朝鮮総督府『昭和二年度古蹟調査報告(第二冊)』(公州宋山里古蹟調査報告)(前掲書)。

<sup>45</sup> 尹龍赫「軽部慈恩の公州百済文化研究」(『百済文化』三四、二〇〇五年)。

尹龍赫「軽部慈恩の百済古墳調査と遺物」(『韓国史学報』二五、二〇〇六年)。

鄭相基「植民地期資料からみた宋山里と陵山里古墳群」(『東垣学術論文集』一〇、二〇〇九年)。

<sup>46</sup> 有光教一「公州宋山里第二九号墳」(『朝鮮古蹟研究会遺稿』四、ユネスコアジア文化研究センター、二〇〇二年、一四頁)。有光教一は「私掘」について、法律上、総督府が任命した古蹟調査委員や総督府博物館職員が発掘したものでなければ、このように呼んだと脚注を付けて説明している。しかし、軽部慈恩の調査が、短期間に遺物のみ収集し報告書も刊行されなかった彼らの古蹟調査活動といかなる違いがあるのか疑問である。当時、古蹟調査委員会は主要遺跡に対する発掘を独占しながら盗掘を放置・助長し、その結果多くの重要な遺跡が破壊、消滅したという批判を免れない。

<sup>47</sup> 梅原末治「百済の古墓制」(前掲書、六三〜六四頁)。

<sup>48</sup> 当時の軽部慈恩の活動と関連した著書として次の文献が参考となる。軽部慈恩編『忠南郷土誌』(公州公立高等普通学校校友会、一九三五年)・『百済美術』(宝雲舎、一九四六年)・『百済遺跡の研究』(吉川弘文館、一九七一年)。

<sup>49</sup> 国立中央博物館「大正一二〜一五年復命書」(『国立中央博物館保管古文書目録』、一九九六年、文書番号二三九―一五番)。田中十蔵は一九一五年に技手として総督府博物館に勤務し、地図測量、製図を担当していた(金仁徳「朝鮮総督府博物館」(前掲書、一一九頁))。

<sup>50</sup> 当時、収集され国立中央博物館に保管されている船里出土文字瓦に関する論考が発表されており参考となる。

金圭東・成在賢「船里銘文瓦考察」(『考古学誌』一七、二〇一一年)。

<sup>51</sup> 鮎貝房之進「百済古都案内記」『朝鮮』二三四、一九三四年一月、一一四〜一一五頁)。一方、一九三三年に発刊された図鑑には「風納土城はその地理上の位置から、また出土した土器、陶器、銅弩、白銅鏡などから百済の遺跡であることは疑いが無く、この鏃斗もまた百済旧都の遺品として大陸文化移入の好例を示す」と説明している(朝鮮総督府博物館『博物館陳列品図鑑』四(一九三三年))。しかし現在、国立中央博物館所蔵品の中に銅弩や白銅鏡は残っていない。

<sup>5 2</sup> ただ、一九三七年ソウル近郊のハイキングコースを紹介する冊子の中に石村洞古墳、風納土城、岩寺洞遺跡を紹介したものがあり参考となる。佐脇精編『風納里土城』（京電ハイキングコース第三集、京城電気株式会社、一九三七年）。

<sup>5 3</sup> 今西龍「全羅北道西部地方旅行雑記」（『文教の朝鮮』、一九二九年）…『百済史研究』（近沢書店、一九三四年、五六八～五六九頁）。

<sup>5 4</sup> 藤島亥治郎「朝鮮建築史論其三」（『建築雑誌』二、一九三〇年）…『朝鮮建築史論』（一九六九年）。

<sup>5 5</sup> 藤田亮策「朝鮮古蹟調査」（『朝鮮学論考』、藤田先生記念事業会、一九六三年、八二頁）。

<sup>5 6</sup> 李順子「日帝強占期朝鮮古蹟研究会と古蹟調査事業」（『日帝強占期古蹟調査事業研究』、二〇〇九年、二〇八～二二五頁）。

<sup>5 7</sup> 吳永贊『楽浪郡研究』（四季節、二〇〇六年、二六二頁）。

<sup>5 8</sup> 藤田亮策「朝鮮古蹟調査」（前掲書、八二～八三頁）。

<sup>5 9</sup> 有光教一「私の朝鮮考古学」（『三千里』三八、一九八四年）…『朝鮮考古学七十五年』（昭和堂、二〇〇七年、八頁）。

<sup>6 0</sup> 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』（財）聖徳太子奉讃会、一九三六年）。この本には黒板勝美の「書」と著者本人の「序文」がある。石田茂作は一九二六年、満鮮旅行中に病に罹り六ヶ月間入院し、その後、中川忠順の推薦で聖徳太子奉讃会の「聖徳太子四十六院の研究」研究プロジェクトを遂行することになったという。

<sup>6 1</sup> 石田茂作『法隆寺雑記帖』（前掲書、一九四～一九五頁）。

<sup>6 2</sup> 藤澤一夫「百済国都泗沘城と日本摂河国百済郡」（『激動の古代東アジア』、帝塚山考古学研究所、一九九五年、一四四頁）。

<sup>6 3</sup> 高正龍「扶余時代の藤澤先生」（『朝鮮古代研究』五、二〇〇四年、二二頁）。

<sup>6 4</sup> 軽部慈恩『百済美術』（前掲書、一一六～一二六頁）。

小泉頭夫「公州の古墳」（『朝鮮古代遺跡の遍歴』、一九八六年、二〇〇～二〇七頁）。

尹龍赫「公州宋山里六号墳の四神図壁画について」（前掲誌、四七九～五〇六頁）。

<sup>6 5</sup> 関野貞「博から見たる百済と支那南北朝特に梁との文化関係」（『宝雲』一〇、一九三四年九月）…『朝鮮の建築と芸術』（前掲書、四八九

（四九〇頁）。

<sup>6</sup> 一九三〇年代以後、扶余地域の古蹟調査の内容については次の論考で整理した。

李炳鎬「日帝強占期扶余地域の古蹟調査」（『日帝強占期の泗泚認識』、（財）扶余郡文化財保存センター、二〇〇九年、一〇～一六頁）。

<sup>6</sup> 齋藤忠「調査計画と其の実施の経過」（『昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告』、一九三七年、一頁）。

<sup>6</sup> 梅原末治「扶余陵山里東古墳の調査」（『昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告』、一九三八年、一二四頁）。

<sup>6</sup> 藤澤一夫「百濟仏教遺跡の研究」（『人文』三卷一号、一九四六年）。

藤澤一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の関係」（『アジア文化』八卷二号、一九七一年）。

<sup>7</sup> 米田美代治は一九四二年一〇月に病死する前まで扶余に滞在しながら定林寺址五層塔と王宮里五層塔の実測図を作成し、その意匠計画に関する論文を発表している。米田美代治『朝鮮上代建築の研究』（秋田屋、一九四四年）。

<sup>7</sup> 小泉頭夫「百濟石仏の発見」（『朝鮮古代遺跡の遍歴』、一九八六年、一八八～一八九頁）。飛鳥寺の瓦窯は一九五三年と一九八二年の二回にわたって二基が調査された。（明日香村教育委員会『飛鳥寺瓦窯の調査』（一九八三年））。図七―五の二は一号瓦窯で、ここからは飛鳥寺の創建瓦の中で花組系列（図六―三二の一）の瓦が製作・供給された場所と推定されている（大脇潔「飛鳥時代初期の同範軒丸瓦」（『古代』九七、一九九六年、二二六～二二七頁））。

<sup>7</sup> 双北里窯址は瓦陶兼業の登窯で焼成室、窯床（階段式）、煙道部など窯の構造と出土品を勘案すると、六世紀末から七世紀前半が中心年代であるものと考えられる。

<sup>7</sup> 扶余神宮の造営過程で行われた発掘は、通常の調査進行が困難であったため、未整理・未報告状態にある。例えば、旧衙里寺址の場合、一九四二年九月に方形舍利孔がある心礎石が残っており、収拾調査を実施した。しかし、その付近に扶余警察署庁舎建設が行われることによつて調査を実施できず、庁舎完成後になってようやくその裏庭から多量の瓦と塑造像片を収集したという（李炳鎬「扶余旧衙里出土塑造像とその遺跡の性格」（『百濟文化』三六、二〇〇七年、六八～六九頁））。

<sup>74</sup> 軍守里寺址、外里寺址、佳塔里寺址、東南里寺址については当時のものと再発掘調査の内容を比較した論考があり参考となる(金成南・李美賢「日帝強占期の遺跡発掘調査と再検討」(『日帝強占期の泗泚認識』、二〇〇九年)。

<sup>75</sup> 有光教一「羅州潘南面古墳の発掘調査」(『昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告』、一九四〇年、二〇頁)。

<sup>76</sup> (前掲書、三四頁)。

<sup>77</sup> 津田左右吉は一九一七年の古蹟調査委員会による任那日本府の探求について「憶測説」に過ぎないもので、根拠が弱いと懐疑的な立場を提起し、今西龍もこれに同調したという(林直樹「今西龍と朝鮮考古学」(『青丘学術論集』一四、一九九九年、七五頁)。このような雰囲気の中で谷井済一の仮称「羅州潘南面における倭人の遺跡」という報告書はついに公刊されなかった。梅原末治が「朝鮮各地の古墳墓は全羅南道地帯を除くと、広範囲な発掘調査が実施された」と回顧していることから見ても(梅原末治「南鮮に於ける古墳墓調査の経過」(『朝鮮古代の墓制』、一九四六年、八七頁)、古蹟調査委員会や朝鮮古蹟研究会では潘南面古墳群に対する発掘調査の方針が定まっていなかった可能性がある。

<sup>78</sup> これは関野貞が建築学者であったという点と遺物蒐集の容易さなどに起因したものと考えられる。関野貞の古墳発掘の目的は「失われた木造建築と古墳の関係」の解明であり、彼は古墳を一種の文化標徴と認識していた(山本雅和「文化標徴としての古墳」(『考古学史研究』九、二〇〇一年、四九〜五八頁)。

<sup>79</sup> 杉三郎「軍守里寺址発掘」(『趣味の扶余』、迎月堂、一九四一年、一〇頁)。一九三六年一〇月一六日付『報智新聞』の「仏教伝来の祖地百済の旧都発掘」記事を再引用。

<sup>80</sup> 高橋健自・石田茂作『満鮮考古行脚』(雄山閣、一九二七年、五二頁)。

<sup>81</sup> 石田茂作「飛鳥奈良時代に於ける日鮮文化の交渉」(『考古学雑誌』一八卷二号、一九二八年)。

<sup>82</sup> 石田茂作「法隆寺若草伽藍址の発掘に就て」(前掲書、一九四〜一九五頁)。

<sup>83</sup> 綱伸也「瓦研究における三つの指標」(『考古学史研究』八、一九九八年、三九頁)。

<sup>84</sup> 藤澤一夫「日鮮古代屋瓦の系譜」(『世界美術全集』二、角川書店、一九六一年)。このような藤澤一夫の瓦研究の特徴については次の論考が参考となる。綱伸也「藤澤一夫先生と瓦研究」(『朝鮮古代研究』五、二〇〇四年)。

<sup>85</sup> 高木博志「日本美術史と朝鮮美術史の成立」(『国史の神話を超えて』、二〇〇四年、一七〇〜一七二頁)。

<sup>86</sup> 金容撤「岡倉天心と日本美術史の成立」(『日本思想』七、二〇〇四年、一八五頁)。

<sup>87</sup> 大橋一章「法隆寺の創建と再建」(『講座美術史』一六、二〇〇一年、二三頁)。最近、若草伽藍に関する報告書が刊行され参考となる(島田敏男「法隆寺再建・非再建論争史と若草伽藍」(『法隆寺若草伽藍蹟発掘調査報告』、奈良文化財研究所、二〇〇七年)。

<sup>88</sup> 法隆寺東南側若草伽藍と伝わる空き地には本来、心礎石が残っていた。一九二九年四月、法隆寺を調査した石田茂作は塔址を調査したが、礎石はすでに大阪のある富豪の邸宅に移されていた。一九三九年三月、喜田貞吉・足立康によつて法隆寺論争が再燃した時、石田茂作はその仲裁のため法隆寺問題を批判する文章を新聞に寄稿した。その過程でこの礎石を言及したことがきっかけとなり、問題の礎石が法隆寺に返還された。

<sup>89</sup> 石田茂作「法隆寺若草伽藍址の発掘に就て」(前掲書、一二八〜一三九頁)。

<sup>90</sup> 坂詰秀一「軍守里廃寺址と若草伽藍」(『月刊考古学ジャーナル』二月号(通巻五九六号)、二〇一〇年)にもこのような見解が披瀝されている。

<sup>91</sup> 東西回廊址北側のいわゆる付属建物址の場合、軍守里寺址の発掘ですでに実態があらわれていたが、その意味については長い間関心が払われることがなかった。このような問題点とその意味については次の論考で整理した。李炳鎬「植民地期における扶余地域の寺址調査に対する再検討」(『奈良美術研究』一一、二〇一一年)。

<sup>92</sup> 高木博志「序文」(『近代天皇制と古都』、岩波書店、二〇〇六年、一四頁)。

<sup>93</sup> その中で和辻哲郎の『古寺巡礼』(岩波書店)は一九一八年に『思潮』という雑誌に連載されたものを一九一九年五月に刊行したものであり、奈良の古寺に対する印象を豊かな美的感受性が交わった端正な文体で記しているが、当時この本を持って古都奈良を訪問する人々が多かつたという。



94 中根隆行「帝国日本の満鮮観光地と古都慶州の表象」（『韓国文学研究』三六、二〇〇九年）。

95 徐己才「日本近代「旅行案内書」を通してみた朝鮮と朝鮮観光」（『日本語文学』一三、二〇〇二年、四三四頁）。

96 李順子「地方古蹟保存会と地方博物館」（『日帝強占期古蹟調査事業研究』、二〇〇九年、四二二〜四二三頁）。

97 李慶洙「扶余地域近代博物館の胎動と国立博物館扶余分館の成立」（『特別展扶余博物館の足跡』、二〇〇九年、二八四〜二八五頁）。

98 当時刊行された扶余関連主要案内記は次のとおりである。

扶余古蹟保存会『百済の事蹟と扶余の名勝旧蹟』（一九二六年）

（財）扶余古蹟保存会『百済旧都扶余古蹟名勝案内記』（一九三四年）

（財）扶余古蹟保存会『扶余を見るには！』（一九三四年）

（財）扶余古蹟保存会『百済旧都古蹟名勝写真帖』（一九三四年）

朝鮮総督府『朝鮮総督府博物館 扶余分館略案内』（一九三九年）

杉三郎『趣味の扶余』（迎月堂、一九四一年）。

99 崔錫榮「日帝植民地の状況と扶余古蹟保存会の活動」（『韓国博物館歴史二〇〇年』、民俗園、二〇〇八年、一七四〜一七五頁）。

100 彼は一九三二年一月、総督府博物館長藤田亮策、忠清南道知事岡崎哲郎の要請を受けて扶余博物館長となり、百済の遺跡調査を担当することになったという（大坂金太郎「在鮮回顧十題」（『朝鮮学報』四五、一九六七年、九六頁））。しかし、彼が関与して発行した『扶余

古蹟名勝案内記』の凡例には（財）扶余古蹟保存会囑託と記録されている。

101 崔錫榮「日帝植民地の状況と扶余古蹟保存会の活動」（前掲書、一七九〜一八八頁）。

102 朝鮮総督府では扶余を内鮮一体の聖地として加工し宣伝するため、文人たちを動員したりもした。金東仁は『白馬江』という小説を一九四一年七月二四日から翌年一月三〇日まで毎日新報に連載したが、阜蘭寺を日本人女性たちが最初に留学・修学した場所として描写するなど大坂金太郎の解釈をそのまま引用している（韓秀暎「古代史復元のイデオロギーと親日文学認識の地平」（『実践文学』六五、二〇〇

二年、一九五頁)。

103 孫禎睦 「日帝下扶余神宮造営といわゆる扶余神都建設」(『韓国学報』四九、一九八七年、一三〇〜一三五頁)。

104 「扶余の扶蘇山靈地に意義深い三大儀式」『東亞日報』一九三九年八月二日付。

105 孫禎睦 「日帝下扶余神宮造営といわゆる扶余神都建設」(前掲誌、一三九〜一四〇頁)。

106 扶余神宮と神都の具体的な建立計画については青木治市「扶余神都に就て」(一〜三)(『雑誌区画整理』一九四一年四月・六月・八月号)と

孫禎睦「日帝下扶余神宮造営といわゆる扶余神都建設」(前掲誌)が参考となる。一方、公州大学の鄭載潤教授からは「扶余神宮を現在の三忠祠一帯に建立しようとしたことは、ここを扶蘇山城を観光する観光客が通らなければならない関門として設定することで、扶余を訪問した観光客は自然と神宮を通らなければならず、この道を過ぎながら天皇に対する忠誠と百済と日本がひとつのルートにあることを自然と受け入れられるようにしたのである。これは観光を通して内鮮一体を自然と注入するようにしたのである。また、阜蘭寺にある三干宮女の壁画も同様である。為政者の失政によって百済が滅亡したという観念は、朝鮮の民衆たちに朝鮮の滅亡は義慈王と同様に朝鮮国王の失政であるという観念を自然と植え付けるのである」とし、扶余神宮の選定位置や配置意図に対する有益な指摘を頂いた。

107 高木博志『近代天皇制と古都』(前掲書、五三〜五五頁)。

108 国民精神総動員朝鮮連盟『内鮮一体の靈地扶余』(一九三九年、一〜四頁)。

〈付録〉 扶余陵山里寺址出土瓦当の型式別出土位置

連番	型式	出土地点	報告書の 図面番号	報告書の 図版番号	遺物 番号	備考
1	1a	講堂址			4699-	
2	1a	講堂址南西側基壇前	125-2	156-2	4641	
3	1a	講堂址南西側隅			4699-	
4	1a	講堂址南側1号石槨			4699-	
5	1a	講堂址南側1号石槨(94年)			4699-	
6	1a	講堂址南側			4699-	
7	1a	講堂址南側基壇	130-3	161-3	4699-	
8	1a	講堂址南側基壇			4649	
9	1a	講堂址南側基壇			4699-	
10	1a	講堂址南側基壇			4699-	
11	1a	講堂址南側基壇			4699-	
12	1a	講堂址東室南東隅			4685	
13	1a	講堂址東室南東隅	128-6	159-6	4658	
14	1a	講堂址東室南東隅	127-4	158-4	4655	
15	1a	講堂址東室東南隅	130-5	161-5	4699-	
16	1a	講堂址東室東南隅			4699-	
17	1a	講堂址東室東南隅			4699-	
18	1a	講堂址東室			4699-	
19	1a	講堂址北西側隅基壇	126-7	157-7	4662	
20	1a	講堂址北西側隅			4699-	
21	1a	講堂址北側基壇外側			4699-	
22	1a	講堂址北側排水路-西室に偏在	162-7	188-7	4502	
23	1a	講堂址西室			4633	
24	1a	講堂址西室	121-1	152-1	4635	
25	1a	講堂址西室	121-2	152-2	4637	
26	1a	講堂址西室建物址			4699-	
27	1a	講堂址西室基壇			4699-	
28	1a	講堂址西室南西隅			4699-	
29	1a	講堂址西室南西隅			4644	
30	1a	講堂址西室北西側	124-6	155-6	4672	
31	1a	講堂址西室西南隅	126-8	157-8	4678	
32	1a	講堂址西室西南隅	130-8	161-8	4667	
33	1a	講堂址西室西南隅南側	120-2	151-2	4631	
34	1a	講堂址西室西南隅	124-3	155-3	4699-	
35	1a	講堂址西室西南隅			4564-	
36	1a	講堂址西室西南隅			4699-	
37	1a	講堂址西室西南隅			4699-	
38	1a	講堂址西室			4699-	
39	1a	講堂址西室			4564-	
40	1a	講堂址西室～工房址Ⅱ基壇間	119-1	150-1	4638	
41	1a	講堂址西側	129-8	160-8	4642	
42	1a	講堂址西側基壇			4679	
43	1a	講堂址西側基壇	129-3	160-3	4648	
44	1a	講堂址中央	127-1	158-1	4650	
45	1a	講堂址	123-3	154-3	4639	
46	1a	講堂址			4564-	

47	1a	講堂址	120-1	151-1	4632	
48	1a	講堂址			4647	
49	1a	講堂址～工房址Ⅱ間			4564-	
50	1a	講堂址～工房址Ⅱ間			4564-	
51	1a	講堂址～不明建物址Ⅰ間			4699-	
52	1a	工房址Ⅰ西側退間外側	75-5	105-4	5362夕-1	
53	1a	工房址Ⅱ基壇間			4699-	
54	1a	工房址Ⅱ東南隅			4699-	
55	1a	工房址Ⅱ東側基壇外側	126-6	157-6	4664	
56	1a	工房址Ⅱ			4699-	
57	1a	工房址Ⅱ	126-4	157-4	4699-	
58	1a	工房址Ⅱ～講堂址基壇間			4564-	
59	1a	工房址Ⅱ～講堂址基壇間			4699-	
60	1a	工房址Ⅱ～講堂址北側境界			4688	
61	1a	工房址Ⅱ～講堂址間			4699-	
62	1a	金堂址			4564-	
63	1a	金堂址			4564-	
64	1a	金堂址南側基壇	158-4	184-4	4487	
65	1a	金堂址外郭	156-8	182-8	4561-28	1/2
66	1a	南回廊端、西大排水路			5659-17	
67	1a	南回廊南9.4m東大排水路西14.2m	189-2	219-2	5471	
68	1a	南回廊南側14			5659-20	
69	1a	南回廊東側推定窯址(92)			3520	
70	1a	南回廊東側推定窯址(92)	48-14	82-14	3517	
71	1a	南回廊東側、東南側一帯	185-2	215-2	5469	
72	1a	南回廊址端排水路附近	161-5	187-5	4561-1	1/2(丸瓦残存)
73	1a	東排水路と東南回廊の交差点	151-2	177-2	4478	丸瓦残存
74	1a	東側大排水路(96年)	187-7	217-7	5463	
75	1a	東回廊後方東排水路と石築間	156-2	182-2	4561-17	1/2
76	1a	木塔址			4563-	
77	1a	木塔址			4561-32	1/4
78	1a	木塔址			4563-	
79	1a	木塔址東側基壇外側			4561-35	3/8
80	1a	木塔址西北側外郭			4561-31	1/2
81	1a	不明建物址Ⅰ後方北側・排水路	155-2	181-2	4513	
82	1a	不明建物址Ⅰ～講堂址東室排水口			4699-	
83	1a	不明建物址Ⅱ	150-1	176-1	4479	丸瓦残存
84	1a	不明建物址Ⅱ	188-8	218-8	5479	
85	1a	不明建物址Ⅱ	185-1	215-1	5475	
86	1a	不明建物址Ⅱ建物址	152-2	178-2	4482	丸瓦残存
87	1a	不明建物址Ⅱ建物址	152-1	178-1	4481	丸瓦残存
88	1a	不明建物址Ⅱ東側排水路	162-6	188-6	4561-19	1/2
89	1a	不明建物址Ⅱ			4561-42	1/2
90	1a	西大排水路(96年)			5659-1	
91	1a	西大排水路(95年)			4561-33	1/4
92	1a	西大排水路(95年)			4563-	
93	1a	西側排水路工房址Ⅰ間	163-2	189-2	4561-18	1/2
94	1a	未詳(95年)	151-1	177-1	4480	丸瓦残存
95	1a	未詳(95年)			4564-	
96	1a	中門址階段南側13			5659-22	
97	1a	中門址西側南回廊前	162-1	188-1	4520	
98	1b	講堂址基壇			4699-	

99	1b	講堂址南側1号石櫛(94年)			4699-	
100	1b	講堂址南側基壇			4699-	
101	1b	講堂址南側基壇			4699-	
102	1b	講堂址南側基壇			4561-36	1/2
103	1b	講堂址東北隅			4699-	
104	1b	講堂址東北隅	126-5	157-5	4669	
105	1b	講堂址東北隅			4699-	
106	1b	講堂址東室東南隅			4699-	
107	1b	講堂址東室東南隅			4699-	
108	1b	講堂址東室東南隅			4699-	
109	1b	講堂址東室北東隅			4699-	
110	1b	講堂址東室北側	127-8	158-8	4699-	
111	1b	講堂址東室	124-2	155-2	4646	
112	1b	講堂址東室			4699-	
113	1b	講堂址東側建物址			4564-	
114	1b	講堂址東側	126-1	157-1	4682	
115	1b	講堂址東側			4699-	
116	1b	講堂址北東隅	127-7	158-7	4699-	
117	1b	講堂址北側大排水路	162-4	188-4	4461-34	
118	1b	講堂址北側			4564-	
119	1b	講堂址西室西南隅			4699-	
120	1b	講堂址西室西北側			4699-	
121	1b	講堂址西室西側基壇			4699-	
122	1b	講堂址			4686	
123	1b	講堂址			4699-	
124	1b	工房址Ⅱ	125-7	156-7	4659	
125	1b	工房址Ⅱ東南隅			4699-	
126	1b	工房址Ⅱ外側北側堆積土	155-1	181-1	4561-8	1/2
127	1b	工房址Ⅱ	122-1	153-1	4636	
128	1b	工房址Ⅱ～講堂址間			4699-	
129	1b	金堂址			4563-	
130	1b	金堂址			4563-	
131	1b	金堂址			4563-	
132	1b	金堂址			4564-	
133	1b	金堂址	165-5	191-5	4561-7	1/2
134	1b	金堂址東側基壇外側	168-1	194-1	4518	
135	1b	金堂址東側	164-1	190-1	4517	
136	1b	金堂址西側基壇外郭	163-7	189-7	4495	
137	1b	金堂址外郭			4561-38	1/4
138	1b	金堂址～木塔址間			4564-	
139	1b	金堂址～木塔址間(木塔に近い)	156-5	182-5	4505	
140	1b	金堂址～木塔址中央			4500	
141	1b	南回廊端西側大排水路(96年)	187-6	217-6	5467	
142	1b	南回廊南に33m、西排水路東23m			5659-16	
143	1b	南回廊南39m、西排水路東13m			5659-14	
144	1b	南回廊南68m、東大排水路西42m			5659-10	
145	1b	南回廊南に33m、西大排水路から東に16m	186-7	216-7	5470	
146	1b	南回廊南側25.2、西大排水路西側11.4m			5659-21	
147	1b	南回廊東側排水路南側	162-2	188-2	4508	
148	1b	南回廊排水路附近			4564-	
149	1b	南回廊から南に14m	187-5	217-5	5462	

150	1b	東大排水路内部			5662-23	
151	1b	東側大排水路(96年)	186-6	216-6	5459	
152	1b	東回廊址西側基壇			5484	
153	1b	木塔址			4563-	
154	1b	木塔址			4564-	
155	1b	木塔址	160-2	186-2	4561-6	2/3
156	1b	木塔址			4563-	
157	1b	木塔址			4563-	
158	1b	木塔址			4563-	
159	1b	木塔址			4563-	
160	1b	木塔址			4561-43	1/2
161	1b	木塔址			4563-	
162	1b	木塔址			4564-	
163	1b	木塔址			4563-	
164	1b	木塔址			4563-	
165	1b	木塔址			4563-	
166	1b	木塔址			4564-	
167	1b	木塔址			4564-	
168	1b	木塔址			4561-44	1/2
169	1b	木塔址	160-3	186-3	4548	
170	1b	木塔址			4564-	
171	1b	木塔址			4563-	
172	1b	木塔址			4564-	
173	1b	木塔址南東側	165-2	191-2	4561-40	1/2
174	1b	木塔址南東側			4564-	
175	1b	木塔址東側	165-7	191-7	4561-13	1/2
176	1b	木塔址東側			4564-	
177	1b	木塔址東側	165-3	191-3	4561-12	1/4
178	1b	木塔址東側基壇			4563-	
179	1b	木塔址東側基壇			4564-	
180	1b	木塔址東側基壇			4563-	
181	1b	木塔址東側基壇			4561-9	1/2
182	1b	木塔址東側基壇			4563-	
183	1b	木塔址東側基壇			4561-15	1/8
184	1b	木塔址北東基壇隅			4561-41	1/4
185	1b	木塔址北東隅			4561-11	
186	1b	木塔址北側外郭	163-5	189-5	4496	
187	1b	木塔址北側外郭	167-7	193-7	4506	
188	1b	木塔址西側基壇			4564-	
189	1b	木塔址西側基壇			4564-	
190	1b	木塔址前5m地点	159-2	185-2	4561-25	1/2
191	1b	木塔址周辺			5659-19	
192	1b	木塔址	160-1	186-1	4561-24	1/2
193	1b	木塔址			4563-	
194	1b	木塔址			4561-27	1/2
195	1b	木塔址			4564-	
196	1b	木塔址			4564-	
197	1b	不明建物址 I 外側	167-4	193-4	4561-30	1/2
198	1b	不明建物址 I 排水口	122-2	153-2	4634	
199	1b	不明建物址 I 北側西大排水路	162-8	188-8	4491	
200	1b	不明建物址 I ~講堂址東室排水口周辺			4699-	
201	1b	不明建物址 I ~講堂址東室排水口周辺			4699-	

202	1b	不明建物址Ⅰ～講堂址東室排水口			4699-	
203	1b	不明建物址Ⅱ南側基壇			4564-	
204	1b	不明建物址Ⅱ東側			4563-	
205	1b	不明建物址Ⅱ			4564-	
206	1b	不明建物址Ⅱ	155-5	181-5	4561-2	1/2
207	1b	不明建物址Ⅱ	164-3	190-3	4561-5	1/2
208	1b	不明建物址Ⅱ東側大排水路	162-5	188-5	4561-29	1/4
209	1b	不明建物址Ⅱ西側			4564-	
210	1b	不明建物址Ⅱ	156-1	182-1	4542	
211	1b	不明建物址Ⅱ			5659-13	
212	1b	不明建物址Ⅱ	155-3	181-3	4504	
213	1b	西大排水路内部(94年)			5662-25	
214	1b	西側大排水路(96年)			5659-11	
215	1b	西回廊址東側基壇前	73-1	103-1	536121-1	
216	1b	西回廊址西側基壇回廊			4561-37	1/4
217	1b	未詳(95年)			4563-	
218	1b	未詳(95年)			4564-	
219	1b	未詳(95年)			4561-39	1/2
220	1b	未詳(95年)			4563-	
221	1b	未詳(95年)			4564-	
222	1b	未詳(95年)			4564-	
223	1b	未詳(95年)			4561-26	1/2
224	1b	未詳(96年)			5659-18	
225	1b	中門址東側南回廊前			4561-10	1/4
226	1b	中門址西側南回廊南側			4563-	
227	1b	中門址西側南回廊南側基壇			4564-	
228	1b	中門址西側			5659-12	
229	1b	中門址前広場	189-1	219-1	5478	
230	1c	92陵14Tr	48-11	82-11	3518	
231	1c	講堂址東室南東隅	123-2	154-2	4651	
232	1c	講堂址北側基壇外側	129-2	160-2	4663	
233	1c	講堂址北側基壇外側	129-4	160-4	4660	
234	1c	講堂址石列と基壇間	129-5	159-5	4677	
235	1c	講堂址(西室)	129-5	160-5	4490	
236	1c	工房址Ⅰ北側間西側基壇	75-4	105-3	53612-1	
237	1c	金堂址	160-4	186-4	4507	
238	1c	金堂址～木塔址間	156-7	182-7	4561-14	1/2
239	1c	木塔址	168-5	194-5	4549	
240	1c	木塔址東北側隅	167-5	193-5	4494	
241	1c	木塔址東側	169-7	195-7	4547	
242	1c	木塔址東側基壇	159-6	185-6	4555	
243	1c	木塔址北東隅	166-4	192-4	4561-23	3/8
244	1c	木塔址北東隅	164-7	190-7	4561-22	1/2
245	1c	木塔址北東側隅	167-2	193-2	4493	
246	1c	木塔址西側基壇外側	158-7	184-7	4488	
247	1c	木塔址西側基壇	158-8	184-8	4550	
248	1c	不明建物址Ⅱ東側東排水路	167-6	193-6	4503	
249	1c	西側大排水路暗渠施設南側3m	186-5	216-5	5466	
250	1c	西回廊址附近	75-3	105-2	5362	
251	1d	金堂址後方広場			5659-15	
252	1d	南回廊北側排水路	162-3	188-3	4561-20	1/4
253	1d	東回廊			4561-16	1/2

254	1d	木塔址			4564-	
255	1d	木塔址			4563-	
256	1d	木塔址南側基壇	157-6	183-6	4516	
257	1d	木塔址東北側隅	159-7	185-7	4492	4488と同范品
258	1d	木塔址東北側			4563-	
259	1d	木塔址東側			4564-	
260	1d	木塔址東側基壇外側	164-2	190-2	4486	丸瓦残存-縄文
261	1d	木塔址東側基壇外側			4561-21	1/4
262	1d	木塔址東側基壇	159-8	185-8	4515	
263	1d	木塔址東側基壇			4563-	
264	1d	木塔址北側外郭	167-8	193-8	4499	
265	1d	木塔址周辺			4563-	
266	1d	不明建物址Ⅱ東側基壇外部東北側	128-3	159-3	4666	
267	1d	不明建物址Ⅱ			4524	
268	1d	西大排水路(96年)			5662-24	
269	1d	中門址			4564-	
270	1e	未詳(95年調査)	153-1	179-1	4483	丸瓦残存
271	2	92陵12Tr			3521	
272	2	金堂址西側基壇外郭	156-3	182-3	4489	
273	2	中門址東側南回廊前	161-4	187-4	4497	
274	2	中門址東側南回廊	161-3	187-3	4498	
275	2	金堂址			4501	
276	2	金堂址			4510	
277	2	金堂址	168-4	194-4	4532	
278	2	金堂址	169-2	195-2	4533	
279	2	金堂址	169-1	195-1	4536	
280	2	東回廊址	169-8	195-8	4551	
281	2	金堂址	170-3	196-3	4552	
282	2	金堂址	167-1	193-1	4557	
283	2	金堂址			4562-4	3/8
284	2	金堂址			4562-6	
285	2	金堂址			4562-15	3/8
286	2	金堂址西側基壇外郭			4562-10	1/4
287	2	金堂址			4562-11	2/3
288	2	木塔址北側外郭			4562-2	3/8
289	2	木塔址北側基壇外郭			4562-13	3/8
290	2	不明建物址Ⅱ			4562-3	1/4
291	2	不明建物址Ⅱ			4562-8	1/8
292	2	金堂址			4562-14	3/8
293	2	中門址西側南回廊			4562-12	1/2
294	2	金堂址			4562-1	1/2
295	2	不明建物址Ⅱ			4562-16	1/2
296	2	中門址東側南回廊前			4562-7	3/8
297	2	中門址東側南回廊東側基壇	161-2	187-2	4562-5	1/2
298	2	金堂址			4563-	
299	2	金堂址			4563-	
300	2	金堂址			4563-	
301	2	金堂址			4563-	
302	2	金堂址西側基壇			4563-	
303	2	金堂址			4563-	
304	2	西排水路(95年)			4563-	



305	2	金堂址			4563-	
306	2	金堂址			4563-	
307	2	未詳(95年)			4563-	
308	2	木塔址			4564-	
309	2	金堂址			4564-	
310	2	講堂址東室南東隅			4564-	
311	2	中門址西側南回廊南側基壇			4564-	
312	2	金堂址			4564-	
313	2	不明建物址 I 北側	128-4	159-4	4681	
314	2	工房址 II 西側基壇北側地点			53626-5	
315	2	未詳(93年)	73-6	103-6	53626-6	
316	2	工房址 I 北側排水口	75-2	105-1	53626-2	
317	2	西側大排水路南側回廊端(96年)	186-2	216-2	5456	
318	2	東側大排水路内部(96年)	186-4	216-4	5457	
319	2	南回廊南73m、東排水路西30m			5659-6	
320	2	東回廊址西側基壇			5659-4	
321	2	東大排水路(96年)			5659-5	
322	2	中門址			5659-3	
323	3	92陵出土地未詳	48-13	82-13	未詳	
324	3	92陵10Tr(不明建物址 I)	48-12	82-12	3519	
325	3	金堂址	158-3	184-3	4521	
326	3	金堂址	168-8	194-8	4525	4521と同範品
327	3	金堂址	168-6	194-6	4526	
328	3	西排水路内部	163-3	189-3	4527	
329	3	金堂址	157-7	183-7	4535	
330	3	金堂址	158-2	184-2	4540	
331	3	金堂址			4544	
332	3	金堂址			4563-	
333	3	金堂址			4563-	
334	3	金堂址			4563-	
335	3	木塔址			4563-	
336	3	金堂址			4563-	
337	3	金堂址			4563-	
338	3	未詳(95年)			4564-	
339	3	金堂址			4564-	
340	3	金堂址			4564-	
341	3	金堂址	166-3	192-3	4584-9	
342	3	金堂址	153-3	179-3	4584-1	1/2丸瓦残存
343	3	金堂址	166-5	192-5	4584-5	1/2
344	3	金堂址			4584-15	1/4
345	3	金堂址	153-2	179-2	4580	3/8丸瓦残存
346	3	金堂址	157-1	183-1	4584-13	1/4
347	3	金堂址	164-8	190-8	4584-6	1/4
348	3	金堂址東側			4584-3	1/2
349	3	金堂址西側基壇外郭			4584-16	
350	3	金堂址			4584-10	1/2
351	3	金堂址	157-4	183-4	4584-11	3/8
352	3	金堂址	157-2	183-2	4584-4	1/2
353	3	金堂址	161-1	187-1	4584-7	1/2
354	3	木塔址北側	165-6	191-6	4584-17	3/8
355	3	西側大排水路(95年)	163-1	189-1	4584-12	1/4
356	3	不明建物址 II 西側基壇	165-4	191-4	4584-8	1/4
357	3	中門址西側南回廊南側			4584-2	

358	3	不明建物址Ⅰ～不明建物址Ⅱ間	128-7	159-7	4640	
359	3	西側排水路内(94年)	125-1	156-1	4657	
360	3	講堂址西室南西隅	128-8	159-8	4671	
361	3	西回廊址付近	73-4	103-4	53613-2	
362	3	中門址	187-8	217-8	5477	
363	3	南回廊南33.5m、西大排水路東15.5m			5659-2	
364	4	金堂址	150-2	176-2	4485	丸瓦残存
365	4	中門址前西側	160-6	186-6	4529	
366	4	中門址前西側	170-6	196-6	4530	
367	4	未詳(95年)			4531	
368	4	未詳(95年)	168-7	194-7	4537	
369	4	金堂址	169-4	195-4	4538	
370	4	西側大排水路(95年)	168-3	194-3	4539	
371	4	金堂址	169-3	195-3	4541	
372	4	金堂址	170-1	196-1	4543	
373	4	金堂址	158-1	184-1	4545	
374	4	金堂址	170-7	196-7	4553	
375	4	不明建物址Ⅱ東側基壇			4563-	
376	4	金堂址			4563-	
377	4	金堂址			4564-	
378	4	金堂址			4564-	
379	4	講堂址排水路			4564-	
380	4	金堂址西側			4564-	
381	4	不明建物址Ⅱ			4564-	
382	4	金堂址北側			4564-	
383	4	未詳(95年)			4564-	
384	4	中門址南側南回廊前			4564-	
385	4	講堂址西室	124-1	155-1	4670	
386	4	講堂址西室西側基壇前	123-1	154-1	4703-1	丸瓦残存
387	4	東大排水路(96年)	186-3	216-3	5455	
388	4	西側大排水路(96年)	186-8	216-8	5465	
389	4	金堂址後方広場	188-7	218-7	5485	
390	4	西側大排水路(96年)	168-2	194-2	6666	
391	5	工房址Ⅰ排水口	73-2	103-2	536170-1	図面74-2と接合
392	5	金堂址～木塔址間			4559-10	
393	5	金堂址			4563-	
394	5	金堂址			4563-	
395	5	金堂址			4563-2	丸瓦残存
396	5	金堂址	166-1	192-1	4563-1	丸瓦残存
397	5	金堂址			4559-4	
398	5	金堂址			4563-	
399	5	金堂址			4564-	
400	5	金堂址			4559-14	
401	5	金堂址			4563-3	1/4
402	5	金堂址			4559-9	
403	5	金堂址西側基壇外郭	166-2	192-2	4519	
404	5	金堂址西側基壇			4564-	
405	5	金堂址西側基壇外郭	170-2	196-2	4514	
406	5	金堂址西側基壇外郭			4559-1	
407	5	金堂址西側基壇外郭			4559-13	
408	5	金堂址			4559-12	

409	5	金堂址			4559-3	
410	5	金堂址			4564-	
411	5	金堂址			4564-	
412	5	金堂址	164-6	190-6	4559-5	
413	5	木塔址北側2.6m	167-3	193-3	4559-7	
414	5	木塔址北側2.6m			4559-8	
415	5	木塔址周辺			4563-	
416	5	木塔址下層基壇外側			4559-11	
417	5	西側大排水路(95年)	163-4	189-4	4559-2	
418	5	未詳(95年)			4564-	
419	5	未詳(95年)			4563-	
420	6	講堂址東室東側基壇			4698-2	
421	6	木塔址	170-4	196-4	4554	
422	6	木塔址			4585-2	1/4
423	6	木塔址			4585-10	3/8
424	6	木塔址			4585-13	1/8
425	6	木塔址			4585-4	3/8
426	6	木塔址基壇北側	165-1	191-1	4585-15	1/4
427	6	木塔址基壇北側			4585-14	1/4
428	6	木塔址基壇北側			4585-9	3/8
429	6	木塔址南側基壇			4585-7	1/4
430	6	木塔址南側基壇			4585-5	1/2
431	6	木塔址東北側	164-4	190-4	4585-3	3/8
432	6	木塔址東北側			4585-16	
433	6	木塔址東側基壇	159-1	185-1	4585-11	1/4
434	6	木塔址東側基壇			4585-12	
435	6	木塔址東側基壇			4585-6	1/4
436	6	木塔址東側基壇			4585-8	3/8
437	6	木塔址北側外郭	170-5	196-5	4556	
438	6	木塔址西側基壇			4585-1	1/4
439	6	木塔址			4563-	
440	6	未詳(95年)	169-5	195-5	4522	
441	7	講堂址東側基壇			4564-	
442	7	木塔址北側			4561-4	
443	7	不明建物址Ⅱ東側東排水路			4564-	
444	7	講堂址東室南東隅			4564-	
445	7	金堂址			4561-3	
446	7	工房址Ⅱ北側基壇外側	124-5	155-5	4675	
447	7	講堂址	125-3	156-3	4665	
448	7	講堂址	125-4	156-4	4676	
449	7	講堂址東北隅	125-5	156-5	4698-1	
450	7	講堂址	125-8	156-8	4661	
451	7	工房址Ⅰ南側西大排水路	126-2	157-2	4656	
452	7	講堂址西室西南隅	127-6	158-6	4643	
453	7	講堂址東室南東隅	129-1	160-1	4652	
454	7	西回廊址界小型建物址北西側隅	129-6	160-6	4654	
455	7	講堂址東北隅	130-4	161-4	4653	
456	7	不明建物址Ⅰ北側	130-6	161-6	4683	
457	7	不明建物址Ⅰ～講堂址東室排水口	130-7	161-7	4645	
458	7	未詳(95年)ラ-6	163-8	189-8	4512	
459	7	不明建物址Ⅱ西側基壇外側	169-6	195-6	4528	

460	8a	講堂址西側基壇北西側隅	130-2	161-2	4680	
461	8a	金堂址			4564-	
462	8a	東側大排水路(96年)	187-3	217-3	5460	
463	8a	不明建物址Ⅱ			4564-	
464	8a	講堂址西室	119-2	150-2	4697	丸瓦残存
465	8a	講堂址西室西北隅	124-4	155-4	4687	
466	8a	金堂址	157-8	183-8	4523	
467	8a	東排水路(96年)			5659-9	
468	8b	講堂址北側石列外側	127-5	158-5	4684	
469	8b	工房址Ⅰ排水路	73-5	103-5	53611-1	
470	8b	工房址Ⅰ北側排水路中央	74-1	104-1	5361	丸瓦残存
471	8b	工房址Ⅱ北側	130-1	161-1	4668	
472	8b	南回廊南6m、東排水路西4m			5659-7	
473	8b	南回廊西側端			5659-8	
474	9a	中門址	160-8	186-8	4546	
475	9a	中門址	160-6	186-6	4509	
476	9a	木塔址南側基壇			4564-	
477	9a	未詳(95年)ラ-12	163-6	189-6	4511	
478	9b	南回廊端から南側に5m	186-1	216-1	5458	
479	9b	中門址階段南側	187-1	217-1	5464	
480	10	木塔址			4564-	
481	10	未詳(95年)			4564-	
482	10	中門址南西隅	187-2	217-2	5461	
483	10	中門址右側	187-4	217-4	5476	
484	11	木塔址西側			4564-	
485	11	木塔址西側基壇外側	159-5	185-5	4534	
486	11	木塔址西側			4564-	
487	11	木塔址西側基壇			4564-	
488	11	西大排水路(94年)	128-2	159-2	4674	
489	11	未詳(94年)	128-1	159-1	4673	
490	12	西側大排水路(94年)			4698-3	
491	12	西回廊址外側小型建物址	73-7	103-7	53613-1	
492	13	金堂址			4559-6	
493	13	金堂址	157-5	183-5	4559-3-3	1/2
494	巴文	西側大排水路西側石築列上部	170-8	196-8	4477	巴文1式
495	巴文	西回廊址附近	73-3	103-3	53626-4	巴文2式
496	素文	南回廊排水路	154-2	180-2	4560-	
497	素文	南回廊排水路	154-3	180-3	4560-	
498	素文	木塔址	154-4	180-4	4560-	
499	素文	木塔址	154-1	180-1	4476	丸瓦残存
500	素文	木塔址			4560-	
501	素文	木塔址	154-4	180-5	4560-	
502	素文	未詳(96年)	188-1	218-1	4700	

※報告書の図版と図面は国立扶余博物館、『陵寺-扶餘陵山里寺址發掘調査進展報告書』(図面・図版編、二〇〇〇年)を基にした。遺物番号は国立扶余博物館の管理番号で、扶餘3517～3521番は1次調査(92年)、扶余5361～5362番は2次調査(93年)、扶余4631～4703番は3次調査(94年)、扶余4461～4585番は4次調査(95年)、扶余5455～5485番は5次調査(96年)出土品である。

## 参考文献

### 一・史料

- 『三国志』、『晋書』、『宋書』、『南齊書』、『梁書』、『魏書』、『周書』、『南史』、『北史』、『隋書』、『旧唐書』、『新唐書』（以上、中華書局刊）
- 『日本書紀』（坂本太郎等校注『日本書紀』、岩波書店、一九八六年）
- 『日本書紀』（全溶新訳『完訳日本書紀』、一志社、一九八九年）
- 『続日本紀』（青木和夫等校注『続日本紀』、岩波書店、一九九〇年）
- 『続日本紀』（李根雨訳『続日本紀』、知識を作る知識、二〇〇九年）
- 『三国史記』（韓国精神文化研究院編『訳註三国史記』一～五、一九九六～一九九八年）
- 『三国遺事』（李載浩訳『三国遺事』上・中・下、明知大学校出版部、一九七五年）
- 『孟子』（成百曉訳註『懸吐完訳孟子集註』、伝統文化研究会、一九九四年）
- 『礼記』
- 『爾雅』
- 『大正新修大藏經』
- 『続高僧伝』
- 『広弘明集』
- 『集神州三宝感通録』
- 『法苑珠林』
- 『四天王寺御手印縁起』
- 『扶桑略記』
- 『海東高僧伝』
- 藤田経世編『校刊美術史料二』（寺院篇上卷、中央公論美術出版、一九七二年）
- 楊銜之、入矢義高訳『洛陽伽藍記』（中国古典文学大系二一、平凡社、一九七四年）
- 許嵩、張忱石点校『建康実録』（中華書局、一九八六年）

国史編纂委員会編『訳註中国正史朝鮮伝』一・二(一九八七年)

韓国古代社会研究所『訳註韓国古代金石文』(駕洛国史蹟開発研究院、一九九二年)

扶余文化院『扶余の地理志・邑誌』一・二(一九九・二〇〇〇年)

国立昌原文化財研究所『韓国の古代木簡』(芸派出版社、二〇〇四年)

早稲田大学朝鮮文化財研究所・国立伽倻文化財研究所『日韓共同研究資料集成安城山山城木簡』(雄山閣、二〇〇九年)

## 二. 発掘報告書および特別展図録

### 日本語(五十音順)

飛鳥資料館『飛鳥寺』(飛鳥資料館図録第一五冊、一九八五年)

飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(飛鳥資料館図録第一四冊、一九八五年)

飛鳥資料館『飛鳥の工房』(飛鳥資料館図録第二六冊、一九九二年)

飛鳥資料館『飛鳥池遺跡』(飛鳥資料館図録第三六冊、二〇〇〇年)

明日香村教育委員会『飛鳥寺瓦窯の調査』(明日香村埋蔵文化財発掘調査報告第一集、一九八三年)

有光教一「羅州潘南面古墳の発掘調査」(『昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九四〇年)

有光教一「公州宋山里第二九号墳」(『朝鮮古蹟研究会遺稿』二、ユネスコアジア文化研究センター、二〇〇二年)

井内潔『井内古文化研究室所蔵中国六朝瓦図譜』(井内古文化研究室、二〇一二年)

井内古文化研究室編『朝鮮瓦埴図譜』(百済・新羅一、真陽社、一九七八年)

石田茂作「扶余軍守里廢寺址発掘調査(概報)」(『昭和十一年度古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九三七年)

石田茂作・斉藤忠「扶余に於ける百済寺址の調査(概報)」(『昭和十三年度古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九四〇年)

今西龍「京畿道広州郡等遺跡遺物調査報告書」(『大正五年度朝鮮古蹟調査報告』、朝鮮総督府、一九一七年)

今西龍「咸安郡(上)」(『大正六年度朝鮮古蹟調査報告』、朝鮮総督府、一九二〇年)

梅原末治「扶余陵山里東古墳の調査」(『昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告』、朝鮮総督府、一九三八年)

梅原末治・藤田亮策『朝鮮古文化綜鑑』四(養徳社、一九四七年)

大阪府立近つ飛鳥博物館『莊嚴・飛鳥・白鳳仏のインテリア』(二〇〇一年)

河南省文物研究所・文物出版社『鞏県石窟寺』(平凡社、一九八三年)

京都帝国大学『新羅古瓦の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第一三冊、一九三四年)

- 栗田薫『新堂廢寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究』（京都大博物館、二〇〇五年）
- 関西大学文学部考古学研究室「飛鳥・川原寺裏山遺跡と東アジア資料集」（国際シンポジウム実行委員会、二〇二二年）
- 群馬県立歴史博物館『迷の大師―飛鳥・川原寺―白鳳の仏』（一九九六年）
- 小泉頭夫「扶余発見の遺物の二三」（『大正十一年度古蹟調査報告書（一冊）』、朝鮮総督府、一九二四年）
- 小泉頭夫「泥仏出土地元五里廢寺址の調査」（『昭和十二年度古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九三八年）
- 小泉頭夫「平壤清岩里廢寺址の調査」（『昭和十三年度古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九四〇年）
- 国民精神総動員朝鮮連盟『内鮮一体の靈地扶余』（一九三九年）
- 五島美術館『天平に咲くした華―日本の三彩と綠釉』（一九九八年）
- 齊藤忠「調査計画と其の実施の経過」（『昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告』、朝鮮古蹟研究会、一九三七年）
- 谷井濟一「京畿道広州群等十郡古蹟調査略報告」（『大正六年度朝鮮古蹟調査報告』、朝鮮総督府、一九二〇年）
- 朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜解説』三・四（一九一六年）
- 朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』三・四（一九一六年）
- 朝鮮総督府「大正五年度古蹟割説明及び概要」（『大正五年度朝鮮古蹟調査報告』、一九一七年）
- 朝鮮総督府「大正六年度古蹟調査事務計画」（『大正六年度朝鮮古蹟調査報告』、一九二〇年）
- 朝鮮総督府博物館『博物館陳列品図鑑』三（一九二六年）
- 朝鮮総督府博物館『博物館陳列品図鑑』四（一九三三年）
- 朝鮮総督府『昭和二年度古蹟調査報告（第二冊）―公州宋山里古墳調査報告』（一九三五年）
- 朝鮮総督府『朝鮮総督府博物館扶余分館略案内』（一九三九年）
- 朝鮮総督府『朝鮮宝物古蹟調査資料』（一九四二年）
- 天水麦積山石窟芸術研究所・文物出版社『麦積山石窟』（平凡社、一九九六年）
- 敦煌文物研究所『敦煌莫高窟』（平凡社、一九八〇年）
- 富田林市教育委員会『新堂廢寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』（富田林市教育委員会調査報告第三五集、二〇〇三年）
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『蓮華百相―瓦からみた初期寺院の成立と展開』（一九九九年）
- 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第五冊、一九五八年）
- 奈良国立文化財研究所「定林寺調査」（『飛鳥藤原宮発掘調査概報』八、奈良国立文化財研究所、一九七八年）
- 奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第四五冊、一九八七年）
- 奈良国立文化財研究所『北魏洛陽永寧寺―中国社会科学院考古研究所発掘報告』（奈良国立文化財研究所史料第四七冊、一九九八年）

奈良文化財研究所『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』(奈良文化財研究所学報第七六冊、二〇〇七年)  
藤澤一夫「新堂廃寺の性格」(『河内新堂・鳥含寺の調査』、大阪府文化財調査報告第一二集、一九六一年)  
扶余古蹟保存会『百済の事蹟と扶余の名勝旧蹟』(一九二六年)  
扶余古蹟保存会『百済旧都古蹟名勝写真帖』(一九三四年)  
扶余古蹟保存会『百済旧都扶余古蹟名勝案内記』(一九三四年)  
扶余古蹟保存会『扶余を見るには!』(一九三四年)  
文化財保護委員会『四天王寺』(一九六七年)  
龍門文物保管所・北京大学考古系『龍門石窟』(平凡社、一九八七年)

#### 韓国語の報告書(カナタ順)

慶尚北道文化財研究院『慶州市沙正洞四五九―九番地收拾発掘調査報告書』(学術調査報告第七集、二〇〇一年)  
公州師範大学博物館『公山城百済推定王宮址発掘調査報告書』(一九八七年)  
国立慶州文化財研究所『殿廊址・南古墨発掘調査報告書』(学術研究叢書第九集、一九九五年)  
国立慶州文化財研究所『新羅王京発掘調査報告書』(学術研究叢書第三二集、二〇〇二年)  
国立慶州文化財研究所『慶州仁旺洞五五六・五六六番地遺跡発掘調査報告書』(学術研究叢書第三六集、二〇〇三年)  
国立慶州文化財研究所『慶州蒜谷洞・勿川里遺跡―慶州競馬場予定敷地>地区』(学術研究叢書第三七集、二〇〇四年)  
国立慶州文化財研究所『慶州(伝)仁容寺址発掘調査』(『年報』二〇、二〇一〇年)  
国立慶州博物館『慶州工業高等学校内遺構收拾調査』(学術調査報告第二三冊、二〇一一年)  
国立光州博物館『羅州潘南古墳群―綜合調査報告書』(学術叢書第一三冊、一九八八年)  
国立文化財研究所『羅州新村里九号墳』(羅州市、二〇〇一年)  
国立文化財研究所『弥勒寺址石塔―基壇部發掘調査報告書』(益山市、二〇一二年)  
国立博物館『金剛寺―扶余郡恩山面琴公里百済寺址發掘報告』(古蹟調査報告第七集、一九六九年)  
国立扶余文化財研究所『弥勒寺遺跡發掘調査報告書』(学術研究叢書第一三集、一九九六年)  
国立扶余文化財研究所『宮南池―現宮南池西北便―帯』(学術研究叢書第二九集、二〇〇一年)  
国立扶余文化財研究所『弥勒寺址西塔周辺發掘調査報告書』(学術研究叢書第二八集、二〇〇一年)  
国立扶余文化財研究所『王興寺址―瓦窯發掘調査報告書』(学術研究叢書第四一集、二〇〇七年)



- 国立扶余文化財研究所『陵寺―扶余陵山里寺址一〇次発掘調査報告書』(学術研究叢書第四五集、二〇〇八年)
- 国立扶余文化財研究所『百濟廢寺址―学術調査報告書』(学術研究叢書第四八集、二〇〇八年)
- 国立扶余文化財研究所『王宮里発掘調査中間報告Ⅵ』(学術研究叢書第四七集、二〇〇八年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余官北里百濟遺跡発掘報告Ⅲ』(学術研究叢書第五〇集、二〇〇九年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余官北里百濟遺跡Ⅱ』(学術研究叢書第五一集、二〇〇九年)
- 国立扶余文化財研究所『王興寺址Ⅲ―木塔址・金堂址発掘調査報告書』(学術研究叢書第五二集、二〇〇九年)
- 国立扶余文化財研究所『韓中古代寺址比較研究(一)―木塔址編』(学術研究叢書第四九集、二〇〇九年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余王興寺址第一〇次発掘調査』(『二〇〇九百濟文化を探して』、二〇一〇年)
- 国立扶余文化財研究所『百濟泗泚期瓦研究Ⅱ』(学術研究叢書第五六集、二〇一〇年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余軍守里寺址―木塔址・金堂址発掘調査報告書』(学術研究叢書第五三集、二〇一〇年)
- 国立扶余文化財研究所『韓中古代寺址比較研究(Ⅱ)―金堂址編』(学術研究叢書第五四集、二〇一〇年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余王興寺址第一二次発掘調査』(『二〇一〇百濟文化を探して』、二〇一一年)
- 国立扶余文化財研究所『百濟泗泚期瓦研究Ⅲ』(学術研究叢書第六〇集、二〇一一年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余官北里百濟遺跡発掘報告Ⅴ』(学術研究叢書第六二集、二〇一一年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余定林寺址発掘調査報告書』(学術研究叢書第六一集、二〇一一年)
- 国立扶余文化財研究所『帝釈寺址―発掘調査報告書Ⅰ』(学術研究叢書第五八集、二〇一一年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余王興寺址第一二次発掘調査』(『二〇一―百濟文化を探して』、二〇一二年)
- 国立扶余文化財研究所『扶余王興寺址第一三次発掘調査諮問委員会議資料』(油印物、二〇一二年)
- 国立扶余博物館『扶余亭岩里窯址Ⅱ』(遺跡調査報告第四冊、一九九二年)
- 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址発掘調査進展報告書』(遺跡調査報告第八冊、二〇〇〇年)
- 国立扶余博物館『陵寺―扶余陵山里寺址六〇八次発掘調査報告書』(遺跡調査報告第一三冊、二〇〇七年)
- 国立中央博物館『国立中央博物館保管古文書目録』(一九九六年)
- 国立中央博物館『光復以前博物館資料目録集』(一九九七年)
- 権五栄・権度希「社倉里山一〇―番地出土遺物の紹介」(『古城里土城』、韓神大学校博物館、二〇〇三年)
- 錦江文化遺産研究院『扶余佳塔里佳塔トゥル遺跡』(発掘調査報告第八冊、二〇一二年)
- 金誠龜・金鍾萬・尹龍熙『青陽汪津里窯址』(遺跡調査報告第一四冊、二〇〇八年)
- 金日成大学『東明王陵とその附近の高句麗遺跡』(金日成大学出版部、一九七六年)

- 東国大慶州キャンパス博物館『慶州菘谷洞・勿川里遺跡(目)・競馬場予定敷地(田)地区』(研究叢書第九冊、二〇〇三年)
- 文化財管理局文化財研究所『武寧王陵―発掘調査報告書』(一九七三年)
- 文化財管理局文化財研究所『弥勒寺址発掘調査中間略報告』(一九八二年)
- 文化財管理局文化財研究所『皇龍寺』(一九八四年)
- 文化財管理局文化財研究所『弥勒寺―発掘発掘調査報告書』(一九八七年)
- 文化財管理局『百濟古都文化圏文化遺跡整備計画(案)』(一九七九年)
- 民族文化遺産研究院『康津月南寺址真覚国師碑周辺文化財精密発掘調査現場説明会資料』、二〇一二年(油印物)
- 朴敬道『扶余陵山里寺址八次発掘調査概要』、『東垣学術論文集』五、二〇〇二年)
- 扶余郡『二〇一一年扶余都市計画再整備用役結果報告書』(二〇〇四年)
- 扶余郡文化財保存センター『扶余東南里寺址整備基本計画』(扶余郡、二〇〇七年)
- 扶余郡文化財保存センター『扶余佳塔里百濟遺跡』(発掘調査報告第四冊、二〇一〇年)
- 扶余郡文化財保存センター『扶余泗泚宮址発掘調査第一次現場説明会資料』(二〇一一年)
- 扶余文化財研究所『益山弥勒寺址東塔址基壇および下部調査報告書』(学術研究叢書第二集、一九九二年)
- 扶余文化財研究所『扶余旧衙里百濟遺跡発掘調査報告書』(学術研究叢書第七集、一九九三年)
- 扶余文化財研究所『扶余伝天王寺址文化財保存地区発掘調査報告書』(扶余郡、一九九三年)
- 扶余文化財研究所『龍井里寺址』(学術研究叢書第五集、一九九三年)
- ソウル大博物館『龍院里遺跡C地区発掘調査報告書』(ソウル大人文学研究所、二〇〇一年)
- 聖林文化財研究院『慶州花谷地区地表水補強開発事業地区内遺跡』(文化財発掘調査略報告書、二〇〇八年)
- 宋義政・尹炯元『法泉里』(国立中央博物館古蹟調査報告第三二集、二〇〇〇年)
- 申光燮『扶蘇山城―廃寺址発掘調査報告(一九八〇年)』、『扶蘇山城発掘調査報告書』、国立文化財研究所学術研究叢書第一二集、一九九六年)
- 円光大学校馬韓百濟文化研究所『益山帝釈寺址試掘調査報告書』(遺跡調査報告第三六集、一九九四年)
- 円光大学校博物館『益山王宮里伝瓦窯址(帝釈寺廃棄場)試掘調査報告書』(博物館学術叢書第二三冊、二〇〇六年)
- 尹武炳『定林寺―定林寺址発掘調査報告書』(忠南大学校博物館、一九八一年)
- 尹武炳『扶余双北里遺跡発掘調査報告書』(『百濟研究』一三、忠南大百濟研究所、一九八二年)
- 尹武炳『扶余官北里百濟遺跡発掘報告』(『百濟研究』一三、忠南大博物館、一九八五年)
- 尹武炳『扶余定林寺址蓮池遺跡発掘報告書』(『百濟研究』一八、忠南大百濟研究所、一九八七年)
- 尹武炳『扶余官北里百濟遺跡発掘報告』(『博物館叢書第一八集、一九九九年』)

- 李南奭・徐程錫『大通寺址』（公州大博物館、二〇〇一年）
- 鄭海濬・尹智熙『扶余双北里二八〇―五遺跡』（財）百済文化財研究院文化遺跡調査報告第二六集、二〇一一年）
- 忠南大百済研究所『泗泚都城・陵山里および軍守里地点発掘調査報告書』（二〇〇三年）
- 忠清南道歴史文化研究院『扶余東南里二一六―七番地遺跡』（遺跡調査報告第三五冊、二〇〇七年）
- 忠清大学博物館・扶余郡『扶余臨江寺址』（學術研究叢書第二二集、二〇〇七年）
- 忠清文化財研究院『扶余陵山里東羅城内・外部百済遺跡』（文化遺跡調査報告第五八―一集、二〇〇六年）
- 忠清文化財研究院『扶余双北里ヒョンネドウル・北浦遺跡』（文化遺跡調査報告第九四集、二〇〇九年）
- 韓国文化財保護財団『慶州競馬場予定敷地C―1地区発掘調査報告書』（學術調査報告第二五冊、一九九九年）
- 韓国先史文化研究院『清州福台洞遺跡』（學術報告第九集、二〇〇八年）
- 韓国伝統文化学校『扶余陵山里寺址―第九次発掘調査報告書』（二〇一〇年）

#### 韓国語の図録(カナタ順)

- 国立慶州博物館『美しい新羅瓦、その千年の息遣い―新羅瓦埴』（シティパートナー、二〇〇〇年）
- 国立慶州博物館・国立慶州文化財研究所『特別展四天王寺』（芸脈、二〇〇九年）
- 国立公州博物館『国立公州博物館』（シティパートナー、二〇一〇年）
- 国立公州博物館『武寧王陵を格物する―武寧王陵発掘四〇周年記念特別展』（アングラフィックス、二〇一一年）
- 国立扶余博物館『百済の瓦埴』（シティパートナー、一九八九年）
- 国立扶余博物館『国立扶余博物館図録』（三和出版社、一九九七年）
- 国立扶余博物館『百済の文字』（ハイセンス、二〇〇二年）
- 国立扶余博物館『百済の工房』（芸脈、二〇〇六年）
- 国立扶余博物館『懐かしいものは大地の中にある―忠清南道歴史文化研究院の新発掘百済文化財』（芸脈、二〇〇七年）
- 国立扶余博物館『百済木簡』（学研文化社、二〇〇八年）
- 国立扶余博物館『木に残された暗号、木簡』（芸脈、二〇〇九年）
- 国立扶余博物館『百済中興を夢見る―陵山里寺址』（芸脈、二〇一〇年）
- 国立扶余博物館『百済瓦埴』（シティパートナー、二〇一〇年）
- 国立扶余博物館・仏教中央博物館『百済伽藍に込められた仏教文化』（ウイナジー、二〇〇九年）
- 国立扶余博物館・国立扶余文化財研究所『百済王興寺』（芸脈、二〇〇八年）

- 国立中央博物館『三国時代仏教彫刻』（三和出版社、一九九〇年）  
 国立中央博物館『特別展百濟』（通川文化社、一九九九年）  
 東国大慶州キャンパス博物館『来如哀反多羅—東国大学校建学一〇〇周年記念塑造仏特別展』（デザイントゥル、二〇〇六年）  
 弥勒寺址遺物展示館『特別展全北の廢寺出土遺物』（全羅北道益山地区文化遺跡址管理事務所、二〇〇五年）  
 百濟文化開發研究院『百濟瓦磚図録』（百濟遺物図録二、一九八三年）  
 百濟文化開發研究院『百濟工藝・彫刻図録』（百濟遺物図録三、一九九二年）  
 忠南大学校博物館『忠南大学校博物館図録』（一九八三年）

### 中国語(ピンイン順)

- 安家瑤「唐長安西明寺遺址的考古發現」（『唐研究』六、二〇〇〇年）  
 成都市文物考古工作队・成都市文物考古研究所「成都市西安路南朝石刻造像清理簡報」（『文物』二期、一九九八年）  
 大同市博物館「山西省文物工作委員会「大同方山北魏永固陵」（『文物』七期、一九七八年）  
 大同市博物館「大同北魏方山思遠仏寺遺址発掘報告」（『文物』四期、二〇〇七年）  
 江蘇省文物工作队・鎮江市博物館「江蘇鎮江甘露寺鐵塔塔基發掘記」（『考古』六期、一九六一年）  
 南京博物院「江蘇丹陽吳胡橋建山兩座南朝墓葬」（『文物』二期、一九八〇年）  
 南京博物院「南京西善橋南朝墓」（『東南文化』一期、一九九七年）  
 南京市博物館『六朝風采』（文物出版社、二〇〇四年）  
 南京市博物館「南京市江寧区胡村南朝墓」（『考古』六期、二〇〇八年）  
 南京市文物保存委員会「南京郊区兩座南朝墓清理簡報」（『文物』二期、一九八〇年）  
 南京市文物研究所・南京栖霞区文化局「南京梁南平王蕭偉墓闕發掘簡報」（『文物』七期、二〇〇二年）  
 袁曙光「四川省博物館所藏万仏寺石刻造像整理簡報」（『文物』一〇期、二〇〇一年）  
 鎮江古城考古所・鎮江博物館「鎮江鐵甕城南門遺址発掘報告」（『考古学報』四期、二〇一〇年）  
 中国社会科学院考古研究所「北魏洛陽永寧寺」（一九七九—一九九四年考古發掘報告）（中国大百科全書出版社、一九九六年）  
 中国社会科学院考古研究所西安唐城隊「唐長安青龍寺遺址」（『考古学報』、一九八九年）  
 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队「唐長安西明寺遺址発掘簡報」（『考古』一期、一九九〇年）  
 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古隊「河北臨漳縣鄴城遺址趙彭城北朝仏寺遺址的勘查與發掘」（『考古』七期、二〇一〇年）

三. 単行本

日本語(五十音順)

- 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』(財)聖徳太子奉讃会、一九三六年)  
石田茂作『法隆寺雜記帖』(学生社、一九六九年)  
伊藤義教『ペルシア文化渡来考』(岩波書店、一九八〇年)  
今西龍『百済史研究』(近沢書店、一九三四年)  
上原和『仏法東流』(学生社、一九八七年)  
上原真人『蓮華文』(日本の美術三五九、至文堂、一九九六年)  
上原真人『瓦を読む』(歴史発掘一一、講談社、一九九七年)  
梅原末治『朝鮮古代の墓制』(座右宝刊行会版、一九四六年)  
大川清編『百済の考古学』(雄山閣、一九七二年)  
大西修也『日韓古代彫刻史論』(中国書店、二〇〇二年)  
大橋一章『飛鳥の文明開化』(吉川弘文館、一九九七年)  
大橋一章『奈良美術成立史論』(中央公論美術出版、二〇〇九年)  
鎌田茂雄『中国仏教史二受容期の仏教』(東京大学出版会、一九八三年)  
亀田修一『日韓古代瓦の研究』(吉川弘文館、二〇〇六年)  
軽部慈恩『百済美術』(宝雲舎、一九四六年)  
軽部慈恩編『忠南郷土誌』(公州公立高等学校校友会、一九三五年)  
軽部慈恩『百済遺跡の研究』(吉川弘文館、一九七一年)  
河上麻由子『古代アジア世界の対外交渉と仏教』(山川出版社、二〇一二年)  
小泉頭夫『朝鮮古代遺跡の遍歴―発掘調査三十年の回想』(六興出版、一九八六年)  
黄寿永・田村円澄編『百済文化と飛鳥文化』(吉川弘文館、一九七八年)  
小杉一雄『中国文様史の研究』(新樹社、一九七九年)  
小杉一雄『中国仏教美術史の研究』(新樹社、一九八〇年)  
古代を考える会『古代を考える五―古代の日本と朝鮮―』(一九七六年)  
佐藤武敏『中国古代工業史の研究』(吉川弘文館、一九六二年)

- 佐脇精編『風納里土城』（京電ハイキングコース第三集、京城電気株式会社、一九三七年）
- 清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』（清文堂、二〇一二年）
- 鈴木靖民編『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』（勉誠出版、二〇一〇年）
- 諏訪義純『中国南朝仏教史の研究』（法蔵館、一九九七年）
- 関野貞『瓦』（考古学講座、雄山閣、一九二八年）
- 関野貞『朝鮮の建築と芸術』（岩波書店、一九四一年）
- 高木博志『近代天皇制と古都』（岩波書店、二〇〇六年）
- 高橋健自・石田茂作『満鮮考古行脚』（雄山閣、一九二七年）
- 田中俊明・東潮『韓国の古代遺跡―百濟・伽耶編』（中央公論社、一九八九年）
- 田中俊明・東潮『高句麗の歴史と遺跡』（中央公論社、一九九五年）
- 田中史生、『倭国と渡来人』（吉川弘文館、二〇〇五年）
- 田村円澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』（吉川弘文館、一九八〇年）
- 朝鮮文化研究所編『韓国出土木簡の世界』（アジア地域文化学叢書四、雄山閣、二〇〇七年）
- 朝鮮文化研究所編『東アジア古代出土文字資料の研究』（アジア研究機構叢書人文学篇第一巻、雄山閣、二〇〇九年）
- 西川杏太郎『塑像』（日本の美術二五五、至文堂、一九八七年）
- 速水侑『日本仏教史』古代、吉川弘文館、一九八六年）
- 藤島亥治郎『古寺再現』（学生社、一九六七年）
- 藤島亥治郎『朝鮮建築史論』（景仁文化社、一九六九年）
- 牧田諦亮『観世音應驗記研究』（平楽寺書店、一九七〇年）
- 松下隆章編『研究発表と座談会…川原寺裏山遺跡出土品について』（仏教美術研究上野記念財団助成研究会、一九七七年）
- 水野柳太郎『日本古代の寺院と史料』（吉川弘文館、一九九三年）
- 森郁夫『日本古代寺院造営の研究』（法政大学出版部、一九九八年）
- 森三樹三郎『梁武帝―仏教王朝の悲劇』（平楽寺書店、一九五六年）
- 山崎信二『古代造瓦史―東アジアと日本』（雄山閣、二〇一一年）
- 吉井秀夫『古代朝鮮墳墓にみる国家形成』（京都大学学術出版会、二〇一〇年）
- 吉村怜『中国仏教図像の研究』（東方書店、一九八三年）
- 米田美代治『朝鮮上代建築の研究』（秋田屋、一九四四年）

李成市『古代東アジアの民族と国家』（岩波書店、一九九八年）  
李成市『東アジア文化圏の形成』（山川出版社、二〇〇〇年）

#### 韓国(カナタ順)

- 姜友邦『円融と調和―韓国古代彫刻史研究』（悦話堂、二〇〇〇年）  
姜友邦『法空と莊嚴―韓国古代彫刻史の原理Ⅱ』（悦話堂、二〇〇二年）  
姜仁求『百済古墳研究』（二志社、一九九七年）  
国立文化財研究所『全国文化遺跡発掘調査年表―増補版Ⅱ』（二〇〇一年）  
国立文化財研究所『百済仏教文化の宝庫、弥勒寺』（国際学術シンポジウム論文集、二〇一〇年）  
国立文化財研究所・益山市『弥勒寺復原研究学術資料叢書Ⅰ～Ⅳ』（二〇一〇年）  
国立扶余文化財研究所『扶余王興寺址出土舍利器の意味』（国際学術シンポジウム資料集、二〇〇八年）  
国立扶余博物館『古代東アジア上の百済金屬工芸―香爐発掘一五周年記念国際学術シンポジウム』（二〇〇八年）  
金東旭『百済の服飾』（百済文化開発研究院、一九八五年）  
金理那『韓国古代仏教彫刻史研究』（一潮閣、一九八九年）  
金理那『韓国古代仏教彫刻比較研究』（文芸出版社、二〇〇三年）  
金鍾萬『百済土器の新研究』（書景文化社、二〇〇七年）  
金哲煥『韓国古代社会研究』（ソウル大出版部、一九九〇年）  
吉基泰『百済泗泚時代の仏教信仰研究』（書景、二〇〇六年）  
金誠龜『百済の瓦埴芸術』（周留城、二〇〇四年）  
金栄晃『中世語辞典』（科学百科事典総合出版社、一九九四年）  
盧明鎬ほか『韓国古代中世地方制度の諸問題』（集文堂、一九九四年）  
盧重国『百済政治史研究』（一潮閣、一九八八年）  
盧泰敦『韓国史を通して見た我々と世界に対する認識』（プルビツ、一九九八年）  
睦楨培『三国時代の仏教』（東国大出版部、一九八九年）  
文明大『観仏と古拙美―三国時代仏教彫刻史研究』（礼耕、二〇〇三年）  
朴南守『新羅手工業史研究』（新書園、一九九六年）  
朴淳発『百済の都城』（忠南大出版部、二〇一〇年）

- 山本文『三国時代律令の考古学的研究』（書景、二〇〇六年）
- 孫楨睦『日帝強占期都市計画研究』（二志社、一九九〇年）
- 辛鍾遠『新羅初期仏教史研究』（民族社、一九九二年）
- 吳永贊『樂浪郡研究』（四季節、二〇〇六年）
- 尹善泰『木簡が聞かせてくれる百済物語り』（周留城、二〇〇七年）
- 李基東『百済史研究』（二潮閣、一九九六年）
- 李基白『新羅思想史研究』（一潮閣、一九八六年）
- 李基白『韓国古代政治社会史研究』（二潮閣、一九九六年）
- 李道学『生きてゐる百済史』（ヒューマニスト、二〇〇三年）
- 李成市『作られた古代』（三印、二〇〇一年）
- 李順子『日帝強占期古蹟調査事業研究』（景仁文化社、二〇〇九年）
- 李王基『百済寺刹建築の造形と技術』（周留城、二〇〇六年）
- 李龍範『韓滿交流史研究』（同和出版社、一九八九年）
- 李漢祥『装身具賜與体制からみた百済の地方支配』（書景文化社、二〇〇九年）
- 張慶浩『百済寺刹建築』（芸耕産業社、一九九〇年）
- 張慶浩『美しい百済建築』（周留城、二〇〇四年）
- チョン・ジェホン『東明王陵に対する研究』（平壤（朝鮮）、一九九四年）
- 趙源昌『百済建築技術の対日伝播』（書景、二〇〇四年）
- 趙源昌『韓国古代瓦当と製瓦術の交流』（書景、二〇一〇年）
- 周昞美『中国古代仏舍利莊嚴研究』（二志社、二〇〇二年）
- 崔孟植『百済平瓦新研究』（学研文化社、一九九九年）
- 忠清南道歴史文化研究院編『百済の祭儀と宗教』（百済文化史大系一三、二〇〇七年）

中国語（ピンイン順）

- 高敏『魏晋南北朝經濟史』下（上海人民出版社、一九九六年）
- 河南省文化局文物工作队『鄧県彩色画像墳墓』（文物科学出版社、一九五九年）
- 賀云翱『六朝瓦当與六朝都城』（文物出版社、二〇〇五年）



- 申云艶『中国古代瓦当研究』（文物出版社、二〇〇六年）  
 蘇默『敦煌建築研究』（文物出版社、一九八九年）  
 王靖憲『古硯拾零』（湖北美術出版社、二〇〇二年）  
 魏存成『高句麗考古』（文物出版社、二〇〇二年）  
 楊泓『中国古兵與美術考古論集』（文物、二〇〇七年）  
 楊寬『中国古代陵寢制度史研究』（上海人民出版社、二〇〇一年）  
 張贊初『長江中下流歷史考古論文集』（科學出版社、二〇〇〇年）  
 朱倣『金陵古蹟図考』（中華書局、二〇〇六年）

#### 四・論文

##### 日本語の論文(五十音順)

- 浅香年木「倭政権と手工業生産」（『日本古代手工業史の研究』、法政大学出版局、一九七一年）  
 浅野清「飛鳥寺の建築」（『仏教芸術』三三、毎日新聞社、一九五八年）  
 穴澤和光・馬目順一「羅州潘南面古墳群」（『古代学研究』七〇、古代学研究会、一九七三年）  
 綱干善教「飛鳥川原寺裏山遺跡と出土遺物」（『仏教芸術』九九、毎日新聞社、一九七四年）  
 綱干善教「川原寺裏山出土の埴仏と塑像」（奈良県高市郡明日香村飛鳥古京顕彰会、一九七六年）  
 綱伸也「四天王寺出土瓦の再検討」（『ヒストリア』一四〇、大阪歴史学会、一九九五年）  
 綱伸也「四天王寺出土瓦の編年的考察」（『堅田直先生古稀記念論文集』、真陽社、一九九七年）  
 綱伸也「瓦研究における三つの指標」（『考古学史研究』八、京都木曜クラブ、一九九八年）  
 綱伸也「日本における瓦積基壇の成立と展開―畿内を中心として」（『日本考古学』一九、日本考古学協会、二〇〇五年）  
 綱伸也「景観的見地からの伽藍配置」（『月刊考古学ジャーナル』五四五、ニューサイエンス社、二〇〇六年）  
 綱伸也「四天王寺伽藍とその出土瓦」（第一六回古代寺院研究会発表文、二〇一一年）  
 綱伸也・内田好昭「関野貞と日本考古学」（『関野貞のアジア踏査』東京大学コレクションⅩⅩ、東京大学総合研究博物館、二〇〇五年）  
 鮎貝房之進「百濟古都案内記」（『朝鮮』二三四、朝鮮総督府、一九三四年）  
 有光教一「羅州潘南面新村里第九号墳発掘調査記録」（『朝鮮学報』九四、一九八〇年）  
 有光教一「私の朝鮮考古学」（『三千里』三八、一九八四年）…『朝鮮考古学七十五年』（昭和堂、二〇〇七年）

- 井内潔「南朝梁と熊津期百済文化―宋山里六号墳と大通寺に係わる新思考から」（『朝鮮古代研究』八、朝鮮古代研究刊行会、二〇〇七年）
- 池内宏「安羅におけるわが官家の没落」（『日本上代史の一研究』、中央公論美術出版、一九七〇年）
- 石井公成「仏教受容期の国家と仏教」（『東アジア社会と仏教文化』、春秋社、一九九六年）
- 石田茂作「飛鳥奈良時代に於ける日鮮文化の交渉」（『考古学雑誌』一八卷二号、日本考古学会、一九二八年）
- 石田茂作「百済寺院と法隆寺」（『朝鮮学報』五、朝鮮学会、一九五三年）
- 石田茂作「橘寺・定林寺の発掘」（『飛鳥』、近畿日本叢書三、一九六三年）
- 伊東忠太「玉蟲厨子の文様と其源流」（『仏教美術』一三、毎日新聞社、一九二九年）
- 稲垣晋也「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅的要素」（『新羅と日本の古代文化』（田村円澄・秦弘燮編、吉川弘文館、一九八一年）
- 稲木吉一「上代造形史における「様」の考察」（『仏教芸術』一七一、毎日新聞社、一九八七年）
- 稲田奈津子「百済弥勒寺の舍利奉安記について」（『朱』五五、伏見稻荷大社、二〇一一年）
- 井上直樹「五七〇年代の高句麗の対倭外交について」（『年報朝鮮学』一一、九州大学朝鮮学研究会、二〇〇八年）
- 井上直樹「六世紀末から七世紀半ばの東アジア情勢と高句麗の対倭外交」（『朝鮮学報』二二一、朝鮮学会、二〇一一年）
- 井上光貞「日本における仏教統制機関の確立過程」（『井上光貞著作集一』、岩波書店、一九八五年）
- 猪熊兼勝「発掘すすむ大和の飛鳥時代寺院跡」（『仏教芸術』二三五、毎日新聞社、一九九七年）
- 今泉隆雄「但馬国分寺木簡と国分寺の創建」（『古代木簡の研究』、吉川弘文館、一九九八年）
- 尹善泰「木簡からみた百済泗沘都城の内と外」（『韓国出土木簡の世界』、アジア地域文化学叢書四、雄山閣、二〇〇七年）
- 尹善泰「新出木簡からみた百済の文書行政」（『朝鮮学報』二一五、朝鮮学会、二〇一〇年）
- 上原真人「瓦の見方について」（『富山市考古学資料館紀要』三、富山市考古学資料館、一九八四年）
- 上原真人「仏教」（『岩波講座日本考古学四―集落と祭祀』、岩波書店、一九八六年）
- 上原真人「初期瓦生産と屯倉制」（『京都大学文学部研究紀要』四二、京都大学文学部、二〇〇三年）
- 上原真人「寺院造営と生産」（『記念的建物の成立』、鈴木博之・山岸常人編、東京大学出版会、二〇〇六年）
- 内田好昭「日帝統治下の朝鮮半島における考古学的発掘調査（上）」（『考古学史研究』九、京都木曜クラブ、二〇〇一年）
- 有働智英「六世紀における仏教受容の問題」（『国学院雑誌』一一一七、二〇一一年）
- 大江篤「天曆期の御願寺―『新儀式』の記載のもつ意味」（『人文論究』三五四、関西学院大学人文学会、一九八六年）
- 大岡実「興福寺」（『南都七大寺の研究』、中央公論美術出版、一九七六年）
- 大川清「扶余の百済時代寺院跡」（『百済の考古学』（考古学選書五、雄山閣、一九七二年）
- 大坂金太郎「在鮮回顧十題」（『朝鮮学報』四五、朝鮮学会、一九六七年）

- 太田博太郎「南都六宗寺院の建築構成」(『法隆寺と斑鳩の古寺』、日本古寺美術全集二、集英社、一九七九年)
- 大西修也「百済の石仏坐像―蓮洞里石造如来像をめぐって―」(『仏教芸術』一〇七、毎日新聞社、一九七六年)
- 大西修也「百済半跏像の系譜について」(『仏教芸術』一五八、毎日新聞社、一九八五年)
- 大橋一章「飛鳥寺の創立に関する問題」(『仏教芸術』一〇七、毎日新聞社、一九七六年)
- 大橋一章「飛鳥寺の発願と造営組織」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四一―三、早稲田大学大学院文学研究科、一九九五年)
- 大橋一章「古代文化史のなかの飛鳥寺」(『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』、勉誠出版、二〇一〇年)
- 大橋一章「六世紀後半の百済寺院の舍利安置について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五六、早稲田大学大学院文学研究科、二〇一〇年)
- 大脇潔「飛鳥時代初期の同範軒丸瓦」(『古代』九七、早稲田大学考古学会、一九九六年)
- 大脇潔「飛鳥・藤原京の寺院」(『飛鳥から藤原京へ』(古代の都二)、吉川弘文館、二〇一〇年)
- 小笠原好彦「瓦積基壇考―近江・山背・大和・河内」(『日本古代寺院造営氏族の研究』、吉川弘文館、二〇〇五年)
- 岡村秀典・向井佑介編「北魏方山永固陵の研究」(『東方学報』八〇、京都大学人文科学研究所、二〇〇七年)
- 賀云翹「南朝瓦総論」(『古代東アジアの造瓦技術』、奈良文化財研究所研究報告第三冊、二〇一〇年)
- 勝浦令子「長屋王家の米支給関係木簡」(『木簡研究』二二、一九九九年)
- 加藤謙吉「蘇我氏と飛鳥寺」(『古代を考える―古代寺院』、吉川弘文館、一九九九年)
- 門脇禎二「飛鳥開眼―歴史(一)―」(『飛鳥―古代への旅』(別冊太陽)、平凡社、二〇〇五年)
- 金子修一「東アジアの国際情勢と遣隋使」(『遣隋使がみた風景』、気賀澤保規編、八木書店、二〇一二年)
- 亀田修一「百済古瓦考」(『百済研究』一一二、忠南大百済研究所、一九八一年)
- 亀田修一「百済軒丸瓦の製作技法」(『古代瓦研究―飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで』、奈良文化財研究所、二〇〇〇年)
- 亀田修一「扶余―大唐」銘軒丸瓦の語るもの」(『古代文化』五六―一(通巻五五〇号)、古代学協会、二〇〇四年)
- 軽部慈恩「扶蘇山南側中腹廢寺址出土の塑像」(『百済美術』、宝雲社、一九四六年)
- 河上麻由子「遣隋使と仏教」(『日本歴史』七二七、日本歴史研究会、二〇〇八年)
- 河上麻由子「中国南朝の対外関係において仏教が果たした役割について」(『史学雑誌』一一七―二、史学会、二〇〇八年)
- 川尻秋生「資財帳からみた伽藍と大衆院政所」(『古代』一一〇、早稲田大学考古学会、二〇〇一年)
- 喜田貞吉「大唐平百済国碑に関する疑問」(『考古学雑誌』一五卷五号、日本考古学会、一九二五年)
- 北野耕平「百済時代寺院址の分布と立地」(『百済文化と飛鳥文化』、黄寿永・田村田澄編、吉川弘文館、一九七八年)
- 木村宣彰「曇始と高句麗仏教」(『仏教学百セミナ』三一、大谷大学仏教学会、一九八〇年)

- 金鍾萬「扶余陵山里寺址出土瓦当文様の形式と年代観」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅱ、帝塚山大学考古学研究所、二〇〇〇年)
- 金正基「韓国の寺院遺跡について」(『仏教芸術』八三、毎日新聞社、一九七一年)
- 金正基「韓国から見た日本古代寺院跡」(『仏教芸術』二〇九、毎日新聞社、一九九三年)
- 金誠龜「百濟・新羅の瓦窯」(『仏教芸術』二〇九、毎日新聞社、一九九三年)
- 金有植「五〇六世紀新羅と周辺諸国の瓦」(『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』、科学研究補助基金研究成果報告書、二〇〇九年)
- 金容民「王興寺跡と舍利器・莊嚴具の発掘調査成果」(『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一〇年)
- 金理那「宝珠捧持形菩薩の系譜」(『法隆寺から薬師寺へ』、講談社、一九九〇年)
- 窪添慶文「南北朝時代の国際関係と仏教」(『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一〇年)
- 栗田熏「お亀石古墳の築造年代―新堂廃寺出土平瓦との比較をとおして」(『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』、藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会、二〇〇二年)
- 栗田熏「新堂廃寺の創建年代」(『志学台考古』七、大阪大谷大学文化財学科、二〇〇七年)
- 黒板勝美「朝鮮事蹟遺物調査複命書」(『黒板勝美先生遺文』、吉川弘文館、一九七四年)
- 小泉顕夫「高句麗清岩里廃寺跡の調査」(『仏教芸術』三三、一九五八年)
- 高正龍「扶余時代の藤澤先生」(『朝鮮古代研究』五、朝鮮古代研究刊行会、二〇〇四年)
- 小杉一雄「六朝及び隋代に於ける塔基表示」(『中国仏教美術史の研究』、新樹社、一九八〇年)
- 小玉大円「求法僧謙益とその周辺(上)」(『馬韓百濟文化』八、円光大馬韓百濟文化研究所、一九八五年)
- 小玉大円「求法僧謙益とその周辺(下)」(『馬韓百濟文化』一〇、円光大馬韓百濟文化研究所、一九八七年)
- 小浜成「河内新堂廃寺の伽藍配置に関する一考察」(『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』、藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会、二〇〇二年)
- 近藤浩一「扶余陵山里出土木簡と泗沘都城関連施設」(『東アジアの古代文化』一二五、古代学研究所二〇〇五年)
- 崔英姫「新羅における平瓦・丸瓦製作技術の展開」(『東アジア瓦研究』一、東アジア瓦研究会、二〇〇九年)
- 錢国祥「洛陽永寧寺と塔基壇の発掘と研究」(『東北学院大学論集：歴史と文化』四〇、東北学院大学学術研究会、二〇〇六年)
- 齊藤忠「扶余軍守里廃寺跡に見られる伽藍配置とその源流」(『百濟文化と飛鳥文化』、黄寿永・田村円澄編、吉川弘文館、一九七八年)
- 崔孟植・尹根一「王宮里廃寺跡の発掘」(『仏教芸術』二〇七、毎日新聞社、一九九三年)
- 早乙女雅博「新羅の考古学調査一〇〇年の研究」(『朝鮮史研究会論文集』三九、朝鮮史研究会、二〇〇五年)
- 坂詰秀一「軍守里廃寺址と若草伽藍」(『月刊考古学ジャーナル』五九六、ニューサイエンス社、二〇一〇年)
- 佐川正敏「日本古代木塔基壇の構築技法と地下式心礎、およびその東アジア的考察」(『東北学院大学論集：歴史と文化』四〇、東北学院大学学術研究会、二〇〇六年)

- 佐川正敏 「日本古代木塔基壇の構築技術復原と心礎設置形式の変遷に関する研究」(『百済研究』四四、忠南大百済研究所、二〇〇六年)
- 佐川正敏 「飛鳥寺木塔心礎考」(『坪井清足先生卒寿記念論文集』、坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、二〇一〇年)
- 佐川正敏 「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎施設・舍利奉安形式の系譜」(『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一〇年)
- 佐川正敏 「南北朝時代から明時代まで造瓦技術の変遷と変革」(『古代』一二九・一三〇合併号、早稲田大学考古学会、二〇一一年)
- 澤村仁 「難波京と四天王寺その他一二の問題について」(『難波宮址研究』七(論考編)、(財)大阪市文化財協会、一九八一年)
- 島田敏男 「寺院建築のはじまり」(『日本の時代史三』倭国から日本へ)、吉川弘文館、二〇〇二年)
- 清水昭博 「出土状況からみた埴川用法の検討」(『考古学論攷』一九、奈良県立橿原考古学研究所、一九九五年)
- 清水昭博 「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開」(『日本考古学』一七、日本考古学協会、二〇〇四年)
- 清水昭博 「瓦の伝来―百済と日本の初期瓦生産体制の比較」(『考古学論攷』二七、奈良県立橿原考古学研究所、二〇〇四年)
- 清水昭博 「軍守里廃寺出土軒丸瓦の検討」(『MUSEUM』五九六、東京国立博物館、二〇〇六年)
- 清水昭博 「斑鳩からみた飛鳥」(『都城―古代日本のシンボリズム』、青木書店、二〇〇七年)
- 清水昭博 「古新羅瓦の溯源に関する検討―有軸素弁蓮華文軒丸瓦を中心として」(『王権と武器と信仰』、管谷文則編、同成社、二〇〇八年)
- 清水昭博 「百済泗泚時代の瓦生産―扶余亭岩里窯の検討」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅹ、帝塚山大学考古学研究所、二〇〇八年)
- 清水昭博 「韓半島南部地域における初期造瓦技術の導入・普及とその背景―百済・新羅の初期造瓦技術と仏教」(『市大日本史』一三、大阪市立大学日本史学会、二〇一〇年)
- 清水重敦・山下秀樹 「古代寺院建築における特異な基壇・平面とその構造」(『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』奈良文化財研究所、二〇〇九年)
- 下倉涉 「南北朝の帝都と寺院」(『東北学院大学論集―歴史と文化』四〇、東北学院大学学術研究会、二〇〇六年)
- 朱岩石 「鄴城遺跡趙彭城東魏北齊仏寺跡の調査と発掘」(『東北学院大学論集―歴史と文化』四〇、東北学院大学学術研究会、二〇〇六年)
- 朱岩石 「南北朝寺院遺跡と出土遺物」(『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』、勉誠出版、二〇一〇年)
- 宿白 「五・六世紀、北中国における人物造形上の変化と諸問題」(『中国国宝展』、東京国立博物館、二〇〇〇年)
- 白井克也 「東京国立博物館保管青磁獣脚硯」(『MUSEUM』五六八、東京国立博物館、二〇〇〇年)
- 白石太一郎 「古墳の終末と寺院造営の始まり」(『河内古代寺院巡礼』、大阪市立近つ飛鳥博物館、二〇〇七年)
- 白井陽子 「日本出土の三尊埴川―その製作のはじまり」(『考古学論攷』三四、奈良県立橿原考古学研究所、二〇一一年)
- 新川登龜男 「古代朝鮮半島の舍利と舍利銘文―飛鳥寺再考の準備として」(『古代東アジアの仏教と王権―王興寺から飛鳥寺へ』、勉誠出版、二〇一〇年)
- 秦弘燮 「百済寺院の伽藍制度」(『古代を考える―古代の日本と朝鮮』)、古代を考える会、一九七六年)
- 申光燮・洪性彬 「扶蘇山廃寺跡の発掘」(『仏教芸術』二〇七、一九九三年)
- 末松保和 「新羅仏教伝来伝説考」(『新羅史の諸問題』、東洋文庫、一九五四年)

- 杉三郎「軍守里寺址発掘」(『趣味の扶余』、迎月堂、一九四一年)
- 杉三郎「百済山懐精舍址」(『古美術』一三卷五号、宝雲舎、一九四三年)
- 杉山信三「大唐平百済塔の比例に就いて」(『考古学』八卷六号、東京考古学会、一九三八年)
- 鈴木靖民「石上神宮七支刀銘についての一試論」(『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上、吉川弘文館、一九八三年)
- 諏訪義純「梁武帝仏教関係史蹟年譜考」(『中国南朝仏教史の研究』、法蔵館、一九九七年)
- 妹尾周三・佐竹昭「二〇〇一年出土の木簡―広島安芸国分寺跡―」(『木簡研究』二四、木簡学会、二〇〇二年)
- 瀨間正之「百済弥勒寺」金製舍利奉安記」と「聖徳太子」(『日本書紀の迷と聖徳太子』、平凡社、二〇一一年)
- 曾根正人「日本仏教の黎明」(『日本の時代史三―倭国から日本へ』、吉川弘文館、二〇〇二年)
- 藪田香融「東アジアにおける仏教の伝来と受容」(『関西大学東西学術研究所紀要』二二、関西大学東西学術研究所、一九八九年)
- 蘇黙「莫高窟壁画にみえる寺院建築」(『中国石窟敦煌莫高窟』四、平凡社、一九九三年)
- 高橋潔・広瀬繁明・山本訝和「関野貞の朝鮮古蹟調査」(『関野貞のアジア踏査』(東京大学コレクション)、東京大学総合研究博物館、二〇〇五年)
- 高橋潔「関野貞を中心として朝鮮古蹟調査旅程：一九〇九―一九一五」(『考古学史研究』九、京都木曜クラブ、二〇〇一年)
- 高橋照彦「日本古代における三彩・緑釉陶の歴史的特質」(『国立歴史民俗博物館研究報告』九四、国立歴史民俗博物館、二〇〇二年)
- 高橋照彦「緑釉陶器―その変遷と特質―」(『列島の古代史六―専門技能と技術』、岩波書店、二〇〇六年)
- 武田幸男「六世紀における朝鮮三国の国家体制」(『東アジア世界における日本古代史講座』四、学生社、一九八〇年)
- 伊達宗泰「古墳・寺・氏族」(『末永先生古稀記念古代学論叢』、一九六七年)・森浩一編『論集終末期古墳』(塙書房、一九七三年)
- 田中塚「三彩・緑釉」(『世界陶磁全集』二、小学館、一九七九年)
- 田中俊明「百済漢城時代における王都の変遷」(『朝鮮古代研究』一、朝鮮古代研究刊行会、一九九七年)
- 田中俊明「慶州新羅廢寺考(一)―新羅王都研究の予備的考察」(『堺女子短期大学紀要』二三、堺女子短期大学、一九八八年)
- 田中俊明「朝鮮三国の陵寺について」(『東アジア都城の比較研究』、橋本義則編、京都大学学術出版会、二〇一一年)
- 田中央生「百済王興寺と飛鳥寺と渡来人」(『東アジアの古代文化』一三六、古代学研究所、二〇〇八年)
- 田中央生「飛鳥寺建立と渡来工人僧侶たち―倭国における技術伝習の新局面」(『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一一年)
- 田辺征夫「古代寺院の基壇―切石積基壇と瓦積基壇―」(『原始古代社会研究』四、校倉書房、一九七八年)
- 田辺征夫・森郁夫「寺院の造営」(『日本歴史考古学を学ぶ』中、有斐閣、一九八六年)
- 田辺征夫「瓦積基壇と渡来系氏族」(『季刊考古学』六〇、雄山閣、一九九七年)
- 田村円澄「百済仏教史序説」(『百済文化と日本文化』、吉川弘文館、一九七八年)
- 田村円澄「漢訳仏教圏の仏教伝来」(『古代朝鮮仏教と日本仏教』、吉川弘文館、一九八〇年)

- 張慶浩「弥勒寺跡の発掘」(『仏教芸術』二〇七、毎日新聞社、一九九三年)
- 張慶浩「韓国古代寺院跡の発掘」(『仏教芸術』二〇七、毎日新聞社、一九九三年)
- 坪井清足「飛鳥寺創建諸説の検討」(『文化財論叢』、奈良文化財研究所創立三〇周年記念論文集、一九八二年)
- 寺崎保広「帳簿」(『文字と古代日本』支配と文字、吉川弘文館、二〇〇四年)
- 寺島典人「日本塑像分布一覽表(日本国内)」(『石山寺境内遺跡発掘調査報告書』、大津市埋蔵文化財調査報告第三九集、二〇〇六年)
- 寺島典人「研究ノート大津市内の塑像について」(『大津市歴史博物館研究紀要』一四、大津市歴史博物館、二〇〇七年)
- 戸田有二「百済の鏡瓦製作技法について(Ⅰ)」(『百済文化』三〇、公州大百済文化研究所、二〇〇一年)
- 戸田有二「百済の鏡瓦製作技法について(Ⅱ)」(『百済文化』三七、公州大百済文化研究所、二〇〇七年)
- 百橋明穂「古代寺院における堂内壁画荘嚴の系譜」(『秋山光和博士古稀記念美術史論文集』、便利堂、一九九一年)
- 富谷至「漢代穀倉制度―エチナ川流域の食糧支給より―」(『東方学報』六八、京都大学人文科学研究所、一九九六年)
- 永島暉臣慎「高句麗の都城と建築」(『難波宮址の研究』七(論考篇)、(財)大阪市文化財協会、一九八一年)
- 中島正「軒瓦からみた高麗寺の沿革」(『高麗寺跡』、山城町教育委員会、一九八九年)
- 納谷守幸「軒丸瓦製作手法の変遷」(『明日香村文化財調査研究紀要』四、明日香村教育委員会、二〇〇四年)
- 西本昌弘「飛鳥に來た西域の吐火羅人」(『東西学術研究所紀要』四三、関西大学、二〇一〇年)
- 西山良平「陵寺の誕生―嘉祥寺再考―」(『日本国家の史的特質(古代・中世)』、大山喬平教授退官記念会、一九九七年)
- 服部伊久男「古代莊園図からみた氏寺の構造と景観」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八八、国立歴史民俗博物館、二〇〇一年)
- 花谷浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」(『考古学研究』四〇―二、考古学研究会、一九九三年)
- 花谷浩「京内廿四寺について」(『研究論集』Ⅹ、奈良文化財研究所、二〇〇〇年)
- 花谷浩「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」(『古代瓦研究―飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで』Ⅰ、奈良文化財研究所、二〇〇〇年)
- 花谷浩「豊浦寺の伽藍配置について」(『古代瓦研究―飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで』Ⅰ、奈良文化財研究所、二〇〇〇年)
- 花谷浩「飛鳥の瓦と百済の瓦」(『古代東アジアの造瓦技術』、奈良文化財研究所、二〇一〇年)
- 林直樹「今西龍と朝鮮考古学」(『青丘学術論集』一四、韓国文化研究振興財団、一九九九年)
- 光森正士「古代寺院の礼拝空間についての試論―三金堂―二金堂の存在に対する疑問」(『仏教美術論考』、法蔵館、一九九八年)
- 樋口隆康「百済武寧王陵出土鏡と七子鏡」(『史林』五五卷四号、史学研究会、一九七二年)
- 菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」(『史林』六九―三、史学研究会、一九八六年)
- 平川南「道祖神信仰の源流」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一三三、国立歴史民俗博物館、二〇〇六年)
- 平川南「百済の都出土の連公木簡」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一五三、国立歴史民俗博物館、二〇〇九年)

- 平川南「正倉院佐波理加盤附属文書の再検討」(『日本歴史』七五〇、日本歴史学会、二〇一〇年)
- 平野邦雄「今来漢人」(『大化前代社会組織の研究』、吉川弘文館、一九六九年)
- 平松良雄「明日香における古代寺院の調査と遺物」(『統明日香村史』(上巻考古編)、明日香村、二〇〇六年)
- 藤澤一夫「百済仏教遺跡の研究」(『人文』三巻一号、人文科学委員会、一九四六年)
- 藤澤一夫「日鮮古代屋瓦の系譜」(『世界美術全集』二、角川書店、一九六一年)
- 藤澤一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の関係」(『アジア文化』八巻二号、アジア文化研究所、一九七一年)
- 藤澤一夫「百済国都泗泚城と日本撰河国百济郡」(『激動の古代東アジア』、帝塚山考古学研究所、一九九五年)
- 藤島亥治郎「朝鮮建築史論其三」(『建築雑誌』二、日本建築学会、一九三〇年)
- 藤田亮策「朝鮮に於ける古蹟の調査及び保存の沿革」(『朝鮮』一九九、朝鮮総督府、一九三一年)
- 藤田亮策「朝鮮古文化財の保存」(『朝鮮学報』一、朝鮮学会、一九五一年)
- 藤田亮策「朝鮮古蹟調査」(『朝鮮学論考』、藤田先生記念事業会、一九六三年)
- 仏教芸術学会「飛鳥寺の発掘をめぐって」座談会(『仏教芸術』三三三、毎日新聞社、一九五八年)
- 船山徹「捨身の思想」六朝仏教史の一断面(『東方学報』七四、京都大学人文科学研究所、二〇〇二年)
- フランソワ・ベルチェ「飛鳥寺問題の再吟味」(『仏教芸術』九六、毎日新聞社、一九七四年)
- 古市晃「統合中枢の成立と変遷」(『日本古代王権の支配論理』、塙書房、二〇〇九年)
- 朴淳発「泗泚都城研究の現段階」(『東アジア都城の比較研究』、京都大学学術出版会、二〇一一年)
- 松井忠春「韓国の土器文化について」百済の長鼓形器台とその性格(『激動の古代東アジア』六・七世紀を中心に』、帝塚山考古学研究所、一九九五年)
- 水野柳太郎「日本書紀と元興寺縁起の対比」(『日本古代の寺院と史料』、吉川弘文館、一九九三年)
- 向井佑介「魏の洛陽城建設と文字瓦」(『待兼山考古学論集』、大阪大学考古学研究室、二〇一〇年)
- 向井佑介「北魏平城時代の仏教寺院と塑像」(『仏教芸術』三二六、毎日新聞社、二〇一一年)
- 毛利久「飛鳥大仏の周辺」(『仏教芸術』六七、毎日新聞社、一九六八年)
- 毛利光俊彦「古代朝鮮冠(百済)」(『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集』、森郁夫先生還暦記念論文集刊行会、一九九九年)
- 森郁夫「わが国における初期寺院の成立」(『学叢』一六、京都国立博物館、一九九四年)
- 門田誠一「三国史記百済本紀所載の築城用語考」(『古代アジア東地域相の考古学的研究』、学生社、二〇〇六年)
- 山尾幸久「ヤマト国家の形成と日朝関係」(『古代の日朝関係』、塙書房、一九八九年)
- 山口英男「帳簿と木簡」正倉院文書の帳簿・継文と木簡(『木簡研究』一二、木簡学会、二〇〇〇年)
- 山口英男「大和額田寺伽藍並條里図」(『日本古代荘園図』、東京大学出版会、二〇〇一年)



- 山崎信二「百済の瓦生産」(『古代造瓦史』東アジアと日本)、雄山閣、二〇一一年)
- 山崎隆之「永寧寺塔内塑像の製作技法について」(『北魏洛陽永寧寺』、奈良国立文化財研究所、一九九八年)
- 山田隆文「韓国の磚仏」(『朝鮮古代研究』一、朝鮮古代研究刊行会、一九九九年)
- 山中章「古代宮都成立期の都市性」(『新体系日本史六都市社会史』、山川出版社、二〇〇一年)
- 山本忠尚「飛鳥の文様―猪目形」(『季刊明日香風』八三、飛鳥保存財団、二〇〇二年)
- 山本雅和「文化標徴としての古墳」(『考古学史研究』九、京都木曜クラブ、二〇〇一年)
- 吉井秀夫「百済地域における横穴式石室分類の再検討」(『考古学雑誌』七九二、日本考古学会、一九九三年)
- 吉川真司「飛鳥池木簡の再検討」(『木簡研究』二三、木簡学会、二〇〇一年)
- 吉村怜「百済武寧王妃木枕に画かれた仏教図像について」(『美術史研究』一四、早稲田大学美術史学会、一九七七年)
- 吉村怜「仏教美術の東アジアへの伝播」(『東アジア社会と仏教文化』、春秋社、一九九六年)
- 米田美代治「扶余百済五層石塔の意匠計画」(『韓国上代建築の研究』、秋田屋、一九四四年)
- 李成市「高句麗と日隋外交」(『古代東アジアの民族と国家』、岩波書店、一九九八年)
- 李成市「東アジアの木簡文化―伝播の過程を読みとく」(『木簡から古代がみえる』、岩波書店、二〇一〇年)
- 李成市「王興寺の成立と百済仏教―高句麗・新羅仏教との関係を中心に」(『古代東アジアの仏教と王権』、勉誠出版、二〇一〇年)
- 李タウン「百済の瓦からみた飛鳥時代初期の瓦について」(『飛鳥・白鳳の瓦と土器―年代論』、一九九九年)
- 李タウン「百済の瓦生産―熊津時代・泗泚時代を中心として」(『韓半島考古学論叢』、西谷正編、すずさわ書店、二〇〇二年)
- 李炳鎬「植民地期における扶余地域の寺址調査に対する再検討」(『奈良美術研究』一一、早稲田大学奈良美術研究所、二〇一一年)
- 梁正錫「新羅皇龍寺九層木塔の造成に関する比較史的検討」(『東北学院大学論集・歴史と文化』四〇、東北学院大学学術研究会、二〇〇六年)
- 早稲田大学院東洋美術史編「美術史料として読む『集神州三宝感通録』―釈読と研究(二)東晋金陵長干塔縁二」(『奈良美術研究』八、早稲田大学奈良美術研究所、二〇〇九年)
- 和田萃「飛鳥・奈良時代の喪葬儀礼」(『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上、塙書房、一九九五年)
- 渡辺昭人・関広尚世・佐竹昭「釈文の修正と追加―広島安芸国分寺跡」(『木簡研究』二六、木簡学会、二〇〇四年)
- 韓国語の論文(カナタ順)**
- 姜英心「日帝下「朝鮮林野調査事業」に関する研究(下)」(『韓国学報』三四、一志社、一九八四年)
- 姜友邦「四天王寺址出土彩釉四天王浮彫像の復元的考察」(『美術資料』二五、国立中央博物館、一九八〇年)
- 姜友邦「陵旨塔四方仏塑造像の考察」(『新羅文化』一七、東国大新羅文化研究所、一九九六年)

- 姜友邦「武寧王妃頭枕と足座の靈気化生の造形解釈と画像解釈」(『武寧王陵を格物する』武寧王陵発掘四〇周年記念特別展、国立公州博物館、二〇一一年)
- 姜鍾元「扶余東南里と錦山栢嶺山城出土文字資料」(『木簡と文字』三、韓国木簡学会、二〇〇九年)
- 姜賢淑「伝東明王陵と真坡里古墳群の性格検討」(『湖西考古学』一八、湖西考古学会、二〇〇八年)
- 姜賢淑「中国吉林省東台子遺跡再考」(『韓国考古学報』七五、韓国考古学報、二〇一〇年)
- 高木博志「日本美術史と朝鮮美術史の成立」(『国史の神話を越えて』、ヒューマニスト、二〇〇四年)
- 郭東錫「百濟泗泚期の仏像の特徴と日本の飛鳥彫刻との関係」(『百濟泗泚期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年)
- 丘冀鍾・李販燮「扶余佳塔里ジャングモクドウル百濟遺跡調査概報」(『湖西地域文化遺産発掘成果』(第一二回湖西考古学会学術大会発表集、二〇〇五年)
- 国立文化財研究所・益山市「弥勒寺の寺刹配置」(『弥勒寺復原考証基礎調査研究報告書二』(弥勒寺復原研究学術資料叢書Ⅲ)、二〇一〇年)
- 権五栄「考古資料を通してみた百濟と中国の文物交渉」(『震檀学報』六六、震檀学会、一九九八年)
- 権五栄「艇止山遺跡と百濟の喪葬儀礼」(『艇止山』、学術調査叢書第七冊、一九九九年)
- 権五栄「古代韓国の喪葬儀礼」(『韓国古代史研究』二〇、韓国古代史学会、二〇〇〇年)
- 権五栄「喪葬制を中心にした武寧王陵と南朝墓の比較」(『百濟文化』三一、公州大百濟文化研究所、二〇〇二年)
- 権五栄「漢城期百濟瓦の製作伝統と発展の画期」(『百濟研究』三八、忠南大百濟研究所、二〇〇三年)
- 権五栄「漢城都邑期文化遺産の分布様相と活用方案」(『漢城百濟の歴史と文化』、書景文化社、二〇〇七年)
- 権五栄「聖なる井戸の祭祀」(『地方史と地方文化』一一卷二号、歴史文化学会、二〇〇八年)
- 権兌遠「百濟の籠冠考」(『尹武炳博士回甲紀念論叢』、通川文化社、一九八四年)
- 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡の研究」(『百濟研究』三九、忠南大百濟研究所、二〇〇四年)
- 近藤浩一「百濟時期の孝思想受容とその意義」(『百濟研究』四二、忠南大百濟研究所、二〇〇五年)
- 近藤浩一「扶余陵山里羅城築造木簡再論」(『韓国古代史研究』四九、韓国古代史学会、二〇〇八年)
- 金圭東「百濟土製煙筒試論」(『科技考古研究』八、亞洲大学校博物館、二〇〇二年)
- 金圭東・成在賢「船里銘文瓦考察」(『考古学誌』一七、国立中央博物館、二〇一一年)
- 金基民「新羅瓦製作法に関する研究」(慶州勿川里出土瓦を中心に)(『東亞大碩士學位論文』、二〇〇一年)
- 金吉植「氷庫を通してみた公州艇止山遺跡の性格」(『考古学誌』一一、国立中央博物館、二〇〇一年)
- 金吉植「百濟始祖仇台廟と陵山里寺址」(『韓国考古学報』六九、韓国考古学会、二〇〇八年)
- 金理那「三国時代の捧持宝珠形菩薩立像研究」(『美術資料』三七、国立中央博物館、一九八五年)
- 金理那「百濟初期仏像様式の成立と中国仏教」(『百濟史の比較研究』、忠南大百濟研究所、一九九三年)

- 金理那「高句麗仏彫刻様式の展開と中国仏彫刻」(『高句麗美術の対外交渉』、韓国美術史学会、一九九六年)
- 金理那「七世紀百済の仏彫刻」(『百済の美術』百済文化史大系一四、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇七年)
- 金洛中「扶余泗泚都城に対する研究成果と課題」(『韓国の都城：三国と朝鮮、発掘調査と成果』、国立慶州・扶余・加耶文化財研究所開所二〇周年記念国際シンポジウム、二〇一〇年)
- 金洛中「百済泗泚期寺刹の伽藍配置と造宮の特徴」(『韓国上古史学報』七四、韓国上古史学会、二〇一一年)
- 金洛中「百済定林寺の創建年代」(『文化財』四五―四、国立文化財研究所、二〇一二年)
- 金奉烈・朴鍾進「高麗伽藍の構成形式に関する基礎的研究」(『大韓建築学会論文集』五卷六号(通卷二六)、大韓建築学会、一九八九年)
- 金相鉉「百済威徳王による父王のための追福と夢殿観音」(『韓国古代史研究』一五、韓国古代史学会、一九九九年)
- 金相鉉「中国文献所載高句麗仏教史記録の検討」(『高句麗の思想と文化』、高句麗研究財団、二〇〇五年)
- 金相鉉「百済武王代仏教界の動向と弥勒寺」(『韓国史学報』三七、高麗史学会、二〇〇九年)
- 金善基「益山帝釈寺址一考察」(『文物研究』六、東アジア文物研究学術財団、二〇〇二年)
- 金善基「益山帝釈寺の百済瓦について」(『瓦学会論文集』三、韓国瓦学会、二〇〇七年)
- 金誠龜「安鴨池出土古式瓦当の形式的考察」(『美術資料』二九、国立中央博物館、一九八一年)
- 金誠龜「扶余の百済窯址と出土遺物について」(『百済研究』二一、忠南大百済研究所、一九九一年)
- 金誠龜「新羅瓦の成立とその変遷」(『新羅瓦博』、国立慶州博物館、二〇〇〇年)
- 金成南「百済泗泚王宮の拡大と変貌過程試論」(第五七回忠南大百済研究所公開講座発表文、二〇〇七年)
- 金成南・李美賢「日帝強占期の遺跡発掘調査と再検討」(『日帝強占期の泗泚認識』、(財)扶余郡文化財保存センター、二〇〇九年)
- 金寿泰「百済の地方統治と道使」(『百済の中央と地方』、忠南大百済研究所、一九九七年)
- 金寿泰「百済威徳王代扶余陵山里寺院の創建」(『百済文化』二七、公州大百済文化研究所、一九九八年)
- 金寿泰「百済の聖王代の郡令と城主」(『百済文化』三一、公州大百済文化研究所、二〇〇二年)
- 金妍秀「韓国古代の寺刹工房施設について」(『美術史の鼎立と拡散(二)』、韓国および東洋の美術』、社会評論、二〇〇六年)
- 金英心「百済地方統治体制研究」(ソウル大博士學位論文、一九九七年)
- 金英心「百済の地方統治に関するいくつかの再検討」(『韓国古代史研究』四八、韓国古代史学会、二〇〇七年)
- 金永旭「百済吏読について」(『口訣研究』一一、口訣学会、二〇〇三年)
- 金英媛「百済時代中国陶磁の輸入と倣製」(『百済文化』二七、公州大百済文化研究所、一九九八年)
- 金英媛「統一新羅時代鉛釉の発達と磁器の出現」(『美術資料』六二、国立中央博物館、一九九九年)
- 金煥泰「威徳王当時の仏教」(『百済仏教思想研究』、東国大出版部、一九八五年)

- 金完鍾 「国語学一〇年先の将来を展望する」(『国語国文学の未来への道を問う』、太学社、二〇〇五年)
- 金容民 「百済泗泚期土器に対する一考察 扶蘇山城出土土器を中心に」(『文化財』三二、国立文化財研究所、一九九八年)
- 金容民 「百済煙家について」(『文化財』三五、国立文化財研究所、二〇〇二年)
- 金容民 「益山王宮城の造営と空間区画に対する考察」(『古代都市と王権』、忠南大百済研究所、二〇〇五年)
- 金容徹 「岡倉天心と日本美術史の成立」(『日本思想』七、韓国日本思想史学会、二〇〇四年)
- 金有植 「瓦を通してみた新羅・高句麗の対外交渉」(『東岳美術史学』二、東岳美術史学会、二〇〇一年)
- 金恩淑 「六世紀後半新羅と倭国の国交成立過程」(『新羅文化祭学術発表論文集』一五、新羅文化宣揚会、一九九四年)
- 金恩淑 「倭国との関係」(『韓国史』七、国史編纂委員会、一九九七年)
- 金仁徳 「朝鮮総督府博物館」(『韓国博物館一〇〇年史』国立博物館編、社会評論、二〇〇九年)
- 金正基 「弥勒寺塔と定林寺塔」建立時期の先後に関して」(『考古美術』一六四、考古美術同好会、一九八四年)
- 金正基 「皇龍寺伽藍変遷に関する考察」(『皇龍寺』、文化財管理局、一九八四年)
- 金正基 「韓国古代伽藍の実態と考察」(『蕉雨黄寿永博士古稀記念美術史学論叢』、通文館、一九八八年)
- 金鍾萬 「扶余陵山里寺址に対する小考」(『新羅文化』一七・一八合集、東国大新羅文化研究所、二〇〇二年)
- 金鍾萬 「泗泚時代瓦にあらわれた社会相小考」(『国立公州博物館紀要』二、国立公州博物館、二〇〇二年)
- 金鍾萬 「聖王時代百済生活土器」(『百済聖王と彼の時代』、扶余郡、二〇〇七年)
- 金鍾萬 「扶余陵山里建物群の性格と変遷」、『考古学誌』一七、国立中央博物館、二〇一二年)
- 金泰植 「百済の加耶地域関係史…交渉と征服」(『百済の中央と地方』、忠南大百済研究所、一九九七年)
- 金昌鎬 「新羅興輪寺の伽藍配置問題」(『新羅文化』二〇、東国大新羅文化研究所、二〇〇二年)
- 金賢淑 「高句麗の漢江流域領有と支配」(『百済研究』五〇、忠南大百済研究所、二〇〇九年)
- 金賢晶 「陵山里寺址出土印花紋土器に対する検討」(『国立公州博物館紀要』二、国立公州博物館、二〇〇二年)
- 金惠瑗 「敦煌莫高窟唐代(維摩経变)にみられる世俗人聴衆の画像と意味」(『美術史の鼎立と拡散二卷』韓国および東洋の美術』、社会評論、二〇〇六年)
- 金和英 「韓国蓮華文研究」(梨花女大博士學位論文、一九七六年)
- 吉基泰 「呪嚙師と薬師信仰」(『百済泗泚時代の仏教信仰研究』、書景、二〇〇六年)
- 吉基泰 「水源寺弥勒信仰の性格」(『百済文化』三六、公州大百済文化研究所、二〇〇七年)
- 吉基泰 「王興寺址舍利函銘文を通してみた百済仏教」(『韓国史市民講座』四四、一潮閣、二〇〇九年)
- 吉井秀夫・崔英姫 「京都大学総合博物館所蔵山田鈿次郎寄贈高句麗瓦の検討」(『日本所在高句麗遺物』、東北亞歴史財団、二〇〇九年)
- 南浩鉉 「扶余官北里百済遺跡の性格と時間的位置」二〇〇八年度調査区域を中心に」(『百済研究』五一、忠南大百済研究所、二〇一一年)

- 盧明鎬・李承宰 「高麗顯宗・靖宗代積迦塔重修記録の判読・訳注」(『積迦塔発見遺物調査中間報告』、国立中央博物館、二〇〇七年)
- 盧重国 「新羅と百済の交渉と交流」(『新羅文化』一七・一八合集、東国大新羅文化研究所、二〇〇〇年)
- 盧重国 「百済の度量衡とその運用」(『韓国古代史研究』四〇、韓国古代史学会、二〇〇五年)
- 盧重国 「医・薬技術の発展と医療活動」(『百済社会思想史』、知識産業社、二〇一〇年)
- 盧泰敦 「三韓に対する認識の変遷」(『韓国史研究』三八、韓国史研究会、一九八二年)
- 大橋一章 「法隆寺の創建と再建」(『講座美術史』一六、韓国仏教美術史学会、二〇〇一年)
- 柳基正 「泗泚期オンドル施設建物址に対する一考察」(『国立公州博物館紀要』三、国立公州博物館、二〇〇三年)
- 文東錫 「梁武帝の仏教政策について―百済と関連性を中心に―」(『東亞考古論壇』二、忠清文化財財研究院、二〇〇六年)
- 文東錫 「漢城百済の茶文化と茶確」(『百済研究』五六、忠南大百済研究所、二一一二年)
- 文明大 「元五里寺址塑像の研究」(『考古美術』一五〇、考古美術同好会、一九八一年)
- 文明大 「扶余定林寺址から出土した仏像と陶俑」(『季刊美術』(冬号)、中央日報社、一九八一年)
- 文玉賢 「百済王興寺の瓦供給に対する一考察」(『韓国伝統文化研究』九、韓国伝統文化大学校伝統文化研究所、二〇一一年)
- 閔庚仙 「百済泗泚期寺刹の伽藍配置の変化様相に対する一考察」(『古文化』七八、韓国大学博物館協会、二〇一一年)
- 朴光烈 「新羅瑞鳳冢と壺杆塚の絶対年代考」(『仏教考古学』二、威徳大学校博物館、二〇〇二年)
- 朴光烈 「新羅積石木槨墳出土黄金遺物と初伝仏教」(『文化史学』二七、文化史学会、二〇〇七年)
- 朴南守 「新羅宮中手工業の成立と整備」(『東国史学』二六、東国史学会、一九九二年)
- 朴南守 「中・下代工人の分化と社会経済的地位変動」(『新羅手工業史』、新書園、一九九六年)
- 朴南守 「益山弥勒寺址出土金鋌と百済の衡制」(『韓国史研究』一四九、韓国史研究会、二〇一〇年)
- 朴普鉉 「金銅冠からみた羅州新村里九号墳乙棺の年代」(『百済研究』二八、忠南大百済研究所、一九九八年)
- 朴淳発 「泗泚都城の構造について」(『百済研究』三一、忠南大百済研究所、二〇〇〇年)
- 朴淳発 「泗泚都城空間区画予察」(『湖西地方史研究』、湖雲崔權默教授定年記念論叢刊行委員会、二〇〇三年)
- 朴淳発 「漢城期百済の対中交渉一例―夢村土城出土金銅鈔帶金具推考―」(『湖西考古学』一一、湖西考古学会、二〇〇四年)
- 朴淳発 「高句麗と百済―泗泚様式百済土器の形成背景を中心に―」(『高句麗と東アジア』、国際学術シンポジウム資料集、高麗大博物館、二〇〇五年)
- 朴淳発 「公州水村里古墳群出土中国磁器と交差年代問題」(『忠清学と忠清文化』四、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇五年)
- 朴淳発 「泗泚都城研究の現況と課題」(『百済泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年)
- 朴淳発 「泗泚都城と益山王宮城」(『馬韓百済文化』一七、円光大馬韓百済文化研究所、二〇〇七年)

- 朴淳発「百済籠冠俑研究」(『百済研究』四八、忠南大百済研究所、二〇〇八年)
- 朴永民「百済泗泚期遺跡出土高句麗系土器」(『二〇〇二年報』、国立扶余文化財研究所、二〇〇二年)
- 朴永福「青陽陶製仏像台座調査報告」(『美術資料』四九、国立中央博物館、一九九二年)
- 朴容墳「公州大通寺址出土瓦当研究」(『考古美術』一二二・一二二合集、考古美術同好会、一九七四年)
- 朴容墳「百済瓦当の体系的分流入軒丸瓦を中心に」(『百済文化』九、公州大百済文化研究所、一九七六年)
- 朴原志「王興寺出土軒丸瓦の製作技術と系統」(『百済泗泚期瓦研究』三、国立扶余文化財研究所、二〇一一年)
- 朴胤善「威徳王代百済と南北朝の關係」(『歴史と現実』六一、韓国歴史研究会、二〇〇六年)
- 朴仲煥「扶余陵山里寺址発掘調査概要」(二〇〇〇年〜二〇〇一年調査内容)(『東垣學術論文集』四、国立中央博物館、二〇〇一年)
- 朴仲煥「扶余陵山里発掘木簡予報」(『韓国古代史研究』二八、韓国古代史学会、二〇〇二年)
- 朴泰祐「木簡資料を通してみた泗泚都城の空間構造」(『百済学報』創刊号、百済学会、二〇一〇年)
- 朴泰祐・鄭海濬・尹智熙「扶余双北里二八〇―五番地出土木簡報告」(『木簡と文字』二、韓国木簡学会、二〇〇八年)
- 朴憲敏「慶州地域古新羅統一新羅時代瓦研究」(『瓦の生産と流通』、韓国瓦学会第八回定期学術大会、二〇一一年)
- パク・ヒョンジョン「扶余定林寺址陶俑復元のための籠冠服飾研究」(『服飾』五一卷六号、韓国服飾学会、二〇〇一年)
- 朴洪国「瓦博資料を通じた靈廟寺址と輿輪寺址の位置比定」(『新羅文化』二〇、東国大新羅文化研究所、二〇〇二年)
- 方国花「扶余陵山里出土二九九号木簡」(『木簡と文字』六、韓国木簡学会、二〇一〇年)
- 方起東「集安東台子高句麗建築遺址の性質と年代」(『高句麗遺跡と遺物研究』、白山資料院、一九九九年)
- 裴秉宣「扶余地域百済建物址の構造」(『定林寺』歴史文化的価値と研究現況)、国立文化財研究所、二〇〇八年)
- 裴秉宣「弥勒寺の配置と建築遺構を通してみた百済の造営技術」(『百済仏教文化の宝庫、弥勒寺』、学術シンポジウム論文集、国立文化財研究所、二〇一〇年)
- 山崎信二「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本の關係」(『韓日文化財論集』一、国立文化財研究所、二〇〇八年)
- 山本孝文「百済泗泚期石室墳の階層性と政治制度」(『韓国考古学報』四七、韓国考古学会、二〇〇二年)
- 山本孝文「百済泗泚期の陶硯分類・編年と歴史的意義」(『百済研究』三八、忠南大百済研究所、二〇〇三年)
- 山本孝文「韓半島の唐式鈔帶とその歴史的意義」(『嶺南考古学』三四、嶺南考古学会、二〇〇四年)
- 山本孝文「百済泗泚時期土器様式の成立と展開」(『百済泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年)
- 徐己才「日本近代「旅行案内書」を通してみた朝鮮と朝鮮観光」(『日本語文学』一三、韓国日本語文学会、二〇〇二年)
- 徐五善「韓国平瓦文様の時代的変遷に対する研究」(忠南大碩士学位論文、一九八五年)
- 成正鏞「瓦」(『聖住寺』、忠南大博物館、一九九八年)

- 成正鏞「百済と中国の貿易陶磁」(『百済研究』三八、忠南大百済研究所、二〇〇三年)
- 成亨美「扶余定林寺址九次調査地域に対する考古地磁気学的研究」(『扶余定林寺址発掘調査報告書』、国立扶余文化財研究所、二〇一一年)
- 蘇哉潤「百済軒瓦製作技法と生産体制の変化―風納土城出土品を中心に」(『百済学報』四、百済学会、二〇一〇年)
- 蘇賢淑「梁武帝の仏教政策」(『仏教学報』五四、東国大仏教文化研究院、二〇一〇年)
- 孫楨睦「日帝下扶余神宮造営といわゆる扶余神都建設」(『韓国学報』四九、一志社、一九八七年)
- 孫浩成「扶余双北里―一九安全センター敷地出土木簡の内容と判読」(『木簡と文字』七、韓国木簡学会、二〇一一年)
- 申光燮「扶余扶蘇山廢寺址考」(『百済研究』二四、忠南大百済研究所、一九九四年)
- 申光燮「陵山里寺址の発掘調査と伽藍の特徴」(『百済金銅大香爐と古代東亞世亞』、百済金銅大香爐発掘一〇周年記念国際学術シンポジウム、国立扶余博物館、二〇〇三年)
- 申光燮「百済泗泚時代陵寺研究」(中央大博士学位論文、二〇〇六年)
- 申栄勳「扶余臨江寺址発掘参加記」(『考古美術』五卷一―二号、考古美術同好会、一九六四年)
- 申栄勳「既往の新羅瓦の研究」(『韓国建築史大系』新羅の瓦、東山文化社、一九七六年)
- 申鍾国「泗泚都城発掘調査の成果と意義」(『百済泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年)
- 辛鍾遠「道人」使用例を通してみた南朝仏教と韓日関係」(『韓国史研究』五九、韓国史研究会、一九八七年)
- 辛鍾遠「百済仏教美術の思想的背景」(『百済の彫刻と美術』、公州大学校博物館、一九九一年)
- 辛鍾遠「三国仏教と中国の南朝文化」(『講座韓国古代史九』文化の受容と伝播』、韓国古代社会研究所、二〇〇二年)
- 辛鍾遠「三国の仏教初伝者と初期仏教の性格」(『韓国古代史研究』四四、韓国古代史学会、二〇〇六年)
- 申昌秀「皇龍寺址瓦廢棄遺構出土新羅瓦当」(『文化財』一八、国立文化財研究所、一九八五年)
- 申昌秀「三国時代新羅瓦の研究―皇龍寺址出土新羅瓦を中心に」(『文化財』二〇、国立文化財研究所、一九八七年)
- 申昌秀「興輪寺の発掘成果検討」(『新羅文化』二〇、東国大新羅文化研究所、二〇〇二年)
- 新川登龜男「百済と日本の飛鳥・奈良の仏教文化」(『忠清学と忠清文化』一三、忠清南道歴史文化研究院、二〇一一年)
- 沈相六・李美賢・李孝重「扶余中央聖潔教会遺跡およびティッケ遺跡出土木簡報告」(『木簡と文字』七、韓国木簡学会、二〇一一年)
- 安啓賢「百済仏教に関する諸問題」(『百済仏教文化の研究』、忠南大百済研究所、一九九四年)
- 安輝濬「百済の絵画」(『百済の美術』、百済文化史大系一四、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇七年)
- 梁起錫「百済威徳王代の王権の存在形態と性格」(『百済研究』二一、忠南大百済研究所、一九九〇年)
- 梁起錫「百済威徳王代の対外関係」(『先史と古代』一九、韓国古代学会、二〇〇三年)
- 梁時恩「南韓で確認される高句麗の時・空間的正体性」(『考古学』一〇卷二号、中部考古学会、二〇一一年)

- 梁銀景 「遼寧省朝陽北塔出土塑造像研究」(『美術史学研究』二五六、韓国美術史学会、二〇〇七年)
- 梁銀景 「高句麗塑造佛像と中国塑造佛像の關係」(『東北亞歴史論叢』二四、東北亞歴史財団、二〇〇九年)
- 梁銀景 「梁武帝時代の仏教寺刹、仏教彫刻と社会変化」(『美術史学』二三、韓国美術史教育学会、二〇〇九年)
- 梁銀景 「中国仏教寺刹の検討を通してみた百済泗泚期仏教寺刹の諸問題」(『百済研究』五〇、忠南大百済研究所、二〇〇九年)
- 梁銀景 「百済扶蘇山寺址出土品の再検討と寺刹の性格」(『百済研究』五二、忠南大百済研究所、二〇一〇年)
- 梁銀景 「百済帝釈寺址出土塑造像の分析と木塔址を通じた奉安原形推定」(『湖西考古学』二三、湖西考古学会、二〇一〇年)
- 梁銀景 「南京地域南朝金銅佛像に対する一考察」(『CHINA研究』一一、釜山大中国研究所、二〇一一年)
- 梁正錫 「皇龍寺伽藍遷移過程に対する再検討」(『韓国古代史研究』二四、韓国古代史学会、二〇〇一年)
- 梁正錫 「弥勒寺址塔址の調査過程に対する検討」(『韓国史学報』三六、高麗史学会、二〇〇九年)
- 楊泓 「百済仏教文化に対する南朝の影向」(『扶余王興寺址出土舍利器の意義』、国立扶余文化財研究所、二〇〇八年)
- 嚴基日 「泗泚期百済瓦窯の構造変化研究」(『百済文化』四三、公州大百済文化研究所、二〇一〇年)
- 嚴基日 「百済石塔の先後に対する考察」(『文化史学』一六、文化史学会、二〇〇一年)
- 余昊奎 「四世紀東アジア国際秩序と高句麗対外政策の変化」(『歴史と現実』三六、韓国歴史研究会、二〇〇〇年)
- 余昊奎 「漢城時期百済の都城制と防御体系」(『百済研究』三六、忠南大百済研究所、二〇〇二年)
- 延敏洙 「六世紀前半の加耶諸国を巡る百済・新羅の動向」(『新羅文化』七、東国大新羅文化研究所、一九九〇年)
- 延敏洙 「古代韓日外交史」(『三国と倭を中心に』(『韓国古代史研究』二七、韓国古代史学会、二〇〇二年)
- 王志高 「六朝建康城遺跡出土陶瓦の觀察と研究」(『瓦の生産と流通』、韓国瓦学会第八回定期學術大会発表文、二〇一一年)
- 尹武炳 「扶余定林寺址発掘記」(『仏教美術』一〇、東国大学校博物館、一九九一年)
- 尹武炳 「百済王都泗泚城研究」(『學術院研究論文集(人文・社会編)』三三、大韓民国學術院、一九九四年)
- 尹善泰 「扶余陵山里出土百済木簡の再検討」(『東国史学』四〇、東国史学会、二〇〇四年)
- 尹善泰 「百済泗泚都城と岬夷」(『木簡からみた泗泚都城の内と外』(『東亞考古論壇』二、忠清文化財研究院、二〇〇六年)
- 尹善泰 「百済の文書行政と木簡」(『韓国古代史研究』四八、韓国古代史学会、二〇〇七年)
- 尹龍九 「中国系官僚とその活動」(『百済の対外交渉』、百済文化史大系九、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇七年)
- 尹龍嫻 「輕部慈恩の公州百済文化研究」(『百済文化』三四、公州大百済文化研究所、二〇〇五年)
- 尹龍嫻 「輕部慈恩の百済古墳調査と遺物」(『韓国史学報』二五、高麗史学会、二〇〇六年)
- 尹龍嫻 「公州宋山里六号墳の四神図壁画について」(『韓国史学報』二七、高麗史学会、二〇〇八年)
- 尹龍熙 「扶余臨江寺址発掘調査概報」(『考古学誌』一七、国立中央博物館、二〇一一年)



- 李康根 「慶州の文化財に対する再認識―新羅最初の寺、興輪寺を中心に」(『慶州文化』四、慶州文化院、一九九八年)
- 李康根 「芬皇寺の伽藍配置と三金堂形式」(『芬皇寺の諸照明』、新羅文化祭学論文集二〇、新羅文化宣揚会、一九九九年)
- 李康承 「百濟時代の尺に対する研究―扶余双北里遺跡出土尺を中心に」(『韓国考古学報』四三、韓国考古学会、二〇〇〇年)
- 李慶洙 「扶余地域近代博物館の胎動と国立博物館扶余分館の成立」(『特別展扶余博物館の足跡』、国立扶余博物館、二〇〇九年)
- 李基東 「百濟国の政治理念に対する一考察」(『震檀学報』六九、震檀学会、一九九〇年)
- 李基白 「百濟仏教受容年代の検討」(『震檀学報』七一・七二合集、震檀学会、一九九一年)
- 李基白 「三国時代仏教受容の実際―仏教―下賜説」批判」(『百濟研究』二九、忠南大百濟研究所、一九九九年)
- 李南奭 「百濟蓮華文瓦当の一研究―公山城王宮址出土品を中心に」(『古文化』三二、韓国大学博物館協会、一九八八年)
- 李タウン 「百濟瓦博士考」(『湖南考古学報』二〇、湖南考古学会、二〇〇四年)
- 李タウン 「印刻瓦を通してみた益山の瓦に対する研究」(『古文化』七〇、韓国大学博物館協会、二〇〇七年)
- 李道学 「漢城末熊津時代百濟王位継承と王権の性格」(『韓国史研究』五〇・五一合集、韓国史研究会、一九八五年)
- 李道学 「定林寺址五層塔碑銘とその作成背景」(『先史と古代』八、韓国古代学会、一九九七年)
- 李道学 「抱川半月山城出土「高句麗」瓦銘文の再検討」(『高句麗研究』三、高句麗研究会、一九九七年)
- 李道学 「王興寺址舍利器銘文分析を通してみた百濟威徳王代の政治と仏教」(『韓国史研究』一四二、韓国史研究会、二〇〇八年)
- 李文基 「泗泚時代百濟前内部体制の運営と変化」(『百濟研究』四二、忠南大百濟研究所、二〇〇五年)
- 李炳鎬 「百濟泗泚都城の造営過程」(『韓国史論』四七、ソウル大韓国史学科、二〇〇二年)
- 李炳鎬 「百濟泗泚都城の構造と運営」(『韓国の都城―都城造営の伝統』、ソウル市立大ソウル学研究所、二〇〇三年)
- 李炳鎬 「扶余定林寺址出土塑像の製作技法と奉安場所」(『美術資料』七二・七三合集、国立中央博物館、二〇〇五年)
- 李炳鎬 「扶余定林寺址出土塑像の製作時期と系統」(『美術資料』七四、国立中央博物館、二〇〇六年)
- 李炳鎬 「扶余臨江寺址出土塑像について」(『扶余臨江寺址』、忠清大博物館学術研究叢書二二、二〇〇七年)
- 李炳鎬 「扶余旧衙里出土塑像とその遺跡の性格」(『百濟文化』三六、公州大百濟文化研究所、二〇〇七年)
- 李炳鎬 「泗泚都城の構造と築造過程」(『百濟の建築と土木』、百濟文化史大系一五、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇七年)
- 李炳鎬 「泗泚都城と慶州王京の比較試論」(『東アジア都城と新羅王京の比較研究』、新羅文化祭学論文集二九、新羅文化宣揚会、二〇〇八年)
- 李炳鎬 「日帝強占期扶余地域の古蹟調査」(『日帝強占期の泗泚認識』、(財)扶余郡文化財保存センター、二〇〇九年)
- 李炳鎬 「古式蓮華文瓦当の分類と編年」(『慶州工業高等学校内遺構收拾調査』、国立慶州博物館、二〇一一年)
- 李善姬 「月城塚字出土古式軒丸瓦の製作技法と編年研究」(『韓国考古学報』七〇、韓国考古学会、二〇〇九年)
- 李成珪 「韓国古代国家の形成と漢字受容」(『韓国古代史研究』三二、韓国古代史学会、二〇〇三年)

- 李星培 「百濟書芸と木簡の書風」(『百濟研究』四〇、忠南大百濟研究所、二〇〇四年)
- 李成市 「黒板勝美を通してみた植民地と歴史学」(『韓国文化』二三、ソウル大韓国文化研究所、一九九九年)
- 李成制 「五七〇年代高句麗の対倭交渉とその意味」(『韓国古代史探究』二、韓国古代史探究学会、二〇〇九年)
- 李永植 「百濟の加耶進出過程」(『韓国古代史論叢』七、韓国古代社会研究所、一九九五年)
- 李龍範 「北朝前・後期仏教の高句麗伝来」(『論文集』一二、東国大学校、一九七三年)
- 李鎔賢 「木簡」(『百濟の文化と生活』、百濟文化史大系一二、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇七年)
- 李裕群 「中国伽藍配置の変化および百濟に及ぼした影響」(『東アジアの仏教文化と百濟』、ハノル文化遺産研究院開院五周年記念国際学術大会、二〇〇九年)
- 李在景 「沙正洞建物址と輿輪寺址」(『新羅文化』二〇、東国大新羅文化研究所、二〇〇二年)
- 李旼燮・尹善泰 「扶余双北里ヒョンネドウル・北浦遺跡の調査成果」(『木簡と文字』創刊号、韓国木簡学会、二〇〇八年)
- 李漢祥 「公州艇止山遺跡の編年と性格」(『百濟の王室祭祀遺跡「公州艇止山」学術発表会』、国立公州博物館、一九九八年)
- 李漢祥 「艇止山出土土器および瓦の検討」(『艇止山』、国立公州博物館、二〇〇〇年)
- 李漢祥 「百濟の葬礼風習」(『百濟の生活と文化』、百濟文化史大系一二、忠清南道歴史文化研究院、二〇〇七年)
- 李漢祥 「新羅古墳の中の外來文物の調査と研究」(『中央考古研究』六、中央文化財研究院、二〇一〇年)
- 李賢淑 「爾雅釈宮积例考」(『人文科学研究』一一、西原大人文学科研究所、二〇〇二年)
- 李亨源 「泗泚都城内軍守里地点の空間区画および性格」(『湖西考古学』八、湖西考古学会、二〇〇三年)
- 李浩炯 「唐津九龍里窯址收拾調査概要」(『考古学誌』四、韓国考古美術研究所、一九九二年)
- 林起煥 「熊津時期百濟と高句麗対外関係記事の再検討」(『百濟文化』三七、公州大百濟文化研究所、二〇〇八年)
- 林玲愛 「四天王寺址塑像の尊名」(『美術史論壇』二七、韓国美術研究所、二〇〇八年)
- 林永珍 「中国六朝磁器の百濟導入背景」(『韓国考古学報』八三、韓国考古学会、二〇一二年)
- 張寅成 「古代韓国人の疾病観と医療」(『韓国古代史研究』二〇、韓国古代史学会、二〇〇〇年)
- 張寅成 「南朝の喪礼研究」(『百濟研究』三二、忠南大百濟研究所、二〇〇〇年)
- 張寅成 「百濟の医薬と道教文化」(『百濟研究』五二、忠南大百濟研究所、二〇一〇年)
- 錢国祥 「中国魏晋南北朝時代の瓦当」(『古代東アジア三国の対外交渉』、国立慶州博物館、二〇〇〇年)
- 田庸昊 「王宮里遺跡の最近の発掘成果」(『益山王宮里遺跡の調査成果と意義』、国立扶余文化財研究所二〇〇九年)
- 田中俊明 「王都としての泗泚城に対する予備的考察」(『百濟研究』二二、忠南大百濟研究所、一九九〇年)
- 全虎兌 「伽倻古墳壁画に関する一考察」(『韓国古代史論叢』四、韓国古代史研究会、一九九二年)

- 鄭珖鎬 「高句麗仏教受容の国際社会的背景」(『人文研究』九、仁荷大人文学研究所、一九八三年)
- 鄭相基 「植民地期資料からみた宋山里と陵山里古墳群」(『東垣学術論文集』一〇、国立中央博物館、二〇〇九年)
- 鄭尚雨 「一九一〇～一九一五年朝鮮総督府囑託の学術調査事業」(『歴史と現実』六八、韓国歴史研究会、二〇〇八年)
- 鄭子英 「六、七世紀百濟寺刹内講堂左右建物址の変遷過程考察」(『建築歴史研究』七三、韓国建築歴史学会、二〇一〇年)
- 鄭子英 「扶余定林寺址伽藍配置と編年の検討」(『韓國上古史学報』七六、韓國上古史学会、二〇一二年)
- 鄭治泳 「漢城期百濟瓦製作技術の展開様相」(『韓國考古学報』六三、韓國考古学会、二〇〇七年)
- 鄭治泳 「百濟漢城期瓦当の形成と系統」(『韓國上古史学報』六四、韓國上古史学会、二〇〇九年)
- 鄭治泳 「百濟・高句麗と魏晋南北朝製瓦術比較研究」(『中央考古研究』八、中央文化材研究院、二〇一一年)
- 鄭浩燮 「高句麗壁画古墳の銘文と被葬者に関する諸問題」(『高句麗渤海研究』三六、高句麗研究会、二〇一〇年)
- 趙佳英 「石村洞古墳群の築造様相検討―古墳分布を中心に―」(『韓國上古史学報』七五、韓國上古史学会、二〇一二年)
- 趙景徹 「百濟聖王大代儒仏政治理念―陸詡と謙益を中心に―」(『韓國思想史』一五、韓國思想史学会、二〇〇〇年)
- 趙景徹 「百濟聖王大通寺創建の思想的背景」(『国史館論叢』九八、国史編纂委員会、二〇〇二年)
- 趙景徹 「東アジア仏教式王号比較」(『韓國古代史研究』四三、韓國古代史学会、二〇〇六年)
- 趙景徹 「百濟仏教史の展開と政治変動」(韓國学中央研究院博士學位論文、二〇〇六年)
- 趙景徹 「百濟王室の三年喪―武寧王と聖王を中心に―」(『東方学志』一四五、延世大國学研究院、二〇〇八年)
- 趙成允 『慶州出土新羅平瓦の編年試論』(慶州大碩士學位論文、二〇〇〇年)
- 趙成允 「古新羅有段式瓦について」(『古文化』五七、韓國大學博物館協會、二〇〇一年)
- 趙成允 「新羅古式蓮華文軒丸瓦の製作時期について」(『釜山史学』三〇、釜山慶南史学会、二〇〇六年)
- 曹永祿 「扶余臨江寺址発掘記」(『東国史学』八、東国史学会、一九六五年)
- 曹永鉉 「伝東明王陵の墓主比定」(『科技考古研究』一〇、亞洲大學校博物館、二〇〇四年)
- 趙源昌 「公州地域寺址研究―伝百濟寺址を中心に―」(『百濟文化』二八、公州大百濟文化研究所、一九九九年)
- 趙源昌 「百濟二重基壇築造術の日本飛鳥寺への伝播」(『百濟研究』三五、忠南大百濟研究所、二〇〇二年)
- 趙源昌 「百濟熊津期龍井里下層寺院の性格」(『韓國上古史学報』四二、韓國上古史学会、二〇〇三年)
- 趙源昌 「法泉里四号墳出土青銅蓋蓮花突帶文の意味」(『百濟文化』三三、公州大百濟文化研究所、二〇〇三年)
- 趙源昌 「扶余陵寺第三建物址(別名工房址)の建築考古学的検討」(『先史と古代』二四、韓國古代学会、二〇〇六年)
- 趙源昌 「新羅瓦積基壇の型式と編年」(『新羅文化』二八、東國大新羅文化研究所、二〇〇六年)
- 趙源昌 「皇龍寺重建期瓦当からみた新羅の対南朝交渉」(『韓國上古史学報』五二、韓國上古史学会、二〇〇六年)

- 趙源昌「夢村土城出土伝百済瓦当の製作主体検討」(『先史と古代』二九、韓国古代学会、二〇〇八年)
- 趙源昌「百済軍守里寺址の築造技法と造営主体の検討」(『韓国古代史研究』五一、韓国古代史学会、二〇〇八年)
- 趙源昌「熊津・泗泚期瓦当からみた高句麗製瓦術の百済伝播」(『白山学報』八一、白山学会、二〇〇八年)
- 趙源昌「皇龍寺重建伽藍金堂址基壇築造術の系統」(『文化史学』三二、文化史学会、二〇〇九年)
- 趙源昌「百済泗泚期扶余扶蘇山寺址の築造技法と伽藍配置検討」(『歴史と談論』五九、湖西史学会、二〇一一年)
- 趙胤宰「公州宋山里六号墳銘文博判読に対する管見」(『湖西考古学報』一九、湖西考古学会、二〇〇八年)
- 趙胤宰「扶余定林寺寺名の由来と意味に対する検討」(『韓国史学報』四五、高麗史学会、二〇一一年)
- 趙恩慶「弥勒寺址石塔の構造体系と築造解析」(弘益大博士學位論文、二〇一一年)
- 趙海淑「百済木簡記録「宿世結業」について」(『冠嶽語文研究』三二、ソウル大國語国文学科、二〇〇六年)
- 佐川正敏「日本古代木塔基壇の構築技術復原と基礎設置形式の変遷に関する研究」(『百済研究』四四、忠南大百済研究所、二〇〇六年)
- 周昞美「百済仏教金属工芸の様相と特徴」(『人文社会科学研究』一〇巻一号、釜慶大人文社会科学所、二〇〇九年)
- 中根隆行「帝国日本の満鮮觀光地と古都慶州の表象」(『韓国文学研究』三六、東国大韓国文学研究所、二〇〇九年)
- 秦弘燮「百済寺院の伽藍制度」(『百済研究』二、忠南大百済研究所、一九七一年)
- 車命貞「三国時代菩薩像に対する一考察―持物を中心に―」(『仏教美術史学』二、通道寺聖玉博物館、二〇〇四年)
- 千寛宇「馬韓諸国の位置試論」(『東洋学』九、一九七九年・『古朝鮮史・三韓史研究』、一潮閣、一九八九年)
- 清水昭博「百済大通寺式軒丸瓦の成立と展開」(『百済研究』三八、忠南大百済研究所、二〇〇三年)
- 崔卿煥「錦江流域百済土器窯址の構造と生産体制に対する一研究」(『韓国考古学報』七六、韓国考古学会、二〇一〇年)
- 崔孟植「皇龍寺址回廊外廓出土平瓦調査研究」(『文化史学』一七、文化史学会、二〇〇四年)
- 崔柄澤「日帝下林野調査事業の施行目的と性格」(『韓国文化』三七、ソウル大韓国文化研究所、二〇〇六年)
- 崔錫栄「日帝植民地の状況と扶余古蹟保存会の活動」(『韓国博物館歴史』一〇〇年)、民俗園、二〇〇八年)
- 崔聖銀「東アジア仏教彫刻を通してみた百済弥勒寺の仏像」(『百済文化』四三、公州大百済文化研究所、二〇一〇年)
- 崔聖銀「百済塑像の様相とその伝播―新羅と白鳳の塑像と関連して―」(『飛鳥・川原寺裏山遺跡と東アジア資料集』、関西大学文学部考古学研究室、二〇一二年)
- 崔鉉植「三国時代弥勒信仰と来世意識」(『講座韓国古代史八―古代人の精神世界』、韓国古代社会研究所、二〇〇二年)
- 崔鉉植「百済撰述文献としての『大乘四論玄義記』」(『韓国史研究』一三六、韓国史研究会、二〇〇七年)
- 崔鉉植「『大乘四論玄義記』百済撰述再論」(『韓国史研究』一三八、韓国史研究会、二〇〇七年)
- 崔鉉植「仏国寺西石塔重修形止記の再構成を通じた仏国寺石塔重修関連内容の再検討」(『震檀学報』一〇五、震檀学会、二〇〇八年)

- 崔鉉植「百濟後期仏教教学の変遷と弥勒思想の性格」(『百濟仏教文化の宝庫、弥勒寺』、国立文化財研究所、二〇一〇年)
- 崔鉉植「六世紀東アジア地域の仏教拡散過程に対する再検討」(『忠清学と忠清文化』一三、忠清南道歴史文化研究院、二〇一一年)
- 崔鉉植「百濟後期弥勒思想の展開過程と特性」(『韓国思想史学』三七、韓国思想史学会、二〇一一年)
- 崔榮柱「三国時代土製煙筒研究」韓半島と日本列島を中心に(『湖南考古学報』三一、湖南考古学会、二〇〇九年)
- 崔英姫「新羅古式軒丸瓦の製作技法と系統」(『韓国上古史学報』七〇、韓国上古史学報、二〇一〇年)
- 崔鍾圭「済羅耶の文物交流」百濟金工(『百濟研究』二三、忠南大百濟研究所、一九九二年)
- 卓京柏「百濟泗泚期仏塔の造形技術研究」、明知大博士学位論文、二〇一〇年)
- 土田純子「百濟有蓋三足器の編年研究」(『韓国考古学報』五一、韓国考古学会、二〇〇四年)
- 土田純子「泗泚様式土器にみられる高句麗土器の影響に対する検討」(『韓国考古学報』七二、韓国考古学会、二〇一〇年)
- 平川南「百濟と古代日本における道祭祀」(『百濟泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年)
- 河利群「北朝および隋唐代寺院の考古学的考察」塔・殿・院の關係変化を中心に(『東アジア古代寺址比較研究』金堂址篇、国立扶余文化財研究所、二〇一〇年)
- 賀云翱「南朝時代建康地域蓮華文瓦当の変遷過程および関連問題の研究」(『漢城期百濟の物流システムと対外交渉』、韓神大学術院、二〇〇三年)
- 賀云翱「南京鍾山二号寺遺址出土瓦当初探」(『東亞考古論壇』創刊号、忠清文化財研究院、二〇〇五年)
- 韓秀暎「古代史復元のイデオロギーと親日文学認識の地平」(『実践文学』六五、実践文学社、二〇〇二年)
- 韓郁「遺構を通した六・七世紀百濟伽藍建物の復原的研究」(弘益大博士学位論文、二〇〇八年)
- 韓芝仙「風納土城慶堂地区再発掘調査成果」(『様式の考古学』、韓国考古学会、二〇〇八年)
- 韓芝守「百濟風納土城出土施釉陶器研究」(『百濟研究』五一、忠南大百濟研究所、二〇一〇年)
- 戸田有二「百濟の軒丸瓦製作技法について」(『百濟研究』四〇、忠南大百濟研究所、二〇〇四年)
- 戸田有二「百濟泗泚時代における造瓦集団の一端」(『百濟泗泚時期文化の再照明』、国立扶余文化財研究所、二〇〇五年)
- 黄寿永「百濟帝釈寺址研究」(『百濟研究』四、忠南大百濟研究所、一九七三年)
- 中国語の論文(ペンイン順)**
- 方起東「集安東台子高句麗建築遺址の性質和年代」(『東北考古與歴史』、文物出版社、一九八二年)
- 賀云翱「南京鍾山二号寺遺址出土南朝瓦当及與南朝定林寺關係研究」(『考古與文物』一期、陝西省考古研究所、二〇〇七年)
- 河上麻由子「仏教與朝貢的關係」以南北朝時期爲中心(『伝統中国研究集刊』一、上海人民出版社、二〇〇六年)
- 李梅田「長江中游地区六朝隋唐青瓷分期研究」(『華夏考古』四期、二〇〇〇年)

- 錢國祥「漢魏洛陽城出土瓦當的分期與研究」(『考古』一〇期、一九九六年)
- 宿白「隋代佛寺布局」(『考古與文物』二期、一九九七年)
- 孫華「四川綿陽平楊府君闕闕身造像」(『漢唐之間的宗教藝術與考古』、巫泓主編、文物出版社、二〇〇〇年)
- 王志高「南朝帝王陵寢初探」(『南方文物』四期、江西省文化厅、一九九九年)
- 王志高「六朝帝王陵寢述論」(『南京曉庄學院學報』二〇卷二期、南京曉庄學院學報編集部、二〇〇四年)
- 王志高·王光明「南京紅土橋出土的南朝泥塑像及相關問題研討」(『東南文化』三期、江蘇古籍出版社、二〇一〇年)
- 楊泓「百濟定林寺遺址初論」(『宿白先生八秩華誕紀念文集』、文物、二〇〇〇年)
- 趙燦鵬「南朝梁元帝職貢圖題記佚文統拾」(『文史』四、中華書局、二〇一一年)
- 鍾曉青「北魏洛陽永寧寺塔復原探討」(『文物』五期、一九九八年)

圖面・圖版

図面・図版の目次

- 図 1-1-1 百済漢城期主要遺跡の位置図
- 図 1-1-2 公州武寧王陵出土王妃頭枕の実測図
- 図 1-1-3 ソウルトゥクソム出土金銅如来坐像
- 図 1-1-4 原州法泉里4号墳出土青銅蓋
- 図 1-1-5 羅州新村里9号墳出土金銅冠
- 図 1-1-6 中国製青磁蓮華文盃
- 図 1-1-7 ソウル風納土城出土瓦当
- 図 1-1-8 ソウル夢村土城出土蓮華文瓦当
- 図 1-1-9 公州大通寺址出土「大通」銘文字瓦
- 図 1-1-10 公州大通寺址の伽藍配置推定図
- 図 1-1-11 瓦当接合技法の模式図
- 図 1-1-12 公州地域主要遺跡の分布図
- 図 1-1-13 熊津期の主要蓮華文瓦当
- 図 2-1-1 扶余地域における廃寺址の分布図
- 図 2-1-2 扶余定林寺址の伽藍配置図と瓦廃棄竪穴
- 図 2-1-3 扶余定林寺址出土の大型塑像
- 図 2-1-4 扶余定林寺址出土の中型塑像
- 図 2-1-5 扶余定林寺址出土の蠟石製三尊仏片
- 図 2-1-6 扶余定林寺址出土の小型塑像
- 図 2-1-7 扶余定林寺址出土の情景塑像1
- 図 2-1-8 扶余定林寺址出土の情景塑像2
- 図 2-1-9 扶余定林寺址出土の頭像頸部と上半身の凹部
- 図 2-1-10 中国南京出土の各種塑像
- 図 2-1-11 中国四川省綿陽市平楊府君闕上の闕身造像
- 図 2-1-12 中国鞏県石窟第1窟前壁の皇帝礼仏図と龍門石窟賓陽中洞の前壁浮彫り
- 図 2-1-13 扶余定林寺址出土の人物像片
- 図 2-1-14 扶余定林寺址出土の人物像片(未報告資料)
- 図 2-1-15 唐閻立本の『王会図』部分と五代南唐顧德謙模の『梁元帝番客入朝図』の魯国使臣部分
- 図 2-1-16 扶余陵山里寺址出土の人物像片と扶余旧衙里寺址出土の人物像片
- 図 2-1-17 中国四川省成都市西安路出土の梁中大通2年銘仏造像と成都万仏寺出土の梁中大通5年銘仏造像
- 図 2-1-18 扶余定林寺址の五層石塔と単弁七葉蓮華文瓦当
- 図 2-1-19 扶余定林寺址出土の中国製青磁壺片と中国南京対文山南朝墓出土の青磁蓮華文壺
- 図 2-1-20 南京靈山墓出土の籠冠俑
- 図 2-1-21 扶余定林寺址と中国南京出土の蓮華文瓦当



- 図2-2-2 扶余錦城山出土の緑釉器台片と公州宋山里出土の器台、羅州伏岩里1号墳出土の緑釉托蓋
- 図2-2-3 扶余定林寺址の伽藍配置図
- 図2-2-4 扶余定林寺址出土の高麗時代の文字瓦
- 図2-2-5 扶余官北里長方形区画のナ地区発掘現況図
- 図2-2-6 扶余官北里遺跡出土の埧塙と埧塙の蓋の「官」銘
- 図2-2-7 扶余官北里遺跡の大型殿閣建物の盛土層から出土した蓮華文瓦当
- 図2-2-8 扶余官北里遺跡(バ地区)出土の中国製青磁片
- 図2-2-9 1910年代地籍図に見える官北里、旧衙里一円と定林寺址
- 図2-3-0 扶余市街地計画平面図の部分(1939年作成)
- 図2-3-1 扶余宮南池一帯の東西道路遺跡
- 図2-3-2 扶余軍守里地点の道路と建物群
- 図2-3-3 扶余陵山里・佳塔里地点の道路と隋の五銖銭
- 図2-3-4 扶余ヒョンネドウル遺跡の堤防施設と北齊の上平五銖銭
- 図2-3-5 泗泚期の王宮区域と関連する主要遺跡の位置
- 図2-3-6 泗泚期の王宮区域案と定林寺址の位置関係
- 図3-1-1 扶余陵山里寺址の伽藍配置図
- 図3-1-2 扶余陵山里出土木簡の出土位置
- 図3-1-3 扶余陵山里寺址の暗渠施設配置図
- 図3-1-4 扶余陵山里出土2001-8号木簡の写真
- 図3-1-5 扶余陵山里寺址の南回廊西側トレンチ土層図(8次調査)
- 図3-1-6 扶余陵山里沼地出土の中国青磁片
- 図3-1-7 公州・扶余出土の各種陶硯片
- 図3-1-8 扶余陵山里出土2002-1号木簡の赤外線写真と判読文
- 図3-1-9 2002-1号木簡の3面細部写真
- 図3-1-10 扶余陵山里寺址の中門址南側の道路遺構概念図
- 図3-1-11 扶余陵山里寺址出土瓦当の接合技法模式図
- 図3-1-12 扶余陵山里寺址出土の1型式瓦当
- 図3-1-13 1型式瓦当の丸瓦部の形態
- 図3-1-14 扶余陵山里寺址出土の3型式と7型式瓦当
- 図3-1-15 3型式と4型式瓦当の丸瓦部の形態
- 図3-1-16 5型式瓦当の丸瓦部と復元接合
- 図3-1-17 扶余陵山里寺址出土の8型式と11型式瓦当
- 図3-1-18 8型式瓦当丸瓦部の形態
- 図3-1-19 扶余陵山里寺址出土の12型式と13型式および巴文と素文瓦当
- 図3-2-0 12型式丸瓦内部の釘穴の状況
- 図3-2-1 扶余陵山里寺址隣接部の窯址位置図
- 図3-2-2 扶余陵山里寺址の復原鳥瞰図
- 図3-2-3 扶余陵山里寺址の初期建物址群

- 図3-2-4 扶余陵山里寺址講堂址西室出土の木製漆器
- 図3-2-5 集安東台子遺跡の建物址群
- 図3-2-6 公州艇止山遺跡の遺構配置図
- 図3-2-7 大同北魏方山の永固堂と思遠仏寺の配置図
- 図3-2-8 平壤の伝東明王陵と定陵寺の配置
- 図3-2-9 扶余陵山里寺址と周辺の遺跡分布図
- 図3-3-0 扶余陵山里寺址の変遷過程
- 図4-1-1 扶余定林寺址の伽藍配置図
- 図4-1-2 扶余陵山里寺址の伽藍配置図
- 図4-1-3 扶余軍守里寺址の伽藍配置図
- 図4-1-4 扶余王興寺址の伽藍配置図
- 図4-1-5 扶余王興寺址の金堂址と木塔址区間の土層図
- 図4-1-6 扶余東南里寺址の伽藍配置図
- 図4-1-7 益山帝釈寺址の伽藍配置図
- 図4-1-8 益山王宮里遺跡と帝釈寺址の位置関係
- 図4-1-9 益山弥勒寺址の伽藍配置図と西石塔下部出土の瓦当
- 図4-1-10 扶余恩山金剛寺址の伽藍配置図
- 図4-1-11 扶余扶蘇山廢寺址の伽藍配置図と唐式帯金具
- 図4-1-2 所謂1棟2室建物址
- 図4-1-3 扶余陵山里寺址出土各種塑像
- 図4-1-4 扶余旧衙里寺址出土各種塑像
- 図4-1-5 扶余臨江寺址出土各種塑像
- 図4-1-6 青陽汪津里窰址出土各種塑像
- 図4-1-7 青陽本義里窰址出土大型仏像台座
- 図4-1-8 益山帝釈寺址廢棄場出土各種塑像
- 図4-1-9 益山帝釈寺址廢棄場出土塑像の背面と各種胎土
- 図4-2-0 益山弥勒寺址出土各種塑像と埴仏
- 図4-2-1 益山弥勒寺址西石塔下部出土螺髪
- 図4-2-2 扶余恩山金剛寺址出土各種塑像
- 図4-2-3 扶余旧橋里寺址出土塑像片
- 図4-2-4 扶余扶蘇山廢寺址出土各種塑像
- 図4-2-5 益山王宮里遺跡出土螺髪
- 図4-2-6 南京市江寧区胡村南朝墓後壁の塔型裝飾
- 図4-2-7 元五里寺址出土塑造仏坐像と塑造菩薩立像、平壤土城里出土陶範
- 図4-2-8 慶州四天王寺址出土の緑釉埴片
- 図4-2-9 慶州錫杖寺址出土の塑造神將像片、陶範片、各種埴仏片
- 図4-3-0 日本川原寺裏山遺跡出土の各種塑像
- 図4-3-1 日本川原寺裏山遺跡出土の十二支神將像のウマとニワトリの頭状片
- 図4-3-2 日本川原寺裏山遺跡出土の緑釉埴
- 図4-3-3 日本川原寺裏山遺跡出土の武装天部像の腰部

- 図5-1 慶州興輪寺址(慶州工高)と靈廟寺址(天鏡林興輪寺)の位置  
 図5-2 慶州靈廟寺址(天鏡林興輪寺)出土の文字瓦  
 図5-3 慶州工高一帯出土の古式蓮華文瓦当の型式分類案  
 図5-4 182番瓦当と183番瓦当の比較  
 図5-5 慶州校洞で収集された蓮華文瓦当  
 図5-6 慶州興輪寺址で収集された蓮華文瓦当  
 図5-7 慶州工高出土の平瓦と有段式丸瓦  
 図5-8 慶州六通里瓦窯址出土の蓮華文瓦当  
 図5-9 公州艇止山遺跡出土の蓮華文瓦当と有段式丸瓦  
 図5-10 慶州城東洞殿廊址出土の蓮華文瓦当  
 図5-11 慶州天官寺址出土の蓮華文瓦当  
 図5-12 公州大通寺址出土の蓮華文瓦当  
 図5-13 慶州月城塚字出土の蓮華文瓦当  
 図5-14 慶州勿川里窯址出土「無瓦桶製作法」の瓦と土器  
 図5-15 飛鳥寺出土平瓦の補足痕  
 図5-16 南京地域出土丸瓦と平瓦  
 図5-17 慶州興輪寺址出土の文字瓦  
 図5-18 慶州皇龍寺址出土の各種瓦当  
 図5-19 慶州天官寺址1号建物址の内部の瓦積基壇と平面図  
 図6-1 扶余地域出土の高句麗系土器  
 図6-2 扶余地域出土の煙家  
 図6-3 扶余地域出土の高句麗系瓦当  
 図6-4 古代寺院の二重基壇と下成礎石  
 図6-5 1棟2室建物址  
 図6-6 扶余陵山里古墳群東下塚の壁画  
 図6-7 熊津・泗泚期における主要古墳の石室構造の変遷  
 図6-8 扶余王興寺址の伽藍配置図と西側外郭建物址  
 図6-9 扶余軍守里寺址の伽藍配置図  
 図6-10 益山弥勒寺址の伽藍配置図  
 図6-11 長安青龍寺と西明寺の伽藍配置図  
 図6-12 敦煌莫高窟弥勒経変の中の仏教寺院  
 図6-13 甘肅省麦積山石窟の実測図  
 図6-14 東魏・北齊鄴南城趙彭城廢寺址の伽藍配置図  
 図6-15 平壤清岩里寺址の伽藍配置図  
 図6-16 平壤定陵寺址の伽藍配置図  
 図6-17 慶州皇龍寺址の伽藍配置図  
 図6-18 慶州皇龍寺址出土の各種瓦当  
 図6-19 飛鳥寺の伽藍配置図  
 図6-20 慶州芬皇寺址創建伽藍の伽藍配置図  
 図6-21 大阪四天王寺回廊の周溝実測図と東回廊東北区域の遺構図  
 図6-22 および回廊西南部の実測図  
 図6-22 新堂廢寺とオガンジ池瓦窯、お亀石古墳の位置図

- |       |                            |      |                                    |
|-------|----------------------------|------|------------------------------------|
| 図6-23 | 新堂廢寺の伽藍配置図                 | 図7-1 | 『朝鮮古蹟図譜』三の石村付近の百濟古墳分布図             |
| 図6-24 | 扶余定林寺址の創建瓦                 | 図7-2 | 扶余陵山里中上塚出土の宝冠金具(金銅透彫金具)            |
| 図6-25 | 南京の南平王蕭偉墓闕出土の瓦当            | 図7-3 | ソウル石村里・可樂里一帯の古墳分布図(1917年作成)        |
| 図6-26 | 扶余陵山里寺址の創建瓦                | 図7-4 | ソウル石村里・可樂里一帯の古墳分布図と発掘調査された古墳群の対応図面 |
| 図6-27 | 扶余軍守里寺址の創建瓦                | 図7-5 | 米田美代治調査の扶余双北里窯址実測図と飛鳥寺の1号瓦窯実測図     |
| 図6-28 | 扶余王興寺址の創建瓦                 |      |                                    |
| 図6-29 | 扶余王興寺址の創建瓦と飛鳥寺の創建瓦の組み合わせ関係 | 図7-6 | 若草伽藍址の発掘実測図                        |
| 図6-30 | 扶余の王宮区域から出土した瓦当            | 図7-7 | 扶余市街地計画平面図(1939年作成)                |
| 図6-31 | 飛鳥寺の創建瓦                    |      |                                    |

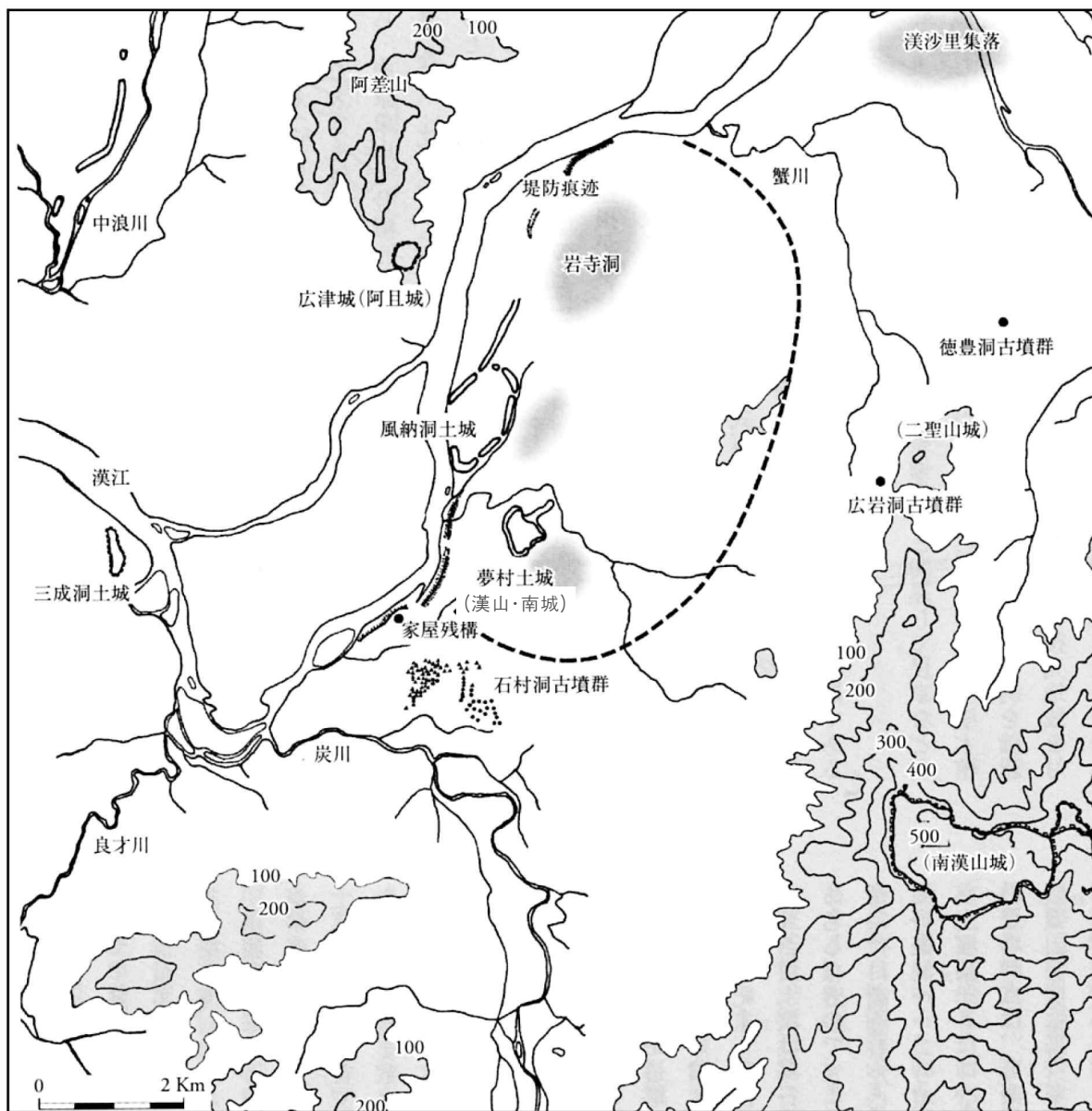


図1-1 百濟漢城期主要遺跡の位置図(朴淳発、2011)

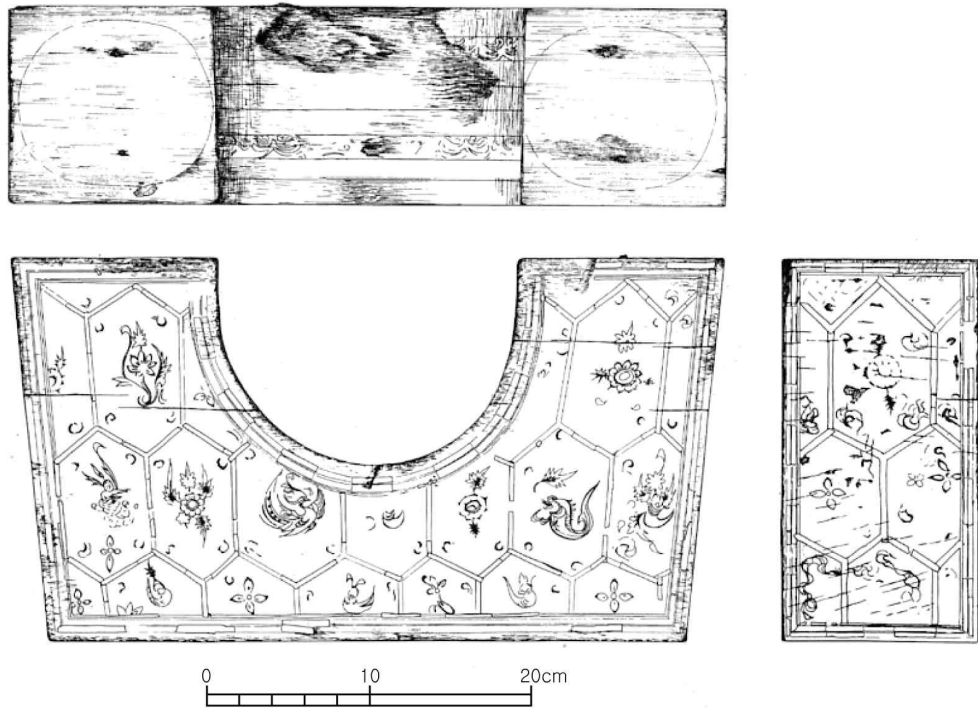


図1-2 公州武寧王陵出土王妃頭枕の実測図(文化財管理局文化財研究所、1973)



図1-3 ソウルトゥクソム出土金銅如来坐像(正面と側面)(国立中央博物館、1990)





图1-4  
原州法泉里4号墳  
出土青銅蓋  
(宋義政·尹炯元, 2000)

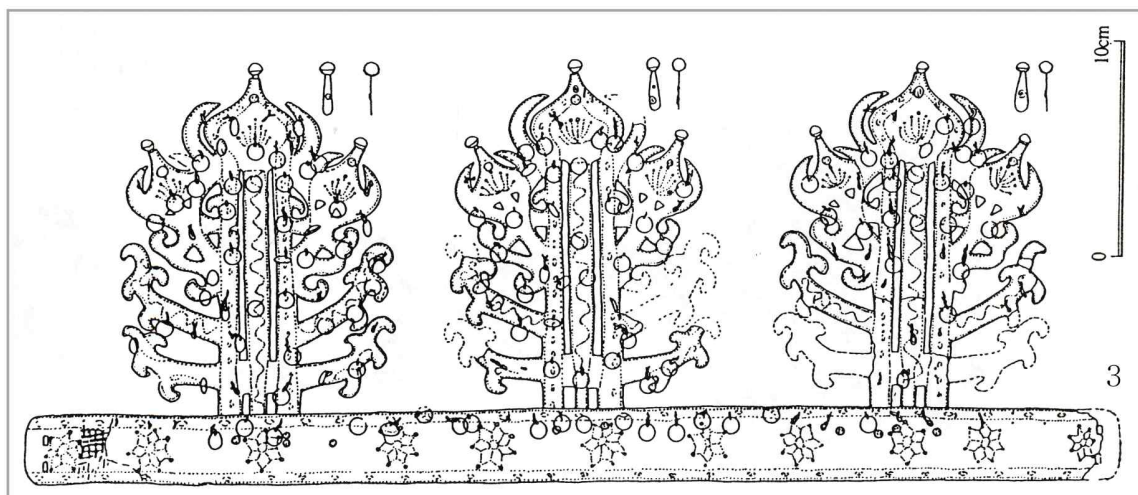
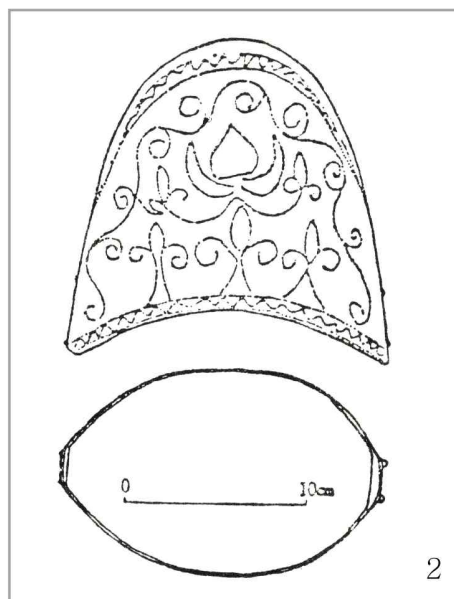


图1-5 羅州新村里9号墳出土金銅冠  
(1. 全体写真、2. 台冠、3. 帽冠) (国立光州博物館、1988)



図1-6 中国製青磁蓮華文碗 (1. 天安龍院里、2. ソウル風納土城)

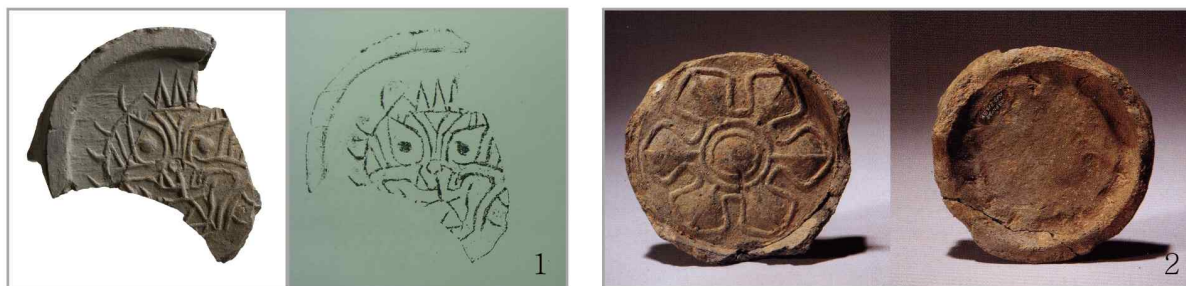


図1-7 ソウル風納土城出土瓦当(1. 獸面文瓦当、2. 蓮華文瓦当) (韓芝仙、2008)

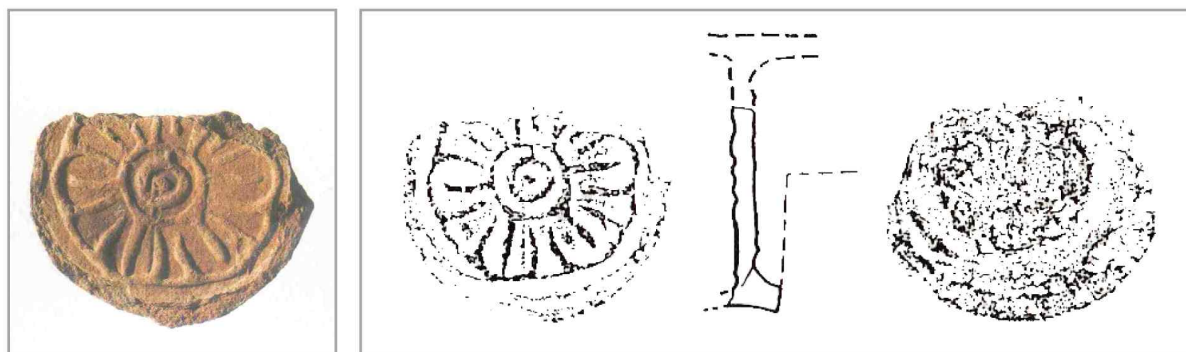


図1-8 ソウル夢村土城出土蓮華文瓦当 (亀田修一、2006)





図1-9  
公州大通寺址出土  
「大通」銘文字瓦  
(国立中央博物館、1999)

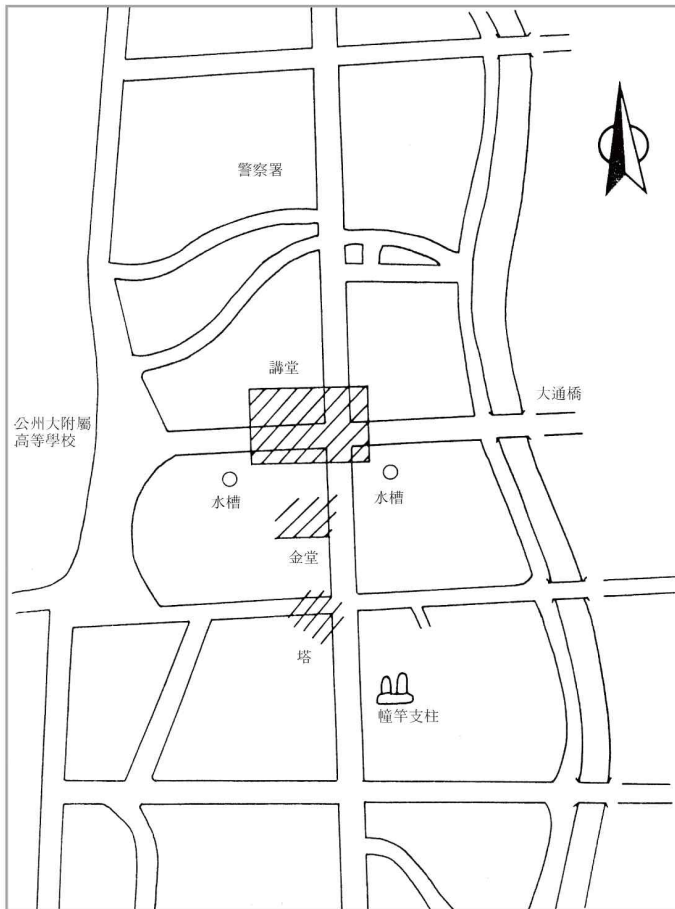


図1-10  
公州大通寺址の  
伽藍配置  
推定図  
(軽部慈恩作成)

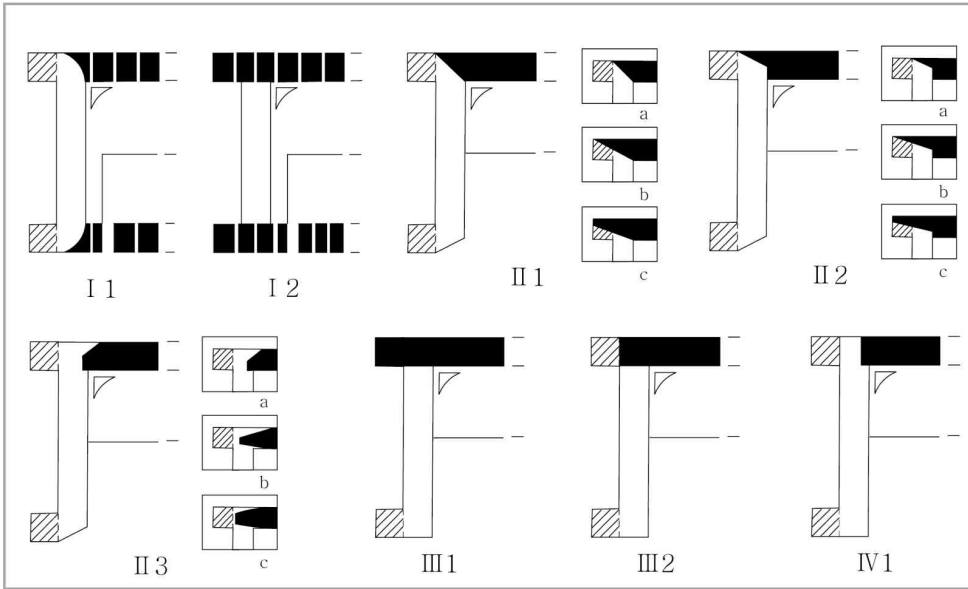


図1-11 瓦当接合技法の模式図

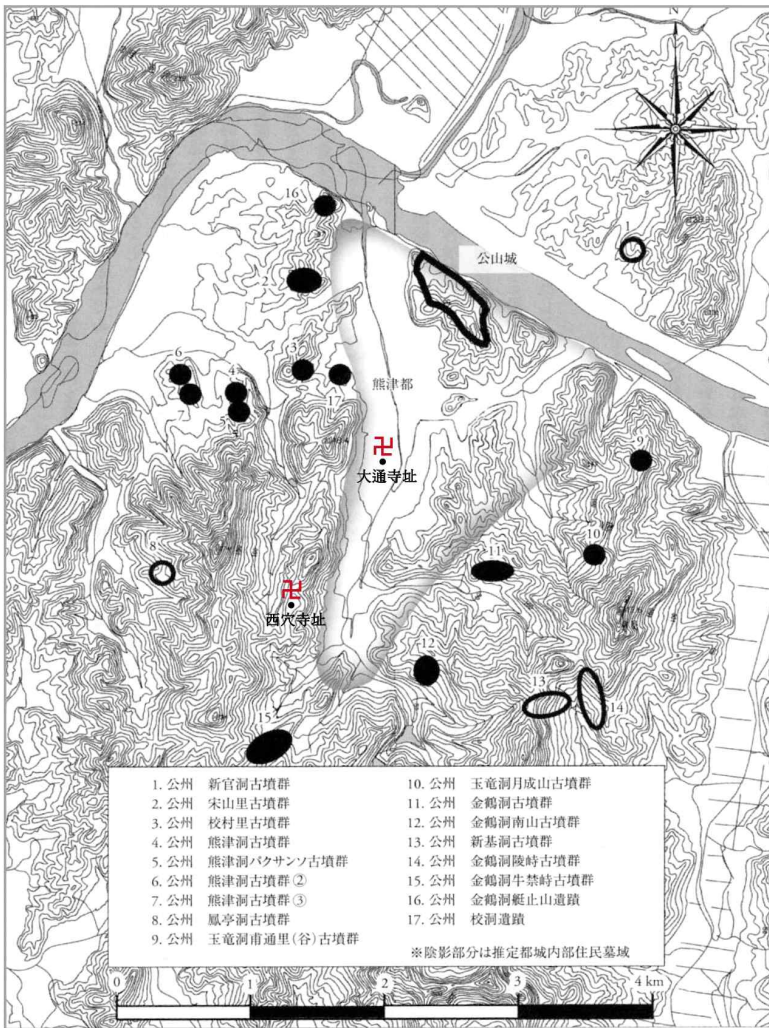


図1-12  
公州地域  
主要遺跡の分布図  
(朴淳発、2011)

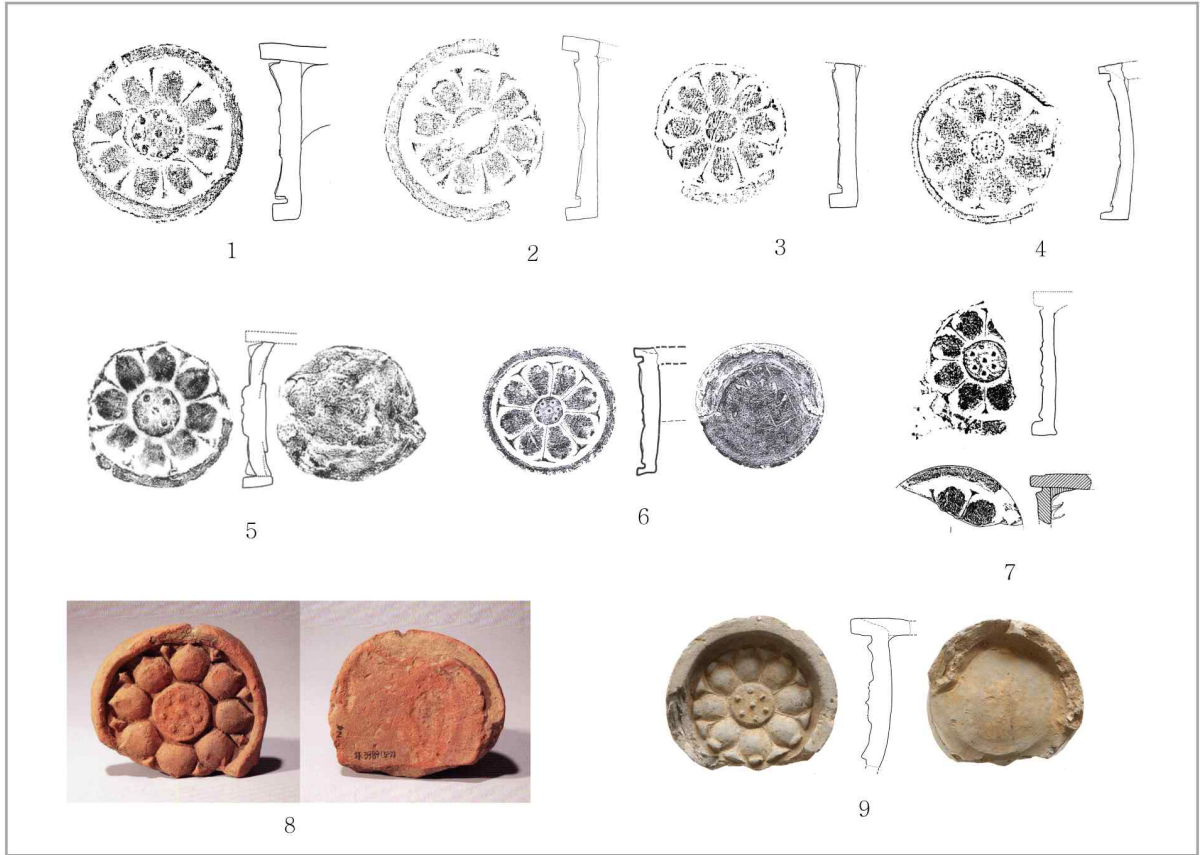


図1-13 熊津期の主要蓮華文瓦当

(1～4. 公州公山城、5. 公州西穴寺址、6. 公州大通寺址、7. 公州艇止山遺跡、  
8. 扶余龍井里寺址、9. 慶州工業高等学校(伝興輪寺址))



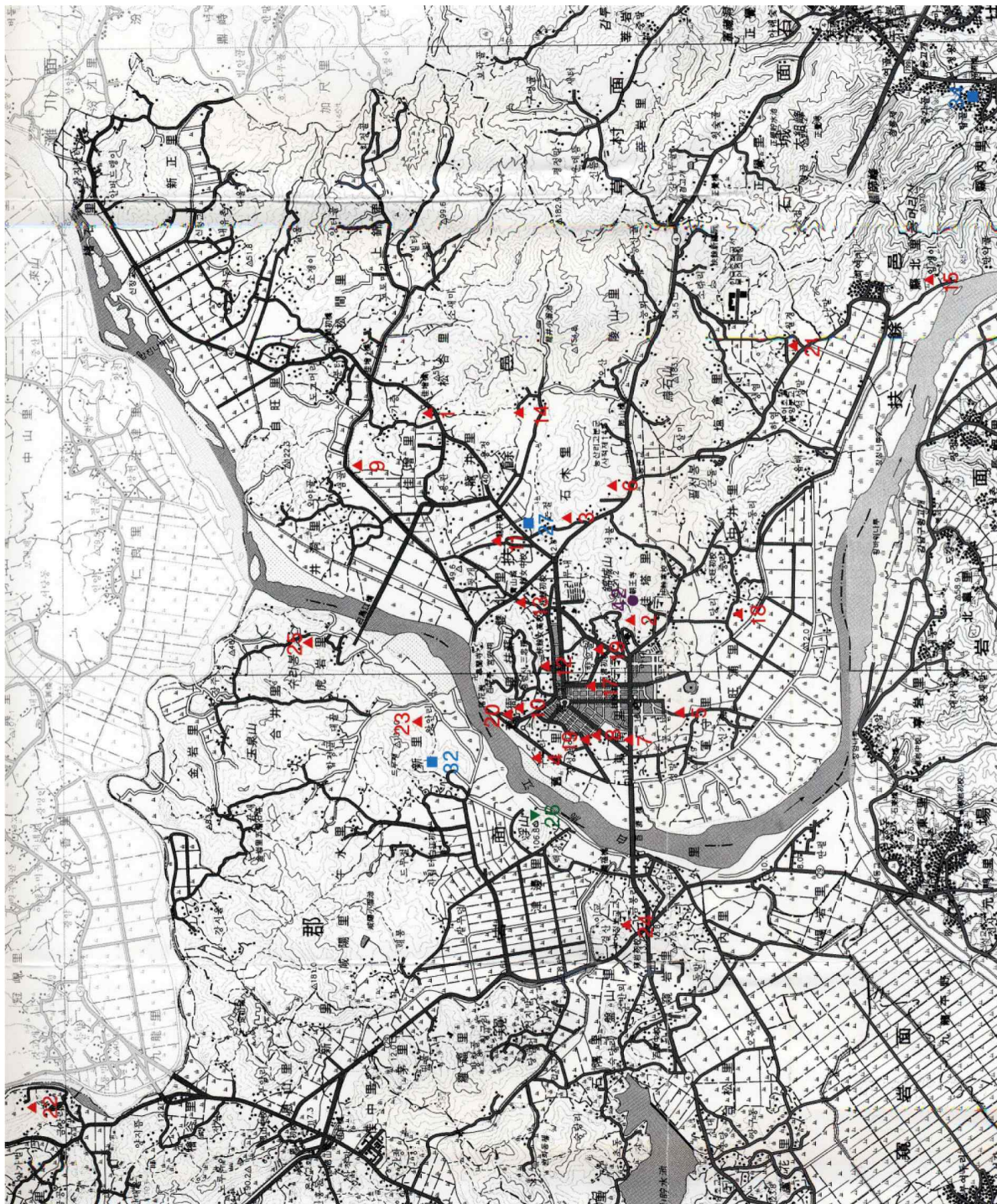


図2-1 扶余地域における廃寺址の分布図(国立扶余文化財研究所、2008)

- 1. 佳増里寺址    2. 佳塔里寺址    3. 観音寺址    4. 旧校里寺址    5. 軍守里寺址
- 6. 陵山里寺址    7. 東南里寺址    8. 東山里寺址    9. バムゴル寺址    10. 扶蘇山寺址
- 11. 石木里寺址    12. 双北里寺址①    13. 双北里寺址②    14. 龍井里寺址    15. 臨江寺址
- 16. 伝天王寺址    17. 定林寺址    18. 中井里建物址    19. 鶴里寺址    20. 郷校畑寺址
- 21. 県北里寺址    22. 金剛寺址    23. 王興寺址    24. 外里寺址    25. 虎岩寺址

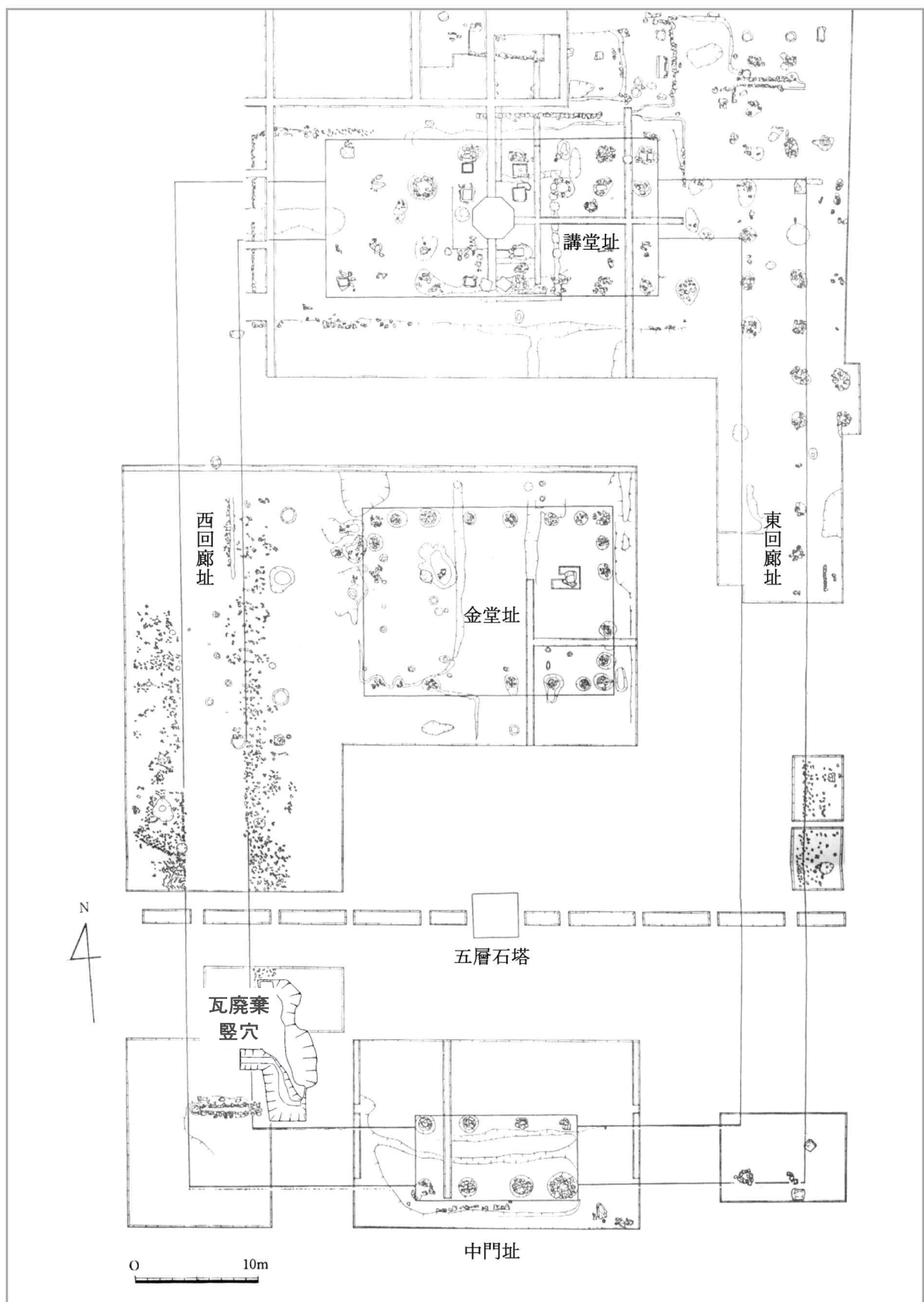


図2-2 扶余定林寺址の伽藍配置図と瓦廃棄豎穴(尹武炳作成)





図2-3 扶余定林寺址出土の大型塑像(1. 瓦製仏耳破片(27.5cm)、2. 瓦製仏身破片A・B(14.6cm))



図2-4 扶余定林寺址出土の中型塑像  
(1. 捧宝珠菩薩像片、2. 螺髪、3. 仏手・仏足片、4. 各種衣褶片)



図2-5  
扶余定林寺址  
出土の  
蠟石製三尊仏片  
(国立扶余博物館 1997)



図2-6 扶余定林寺址出土の小型塑像  
(1. 仏頭A、2. 仏頭D+E、3. 仏頭(未報告)、4. 仏頭C)





図2-7 扶余定林寺址出土の情景塑像1(各種の頭像片・上半身片・下半身片)



図2-8 扶余定林寺址出土の情景塑像2  
(1. 浄瓶片、2. 下半身Q、3. 木葉裝飾片)





図2-9 扶余定林寺址出土の頭像頸部と上半身の凹部



図2-10 中国南京出土の各種塑像(1. 南京鍾山二号寺址(伝上定林寺), 2. 南京紅土橋附近の寺址(伝延興寺))

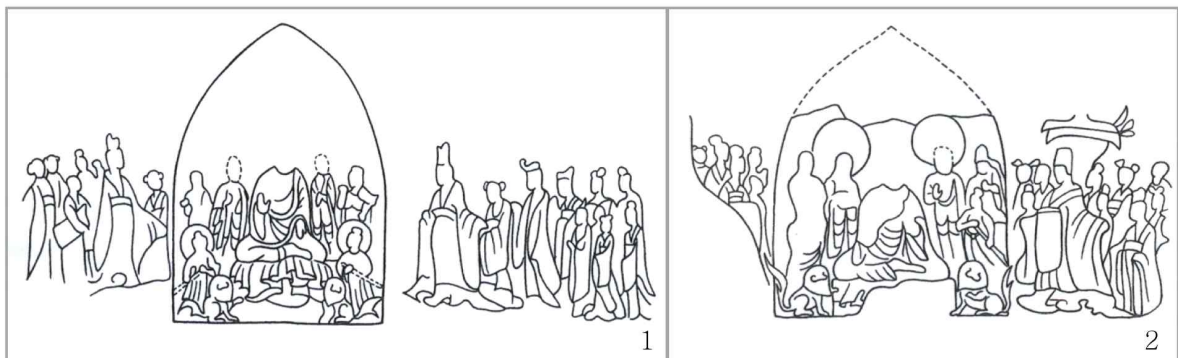


図2-11 中国四川省綿陽市平楊府君闕上の闕身造像(1. 第1龕、2. 第10龕)(孫華、2000)

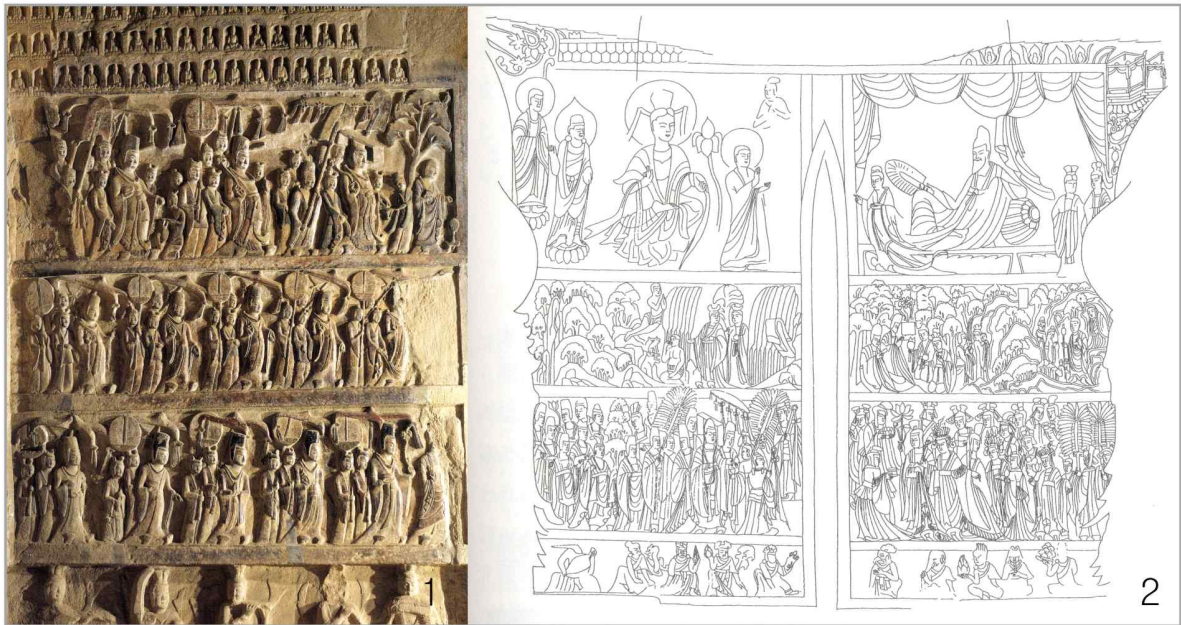


図2-12 中国鞏県石窟第1窟前壁の皇帝礼仏図(1)と龍門石窟賓陽中洞の前壁浮彫り(2)



図2-13 扶余定林寺址出土の人物像片(国立扶余文化財研究所、2011)



図2-14 扶余定林寺址出土の人物像片(未報告資料)





図2-15 唐閻立本の『王会図』部分(1)と五代南唐顧德謙模の『梁元帝番客入朝図』の魯国使臣(国立公州博物館、2010)



図2-16 扶余陵山里寺址出土の人物像片(1)、扶余旧衙里寺址出土の人物像片(2)



図2-17 中国四川省成都市西安路出土の梁中大通2年(530)銘仏造像(1)と  
 成都万仏寺出土の梁中大通5年(533)銘仏造像(2)  
 (成都市文物考古工作队外、1998および袁曙光、2001)





1



2

図2-18 扶余定林寺址の五層石塔(1)と単弁七葉蓮華文瓦当(2)

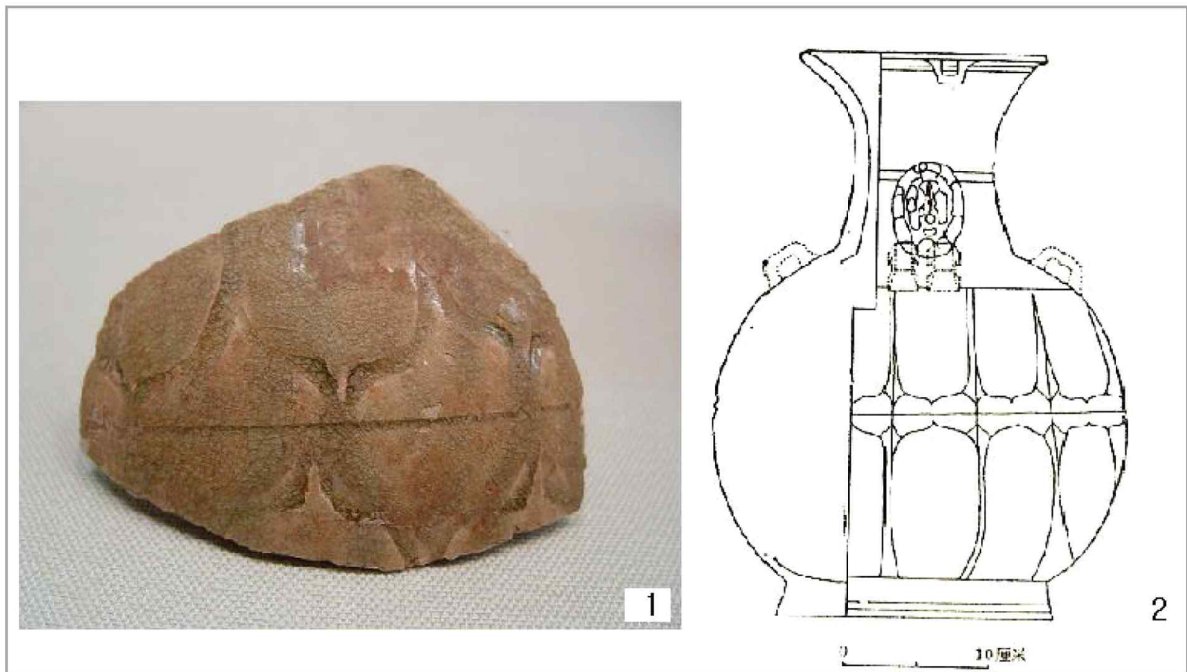


図2-19 扶余定林寺址出土の中国製青磁壺片(1)と中国南京対文山南朝墓出土の青磁蓮華文壺(2) (南京市文物保存委員会、1980)



図2-20  
南京靈山墓  
出土の籠冠俑  
(高33.5cm)  
(南京市博物館、2004)

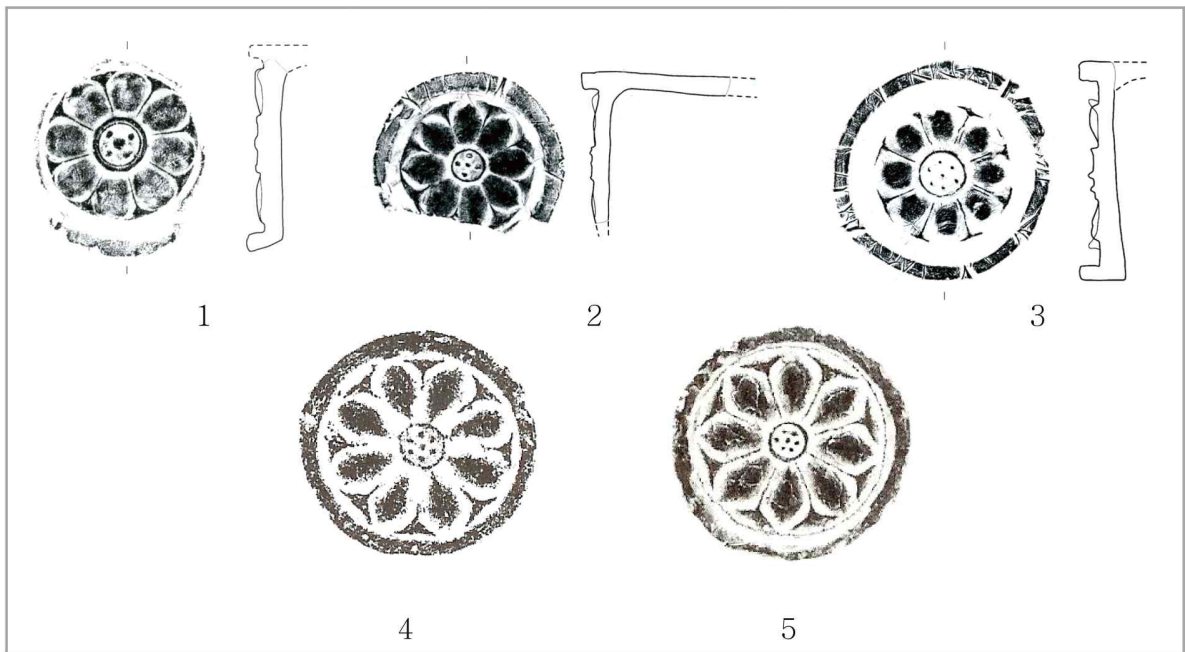


図2-21 扶余定林寺址と中国南京出土の蓮華文瓦当(1. 定林寺址(A類型)、2. 定林寺址(B類型)、3. 定林寺址(C類型)、4. 南京梁南平王蕭偉墓闕、5. 南京鍾山二号寺址)



図2-22 扶余錦城山出土の緑釉器台片(1)と公州宋山里出土の器台(2)、羅州伏岩里1号墳出土の緑釉托蓋(3)(国立中央博物館、1999)

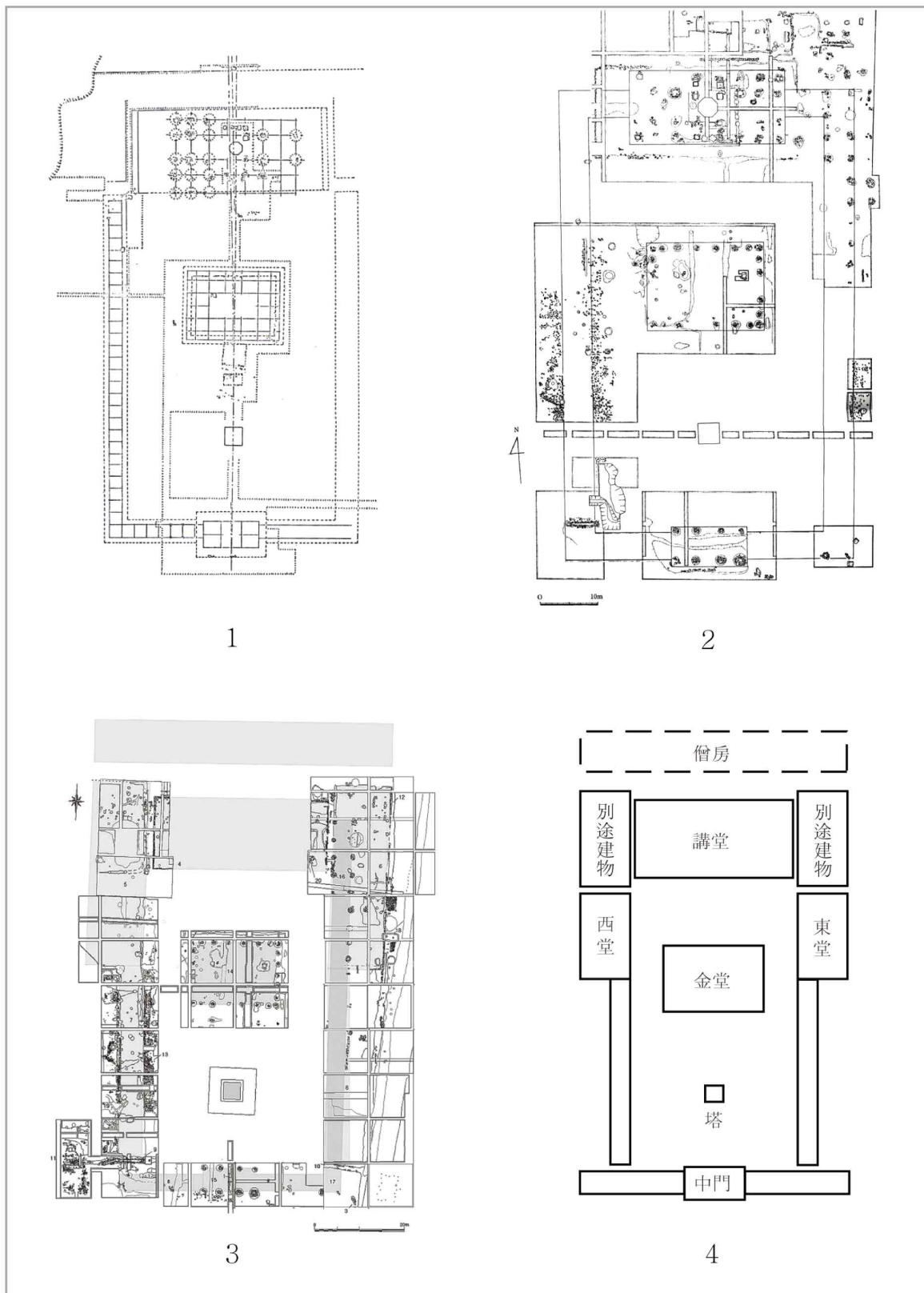


図2-23 扶余定林寺址の伽藍配置図  
 (1. 藤沢一夫、2. 尹武炳、3. 国立扶余文化財研究所、4. 筆者の修正案)  
 (藤沢一夫、1971；尹武炳、1981；国立扶余文化財研究所、2011)





図2-24  
扶余定林寺址出土の  
高麗時代の文字瓦  
(国立扶余博物館、1997)

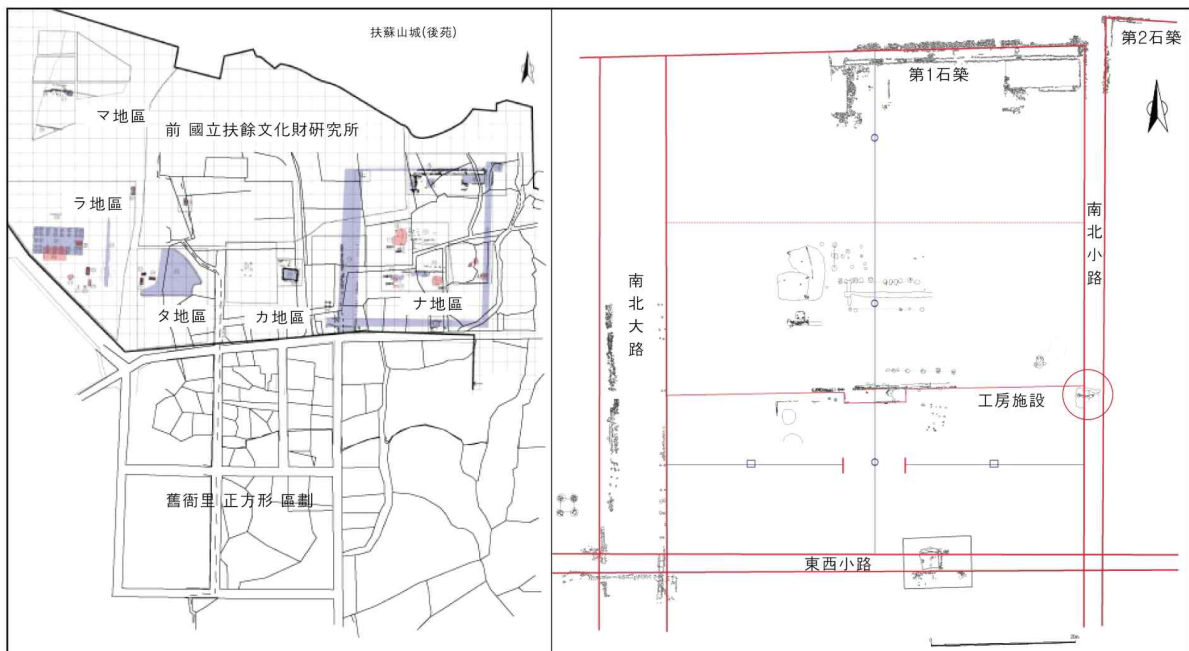


図2-25 扶余官北里長方形区画のナ地区発掘現況図(国立扶余文化財研究所、2009)



図2-26  
扶余官北里遺跡  
出土の罏塼と  
罏塼の蓋の「官」銘  
(国立扶余博物館、2006)

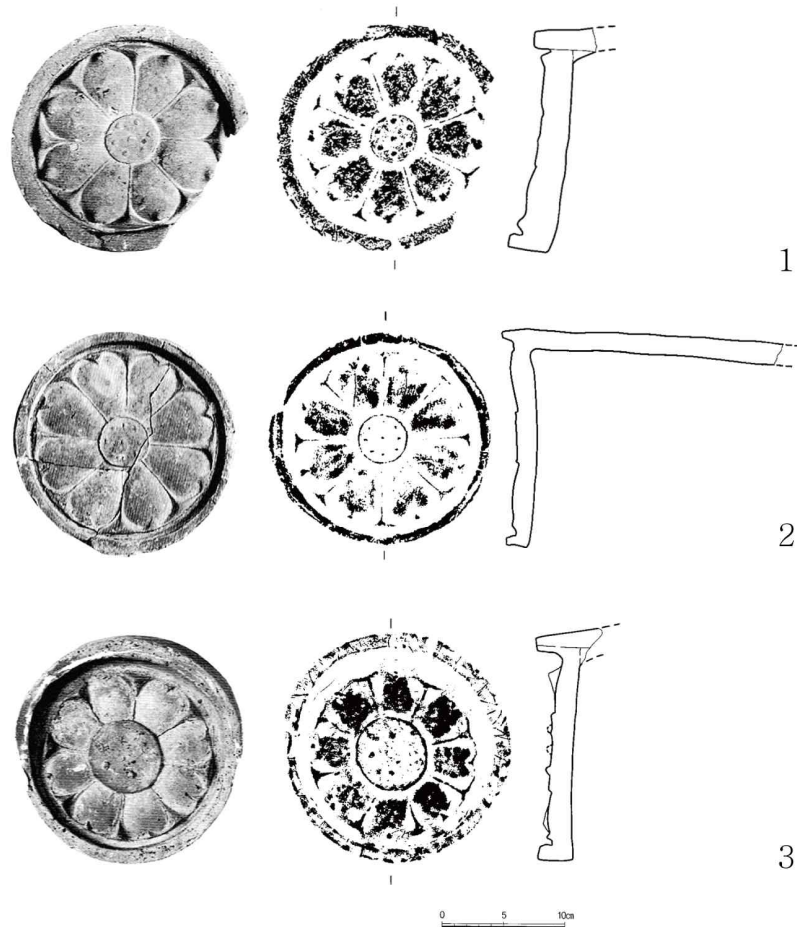


図2-27 扶余官北里遺跡の大型殿閣建物の盛土層から出土した蓮華文瓦当  
(国立扶余文化財研究所、2009)

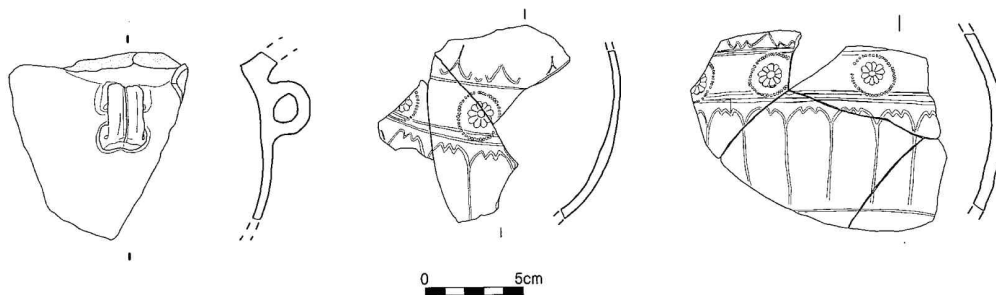


図2-28 扶余官北里遺跡(ハ地区)出土の中国製青磁片(国立扶余文化財研究所、2009)

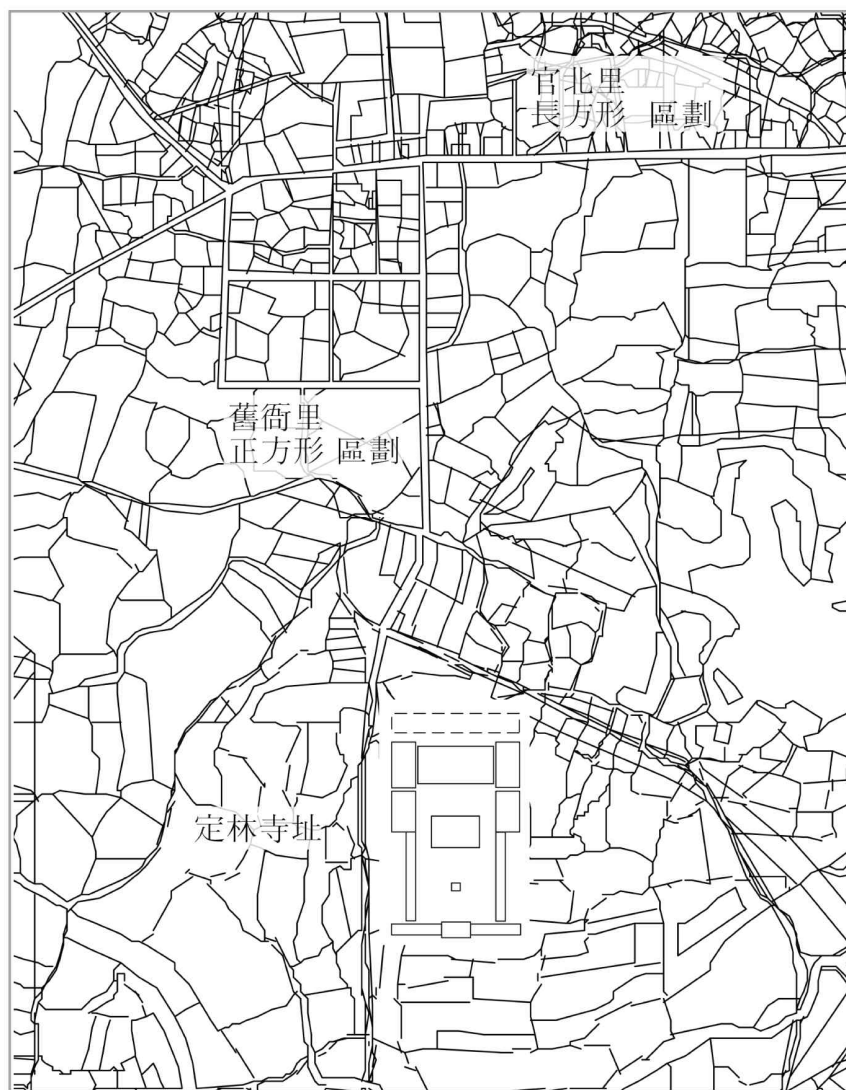


図2-29 1910年代地籍図に見える官北里、旧衙里一円と定林寺址

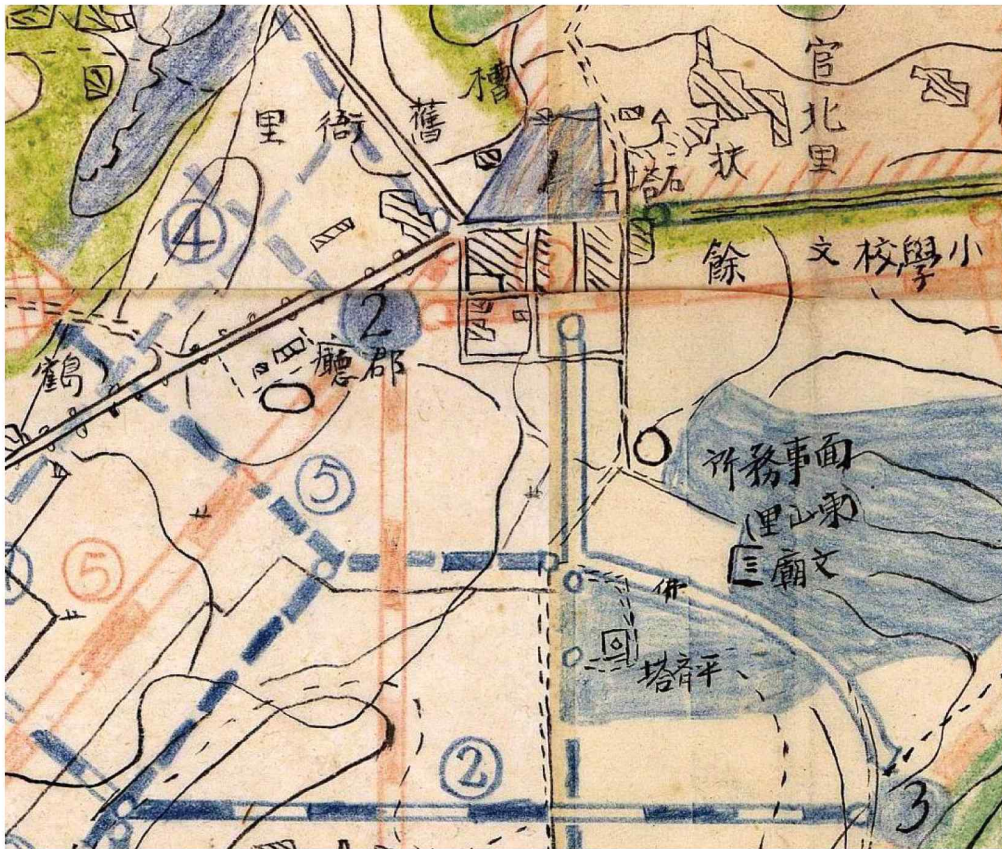


図2-30 扶余市街地計画平面図の部分(1939年作成)

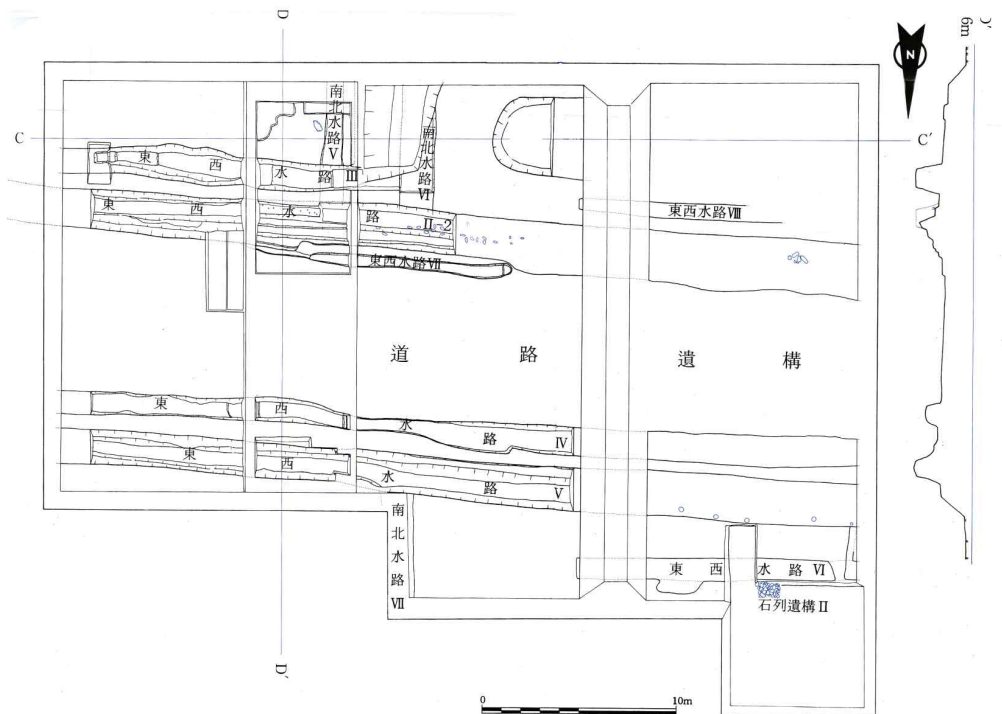


図2-31 扶余宮南池一帯の東西道路遺跡(国立扶余文化財研究所、2001)



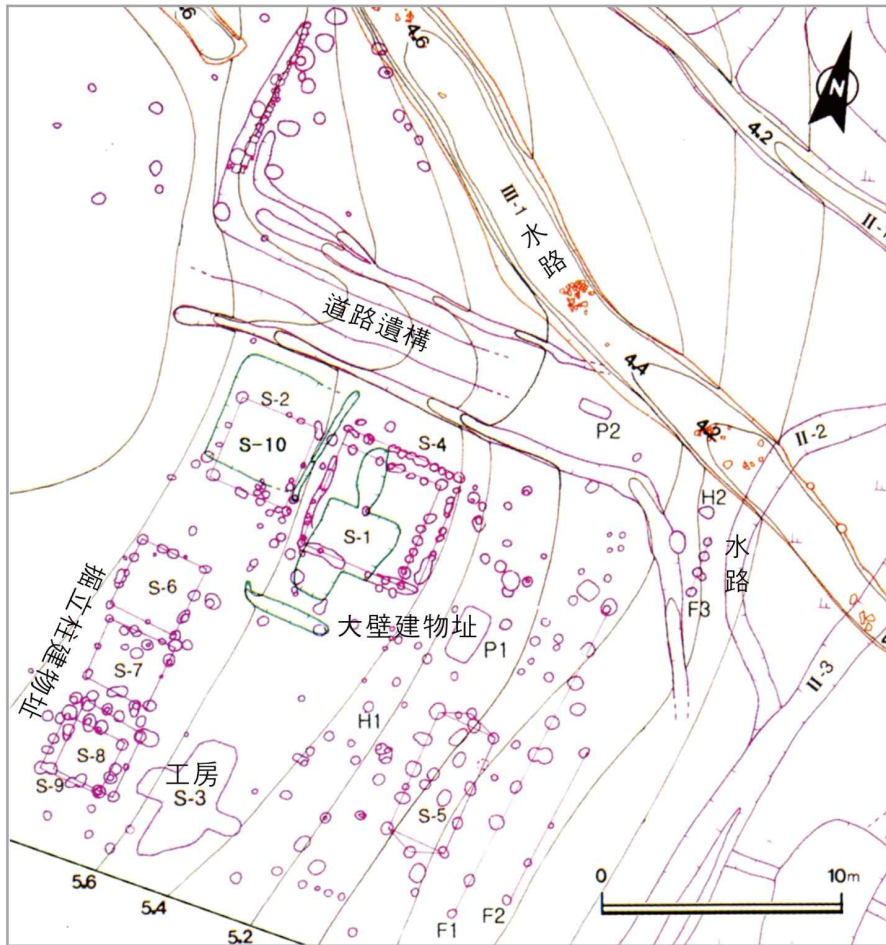


図2-32 扶余軍守里地点の道路と建物群(忠南大百濟研究所、2003)

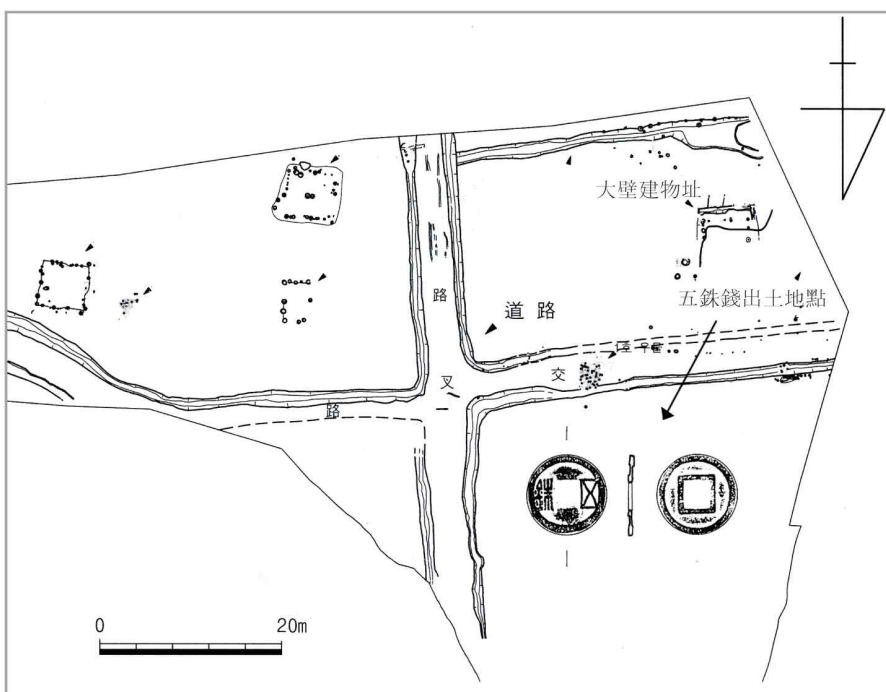


図2-33 扶余陵山里・佳塔里地点の道路と隋の五銖錢(忠清文化財研究院、2006)

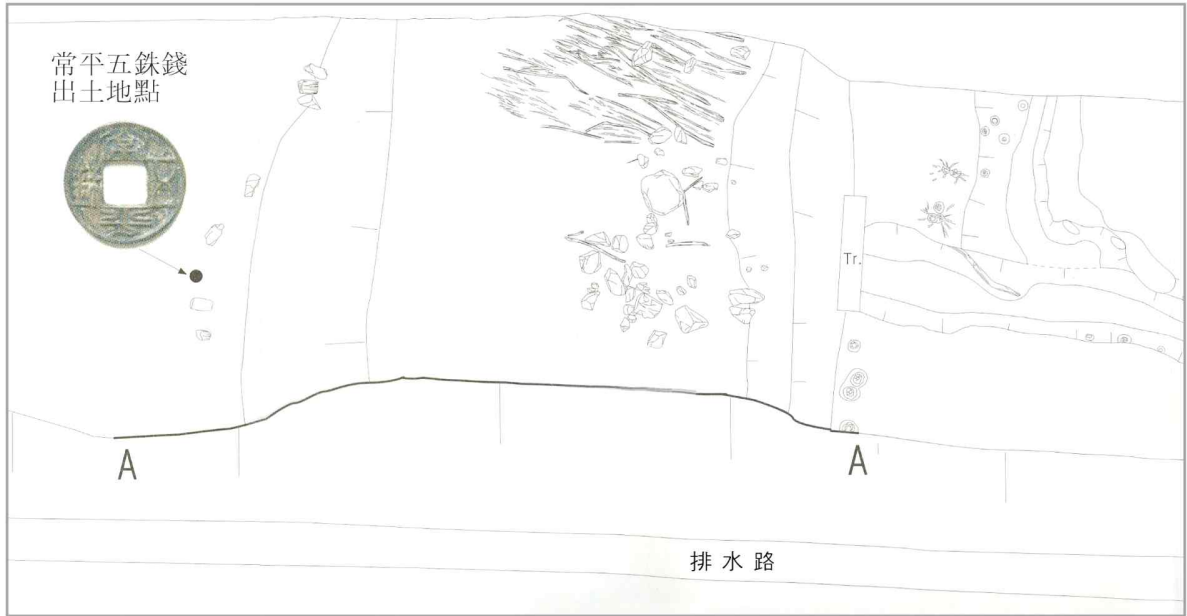


図2-34 扶余ヒョンネドウル遺跡の堤防施設と北齊の上平五銖錢(忠清文化財研究院、2009)

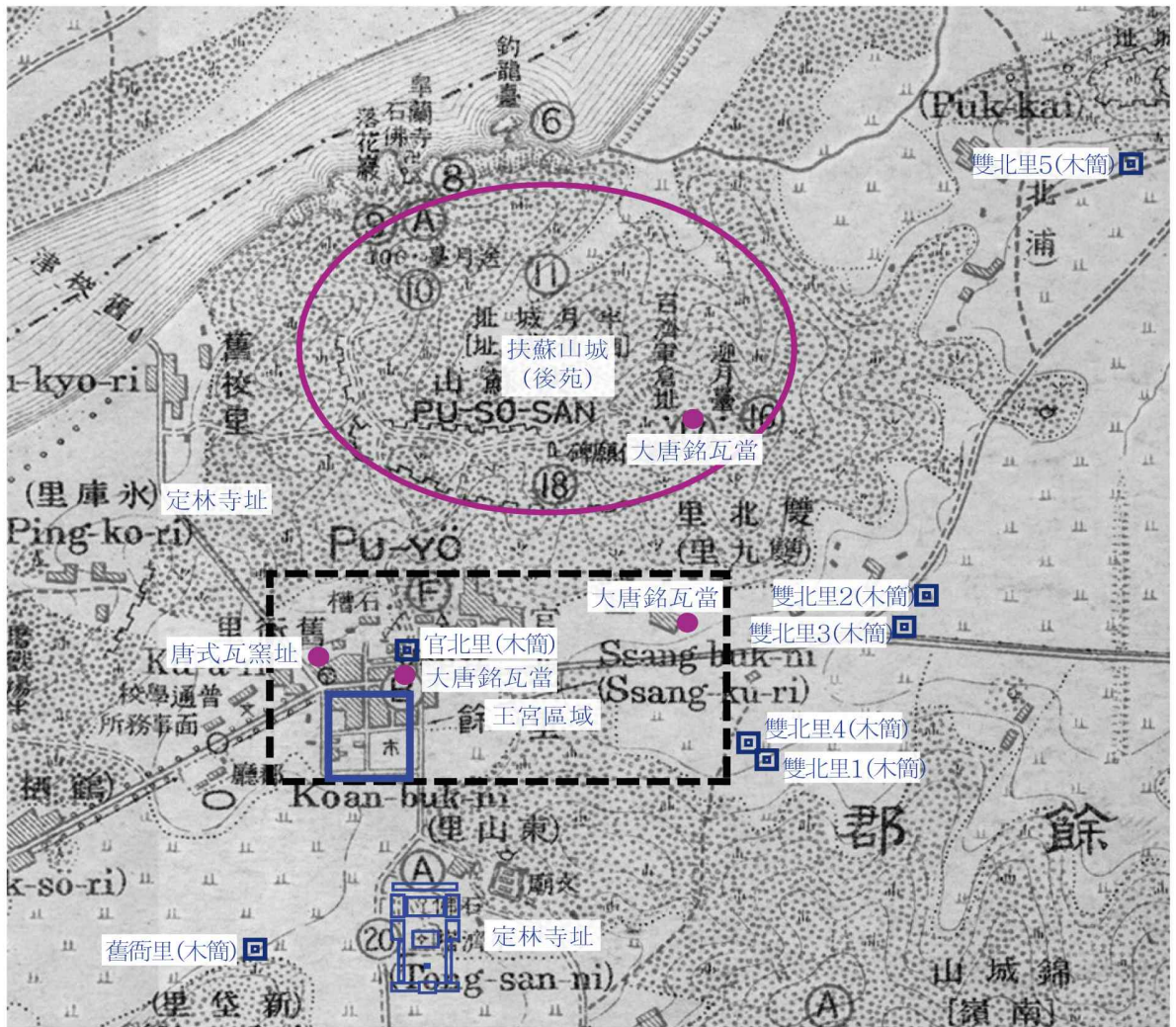


図2-35 泗泚期の王宮区域と関連する主要遺跡の位置



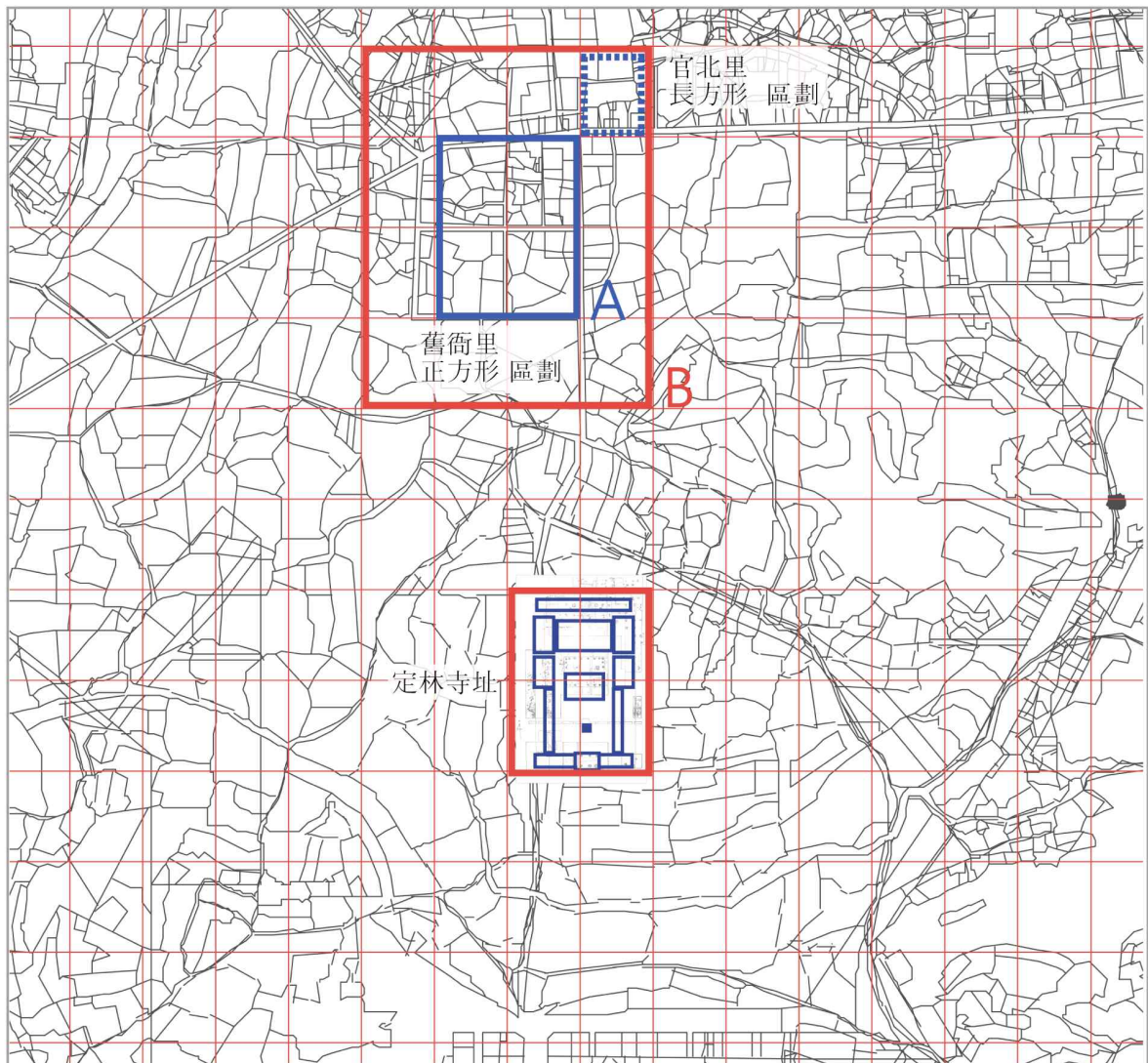


図2-36 泗泚期の王宮区域案と定林寺址の位置関係

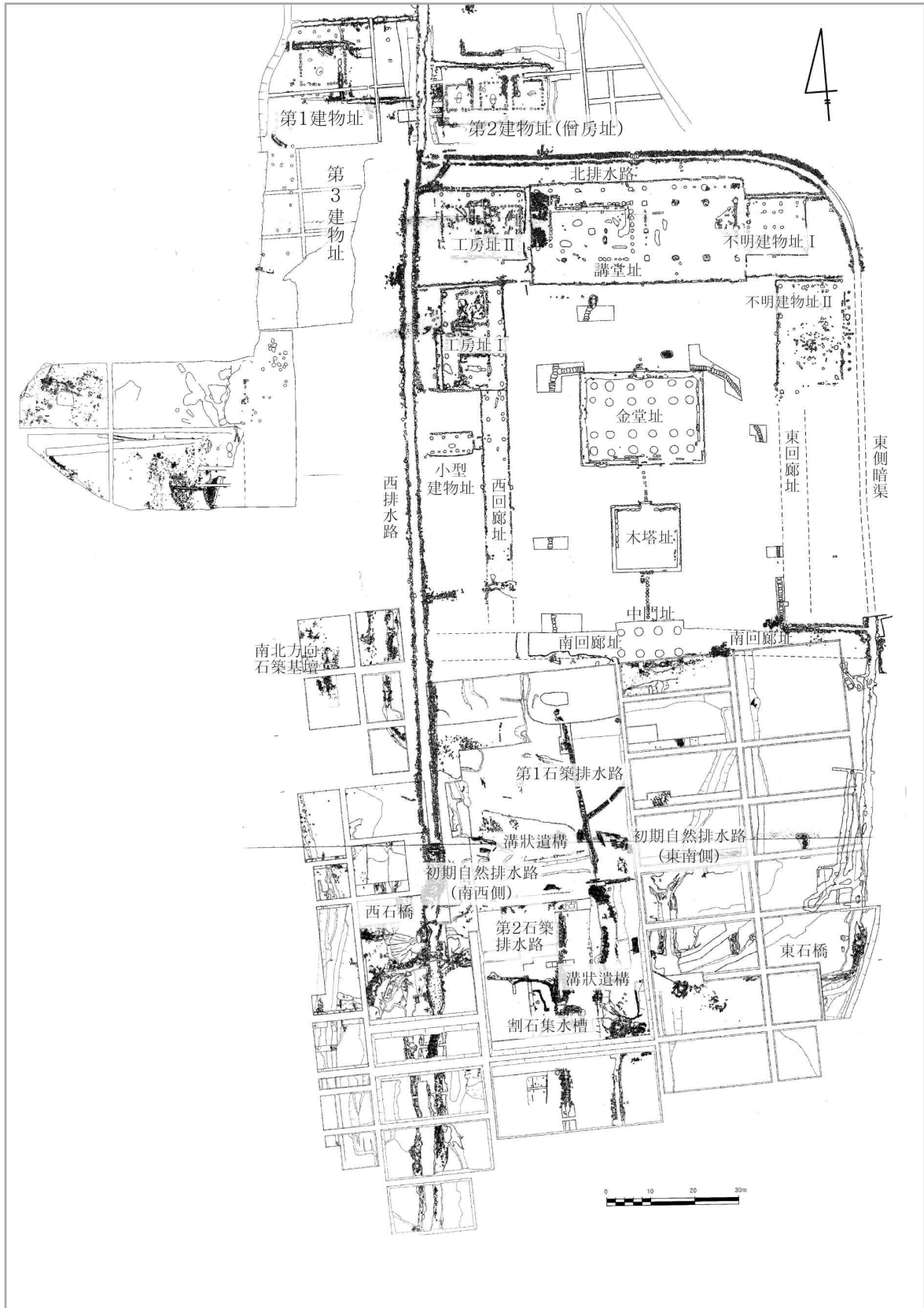


図3-1 扶余陵山里寺址の伽藍配置図(国立扶余博物館、2010)



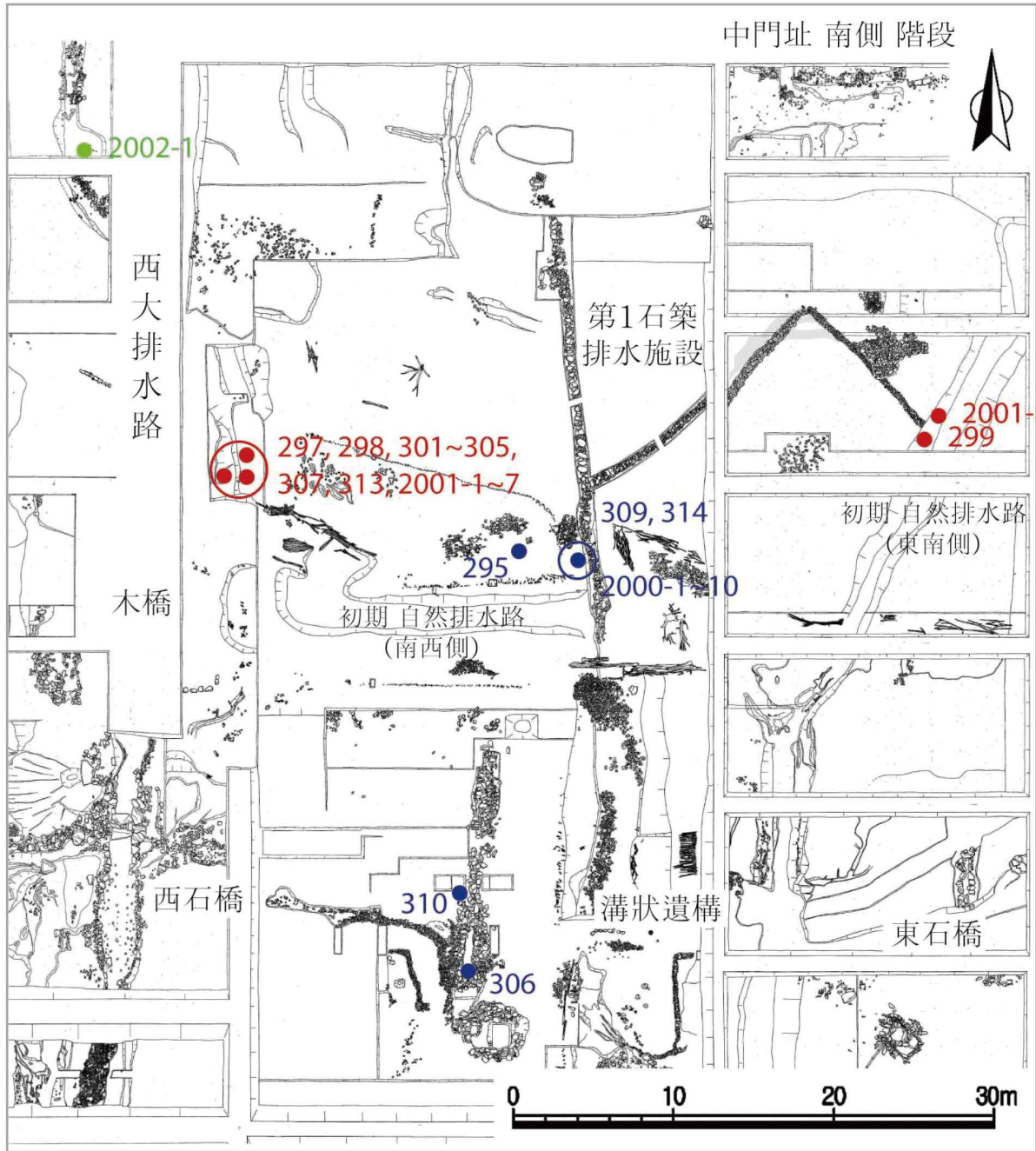


図3-2 扶余陵山里木簡の出土位置

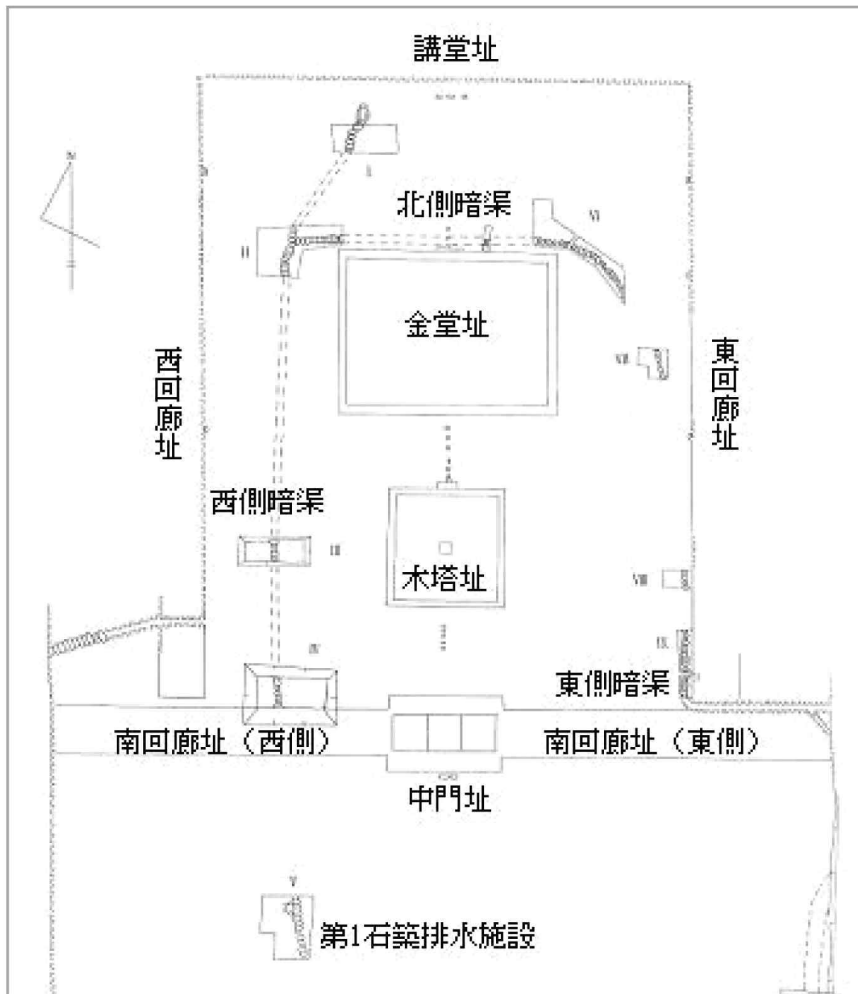


図3-3 扶余陵山里寺址の暗渠施設配置図(国立扶余博物館、2010)

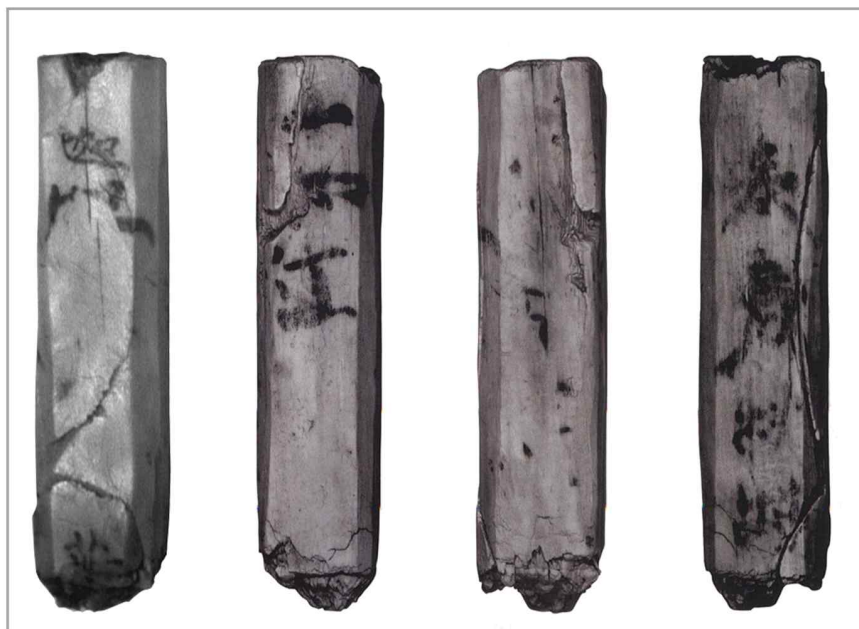


図3-4 扶余陵山里出土2001-8号木簡の写真

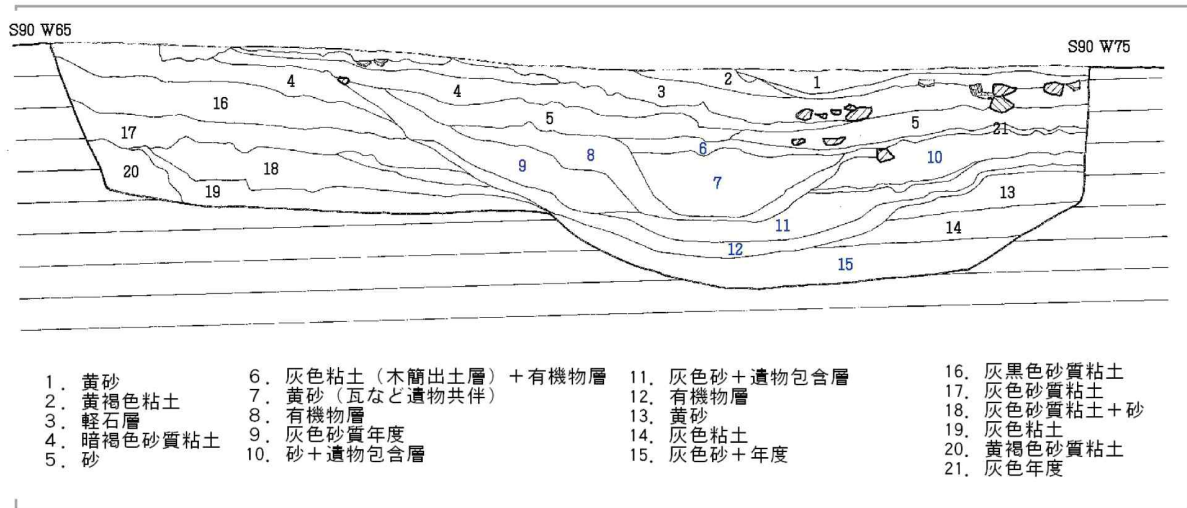


図3-5 扶余陵山里寺址の南回廊西側トレンチ土層図(8次調査)

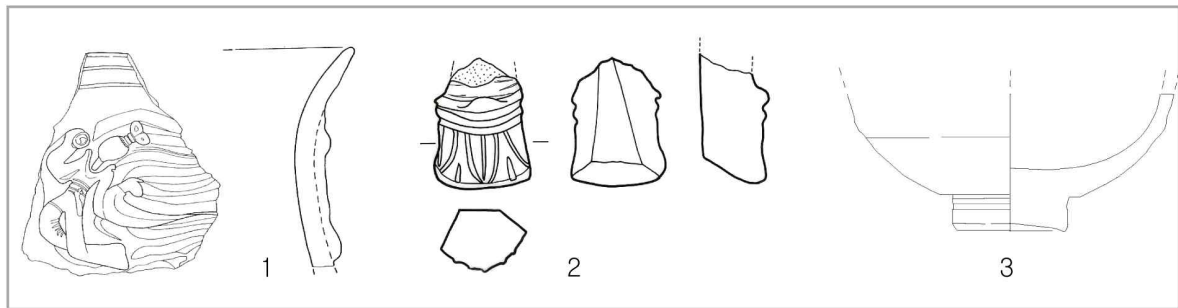


図3-6 扶余陵山里沼地出土の中国青磁片(1. 青磁貼花人物文樽片、2. 黒褐釉陶硯台脚片、3. 青磁蓋片)(国立扶余博物館、2007)

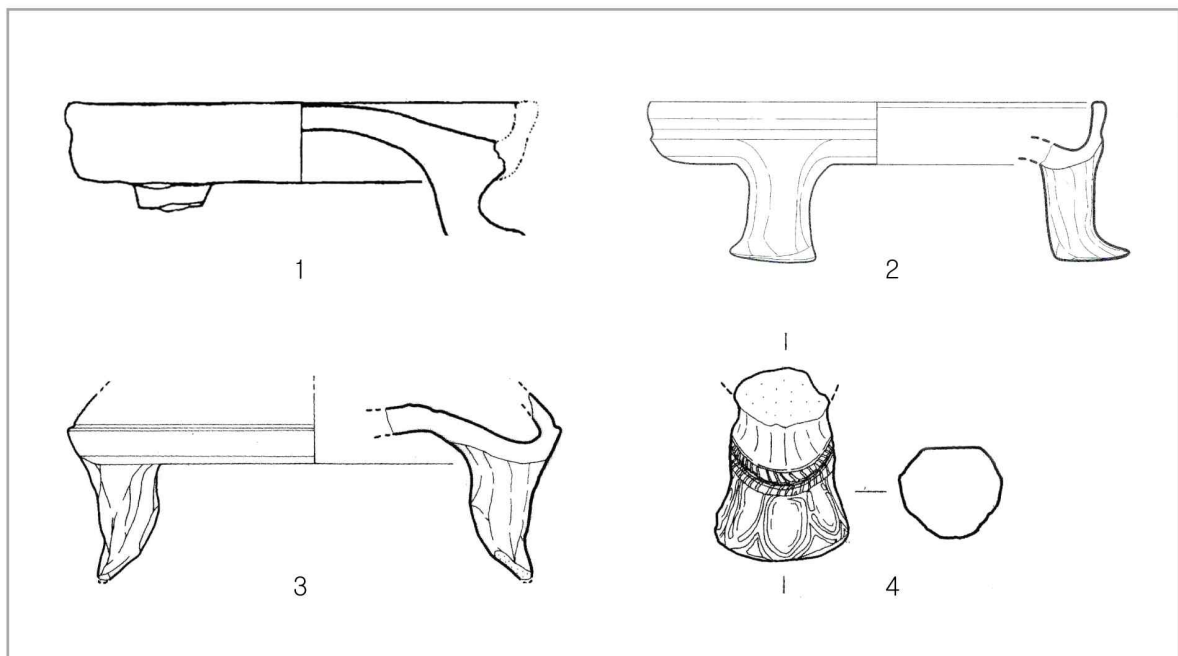


図3-7 公州・扶余出土の各種陶硯片(1. 公州公山城出土硯 2. 陵山里8次調査品 3. 陵山里7次調査品 4. 陵山里7次調査品)(公州師範大学博物館、1987および国立扶余博物館、2007)

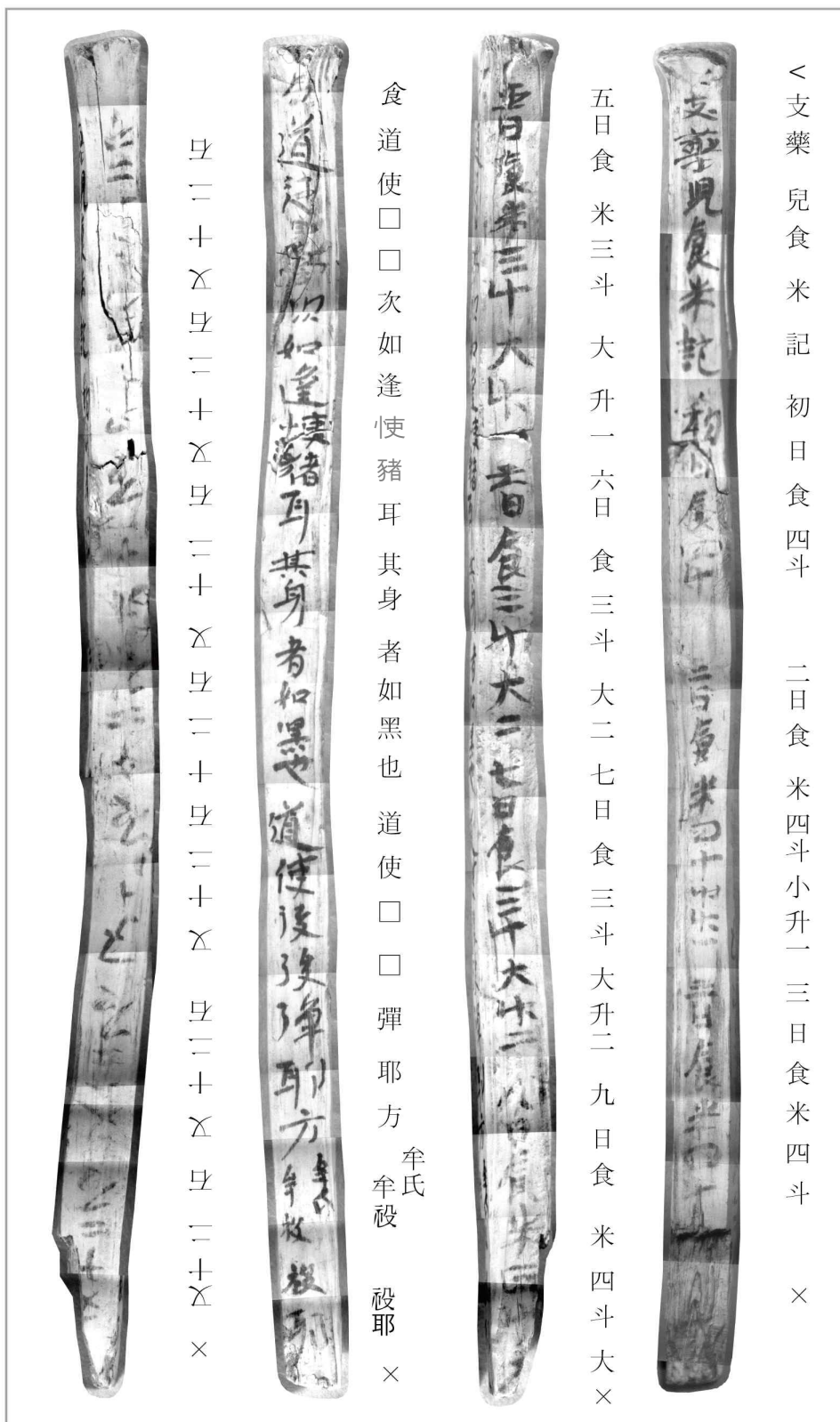


図3-8 扶余陵山里出土2002-1号木簡の赤外線写真と判読文



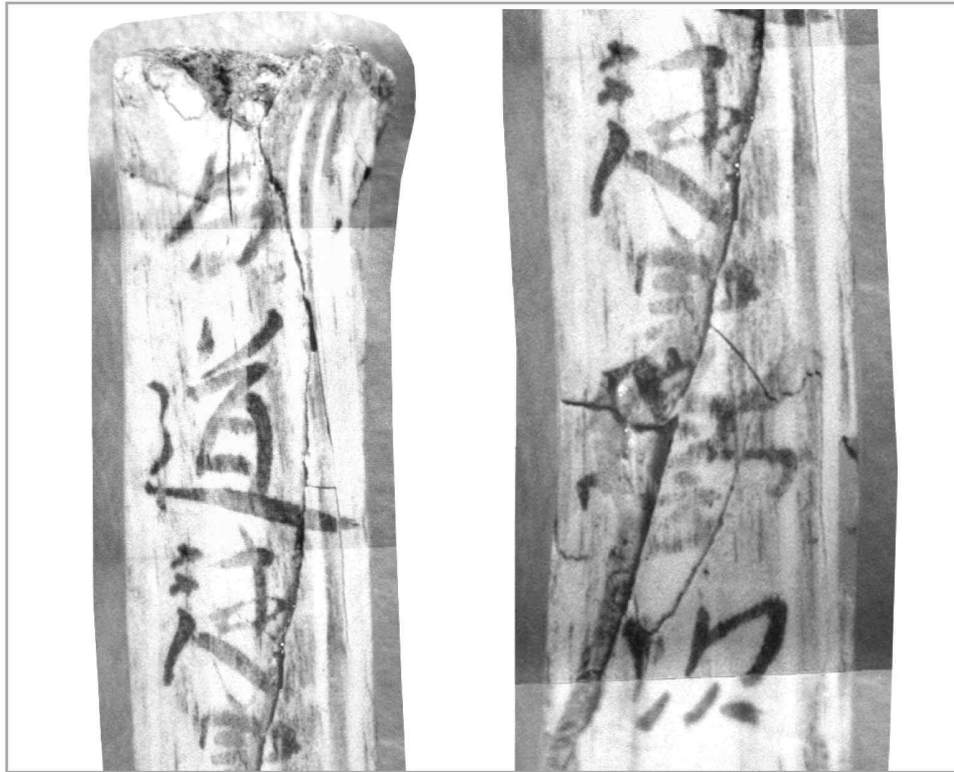


図3-9 2002-1号木簡の3面細部写真(1. 「食」の細部、2. 未確認文字の細部)

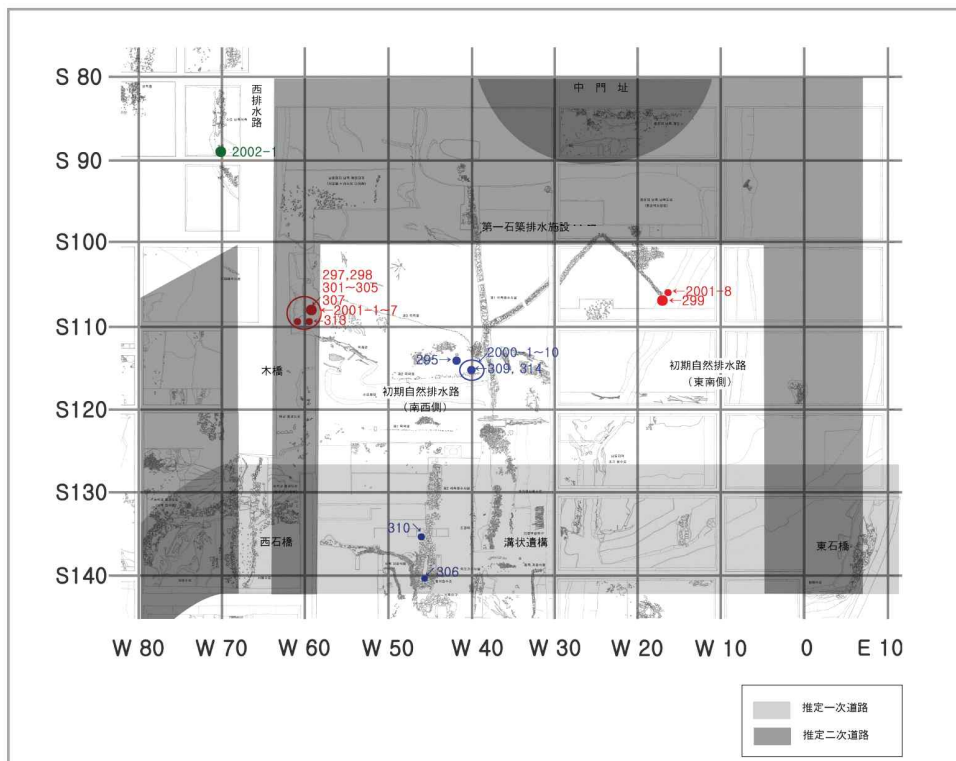


図3-10 扶余陵山里寺址の中門址南側の道路遺構概念図

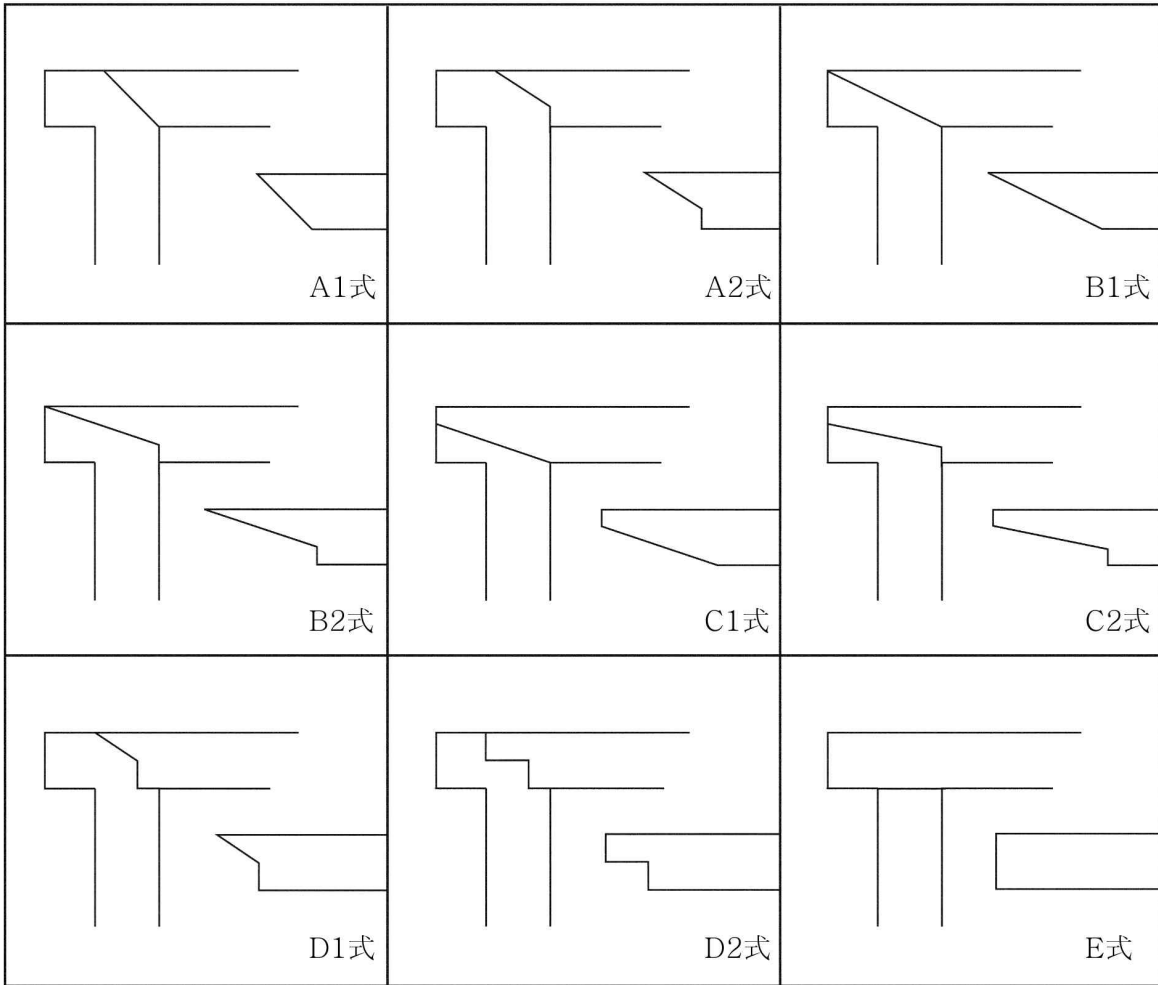


図3-11 扶余陵山里寺址出土瓦当の接合技法模式図

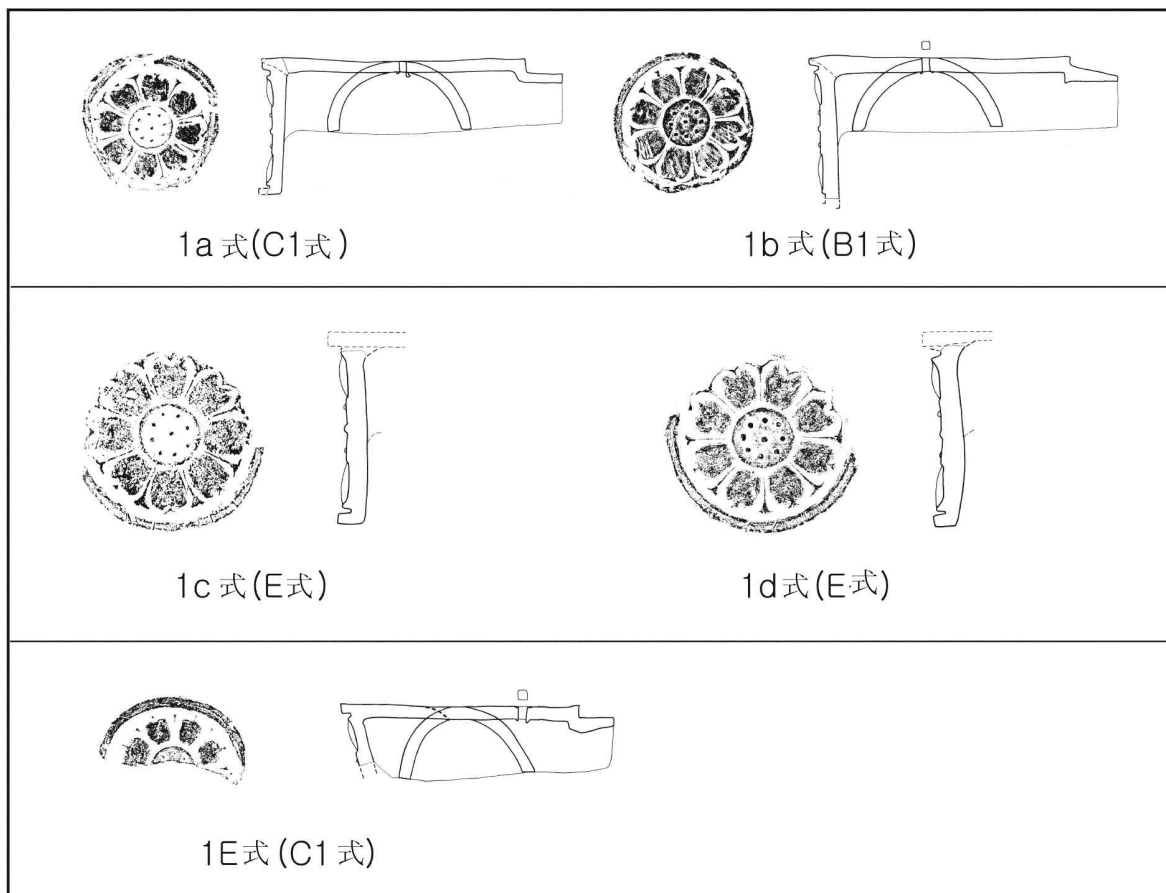


図3-12 扶余陵山里寺址出土の1型式瓦当

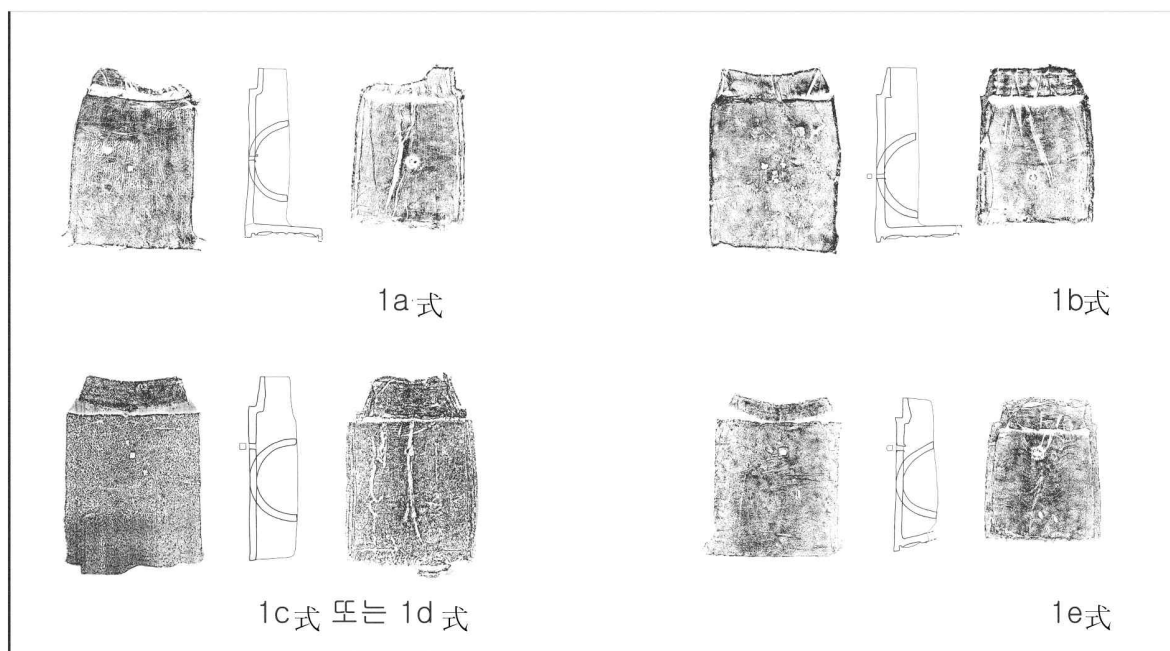


図3-13 1型式瓦当の丸瓦部の形態

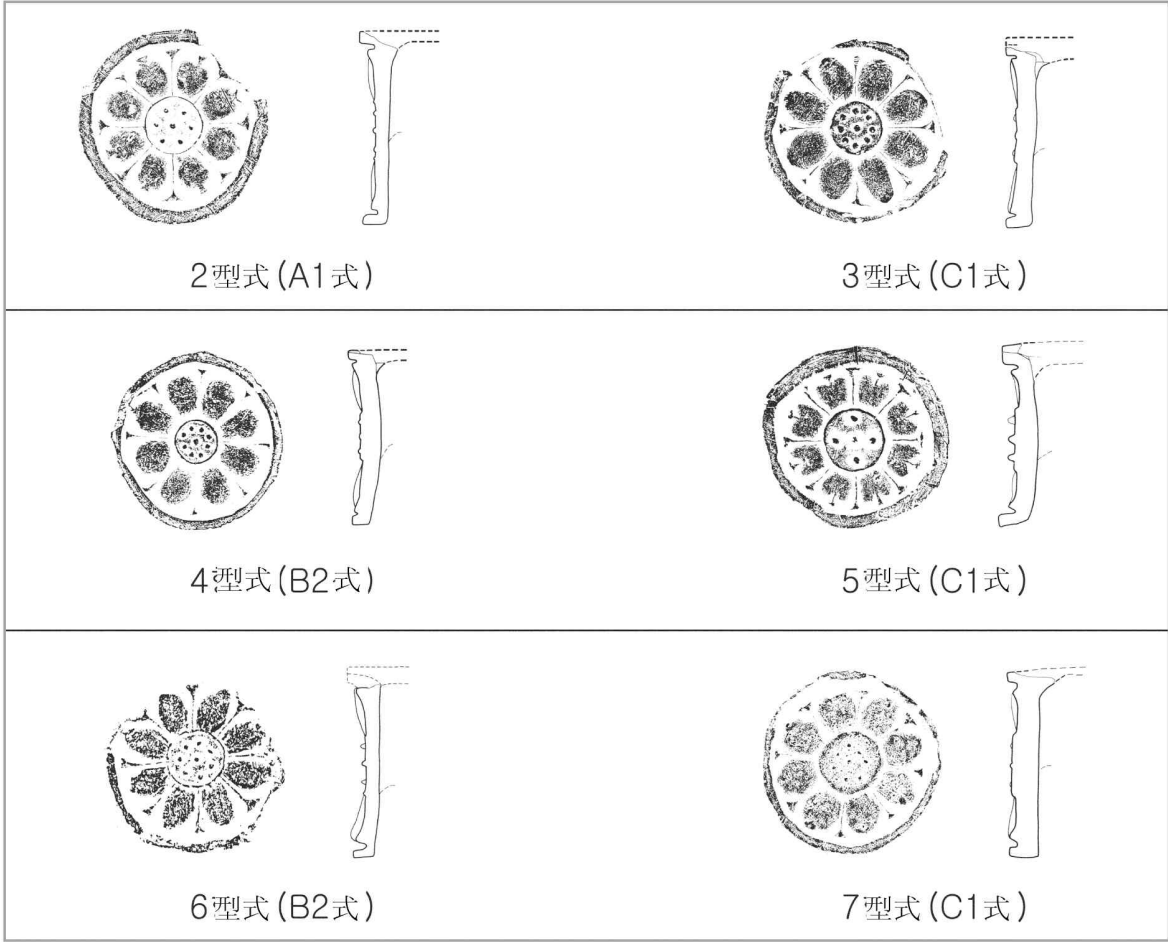


図3-14 扶余陵山里寺址出土の3型式～7型式瓦当

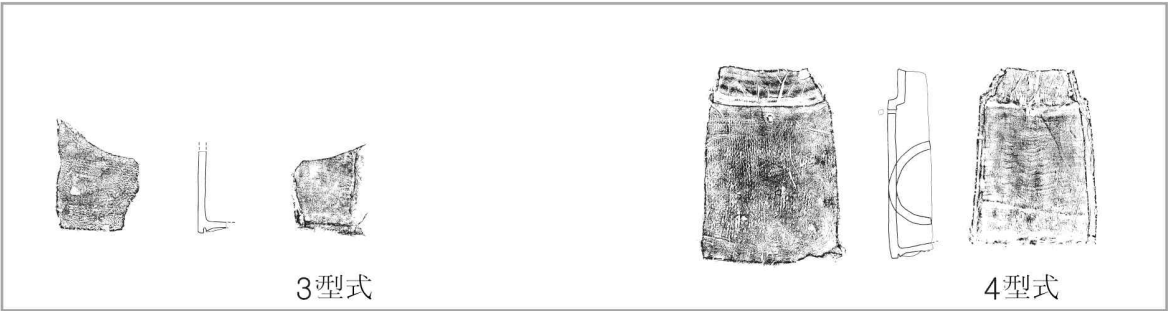


図3-15 3型式と4型式瓦当の丸瓦部の形態

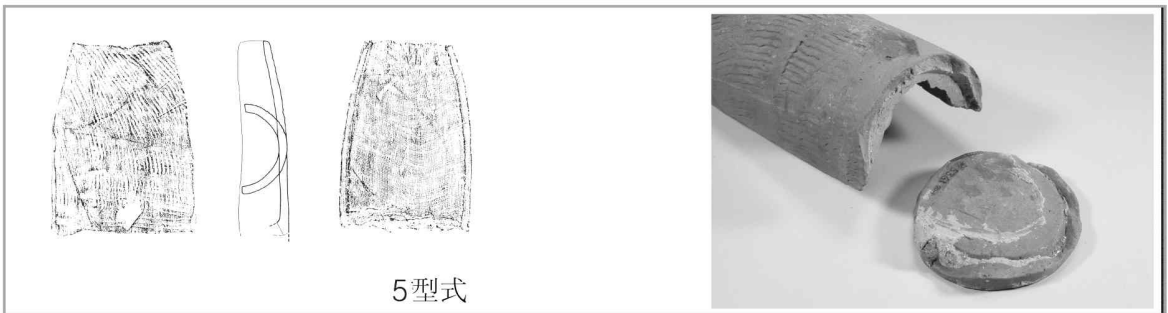


図3-16 5型式瓦当の丸瓦部と復元接合



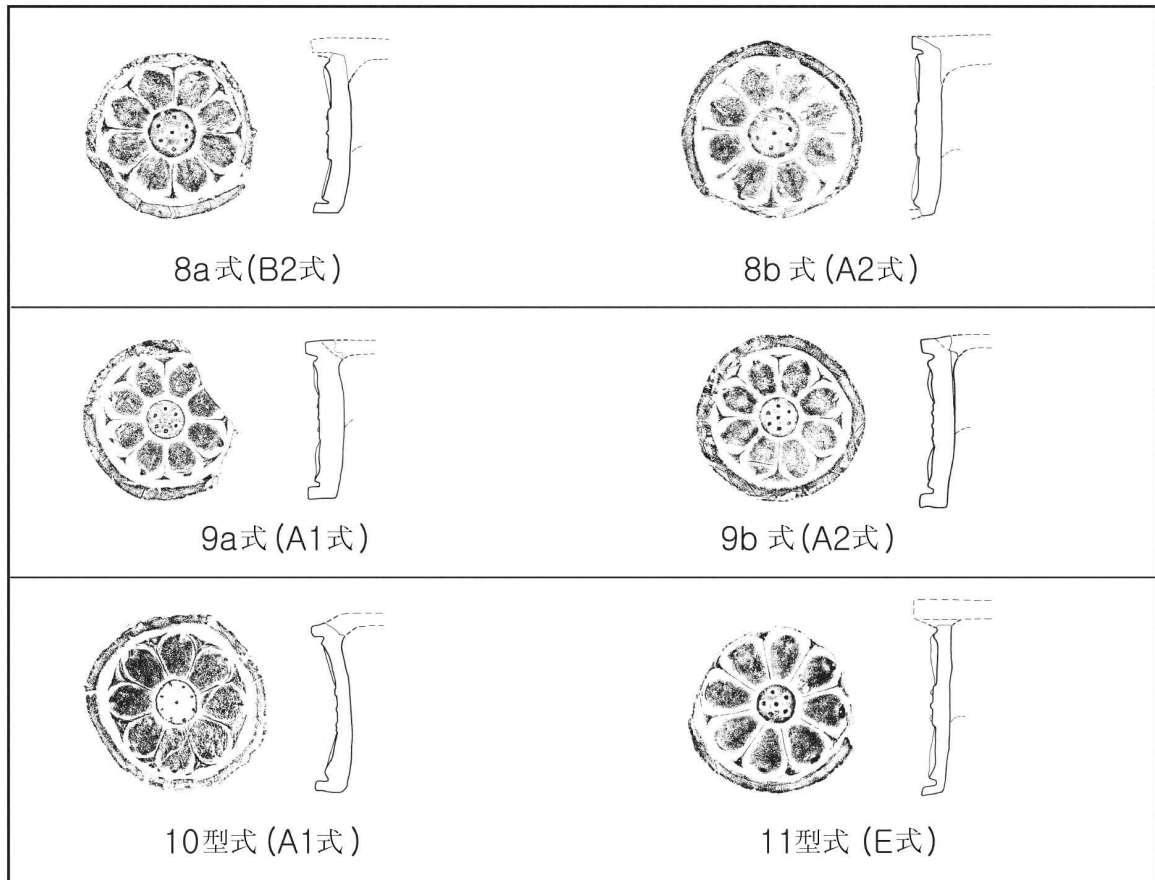


図3-17 扶余陵山里寺址出土の8型式～11型式瓦当

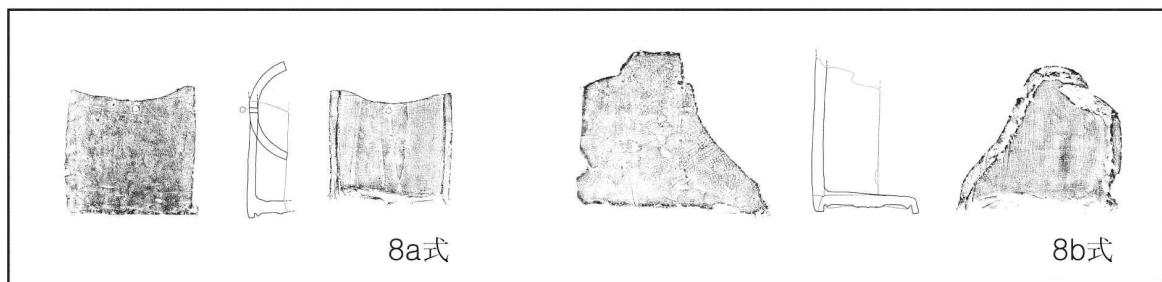


図3-18 8型式瓦当丸瓦部の形態

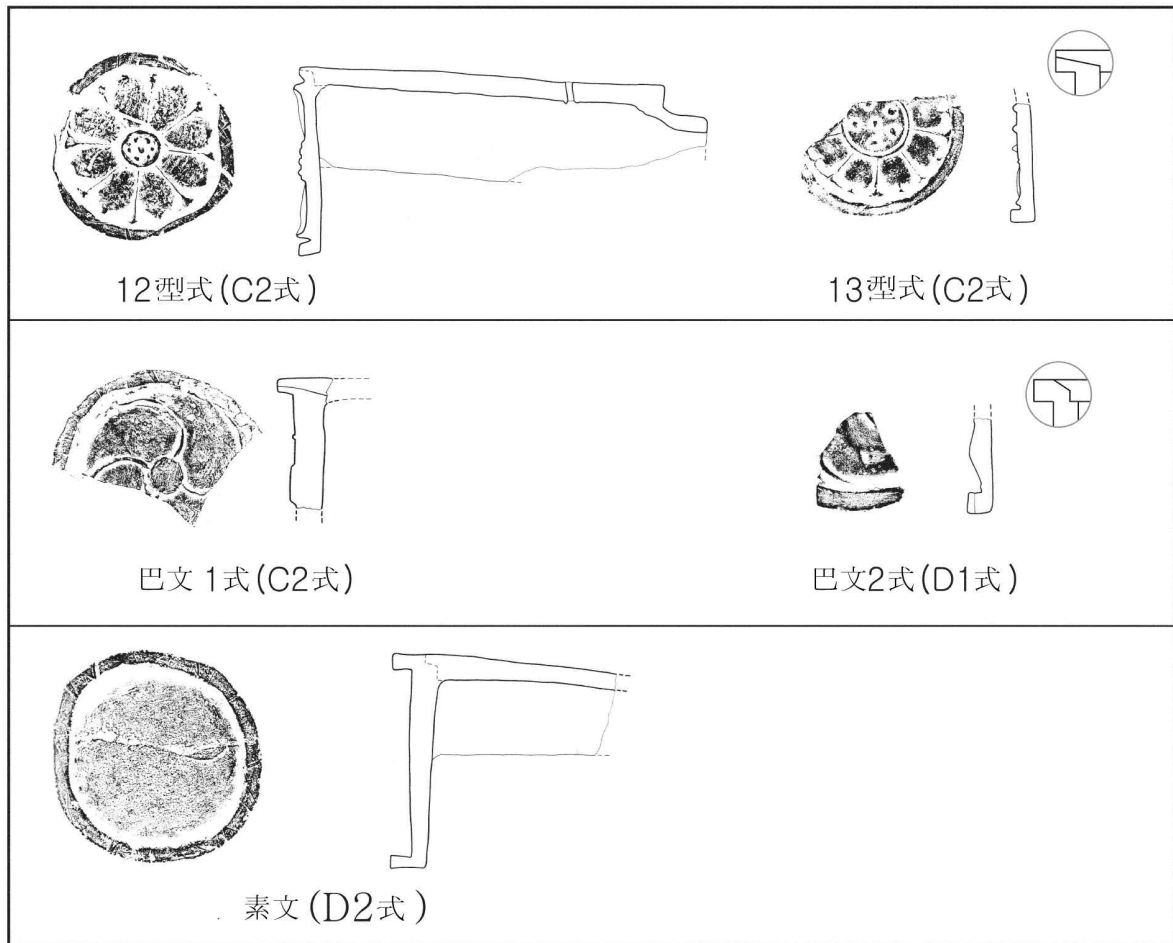


図3-19 扶余陵山里寺址出土の12型式～13型式および巴文と素文瓦当



図3-20 12型式丸瓦内部の釘穴の状況

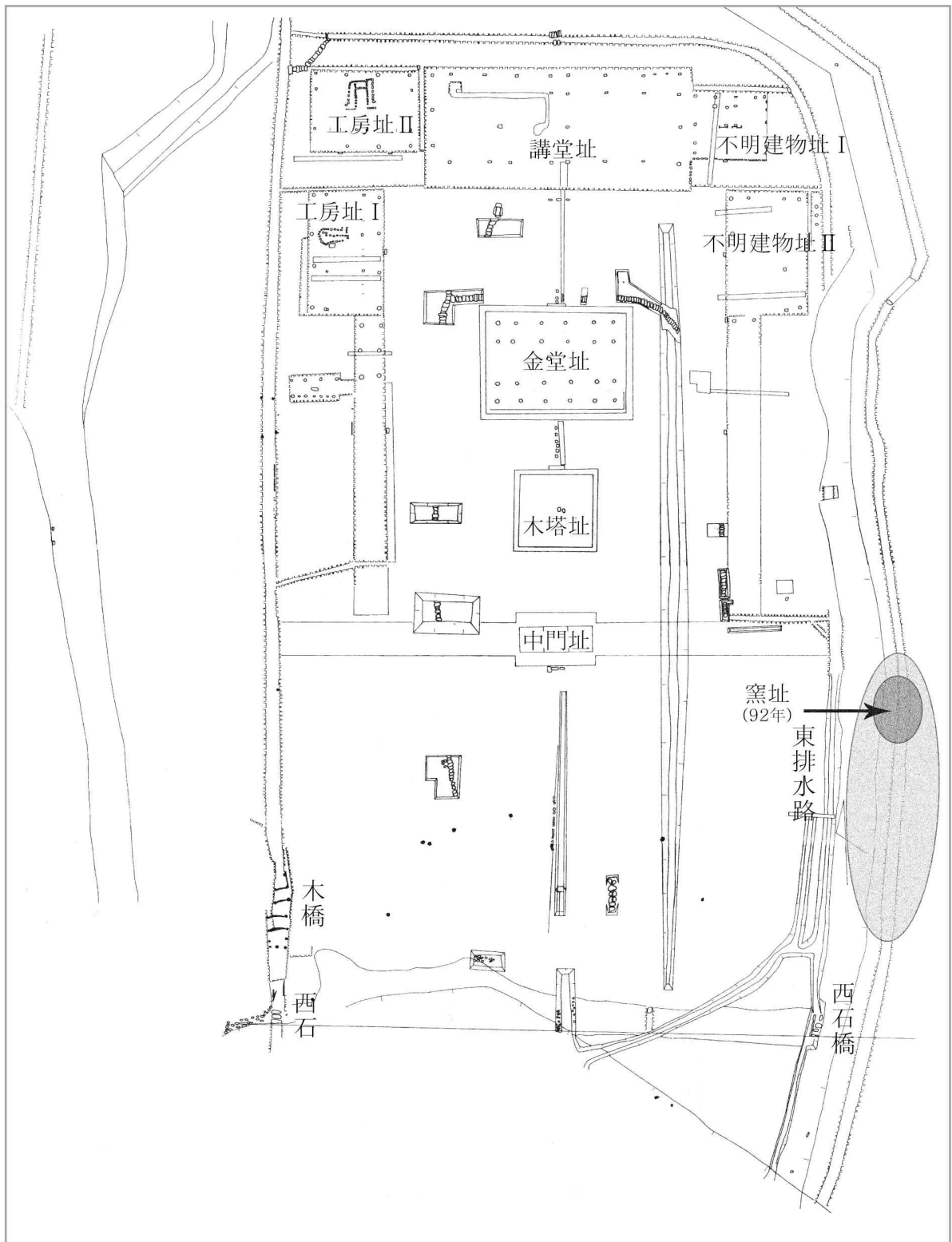


図3-21 扶余陵山里寺址隣接部の窯址位置図

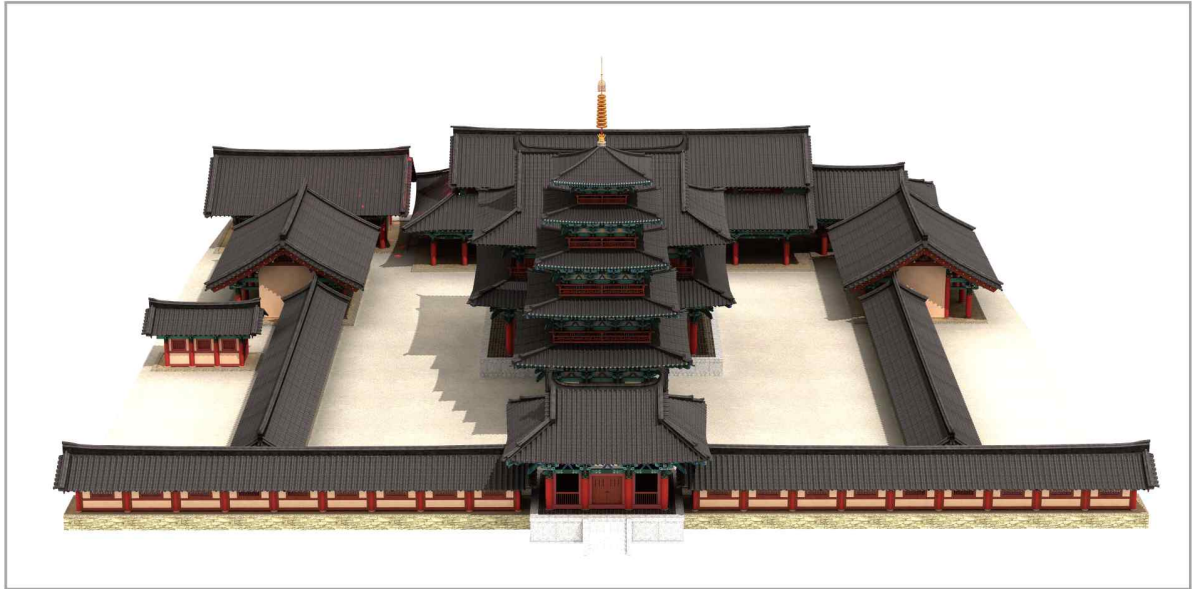


図3-22 扶余陵山里寺址の復原鳥瞰図

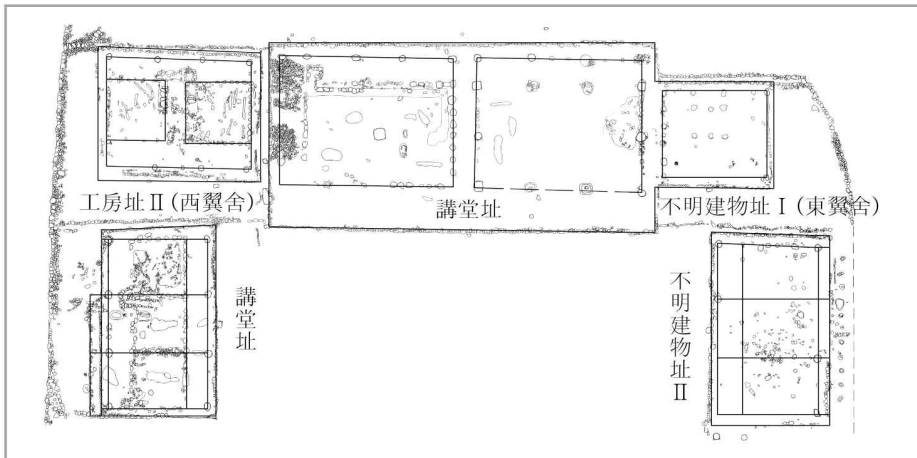


図3-23 扶余陵山里寺址の初期建物址群



図3-24 扶余陵山里寺址の講堂址西室出土の木製漆器(国立扶余博物館、2010)

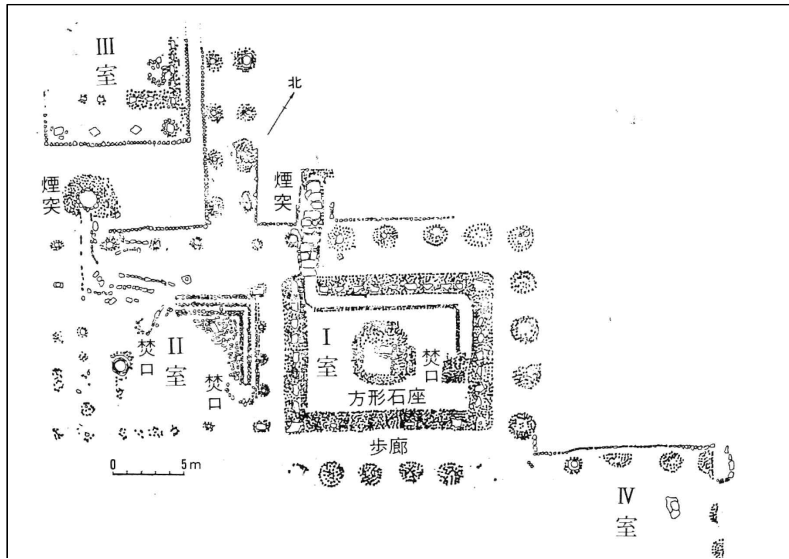


図3-25 集安東台子遺跡の建物址群(方起東、1982)

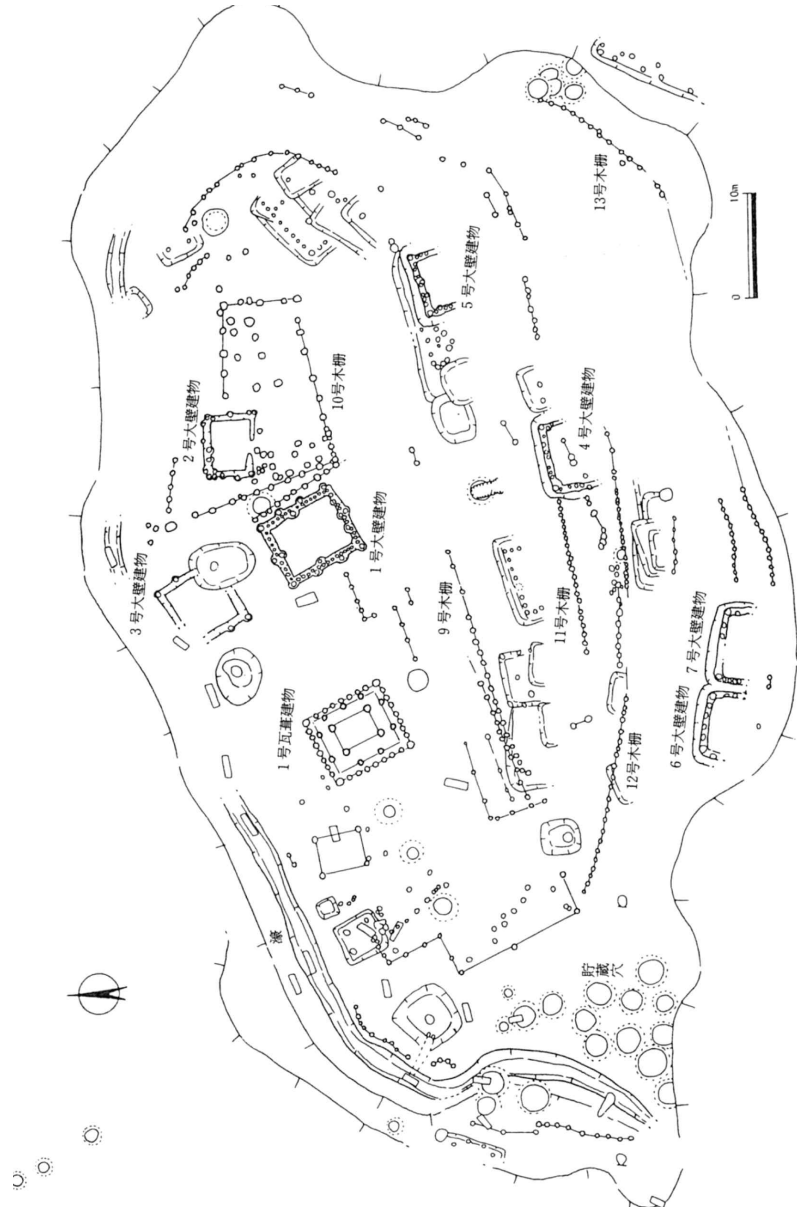


図3-26  
公州艇止山遺跡の  
遺構配置図  
(李漢祥、2000)



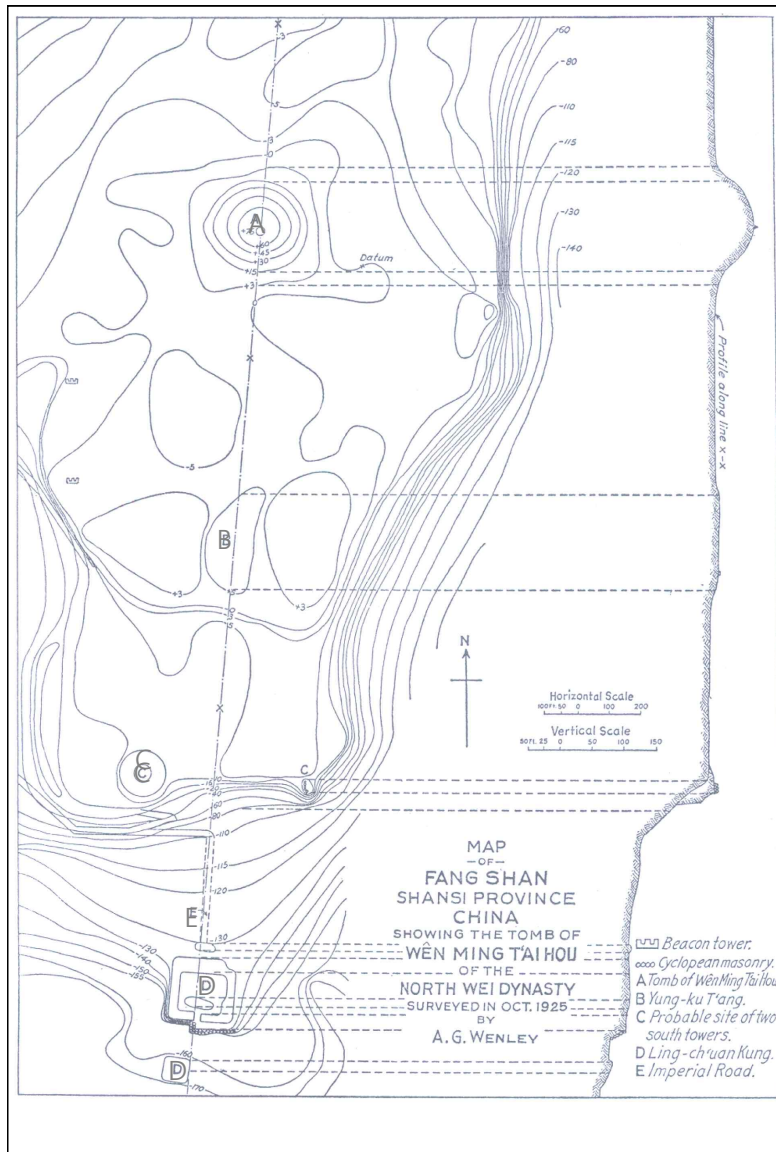


図3-27  
大同北魏方山の  
永固堂と思遠仏寺の  
配置図  
(1947年度Wenley調査図面)

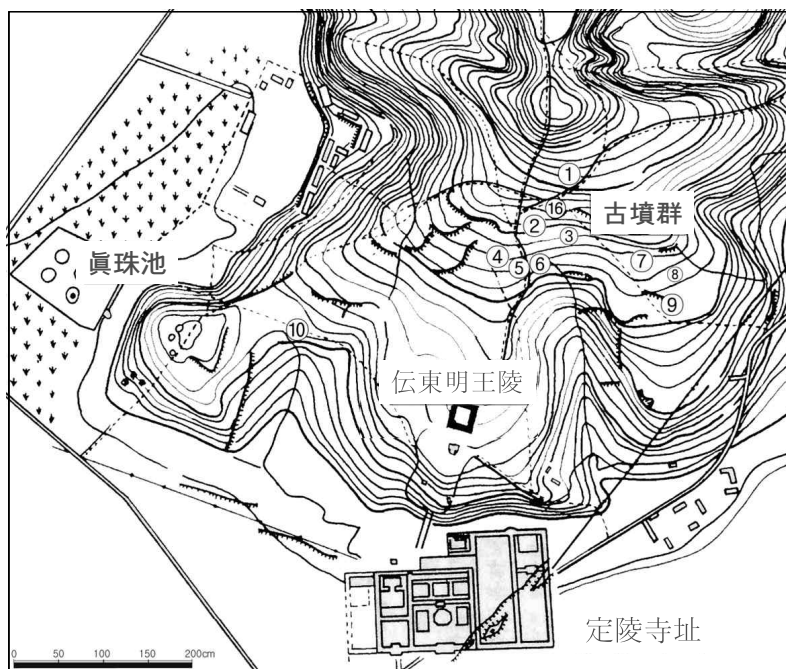


図3-28  
平壤の伝東明王陵と  
定陵寺の配置  
(金日成大学、1976)

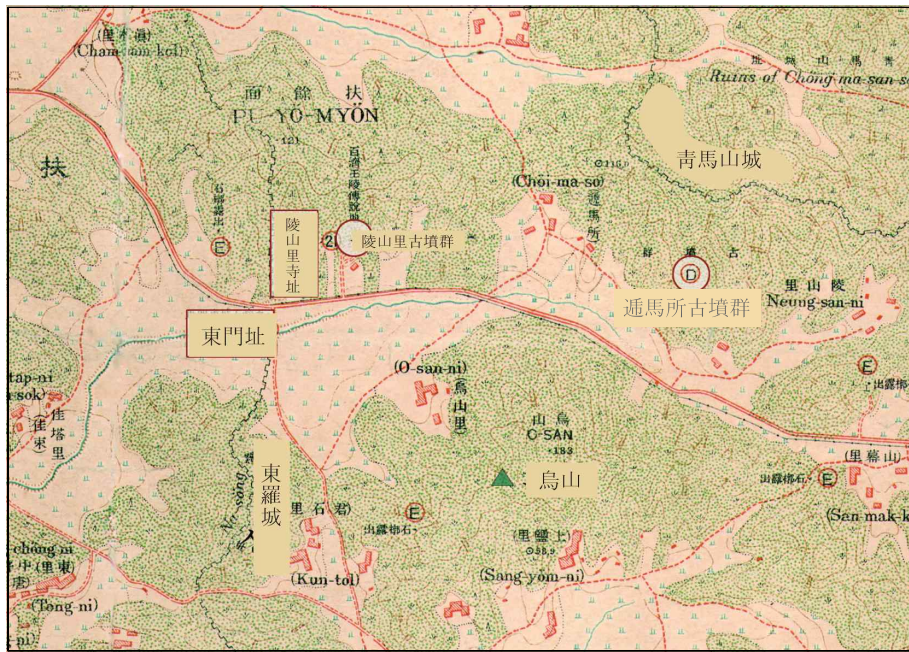


図3-29 扶余陵山里寺址と周辺の遺跡分布図

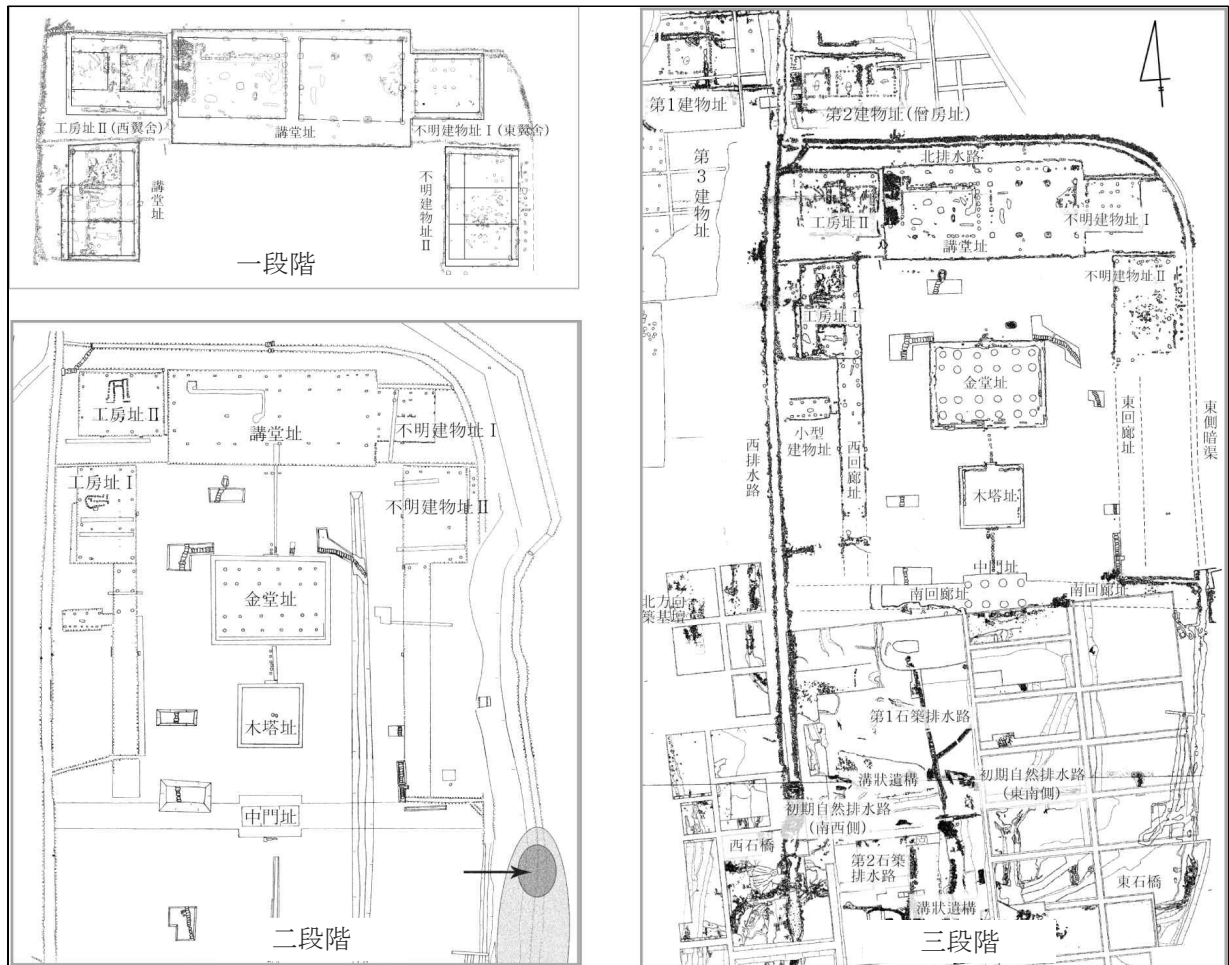


図3-30 扶余陵山里寺址の変遷過程



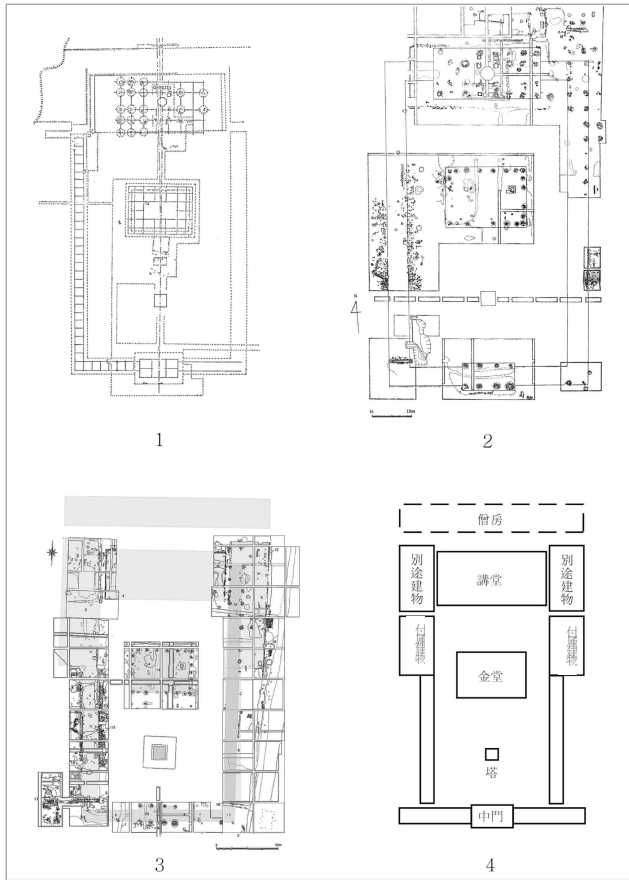


図4-1  
扶余定林寺址の伽藍配置図  
(1. 藤沢一夫作成、2. 尹武炳作成、  
3. 国立扶余文化財研究所、4. 修正案)

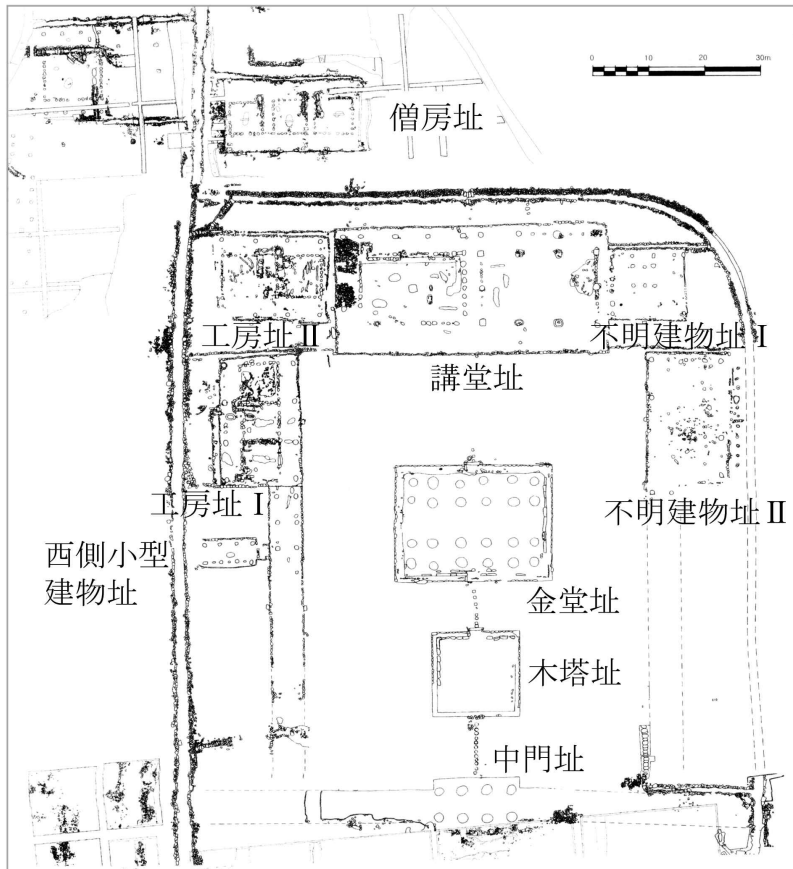


図4-2  
扶余陵山里寺址の  
伽藍配置図  
(国立扶余博物館、2000)



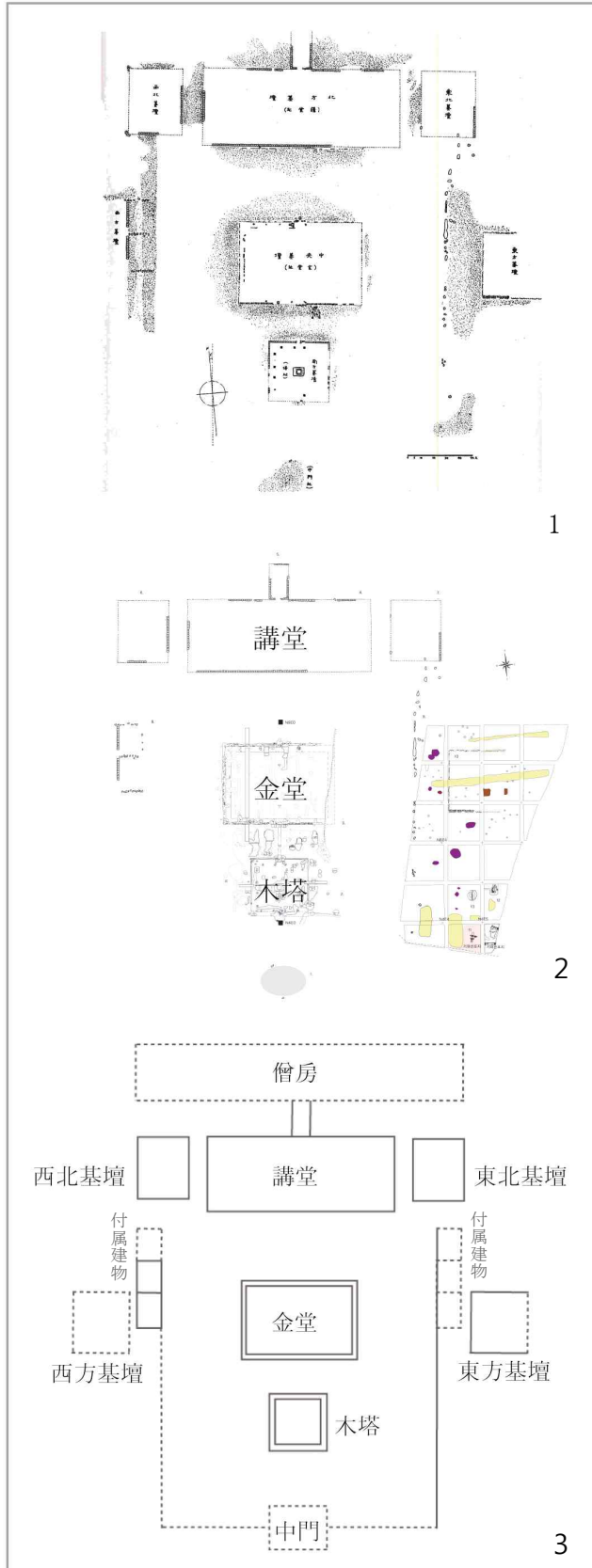


図4-3  
 扶余軍守里寺址の伽藍配置図  
 (1. 石田茂作作成、2. 国立扶余文化財研究所、  
 3. 筆者作成の修正案)  
 (石田茂作、1937:国立扶余文化財研究所、2010)

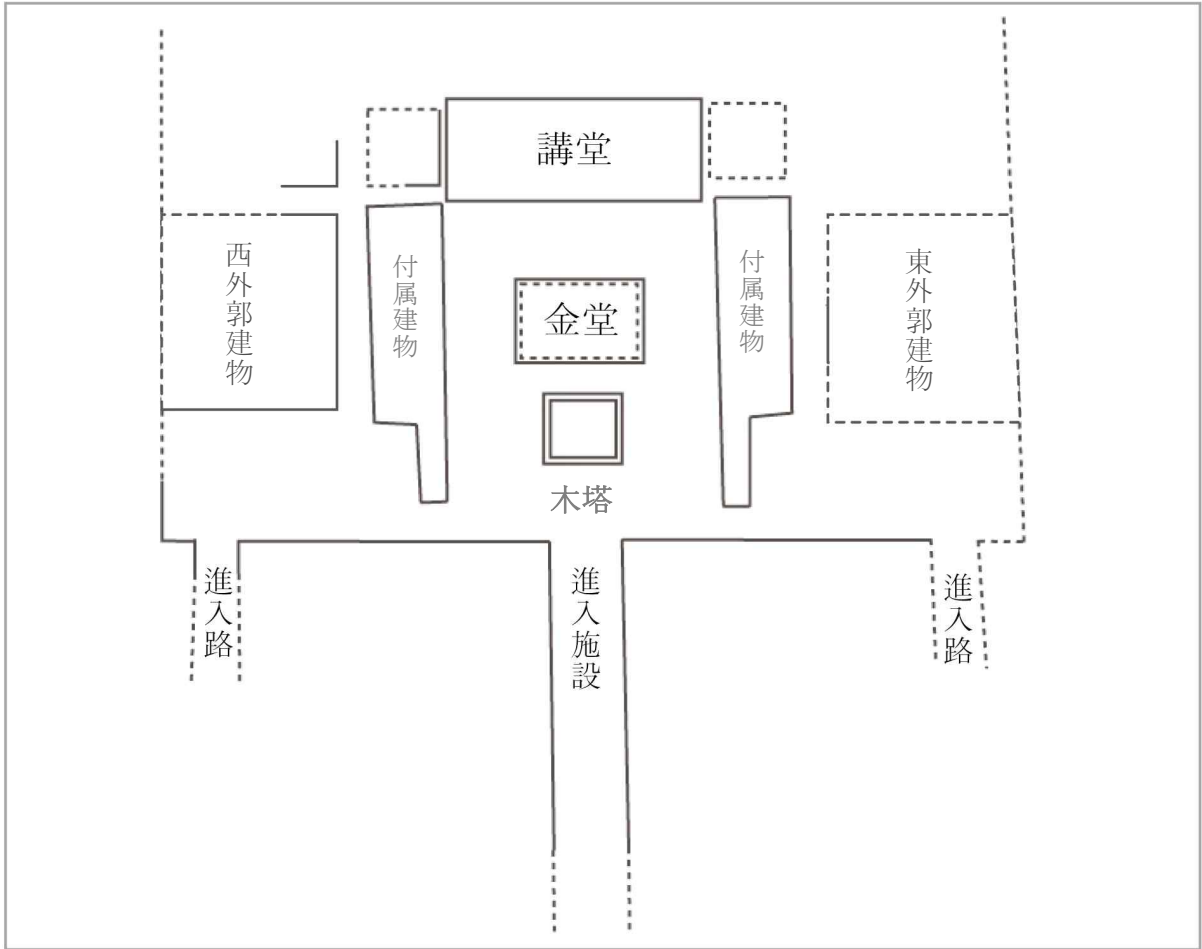


図4-4 扶余王興寺址の伽藍配置図(国立扶余文化財研究所、2011)

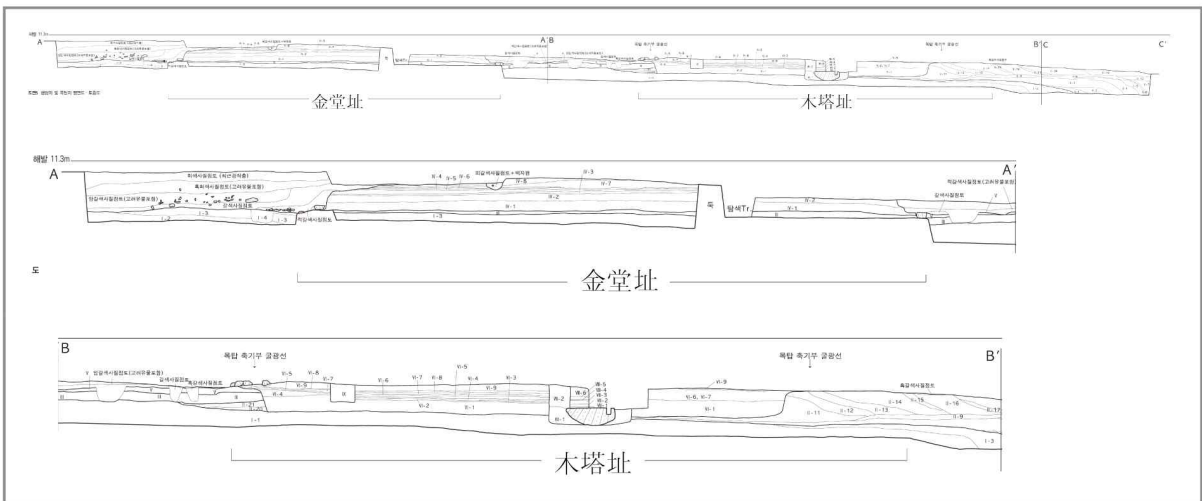


図4-5 扶余王興寺址の金堂址と木塔址区間の土層図(国立扶余文化財研究所、2009)

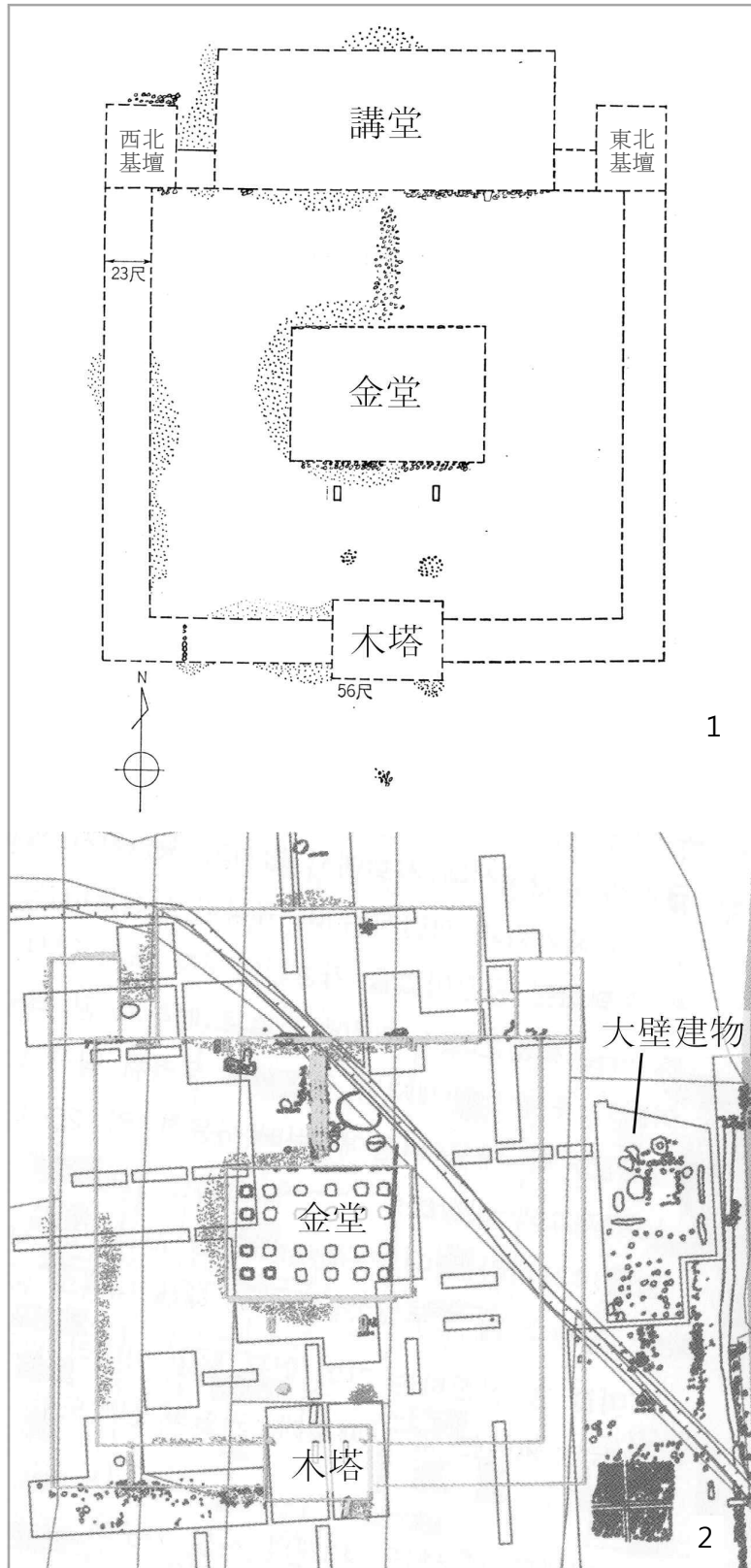


図4-6 扶余東南里寺址の伽藍配置図(1. 石田茂作作成、2. 忠南大博物館)  
 (石田茂作・斎藤忠、1940および扶余郡文化財保存センター、2007)

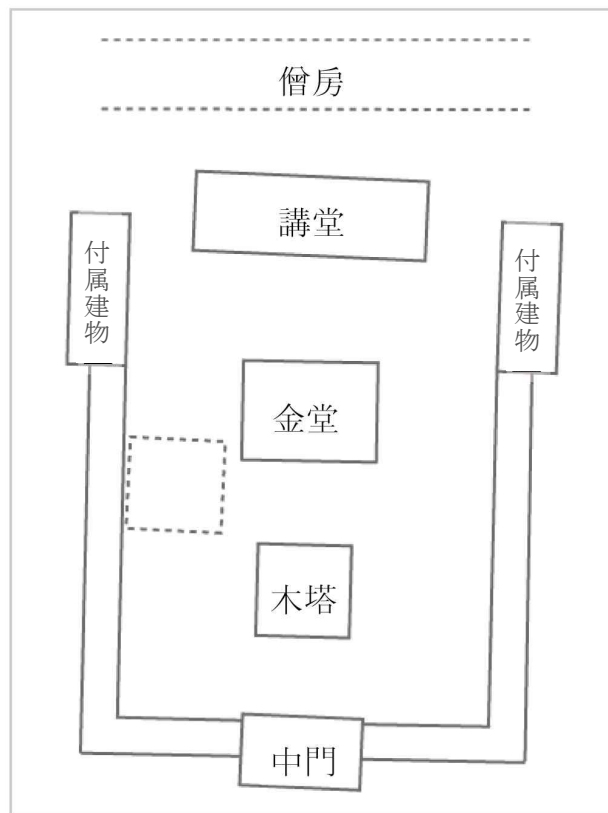


図4-7  
益山帝釈寺址の  
伽藍配置図  
(国立扶余文化財研究所、2011)

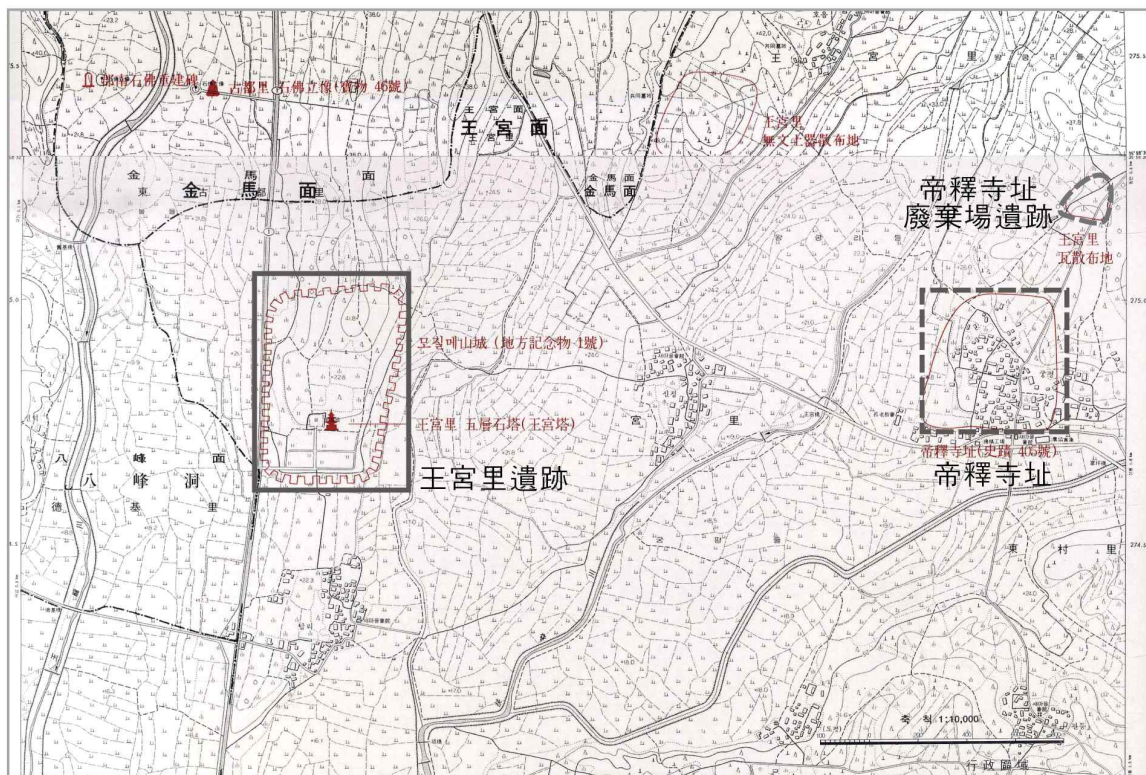


図4-8 益山王宮里遺跡と帝釈寺址の位置関係

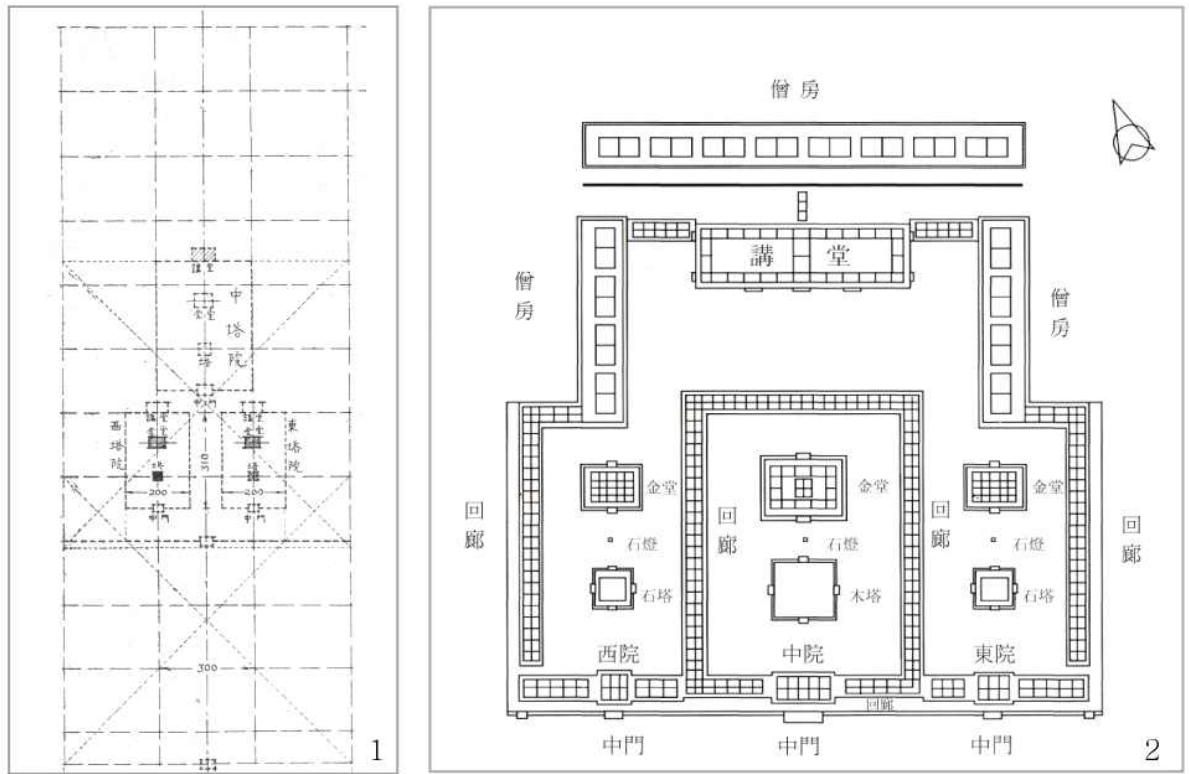


図4-9 益山弥勒寺址の伽藍配置図(1・2)と西石塔下部出土の瓦当(3)  
 (1. 藤島亥治郎、1930, 2. 文化財研究所、1987, 3. 文化財研究所、2012)

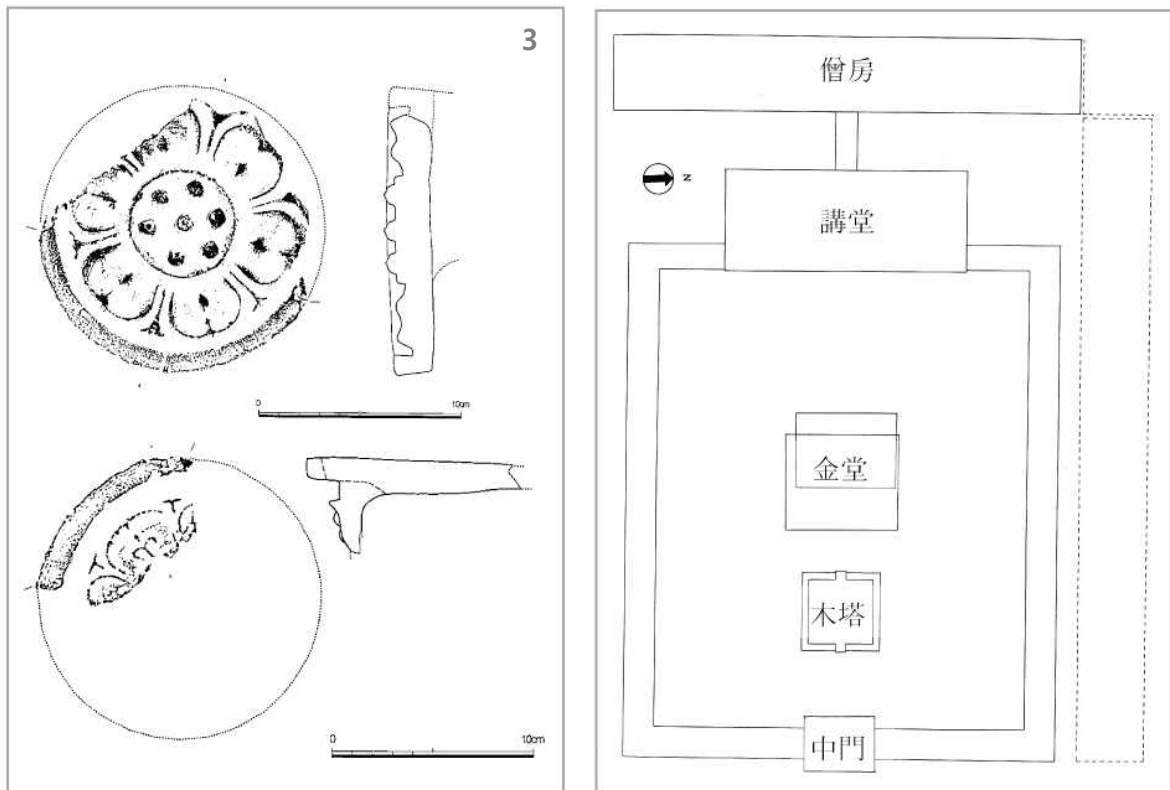


図4-10 扶余恩山金剛寺址の伽藍配置図  
 (国立博物館、1969)



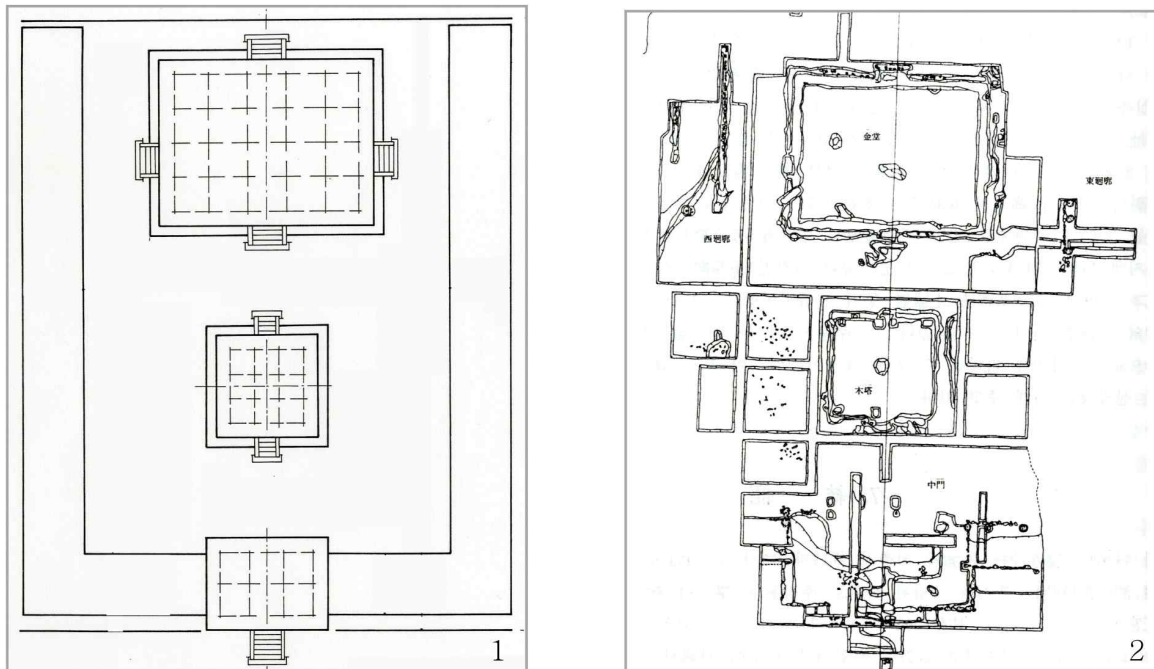


図4-11 扶余扶蘇山廢寺址の伽藍配置図(1. 藤沢一夫作成、2. 国立扶余博物館)と唐式帶金具(3) (藤沢一夫、1971: 申光燮、1994: 国立扶余博物館、1997)

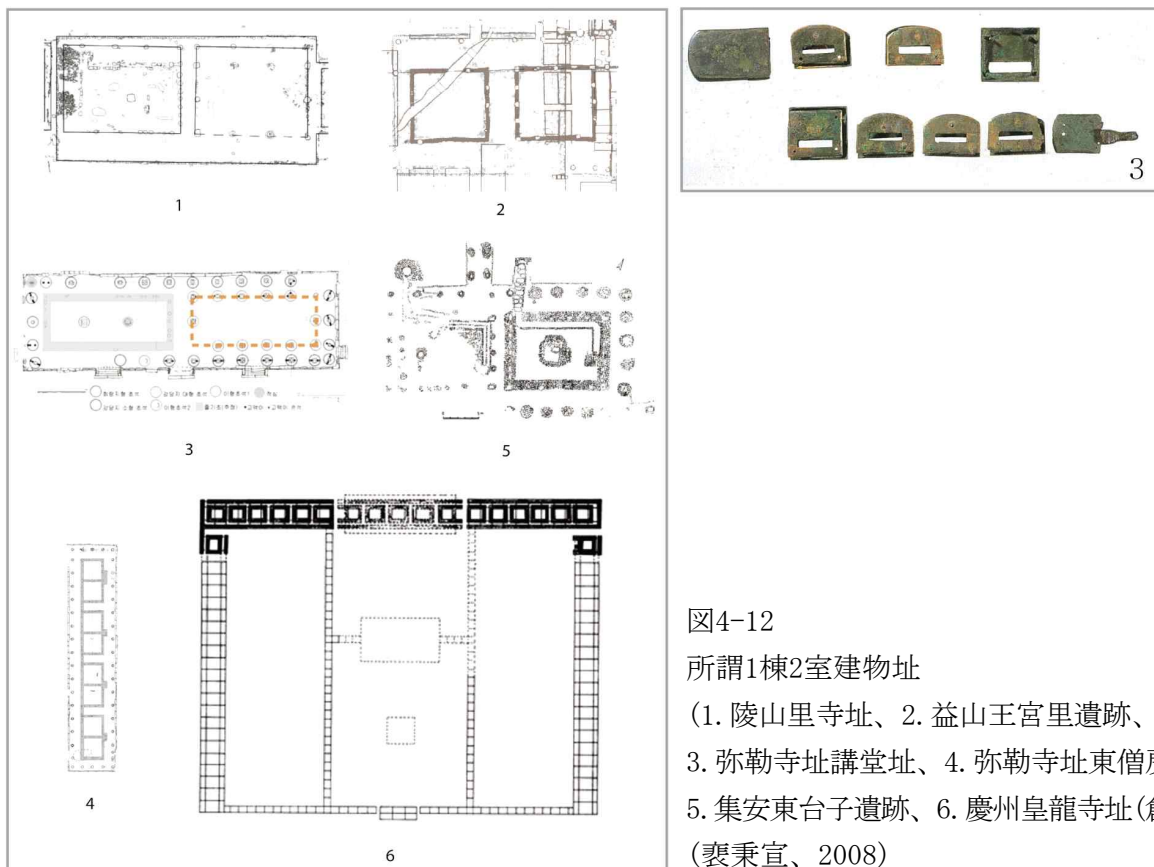


図4-12  
所謂1棟2室建物址  
(1. 陵山里寺址、2. 益山王宮里遺跡、  
3. 弥勒寺址講堂址、4. 弥勒寺址東僧房址、  
5. 集安東台子遺跡、6. 慶州皇龍寺址(創建伽藍)  
(裴秉宣、2008)



図4-13  
 扶余陵山里寺址  
 出土各種塑像(縮尺不同)  
 (1. 塑造坐像、2. 各種塑像)



1



2



3

图4-14  
扶余旧衙里寺址  
出土各種塑像(縮尺不同)  
(1. 头像片、2. 身像片  
3. 各種塑像片)





図4-15 扶余臨江寺址出土各種塑像(縮尺不同)



図4-16 青陽汪津里窯址出土各種塑像(金誠亀ほか、2008)



図4-17 青陽本義里窯址出土大型仏像台座(正面と左側面)(国立公州博物館、2010)



图4-18 益山帝积寺址废弃场出土各种塑像(缩尺不同)(円光大学校博物館、2006)





図4-19 益山帝釈寺址廃棄場出土塑像の背面と各種胎土



図4-20 益山弥勒寺址出土各種塑像と磚仏(縮尺不同)



図4-21 益山弥勒寺址西石塔下部出土螺髮(崔聖銀、2010)



図4-22  
扶余恩山金剛寺址  
出土各種塑像  
(縮尺不同)



図4-23  
扶余旧橋里寺址  
出土塑像片  
(正面と背面)



図4-24  
扶余扶蘇山麁寺址  
出土各種塑像  
(縮尺不同)



図4-25  
益山王宮里遺跡出土螺髮  
(国立扶余文化財研究所、2008)

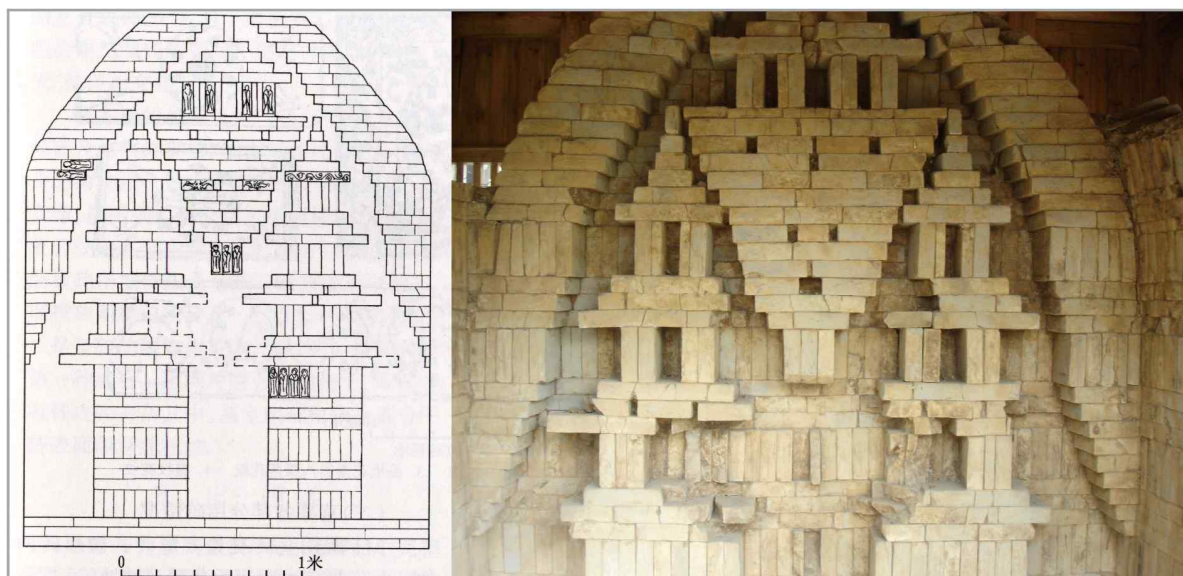


図4-26 南京市江寧区胡村南朝墓後壁の塔型裝飾(南京市博物館、2008)



図4-27  
平安南道平原郡  
元五里寺址出土塑造仏坐像塑(1)と  
塑造菩薩立像(2)、  
平壤市樂浪区域土城里出土陶範(3・4)  
(国立中央博物館、1990)





図4-28 慶州四天王寺址出土の緑釉埴片(国立慶州博物館ほか、2009)



図4-29 慶州錫杖寺址出土の塑造神将像片(1)、陶范片(2)、各種埴片(3)  
(東国大慶州キャンパス博物館、2006)



図4-30 日本川原寺裏山遺跡出土の各種塑像(縮尺不同)(飛鳥資料館、1985)





図4-31 日本川原寺裏山遺跡出土の十二支神将像のウマとニワトリの頭状片  
(明日香村教育委員会、1983)



図4-32 日本川原寺裏山遺跡出土の緑釉埴  
(飛鳥資料館、1985)



図4-33 日本川原寺裏山遺跡出土の  
武装天部像の腰部(正面と側面)  
(飛鳥資料館、1985)





図5-1  
慶州興輪寺址(慶州工高)と  
靈廟寺址(天鏡林興輪寺)  
の位置

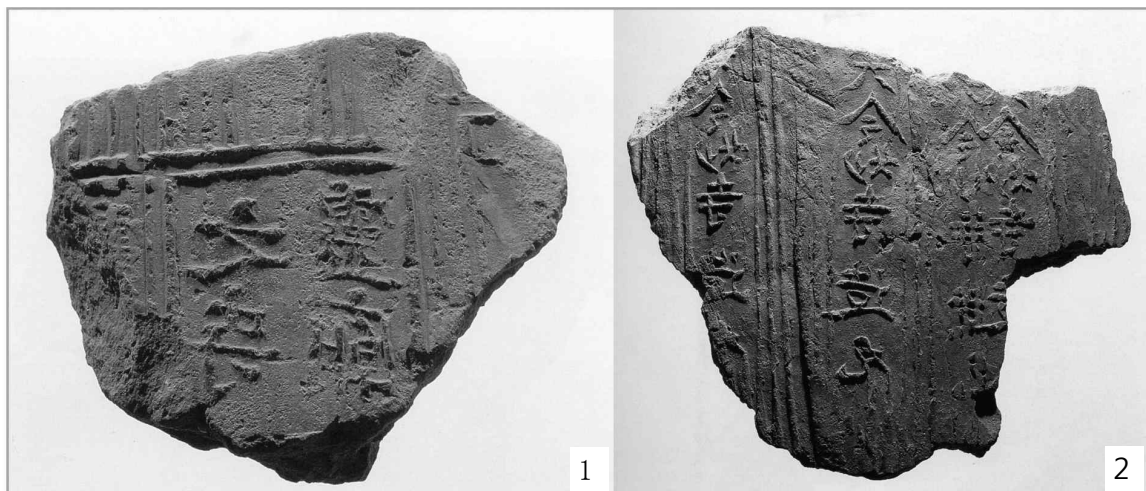


図5-2 慶州靈廟寺址(天鏡林興輪寺)出土の文字瓦(1. 靈廟之寺 2. 大令妙寺造瓦)

図5-3 慶州工高一帯出土古式蓮華文瓦当の型式分類案

型式名稱 (接合技法)	標識資料	型式名稱 (接合技法)	標識資料
1Aa 型式 (Ⅱ 2a技法)	182番	1Ab 型式 (Ⅱ 1b技法)	168番
1B 型式 (Ⅱ 2a技法)	183番	2 型式 (不明)	184番
3 型式 (Ⅲ 技法?)	187番	4 型式 (Ⅱ 2a技法)	181番
5 型式 (Ⅱ 1a技法)	186番	6 型式 (Ⅱ 1a技法)	180番
7 型式 (Ⅱ 2技法)	164番	8 型式 (Ⅱ 2a技法)	163番
9 型式 (Ⅲ 1技法)	182番	10 型式 (Ⅲ 1技法)	182番
11 型式 (Ⅲ 1技法)	192番		

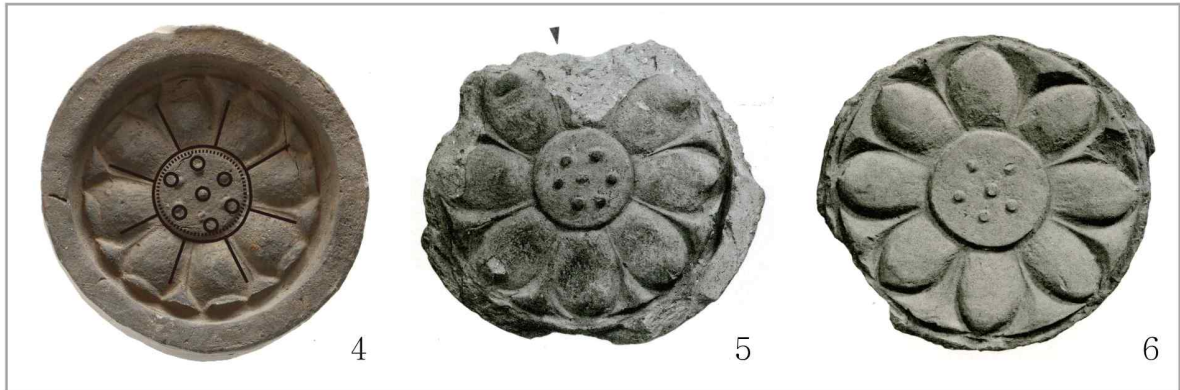


図5-4 182番瓦当と183番瓦当の比較

図5-5 慶州校洞で収集された蓮華文瓦当(井内古文化研究室編、1978)

図5-6 慶州興輪寺址で収集された蓮華文瓦当(井内古文化研究室編、1978)

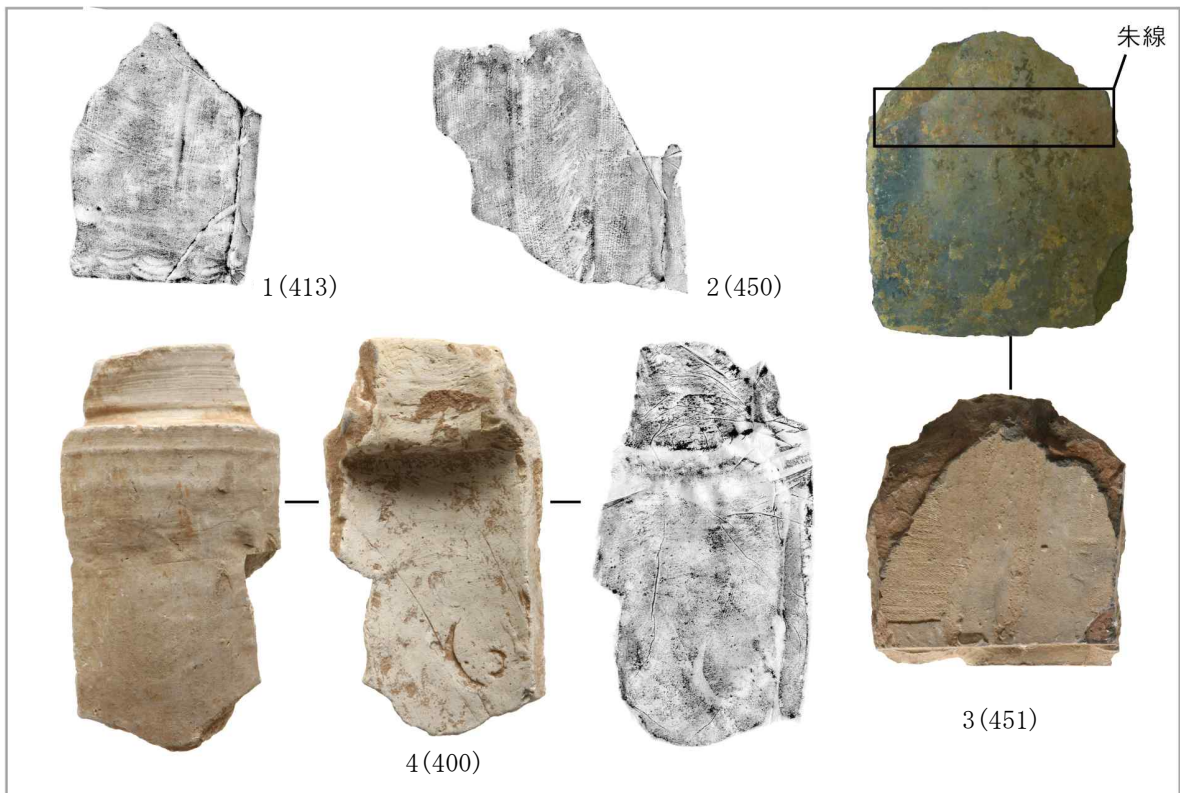


図5-7 慶州工高出土の平瓦(413番、450番、451番)と有段式丸瓦(400番)

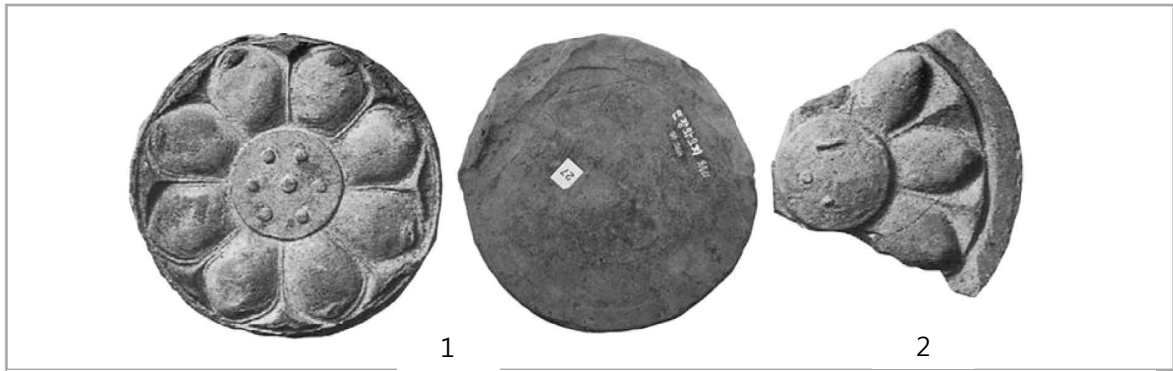


図5-8 慶州六通里瓦窯址出土の蓮華文瓦当(金誠龜、1993)

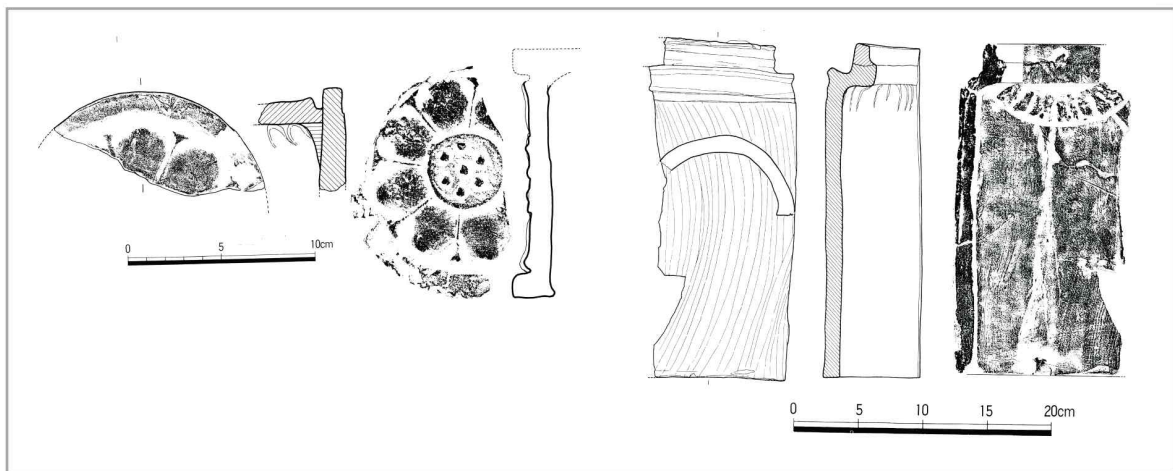


図5-9 公州艇止山遺跡出土の蓮華文瓦当と有段式丸瓦(李漢祥、2000)



図5-10  
慶州城東洞殿廊址  
出土蓮華文瓦当  
(国立慶州文化財研究所、1995)



図5-11 慶州天官寺址出土の蓮華文瓦当(崔英姫、2010)



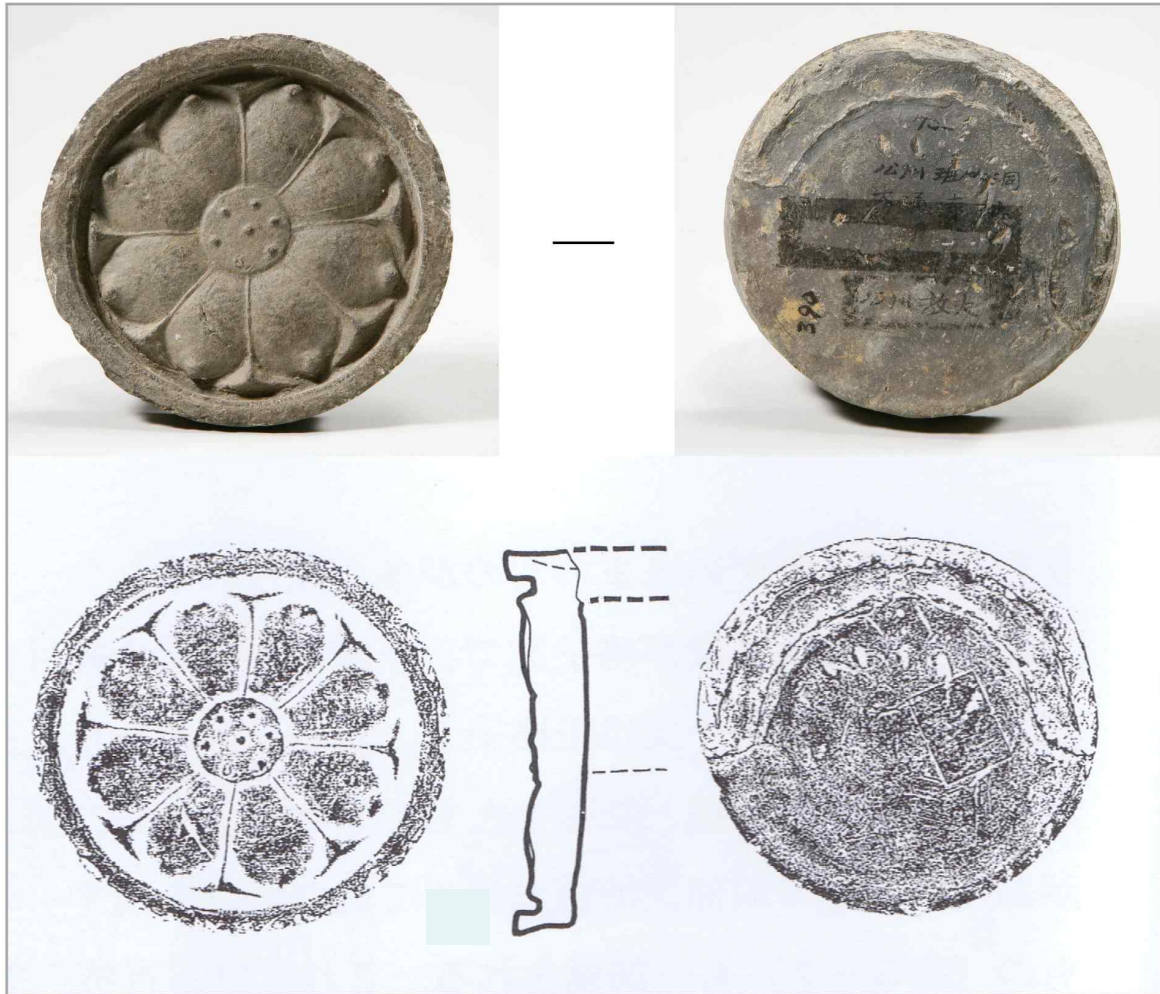


図5-12 公州大通寺址出土の蓮華文瓦当(清水昭博、2003)



図5-13 慶州月城垓字出土の蓮華文瓦当(1. 百濟系、2. 高句麗系)  
(国立慶州博物館、2000)

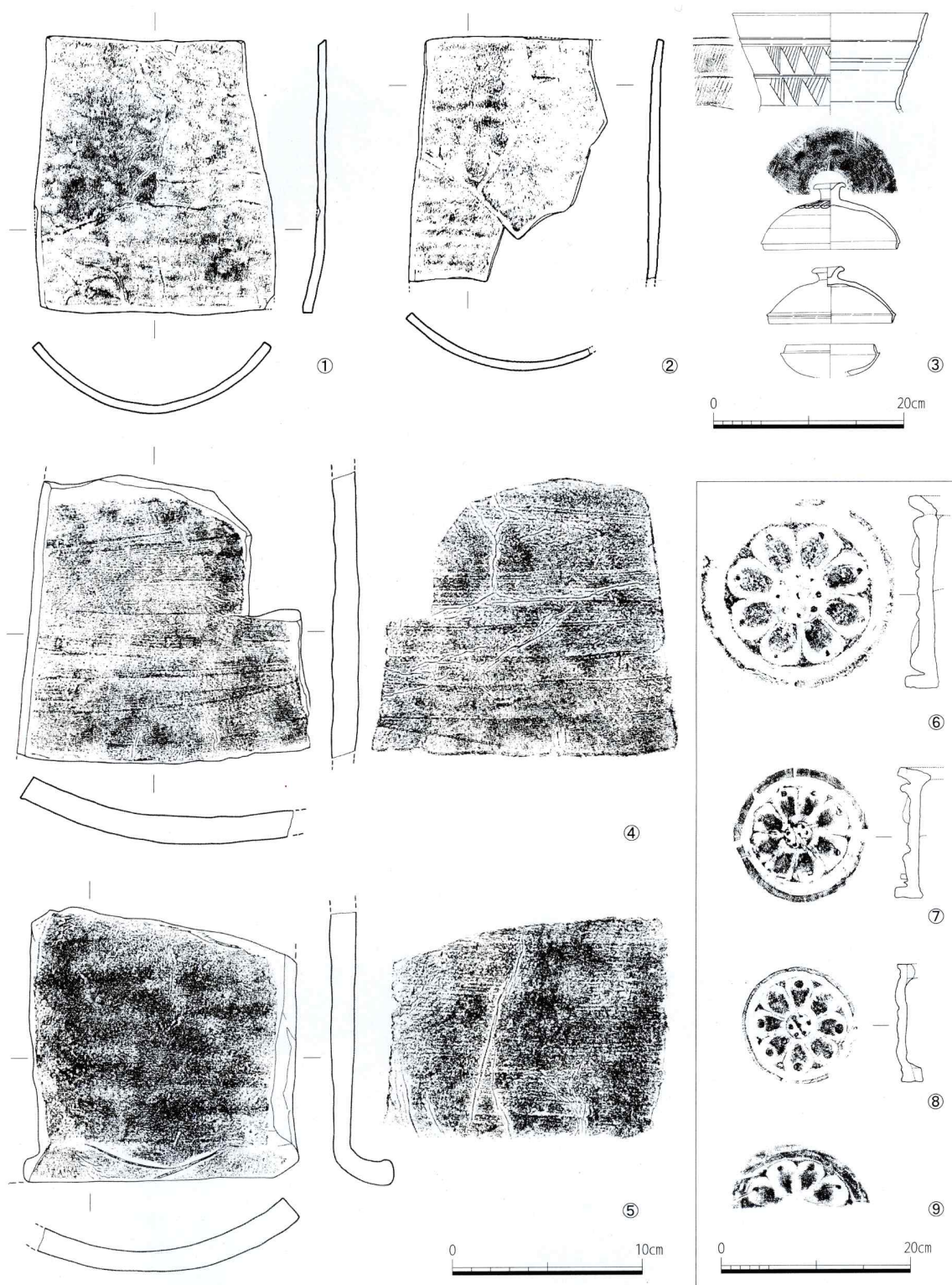


図5-14 慶州勿川里窯址出土「無瓦桶製作法」の瓦と土器(崔英姫、2009)  
 (1~3. C-I-3-44号竪穴遺構, 4~5. C-I-3-35号竪穴遺構, 6~9. 瓦当)



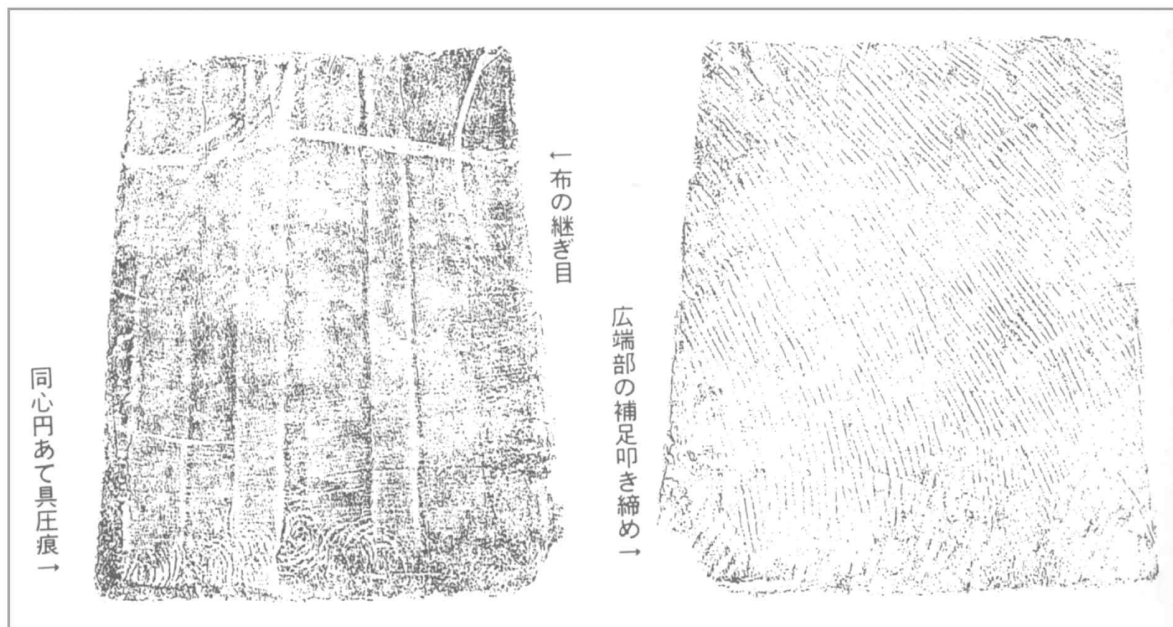


図5-15 飛鳥寺出土平瓦の補足痕(花谷浩、2000)

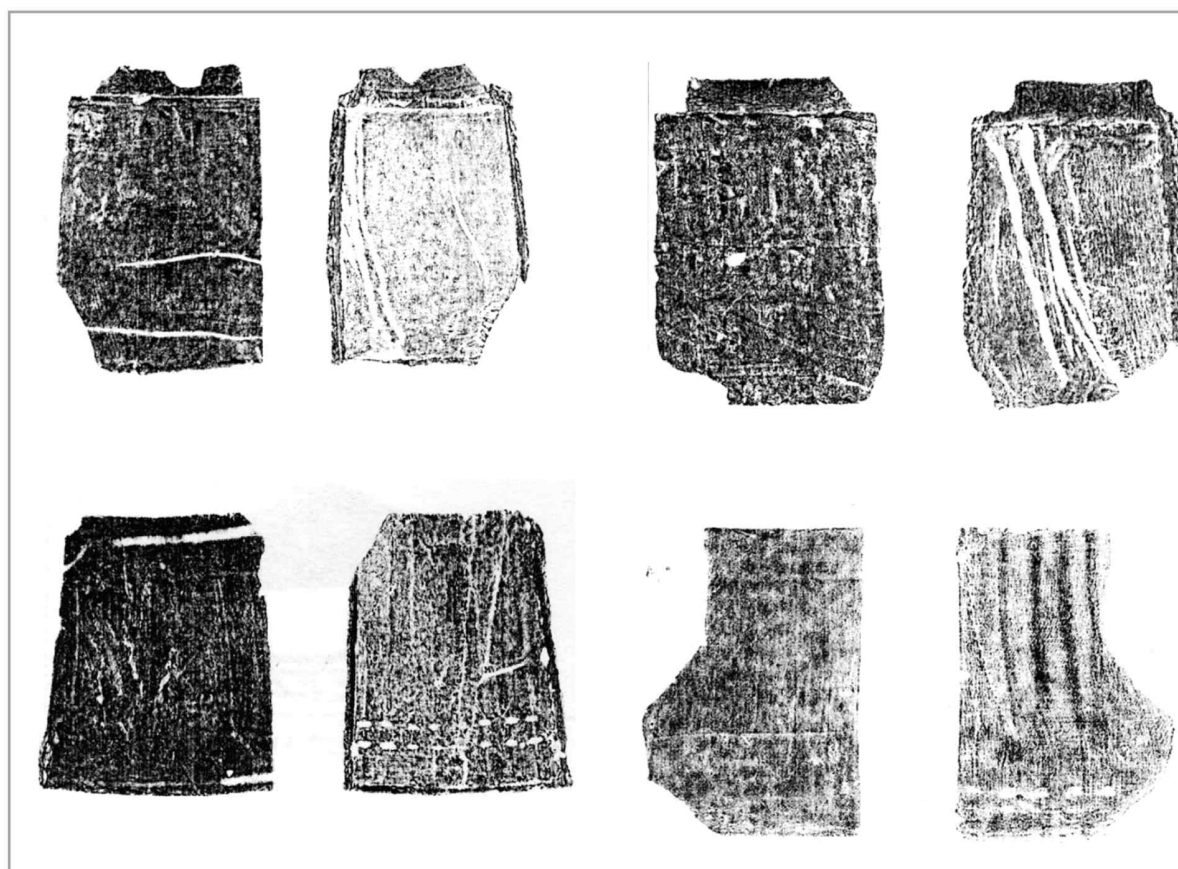


図5-16 南京地域出土丸瓦と平瓦(王志高、2012)



図5-17 慶州興輪寺址出土の文字瓦(1. 「王(?)興」(130番)、2. 「寺」(131番)(国立慶州博物館、2011)



図5-18 慶州皇龍寺址出土の各種瓦当(国立慶州博物館、2000)  
 (1. 創建伽藍-高句麗系、2. 創建伽藍-百濟系、  
 3・4. 重建伽藍所用瓦)



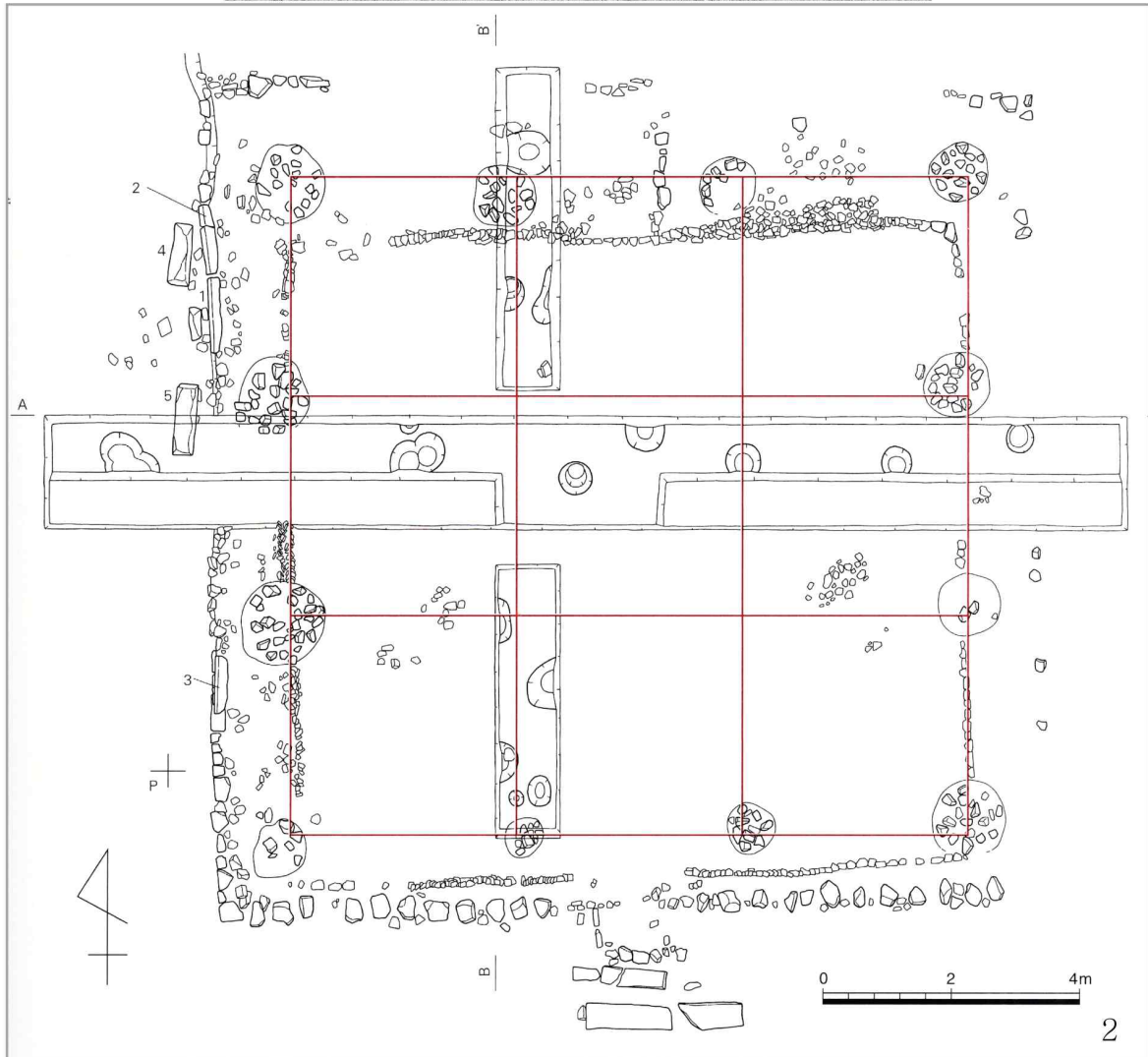
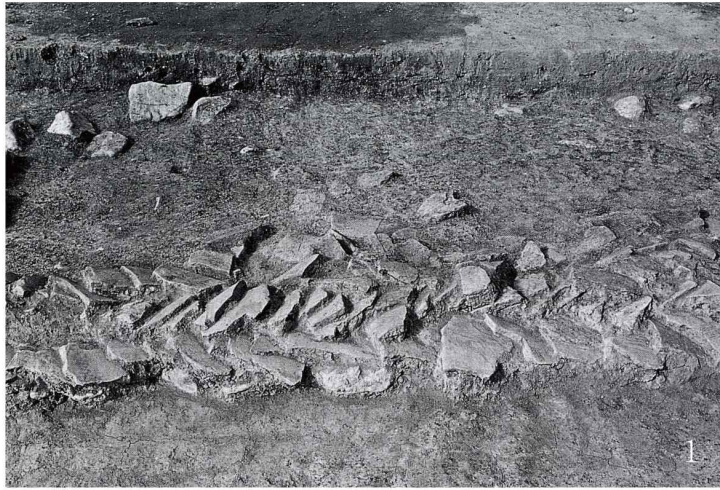


図5-19 慶州天官寺址1号建物址内部の瓦積基壇(1)と平面図(2)  
 (国立慶州文化財研究所、2004)

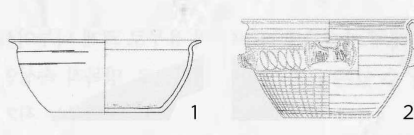
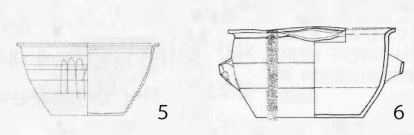

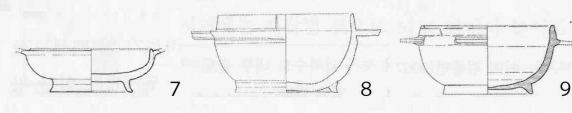
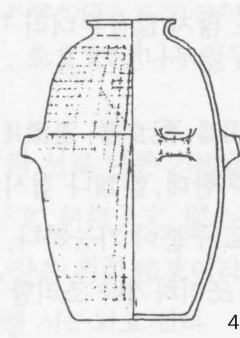
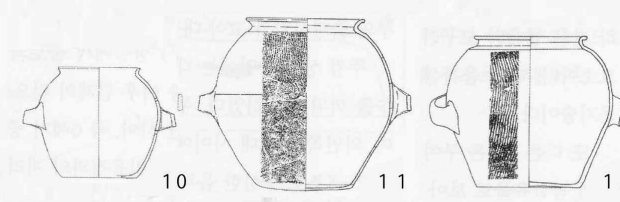
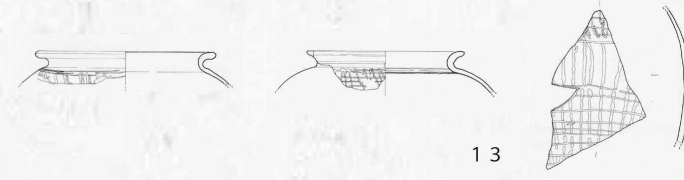
区分	高句麗土器	高句麗系百濟土器
盤・把手附盤		
耳杯		
带状把手附壺		
暗文土器 (縮尺不同)		

図6-1 扶余地域出土の高句麗系土器(1・4. ソウル九宜洞、2. ソウル紅蓮峰2堡塁、3. ソウル紅蓮峰1堡塁、5. 扶余宮南池、6. 扶余亭岩里窠址、7・13. 扶余陵山里寺址、8. 扶余官北里、9. 益山王宮里、10. 論山表井里古墳、11. 扶余松菊里甕棺、12. 扶余旧衙里井址)

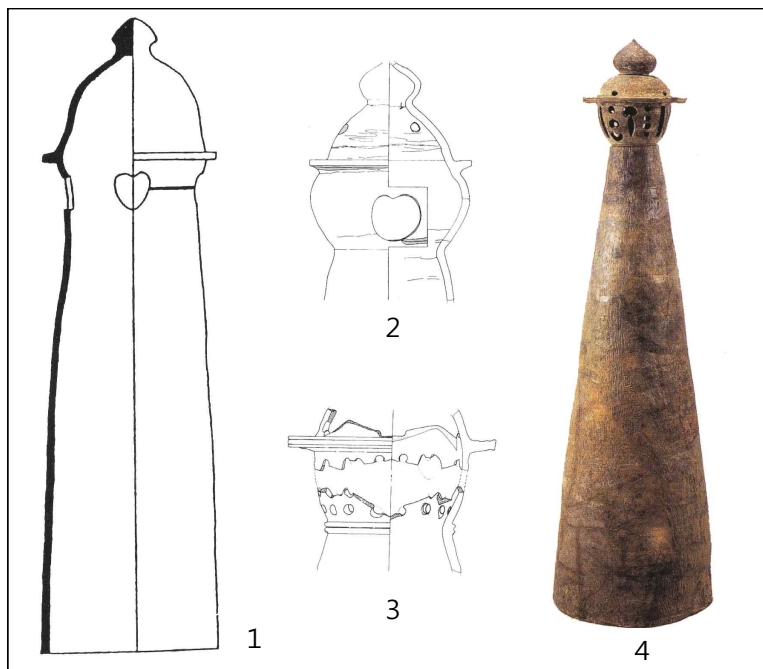


図6-2 扶余地域出土の煙家  
(1. 集安禹山下M2325号墓、  
2. 花枝山遺跡、3. 扶蘇山城、  
4. 陵山里寺址)

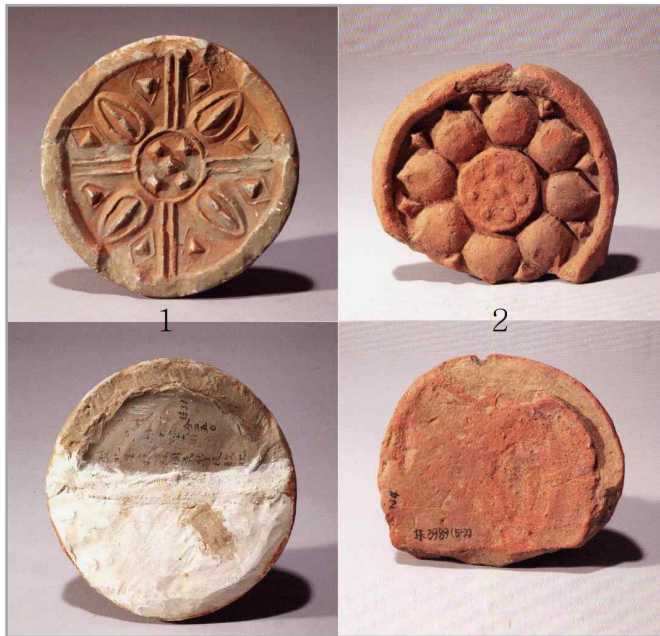


図6-3  
扶余地域出土の高句麗系瓦当  
(1. 扶余双北里、2. 扶余龍井里寺址)  
(国立扶余博物館、2010)

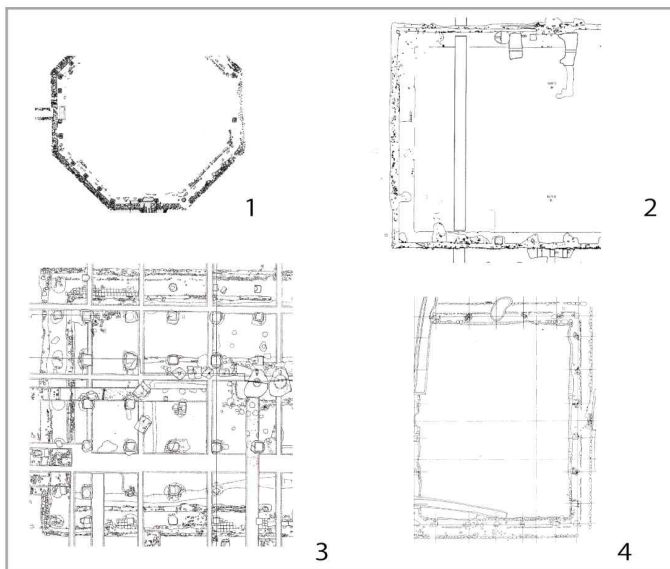


図6-4  
古代寺院の二重基壇と下成礎石  
(1. 清岩里寺址、2. 軍守里寺址、  
3. 皇龍寺址(中金堂)、4. 飛鳥寺(東金堂))

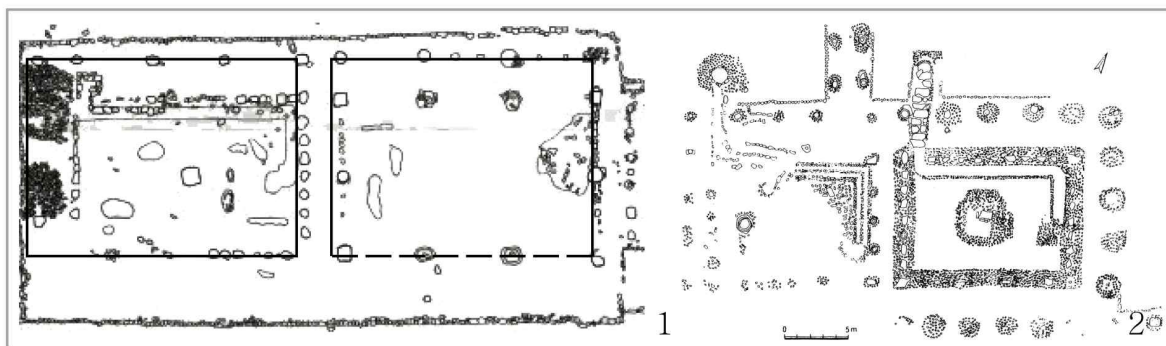


図6-5 1棟2室建物址(1. 集安東台子遺跡、2. 陵山里寺址講堂址)  
(方起東、1982および国立扶余博物館、2000)



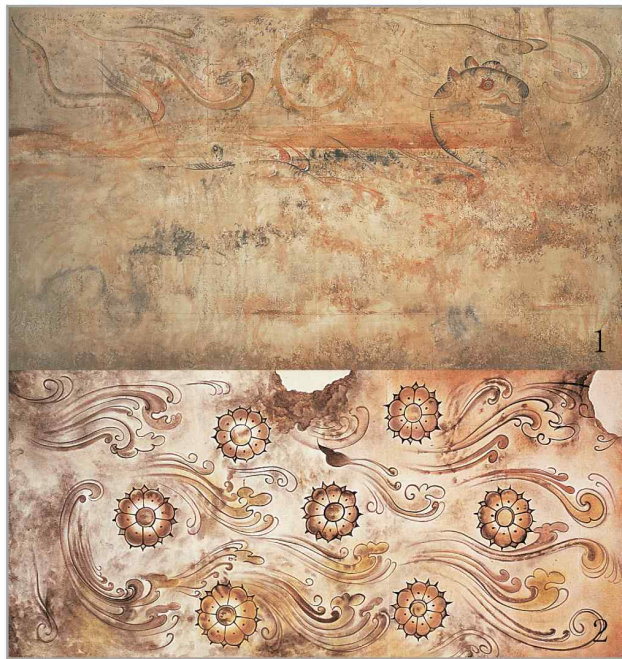


図6-6  
 扶余陵山里古墳群  
 東下塚の壁画  
 (1. 白虎図、2. 蓮華雲文図)  
 (国立扶余博物館、1997)

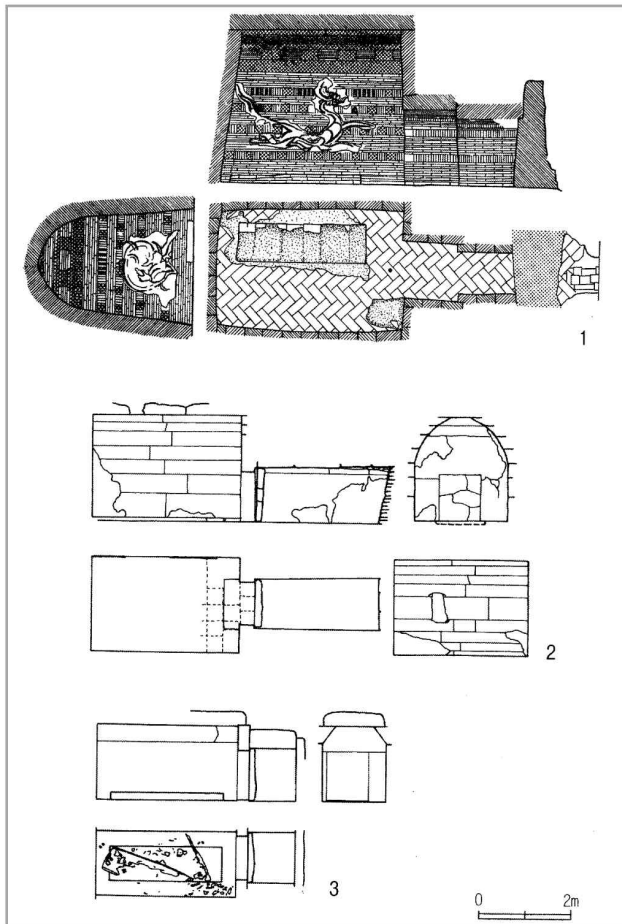


図6-7  
 熊津・泗泚期における  
 主要古墳の石室構造の変遷  
 (1. 宋山里古6号墳、2. 陵山里  
 東下塚、3. 陵山里中上塚)

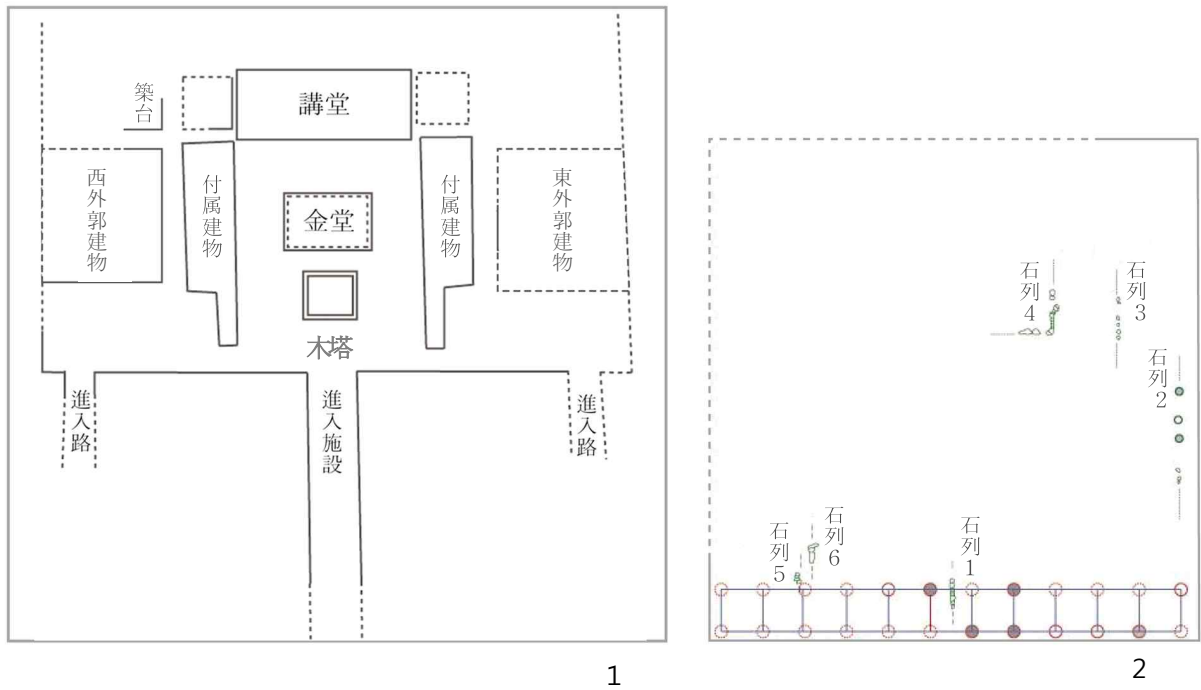


図6-8 扶余王興寺址の伽藍配置図(1)と西側外郭建物址(2)  
(国立扶余文化財研究所、2010・2012)

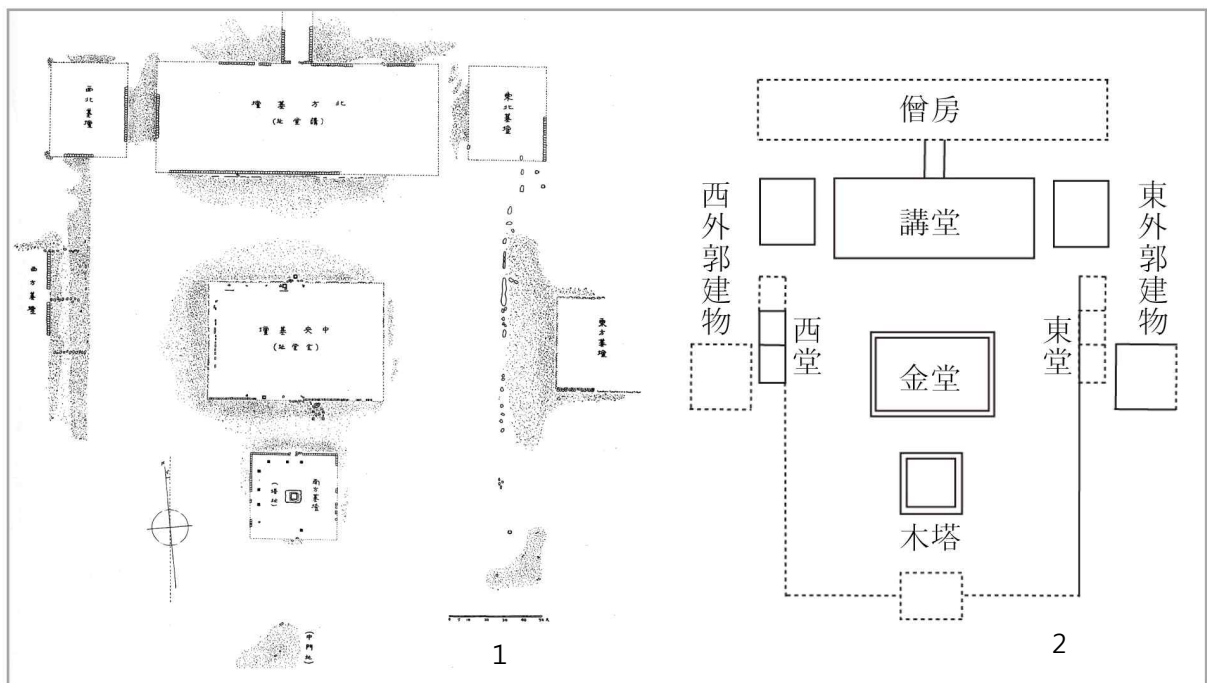


図6-9 扶余軍守里寺址の伽藍配置図(1. 1937年石田茂作の発掘図面、2. 推定復元図)

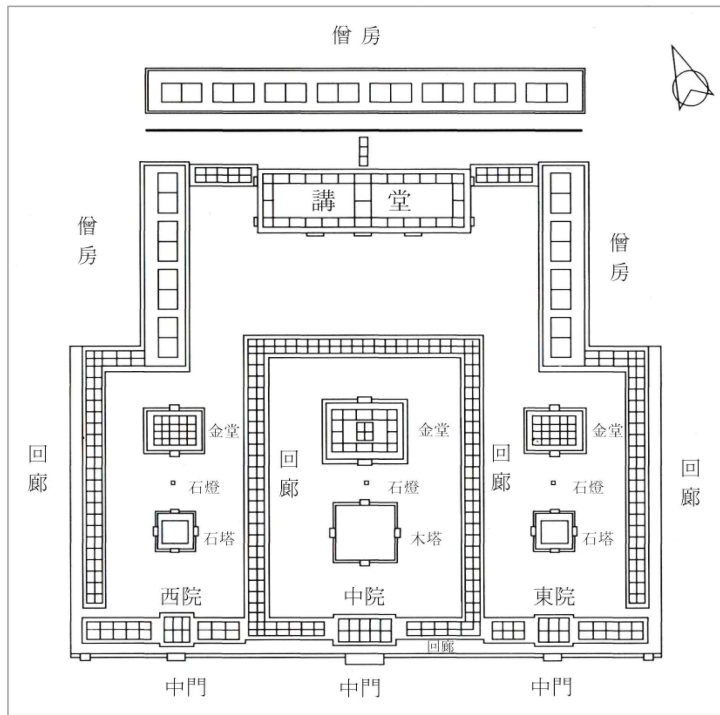


図6-10  
益山弥勒寺址の伽藍配置図  
(文化財管理局文化研究所、1987)

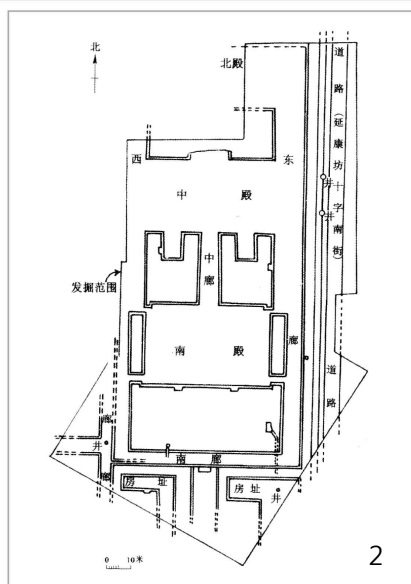
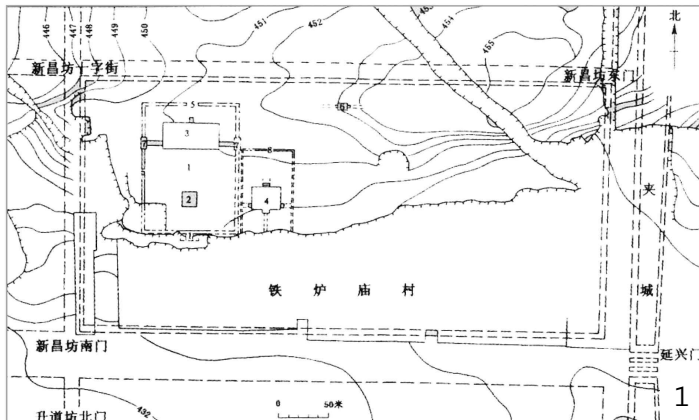


図6-11  
長安青龍寺と西明寺の伽藍配置図  
(1. 青龍寺址、2. 西明寺址)  
(中国社会科学院考古所西安唐城隊、1989  
および中国社会科学院考古研究所西安唐城  
工作隊、1990)

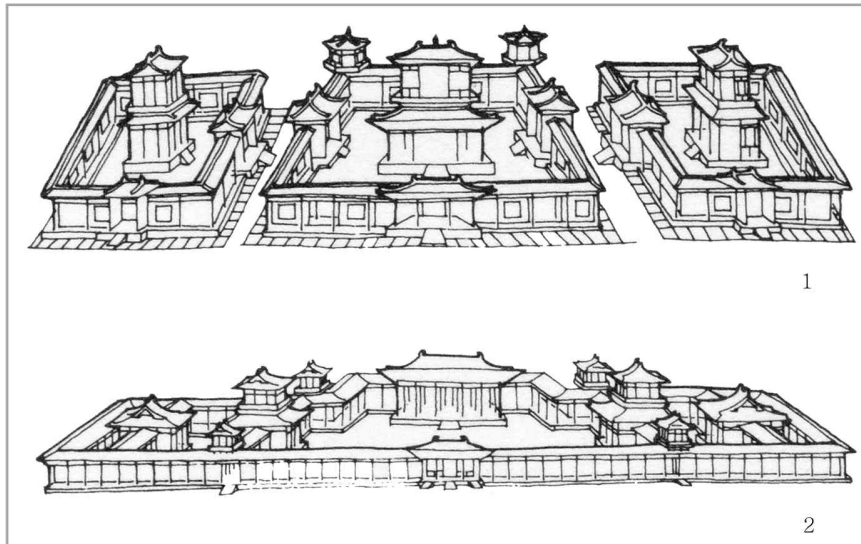


図6-12 敦煌莫高窟弥勒经变の中の仏教寺院(敦煌文物研究所、1980)  
(1. 第231窟北壁上部、2. 第148窟南壁)

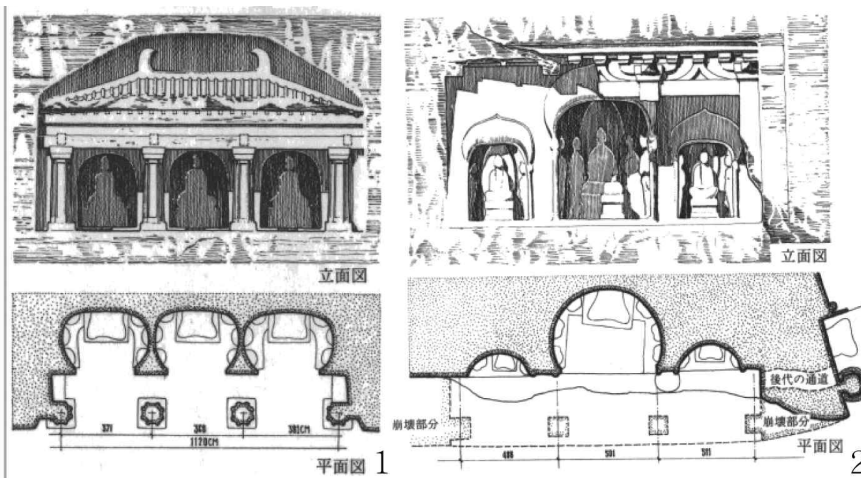


図6-13 甘肅省麦積山石窟の実測図(天水麦積山石窟芸術研究所ほか、1996)  
(1. 第30窟、2. 第5窟)

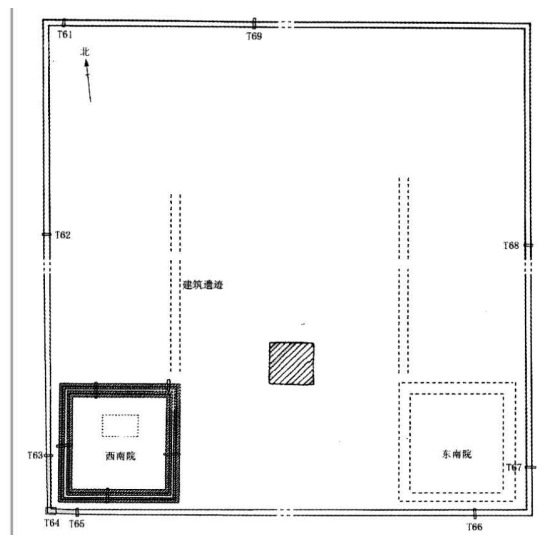


図6-14 東魏・北齊鄴南城趙彭城廢寺址の伽藍配置図  
(中国社会科学院考古研究所、2010)

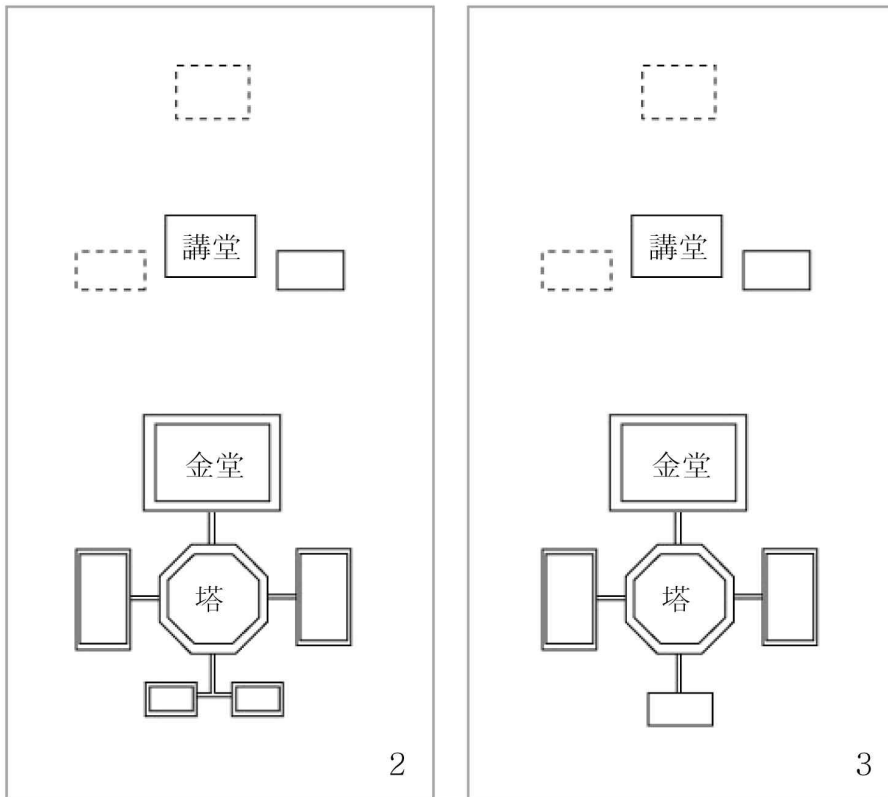
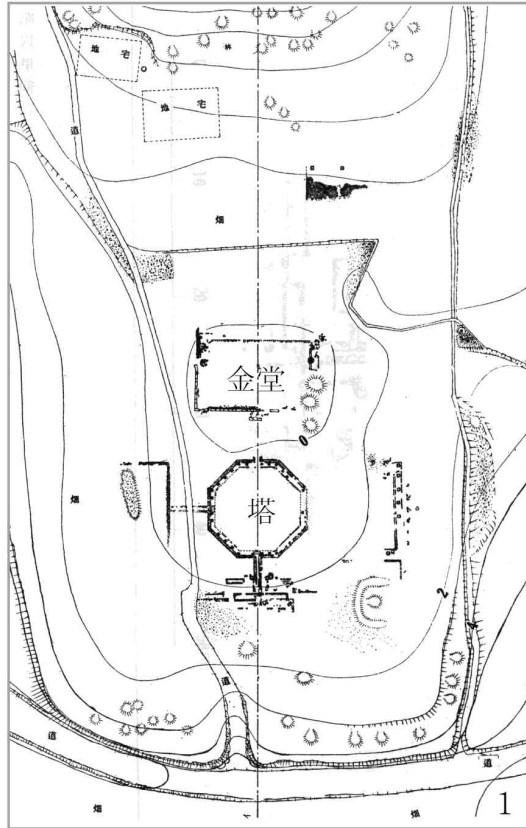


図6-15 平壤清岩里寺址の伽藍配置図  
 (1. 1940年小泉顕夫作成、2. 1944年米田美代治作成、3. 1958年小泉顕夫作成)



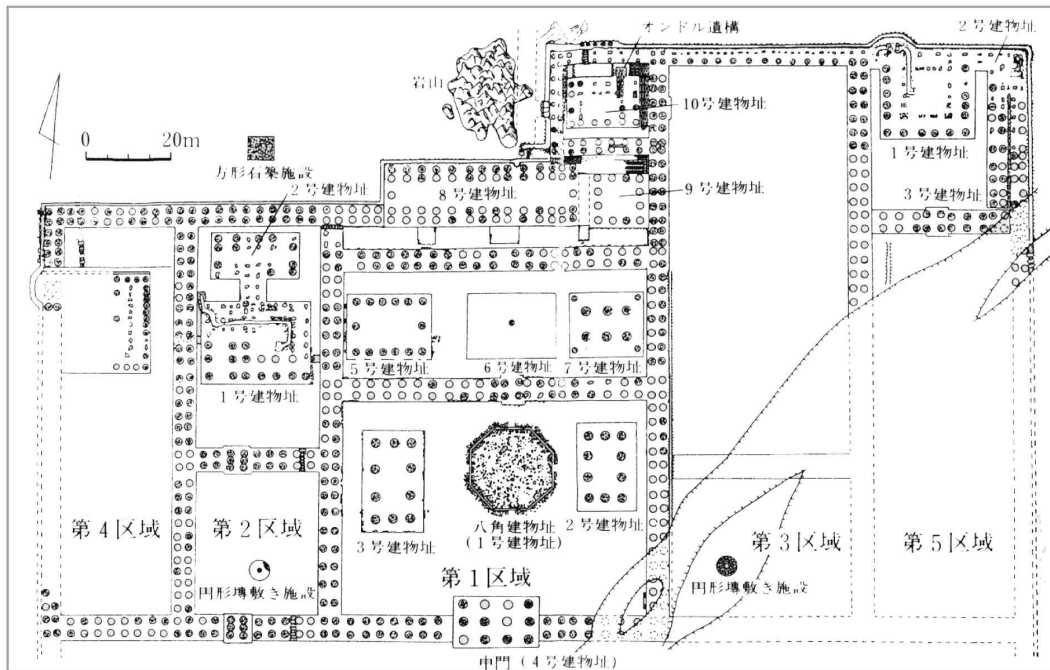


図6-16 平壤定陵寺址の伽藍配置図(田中俊明・東潮、1995)

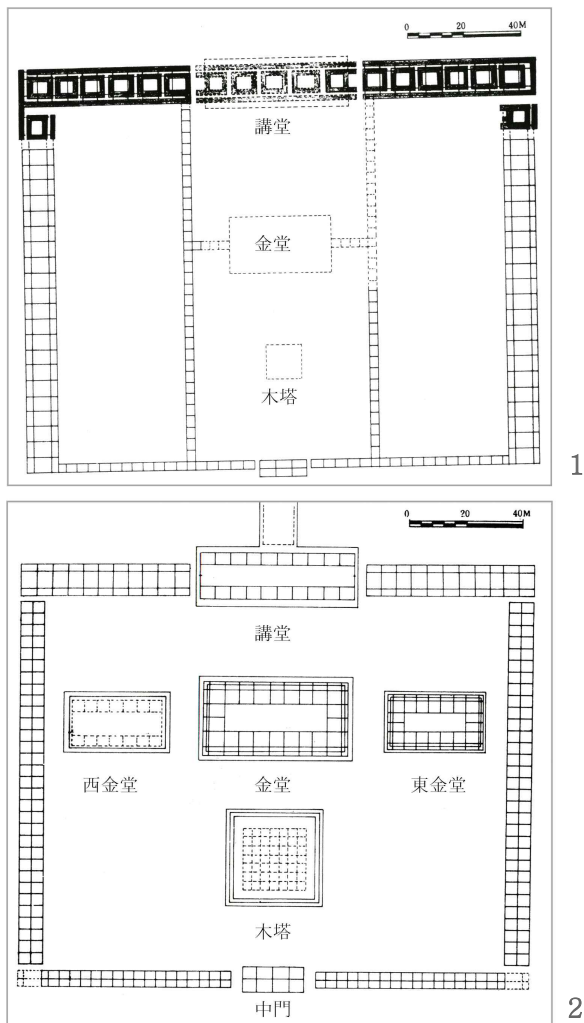


図6-17  
慶州皇龍寺址の伽藍配置図  
(1. 創建伽藍、2. 重建伽藍)  
(文化財管理局文化財研究所、1984)



図6-18  
慶州皇龍寺址出土の  
各種瓦当(国立慶州博物館、2000)  
(1. 創建伽藍-高句麗系、  
2. 創建伽藍-百濟系、  
3・4. 重建伽藍所用瓦)

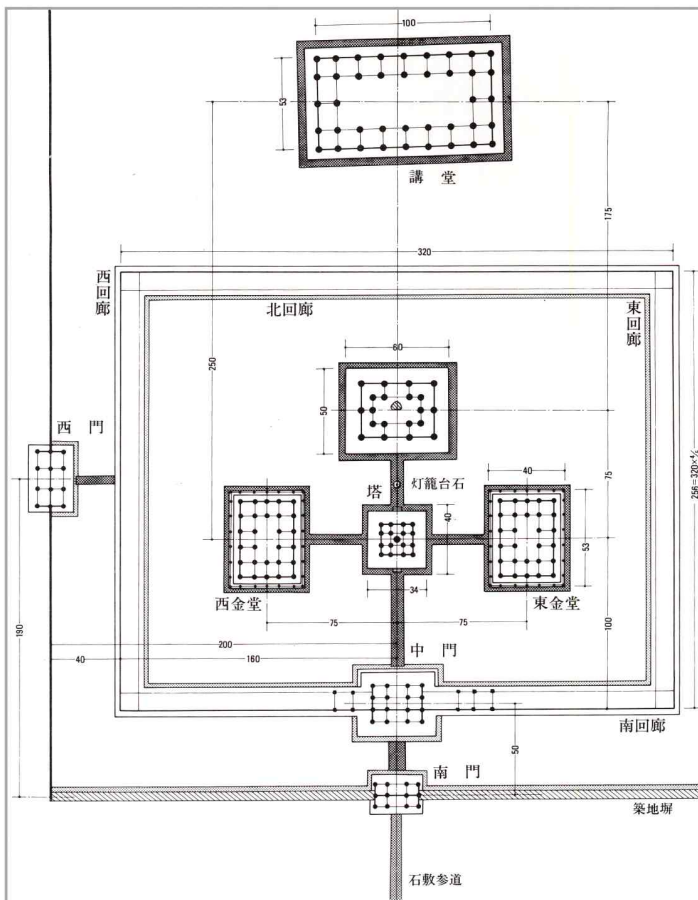


図6-19  
飛鳥寺の伽藍配置図  
(飛鳥資料館、1985)

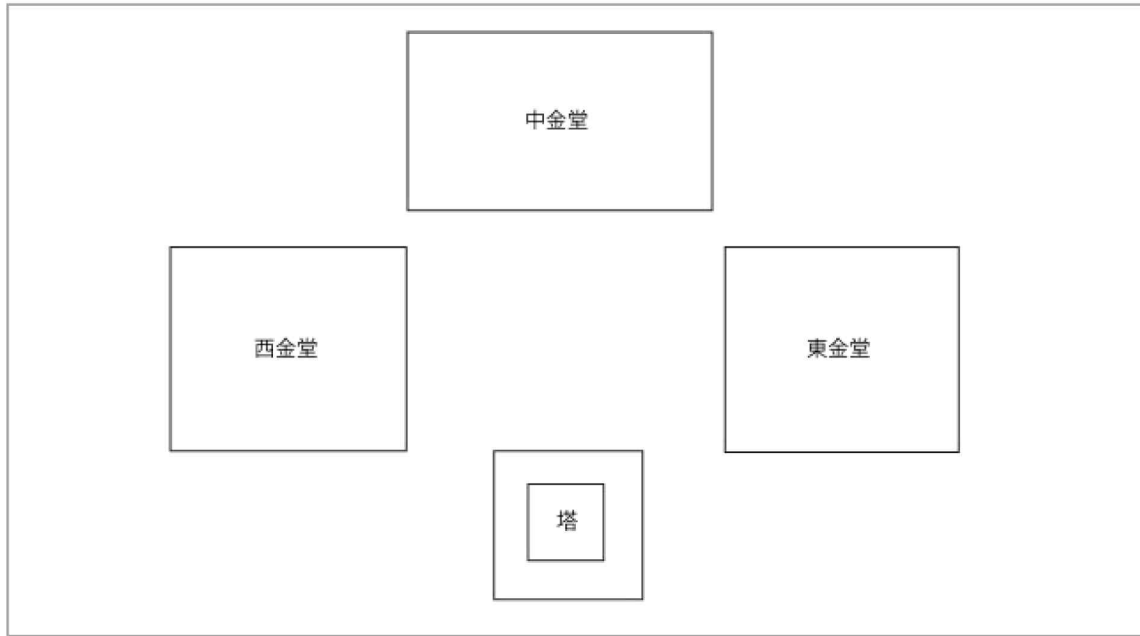


図6-20 慶州芬皇寺址創建期の伽藍配置図(李康根、1999)

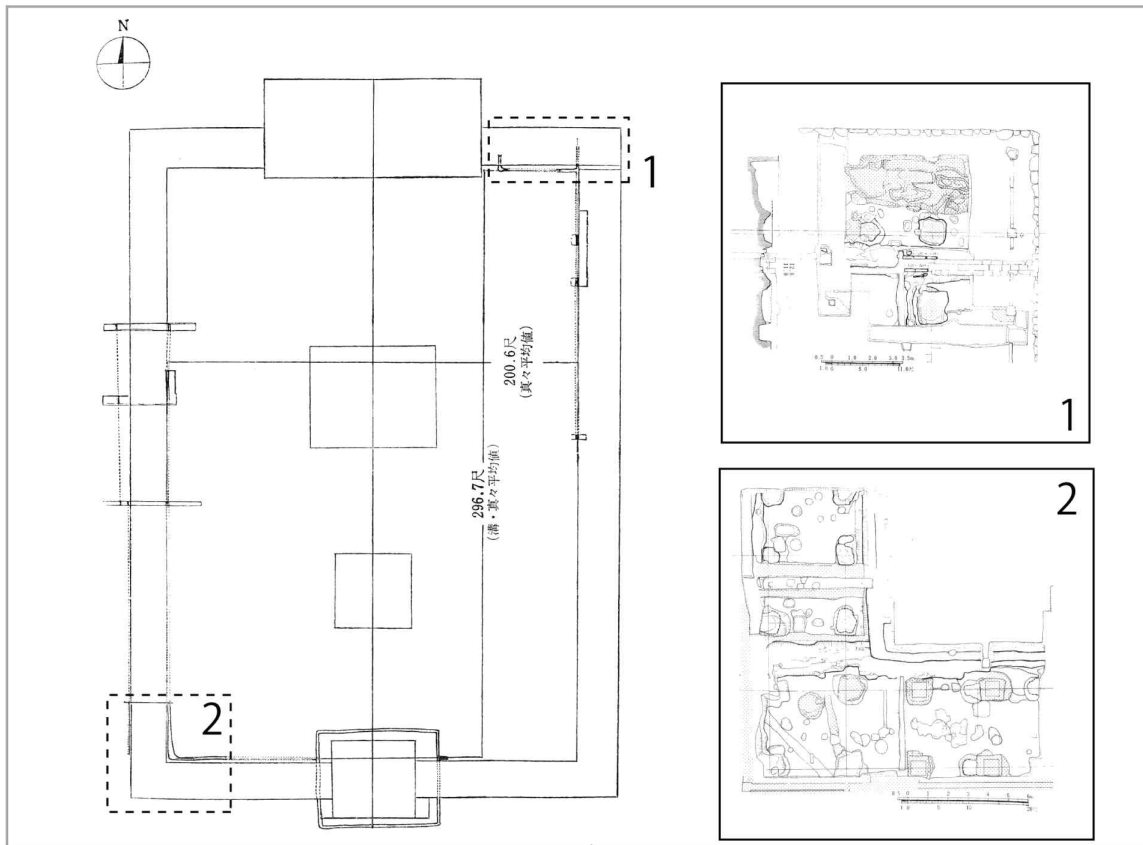


図6-21 大阪四天王寺回廊の周溝実測図(左)と東回廊東北区域の遺構図(1) および回廊西南部の実測図(2) (文化財保護委員会、1967)



図6-22  
新堂廃寺とオガンジ池瓦窯、  
お亀石古墳の位置図  
(富田林市教育委員会、2003)

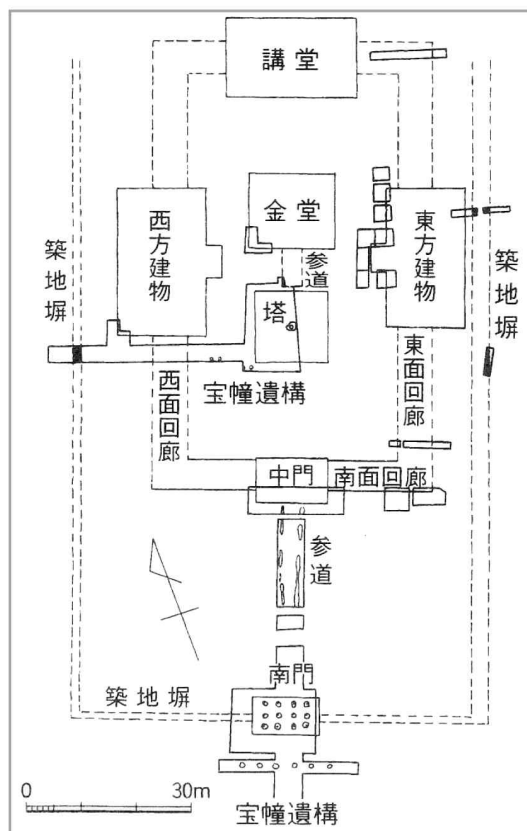


図6-23  
新堂廃寺の伽藍配置図  
(富田林市教育委員会、2003)



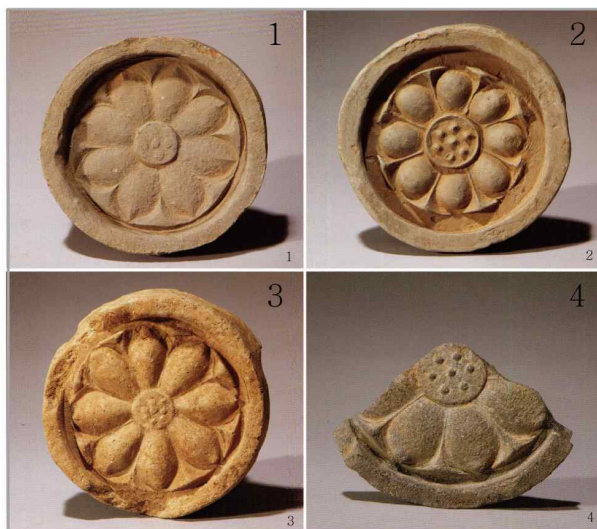


図6-24  
扶余定林寺址の創建瓦

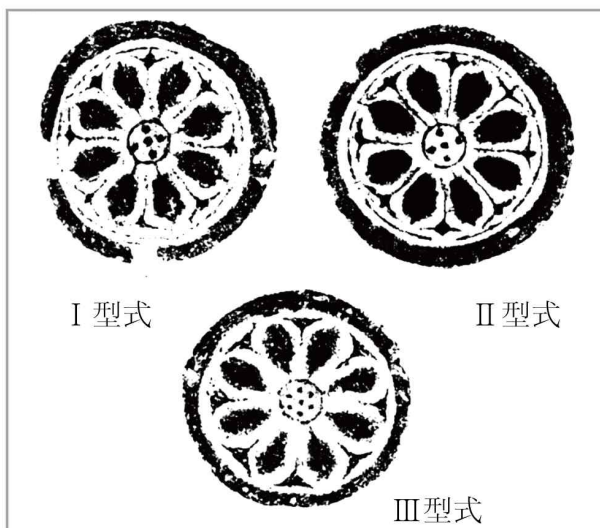


図6-25  
南京の南平王蕭偉墓闕  
出土の瓦当  
(南京市文物研究所ほか、2002)

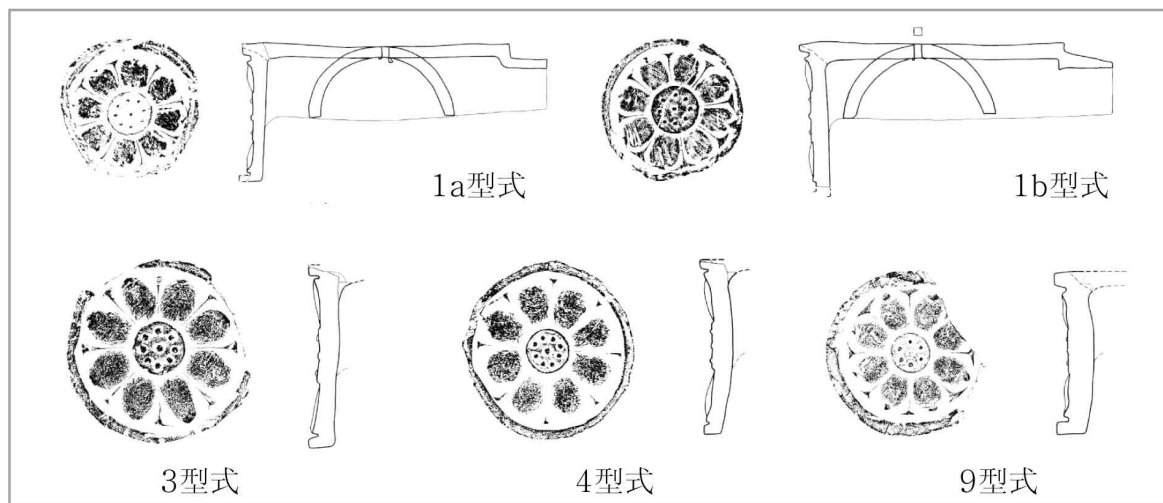


図6-26 扶余陵山里寺址の創建瓦

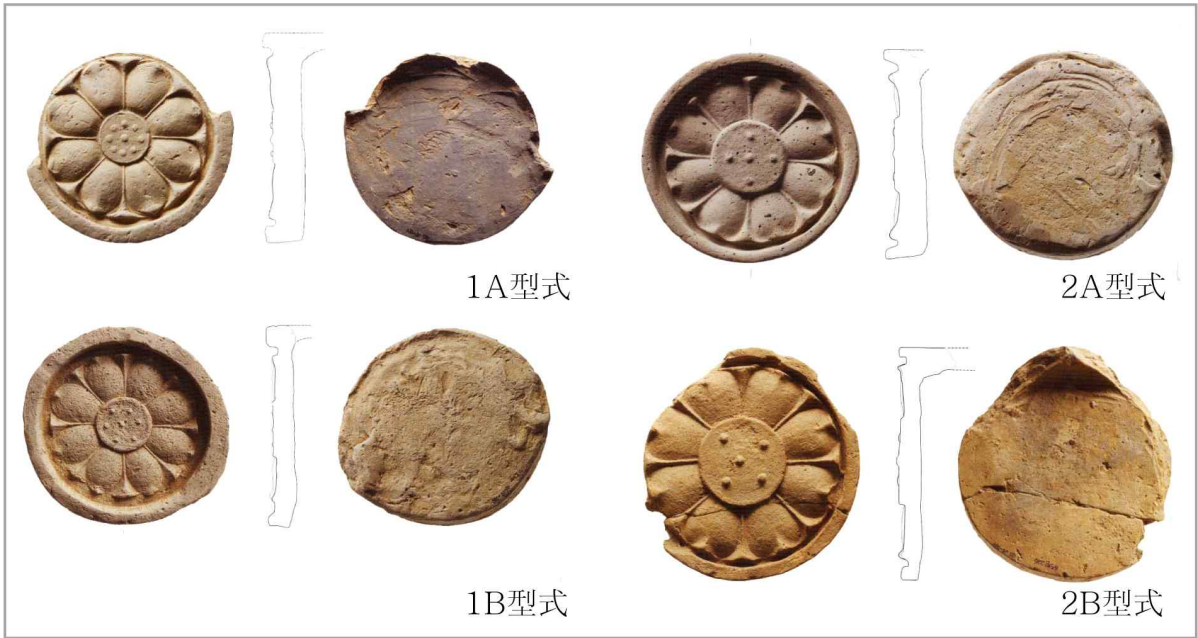


図6-27 扶余軍守里寺址の創建瓦(国立扶余文化財研究所、2010)



図6-28 扶余王興寺址の創建瓦(国立扶余文化財研究所、2011)



図6-29 扶余王興寺址の創建瓦(1・2)と飛鳥寺の創建瓦(3・4)の組み合わせ関係



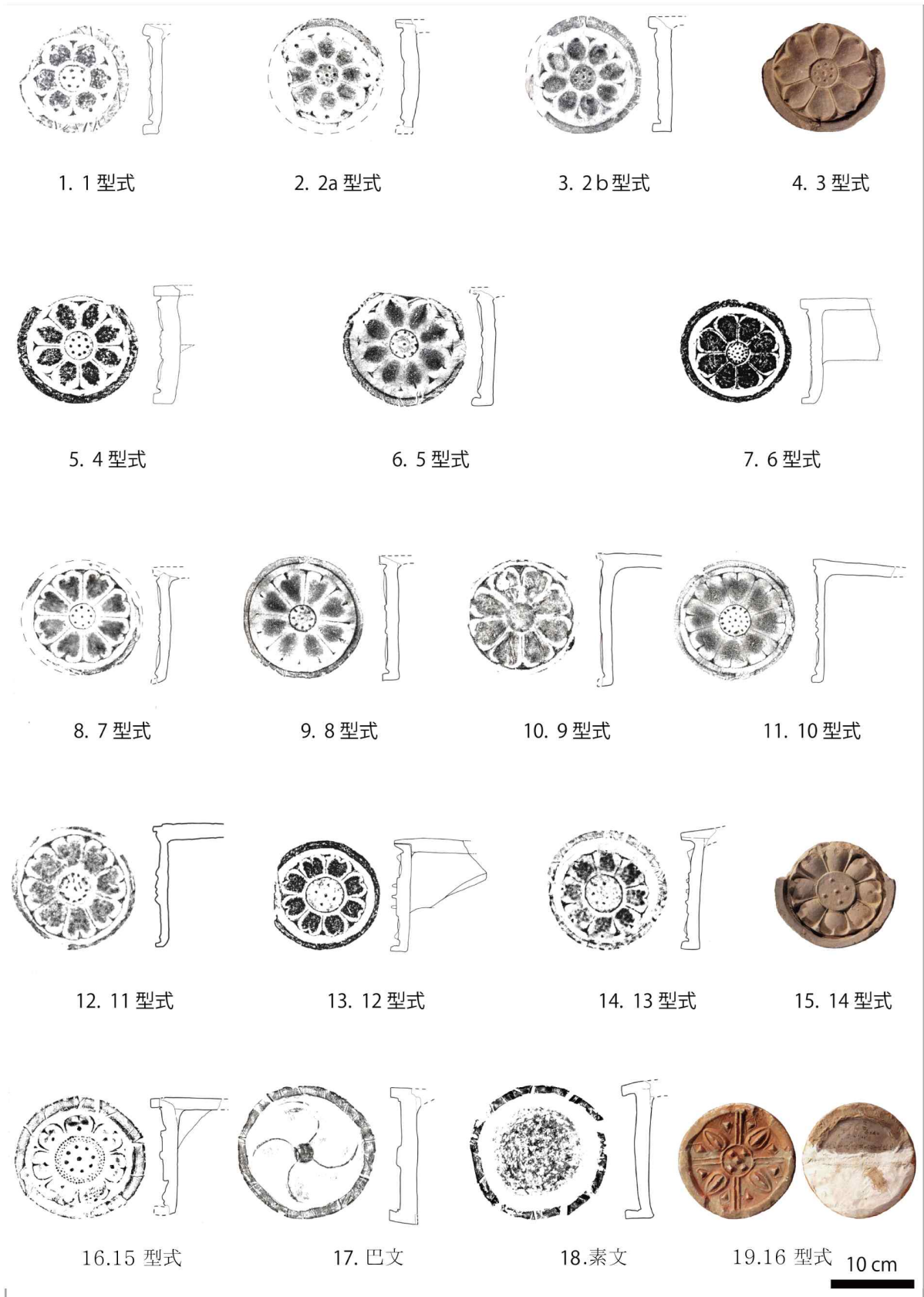


図6-30 扶余の王宮区域から出土した各種瓦当



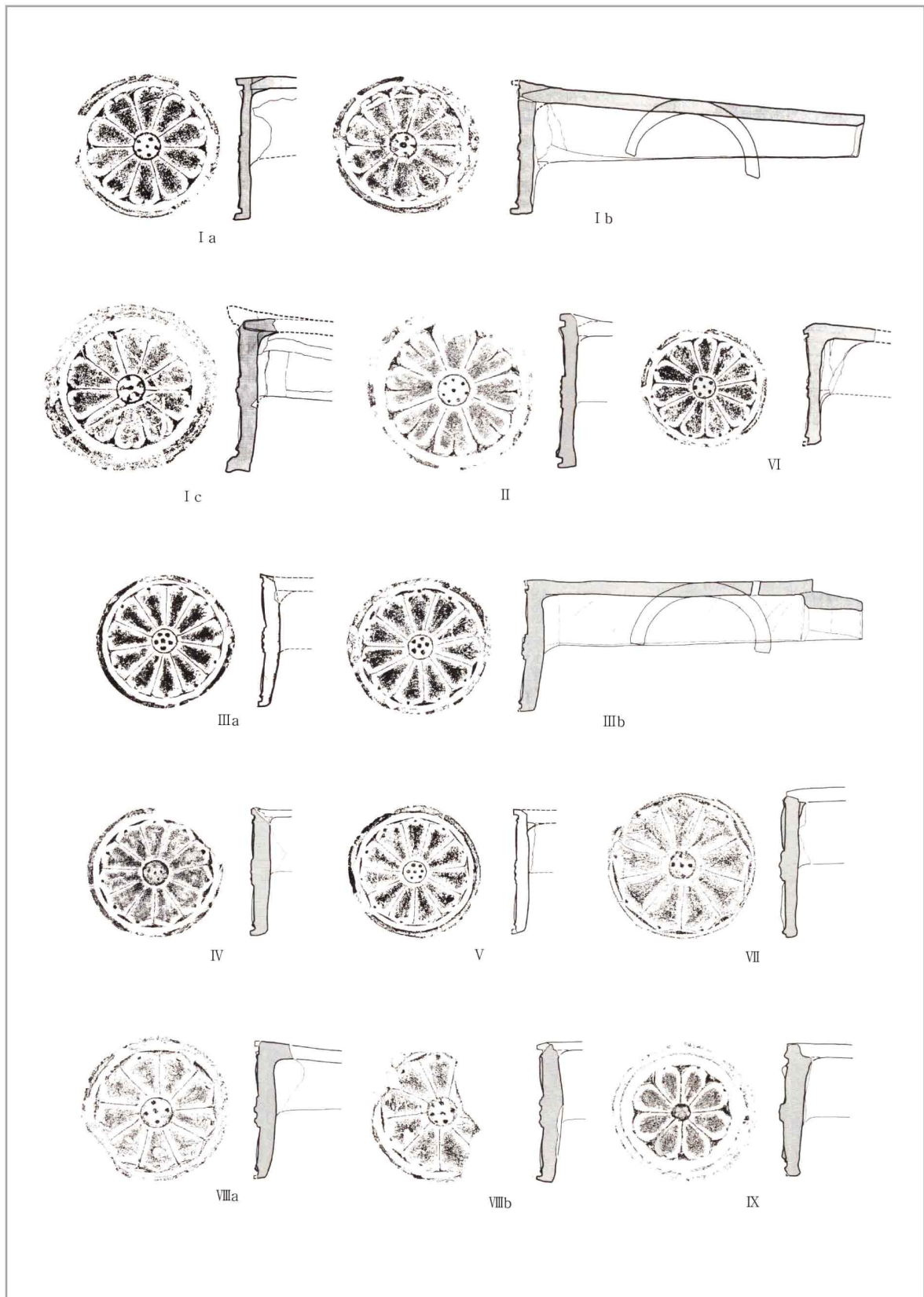


図6-31 飛鳥寺の創建瓦(花谷浩、2000)

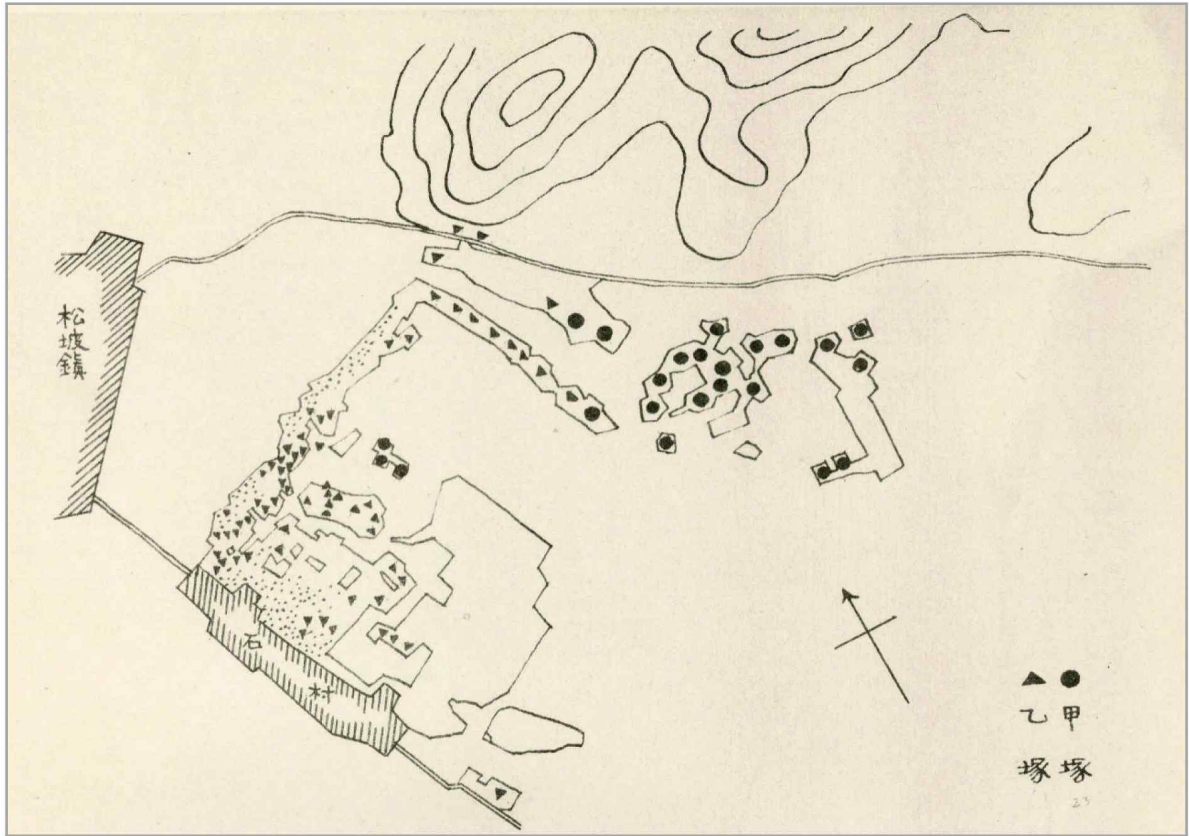


図7-1 『朝鮮古蹟図譜』三の石村付近の百濟古墳分布図(朝鮮總督府、1916)

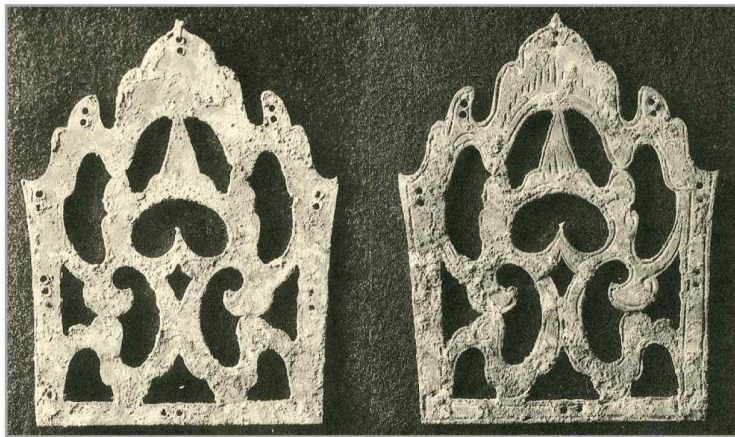


図7-2 扶余陵山里中上塚出土の宝冠金具(金銅透彫金具)(朝鮮總督府、1916)



図7-3 ソウル石村里・可楽里一帯の古墳分布図(1917年作成)

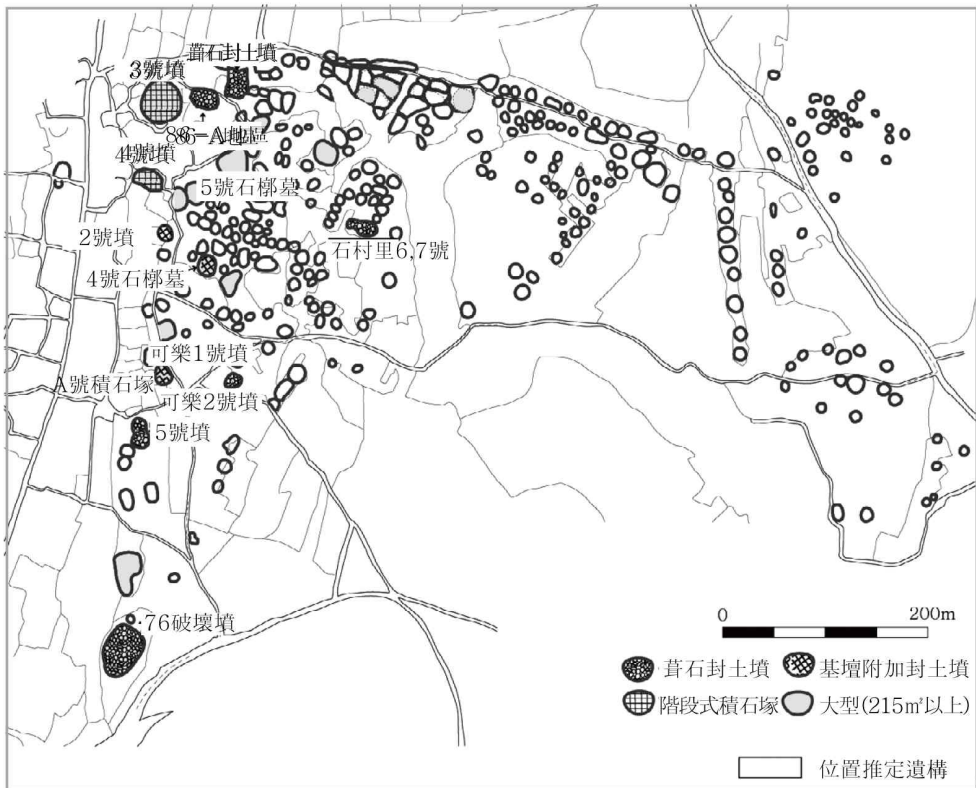


図7-4 ソウル石村里・可楽里一帯の古墳分布図と発掘調査された古墳群の対応図面(趙佳英、2012)



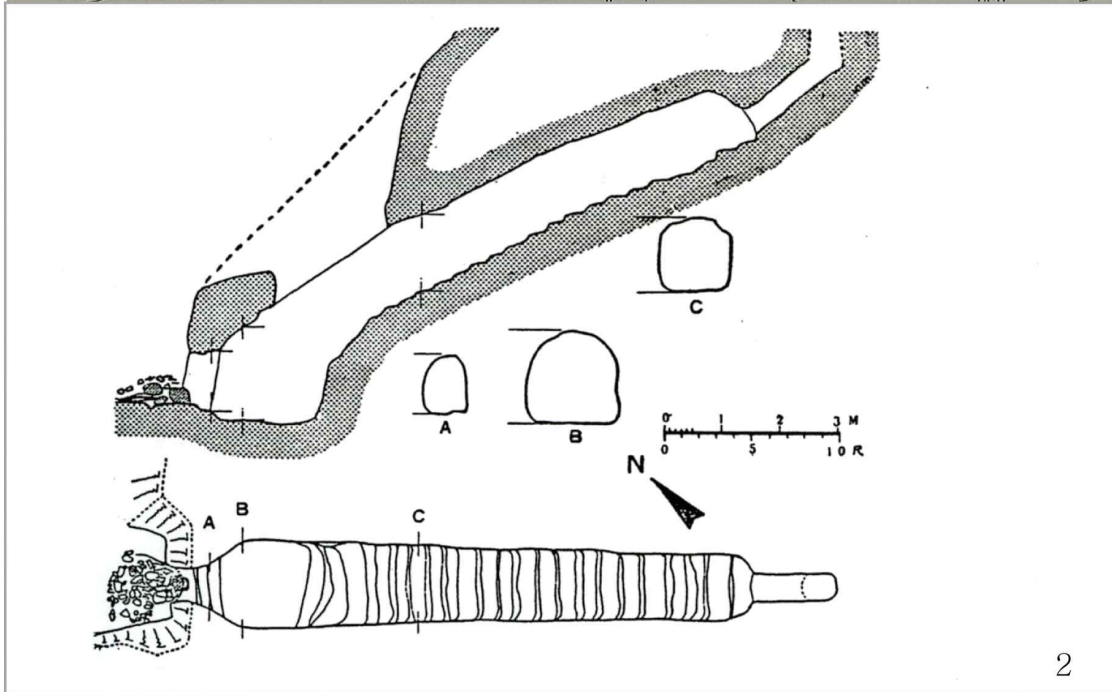
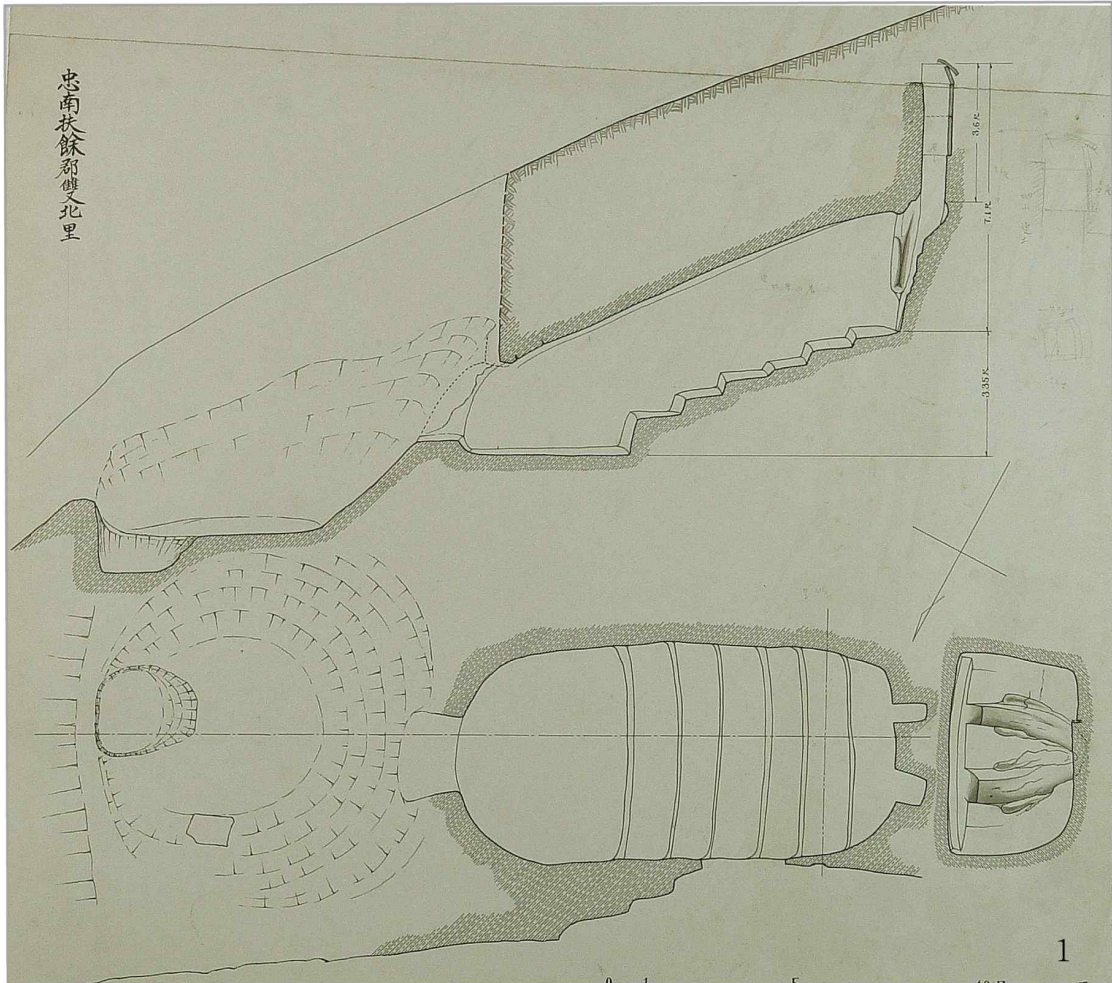


図7-5 米田美代治調査(1941. 6.)の扶余双北里窯址実測図(1)と飛鳥寺の1号瓦窯実測図(2)

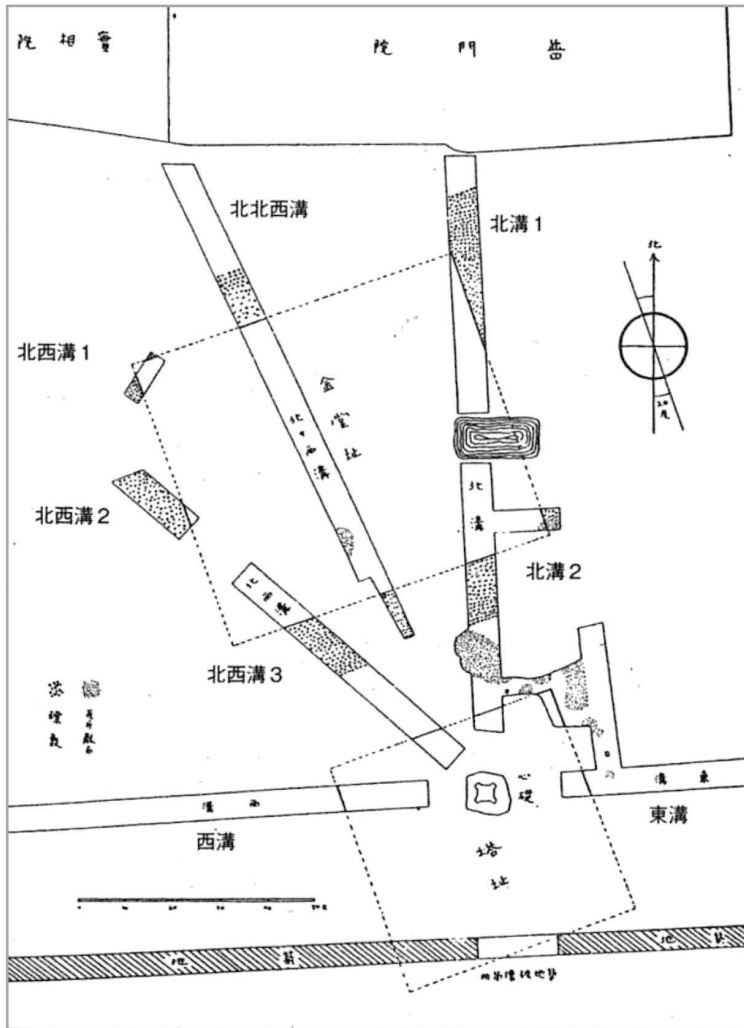


図7-6  
若草伽藍址の発掘実測図  
(1941年石田茂作作図に加筆)  
(石田茂作、1969)

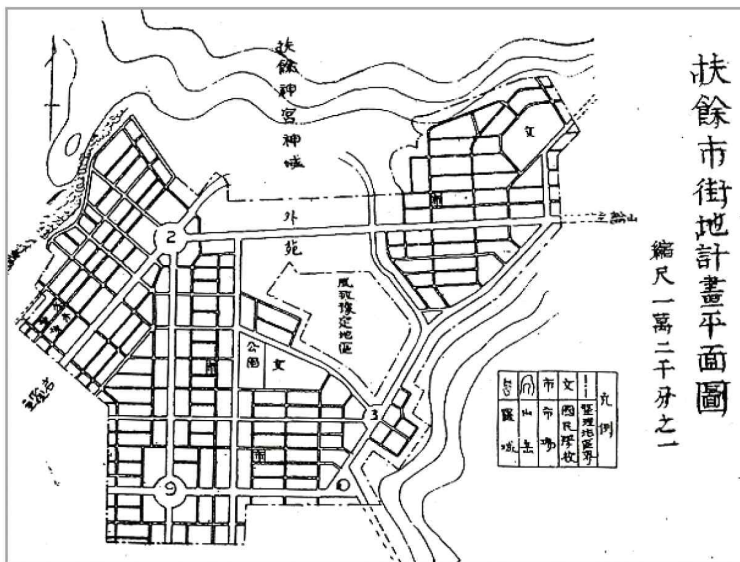


図7-7  
扶余市街地計畫平面圖  
(1939年作成)